

IS —Rached ▪ monin
Silber—

SkyCat

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——『金色のISを知っていますか？』

幸せだった日々は奪われた。

続けばよかったと思う日々は既になく、大切な人達が奪われた。

その日から私は、ずっと追いつける。あの金色のISを。

”これは、少女の復讐の物語。 復讐と、未来へと歩む物語”

※注意書き タグでもある程度していますが念の為に※

- ・この作品はIS〈インフィニット・ストラトス〉の二次創作です。
- ・作者の独自解釈、独自設定が非常に多いです。
- ・原作の多くを改変しており、原作崩壊と取られてもおかしくありません。
- ・一夏？オリ主であり、その要素が強いです。原作ヒロインファン非推奨。
- ・注意書きは、随時増える可能性があります。

目次

IF√&番外編 ”もしかしたらあった
かもしれない未来”

番外編 『未知の猫との遭遇』 1

BADEND√ 1〜3 14

BADEND3√続編 『折れる翼、形

成す未来』 28

第一章 『復讐の白翼』

銀の少女 41

Restart 58

少年と少女 73

IS学園 88

騒々たる騒動は早々に 105

ルームメイト 120

特訓 136

クラス代表決定戦 155

動く影 171

中華娘、襲来 191

その心は迷走 209

悪友 『しんゆう』 228

惑いし白翼 245

白銀の断苜者 262

黒式 278

決別 『こたえ』 294

第二章 『機械仕掛けの演者達』

ひだまり 315

黒兎、来る	331
すれ違う心	346
迷い路の導き手	364
無垢な来訪者	379
抗いの選択者	399
シャルロット・デュノア	422
対極の対立者	437
それぞれの想い	454
信頼 『ともだち』	471
相対の決戦場	489
レギオン	508
愛しき想いよ、ささようなら	523
平行線上の想い人	543

”ありがとう”を想いながら	564
『金色』の痕跡	592
狂犬、来る	609
その謎は深淵	627
青年と少女	644
その姿、大和撫子で在れ	662
形成す歯車	679
円卓を統べる少女	694
絶望開演	718
黒銀の翼	742
黄金の騎士	757
幸福／邯鄲の夢	776
真実への選択	797

導 『せんたく』

少年の決意

リス救出戦

受け継がれし白

選ぶ者、告げる者。

世界の真実

823

850

871

890

915

938

IF√&番外編 ” もしかしたらあつたかもしれない未来”

番外編 『未知の猫との遭遇』

目を覚ますと、そこは白の空間だった。

周囲を見渡すと何処もかしこも真っ白であり、何も無い。そんな中に何故か私はIS学園の制服で立っている。……夢かなこれ。でも、夢にしてはちよつと鮮明すぎる気がする。

「リース?」

「え?一夏?」

声をかけられた。振り返ると、そこには見知った姿。同室である一夏の姿があり、何故か彼もIS学園の制服姿だった。これは夢だと思う。だって一夏も昨日、私と同じ時間に就寝している筈なんだから。つまり同じ夢を見ているということになる?

「……どういうことだ?これは」

「おかしいですねー……私、部屋で作業してたはずなんですけど。寝落ちしちやつたん

でしようか」

「マ、マドカ？それにクロちゃんまで」

再び声が見れば、そこにはマドカとクロちゃんが。此方も同じく、制服姿。ゆ、夢だから何でもありなのかな？でも夢にしてはあまりにも意識がはつきりしすぎているような――

『やあやあ、ようこそいらつしやいました！』

突然、『ゴゴゴゴ』という音と共に、近くの地面が割れた。その声の主は割れた所から現れたのであることは、声の聞こえた方角からなんとなく理解出来た。

でも。あ、あれはなんなんだろうか……？

『おや？皆様そんなに驚かれてどうかしましたか？』

「……猫？」

「猫、だよな？」

「猫だろうな」

「猫ですね。座布団に乗って空中に浮いている」

そこに居たのは、猫だ。緑色の座布団に座る動作で丸くなっている猫。

問題点を挙げるとすれば……座布団が空中に浮いていて、何故か文字がプリントされたシャツを着ているという点。シャツには『社畜魂』と書かれている。

何よりも、あの猫?のような生き物は喋った。少なくとも私はしゃべる猫なんてのは見たことがない。ああ……これ夢だからか。最近疲れてるから変な夢見てるんだろかなあ……うん。

『そのリースさん?何私の存在否定してるわけ?』疲れてるとかなんだあの変な生き物”とか思ってるでしょ』

「な、なんでわかつたの!?!」

『それはだつて。信じられないかもしれないけど私、神様なので』

……何言ってるんだらうこの猫は。神様?神様つてあの、崇拜対象とか神話とかに出てる、あれ?!

いや、有り得ない。だつて、眼の前に居るのはただの猫。確かに座布団に乗って空中浮いてたり、心読めたりするみたいだけど猫だよ?サバトラ、というあれだらうか。猫の見た目的にはそんな感じの猫。

『信じてないね君達? まあ言いたいことはわかりますよ。名乗らせて貰うなら私の名は”そらねこTypeサバトラ”。そしてここは、君達が居た世界とは異なる別の世界。そうだにやあ……文字を書いたりする時白紙の紙を使ったり、小説を書く時何も書かれていない状態から始まるでしょう?それそのものの世界と考えてくれていいです』

「別世界?神様? ああ……本当疲れてるのかなあ私……」

「俺も疲れてるんだろなあ……土日どこか行ってゆっくりしよう、リイス」

夢なら早く覚めて欲しい。どうしてこんな猫に、意味不明なことを言われなければならないのだ。

『時間軸的には、君達の世界で言う個別トーナメントが終わったくらいですね。ちなみに、“まえがき”とやらで書き手様が『ぶつちやけてやらかす』と言っていたので遠慮なく行きます』

「ゆ、夢なら覚めてくれないかなあ……」

『終わったらちゃんど返してあげます —— じゃあ時間も押してるし、始めますね』

ボンツ、という音と同時に何かが現れた。それはホワイトボードであり、そこには「制作秘話的なアレ」と書かれている。

『まず君達の世界を作った、というより描いたのは私の上司というか、本体な訳なんです』

「いやいや意味がわからないよ!?!世界作ったって何!?!というか上司って君上司いるの!?!」

『素晴らしいツツコミをありがとう! ぶつちやけ私、“書き手”という上司のアドバイザーみたいなもんで。代理でこの話に来てます』

「これ夢だよね!?!頭痛くなってきた……」

『終わったら帰りますので。後、目が覚めたら全部忘れてますのでご安心を。では——制作秘話的なアレ』、始めさせて頂きます』

現れたホワイトボードの文字が変わった。そこには「制作のキツカケ」と書かれている。

『えーと……書き手様からの回答は——』

「凄いメモ見て喋ってるのが神様らしくない……」

『ありました。では、回答をどうぞ』

”

IS、インフィニット・ストラトスという作品の二次創作を始めて早数年。振り返ってみれば長いことこの作品のSSを書いているなあとは思いますが、昔々に書いたと思われる、2012年とかと表記のあるデータを覗いて悶絶したりなんてこともよくあります。いい思い出ですね。

実は、前作というか未完になっているマドカが主人公の作品、完成まで書いてて社畜生活の中で添削とか時間見つけてやってたんですが、ある夏の日に落雷があつたんですよ。それでパソコンが駄目になっちゃいました、色々復旧作業したんですけど保存していた部分が完全にお亡くなりになっちゃってたみたいで、『そんなことないだろー

〔笑〕なんて思ってたせいでバックアップも取っておらず結局そのまま制作中止に。プロットとか、設定的なアレは別のパソコンにあっただんですが本文が軒並、多分100万字……?くらい逝って心折られました。

なのでISの二次創作もここまでかなあ、とか思ってたんですが。久しぶりに古い友人Sと話す機会があっただんですよ。そこで色々悪ノリというか、創作関係のことでかなり盛り上がりまして。最初は『丸呑みさんと触手くん』っていう意味のわからないギャグ作品を書いてたんですが、その中でインスピレーションというか、天からアイデアが降ってきたというか。それでそこからSとも色んな話をして、今作の制作を開始したという感じでした。今回は前の落雷の惨劇を反省してバックアップも完璧、プロットも大体完成してるのでちゃんと頑張っていこうかなと思ってます。

”

『——以上、書き手様から頂いたメモを読み上げました』

「色々突っ込みたいたいんだけど、仮に猫さん?が神様だったとして私達の世界が作られた理由かなり酷くないですか!?何ですか『丸呑みさんと触手くん』って!」

『新米冒険者が興味本位で危険区域に足を踏み入れて、そこでもふもふの怪物に丸呑みにされるんですが。丸呑みにされた先には触手がうねっていて、『ああ……もう駄目か……』って諦めそうになったらどこからともなく『成る程……貴様が我々の契約者か

……』 って声が聞こえてそこから冒険が始まる物語ですが』

『全く理解が出来ない！新しすぎるよ！』

『私に言われなくても……先程も言いましたが時間が押しているので次——マドカさん、なんか震えてますけどほっといいいんですか』

『えっ』

見れば、そこにはしやがみ込み、クロちゃんと一夏に心配そうにされているマドカが。
「わ、私が……主人公……仕事頑張った甲斐が、あつたんだな——！」

何か嬉し泣きしてるよ!?

『ちなみになんですけどね、ええと……ありました。書き手様曰く、プロットとか設定のデータはあったので、前作から活かせる部分は引っ張ってこようとかいう考えだったらいいです。”黒式”の設定や単一仕様も今だから言えるらしいんですが、本来は向こうの方で使う予定だったとか。千冬さんとの話とかもそうみたいです。それ以降は新規、と書かれています』

「マドカが主人公の世界って……なんか、すっごくドロドロしてそうな気も」

『ぶっちゃけしてました』

「ぶっちゃけましたよこの猫!?!」

『はい、じゃあ次ー』

逃げたよこの猫。そう思っていると、ホワイトボードの文字が書き換わる。そしてその表示される文字を、私は無視できなかつた。

『リス・エーヴェルリツヒという人物について、ですね』

「わ、私？」

『はい、スリーサイズは上から84——ごっふう！』

「ひ、人の身体的情報を公開しようとしなくてください！」

『い、痛いです動物虐待ですよ!? ほら、一夏君なんて顔真っ赤にして——わかりましたやめますからそのスイッチ入った眼やめてください怖いです』

「……女の子の身体情報晒すとか、最低です。書き手さんにクレームとか言えないんですか」

『やめてください私消されちゃう！文章デリートするくらいの感覚で消されちゃう！』

「じゃあ反省して下さい」

『今後気をつけますので許してください！——さておき、貴女という人物についても文章頂いておりますので読み上げます』

”

新規作品の制作、ということプロット制作前に悩んだのが主人公でした。男にする

のか、女にするのか。他所でもよくお見かけするような神様転生であったり、TSモノであったりなどどうするのかというのとはとても迷いました。考えながら友人と遊んで、ミスして大目玉なんてこともありました（笑）。

あんまり大きなことは本編にも関わってないので言えないんですが、インフィニット・ストラトスという作品の世界観や設定、考察などををはじめとして各主要人物の人物考察なんてのも行いました。その中でやっぱり目立ったのが女性しかない環境の中での紅一点。織斑一夏君という存在でした。彼自身、原作ではヒロインのうち誰かを選ぶという行動はしておらず、唐変木なかわざとなのかよくわからない立ち振舞をしていました。（原作10巻ののほほんさんのシーンなど、考える部分が多くありました）。

そんな一夏君が、もし明確に誰かを理由を持って選んでいたら？そう考えた結果、女性主人公という結論に行き当たりリリス・エーヴェルリツヒという人物が出来上がりました。容姿とかはほぼほぼ作者の趣味、というのには3割位本気で残りは別の理由であったり。あまり大きなことは書けないので、これくらいで。

あ、後簡易的な彼女のプロフィールというかなんというか。そんなものを書いてみました。

名前：リリス・エーヴェルリツヒ

性別：女性

身長 160

年齢：15

所属：I S 学園・ドイツ

【人物紹介】

セミロングの銀髪に紅の瞳を持つ少女。自国女性の平均身長より背が低いのが多少コンプレックスになっている。数年前に何者かに自宅を襲撃され両親を亡くす。それ以降は義父に頼んで戸籍をすべて消し、その時に見た血に濡れる剣を持ち空に存在した”金色のI S”を唯一人で追い続けていた。が、束に存在を感じづかれ追われることとなり最終的に千冬に敗北、保護された。その後は束とドイツ国の保護下となり、一夏がI Sを動かしたのをキツカケに学園へと入学。頭はいいほうであり、既にI Sの分野においては大学課程までのカリキュラムを独学で勉強しているなど、努力家。だが完璧主義なところがあり、自分で物事を抱え込んでしまうことも屢々。一夏と付き合い始めてからは少しずつではあるが改善されているようだ。一組の苦勞人であり、いつもツツコミや騒動を沈静化させる役回りにマドカ共々回されている。

本人としてはいつからなのかわからないが、異常な程の反応・反射神経を持つ。常人と比較すると二倍以上の速度で身体への情報を処理でき、それに加えて特殊な技法を

用いての戦い方が得意。好きなものは緑茶とチョコ大福。嫌いなものはないが、意外ともいえる苦手なものがある

”

「……これ聞いてると、本当にその書き手さんって神様なんだなって思います。私、好きな食べ物とか人にあんまり言っないんですが。それに身長のことも」

『外国の方って女性でも案外身長あるんだなあ、と書き手様は驚いてたらしいですよ？』

あれ、このプロフィール一部抜けてないですか？スリーサ——』

「書き手さん！このよくわかんない猫消してくださいー！」

どこからともなく『あ、はい』という声が聞こえた。それと同時に、猫さんの真下の地面がカパツと空いて、そこに吸い込まれていった。『サヨナラ！』という断末魔と共に吸い込まれたかと思ったら、再び地面がカパツという音と共にあいて、今度は紺色の座布団に座る三毛猫が。

『大変失礼しましたリス様。そらねこの一人がご迷惑をおかけしたようで……私、そらねこTypeミケと申します』

「猫さんって複数存在してるんだ……もう突っ込むの疲れてきた……」

『お疲れでしょう。もうすぐ終わりますのでお付き合いください』

「神様ってなんだろうって哲学的なこと考え始めそうんだけど」

『さ、先に進めますね？ ——最後に、お知らせです』

「本当に最後？ ねえ本当に最後？」

『ご安心下さいリリース様。最後です。では、その文章を読み上げます』

”

最後に。執筆している今作はやはり、かなり長い作品にはなりそうだと思つています。なので長い目でやっていこうかなあとは考えています。タグや作品紹介文でも書いてますが、正直原作改変とかかなり多いです。再三になりますがその点ご理解していただければなど。

後、このお話を番外編として投稿しているこの章。お気づきの方も居るかもしれませんがI F√とも書かせて頂いています。何が言いたいかといいますが、”もしかしたらあったかもしれない展開や未来”なんて話を今後ここに投稿していこうかなと思つてます。具体的には、BAD ENDとか単発ネタとか。今のところお蔵入りしてるのは幾つかあるんですが、まあ人によつてはかなり嫌悪感あるだとか胸糞だとか。そういうのがあるかもしれません。

さて、そんなこんなで番外編『未知の猫との遭遇』をお送りしました。このお話とかここに投稿する作品とかは、本編には直接関係のないI Fになりますので、かなりふ

ざけたりはっちゃけたり、BAD ENDも結構酷いものだったりするかもしれませんがご理解ください。

” それでは、此処ではない何処か。本編で再びお会いしましょう。

『以上です、お疲れ様でした皆様』

「ちよつとまつて。何BAD ENDつて、えっそういうのあるの?」

『ありますよ、具体的には申し上げられませんが——安心して下さい、本来のリース様には関係ないことで御座いますので』

「ねえ不穩、すつごい不穩で怖いんだけど書き手さん何したの!？」

『……おつと、そろそろ時間ですね。それでは皆様、元の世界で本来の夢をお楽しみ下さい。お詫びという訳ではございませんが、頂いた時間は戻しておきましたので』

「あつ逃げようとしてますねミケさん! 待つて、私まだちゃんと話聞いてな——」
『おやすみなさい、よい夢を』

そこで私の意識は一気に落ちていった。でも……よく考えたらこれ、夢なんだよね。ああ、ならもう一度ゆつくりと寝てしまおう。そう思つて私は、意識を手放した。

番外編 『未知の猫との遭遇』 おわれ

BAD END $\sqrt{\quad}$ 1 \ 3

■BAD END 1 『彼が彼女と出会わなければ』 第3話：少年と少女より

「どうして、こっぴつたんだらうなあ……」

災難だ、そう思う。

IS学園への進学にあたって学費やその他の費用の全ては政府が負担してくれるという話で、しかも返還も必要ないという話であった。

普通に見ればこれほどおいしい話はないだろう。IS学園は俺でも知っているが、超一流と言つても過言ではないほどの学園であり、何より世界各国が関る世界的にも有名な学校だ。

当然だが、学費だって馬鹿にならない。それこそ、一般家庭の親がそれを見たらまず金額を疑うレベルだ。IS学園が推進している奨学金制度や、もしくは金持ち、何かしらのバックアップがないと到底払える金額ではない。そんな自分でも桁がおかしいと思えない金額の修学費に、その他費用まで無償で出してくれる——ただの馬鹿なら美味い話だと思っだらう。

だけど、タダほど怖いものは無いと言う。

要するに、政府は俺にモルモットになれといつているのだ。モルモット、もしくは飼
い犬になれと、そういうことなのだ。

考えても見れば、世界初の男性操縦者で、俺はただの一般人で後ろ盾なんて無い。そ
りやあ……千冬姉という人間が居るが、あれは別だ。千冬姉は凄いと思うし、尊敬もし
ている。だけど——常識的に考えれば、一個人が一人をもし政府や世界から守るとした
ら、きつと一人の力では無理だろう。

もし、政府が俺を捕まえておいた場合のメリットは？

対して、デメリットは？

そう考えた場合……恐らく、俺に対して支払うと言っていたあの金額以上の元は取れ
るのだ。

例えば、諸外国への発言権。

例えば、世界初の男性と言う希少性。

例えば、極上のモルモットという存在。

恐らく、このまま政府の言うとおりにして、IS学園へと仮に進学したとして……卒
業すれば、最高のキャリアが俺を待っているだろう。きつと就職に困ることもないし、
超エリートとしての人生街道を歩むことが出来るだろう。

そうすれば、千冬姉にも、もう苦勞を掛けることはないだろう。

いい事ばかりじゃないか、なのに——なのに。

ふと思いつくのは、かつてバイト先であったことだ。あの時俺は……理不尽な男性を助けようとして、正義感から女性を糾弾した。その結果として男性は救われた。だけど俺が受けたのは賞賛ではない。店長と、女性客からの罵倒だった。

自分がやったことを、間違いとは思えなかった。実際あの時の男性は何もしてなくて、一方的に女性が立場を利用して言いがかりをつけていたのだから。

間違った選択ではなかったと思う。けど……同時にとても理不尽だと、そう思ってしまった。

夜道を歩く、思えば散歩程度の気持ちだったのに結構遠くまで歩いてしまった。ふと見れば、自分の今歩いている海沿いの道からは……人工島でもある、IS学園が見えた。自分が通うことになる、監獄とも言える場所。それを見て、思う。

——全部、受け入れてしまえば楽になるんだろうか

と。

自分が藍越に行こうとしていたのに、IS学園に行くことになったこと。

自分の人生は今、誰かに……誰かに首輪をつけられようとしていること。

理不尽だと思った。どうして俺がこんな目に、そう思った。

ふと思ったのだ。抗わずに、考えずに全部受け入れてしまおうと。

自分の将来は確約されているのだ、政府に従っていけば俺はもう……千冬姉に迷惑かけることなんてない。

仮に、あのバイト先の時のように女性に何か言われても、その場のぎで適当に謝り倒して凌げばいい。

必要なら、幾らでも媚を売ればいい。

どす黒い何かが、俺の中で囁いたような気がした。それはとても甘美で、とても心地の良いものだ。自ら苦労なんてする必要ないじゃないか。俺は織斑一夏、ISを世界で唯一使える男。ははっ……そうじゃないか。そんな存在を欲する奴等なんて幾らでもいる、俺みたいな奴を利用したい女なんていくらでもいる。

なら、利用させてやろうじゃないか。それで、何もかもが手に入るなら。思い通りになるのなら。

——俺は、喜んで女尊男卑の犬になろう。



その後の彼について、ここに記そう。

I S 学園進学後、彼は特に問題を起すことなく学園での学生時代を過ごした。生徒からの評判は上々。イケメンで、優しく、頭もいい。そんな彼に対して好意を抱く女性は何れでも居た。

そんな実情を彼は知っていた。他人から向けられる好意も理解していた。だから彼はそれすらも全て利用した。必要ならば相手が喜ぶ甘美な言葉を囁き、必要ならば関係も持った。それは学園で再会した幼馴染や、旧友。他の候補生に対しても同じだ。自分に惚れるように振る舞い、扱い。そうした。

そして不要になれば——彼は相手について不穏な噂を別の相手に流し、自分は関係がないというようにして、生徒達の標的になるように仕向けた。

これは噂ではあるが、I S 学園で公にはされていないが自殺している生徒が何人もいるらしい。その中には代表候補生や、有名な令嬢も居たとも言われている。噂では身籠った生徒や人間もいたらしいが、結局の所噂だった。

つまるところ、織斑一夏が糾弾されることは一度もなかったのだ。

中学時代に彼の友人だった弾は、高校卒業後——ある旧友にこう語ったという。

『“あれ”は一夏じゃねえ。俺の知ってる一夏は……あんな下種で、落ちぶれた野郎じゃなかった。蘭を無理にでも藍越に行かせて正解だった』
と。

高校卒業後も織斑一夏という人間の周りには、常に女性の存在があったという。

いつのまにか、彼に対して意見する人間は居なくなった。何故ならば、彼に齒向かえば彼に従う女性に消されるからだ。

いつのまにか、彼に友人は居なくなった。『友すら道具のように扱うお前は友ではない』と見放され、信用されなくなったからだ。

いつのまにか、彼はひとりになった。友もおらず、”織斑千冬もいなくなった”。けれど彼は、それでもいいと思っていた。

『もう、俺は千冬姉に苦労なんてかけなくていい。一人で生きていける——だから、安心してよ千冬姉』

かつて織斑一夏という存在だった、今はそうでない誰かが。夜の街の空にそう呟いた。今日も彼は、生きるためにどこかで女性を利用し、利用される。

■BAD END 2 『彼女が来るのが遅ければ』 第14話：白銀の断苜者より

「ツ……こんな時に、」

まただ。また、身体への負担が来た。

そして……時間にして1秒。私はその場から動けなくて、反応も出来なくて——

「……え？」

気がつけば、無人機が正面に居た。そして巨大な腕部で鷲掴みにされる。その衝撃で両手に持っていたバルムンクを手放してしまう。手放したそれが自動的に量子化されて、私は無手のまま無人機に拘束されてしまった。

しまった。最悪だ。この状況では武器を展開できないし、エネルギーウイングでの防衛も機能しない。セラフも先程の無人機に対して、”篠ノ之さんを助けるために”使ってしまった。

それにどうして反応がなかった。オペレーターにはクロロちゃんが、少なくともこの局面には専用機が三機居たのに、どうして――

なんて最悪のタイミングで、こんなことに――タイミング？ 最悪？

「…まさか、」

無人機は私を鷲掴みにしている腕の力を、少しずつ強めている。まるで甚振るように。愉しむように。

そして、私を捕まえている腕を…救援に入ろうとした一夏と鈴に、見せつけるように前へ出した。つまり、人質でもある…ということなんだろう。

最悪のタイミングで、こいつは現れた。

つまり…こいつは ” 最初から居た 見ていた ”

怖いと、恐ろしいと感じてしまった。少なくとも私は油断していないつもりだった、

オペレーターのクロちゃんだってそうだろう。

クロちゃんの技術はすべて東さん譲りだ。あの子が使う端末やプログラムだって、並のものではなく”世界最高位”レベルなのだ。

私の専用機のセンサーにもその応用が搭載されている。なのに——こいつらはそれに感知されなかった。つまりそれは、東さんと同じかそれ以上の存在ということになる。

よく見ると、この無人機は先程撃墜した無人機とは装備が異なっている。徐々に力を強めて、私を握りつぶそうとしていくその腕に対して、シールドも減っていく。

五つ目の顔は：嗤っているように見えた。私のシールドが、命がデッドラインに近づいていくのを愉しむかのように。

目的がある。復讐という目的が。

まだ生きていたい、IS学園という場所に居たいという願いが。

だけど、諦めにも似た感情が生まれてしまった。

そしてそんな中で：ふと浮かんだのは、努力家で無茶ばかりする少年の姿だった。

：”君”との約束。守れなくてごめんね。

最後に私が感じ、消える意識の中で見たのは——首から下の身体全てへの激痛と、視界の中で廻る世界だった。

◆ ◆ ◆
リースが死んだ。その事實は、織斑一夏という人間に対して大きな影響を与えた。彼が最後に見た彼女は、己を見ていた。そして——言ったのだ。『ごめんね』と。焼き付いてしまった。彼女の、最後の瞬間が。

シールドがデッドラインを超えて無人機に握り潰され、彼女の首がアリーナの空から地面へと墮ちた。日常的に見ていたその銀の髪がとても鮮明に見えて——”モノ”になつた彼女は、そのまま地面へと叩きつけられて弾けた。

無人機が握りつぶしたその腕にはそれまで生きていて、機能していた人だつた部品が付着しており、それをゴミだというように無人機は地面へと捨てた。

叫び、我を失つた一夏はシールドのことなんて考えず無人機に鈴の制止を無視して切りかかった。しかし、元々有効打が入らない敵に勝てるわけもなく、埃でも払うかのような一撃で叩き落され意識を失つた。

結局その無人機は、”一夏が殺される瞬間”に現れた少女によつて撃墜されることになつた。誰もがリースの死には自分の前では触れず、一夏が生きていてよかつたと言つた。それはきつと周囲からすれば心遣いだつたのだろう。

しかし、それが彼を追い詰めた。一夏は思つたのだ、自分が勝手なことをしたから。自分が弱かつたから彼女を死なせた、彼女を殺したのだと。

最後の『ごめんね』という言葉を鮮明に覚えていた。思う、『違う。謝るのは俺だ』と弱かった自分を責めた。

その後、彼は人が変わったようになった。卒業後に開催される『第四回モンド・グロツソ』、そこで優勝すると低い声で宣言し、まるで狂ったように鍛錬に明け暮れた。

ISバトルにおいても、彼の戦い方は変わった。入学当初、誰かを護るためという為にあつたそのスタイルはもうない。

勝つためならどんな手段でも使い、護るためならどんな卑劣な手でも使う。試合中の不意打ちや相手への脅迫、脅し、パワープレイは勿論として勝つために試合前の工作までするようになった。

雪片を振るうその太刀筋にも躊躇いがなくなり、相手の急所を的確に狙うようになった。そして必要なら、精神的に追い込むために首や心臓を執拗に狙った。

強くなるためならどんな手段でも使う。悪魔にさえも魂を売る。一夏は、そうなつてしまった。それはきつと、彼にとつては贖罪であり許されたいという想いからだつた。

『ごめんね』と言つた少女に許されたいと。そう思つて彼は——修羅であり、羅刹へと堕ちた。

■BAD END 3 『何処にも行かせない』 第19話：すれ違う心より

パンツ、という乾いた音が響いた。

それはリースからのものであり：打撃されたのは、一夏だった。

自分がやったことに対して一瞬見開くが、すぐに一夏を睨むような視線へと戻る。

「君に、何がわかるんだ」

「わかんねえよ。ただ強がって、一人で傷ついて、”いつも通り”を装うお前の気持ちなんてわかるかよ」

互いに冷静ではなかった。だからなのか、お互いが思っていた言いたいことや、思っていたことが吐き出されていく。

「——やっぱり、だめだ」

リースは息を吸い、深呼吸すると：まるで呪いのようにその言葉を呟いた。

「…君と私は、真逆だ」

真逆。彼と自分とはやり正反対だと思い、やはり相容れないのだと理解する。

一度は一夏がこちらに踏み込んで、リースはそれを拒絶して逃げたのだ。なのに、また踏み込まれた。そうされる違和感、それに対してリースはただわからなくて、耐えられなかった。

”Auf Wiedersehen”…一夏。あの約束はナシにしよう。それと殴って、ごめん」

だからこそ、嫌だった。その違和感が。だからこそ、それから逃げたかった。

そう望むからこそ、リイスは決別の言葉を口にして一夏を押しつけようとした。

「何処、行くんだよ——」

「ッ……!?!い、一夏、離して!」

だが、それはできなかった。彼を押しつけようとした瞬間、リイスは再び壁に押し付けられたからだ。

突然のことで反応できなかったというのもある。しかしそれ以上に今のリイスは頭の中が混乱していて、正常な判断ができなかった。そしてそれは、一夏も同じだろう。熱くなりすぎていて、判断ができていなかったのだ。

壁に押し付けられ、身動きを取れなくされてリイスが感じたのは“恐怖”だ。動けない。いつものように少し力を入れて振り払えば逃げられるはずなのにそれができなかった。そして何よりも、予想以上に強い力で自身を壁に押さえつけている彼に対して困惑し、怖いと感じたのだ。

「一夏、冗談はやめ——」

「……そうだよな。お前がそうやって自分を犠牲にしようとするなら、無理しようとするなら」

「ッ!?!きやつ!?!」

近くにあつた一夏のベッド。そこにリイスは押し倒された。押し倒され、ベッドに対して両手を抑えつけられる形になる。

嫌な予感が全身に駆け巡った。だからこそ、リイスは逃げようとして身体へと力を入れようとしたが——力が入らない。

「そう、できなくすればいいよな」

「なっ……一夏、流星に君でも冗談が——むぐっ」

身体をベッドへと押し付けられて、リイスはそのまま無理矢理唇を奪われた。抵抗しようにも力が入らず、何故かどんどん頭が麻痺していく。麻痺し、抵抗する力も弱まってしまう。

抵抗する力が弱まり、暫くの間唇を深く交わした後に一夏は顔を離してリイスを見る。彼女の状態と表情はどこか呆けているようになっていて少し赤い。が……目はそうではない。抵抗しようとする意思があつた。

「俺さ、多分リイスが好きなんだよ」

「何言つて——私は、君のことなんて、」

「じゃあさ、好きにさせてやる。もう二度と自分を傷つけないように……俺のこと、好きにさせてやる」

「っ……や、やだ。やめてよ一夏、ね？お願いだから」

恐怖状態。そんな状態から出た、普段の彼女からは絶対出ないもの。その”他人に対して頼む”という言葉。怯えるようにして言ったその言葉で、一夏の気持ちは更に強くなった。『誰にも渡さない、リイスは自分だけのものにする』と。

だから一夏はその言葉を聞かずに、彼女の制服へと手を伸ばして、それを開けさせていった。

「好きだ、リイス。だから……全部欲しい。リイスの全部が、俺は欲しいよ」

リイスが抗議の声を再びあげようとしたが、それを一夏は無視するようにまた唇を塞ぐ。そうして彼は、彼女を”自分のモノ”にしたいと思い、また手を伸ばした。

BADEND3√続編 『折れる翼、形成す未来』

■BAD3続編 『折れる翼、形成す未来』

やってしまった。そう思うことは誰にでもあるんじゃないだろうか。

確かに自分はリイスは喧嘩をしていた。喧嘩をしていて、自分が言っただけならいい事と言ったのだと思う。

そのまま互いに冷静さをなくして、本音が出た。その結果は……ある意味、最悪なものだった。

「リイ、ス……？」

目が覚める。今日は日曜日で休みだ。時間を見れば既に10時近く、ある意味でホッとす。しかし問題は別にある。目が覚めた、そこまではいい。だが、どうして。

どうして、自分のベッドでリイスが眠っているのか。

ふと見れば、彼女は普段の私服やパジャマ姿ではない。恐らく自分のワイシャツだけを着ている状態で、すやすやと寝息を立てている。

ゾクリ、と寒気が走った。同時に血の気も引いた。

昨日自分は何をした？彼女が部屋を出ると言い出して、そこから口論になってそれで、どうなった——

思い出そうとまだ寝起きで完全には回りきっていない頭を回転させ、思考する。そして、フラッシュバックされたのは、昨日の出来事。

彼女が自分に対して”さようなら”と言つて部屋を出ようとして、自分がそれを無理矢理に止めて……押し倒したこと。

その後嫌がり、恐怖する彼女に対して自分を抑制できなくなつて、無理矢理唇まで奪つて。

「俺、は——」

思い出されたのはその後の事もだ。最初怖がり、泣き叫ぶようにしていた彼女。だが最終的には——光のない目で自分を見て笑つていて、手や足を己に対して絡めてきていたこと。彼女から溢れる元々自分のものだった液体も、”光のない目で言ったあの言葉も”。

彼女の体温、肌の感触、声。昨日あつたこと全てを、鮮明に思い出せた。自分は、彼

女が離れていくのが嫌で。無理矢理引き留めようとして手を出してしまったのだと。

最悪だ。最低だ。自分はなんてことをしたのか。

(違う、違うんだよ。俺はただ、リスにこれ以上傷ついてほしくないって思つて。あのままにもしないまま行かせたら、きつとまた自分ひとりで無理すると思つて、だから――)

否定しなかった。自分は彼女が好き、それは本心だろう。だからこそ、傷ついてなんてほしくなかった。一人で抱え込んで、無理して、これ以上何かを失つてほしくなかった。

あの時しなかったのだから、こんな結果ではない。『覚悟はあるから話を聞かせてくれ』だとか、そんな言葉であつてこんな結末なんて、望んでいなかった。

——本当にそうか？ 織斑一夏

「ツ……………!？」

脳内に誰かが囁いた気がした。それは、とても黒い声だ。悪魔のささやきにも似た……………己の声だ。

——本当は安心してゐるんじゃないか？ こうなつてよかつたと思つてゐるんじゃないのか？ もう、彼女は立ち上がれない

「……黙れよ」

「——よかったじゃないか。彼女はもうお前には逆らわない、”お前が彼女が最も恐れるものを愛の形として送ったからだ”」

「だまれ、」

「——もう彼女は飛べない。戦えない。その翼を折って、心さえ捻じ曲げたのはお前だろう？ 織斑一夏」

「——」

その声のような何かはもう聞こえなくなった。だが、その言葉に対して反論なんてできなかつた。自分が奇麗事や言い訳を並べているだけで、それは事実だからだ。

彼女の心を折ったのも、無理矢理奪ったのも。最も恐れるものを、信頼されていた自分が彼女に対して送ってしまったのだから。そこで理解してしまった。もつとやりようはあつたはずだ、やり方や接し方なんてのはあつたはずだ。

にも関わらず自分は最悪の選択を選んだ。結果として残ったのは、最悪の結末だけだ。なら自分はその責任を取らなければならぬ——最後まで、彼女の心を折った織斑一夏で居なければならぬ。

「……ん」

己の隣で動く気配があつた。間違ひなくリースだろうと、一夏は理解する。見ればただ眠そうにしており、目は半開きの状態。

「おはよう、リース」

「——おはよ、一夏」

その言葉の後、突然リースが身を起すと一夏へと抱きついた。彼女が今着ているのは一夏のワイシャツのみであり、抱きつかれた一夏はその身体の感触や体温、鼓動を直接感じる事になつたが、いつもなら動じるはずの一夏は動じなかつた。

「……一夏、昨日の言葉。嘘じゃないよね」

「——ああ、嘘じゃない。俺、今までリースに嘘ついたことなんてないだろ」

「……うん。　ねえ一夏。ちゃんと、ここにいますか？　」もう私は独りじゃなくてもいいの？」

心が軋んだ。確かにこれは自分が望んだ結果だろう。もう彼女は無理することは無い、独りでいる必要なんてない。彼女は自分にもう逆らわない、だからそんなことにはもうならない。

自分が望んだ結果。そうならばいいと望んでいた結果に、そうなりたかつた関係。だ

が、同時に自分は最も与えてはいけないものを与えてしまったのだ。彼女が最も恐れているそれを与えてしまった。

自分を見る彼女の目には光がない。だが、どこか幸せそうに。安心したように笑っている。理解する、これが自分の選んだ結果の末路なのだと。

無言で一夏は抱きついているリイスを抱きしめると、その答えを返していく。

「もう、リイスは独りじゃない。ずっと俺が傍に居る。ずっと俺が、お前を愛し続ける。……だから、もう何も苦しまずに。考えずに俺のものになれ、リイス。もう、何処にも行かせない」

それは織斑一夏という人間の覚悟の言葉。同時に、自分に対しての呪いの言葉でもあった。かつて彼女が背負っていたもの、今度は自分がそれを独りで背負わなければならない。

彼女の幸せのために、彼女を護るために。自分はこれから訪れるであろう苦難や運命に対して独りで抗わなければならないのだ。

だからこそ、一夏は鬼神となり修羅となった。

たった一人の、自分が全てを奪った少女のために。その少女と、どんな結末であろうと手にした幸せとも呼べるのかわからないそれを護るために。

その後の事を少しだけここに記そう。

リースは一夏と関係を持った後、ISに乗らなくなった。というよりは……乗れなくなったといったほうが正しいのかもしれない。彼女の専用機は束へと預けられ、今まで頑なに成そうとしていた復讐も目的も諦めてしまった。

そのまま彼女は普通の生徒として整備科へと進学。IS学園在籍時には清香やクロ工達と共にISの応用理論についての論文を高等学校生ながらに発表、注目を集めた。

卒業後、一夏と共にIUI。IS大へと進学。同じく進学した清香とクロ工達に加えて、候補生として代表を目指すために本国へと戻るかと思われていたシャルロットも大卒へと進学。そこでISの応用技術研究として、ハイパーセンサーの医療分野への応用や絶対防御を用いた現場作業の安全性の向上や宇宙進出理論などを次々に発表。これについては束も驚かされるばかりであり、一線を退いた束も加わり一大プロジェクトとなった。

二人が大学2学年になった頃、一夏がリースへとプロポーズをした。そこで一夏は今

までのこと、自分が高校時代に戦ってきた存在達のこと、そして——リイスにとつての、昔の目的のことについて全て話した。その全てを自分が片付けて、”もう本当の意味でリイスは苦しまなくていい”と言って。

恐らく一夏の呪いもリイスの一夏によつてかけられた呪いも、ここで解けたのだろう。全部終わったのだと二人は理解した。だから……リイスの答えは、決まっていた。

——私の全部を奪つたのは、君だよ一夏。だから……最後まで責任持つて欲しいな

そんな言葉と同時。リイスは一夏の手を取ると、自分のお腹の当たりに手を当ててみせる。それで一夏は理解した、『ああ、本当にそうだな』という言葉とともに。

この時点でリイスは一夏の子供を宿していた。そして彼女もこれについてどう伝えたらいいのかわからなかったのだ。

その後、千冬や束の所に行つたりリイスの養父の元へと行つて『結婚させて下さい』と話をしにいったのだがまたこれが原因で大騒ぎになった。千冬はごく普通の返答として了承を返したが、束は大はしやぎ。いつのまにか彼女が住み込んでいる大学の研究室は混沌とした状態となり、その沈静化に箒が駆り出される始末。結局、別のとある男性と関係を持っていた箒は旦那連れでそれを鎮めることに。

ドイツにいるリースの養父についてもいきなり軍部で招集をかけて緊急会議始めるわクラリツサを呼んでまで会議をするやらで大騒ぎに。こちらはラウラによつて肅清された。リースの養父についてはリース自身はかなりお怒りだったようで『お義父さんなんてもう知りません!』の一言で撃沈した。

結婚式は無事に行われ、慌ただしい日々が過ぎていく。それはキツカケは間違つていたかもしれないが、とても幸せなもので。形や経緯はまた違うかもしれないが、ある種1つの結末で。

時は過ぎて、一夏とリースの子供。”双子の男女”の子供も大きくなり、丁度一夏とリースが出会ったくらい歳のなった時。

「行つてきます、母さん。……父さんは?」

朝の挨拶を自分の母へと投げたのは少年だ。髪の色は灰。顔立ちはどこか一夏に似ており、背が高い。その身を包むのは、多少昔とはデザインが変わっているがIS学園の制服だ。

「一夏は昨日から東さんのところに泊まり込みだと思ふよ。夜には帰つてくると思ふけど」

「……東叔母さん、容赦ないからなあ。父さん生きてるといいけど。　　おーいユキ!

早くしないと遅刻だぞー、入学式、というより初日から遅刻かー?」

何やら慌てたような声と共に、階段を急いで降りてくる声が聞こえた。

「女の子には色々あるんだよ! 大体ハル兄は準備早すぎ、妹の私の事も少しは気にして
!」

慌てて降りてきたのは白のロングヘア、瞳の色は金色の少女だ。その身には兄と同じく I S 学園の制服を纏っている。

「やかましいわ。昨日徹夜で本読んでたのはお前だろうが。さっさと行くぞこの馬鹿妹」

「ひどっ!? つてもうこんな時間! 行ってきましたママ! ——ほらハル兄行くよ!」

「へいへい……。なーんで俺がいつも振り回されるんだか……。じゃあ改めて行ってきます、母さん」

「あつ、専用機のデータ提出。ちゃんと学園行つてから出すんだよ二人共。……つて、聞いてないか。まあ、しっかりもののお兄ちゃんがいるし問題ないかな」

ふと思いついたようにそんな言葉を言うが、既に兄のほうは妹に無理矢理手を引かれて走っており恐らく聞こえていない。

「いつてらっしやい、ハルト。雪音。……いい学園生活をね」

思い出すのは自分が I S 学園生徒だった頃。復讐という目的があった、けれどそれは

最愛の人によって全部折られてしまった。

今更そのことをどうこう言うつもりはなかった。リースとしては、一夏もその贖罪という意味で結婚前に全部話してくれたのだから。

今は今の幸せのことだけを考えよう、そうリースは想う。

そしてこれまた、二人の子供が学園へと入学してからの話。

恐らくリースや一夏達が聞けば『……すごいデジャヴ』などと言いつつセシリアを全員が注視しそうであり、セシリアが聞けば顔を真っ赤にして震えそうだが、学園での恒例行事。クラス代表決定戦で”あるイギリスの令嬢”が、これまた二人の子供。ハルトと雪音が持つ専用機についてで騒ぎを起こして決闘騒ぎに。

後日どこかのイギリス保護者が顔を真っ赤にして涙目になっていたのは別の話。

そのちよつとした騒動の、対戦当日。複数人の候補者の中から代表を決めるべく行われたそれでの一回戦は、恐らく両親が聞けば『すごく覚えがある』と言いかねない展開。織斑ハルト対織斑雪音という対戦カード。

当然ながら兄は頭を抱え、対して妹に至っては楽しそうにしていた。

「それじゃ、容赦しないよハル兄！今日こそは馬鹿妹扱いを撤回させてやるんだから！」

「あーはいはいできるといいなユキ」

「……あつたまきた。私が勝つたら駅前！@クルーズの一番高いやつだからね！」

「俺勝つたらどうすんだよ」

「うーん……お兄ちゃんの好きなことなんでもしてあげる？」

「はっ倒すぞ。意図的に上目遣いで言うな」

「ハル兄がいつもより辛辣……もしかして、嫌ではない？兄妹だよ私達、でもハル兄とならいいかなーなんて」

「やつぱり潰すわ。おふぎけは大概にしろ」

「……はいはい。じゃあ、始めようか」

「さっさと終わらせるぞ。俺としては、あのイギリス令嬢に絡まれたことから含めて色々疲れてるんだ」

どこかで叫び声が聞こえた気がしたが二人はそれを無視。互いのピット・ゲートに立つとISを展開する。

「来て、ヴァイス・フリーユージェル！」

「行くぞ白式。出番だ」

試合開始。白と銀。兄と妹の戦いが開始された。

これは、もしかしたらあつたかもしれない物語。そしてその結末。

選択肢が違つていればこうだつたかもしれないという、ひとつの形。

その中でもある意味辿り着いた未来がある、そんな世界。

二人の物語は終わった。だが、二人や多くの人間の子供達の物語はこれから始まる。

これはひとつの終わりの物語。そして、始まりの物語。ひとつの形を成した選択の未来であり、始まり。

B A D & T r u e E n d

第一章 『復讐の白翼』

銀の少女

ドイツ。バーデン・ヴュルテンベルク州南西部に位置する黒い森と呼ばれる山岳地帯の空に、織斑千冬の姿はあった。

周囲は暗く、本来ならばISを纏うことはない己の身体の視覚をハイパーセンサーに通して周囲を確認する。

何故織斑千冬がドイツの空に存在していて、本来なら纏うことのないIS——彼女専用にかスタマイズされた打鉄を纏っているのにはある理由があった。

数日前、腐れ縁であり悩みの種である篠ノ之 束から連絡があった。千冬は『また面倒事か……』程度の感覚でその連絡に出た。

それが、全ての始まりだった。

——『大至急、ちーちゃんの力を借りたい。緊急なんだ、お願い……!』

今までに聞いたことのないような、珍しく焦った束の声に千冬は困惑したが、ただならぬ状況であることは理解できた。その後、彼女の力を借りて誰にも見つからないように合流。そこで千冬が束から聞かされたのは、あるキーワードだった。

『……銀のISを、ちーちゃんは知ってるかな』

「……あれか」

ハイパーセンサー越しに目標を確認する。このような山岳地帯に、巧妙に隠蔽された研究施設。恐らく束のサポートがなければ見つけないことすらできないであろうその施設を千冬は確認した。

「束、目的の施設を確認した。だが……あの施設は、」

『ちーちゃんは知らないほうがいい……って言っても、知りたがるんでしょ?』

通信機越しに呆れと悲観が混じった声が聞こえる。その声に対する答えはYESだ。恐らくあの施設は違法研究施設。そして、これだけの隠蔽をするということは余程の施設だろう。

そして……過去に自分は、そんな違法研究の犠牲者になったある少女に関わっている。関わり、その詳細までも知った。だからこそ、見て見ぬふりなんてなのは——織斑千冬という人間の心が許さなかった。

『……あれは、過去にちーちゃんが関わった行き過ぎた越境ヴオーダー・オージエの瞳の研究より遥かに下種

で、醜いものだよ。人工兵士の生産プラント、つて言えば分かるかな」

「人工……兵士？それは遺伝子強化試験体ということか」

『あれよりもつとエグいよ。…簡単に言うると、生産方法が異なる』

「それはどういう——」

ドオン、という爆発音と超えている施設の炎上。それにより言葉は続かなかつた。一度発生した爆発の後、次々と爆音に……ハイパーセンサー越しに人の悲鳴や怨嗟が聞こえてきた。

『この話は……ここまで、どうやら……もう既に居たみたいだね』

「ツ……!!?突入する!」

打鉄のスラストを全開にして研究施設のヘリポートらしき所に降りる。周囲の建物からは火の手が上がっており、見れば体全身を炎に包んだ研究者と思わしき人間達や……『子供と成人女性』の姿が確認できた。

「うっ……これ、は——」

場馴れはしているつもりだった。しかし、目前の光景。まさに地獄とも呼べるその光景と、燃え上がる人間達の悲鳴や怨嗟を聞いて、思わず吐き気がしてしまった。

「子供に、成人した女性……?どうして、」

『この施設は、遺伝子強化試験体の研究をしていた違法研究施設なんだ。けど……遺伝

子強化試験体の研究だけなら、別にここまで隠蔽する必要がなかった』

成人女性に子供。子供はどうやったら出来るのか。人の遺伝子などはどうすれば受け継がれるのか。それがわからないわけではない。それを見て千冬が出した結論は、恐らく的中していた。

「まさ、か」

『……多分ちーちゃんが考えているそれは正解だよ。成人女性、正確には思春期から成人前後の若い女性を直接使って遺伝子強化試験体を造り出そうとしていた。それが……この研究施設』

「下種がッ……！」

その時だ。燃え上がる研究施設の中でも一際大きな研究棟の壁が破壊されて、ソレが空へと飛び出てきた。

『見つけた……あのISだよ、ちーちゃん！』

暗い夜空に浮かび、炎の色に照らされていたのは——銀色のISに、その色と同じ髪に紅の瞳を持つ、少女だった。

「織斑、千冬……う……どうしてここに」

落ち着きのある少女の声。驚き混じった言葉が、惨劇の場に木霊した。

銀の少女はどこか驚いたように此方を見下ろしていた。恐らく、あのISと少女が束の言っていた今回の目的だろう。

(だが……なんだ、あのISは)

銀色のフレイムに、背部の非固定浮遊部位からはエメラルドグリーンのエネルギーフィールドが三対六枚の翼のように展開している。

両腰には恐らく剣だと思われる中型ブレードが2本ホルドされており、此方を驚きの表情のまま見下ろす少女の右手には、量産機であるラファール・リヴァイヴの五十一口径アサルトライフル『レッドバレット』に酷似した銃が握られている。

「……なるほど、篠ノ之束という訳ですか。いつかは捕まると思ってましたが、意外に早かったですね」

どこか諦めが混じったようなその声に答えるように、束が映っているウィンドウが千冬の打鉄の前に展開された。

『やつと見つけたよ。こうやって君を捕まえるのに1年掛かっちゃった、流石の束さんも驚きだよ』

1年という言葉に対して千冬は驚きを隠せなかった。篠ノ之束という人間は、今の世界では誰もが知る大天才である。同時に、身内の私からすれば『興味のない対象に対し

てはとことん冷たい』のだ。

そんな束が、1年も前からこの少女を追っていた？ 己の中には疑問と同時に、この少女は何者なのかという疑問があった。

「束……」の少女は、

『束さんにもわかりません！調べたけどわかりませんでした！』

返されたその言葉を理解できなかった。ふざけた対応を返されたからだとか、そういう訳ではない。

束がその気になれば大国の1つや2つ、下手すれば世界でも敵にして戦える。それだけの力と情報収集能力があるにも関わらず『わからなかった』。それがどういうことを意味するのか、理解はできた。

『さて、』とウインドウの中で束は一言置いて、その少女に向き合った。

『君は誰かな？そして、どうしてずっと違法研究施設やテロリストの拠点を襲撃しているのかな？』

「……丁度いいかもしれませんね。どうせ、何時かは貴女にも聞こうと思つてたことですから」

『束さんを襲撃とは中々度胸があるね。それに免じて条件付きだけど大抵のことには応えてあげよう。それで？』

「それは助かります。では篠ノ之束、貴女にお聞きします——金色のISを、知りませんか？」

ウインドウの中の束を見る少女の眼は真剣だった。そして、それに対しての束は……少女の言葉を聞いて、無言だった。

暫くの沈黙の後、束は

『……なるほどね』

「それは答えですか？篠ノ之束」

『金色のISが何なのかはわからないよ。けど……個人的に君と、そのISには興味がある。それと、これ以上君に暴れられたら都合がわるいんだ』

「ツ……私は、ここで捕まるわけには行きません」

『言ったでしょ、『都合が悪い』って。ちーちゃん、任せるよ』

その言葉に対して呆れつつも、カスタマイズされた打鉄の腰に存在する鞘から長刀を引き抜いて——地を蹴った。瞬時加速を超える二重瞬時加速。その加速を以て少女に肉迫する。

「逃しては、くれませんよね……!?!」

「ほう………今のを防ぐか」

手加減したつもりは無かった。全盛期とまではいかず、ましては暮桜でもないが……

素人には反応できないほどの加速であった筈だ。

千冬は見た。にも関わらず少女は、自身が地を蹴った瞬間には右手のアサルトライフルを捨てて両腰にホルドされているブレードを引き抜いたのだ。

防がれたと同時に千冬の中に湧いたのは、好奇心だ。本来ならば持つてはいけないうな、好奇心。親友である束に1年という期間追われ続け、今まで捕まらなかったということ。それに、少女の言う金色のISというのも気にはなる。

決め手は……今の一撃を防いだことだ。並程度のIS乗りなら絶対に反応できないだろうという自信があつた一撃。それに少女は反応した。

「本当……厄日ですよ、今日は。篠ノ之束ならと思つて期待もしたんですが、残念です」
「悪いが、此方も馬鹿の珍しく真面目な頼みなんぞな。投降するつもりは無いか？」

「ご冗談を。例えばブリュンヒルデが敵といえど……私には、やらなきゃいけない事がある」

その言葉の後の少女の眼を千冬は見逃さなかつた。そこにあつたのは、憎悪。怒り。憎しみ。思う。何故こんな少女がこんな顔をしなければならぬのか、と。

……自分は、そうならないためにあの時全てを背負つたのではないのかと。

(今は、目の前の相手に集中だ)

迷うのも、後悔するのも後でいい。

今はただ、今なすべきことを。

暗闇の空で、世界最強と——白の少女が激突した。

◆ ◆ ◆
ヒュンツ、という風斬りの音の後に鈍い鉄の音が響く。

もう何度目になるだろうか、目前の対峙する少女に己の斬撃を止められたのは。

斬撃を止められるだけではない、先程からは二重瞬時加速でほぼ加速しているにも関わらず、この少女はその速度に対応してくる。正直に言ってしまうえば、異常以外の何物でもない。

対峙する少女は、恐らく15か16程。自分の弟や、その友人と変わらないくらいに年齢だろうと推測する。そんなまだ子供といえるような少女が、己の加減なしの攻撃を捌き切っている。

……とは、いったものの。

「……………くつ、はあ」

対峙する少女には明らかな消耗が見える。息切れもしており、ブレードを持つ手の重心も安定していない。

「何故、お前はこんなことをする?」

唐突に投げられたその言葉を、千冬と対峙する少女は一瞬理解できなかつた。

「何故、とは?」

「違法研究施設を襲撃して、一人残らず皆殺しにして。……何が貴様をそこまで駆り立てる」

千冬のそれは純粋な疑問だった。先程束は言った『ずっと違法研究施設やテロリストの拠点を襲っている』と。理由があるはずだ、そんなことをする理由が。こんな、虐殺と言つていいようなことをする理由が。

「……復讐、ですよ」

「何?」

「復讐したいから。私から何もかも奪つた、アイツに対して——あの金色のISを見つけて出して復讐したいからですよ!」

少女の手が震えている。息切れも、さきほどと比べたら更に荒くなっている。

「私は、アイツを見つけて復讐する……! その為に——ここで終われない!」

目前で、少女が何かのウィンドウを操作した。『何だ……?』と、千冬が考えていると『ツ!?!ちーちゃん今すぐその子を止めて!』

焦つたような束の声が聞こえた。その声を聞いてからの千冬の行動は早かつた、すぐ

に少女の行動を止めようとしたが……一瞬遅かった。

「な——」

直前まで目前に居た少女が”消えた”のだ。

消えた、そう思った次の瞬間——千冬は背後から『4回の』衝撃を受けて、未だに燃え盛る研究施設へと叩き落された。

「くっ……何だ、今のは」

炎に叩き込まれる直前。空中で無理矢理体制を立て直して空を見れば——そこには、エメラルドの翼を大きく広げた、少女が存在した。

『オーバーリミット・イグニッションブースト
限界突破瞬間加速。なるほど……そういうことか』

「一人で納得しないで説明してくれるか、束——今私は、何をされた」

見えなかった。先程の消えた後の少女のアクションが一切見えなかった。気配や感覚、それすらもなく。ただ己はわからないままに背面から攻撃を受けた。

『理論上、人間の反射神経は0.2秒が限界だつて言われている。まあちーちゃんくらいになると0.1秒とかそれ以下になるんだけど……推測でしかないけど、あの子はその先。0.05秒以下の反応速度と、限界突破瞬間加速って呼ばれる加速と——特殊な技法を用いた移動方法でちーちゃんに直撃を入れた』

「自惚れるつもりはないが……私の反応速度以上、か」

『ごめんちゃん、時間がない。大至急あの子を止めて！このままじゃ……下手したらあの子は死ぬ』

束の言葉に対して千冬は驚くしかなかった。恐らく、その死の理由は……先程の加速にあるのだろうと結論づける。

「……わかった。束、ちよつと無理をするぞ」

『無理させる。多少手荒でもいい、あの子を止めて』

長刀を構える。この打鉄はカスタマイズされていると言つても、ベースは量産機のまま。多少束が手を入れてるだけで、限界は存在する。

構えている長刀も然り。所詮は量産品のカスタマイズ品だ。対して相手は……ほぼ未知に近い反応に、『此方が反応できない』速度に、移動方法。

どうする、そう考えていた時。

「……………(っ)ほっ、(っ)ほっ」

空に浮かぶ白い少女が咳き込んだ。『何だ……？』と思い、ハイパーセンサーで拡大し、確認した千冬は——血の気が引いた。

「おいッ……その血は、まさか」

「流石に無理し過ぎですかね……かなり辛いです」

紅。対峙する少女の瞳より遙かに濃い紅の液体が、その腕とISスーツを濡らして
て……その元は、彼女の口だった。

吐血。しかもかなりの量の吐血で、彼女の腕とスーツの一部は真つ赤な状態だ。

それだけではない、別のある理由が——千冬のリミッターを外させた。少女の目の焦
点だ。それが、ブレている。此方を見てはいるが、恐らく正確には捕らえていない。

「ま……多少無理してでも、逃げられれば御の字、ですかね」

「——先に言っておくぞ」

目を伏せ、息を吸い、千冬は長刀を両手で正眼に構えると言った。

「痛いぞ。許せ」

瞬間、千冬は加速した。ISの性能なんて無視した、無理矢理な加速。

(……もつとだ。もつと速く)

打鉄からは警告音が聞こえるが、そんなものは無視した。ただ早く、鋭く、一撃を相
手に叩き込むために加速する。

(二度はいらない、一撃でいい——だからもつと速く！)

加速する。打鉄からは警告音の他に何かが軋む音も聞こえたが、それすらも無視し
た。身体への違和感も感じた。だが、それもまた無視した。

「……………ふっ！」

高速の一閃。それに少女も対応して、千冬ですら反応が困難な限界突破瞬時加速の加速で死角へと入り込み攻撃を叩き込もうとする。

「……………うそ」

「——確かに速い、ああ私でも見えないさ。だが……………」それは悪い癖だな”。もう捉えた」

少女は驚いていた。反応できないはずの速度、相手を上回る反応速度。それがあれば相手が世界最強でも逃げられると思っていた。

しかし、それは甘かった。この時点で少女は負けている。”逃げよう”と思った時点で、終わっていたのだ。

「貴様、その特殊な移動方を用いての死角からの攻撃……………癖だな？」

「ッ……………」

捕らえられていた。速度、反応、機体性能。ほぼ全ての面で有利のはずが、少女は織斑千冬という存在にたった少しの戦闘時間で理解され、捕らえられていた。

再び限界突破瞬時加速。距離を取り少女は両手に武器を構えると最大加速で再び攻勢に出る。

しかし、

「言つたろう。もう……捉えた、と」

「まだツ……まだやれ——こほっこほッ!」

べちやり、と。ほぼ罅迫り合いの状態で咳き込んだ彼女の口からは、先ほどとは比べ物にならないくらい血が吐き出され、その一部が千冬の打鉄の一部を染める。同時に。少女が纏うISの背部にある非固定浮遊部位から展開されていたエメラルドのエネルギーウイング、それがどんどん小さくなっていく。

「そんな、時間切れ——?」

東は言っていた。『今すぐその子を止めろ』と。

そこから千冬は多くの考察を行った。その中の1つが……あの加速は、無限には続かない。

続けられるわけがないのだ。自分でも追えない程の速度を無限に続けられるとすれば……それは、既に人間ではないか。機械か。故に時間切れ。もうこの少女は……この局面で先程のような加速を行えない。

「私は、まだツ——あ……」

「……なっ、おい!」

いきなり少女のISが解除された。それと同時に落下する彼女を千冬は慌てて受け止める。鼓動はある。生きてはいるらしく、どうやら気を失っているだけのようだ。

抱きとめた少女を見れば、やはりまだ子供と言つていいような容姿だった。白のセミロングの髪に肌。年齢も見た目から恐らく15か16くらいだろう。

「……何が、この子をそこまで駆り立てた」

千冬の中に生まれたのは、疑問と憤りだった。どうしてこんな子供があんな醜い感情を露わにしなければならなかったのか、ISを一般的な教義ではなく……殺人や制圧のために使わなければならないのか。

「束」

『はいはい束さんです。ちよつとちーちゃんそのままその手、その子にあてたままにしててね —— うん、生きてはいるけどこれは酷いね』

「……そんなにか」

『ちーちゃんが与えたダメージが原因じゃないよ。多分……限界突破瞬時加速をあれだけ多用したから。内臓器官の損傷がひどいね』

「助かるか」

『モチのロンで倍満だよ』

その言葉に安堵する。それと同時に気になるのは、この少女のことである。

「今からそちらに戻る。多少ゆつくりにはなるが」

『はいはい了解、じゃあ束さんは治療とか諸々の用意でもしておくねー』

「束」

千冬の真面目なトーンの言葉。それに対してモニターの中の束は手を止めた。

「この子について、何か知っているのか？」

『……分かった、という方が正しいかな』

「どういう意味だ」

『……それについても、多分すぐわかると思うけど。そうだね、言えるとするれば』

『束さんは、限界突破瞬時加速を実現に向けて開発していた人を、二人しか知らない。そして——もしこの予想が正しければ、きっと恨まれるのは私だ』

R e s t a r t

「……知らない天井ですね」

昔、幸福だった記憶の中で見たことがあるアニメで言われていたような台詞を私はつい呟いていた。

頭がぼーっとする。手足には上手く力が入らず、動きにくい。

「どうしたんだっけ、私——」

確か、ドイツの研究施設の施設長がかなり違法研究してるって聞いて……もしかしたらと思って、襲撃を掛けた。

案の定迎撃されたけど、それを制圧して施設長には会えたけど——結局、あのISについては知らなかった。

その後、確か……ああ、そうだ。

「織斑千冬が居て、戦闘になって……それで私、」

それ以降の記憶がない。戦闘になって……逃げるために『あのシステム』を作動させたところまでは覚えている。

どうなったんだっけ……そう考えていると、今私が横になっているベッドがある部屋

の扉が開かれた。

「やあやあおはよう。身体の方は大丈夫かな？」

「……篠ノ之束。なるほど、つまり私は織斑千冬に負けた、ということですね」

状況は最悪だ。なんとかして逃げないといけない、私の目的のためにも。

そう思い首に手をやるが……そこには、いつもあるべきものが存在していなかった。

「君のISなら、今こっちで預かってるよ。損傷も消耗も酷い状態だったよ、最低限のメンテナンスしかしてなかったね？」

「う……」

凶星だ。定期的にある施設でメンテナンスは行っていたものの、フルメンテナンスは一切行っていない。我ながら機体には悪いことをしたと思うが。

「それに、逃げられたら困るし——話も出来ないからね」

「……話？ ご冗談を。貴女が身内以外に対してはモノのような扱いをするのは知っています、私もどうせ何かに利用するために捕獲したのでしょうか？」

篠ノ之束は人見知り、というより興味を持ったものにしか関わらない。それは世界的にもよく知られていることだ。

少なくとも私は彼女は面識がない。赤の他人だ。つまり……こうして生かされているのは、何か理由があるのか、利用するためか。

……利用されるなら舌でも噛み切ってやろうか。きつと苦しいんだらうなあ、死ぬるかはわからないけど。

恐らく後者だろうと私は思ったのだが……この後の言葉で、それが覆された。

「フィリス・エーヴェルリツヒ。……この名前に、聞き覚えは？」

「ツ……」

その名前が出た瞬間、私の心臓が跳ねた。恐らく眼は驚愕で見開かれていることだろう。

知らない訳がない。だって、その名前は……私の、ママの名前だから。

「……知ってるってことでいいのかな。じゃあ次、アルベルト・エーヴェルリツヒ。この名前は？」

知っている。それは……私の、パパの名前だ。

けど、どうして？ どうして篠ノ之束がパパとママの名前を知っている？

「最後の質問だよ。君は——二人の、子供？」

声が出なかつた。ただ混乱する頭を整理するのに必死で、だから私は——その質問に對する肯定として、首を縦に振った。

「……そつか。先に言うと、束さんは君をどうこうするつもりはないんだ」

「え——私を利用したりとか、解剖したりとか……そういうのが目的じゃ、」

「まあどうでもいい他人ならそうしてたかもね。けど……『君は他人じゃない』。というか東さんは味方だから、安心していいよ」

……どういふことだろうか。てつきり私の中では、篠ノ之束に捕獲された段階でもうすべてが終わったと覚悟していた。

にも関わらず、味方？

「……あの、その」

「混乱してるね？まあ無理もない。んじやあ大まかに説明していくけど、わかんないとあつたら聞いて」

黙って私は頷いた。それに対して篠ノ之束は、『よろしい』と。報道されている内容が嘘のような笑顔で返した。

「長くなるよ。まず発端は、東さんがI Sの基礎理論を学会で発表する前からなんだ」

そうして私は聞かされることになる。もういない、パパとママの昔の話に——私が知らない、過去の出来事について。

「……信じられないです、正直」

「でも、今話したことは全部事実だよ」

かなり長い時間話していたようにも思える。この部屋に時計はなくて、どれくらいかなんてのは正確にはわからないが。

わかったことは幾つかあるが、本人としても最初にハッキリさせておきたいということがあったらしい。

篠ノ之東……本人からはフルネームは嫌だから適当に呼べと言われたので、現在は『東さん』と呼んでいるが、東さんは敵ではないということ。

私の生まれはドイツで、両親は研究者だった。幼い頃の私は両親の研究についてよく知らなくて……その研究内容を知ったのは、“あの事件”の後だった。

両親が研究していたのは、宇宙工学に関係することで……非公式にはあるが、ISの研究開発にも関係していたらしい。その研究において両親は幼少の頃の東さんと面識があったらしい。ISの基礎理論の一部には両親が関わったとも聞かされた。

他にも色々な話を聞かされた。とにかくわかったのは、東さんは敵ではないこと。理由は話してくれなかったが、両親とは深い縁があるらしく出来るだけの助けにはなってくれと申し出てくれたこと。

「さて、東さんから話せることは大体話したよ。質問も色々あるかもしれないけど、次は君の事を話してくれるかな」

「……私、ですか」

「そ。まだ東さん、君の名前も知らないんだよ？まずはそこから教えてくれないかな」

「私は、リース。リース・エーヴェルリツヒといいます」

リース・エーヴェルリツヒ。それが私の本名だ。けれど……本名を名乗ったのなんて、いつぶりだろうか。

今の生活をするようになってからは一度もないと思う。最後に名乗ったのは……きつとまだ、幸福だったあの時。

「——銀の髪はアル博士、紅の瞳はファイー博士譲りだね。うん……よく似てるよ。娘が居る、とは聞いていたけどまさかこうして会うことになるなんてね」

「……私も、東さんが両親と面識があつたのには驚きです」

「やっだなーもー、もつと砕けた口調でいいんだよ？東さんは気にしないむしろウエルカムー……さて、ちよつと真面目な話になるけど、」

東さんはそこで、私を見た。笑顔だが眼は真剣だ。

「リーちゃんでもいいよね。リーちゃんが今の今までずつと何かを探していたのは……3年前の事件と、関係ある？”わざわざ完璧に戸籍とかの情報を全部消してまで”すべきことか、何かあつたのかな？」

3年前。世間では第二回モンドグロツソだとか、決勝戦で織斑千冬が棄権しただとか

で騒がれたあの年。

私にとつての全ての始まり。あの日の夜の惨劇——それで全てを奪われた。

思い出そうとすると、かなり辛い。3年前の誕生日、あの日は……パパとママと一緒に、ドイツ国内にある自宅で誕生日を祝ってもらっていた。

その時に渡されたのが……私の専用機。当時は何なのかはわからず、『お守りだ』とか聞かされなかった私はそれを無邪気に受け取った。

幸せな時間。家族。それを壊したのは、一発の銃弾だった。

足を撃たれて、それでもなお私達を守ろうとして。逃がそうとしてくれるパパ。ママに連れられた私は、そのまま有無を言わずに床下に続く階段へと押し込まれて『絶対に出ちやいけない』と言われた。

……当時は怖くて考える余裕もなかったけど、今思い出すと本当に地獄だ。

地下に隠れていても音は聞こえた。拷問でもされているのかのような、パパの声。何かを聞き出そうとするような女性の声と下種な男の声に、ママの悲鳴にも似た声。

そして。

突如として轟音と、衝撃が響いた。その後、男たちの声や、女性の声も聞こえなくなった。

……見れば、地下への階段を封鎖していた扉は壊され瓦礫で封鎖されていたが——隙

間から、外が見えた。当時の私はそれで全てが終わったのかと思い、その隙間を覗いてしまった。

そこから見えたのは、下半身がないママの姿と、頭のないパパの姿。ヒトからモノになった、両親の姿。

そして佇むように——真っ赤に染まったブレードを持つ『金色のI S』が、燃え盛り、瓦礫となった私の自宅の上空に存在した。

……これが、私の復讐の始まり。全ての始まり。

事情を話すと、束さんは考え込むようにしていた。

「……なるほど、そういうことだったんだ。実は3年前の事件——束さんもよく知らなかったんだよね。私も詳しく調べようとした、けど……その時にはもう情報が隠蔽されて、その隠蔽された痕跡も探そうとしたけど何も見つからなかった。完全に消されたみたいだね」

世間的にはあの事件は市街地でのテロということになっている。テロリストが市街地で暴動を起こして、それを軍が制圧したと報道された。

しかし、私は当事者で……何が起こったのかをある程度見ている。ニュースでは生存者は居ないと報道されたが、私は生きている。

「束さんも大天才だけど、神じゃない。限界があるのは知ってるよ、でも……私にすら見

つからなくらいに徹底して痕跡を消していた。ちよつと驚くよね。それで、その時に見た金色のＩＳ。それをリーちゃんは追つてると」

「肯定です。あのＩＳをなんとしても見つけ出して……復讐したい」

「金のＩＳか。うーん……一応、カラーリングが金のＩＳに乗ってる知り合いならいるんだけど——話を聞く限り、多分リーちゃんが探してるＩＳじゃないんだよね。それに３年前なら、そのＩＳはまだ存在していない筈だし。他に金色のＩＳなんて東さんも知らないし、コア・ネットワーク監視してる限りでも見たことがない。ちよつとそれは、私も気になるね」

一瞬、金色のカラーリングの機体なら見たことがあるという言葉に驚いたが……どうやら違うらしい。

しかし——東さんはＩＳの生みの親だ、その人でもわからないあの金色のＩＳは、一体何なんだろうか。

「ＩＳについてはわかんない。けど、」

そこで東さんは言葉を切った。その後……申し訳無さそうな顔をして。

「……博士達が狙われた理由。それには、心当たりがある」

「——え？」

私は３年前の事件のことを詳しくは知らない。ただずつと、あの金色のＩＳへの復讐

だけを考えて過ごしてきた。

事件についても調べたし、そうなった理由も調べた。けれど……何もわからなかった。

「先にいうと、リーちゃん。東さんのこと……恨んでいいよ」

「どういう、意味ですか」

「博士達が殺された理由、それを作つたのは……東さんだと思うから」

◆ ◆ ◆
暫くの静寂が部屋を支配した。私はどうにか言葉を絞り出して、聞いた。

「それは、どういう意味ですか」

「……限界突破瞬間加速（オーバードリミット・イグニッションブースト）。君がちーちゃんとの戦闘で多用していたあの加速。あれが本来何なのか、知ってるかな」

あのシステムを見つけたのは、誕生日に貰ったネットワークレスがISであると気がついた時だ。使えるものは使う、そんな思いでいたが……あのシステムだけは、内容を見るだけでぞつとした。

だから、緊急時にしか使わない。そう決めていたのだ。

「君の両親。アル博士とファイ博士は、元々は宇宙工学を専門とした研究者だったんだ。

人が宇宙に進出するための研究。東さんと君の両親が出会ったのは……ある種、偶然だった」

どこか懐かしむような、そんな眼で東さんは続ける。

「私には夢があった。その為にISの基礎理論を提唱して、”宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ”というテーマで学会で発表した。けれど……評価は悲惨なものだった。誰ひとりとして見向きもしなかった、『子供の夢物語だ』と言って馬鹿にされてね。そんな時……唯一研究内容をまともに見てくれたのが、君のご両親。他の凡人や馬鹿と違って、あの二人は——私の研究を理解してくれた。本当に嬉しかったよ」

ISの基礎理論と、篠ノ之束による学会での評価については知っていた。その内容が認められなかったことも含めてだ。

……世界は東さんを認めなかった。にも関わらず、あの事件の後『利用価値があるから』といった理由で手のひらを返した。

「話が逸れた。限界突破時加速、あれは——東さんがISの機能として想定していたものじゃないんだ。あれの理論と基盤を作ったのは、君のご両親だ」

「パパと、ママが？」

「重力下。つまり地球の中ではなく、宇宙に進出した際に広大な宇宙を探索したり移動

するために考え出されていたのが限界突破瞬時加速。けど……問題点が幾つもあった、実用段階にはまだ至っていないかった筈なんだ」

「でも、それとどうして狙われたのかっていうのは、」

「……限界突破瞬時加速のシステムや理論の開発を二人にお願いしたのは、東さんなんだ」

心臓が跳ねた。つまり、その研究開発が理由でパパとママは狙われた可能性がある――
――？

「私は当時、ISの開発とコアの作成でかなり手が空かなくて……それで、ある日『宇宙に行つた後のことも考えなければいけないのに』って愚痴つたんだ。そしたら、」

――『じゃあ、その先のことは私達で考えましょう。私達元々宇宙工学の専門家だから。ね、アル？』

――『……そうだな。研究者としても、こんな面白いことはないかもしれないな』

「その後、限界突破瞬時加速についてや、他の研究進展については時々連絡を受けてたけれど……そんな中で、あの事件が起こった。今のISの有り様は、知ってるよね」

「……はい。アラスカ条約で軍事利用は禁止されていますが、それは大衆への建前。実際は軍部への配備、テロでの利用がされています。私も、目的のためにそんな使い方

をしてみました」

「ねえリーちゃん。銃は、何の道具だと思う？」

不意に。そんな質問が東さんから投げられた。

難しい質問だ、そう考えながら——私は、

「……人によります。戦争などで使うなら、人殺しの道具でしょう。ですが本質は鉛を撃ち出すための道具、だと思えます」

「やっぱり二人の子供だね。本当に頭がいい。今のI Sも、それと同じだよ。本来私は『宇宙進出』を目的としてI Sを作り出した、人が自由に空を飛べる。そんな未来を願ってね。けれど……多くの欲ある人間や大衆によって、それは捻じ曲げられた。最初はそんな目的じゃなかった、なのに誰かがそうさせるキツカケを生み出してしまった。……本当、そうさせた馬鹿は救いようがない大馬鹿だよ。結果として、今では何かを成すためにも守るためにも、そういった用途として作るしかなかった」

この人を見ると、自分がどれだけ小さい存在なのかと思いきや知らされる気がした。

……パパとママは、こんな人と夢に向っていったんだ。

「だから、リーちゃん。いや……リイス・エーヴェルリッヒ。君は東さんを恨んでいい、憎んでいい」

そう返された言葉に対しての私の答えは、決まっていた。

数ヶ月後、私の姿は日本にあった。

日本国内の、ある種現代社会では有名な学校——I S 学園だ。

私は、東さんを恨んではない。むしろ、東さんと千冬さ……織斑先生には感謝しているくらいだ。

……本音を言えば、あんな生活がいつまでも続くとは思っていなかった。資産的な問題ではない、精神的な問題だ。

一切の手がかりも進展もなく、ただ闇雲に私は3年間あの金色のI Sを探し続けた。その中で、手がかりらしいものを見つけてもそれはどれも金色のI Sに繋がるものではなかった。

諦めない、そんな思いがあっても……心がすり減っていたのは事実だ。そんな中で、金色のI Sの事ではないが——両親の過去や繋がりを知れて、助けられて。それに私は安堵していた。

東さんに保護されてからは、色々なことがあった。クロエという少女と出会ったこと、自分の知らない両親のことについて多くのことを話してもらったこと。

私がI S学園に行くことになったキツカケは、突然訪れた。言っておくなら、東さんはこの件について一切関与していないらしく……情報を知った時珍しく驚き、暫くフリーズしていた。

——世界初の男性操縦者が、見つかった。名を……織斑一夏と言った。

少年と少女

世界初の男性 I S 操縦者、織斑一夏。

I S を世界で初めて動かした男性と言う事で、その話題は一瞬で世界中に飛び火した。

マスコミは騒ぎ立てて、政府は慌てて彼を保護しようとした。

だがそれはあくまで建前上。日本で世界初の男性操縦者が見つかったのだ。当然だが、日本政府はそれをキープしてモルモットか、首輪をつけたい筈だ。

——例えば、どうしてこうなったんだろうな。

ふと、己の現在の状況を振り返り、不幸だと感じる。

振り返ってみれば本当におかしな話だ。自分は確かに藍越学園の受験会場に向かっていた。

ちゃんと場所も確認したし、時間も前日に確認済み。試験会場は市営のそこそこ大きな会館で、注意書きとして『同会場で I S 学園の試験も実施する』と書いてあった。だから俺は、男の自分には関係ないと思いつつもそれを頭に入れて、会場を間違えないようにも注意していた筈だ。

試験当日、俺はちゃんと時間に余裕を持って会場に到着して、藍越学園の試験会場に向かった筈だ。

思えばあの時おかしいと思うべきだったのだ。

『えーつと……試験会場はこつちか。時間もまだ余裕あるし、試験前にもう一度予習くらい出来るか……よし、それじゃあ気合入れて——』

『ああ、君。その君ー。試験会場はそつちじゃないよー、あつちこの曲がり角左に曲がつて突き当たり』

『あの、俺藍越学園の受験生なんです……向こうつてIS学園の、ですよ？俺男ですよ？』

『知ってるよ、会場変更になったの聞いてない？ちよつとトラブルがあつてねえ——実は受験生の待機室は変更になったんだ』

『……？ そうなんですか、わかりました』

『いえいえ、それじゃあ頑張つてね。——織斑一夏君』

もし、事前に変更があつたなら事前に告知が郵送なりなんなりで連絡されている筈だ。

なのにそれが無かつた。当日にいきなり変更になりました、というのは無い話では無いのだろうけど……おかしいと思うべきだった。その後はもうなるがままだった。言

われたとおりに俺はその部屋に入ってしまった、真つ暗な部屋の中に——量産型 I S、打鉄を見つめる。

やはり違うじゃないか、ではあの人はなんだったのかと思ったが……俺は、興味本位でそれに触れてしまう。理由は単純だ、我ながら馬鹿だったと思う。佇むように置かれていたその周囲には、『立ち入り禁止』『触れるな』というテープが張られていたのだ。そんな事を書かれていれば、触りたくなるのが常というもので、それでつい……どうせ意味無いだろうと思つて触つてしまう。

それがいけなかった。見事 I S は起動、起動して何がなんだか分からなくなっている所に I S 学園の関係者の人達が現れて、そのまま後はなるがままだ。

結果として俺は、世界初の男性操縦者という事で……藍越学園ではなく I S 学園へと通うことになる。

「どうして、こつなつたんだらうなあ……」

災難だ、そう思う。

I S 学園への進学に当たつて学費やその他の費用の全ては政府が負担してくれるという話で、しかも返還も必要ないという話であつた。

普通に見ればこれほどおいしい話はないだろう。I S 学園は俺でも知っているが、超一流と言つても過言ではないほどの学園であり、何より世界各国が関る世界的にも有名

な学校だ。

当然だが、学費だって馬鹿にならない。それこそ、一般家庭の親がそれを見たらまず金額を疑うレベルだ。ＩＳ学園が推進している奨学金制度や、もしくは金持ち、何かしらのバックアップがないと到底払える金額ではない。そんな自分でも桁がおかしいと思えない金額の修学費に、その他費用まで無償で出してくれる——ただの馬鹿なら美味しい話だと思おうだろう。

だけど、タダほど怖いものは無いと言う。

要するに、政府は俺にモルモットになれとっているのだ。モルモット、もしくは飼いや犬になれと、そういうことなのだ。

考えても見れば、世界初の男性操縦者で、俺はただの一般人で後ろ盾なんて無い。そりゃあ……千冬姉という人間が居るが、あれは別だ。

千冬姉は凄いと思うし、尊敬もしている。だけど——常識的に考えれば、一個人が一人をもし政府や世界から守るとしたら、きつと一人の力では無理だろう。

もし、政府が俺を捕まえておいた場合のメリットは？ 対して、デメリットは？ そう考えた場合……恐らく、俺に対して支払うと言っていたあの金額以上の元は取れるのだ。

例えば、諸外国への発言権。

例えば、世界初の男性と言う希少性。

例えば、極上のモルモットという存在。

恐らく、このまま政府の言うとおりにして、IS学園へと仮に進学したとして……卒業すれば、最高のキャリアが俺を待っているだろう。

きつと就職に困ることもないし、超エリートとしての人生街道を歩むことが出来るだろう。

そうすれば、千冬姉にも、もう苦勞を掛けることはないだろう。

いい事ばかりじゃないか、なのに——なのに。

どうして俺は、今こんなに苦しいのかな。

ふと思いつくのは、少し前……まだISなんてものを動かす前の出来事だ。

——『このオジサンに、身体を触られました』

店内にはそんな大声が木霊した。

深夜帯ということもあつてか、客は疎らであつたが居なかつたわけではない。店内に居た客は野次馬となり、女性と男性のところを集まつてきていた。

そこからは、女性客がただ大きな声で喚き散らして、男性客は意味の分からないというような表情でそれを見ていた。そして、それに対して反論しようとしなかつた。

当然だろう。いや、現代社会では当然だろう。IFの話をするなら、もしここで男性が彼女に対して反論していたら、そこで女性客が『この人を捕まえてください』と言えば、男性は逮捕される。そう考えれば、何も反論しなかった男性客の対応は正しいと言える。だが、結局の所反論しなくても女性客が一方的に言い散らして言論を通せば、彼は捕まるのである。つまり、どう足掻いてもなんともならないのだ。

俺はそれを見て……ホール担当で立ち回っていた作業を止めて、一連の全てを見ていた立場から二人のやり取りに割り込みを掛けてしまったのだ。

そして、第三者としての立場から言ったのだ『この女性の言ってることは言いがかりです』と。俺としては己の正義感から出た行動だったし、少なくとも男性客は助かったと言うような表情をしていた。

しかし、その正義感は裏目に出ることになる。自分が陥れようとしていた男性に対して、織斑一夏というイレギュラーが現れたことで女性客は激怒して、そのまま女性客と睨みあいとなってしまう。

結局、今にも喧嘩でも始めるのではないかという空気を破ったのは、店のオーナーだった。オーナーは女性客に対して必死に謝罪して俺に対して怒鳴ると、己も頭を下げた俺にも頭を下げさせた。

女性客は興が削がれたのか、それで満足したのかはわからないが、そのままオーナー

と俺に対して罵倒を浴びせると店を出て行った。

男性客には一言だけありがとうと言われたが、俺はバイト終了後にオーナーにこつぴどく怒られる事になる。そして自分がやったことに対しての落し前として、バイトの終了後にも仕事をさせられた。

自分がやったことを、間違いとは思えなかった。実際あの時の男性は何もしてなくて、一方的に女性が立場を利用して言いがかりをつけていたのだから。

間違った選択ではなかったと思う。けど……同時にとても理不尽だと、そう思ってしまった。

夜道を歩く、思えば散歩程度の気持ちだったのに結構遠くまで歩いてしまった。ふと見れば、自分の今歩いている海沿いの道からは……人工島でもある、IS学園が見えた。

自分が通うことになる、監獄とも言える場所。

ため息をつく。帰ろう、そう思った時――

「……………きゃっ!?!」

「つと、うわッ!」

人工島を見て余所見していたせいなのか。視線を道路に戻して歩き出そうとした瞬間……誰かとぶつかってしまった。

「ご、ごめんなさい！ちよつとぼーつとしてて……怪我とか無いですか!？」

セミロングの銀髪。そして紅の瞳に、冬服姿。外人さん、だろうか。

「いたた……あ、いえいえ大丈夫です。私もちよつと考え事してて不注意でした。——つて、あれ？」

目の前の少女が服を払うと立ち上がり、こちらを見ていた。なんと……外人の知り合いは居なくて、紅の瞳でこちらをジッと見られると緊張にも似た感覚がある。

「——織斑、一夏さん？」

何で俺の名前を知っているんだろうか——ああ、世界的にニュースであれだけ報道されれば知られていてもおかしくないか。むしろ、今まで過度な奇特の目で見られなかったのが運が良かったのかもしれない。

「えつと、なんで俺の名前を？」

テレビで見たからとか、そんな返事が来るだろうと思った。

「……相手の少女からは全く違う返答が返ってきて、」

「まあ、それもありますね。世界的な有名人ですから。ウーパールーパーもパンダもびつくり」

「ウーパールーパーにパンダって……いつの時代だよ、かなり昔の覚えがあるんだが」

「あはは、気にしない気にしない。実は、——君のことはある人から聞いてるんだ」

……ある人？

「でもまさか、こんな所で会うとは思わなかった。所で……何か悩み事？ 私も人のこと、言えないけど」

何だろう、初対面のはず……だよな。俺は、どうして彼女とこんなにも普通に話せるんだろうか。

昔会った事は……ない筈だ。というか生まれてから外人さんなんて会ったことほぼないし、恐らくヨーロッパ方面だろうか、その方面の知り合いも居ない。

……完全にペースに飲まれているような。けどまあ、

なんだろうな——今の俺は本当に、よく口が滑る。

「俺さ、知っているかもしれないけど……ISを動かしたんだよな」

「……知ってるよ。私はニュースを見た時一緒に見てた人と驚いてたから」

「ISじゃなくて、触れたら自販機が動いた——とかだったら良かったんだけどな」

「それは冗談か何かかな？あまり面白くないジョークだね」

「ああ、今時分で言って後悔したよ、はは」

暫くの沈黙が流れる。き、気まずい。

そもそもの話、なんで偶然会ったこいつに対して……俺は愚痴ってるんだ？

そんな事を考えていると、彼女は思い出したように持っていたスーパリーの袋からホツ

トコーヒーの缶を2本取り出すと、そのうちブラックのほうを俺に手渡ししてきた。

「……………えつと、いいのか？」

「まあ、これは貰い物だし。ただちよつと量が多くて。飲むの手伝つてくれるかな」

本当に初対面なのか、と思うくらいに会話ができる。

受け取ったブラックコーヒーは、既に寒さのせいで温いという状態になっていた。だけど、今の俺にとっては……………それが、暖かく感じた。

「……………愚痴っぽくなるんだけどさ、いいか」

「構わないよ。それに私は急いでいるわけではないし。実は妹……………みたいな子が自宅で待つてたりするんだけど、ゲームの罰ゲームで買い出しになったんだし待たせておけばいいと思う」

「中々酷いな、お前」

「褒め言葉ありがとう」

隣に立ち、サムズアップして返す少女を見て苦笑いするしか無かった。

「……………たまにさ、理不尽だつて思うことがあるんだよ。俺は——自分は正しいと思つたことをして、誰かを助けたつもりなのにそれを否定されて、護つたと思つたのにそれをまた否定されて、そして……………自分の人生の道すら、なんか否定された気がしてさ。そう考えると、たまに自分がわからなくなる。俺つてなんなんだろうな、とか……………自分が目

指そうとしたものは何だったのかな、とか……何もかもが理不尽に思えてしまうんだよ」

前の、バイト先でのこと。女性のやった行為を糾弾したこと。

自分が藍越に行こうとしていたのに、IS学園に行くことになったこと。

自分の人生は今、誰かに……誰かに首輪をつけられようとしていること。

その全てが……俺は、理不尽だと思った。

正義ってなんだろうな。

正しい事と正しくない事の境界線とは、なんだろうか。

幸福と不幸の判断の基準は、何なのか。

正直……俺は参っていたんだと思う。

数年前のある一件、俺はあの一件で……護りたいと思った。護るために強くなろう、そう思った。

だけど——その護るという意味合いは、一体何に對してだろうか。千冬姉か、自分の周り全てか、それとも大切なもの何もかもなのか。

俺は、全てを護りたい。大事なものは失いたくないし、護りたいから強くなる。強くなればそれができると、思っていた。

「カラスと書き物机が似ているのはなぜ？」という言葉を知っている？」
「……………え？」

自身の言葉に、言葉を返してきた彼女に対して——俺は意味が分からず、疑問する。

「……………いや、知らないな」

「うーん。そつか……………これはね、イギリスの数学者チャールズ・ラトウィッジ・ドジソ
ンがルイス・キャロルの筆名で書いた児童小説——分かりやすく言えば『不思議の国のア
リス』の物語の中で狂った帽子屋が言った一種の問いかけのようなもの。そして、その
答えは『どちらにも notes (泣き声、覚書)』が出せて、どちらもとても fl a
t (平板、退屈)』というのがよく知られている」

「……………なんか、深いな。その言葉」

「おお、君には分かるのか。私はこれは、人の人生そのものを表しているのではないのか
と思う。書物や書き物というのは、人生という物語。泣き声とは表現の方法。平板と退
屈は、まさに人生そのものだと思は思う」

「……………その、さ。俺は頭よくねえから上手く言えないけど——」人生は作り物の物語み
たいに、つまらないもの”って事か？」

「え、すごい頭回るように思えたんだけど。そうだね——人生とは、ただ歩むだけではつ
まらないもの。ただ歩けばそれは物語に沿って進むだけの、つまらない物語。じゃあど

うすれば、退屈ではなくなると思う?」

難しい問いかけだ。考えながら俺は思った。

不思議の国のアリス、というの俺も少しくらいは知っている。そしてその中でも、狂った帽子屋というのにはある意味では有名だ。奇妙な言動でアリスを困惑させる、というの……まるで今の彼女みたいだと思った。

……そういうえば、友人の弾がたまにゲームセンターでやっているゲームに登場する帽子屋の瞳も、この少女のように紅だったか。

「そうだなあ……自分の意思を貫き通したり、何かを成し遂げたりすること、抗うこと、かな。だってそうすれば——少なくとも、人生は退屈じゃない」

そう解答すると、ふっと隣の彼女は笑った。

「何だ、君はもう答えは出ているじゃないか」

「——答えは、出ている?」

彼女はそのままフェンスに寄りかかっていたのをやめると、再び歩き出した。

「そこまでわかってるなら、後は……自分次第じゃないかな?……ま、私も人のこと言えないけど」

最後の言葉だけが聞き取れなかった。

答えは出ている、それは……どういう意味だろうか?

考えていると——彼女はそのまま歩き出して、去ろうとした。

「ま、待つてくれ！」

「うん？」

足を止めて、こちらを向く彼女に対して問いかける。

君は、何者なのかと。

「俺は——織斑一夏って言うんだ！お前は！」

彼女が目をパチクリとさせて、笑うのが見える。

それはどこか楽しそうで、切なくも思えて——

「変な人だね、君は。名前はさっき聞いたよ」

「む……だがお前にだけは変とか言われたくな——」

「リース。リース・エーヴェルリツヒ」

振り返った少女は笑顔で、そう返してきた。

「その、また会えるか？」

「……会えるよ。必ずね」

その言葉に対して、俺は頭が困惑して……どういうことだ、そう問いかけようとしたときには、彼女はもう遠くまで歩いていった。

後に思えば、とても奇特な出会いだったと思う。

そうして、時を流れる。とうとう俺が、I S 学園に入学する日がやってきたのだ。

I S 学園

季節は春。新入生だとか新社会人だとか、世間体ではそれをフレッツシユと題して色々と言われる時期。街を歩けば入学シーズンだとか新社会人デビューだとか称してスーツとか生活用品を売っているのをよくみかける。外国ではあまり見なかったんだけど、日本のこういうのを見ると商魂逞しいと思う。

そんな春。私の姿はI S学園の廊下にあつて、千冬さ——織斑先生と廊下を歩いていった。

「……まったく、せめて入学式くらいまともに出れんのか」

「いや、本当に申し訳ないです……思いの外、私も束さんも準備とかがグダグダになります」

何で私がI S学園に居るのか。それには事情が幾つかある。まず、先生の弟さん——織斑一夏さんがI Sを動かしてしまつたからだ。そりやあもう私も束さんも驚いた。束さんは関与してないらしくて、彼がI S動かしてからは暫く大変だった。

先生からの諸々のSOSに、束さんが動かした理由を説明しようとして躍起になつたり。後、詳しいことは知らないけど色々隠蔽工作したり。その過程において、私の話題

が出た。

『ところでリーちゃん。君は義務教育とかそのあたり受けてるの?』

『独学で I S 専攻の大学課程までは勉強してましたが……えっと、東さんなんて悪い笑顔になってるんですか?』

『やっぱり天才だねえ。東さんの助手できるだけある。でも——学生生活は経験してないんだよね?』

『……そうですね。3年間、ただ復讐のために動いてましたから』

『よし。じゃあ諸々ついでにリーちゃん、I S 学園入学ね』

そんなことがあったのが数ヶ月前。つまるところ、私が I S 学園にいる理由は……『理由はまだ分からないが、I S を動かしてしまった織斑一夏さんの護衛』。『学生生活経験していないなら社会勉強だからついでに経験してこい』。そして……『もしかしたら、私が探している手がかりが掴めるかもしれない』からだ。

I S 学園とは、世界中の I S 関係者や代表候補生が集まる場所でもある。そんな環境下かつ……原因不明で I S を動かした織斑一夏さん。もしかすると、何か手がかりが掴めるかもしれないということだ。

現在私は保護者が束さん。後見人がドイツのとある人で……ドイツのその人からは特に学校に行くことを勧められた。束さんや、その人には保護されてからお世話にな

りっぱなしで恩には報いたいという気持ちもあつたし——もしかしたら金色のISについても手がかりが得られるかもしれない。そんな事情で、私はIS学園への入学を決意した。

「しかし、クロエは間に合つたのだろうか？何故お前は間に合わなかつた——ああ、そうか専用機か……」

「私はいいつて言つたんですけど、束さんが聞かなくて」

「当たり前だ馬鹿者。あんなシステムをリミッターなしで搭載しておいたらまたお前は使うだろう……」

「あんなのポンポン使えませんよ。織斑先生は知つてると思いますが——あれ使つた後の反動、とんでもないんですから」

「ああ知つてるさ。だから出来れば二度と使うな、命に関わる」

入学に当たつての問題のうちの1つが私の専用機……両親が残したISだった。保護されてから、私の専用機について束さんに調べてもらつたのだが……調査を終えて、束さんはなんとも言えない表情をしていた。

——『何このIS。第三世代にしてはスペックがおかしい？それにこのフレームの素材……いやまさか、そんな』

結論から言うと、私の専用機は世代が不明らしい。また東さんをもってしても不明な点が多く存在しており、特にフレームと背面非固定浮遊部位についてはまったくわからなかったとのこと。

何より、私が先生との戦いで使用した限界突破瞬時加速を作動させるシステム……東さん命名『セラフ・システム』は危険過ぎること東さんから嚴重にロックとリミッターが掛けられた。

……私としてはあれを頻繁に使用するつもりはなかったもので別に大丈夫だとは言ったのだが、博士が『絶対使うからだめ』と言って時間を掛けて制限をかけた。

また、私自身今まで使用するだけで専用機の名前なども一切なかった。これを聞いた東さんは結構ご立腹で、クロちゃん……クロエと共に色々名前を考えたらしい。結果として、私の専用機の名前は『ヴァイス・フリーゲル』という名前になった。特に深い意味はないらしく、機体の見た目と背中の中非固定浮遊部位から想像して考えたとか。

とまあ、専用機関係でかなり時間を食って私自身も I S 学園への入学にあたり……一度ドイツに戻ってある人に会いに行った。

流石に書類の保護者記入欄に『篠ノ之束』と書くのはまずく、また先生の名前を書くわけにも行かない。東さんからは『偽造しよつか？東さんならちよちよいのちよい』なんて言葉も出たけど断った。いや、色々まずい。

そこで、ドイツのある人……パパやママの恩師だった人に数年ぶりに会いに行つた。戸籍や諸々の情報を完全に隠滅して、そんな中私の事情とこのISのことを知っている人だ。

……いやまあ、かなり心配されたし怒られた。それでとりあえず今は東さんのところに居ることを話して、事情も話して後見人になつて貰えないか頼みに行つたりしていた。

「それで、問題の方は全部解決したのかエーヴェルリツヒ」

「時間はかかりましたが、大方は。専用機の方も東さんが再調整とカスタマイズして下さつて、最終調整も終わつてます」

「入学式に遅刻したこと以外は、問題なさそうだな」

「あはは、本当に申し訳ありません……。ああ、そういうえば——」

そこで私は、ふと思ひ出したように先日の話をした。

「この前、先生の弟さんと話しましたよ」

「何？ どこで一夏と知り合つた？」

「ちよつと夜中に買い出し行つてたら偶然公園で。やましいことはなかつたので安心して下さい。というか私、そういう事しません」

「……まあ、お前がそういう奴でないことは知つてるさ。それで、弟は何か言っていた

か」

「——悩んでるように見えました。まあ、私が言えた事じゃないですけど」

あの日、あの時。私は日本での住居にクロちゃんと居て、ゲームの罰ゲームとして外出していた。

その帰りに偶然、織斑一夏さんと会った。彼のことは東さんから聞いていたから……少し、話してみたくなかったのは事実だ。

特別な感情なんてのはない。だけど、彼から感じたのは……迷い、悩み。そんなものだった。

「……そうか。一夏には苦労を掛けていると思うさ、私も。エーヴェルリッヒ、よければあいつと仲良くしてやってくれ」

「いや私、彼とはそういう関係ではないので」

「なんだ気があるのか？一夏はいいぞ、気が利いて度胸もある。家事も料理も出来る」「あー……なんとなく先生が生活面駄目になった理由、わかりました」

絶対彼のせいだろうと思う。世間では完璧美人とまで言われ、更に世界最強と言われるブリュンヒルデがプライベートになると完全にダメ人間なんて誰が考えるのか。最弱無敗とはこのことか。あれ、最近どこかでそんなアニメをクロちゃんに見せられたよな。

そんなこんなしているうちに、いつのまにか1年1組の教室前に到着。

「さて、では私が呼んだら入ってこい。その時に自己紹介してもらおうから考えておくように」

何はともあれ、これから大変そうだな。

学生生活に、東さんからの依頼。それに——あの金色のISについても、だ。

入学式も無事終わり、現在はSHRの時間で、自己紹介の真つ最中だ。

入学式の時もそうだったし、今もそうなのだが……本当に、この好奇の視線は耐えられない。IS学園への入学が確定した際に、自身の親友でもあり、悪友でもある五反田弾は

『「夏ツ！お前IS学園とか、周りはお嬢様とか可愛い子しかいねえ男の楽園（ばらいぞ）じゃねえかよ!?! くそおおお！俺と代わって欲しいぜ!」』

等と叫んでいたが、もし代われるなら本当に代わってやりたい。

少なくとも俺は、こんな好奇の視線には耐えられないし、それで興奮や悦びを覚えた
りしない。

あの馬鹿……弾はそんな性癖の持ち主なのだろうか？もしそうなら、交友関係を見直すべきだと考える。とにかく、憂鬱だ。初日からこんなに疲れるとは思ってもいなかった。本当にこれから大丈夫なのか俺。

先程から、見覚えのある姿。数年振りに見たが、すぐに彼女だと分かった人物、篠ノ之箒に対して助けを求めるように視線を送ったが、同情の目線を返されるだけで助けてくれることは無かった。

ああ、6年ぶりに再会したというのに、それはないんじゃないだろうか。まだ会話すらしていないけど。

「では次ですね、織斑一夏君。自己紹介をお願いしますか？」

「は、はいッー！」

S H R を進行していた山田先生、だったか。先生が自分の名前を呼んで自己紹介を促してくる。席を立ち、教壇の前まで歩いていく。気分はまるで……死刑執行を待つ死刑囚だ。

しかし、本当にここで人生の回答、即ち自己紹介を失敗させると、恐らく I S 学園で過ごす3年間、なんと言われ続けるかわかったものではない。

前に立ち、頭を高速で回転させる。確か、昔弾がやっていたゲームでは主人公が思考している間は世界の時間が全て停止するというゲームがあったが……あれは、本当に名

作だったと思う。

そして今、本当に。その能力があればよかったなどと、現実逃避するが、きっとそれは無駄なことなのだろう。

さて。

息を吸う。覚悟を決める。

何かインパクトのある自己紹介がいいだろうか？ それとも、最近流行の『チョリース』なる単語を使う若者のような自己紹介がいいだろうかとも考えたが……

ここは王道で、シンプルに行こう。そう決意する。

自分に集中する、全ての好奇の視線の中で、再び息を吸い——

「ええと……初めまして。織斑一夏です、趣味は……特にありませんが、強いて言うなら剣道を少しやっていました。特技は家事全般です。よろしくお願いします」

——よしッ！

完璧だ。

王道かつシンプルで、特に暗い奴や根暗などと言うレッテルも貼られなければ、自己紹介でやたら目立とうとした奴という事も言われそうにない、典型的な自己紹介。

これなら文句あるまい。おお、箒がこちらに対して何かサインしてるぞ？ あれはサ

ムズアツプか。はは、そんなに褒めるなよ。

……あれ、未だに好奇の視線が止まないのは何故でしょうか。

おかしい、自己紹介に問題は無かった筈だ。筈だつてグツジョブのサインを出していた。

それなのに何故、『で？ 他に何かあんだろお前？』みたいな視線で俺は今見られているんでしょか。

か、考えろ織斑一夏。こんな時どうする？ もしライフカードがあるなら、どれを切る？ むしろ、このままオー人事オー人事と言いながら逃げたい気分だ。

「自己紹介くらいはちゃんときるようだな？ 愚弟。だがしかし……ちゃんとしめなければ墓穴を掘るぞ、この馬鹿者が」

パアン！という音が響くと同時に、頭に激痛が走る。

この見事なツツコミ、そしてこの痛みには覚えがある。

振り向くと、そこに俺の窮地を救ってくれた人物が立っていた。それは、己が良く知る人物であり――

「呂布トールギス!?!」

「誰が某ロボットアニメ三国志の一騎当千の武将だ。私は少なくとも『魂イイイ!!』等とは叫ばん、この馬鹿者が」

「千冬姉!」

「学校では織斑先生だ、この愚弟が」

再びパン!という音が響き、激痛が走る。

し、しかしなんで千冬ね——織斑先生がここに?

確か月に数回帰ってくるかこないかのレベルで、仕事も何をしているのかわかったものではなかったから俺は二……

に、新潟にでも行っていたのかと思っていたが、まさかIS学園で教師をしていたなんて驚きだ。そして、自分の姉が読心術らしきスキルを持っていることにも驚きだよ、何で今俺が言おうとしたことわかったんだろ。あの睨みはちよつと怖かったぞ。

「あれ? 織斑先生、もう彼女の手続きは終わられたんですか?」

「ああ、なんとかギリギリ間に合ったらしい」

何の話だろうか?

そんな事を考えていると千冬姉が教室の生徒全員に対して

「さて、諸君。私が織斑千冬だ。私の仕事は君達を1年間で全く使えない穀潰しから、使える操縦者に育て上げることだ。ちなみに容赦もしなければ手加減もせん。徹底的に指導してやるから、覚悟するように」

そうして、教室内から挙がる黄色い声の数々。中には放送できないような事を言って

いる奴も居た気がするが気のせいだろう。俺は何も聞いてない。ああ、箒はやっぱり疲れたような顔してるなあ……俺も今疲れてる。完全に。

暫くして、やっとある程度黄色い声が取まった後に、千冬姉は呆れたように言った。「全く……毎年このような馬鹿達がよく集まるものだ。お前達はあれか？ マゾヒストなのか？ ……と、おふぎはこれくらいにしておこう」

あ、冗談だったんだ今までの。

「さて、お前達にお知らせがある。自己紹介の途中で悪いが、少し事情があつてな。手続きの関係上入学式に参加できなかった生徒が一人いる。その生徒の紹介をさせてもらいたい。……では、入ってきてくれ」

大変だなあ、と思いつつも俺はその遅れてきた入学生が入ってくるのを待つ。

そして俺は、目を疑って、驚きもした。なぜなら

「嘘……マジかよ」

自己紹介をしろ、と千冬姉が言ってそれに受け答えしている少女は。

白のセミロングに、紅の瞳。女の子にしては若干高めの身長。それは、自身にとってある意味ではよく記憶している少女であり。

「皆さんはじめまして。諸事情で入学式への参加ができませんでしたが、新入生のリース・エーヴェルリッヒといいます。出身はドイツで、」

自己紹介がよく聞こえなかった。それくらいに衝撃的だったから。現れた少女、それは……先日話した、あの妙に話しやすい少女だったのだから。

「ほへー……リイスって整備科方面志望なんだ。私達と一緒にだね」

「将来的には、ドイツの宇宙工学関係の研究所に行きたいなって考えたりしてま——こほん、してるんだ、私」

いけない。私の悪い癖がまた出そうになった。

どうにも私は、年上の人と関わるが多かったせい敬語になりがちだ。クロちゃんとかとは問題なく話せるけど、それ以外の人になると結構敬語になりがち。東さんやあの人からは直せって言われてるんだけど。

ちなみに私と一緒に東さんの手によりIS学園に叩き込まれたクロちゃん、クロエ・クロニクルは現在別の生徒達に囲まれている。ああ見えて彼女は人付き合いが上手い。

自己紹介や諸々の後の休み時間、私の姿は複数人とともに教室の机にあった。人数は私を含めて4人。先程、私に話しかけてくれた”相川清香”を筆頭に、数人集まった形である。

最初に私に話しかけてくれて、明るく元気な印象を抱くのは相川清香。I S学園に来る前は地元の有名理工系学校に在籍していたらしいんだけど、そのままエスカレーター方式で進学できる高校を蹴って、I S学園を受けたんだとか。

髪型をおさげにしている女の子なのに若干イケメンなのは谷本癒子。彼女は普通の一般中学に通っていたらしいが、適性検査でB判定が出てI S学園への入学が推薦されたとか。が、本人曰く希望したいのは技術系の進路。なんでも彼女の祖父が技術系の人で、それに憧れて育ったから自分のその道に行きたいそう。

黒髪ロング、顔の左側に赤いヘアピン二つで髪を留めているのは鏡ナギ。彼女も一般家庭の普通科中学だったらしい。が、適性検査でB+判定が出てそのまま進学。進学理由については話してくれなかったけど、恐らく家庭の事情。実家は老舗寿司屋。そういうえば日本に来てから寿司なるものを食べたことがない、機会があればお邪魔しようか。

私が整備科志望、というのは嘘は言っていない。第一目的は織斑一夏の周辺警護とあの金色のI Sの手がかりを見つけることだが……真つ当な学生として、技術者や研究者になりたいのは事実だ。

……まあそれは、明らかにパパやママ。東さんの影響を受けているからだろうけど。「でもでも、確かドイツの代表候補生みたいなものなんですよ?」

「候補生……とはちよつち違うよナギ。ドイツ空軍直属のI S技術応用研究所でテス

ターとかしてただけ」

これも全部でつち上げ。専用機持ちなのと、経歴を書類上ごまかすために抹消した戸籍と空白の3年間でどうにかする必要があった。

その為に私は、ドイツのとある人の所に行つて協力を申し出た。すると、条件付きで空白期間を誤魔化す手伝いをしてくれた。

まず、私の後見人にその人がなること。といつても、個人的なもので軍部や政府機関からの拘束はなし。

……曰く『またどこかに消えそうだ』とか『ちゃんとした大人が必要だ』とかで。心配してくれるのはとても嬉しいんだけど、なんとも。

次に、現在ドイツで開発が進められている第三世代ISの機体データや武装データのテスターをやること。実は私、東さんの所で適正判定を受けてA+の判定が出ている。同様にドイツの研究所でもA+。私としてもその人としてもこれがドイツ政府に知られるのは色々面倒で隠蔽。代わりに、その人の直属に当たる一般企業の研究機関で主に武装のテスターをすることとなった。

「へー……テスターとか軍関係者とか、リイスは凄いなあ。髪も肌も綺麗だし、胸も結構あつていい匂いするし」

「へっ!? ち、ちよつとナギくすぐりたい——」

「よいではないかよいではないかー、スキンシップスキンシップ。そう……スキンシップだよー」

ナギの変なノリに便乗して清香と癒子まで何やらにやけつつ、考えるような仕草をしている。

「確かに綺麗だよねー、アルビノ？ とは違うのかな。髪とかサラサラで綺麗で羨ましい」

「だ、だから清香と癒子も便乗して身体触るのは止めて——」

あれ、おかしいな。なんでこんなピンクな空気になってるんですか。まだ午前中ですよ？ ましてや私達女の子ですよ？

というか『よいではないかよいではないか』って何!?! 日本にはそういう何かがあるの!?

いけない、このままでは非常にいけない。そう思い私は助けを求めようと、先程少し会話した布仏 本音に助けを求めようとしたが——

『へー、そうなんだー。あ、これお菓子ー』

別の生徒と大絶賛会話中でお菓子を配るのに忙しそうにしていた。不味い、頼みの綱が——

他のクラスメイトとは殆どまだ会話をしていない。千冬さんは多分職員室、絶体絶命

のピンチだ。

「ちよつと、よろしくって？」

そんな絶体絶命のピンチ。私の貞操の危機。

そんな状況、あらぬ方向から声をかけられた。

ふと見れば、私の席の近くまで一人の女子生徒が歩いてきており、こちらを見ていた。

縦ロールのかかった金の長髪に、透き通った碧眼。垂れ目。いかにもお嬢様、といった風格のその人物が私達の状態を見て、怪訝そうにしていた。

騒々たる騒動は早々に

突然現れた金髪縦ロールの生徒に声をかけられたのはいい。

が：今の状況を見て一体何を思ったのだろうか。怪訝そうにしてどう反応したらいいのか困っているようにも見える。

そりやあそうだろう。今の私は席に座っていて、左右後ろから清香に癒子、ナギの三人に揉みくちやにされている状態である。

「：お、お邪魔でしたか」

「いいえ全く全然そんなことないよ！」

ガバツ、と起き上がると三人が呆けたように手を離してくれる。どうやら貞操の危機だけは免れたらしい。

「いやほんとにありがとう、色々失うかと思った」

「え、ええと：：どういたしまして？」

本当に危なかった。この人には感謝しても足りないくらいだ——所で、この人だけだろう。

「所で、どなたかな。私に用事でも？」

「まあ、私をご存知でない……このセシリア・オルコットを？」

一難去つてまた一難。ぶっちゃけありえない。とはこのことか。これもクロちゃん
の受け売りだけだ。

いや、三人はまだ悪ノリだったんだろうけどこう……なんていうか、根本から色々飛んでる人は色々面倒な気がする。事態が余計ややこしくなったような。

「……セシリア・オルコット」

「知っているのか清香」

「うむ」

そこ三人。まるで息を合わせたかのようにまた何やら始めるのはやめてくれないだろうか。

「イギリスの代表候補生で、入試『次席』のセシリア・オルコットさんだよね？ 凄いよね、私筆記とかけっこうボロボロだったのに」

「『次席』?! ほえ……すっごいなあ」

えっと、さつきから清香とナギのその言葉の後に気のせいとかオルコットさんの方から何か突き刺さるような音がするのは気のないかな。

視線を戻せばビクビク痙攣しながら項垂れる張本人が。

「誰が次席ですか誰がつ——ふ、ふん……私に声を掛けられるだけでも光栄な事ですの

よ？もう少し、ちゃんとした対応は出来ないのかしら？これだから極東の猿は——」
「私ドイツ生まれなだけど」

再び流れる沈黙。いや、本当なんていうか：できれば関わり合いになりたくないタイプかもしれない。

嫌な感じだ、自分の立場をただ振りかざして——周りが何も見えていない。まさに今の『女尊男卑』社会の、今時の女の子、私が彼女に対して最初に持った印象はそれだった。

：まあ、私がそんな人間をとやかくは言えないけど。私だって、ISを力として使つて成し遂げたい目的があるんだから。

「えつとそれで、オルコツトさん？でいいのかな。私に何か用？」

「そ、そうですね。こほん：私と同じ成績優秀にして、入試主席の方にご挨拶をと思ひまして」

入試主席：？ああ、あの試験のことかな。

確かにIS学園への入学の際、入試試験ということで試験を受けた。だけど：私は事情があつて、それを受けたのは一般受験生の後だ。多分だけど、主席とかそのあたりの成績判定には入ってないはず。

それに、私が聞いている入学生主席は——

「オルコツトさん、多分それ人違い」

「…えっ」

「入試主席は私じゃなくて、あっち——今他の子と話してるクロちゃん…クロエ・クロニクルって子だよ」

クロちゃんは私より以前から東さんの助手をしていたこともあってか、とにかく頭がいい。私は工学専門だけど、クロちゃんは大体の分野には精通している。専用機は持っていないけど、適性も高い。主席だったといつものポーカーフェイスに隠しきれない笑みを浮かべていたことを覚えている。

「私は事情があつて試験受けるのが後になってね、多分私の成績は主席とかの判定に入ってない」

流石に苦笑い。見れば三人も苦笑いしている。

でも私の窮地を助けてくれたことには感謝している。

顔を真っ赤にして言葉に困っているオルコツトさんに対してどう言葉を投げればいいのか考えていると『キーンコーンカーンコーン』と休み時間終了のチャイムが鳴った。

流石に私も、そして三人もオルコツトさんも先生の制裁は受けたくないのか。チャイムという宣告を聞いた瞬間、急いで席に戻っていった。

…いやはや、IS学園もとい代表候補生ってあんな人ばかりなのかな。

その後の授業時間。休み時間のやり取りの後の授業は山田先生ではなく、織斑先生が教壇に立っていた。そして山田先生は、その教壇の横でうんうんと頷いていた。

確か、この時間はI Sの基本装備と各種装備についての説明だったかな、だけど——織斑先生が教壇に立っているのは何故だろうか？うーん、と頭の中で考え事をしていて織斑先生が口を開いた。

「さて、授業に入る前に話がある。今度行われるクラス対抗戦に出る代表者を選出しなければならぬのだが、誰か居ないか？ちなみに、クラス代表というのはI S学園の学園委員会や生徒会の会議への出席、最初に言ったが対抗戦への出場、そうだな…分かりやすく言えば単純にクラス長でクラスの代表だと思ってくればいい」

なるほど、つまりは…クラス代表という犠牲者の選抜か。私は中学生時代飛ばして高校生だからよくわからないけど、小学生の時にも似たようなことがあったような。

どうせこういったことを面倒と思う学生が大半で…自分からやりますと進み出る人間はあまり居ないだろう。居るとすれば、自尊心が高いか犠牲者か。それとも、何かしらの理由があるか。

それに…

ちら、と少し離れた席の彼。先日話した彼を見る。

客観的に見れば、今このクラスには『織斑一夏』という最高のモルモットと、他にも代表候補生や、クラス代表になれば面白くなると考えられてもおかしくはない人物がかなり居る。例えばさっきのオルコットさん。例えば…主席だったクロちゃんとか。そしてその中に、私だつて含まれるかもしれない。

「自推他薦は問わない。誰か居ないか？」

そんな織斑先生の言葉で、やはり教室内の生徒が動いた。

「はいっ！織斑君を推薦しますッ！」

「私も、織斑君を推薦します！」

次々に『私も私も』等という、賛同の声が挙がる。当の本人といえば、完全に動揺しきつていて、場の空気からなのか反論すらできていなかったが。

まあ、恐らく『面白くなる』と考えた場合、男性操縦者として世界で始めて認知された織斑一夏という人間をこういつたイベントに出した方が、客としては、傍観者としては楽しいのだろう。

彼は、それだけ世界をある意味で楽しませる存在だ。いい意味でも、悪い意味でも。私にとっては、そうなる仕事も増えて面倒なんだけど。

そんな彼は織斑先生に対して何やら反論をしているが、『自推他薦は問わない』と言わ

れている以上、恐らく抗議しても無駄だろう。

「ま、待つてくださいい！ 納得がいきませんわッ！」

彼の抗議という言葉は最後まで続くことは無かった。

「バンツ！と机を強く叩いて立ち上がり、ヒステリックとも取れるような叫び声を上げたのは…先程、赤っ恥をかいだオルコツトさんだった。」

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しです！ そんな屈辱を味わうくらいでしたら、私が立候補しますわ！」

言い切るなあ…。もうこの瞬間に私の代表候補生に対する評価はダダ下がりでよ。

代表候補生というのは、即ち国家の顔。当然その行動や発言というのは下手すれば国際問題にもなる。確かにIS学園には学園の特例事項というものがあつて、その中に『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』というものがあるが、それでもこれは酷すぎる。

個人的に言えば、私は織斑先生を尊敬している。生活面はともかくとして、あの人は社会という面では完璧だ。おっと、今何処から睨まれたような。

そんな人を見てきたからこそ、候補生や国家代表というのはも先生を基準にした人間

性を……なんて勝手なことを思つてた。そりやあ人間性なんてそれぞれだけど、ちよつとこれはね。

まあ、私が気にしても仕方ないかと思うと私は机の上に膝を立てて、その彼女の演説ともいえるものを眺めていた。

「実力から考えればこのセシリア・オルコツトこそがもつとも代表に相応しいのは目に見えています！それを、男性だからという理由で男を代表にされては困ります！ そのような、極東の猿が演じるサーカスに付き合う気など毛頭ございませんわッ！いいですか？代表とは実力が最もある者、実力、つまりは力が最もある者こそが相応しいのです！そして、それは私、セシリア・オルコツトですわッ！」

言い切つた。ここまで言い切ると逆に清々しい。……ん、メール通知のウインドウ？この騒ぎだけど念のためにこつそりとバレないようメールを開くと——クロちゃんからだった。

「やりましたリース。これで私に優先が向くこともありません」

いやクロちゃん。こんな時にそれ言う必要がある？ふと見ればとても機嫌が良さそうな顔をしていた。ポーカーフェイスだからわかりにくいけど。

「大体、文化としても後進的な国で暮らすこと自体私にとつては耐え難い苦痛で——」
「イギリスだつて大したお国自慢なんて無いだろ。騎士道精神とか、色々言うけどさ

……飯は不味いし、ニュースでやってるイギリスの情勢なんて最悪の一言だろ。逆に言うけどさ、オルコットさんって言ったか？ お前のその態度こそ騎士道精神、国自体を汚してるんじゃないか？ ああでも、世界一不味い飯では覇者だったか？」

おっとお!? 色々突つ込みどころはあるが、その前に直接ツツコミを入れたのは——織斑一夏さんだった。そういうえば、学園に来てから彼とは話してない。あとで話しておこうかな。

ともかく、これでは火に油だ。彼の発言を聞いて、私はそう思った。

これはもう……止まりそうにないなあ。私には関係ないけど

「あ、あ、あなたねえ！ 私の祖国を侮辱しますの!? それに美味しい料理は沢山ありますわ！」

「仮にそうだととして、お前がお国を汚していることは事実じゃないか？ 騎士道精神が聞いて呆れるな？」

「言わせておけば——決闘ですわッ！ 織斑一夏、貴方に決闘を申し込めますッ！ 一番力があるのが誰かわからせてあげますわ！ 恐れをなしてわざと負けたりしないでくださいいね？ もしそんな事をすれば私の小間使い、いいえ、奴隷にしますわ！」

「上等だっ！ 俺も男だ、その勝負受けてやるよ！ 逃げも隠れもしない、やるからには覚悟しろよ！」

教室内は何やら盛り上がりを見せている。『面白くなってきたね!』とか『がんばれ!』とか。

いや私から見たら本当これどう収集つけるんだと思うけど。国際問題的にも、後は学園的にも。更に言うならオルコットさんは専用機持ちで彼は持つてない。

「…ふむ、そうか。いやはや盲点だった」

そんな混沌とした教室の中、今まで黙っていたある意味一番動いてはいけな存在が動いた。織斑先生だ。先生がそんな言葉を放った瞬間、教室が静まり返った。まるで嵐の前の静けさだ。

「オルコット」

「ひ、ひゃい!」

突然先生に話しかけられたからか、それとも怒られるのかと思っただのか、オルコットさんはビクツと体を震わせた。先生、それ完全に萎縮してます。

「力が最もある者こそが相応しい」そう言ったな」

「は、はい。ですから私が——」

「それが全てではないが一理ある。いや盲点だった…礼を言うぞオルコット」

「は、はあ…」

「そうか、そうだな…」

…あれ、なんかとてつもなく嫌な予感。というか先生？なんかとつても悪い顔してません？

やばい、そう思った瞬間。先生が私の方を見た

「エーヴェルリツヒ」

「ハイ、ナンデシヨウカセンセイ」

「そんな片言にならなくていいだろう。何、大したことではない」

いやいや絶対面倒事でしょう。なんとか逃げたいけど——クラス全員の視線が私をターゲティングしている。逃げられない。

「お前の専用機、手続きの遅れで学園に提出する実戦データがまだ取れていなくてな、後日にとでも考えていたんだが」

「私は後日で構いませんが。むしろそのほうが嬉しいです」

「ははは、そう言うな。アリーナの使用申請にデータサンプリングの為に山田先生の予定も調整しなければならなくて実は難航していたんだが…盲点だった」

あ…はい。この先の展開が読めた。

「オルコットと織斑のついでだ——お前の専用機のデータのサンプリングも一緒にやってしまおうかと思つてな」

「拒否権があるなら拒否したいです先生！」

ばつさりと言い切った。クラス全体からはブーイングが起こったがそんなもの知らない。

提出データのサンプリング？大いに結構。でも面倒事に巻き込まるのは嫌です、勘弁してください。

「データ処理なら山田先生ほどとまでは行きませんが、うちのクロちゃん——クロエ・クロニクルさんもかなりの技量持ってます！ですから彼女を代役にして後日にしませんか」

クロちゃんが『えっ、リス私ですか？』とプライベート・チャネルで慌てたように言ってくるが無視だ。この際、危機を脱するためならなんでも使う！

それにこの前の買い出し、イカサマを使われて負けたのだ。少し位いいだろう。

「拒否権があると思ってるのか」

「あると思ってます！」

「ははは、こやつめ。残念だがない」

無慈悲。あまりにも無慈悲だった。

「それに、だ。」力が最もある者こそが相応しい”なら——恐らくお前こそ相応しいだろう、エーヴェルリツヒ」

その瞬間。教室全体がざわめいた。それだけではない、織斑一夏さんとオルコットさ

んは驚愕の視線を私へと送っている。

と、とんでもない爆弾を落としてくれましたね先生…

そして恐る恐る口を開いたのはオルコットさんだった。

「あ、あの先生。それはどういう——」

「うん？ ああ、エーヴェルリツヒの入試が遅れたことは言ったな。遅れての試験、実技試験を担当したのは私だ」

ああ…ありましたねそんな試験。でも私の場合、射撃訓練とか操作技量とかだけで先生とは戦ってないはずなんですけど——もしかして。もしかしなくても、あの時のあの戦闘？ だとしたら先生、それでうちあげー!?

「いや、いい機会だ。オルコット…はつきり言つてやろう。」力が最もある者こそが相応しい」と言うならお前は絶対にエーヴェルリツヒには勝てない」

「なッ——」

「少し厳しいことを言うぞ。あまり自分の力を過信しないことだ、自分の力量を図ることも重要だと知れ。そして織斑、それはお前にも言えることだ」

「お、俺にも!？」

突然矛先を向けられたからか、動揺する織斑一夏さん。いや一番動揺してて胃が痛いのは私ですよ。

「貴様、オルコットとの力量差は考えたか？ましてや、専用機がない状態でどうやって戦う？」

「う…それは」

「まあ、今回はお前達二人が熱くなつての自業自得だ。それに織斑、『戦う術がないわけではない』」

つまり、彼には既にその手段が用意されていると。私…東さんからは何も聞いてないんですけど。

というかそうなら二人で勝手にやって下さい。私を巻き込まないで欲しい…。

「と、いうことでだ」

あ、また先生の視線がこっち向いた。

「——エーヴェルリツヒ、"データ取りのついで"に二人にお灸を据えてやれ」

「結局それが本命ですかー!？」

どうやらそれが本命らしい。恐らく、二人が争うところまでは予想外でそれ以降は先生が突発で考えたのだろう。

なんというか…東さん同様場をかき乱すのが好きだと思う。ああ、そういえばお二人は親友同士でしたか——

日本のコトワザ？だったか。覆水盆に返らずという言葉があつたような。もうここ

まできてしまったては私もどうしようもない。

教室全体からの視線、先生からの宣告。完全に逃げ場も拒否権もない私はため息を付いて机に項垂れて、

「…はあ、わかりました。それで私は何すればいいんでしょうか」

負けを認めた。とりあえず、次の休憩時間にクロちゃんに泣きつこう。自棄だから清香達と一緒に放課後食堂でやけ食いするのもいいかもしれない。

ルームメイト

「…さ、流石に疲れた」

放課後。俺、織斑一夏は机の上で項垂れていた。

何をしていたかといえば、教科書の予習だ。

入学前に千冬姉から渡されたあの辞書のような参考書は入学前にできるだけ頭に叩き込んだ。が、全部じゃない。

昔これまた友人の弾に勧められて辞書ほどの厚さのある小説を読まされていたお陰か、あの参考書は内容を理解するのは苦労しても読むのには苦にならなかった。しかし、読むのと理解するのは別問題だ。自分なりに理解しようとしても限界がある。そして今…その疲れからか、頭の中はパンク寸前だった。

それに今日のあの代表選抜の話もある。あの時俺はかなり熱くなってしまったし、結果としてオルコットさんとは決闘なんでものをすることになった。

後で他の生徒からは『頭下げてハンデつけて貰おう』、『今からでも遅くないから謝ろう』などと言われたがそんなことできるか。俺は…織斑一夏という人間は、一度やると決めたらやるんだ。最後までやり遂げるのが男つてもんだろ。

…それに、頭の中で考えることは他にもある。

「…リース・エーヴェルリツヒ」

この前、公園で会った不思議な少女。今思えば、『また会える』とはこういうことを言つてたのか。

恐らく千冬姉の口ぶりからして、専用機持ちなのは確実。しかも——あそこまで言い切るくらいだ、相当の実力者なんだろう。なんというか、彼女からは他の生徒とは違う雰囲気というか。感覚というか。そんなものを抱く。

…ちなみにだが、状況は全く変わつてない。むしろ悪化している。

昼休みは食事を取ろうとすれば他のクラス、他の学年の生徒が大量についてきて特に会話をするわけでもなく黄色い声を上げていた。現在もそうだ、教室の外には相も変わらず他の生徒が沢山。相も変わらずきやいきやいと会話をしている。

俺としては、オルコットさんにあれだけ大口叩いた以上もできるだけ勉強して万全の体制で挑みたいんだが…こんな状況じゃ、勉強もできない。

困つた、そう思つていた時だ。

「Guten Tag (こんにはは)。織斑一夏さん」

透き通る真面目そうな声に項垂れる顔を上げれば、そこには笑顔で机の前に立つ少女が存在した。

「やつ」

「…えつと、グーテン・タークってこんにちわ、だよな。こんにちわ、エーヴェルリツヒさん？」

「リースでいいよ、他の子もそう呼ぶし」

本当、初対面の時もそうだったが…どうにもペースを握られるというか、違和感がないというか。だが、先程までの状況下で知った顔の相手と会話できるのは助かる。箒は…何故か屋上での一件以降、会話してくれないし。

「久しぶり、だな。あの時はありがとな…愚痴聞いて貰って」

「ああ、気にしないで。お陰でクロちゃん…話してた子には盛大に焦らしプレイできたから」

「はは、本当酷いやつだな。後俺のことも一夏でいいぜ、フルネームで呼ばれるのは違和感があるんだ」

「ん、了解」

多分だけど、俺がI S学園に来て初めての知り合いってリースになるんだと思う。異性なのになんというか、話しやすくって俺としてはとても助かる。

「それで、俺に用事か？」

「ううん、一度挨拶しとこうかなー、ってだけ。邪魔だったかな？」

「…いや、むしろ助け舟だった」

教室の外はあんな状態だ。あそこに今飛び込むのは無謀であり、恐らく飛び込んだらもう教室には戻れないだろう。それに、今外に出ても行く所がないし逃げ場もない。

かといって、頭がパンク寸前の状態で継続して教科書を読もうとは思えなかった。だからこそ箒には助けを求めたんだが…相手にしてくれない。

そんな満身創痍の状態。ある意味、リースが声をかけてくれたのは助かった。

「…？意味がよくわからないけど」

「ああ、悪い。そういえば——リースは千冬ね、織斑先生と知り合いなのか？」

気にはなっていたことを聞いてみる。代表選抜の話が出た時、千冬姉とリースの会話が あった。それがどうにも、一生徒と教員の会話ではないように思えたからだ。もっと 親しいような。言うならば自分のような身内での会話、そう感じたからだ。

「んー…知り合いといえれば知り合い、かな？」

恐らく至る所で聞き耳をたてられていたんだろう。外からも教室の中からもざわめ きが聞こえる。が、リースはそれを意にも介さず会話を続ける。

「私、ドイツの生まれんだけど昔先生がドイツに来たことがあってね。その時に知り 合つて、当時色々教えてもらつたりしてたんだ。会うのは3年振りになるのかな、学園 に来た時は驚いたよ」

「へえー…あんまり家に居ないからどこに居るのかよく知らなかったんだが、ドイツにも行ってたのか」

道理で親しそうに会話していた訳だ。つまりリイスは千冬姉の指導を直接受けている可能性が…？ああうん、そりやあ強いわ。というより千冬姉があれだけ言い切るくらいだ、間違いないだろう。

「そういえば、代表選抜の件…なんていうか、巻き込んで悪かったな」

「あー…まあ、巻き込まれたのは一夏、君のせいじゃないから気にしないでいいよ。――

―どうせあれ、先生の思いつきだろうし」

最後だけ俺に聞こえるように言ったその言葉に対して、俺は苦笑いするしか無かった。

「つと、それじゃあ私は行こうかな。ごめんね、勉強の邪魔しちゃつて。それじゃ、また」
ふとリイスの後ろの方を見れば、確か谷本に相川、そして――入試主席と言われていたクロニクルさんが居た。恐らく約束でもしていたのだろうか。だとしたら悪いことしたか。三人のもとに行く彼女を見送ると、深呼吸して再び机に向かう。

…結局のところ、代表決定戦は1週間後の月曜日。場所は第三アリーナで行われる。今回の件についてリイスは関係ないにしてもあの千冬姉が直接『お灸をすえろ』と言ったのだ。間違いなく、あいつは相当強い。

現状俺は最弱だ。仮に、専用機なんてものがあつたとして、勝てる見込みなんてない。……それでも。

自分の正義に嘘はつきたくなかった。自分の思いに嘘はつきたくなかった。『カラスと書き物机が似ているのはなぜ?』というあの時リリースが言つた質問への、俺なりの回答。それに嘘はつきたくなくて。

気合を入れ直して教科書を開く。さて、どこまで読んだか——

「ああ、織斑君。まだ教室に居たんですね。よかったです」

やる気を出して再開しようとした瞬間。入り口から入ってきた……山田先生に声をかけられた。

「山田先生? どうかしたんですか」

「えつとですね、先程寮の部屋が決まりました」

山田先生は、手に持っていた大量の書類を机の上に置く——ふと思つたのだが、重くないのだろうか? いや、何がとは言わないが。

いやしかしおかしいな。寮の部屋?

IS学園は全寮制である。在学生全員がIS学園の寮で生活することを半ば義務付けられている。それには大人の事情つて奴があるんだろうけど。

俺だつて頭は悪いなりに勉強している。IS学園は各国の有望なIS操縦者や技術

者、それに関わらずともお嬢様などのVIPが在学している。そんな言えば『貴重な存在』に対して何かあれば大問題だ。日本としても、その国としても。

千冬姉は黙ってるけど、俺は知ってる。俺がISを動かしてしまっただ後…多くの国や機関が俺を勧誘しようとしたこと、実家まで押しかけようとしたこと。

…まあ、それは千冬姉や地元の理解してくれている人達によつて撃退されたんだけど。

学園としては、生徒の安全を意地でも保証したいのだ。保身のためにも、生徒のためにも。が、俺は男だ。IS学園は生徒全員が俺以外は女性。倫理的にも色々ダメだろうってことで、監視・護衛つきで1週間位は自宅通学になった筈だ。

「あれ？俺の部屋は決まってるって聞いてたんですが。確か当分は自宅から通うという話だったんじゃない？？」

「えっと、事情が事情で一時的にってことで、無理矢理部屋割りを変更したみたいですよ。あ、これ寮の鍵です。…織斑君、政府とか千冬さんからそのこと聞いてます？」

鍵を渡し、最後だけ小声で先生は言った。先生なりに…気を使ってくれてるんだろうか。一切聞いてない。というか、IS学園に叩き込まれてから殆ど連絡ないぞ、大丈夫か日本政府。

「…いえまったく。大体の事情は察したので、荷物だけ取りに行ってもいいですか？」と

「うかできれば一度帰らせて下さい」

「お、織斑君…？なんか凄くグロッキーですけど大丈夫ですか…？」

「そりやそうだ。こんな環境下に男一人。こんなもの拷問だ、叶うなら弾…お前と代わってやりたいよ本当。」

先生の氣遣いに感謝しつつも、俺は深呼吸する。とにかく、これは一度帰れるチャンスカもしれないんだ。いわば希望だ——

「その必要はない」

「お、織斑先生!？」

「ジャーン、ジャーン、ジャーンという銅鑼の音が聞こえたと思った。そこには関羽…いや、呂布——でもない。もつと恐ろしい世界最強が存在した。」

「既に私が手配しておいた。夜にでも届く手筈になっている。…最近、お前には苦勞かけっぱなしだったからな。こんなことしかしてやれんが どうした織斑」

途中の言葉は小声だったが、俺の顔色を見てか怪訝な顔になる千冬姉。

「いや、氣遣いはありがたいし、その氣持もよく伝わってきた。本当苦勞掛けると思うけど…今回ばかりは、自分でやらせてほしかった。精神的な意味で。」

「いえ、ありがとうございます織斑先生——では俺は、一度部屋の方に行くのでこれで」とにかく、寮の部屋に行こう。少なくとも教室よりはマシだろうし、少しは落ち着い

て勉強もできるだろう。

：その前に、I S学園の施設だけある程度見ておくか。朝から余裕がなくて、学園の敷地内をちゃんとまだ把握していない。

騒がれるかもしれないが、今後の授業や行動に支障をきたすのは不味いだろう。特に、遅刻などが原因での千冬姉の制裁はできるだけ回避したい。

既に疲れ切った身体に鞭打つと、俺はため息混じりに立ち上がり教室を後にした。

「——そうですか。いえ、ありがとうございます」

I S学園初日夕方。私の姿は学園での住居：寮にある。

色々ゴタついていたせいで、部屋の割り振りの確認が遅れてしまったんだけど：まあ私はクロちゃんと同室だろうと踏んでいた。

しかしその予想は完膚なきまでに裏切られる。部屋割りを確認した時、頭の中にデスクエムなるものが流れそうになっただくらいだ。

私の部屋は1025号室。クロちゃんは1023号室で、しかもあの子は個室である。いや、なにがどうしてそんな割り振りになったのか小一時間担当教員に問い詰めた

い。

織斑先生に試しに聞いてみた所、原因は一夏らしい。彼が急遽寮の部屋に入ることで、無理矢理な変更が行われたのだとか。

ちなみに部屋割りの段階ではルームメイトが誰かわからない。これは個人情報がないとかだとか、お国の管理するデータがどうのらしいが…理解に苦しむ。ルームメイトのロシアンルーレットって何。

そんなルームメイトがわからないまま私は放課後清香と癒子、クロちゃんと話をした後、寮の部屋にきている。私の荷物は既に搬入済み、元々私物も少ないので整理はすぐ終わった。

で、その後——念のために部屋の中に盗聴器や監視のたぐいの物がないか確認して、ある人に連絡を取る。いや流石に女子生徒の部屋にそんなもの仕掛けてたら問題だらうけど。

更に念には念を入れて特殊な秘匿回線を使用。それも束さんが手を加えたものを使用して連絡を取っていたのは…3年間、私がお世話になっていたとある人だ。

『…悪いな嬢ちゃん。こつちも色々聞いてみてはいるんだがさっぱりだ。商売柄、この手の情報はかなり入ってくるんだが、『金色のIS』なんてのはやっぱり聞いたことが無い』

「いえ、ありがとうございます。私こそごめんなさい、イワンさん達にこんな綱渡りみたいなことお願いして」

『気にするな。こっちはあの時嬢ちゃんが居なければ、個人としても組織としても命がなかったんだ。それに比べたら安いもんさ』

私が連絡を取っているのは、今や世界中に情報網を持つ武器商人。金色のＩＳを探して一人で旅をしている時にひよんな事で知り合った。以降は、最低限ではあったがＩＳのメンテナンスや補給をして貰っていた。

「∴私の今の立場は、先程お話しした通りです。その、暫く連絡しなかったこと、後心配とかかけてごめんなさい」

『全くだ。一応月一では今まで連絡があったのに、途絶えた時は心配したぞ。 ∴篠ノ之東の保護下に、ドイツ空軍大將が後見人。驚くことばかりだが、これ以上安全な後ろ盾もそうないだろう』

「でも私は∴あのＩＳを追い続けます。絶対に見つけ出したいんです。今までの補給や整備とかの費用はまとめてお支払します、ですからこれからも」

『おつとそれ以上はナシだぜ嬢ちゃん。 ∴当然、協力はさせて貰う。まあこつちも商売だ、補給や整備の対価は貰うが——探し物についてはサービスだ、今後何かあれば知らせる』

「……あ、ありがとうございます」

『それに、こつちとしてもそつちの後ろ盾の協力が得られるのならお釣りが来るんだ——で、ここからは個人的な話だ』

……不意に、雰囲気が変わった。電話先でイワンさんは『あー』だとか『なんつーかな』だとか呟いた後、

『……なあ、嬢ちゃん。今はI S学園に居るんだよな』

『……? はい、色々あつてI S学園に入学しましたが』

『そのまま、普通の女の子として生きるつて選択は——できねえか?』

……それは、

『俺達は武器商人だ。戦争やテロがあれば飛んでいくし、武器や弾薬が入用なら喜んで用意する。……人の死や争いを食い物にしている、最低な死の商人さ。けどな——それはあくまで商売柄。俺個人で言わせてもらえれば、こつちの世界に関わるべきじゃない。ロクなもんじゃないぞ』

「——私に、復讐を止めろと」

『復讐は悪だ、なんて言わない。だが……その副産物として、こつちの世界に関わりすぎるなつてことだ。まだ日の当たる道があるなら、そつちを選ぶべきだ』

恐らく、心配してくれてるんだろう。3年間、この人は私がどんなことをしてきたか

…知っている。

けれど、それでもだめなんだ。

『I S 学園進学は、もう未来を約束されたもんだろう。嬢ちゃんの I S 適性や才能があれば、まだ引き返すことは——』

「理屈では、消せないんです」

『——』

「あの時の恨み、あの時の後悔。例えその道があつたとしても、私は…きつと、その道を選べない」

『…その先にあるのは、辛い未来だぞ』

「ええ、ですから私は——」

言葉を続けようとした。その先にある、恐らくの私の未来。

その時だ——コン、コンツと。寮の扉がノックされた。

「ごめんなさい、来客みたいです。また、連絡しますから」

それだけ言うと私は、逃げるみたいにスマートフォン型端末の通話終了ボタンを押した。



寮の扉がノックされた。私は手に持っていた携帯端末を制服のポケットに入れると、

扉へと歩いていく

「はいはい、今開けるよー」

電子ロックを解除してガチャ、という解錠音がする。扉を開ければ——そこには、

「…リース？」

「一夏？」

見知った顔の人物がそこには立っていた。

あれ…どうして君がここに。

「えつと、どうかした？」

「あー…その、凄く言いにくい話なんだが」

…？…なんだろうか。

「寮の部屋割りの話って、聞いてるよな」

「うん、聞いてるよ？ 確か急遽部屋割りの変更になったんだよね。元々私、クロちゃん…ああ、クロエね。あの子と同じ部屋だったんだけど変更になって——」

ここで私の思考ストップ。待った、今一夏はなんて言ったかな。部屋割り？ 変更？

高速で頭を回転させる。確か部屋割りの変更されたのは、一夏が寮に急遽入ることになったからだ。

ここは女子寮、1025号室前。ふと見れば一夏は申し訳無さそうな顔をしている。

あれ、もしかしてこれはずまり

一夏はそのままポケットから鍵を取り出した。ああ、間違いない寮の鍵だ。

「単刀直入に言うんだが、暫くの間ルームメイトが俺なんだ……」

——最悪だ。よりによってロシアンルーレットの犠牲者が私とは。

というか、どんな部屋割りしてるんだろう。クロちゃんが個室なんだから、私とクロちゃん同室で彼を個室でよかつたんじゃ……あれ、部屋割りに悪意を感じる。

あ、頭が痛くなってきた……というかこれ絶対悪意ある兔の意思が関わってるよね!?

……後で問い合わせてみよう。事実ならクロちゃん通してちよつとしたお仕置きで。あの人、クロちゃんには滅法弱いから。

「リ、リース?」

「……ああうん、大丈夫。ちよつと兔の悪意で胃が痛くなってきただけだから」

ともかく、彼を立ちっぱなしにするのも悪い。それに……今は廊下に生徒の姿はないが、今見られると面倒だ。

「うん、君の事情は理解したよ。とりあえず入って」

「……なんか、本当にすまん」

悪いのは君じゃないよ。多分どこぞの兔さんか、クロちゃん。

ひとまず、彼を部屋に通すと部屋のルールとかについて話し合った。そりゃ私は女だ

し、彼は男の子だし。

——ともあれ、これから色々面倒そうだ。クラスメイトとかにも何言われるかわかったもんじゃないし、胃薬だけは常備しておこうか。

特訓

ここは、篠ノ之東の数あるラボの内——彼女が主に使用しているラボ。

場所とはある山中であり、外から見ればただのコテージにしか見えない。実際、コテージの中にはごく当たり前のものしか存在しておらず、誰が見ても『篠ノ之東のメインラボ』なんて思わない。

そんな場所の地下にあるラボの研究室で、研究所の主である篠ノ之東は貼り付けたような笑顔でとある人物に連絡を取っていた。

「やあやあ、東さんだよ。元気にしてるかな？ スコール」

通話ウィンドウが東の前に表示される。そこには、金髪にスーツ姿の女性が映し出されていた。

『久しぶりね、東。最後に会話したのは…依頼したISの制作の時以来かしら？』

「そうだね、そつちからの報告書は受け取ってたけど会話するのはそれくらいかな。…ちよつと、聞きたいことがあってね」

貼り付けたような笑顔。本当にそのまま、東は笑っていなかった。むしろ…険悪さすら感じられる。

「率直に聞くけど、『金のＩＳ』について知ってることはない？勿論、君の専用機の事じゃない。君の専用機以外で金色のＩＳについての情報があれば教えてほしいんだ」

『…金のＩＳ？そんな悪趣味なカラーリングの機体に乗るのなんて私くらいよ、東。

——冗談はさておき、悪いのだけど知らないわ』

「そ。『元亡国機業』ならあるいは、と思ったんだけど」

この世界において、篠ノ之東をもってしても未だに掌握しきれていない存在がある。その一つが『亡国機業』。

亡国機業。正確にはくファントム・タスクと呼ばれている組織。篠ノ之東が知る情報では最も古いのは50年以上前、つまりは第二次大戦直後から活動している組織であり、その時期に生まれた組織。組織が掲げているのは『国家によらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない』という思想。

名前の通り、実体がないといってもいい組織なのだ。故に、篠ノ之東が何度実体をつかもうとして追い込んでもトカゲの尻尾きり。結局何もつかめない。

そんな中、亡国機業を抜けてきた存在が居る。それが…今東が会話している、スコールという人物達だ。

とはいったものの、実体はやはりつかめない。掴めなかったが——ある、重要なことを東は知った。

——『今まで、亡国機業というのは目的がハッキリしていないなかった組織なのよ。ただ最近の動向は主にＩＳ関係の事が多かった。けれど、そんな目的がハッキリしていない組織に、ここ近年で一部だけに知らされている目的があったの』

「…なら、”来るべき、全ての始まりにして終わりの日”。前に君が言っていた『世織計画』。推測でいいよ、これに金色のＩＳが関わっている可能性は？」

『——その前に聞かせなさい束。貴女：何を追っているの？』
モニターの中のスコールは険しい顔をしていた。スコールとしては出来れば今話している内容についてはあまり触れたくないのだ。

にも関わらず、自分の普段からヘラヘラしている協力者は何処か焦っている。スコールは、それが気になったのだ。

束は暫くの沈黙の後、投影キーボードを叩くとあるデータファイルを送信した。それは：リスについてと、リスの両親の事件についてのデータだ。

『…エーヴェルリツヒ博士は世界的な有名な研究者だったのは知ってるわ。私がまだ研究者だった頃から、その話題には事欠かなかったのだから。なるほど、貴女が探しているのは——この子の言うＩＳね』

「それで、どうなんだいスコール」

スコールは暫く考えるような素振りを見せた。そして、意を決したように。

『…推測、でいいのかしら』

「構わない」

『——もし、このデータから考えるなら 『世織計画』 にその子の言う金色の I S は関わっているわ』

「…で、どうなんですかりイス」

入学式翌日。時刻は朝八時。一年生寮の食堂にある4人掛けテーブルの一角には、私を含めた3人が座っており、朝食を終えた私はそのうち2人に問い詰められていた。

「どうもなにも、何も無いよクロちゃん」

「嘘ですツ!! 思春期の男性と女性ですよ!! 若いリビドーを持って余して『リミッターを外させてもらう』なんて展開がないわけが…!」

「やかましい」

スパンツ、と清香からの後頭部へのツツコミが炸裂。それで頭を抑えながらおとなし

くなるクロちゃん。

「クロエ、ちよつと落ち着こう。リイス困ってるよ」

「う……ぎぎぎ……今のは効きましたよ清香」

なんというか、クロちゃんはこつちに来てから色々ネジが飛び始めた気がする。変なものに悪影響でも受けたんだらうか。

「…で、本当に何も無いの？リイス」

「だから何も無いよ清香。一体君達や他の生徒は私に何を期待してるの」

私が一夏と同室という話は一瞬で広がった。具体的には、私と彼が部屋から出る瞬間を見られてその10分後には学園全体に知れ渡っていた。

いや本当酷かった。私も彼も大勢の生徒に詰め寄られる始末だ。代わってくれと言う子も居たけど、代われるなら喜んで代わるよ。

そして今もなお、私達が座るテーブルには至る方向から視線を向けられている。

一晚であらぬ噂や変なでつち上げニュースみたいのを拡散されたというのもあるだろう。『ドイツの専用機持ちと織斑一夏が同室』、『クラス代表選抜戦に関わりがある』、『千冬様公認』。

こつちはいいい迷惑だ。なお、部屋割りについてはクロちゃんと東さんを問い詰めたが無関係らしい。学園側の誰かがやったとかなんとか。見つけ出してしばき倒そうと思

う。

…おや、水色の髪の人が食堂から出ていく。なんだろう、お腹でも壊したのかな。

「言つとくけど、期待されるようなことは何もないから。変に噂話する前に先生に事実確認でもしてくれないかな本当」

「リ、リース…？怒ってる？」

怒る？私か？ええ、そりやあ怒ってますよ。根も葉もない噂と煽動のせいでこつちはいい迷惑だ。といつても、私がイラついているのは一夏にはない。騒ぎ立てる生徒達に對してだ。

「怒ってないです」

「ぜ、絶対怒ってるよね…」

「——ここだけの話、リースは怒ると敬語になるんです」

クロちゃん。聞こえてますよ

「それで、当の織斑君は？」

「何か昔の知り合いと話がてら朝食とるとかで別行動」

「まず、という音とともに緑茶を啜る。うん…緑茶というのは日本に来て初めて飲んだけど、中々この苦味は癖になる。」

「ふーん…でもさ、部屋で何してるの？一緒の部屋な訳でしょ？」

「ですから若いリビドーで、」

「やかましい」

本日二度目の清香ツツコミ。静かになって頭を押さえるクロちゃんを見ながら苦笑いする。

「別に変なことなんてないよ？彼、凄い勉強家みたいだからISの勉強教えたりお薦めの参考書貸してあげたり。ああ、後は日常的な雑談するくらいかな…って清香、どうかしたの」

「いや、うん——ごちそうさまです。そういうのを平然と会話で話せるリイスはやっぱ凄いいと思います」

「そこに痺れる憧れ、」

「清香チヨップ！」

本日三度目のダウンのクロちゃん。そういうえば清香は中学時代ハンドボール部だった…すごい音したなあ今。

拜啓東さん。クロちゃんを外に出したのは失敗ではないでしょうか、色々変な方向に進化しています。

そんな騒がしい朝。気がつけば織斑先生に食堂全員がどやされて授業へと急ぐことになる。

日が過ぎて、現在土曜日。IS学園に来て最初の休日、なんだけど…

「頼むリイス！ISでの戦闘訓練を頼めないか！」

寮の部屋。そこに私と彼の姿はあった。

実は土曜日までに色々あった。一夏の専用機の話が正式に出てそのことで騒ぎになったり、彼の個人的なことだけど彼の幼馴染『篠ノ之 箒』さんが稽古をつけるとか、なんとかで一夏と訓練をはじめたりだとか。

後、その篠ノ之箒さんについても束さんの妹だからとかなんとかで一悶着あった。束さんに一応報告したら

『…本当、悪いことしてるとは思ってるんだよ。もし機会があれば箒ちゃんとも仲良くしてあげてくれないかな』

と、頼まれる。私としては全く問題ないんだけど…当の本人が私の事を嫌っているらしくて、なんとも。

そして今に至る。聞くところによると今日まで参考書や教科書は読んできたが、実際の戦闘経験がまったくないらしい。申請を出せばアリーナで訓練も出来たはずなんだけど…どうにもその篠ノ之箒さんが理由で、ずっと剣道の練習をしてたとか。

「…あのね、一夏。私は一応君の対戦相手だよ?」

「知ってる。だけど…このままじゃ、何の対策も準備なしに代表決定戦に挑むことになる。そうなれば、何も結果が残せない」

「努力家なのは君と数日間過ぎとしてよくわかったけど、私はその対戦時の『敵』だよ?」
「それも知ってる。けど——今はそうじゃない、だろ」

…ふむ、確かにその通りだ。

この数日間で私が持った一夏に対する印象はとんでもなく努力家であることだ。どんな形になろうと結果を何かしらで残そうとする、その為には努力を惜しまない。

そして——天才肌である、ということ。彼は私が貸した参考書を読み終わると、それを知識としてすぐに吸収していた。これには、私も驚きである。

私個人としては、こういう努力家の人間は好感が持てる。男性だから、女性だからなんてことも考えない。

それに私は3年間、殆ど男性しか居ない所にお世話になっていたので。それを考えれば今の社会の風潮なんて知ったことじゃない。つまり、少なくとも今の社会のただ思いうがっただけのIS乗りなんかよりは遥かに信用に値するということだ。

はあ、とため息をつく。本当なら土日は買い物にでもと考えていたんだけど…ここまですれ違ったら仕方ない。買い物は私が使ってる日用品とか知ってるクロちゃんに押し

付けよう。

「…わかったよ、君がそこまで頼むなら仕方ない。ただし、条件付き」

「条件？」

「条件というか、制約になるのかな。多分だけど、今からアリーナの使用申請したら君は打鉄を貸出してもらえても、私は出来ない」

この時期のアリーナというのはとても混む。一年生だけではなく、他学年も数あるアリーナに対して使用申請を行うのだ。

その中で許可が降りるのは一部。殆どは許可が降りないのが現実だが——彼の場合、事情が変わる。

「君は男性操縦者、私は専用機持ち。どっちが優先されるかは…わかるよね？」

「…それは、」

世界でただ一人の男性操縦者だ。そんな人間のデータや操縦風景を見たいという人間は山ほどいる。私は専用機持ち、ということもあり打鉄の貸出は多分ムリだろうけど彼なら一発で許可が降りるだろう。確実に。

「だから私は近くで君の操縦とか見て、操作のアドバイスくらいしかできないよ？それでもいいなら手伝うよ」

「——わかった。迷惑かけるけど、頼む」

「君が気にすることじゃない。まあ土日だし、人もそこまで居ないでしょ」
そう返答すると私はクロちゃんにメールだけ打って、部屋を彼と出た。

◆ ◆ ◆
「それで、」

土曜夕方。私『達』の姿はI S学園内の全校生徒利用可能なカフェにあった。相も変わらずというか。土日なのにご苦労様というか：周囲からは生徒の好奇の視線。いい加減慣れてきたけど。

達である。丸テーブルには、私に一夏、そしてクロちゃんの姿がある。

「…クロちゃん、私買い物お願いしたはずなんだけどう？」

そこには制服姿のクロちゃんの姿が。私はクロちゃんに買い物頼んで、彼女もそれを了承していた筈だ。

…が、彼と第三アリーナでの訓練中、クロちゃんが現れた。

聞けば、『暇だから稼働データ解析くらいはやる』と申し出てくれてそれを基にアドバイスができた。

クロちゃんは専用機は一応持ってないものの、データ関係のプロだ。しかも東さんお墨付き。そんな彼女のサポートはとても助かった、のだが

「リイス、安心して下さい。買い物は全部終わらせてあります —— 清香が」

「清香に何したあ!？」

まさか『あなたを犯人です』とかよくわからない呪文使って清香を洗脳した？

「嫌ですね、ちよつと取引しただけですよ」

「取引?」

「はい。『今後リイスの専用機のメンテを担当する権利』です。提案したらとんでもない速さで了承してくれてそのまま『とにやんざむ!』とか叫びながら買い物行きましたよ。赤い人もびつくりの速度でした」

「ちよつと待て人の専用機を勝手に餌にするなあ!？」

は、拝啓束さん：クロちゃんはやっぱりかなりアツパーな方向に育ってます。しかも優秀な分タチ悪いです。

…あ、そういうえば束さんもマッドサイエンティストだった。だったらこの進化は間違っていない、のかな

「いえリイス聞いて下さい。清香、ああ見えて超絶天才ですよ」

「…詳しく」

隣の椅子に座る一夏は困ったようにしているが、君は後だ。今は自分のことのほうが
ある意味大事だ。

テーブルの上にあるアイスカフェラテに刺さるストローでそれを飲みながら、クロ

ちゃんの話を聞く。

「国際ＩＳ委員会承認の国家ＩＳ整備技師資格ってありますよね」

「ああうん、あるね。委員会が認めてる資格の中では飛び抜けて難易度が高くて、持つてただけで将来確定とか言われてるあれ？」

「清香はその二級資格持ちです」

…マジですか。

一夏は『意味わからん』と言った顔をしているが——君は勤勉ではなかったか。それとも、そのあたりまではまだ勉強していなかったか。

国際ＩＳ委員会が認可している資格の中の超難易度資格の１つ。それが国家ＩＳ整備技師資格。ＩＳに関わる整備・開発に関わる資格であり、３級から１級まで存在している。

なお、１級の保持者は世界でも両手で数えるくらいの人数がいるかいないかくらいらしい。…東さんは『そんな下らないものなくても東さんは天才だから問題ない！』とか言ってたから除外。

２級にしても、保持者は相当少ない筈なんだ。その保持者？下手したら候補生とか企業のＩＳメンテとか頼まれるレベルだよ？

「え、それで本人が受けてくれるって？」

「はい、相当喜んでましたよ」

「いやいや、でも——大丈夫なの、許可取ったの」

後半については東さんについてだ。ここには一夏も居て、どこかで聞き耳たてられていたのかわからない。

私とクロちゃんが東さんの関係者というのは公開していない。故にぼかした言い方をしたけど…

「はい、許可は取っております」

『——機密部分のロックは東様レベルじゃないと破れないそうです。ですから、問題ない』

個人間秘匿通信でそんな回答が来た。なるほど…確かに、優秀な技師が居るのは助かる。クロちゃんもその方面の資格はまだないらしいし。

クロちゃんから更に聞くと、清香としては早い段階で専門の整備先が見つかるのは相性にラッキーだとか。

IS学園の整備科志望者というのは、特例として相手の許可と相手の大本…つまり国や企業の許可があれば専門整備士として専用機の整備を担当できる。が、基本的に代表候補生とは既に国に担当者が居ることが多い。そんな中、未だに半ばフリーの専用機持ちを見つけたのはとんでもなく運がいいとか。

…まあ、私は代表候補生ではない。ドイツの研究所のテスターやつていたと言っているだけで専用機についてもまだ詳しいことは話していない。清香としては『多分専用機とかの情報だした後には、志望者が殺到する』という見込みだそうなの。

「…ならいいんだけど。ああごめん一夏、君を置いてけぼりにして」

「あ、ああ。気にしないでくれ。『付き合って』貰ったのはこつちだからさ」

…また外野から『キヤー!』とか『大胆!スクープよ!』とか聞こえる。いや君達、勝手に意味を書き換えてないか。

「俺、どんな感じだったかな」

「それはさっきまでの訓練のことです?」

「ああ。正直に言うと、操作とか武装展開とか自分でも壊滅的だったのは自覚してるから、ボロクソに言ってくれろと助かる」

…ふむ、なるほど。

「君はMだったのか。…よく覚えておこう」

「ちげえよ!?!特殊な性癖とかそんなものないからな!?!」

『わかってるよ、冗談』と返すと——私は再びカフェラテを飲んだ後

「操作技量は壊滅的、量産機といえど、機体とのマッチングもかなり悪い。…空飛んでいきなりバランス崩して墜落するくらいだから、わかるよね」

「うっ…まあ、な」

「——現段階では最低通り越して最悪の結果だね。現段階では」

その言葉に含みを感じ取ってくれたのか、一夏は『どういうことだ?』という顔をす
る。

「…いや、君は天才肌だとは思ってたけど、まさかここまでとは思ってなかったんだよ
「クロちゃん」

「はいはいクロエです。——とりあえず織斑さん、これ見てくださいませか」

クロちゃんはポケットから端末を取り出すとそれを操作。先程の訓練における稼働
データを彼にだけ見えるようにウインドウ化して表示した。

そこには訓練開始…といっても、クロちゃんがきてからの時間から終了までの稼働
データがグラフで表示されていて——それが、右肩上がりを示し続けていたのだ。

「説明しよう! つまり練習開始段階ではどうしようもなく救いようがなくて『えっこ
れでよくオルコットさんやリイスに喧嘩売りましたね? 死にたいんですか?』くらいの
クソザコナメクジだったんですが」

「いや待て、ボロクソに言ってくれとは言ったけど流石に言い過ぎじゃないか!?!という
カリイスに対しては喧嘩売ってない!」

「おっと失礼。処刑される側でしたね——で、続けても?」

「ふ、腑に落ちないけどどうぞ…」

うわあ凄いくろちゃんが活き活きしてる。ポーカーフェイス崩れて完全に笑顔だよあれ。

…ああ、今はリミッター（清香）が居ないからガタ外れてるのかなあ。本格的に束さんとクロちゃんの今後について相談しよう。

「訓練終了後のデータを見ると『…こいつ、動かせるぞ！』くらいにはマシになってます。ぶっちゃけ才能あるんで誇っていいですよ」

「…ええと？」

「しよがないにやあ…詳しく解説するのでちゃんと聞いてくださいね織斑さん」

クロちゃん、キャラ崩れてる。変な方向にキャラ傾いてるから。

お願いだからいつもの真面目なクロちゃんできて。そのままの君でいて。

「…ISの基本操縦って、短時間で身につくものじゃないんですよ。候補生や専用機持ちなら軽く300時間は必要になります。織斑さん、ISにまともに乗ったのは今回が初めてですか？」

「ああ、そうなる。試験会場で稼働させたのはすぐに解除されたしな」

「正直に申し上げて”初めて動かして、かつ短時間で空を飛べるようになる”というのはほとんどないことなんです。本来なら、その段階まではもっと時間を必要にしま

す。控えめに言って頭おかしいです」

…まあ、クロちゃんの言いたいことは私も思っていたことだ。今の話においては天才肌だとかそういうんじゃない。君はおかしいんだよ、一夏。

私がISを動かしたときを例にするなら、まともに動かして空を飛ぶまで1日かかった。初回の起動からまともに動かす、というだけでそれくらいの時間がかかるものなのだ。にも関わらず彼はそれを数時間でやってのけた。これは異常以外の何物でもない。「例えるなら、今の貴方はスポンジですよ。知識の吸収速度と経験の蓄積が尋常じゃなく速い。問題はその知識を理解したり活かしきれずそのまま流してしまうことです。もし、それができるようになったら——怖いですね、正直」

「…その、今後とか今度の決定戦とか。希望はあるってことか?」

「あります。といっても努力次第です。誇っていいですよ、ですが自惚れないで下さい。

…さて、私は疲れました。リース後お願いします」

クロちゃんはそのため息をつくど、ウエイトレスさんに『あ、すみません特上パフェ2つ。支払いはその男性で』と言っている。

一夏は気がついてないけど私は気がついている。クロちゃん、いいこと言ったと思ったら何してるの。

「言いたいことはクロちゃんが詳しく言ってくれたから、私から君に言うことはあんま

りないんだよね。…一夏、日曜の予定は？」

「日曜は元々勉強しようと思ってたから特に予定はないけれど——どうかしたのか」
なら、都合がいい。

今日一日彼を見て思ったことは、『彼に常識は通じない』ということだ。

…もしかすると、もしかするかもしれない。仮に専用機があつたとして、彼とオルコットさんが戦えば間違いなく一夏は敗北する。

それがもしかしたら、万に一つの確率で『勝てるかもしれない』見込みがでてきたのだ。これは、中々面白いかもしれない。

「オルコットさんに勝つ確率、あげたい？」

「…そ、そりや上げたいさ」

「ん。じゃあ明日も訓練ね、ここまできたら乗りかかった船。私も付き合おうよ、クロちゃんも連れてくるし」

『えっ明日もやるんですか。やりたいことが——』などとクロちゃんは言ったが『パフェ』と返すと大人しくなった。よろしい。真面目なクロちゃんは大好きです。

そんなこんなで、夕方の反省会は過ぎていく。

…一夏は気がついてないけど、私やクロちゃんは気がついている。

周囲の騒ぎ立てる生徒の中に、制服姿の見覚えある姿が——私達を見ていたことを。

クラス代表決定戦

一夏とクロちゃんと共に訓練に明け暮れた土日。そんな慌ただしい週末が終わり月曜日の放課後、私の姿は第三アリーナの第三ピットゲートにあった。

今の姿は白と黒のISスーツ姿。首には剣と翼を象った、待機形態の私の専用機。

ISスーツは束さんお手製。私の専用機はちよつと特殊で、神経伝達をより効率化することができる仕組みになっているスーツらしい。

：ちなみに、スーツ作成の際に束さんとクロちゃんに一種のセクハラをされたことを私はよく覚えている。胸があるだとか、感覚が鋭いだとか言われて。悪ノリも大概にしろと叫んで怒ったのはいい思ひ出。

本日の対戦相手は、オルコットさんと一夏の二人。：ちよつとズルになるけど、オルコットさんの専用機については調べがついている。対して一夏の専用機は先程情報公開がされたばかりだ。

しかし、千冬さんも面倒なことをしてくれたと思う。私はクラス代表なんてものには興味がなかったし、あのデータ取りも本当なら後日出来たことだろう。クロちゃんの才能を知らない千冬さんではあるまい。にも関わらずこんな展開にしたのは、何か考えが

あるのか。それともただの思いつきか。

何にせよ、やるからには全力だ。

「リース、織斑君とオルコットさんの試合終わったみたいだよ」

ピットゲートにはモニターがあるが、現在は中継されていない。『相手の手の内を見せない』という先生の配慮らしい。

しかし試合の結果は各ピットの整備担当者に送られる。ちなみに他のゲート整備担当者はクロエと学園側の上級生：確か本音とその姉さんだったかが担当している。

私の担当は清香。今日付けで正式に専任整備士になった。

「結果は？」

「オルコットさんの勝ち。けど——」

何やら清香は送られてきたと思われる試合に関係するデータを幾つもの投影ウィンドウで展開してながら、それに目を通して——難しい顔をしている。

「何かあったの？」

「これ、今ここに私とリースしか居ないから言えるけど……ほぼ織斑君の勝ちだよ」

投影しているウィンドウの内2枚を清香はタッチすると、スライドするような操作で私の所にそれを持ってくる。

そのデータを見て——私は、ただただ驚いた。

「…ブルー・ティアーズ損害率67%？　BT兵器は全基破壊されてるし、何があったのこれ」

「——試合終わったから公開できるけど、問題の動画がこれ」

そう言って清香が私のウィンドウの中で再生した動画の映像は——

「…嘘」

「私も信じられないよ。リスとクロエが特訓付き合ってたのは聞いたけど、これはちよつとおかしい」

映像の中では、先程情報が公開された一夏の機体——白式がオルコットさんの専用機に搭載されている専用武装であるBT兵器に包囲され、砲撃を受けるが——すぐに一夏はそれを回避しだして、BT兵器に接近すると次々と破壊していった。

その後…一夏はカッコつけて色々言つて、『単一仕様』を発動。勝負を決めに掛かるが、どうやら本人は単一仕様について理解していなかったらしく刃が届く直前でエネルギーがエンプティ。敗北となる。

更にもう一枚のウィンドウには一夏と白式の稼働率がグラフ化されていた。その内容をみて、私は——驚いた後に、つい笑ってしまった。

「…リス？」

「ああ、ごめん。いや、凄いなこれは…本当、”一夏は異常だ”」

試合は判定負けだが、内容を見る限り”実戦なら一夏の勝ち”だ。

稼働率のおかしさもそうだけど、彼の動画の中での操縦技術は：多くが土日で教えたものばかりだ。

『相川、エーヴェルリツヒ。聞こえるか?』

ピットにあるモニターが起動して、そこに織斑先生の姿が映し出される。

「はい、聞こえています」

『ならいい。既にデータは確認したと思うが、試合はオルコットの勝ちだ、本来ならこの後順番にエーヴェルリツヒが二人と対戦を行う予定だったが——』

「……? どうかしましたか」

『オルコットのブルー・ティアーズの損傷率が酷すぎる。BT兵器も復旧までに数時間掛かるようで、正直このまま勝負しても ”試合にならない”』

…なるほど、先生の言いたいことは大体理解できた。

『後日改めてとも考えたが、アリーナの予定が確保できないようだな——よって、試合は織斑とお前のものだけ行う』

「了解しました。試合開始はいつでしょうか」

『15分後だ。その間に織斑の白式については補給を済ませておく。そちらも準備しておけ』

「わかりました」

モニターの電源が切れる。オルコットさんの件は予想外だったけど——仕方ないか
「それで、リイス」

再び幾つものウィンドウを操作しながら言葉を投げってくる清香。こうして見ると、本
当に清香の技量の高さが伺える：少なくとも私には8枚ウィンドウ出して同時操作と
か無理。

「勝てるの?」

そんな清香の言葉に対して私は苦笑を返した。

「ぶつちやけ織斑君、バケモノだよ? 専用機の初回起動で、多分オルコットさんは慢心
あったかもしれないけどあれだけ追い込んだ。それは、評価されるべき」

「…うん、彼の規格外さはよくわかっているよ。その上で言うよ 勝てる」

確かに、強い。確かに天才で、規格外。

間違はなくこの先、とんでもなく強くなるだろうという確信があった。

…でも、それは今じゃないし。私はもつと規格外を相手にしたことがあるから。

「——そっか。なら、お疲れ様会のための手配でもしておこうかな」

「その前に、稼働データもちゃんと頼んだよ清香。先生から色々押し付けられたんで
しよ」

『うがああああ』と頭を抱える清香。実は清香、当日になってクロちゃんと一緒に先生に連行されてデータ取りの手伝いを命じられた。曰く、山田先生が楽になるからだとか。

技術者も色々大変だな。あ、私もその道志望だった…。

そんなこんなしているうちに、時間になった。先生の合図でピットゲートが開かれる。さて…行きますか。

「行つてくるね」

「御土産は稼働データでよろしく」

「期待してくれていいよ」

サムズアップと満足げな笑顔を確認して、息を吸う――

「それじゃ、行くよ――ヴァイス・フリューゲル」

白銀のＩＳにエメラルドの三対六枚翼。後ろで清香が『おお…』と呟くのが聞こえた。

そのまま清香に手を振ると、私はアリーナへと飛び立った。戦うべき相手と、対するのために。

放課後の第三アリーナ。その観客席には多くの生徒の姿もあり、中には教員の姿も

あった。

本来は1学年にのみ関係する出来事なのだが、観客席には他学年の生徒も多い。中には飲食などの購買を開始する商魂たくましい生徒も居たくらいだ。無論、後日この生徒は制裁を受けたことを記述しておく。

そんなアリーナの空。ピットから登場した存在によって観客席から声があがった。専用機を身に纏うリースだ。

白銀のスマートフレーム、背面の非固定浮遊部位として存在するエメラルドの三対六枚翼。その姿は…観客席の生徒や教員を驚かせた。

その姿を見た一夏は息を呑んだ。『これが、リースの専用機なのか』と。そう思うのと同時に、白式からは相手のデータが送られてきた。

” 『対戦相手の機体情報を表示します』

機体名：第三世代型IS 万能機動型 ヴァイス・フリーユゲル

搭載武装：（公開可能なもののみ表示します）

五五口径 多様性役割大型ライフルソード 『シユツルム』

機殻実体剣 『バルムンク』？2

以上。

”

「やあ」

「…よう」

偶然会った時にするような、まるで友人同士の挨拶。アリーナ中央上空で相對した一夏とリースが掛けた言葉はそんなものだった。

試合開始までのカウントダウンがスタートする。両者、定位置に付いたまま。続けて言葉を放ったのは、一夏だった。

「その、悪い。特訓付き合って貰ったのに…凄く無様な負け方した」

「本当だよ。まさか君があれだけカッコつけて負けたのには、私もびっくりした」

「うっ…面目ない」

『だけど、』とリースは続ける

「君は何も残せなかったわけじゃない、そうでしょ？」

「——ああ」

カウントダウンの残りが20秒になった。リイスは笑って、言葉を返す
「今後に期待、してもいいんだよね？」

残り10秒。一夏が専用武装——雪片式型を正眼に構えた

「ああ、期待してくれ。今度は…ちやんと応える」

「ん…。ならよし」

試合開始のブザーが鳴る直前。『じゃあ、』と呟いて

「私との試合、よく覚えておいてね」

ブザーが鳴ったと同時。

瞬間、リイスの姿が一夏の視界から“消えた”

◆ ◆ ◆
「がッ——」

試合開始直後。鈍い衝撃と共に地面へと叩き落される。

シールドの減少を告知するアラートが鳴るが、それを無視して以前教えられたように、無理矢理ではあるが空中で体勢を戻すことで地面へ叩きつけられることだけは回避した。

（何だ——？試合開始と思っただら、リースの姿が消えて、消えたと思っただら地面に叩き落された？どうなってるんだ）

理解できない。ただわかるとすれば、” 試合開始と同時にリースの姿が消えたこと” 。ハイパーセンサーは何も反応せず、ただダメージのみを受けた。

恐らく自分に攻撃を叩き込んだと思われるリースはアリーナの上空に存在しており、その右手には大型のアサルトライフル『シユツルム』が握られている。見れば、銃のバレル下部。バヨネットラグに装着されていたパーツからは黒い実体剣が展開されており、恐らくあれで斬られたのだと推測する。

わからない、理解できない。自分が何をされたのかを。同時に、一夏の中には『恐ろしい』という感情が芽生えてしまった。

考える。何故彼女は消えたのか。とてつもなく速い加速：瞬時加速？いや違う、瞬時加速は加速状態での軌道変更がほぼ不可能のはずだ——では、何だ？瞬間移動？これも有り得ない。超常現象を否定するつもりはないが、ISでそんなことができるなんて参考書では見たことがないし聞いたこともない。

理解できないという未知だけが、今の一夏を支配していた。

「あ……えつとね、一夏」

通信が入る。それは、対戦相手——リースからのものだ。通信ウィンドウのリースは

笑顔であり、どこか楽しそうにも見えたが、

理解する。これは死刑宣告だと。

「ちよつと容赦なく行くから、痛かったらごめん」

またリースの姿が消えた。

そして、消えたと思つたらこれもまた、「死角から攻撃を受けた」。



「な、何故だ!?何故一夏は反応できない!?!」

第一ピット。そこには複数人の姿があった。千冬に真耶。そして、箒とクロエである。既に三人の専用機の情報は公開されたこともあり、試合はピットのモニターでも中継されている。そして、箒はその中継映像を見て大声を上げたのだ。

恐らく箒の考えていることは、観客席で試合を見ている生徒達も思つたことだろう。『どうして反応しないのか』と。

実際に試合をして、リースと相對している一夏からすれば彼女の動きは“消えている”ようにしか見えない。

しかし、観客席から見るとリースは“消えていない”。高速機動型のISの速度。そ

れを用いて移動しているようにしか見えないのだ。

普通に考えれば、確かに速いが反応は出来る速度のはずだ。にも関わらず、一夏は何の反応も出来ていない。この状況に、箒も生徒達も訳がわからないという状態だった。

一部の生徒からは『八百長?』、『まさかわざと負ける気?』の他、心無い言葉が出ていたが…今の状況を理解している人間から見れば、これはれっきとした試合なのだ。

「わからないか、篠ノ之」

「ち、千冬さ——」織斑先生だ馬鹿者「織斑先生——」

出席簿を構える千冬に対してビクツと体を震わせる箒。急いで言い直しをすると『よろしい』という言葉がかえってくる。

「ちなみに山田先生、君には分かるか?」

「…なんとなく、ですけど。でも、”見えない”のでなんとも言えません」

教師陣の会話に対して理解できない、という思いを抱く箒。少なくとも箒の中では…リースが何かしらのズルをして、一方的に一夏に攻撃しているようにしか思えなかったのだ。

それはあながち間違いではない。が…本質は異なる。

「ヒントをやろう。篠ノ之、お前は剣道をやっているな?」

「は、はい。やっています——」

「今起こっていることはISの性能差でも、イカサマでも単一仕様でもなんでもない」
実際、今リイスが行っているのはある武術のちよつとした応用である。この仕掛に気がつくのには…千冬も時間を要した。

リイスは一夏同様、ある種の規格外であると千冬は認識している。かつて己と戦い、本気でないにせよ自分を追い込んだ。

自惚れるわけではない。が、仮にも世界最強まで上り詰めた自分と戦えるだけの才能を持つているのだ。まず、土俵が違う。

今の一夏では絶対に勝てない。そんな確信が千冬の中にはあった。なら、何故今回の試合を“仕組んだ”のか。

簡単だ、千冬としては一夏に経験させておきたかったのだ。世界レベルとはどんなものか、自分がこれからどんな世界に挑まなければならないのかを。

「クロニクル」

「はい終わりのクロニクルです —— 痛いです先生」

「悪ふざけはいい。そのまま作業続けながら聞け。お前は今何が起こっているのか理解できるか？」

ふざけたからか、後頭部に出席簿が炸裂。だが作業中ということもあり、その痛みに我慢しながら抗議の視線だけを千冬に送る。

そして、問いかけられた質問に対して面倒くさそうに投影キーボードを叩きながら答えていく

「…理解は出来ますよ。ただ、理解できるだけでリスのあれには対応できませんが。私、実戦タイプではないので」

驚愕したのは箒だった。剣道で全国優勝をして、今まで鍛えてきて、自信はあった。だが…今起こっていることは理解が出来ない。

にも関わらず、クロエはそれを全部否定するかのように『理解できる』と言ったのだ。「作業終わりました。後は自動でデータ解析してくれると思いますので、私はもう行ってもいいでしょうか先生」

「わざわざ呼んで悪かったなクロニクル。礼は何かでする」

「なら、食堂の特上パフェでも——「あれは高いからダメだ、普通のにしろ」…むう、ではそれで」

腑に落ちない、そうクロエは思いつつ展開していた投影ディスプレイやウィンドウを全て閉じると、ピットの出口へと歩いていく

「最後まで見ていかないのか？」

「勝負は、最初から見えてますから」

モニターの右上には試合開始15分の文字が表示されており、両者のシールド残量を

示すゲージも表示されていたが：一夏のシールドはどんどん削れていくのに対して、リイスはまだほぼ無傷。

開始15分。その間、一夏が反撃に出ることは一度もない。傍から見れば、ただ攻撃を受け続けるだけの試合なのだ。

「ま、待てー！」

ピットを出ようとしたクロエを引き留めたのは箒だった。クロエは細目を僅かに開き、金色の瞳を露わにして不機嫌そうに振り返ると、

「…何ですか篠ノ之さん。私、これから祝賀会の準備があるんですが」

「祝賀会…だと?」

「はい、リイスの祝賀会です。お疲れ様会と言ったほうがいいかもしれませんね。…おや、どうしましたか篠ノ之さん。そんなに肩を震わせて」

「貴様、一夏を侮辱するの catt!」

感情的になって、箒は拳をクロエへと振り上げてしまった。真耶は制止の声をあげるが：千冬はやれやれと言ったようにクロエを見ていた。

手をあげられたクロエはと言えば、慣れたようにそのまま殴りかかってきた箒の腕を掴んでハンマーロックを掛ける。

「誰も織斑さんを侮辱してませんよ。勘違いはいけない、私はあくまで”データ取りの

” 祝賀会という意味で言ったのですが。いけませんね、感情的になるのは」

「だ、黙れッ——嘘をつくな、貴様達は一夏を誑かして、」

「…？何のことかわかりかねますね。おっと、失礼」

そのまま拘束を解くと、箒はある程度距離を取った後クロエを睨む。

「それで、引き留めたのには何か理由が？ 殴り掛かるためでしたら再度どうぞ。またハ
ンマーロックかけますけど」

「…ッ。貴様には、見えているのか？」

その質問に対してクロエはため息の後、

「見えるわけ無いですよ。私、さっきも言いましたが体育系ではないので。ただ——内
容を理解してるだけですよ」

その回答に箒は、呆然とするしか無かった。呆然と立ち尽くす箒を放ってクロエが
ピットを出た時だ

『試合終了。勝者 リイス・エーヴエルリッヒ』

そんな試合終了のアナウンスが、アリーナに響いた。

動く影

「…まだ若干痛い」

「いや、本當ごめん。君なら大丈夫かなって思つて、ちよつと力入れちゃつた」

代表決定戦の翌日、朝。私と一夏の姿は寮の廊下にある。朝食を食べて、一度部屋に戻る途中だ。

そして、先程からもそうだけど、既に慣れつつある生徒達の騒音の中に、あまり快くないものがまじり始めている。具体的には、昨日の試合が終わつてから。

——「…ねえ、あれつて」

——「織斑くんに媚び売つたとかつていうドイツのエーヴェルリツヒさんじゃない？」

——「ちよつとかわいいからつて、調子乗つてるよね…」 「でも、織斑君のほうの噂もたつてるよ」

…たまったもんじゃやない。結局、あの場。アリーナで観戦していた生徒の多くは自分達が都合のように事実を改変して、そして都合が悪い事は見て見ぬふり。今囁かれているのは要するにこういうことだ。”私と一夏が同室だから、私が色目使つて一夏に負け

させた”。

流石に一夏もこれだけ騒がれると耳に入るらしく、昨日の時点では生徒の前で怒りを露わにしていた。

…そういうのは、自分の立場を悪くするだけなのに、どうしてもそこまでお人好しなのか、君は。

「ツ…いい加減に、」

「いいよ。気にしてない」

機嫌が悪そうに、廊下でヒソヒソ話をしていた生徒に歩いていこうとした一夏を手で制止する。人の噂もなんとやら、だ。どうせ暫く経つか別のことがあればすぐに忘れられる。

それに、多分言われてるのは私だけじゃない。オルコットさんだつて変な噂を立てられているだろう。

勝つたものの初めてISを起動した、それも男性にあそこまで追い込まれてその後の試合は棄権。事情を知っている人間ならともかく、大衆や観客はこれもまた都合のいいように解釈してでつちあげる。本当…嫌になるな。

「それに、私はクラス代表には直接関係ないんだし。あくまでデータ採取っていうついでだよ。所で、私の昨日の言葉…君はちゃんと覚えてるのかな？」

「…試合をよく覚えておけ、って奴か？ ああ、覚えてるさ。結局最後まで何されてるかわからなかったし、終わって見返してもわからなかった」

「課題だよ、課題。ちなみにだけど、答えがわかってる人は何人か居たよ」

「…マジか。うーん、なんなんだろうな——」

昨日の終了後、私の専用機のデータサンプリングと、それに際しての清香とクロちゃんを労って、クロちゃん主催のもとお疲れ様会兼反省会を行った。

そこでも色々とし試合については討論されて、また試合でのデータについても話が行われた。そこで私が一夏に出した課題は、試合での私がやったことへの回答。

…そういうえば、あの時クロちゃんちよつとイラついてたように見えたけど何かあったのかな。

「…ん、あれって」

寮の廊下。1025号室がある廊下まで来ると…私達の部屋の前に、ある人物の姿があった。オルコットさんだ。私と一夏に気がつく、気まずそうな顔をするオルコットさん。一夏に用事だろうか。

「Guten Morgen. オルコットさん」

「あ…お、おはようございますエーヴェルリッヒさん」

「もう何度目になるかわからないけどリリースでいいよ、皆そう呼ぶから」

あれ、何かオルコットさん元気がない。

…もしかして、噂のこと聞いたんだろうか。

「…一夏に用事かな？なら私、先に部屋入ってるけど」

「あ、ええと——その、」

「それじゃあ後はお二人でこゆつくりと」

一夏の『なっ、おい』とか言葉が聞こえるけど無視。

昨日の今日でわざわざ寮の部屋前まで来ていたんだから、間違いなく一夏に用件だろう。

面倒事は早めに解決するんだよ、と思いつつ私は部屋に入った。



部屋に入って10分位が経過。授業まではまだ時間があり、準備も終わっている。念のために忘れ物がないか確認して、暫くクロちゃんや清香と連絡のやり取りをして時間が経過した訳なんだけど——

「…まだ話してるのかな」

一夏はまだ戻らない。いや、流石に部屋の前で話しすぎじゃないかと思っただら、扉が開かれた。

「おかえり、長かったね？」

「あー…ちよつとな。先週の教室での件と、後暴言言ったこと謝られた。それと…」

「それと？」

「…今流れてる噂、自分のせいでもあるからって謝られた。オルコツトさ——セシリアに泣きそうになって謝られてさ、困惑した」

あ、名前で呼びあうようになつたんだ。仲良きことはよきことかな

——何か胸の中に違和感あるけど、まあいいや。

しかし噂の件で謝罪？ どういうことだろう。

「ごめん一夏。それはどういうこと？ 噂がオルコツトさんのせいって」

「んー…それがさ、詳しいことは教えてくれなかつたんだけど俺との試合の後、更衣室行く途中？ で、他の生徒に色々聞かれたらしくて。その時に頭が呆然とした状態で勘違いされるようなこと言っちゃつたんだってさ」

「内容が不明すぎてまかつたくわからない。君に心当たりとかないの？」

「いや、特に何も…。強いて言うなら試合中カツコついたら、あの時の会話くらいだけ」

カツコつけた会話——ああ、あの時の一夏の家族を守るとか、先生の名前を守るとかいうアレ？ あれで勘違いした発言…は、有り得ないか、わからないなあ。

「まあ、君とオルコットさんの間ではとりあえずこの件については解決したんでしょ？」

「ああ。俺も熱くなつて言いきりすぎたつて謝ったよ。和解したつもりだけど」

「それじゃあいいんじゃないですか。つと、そろそろ行こうか」

「…なありイス。何か怒ってるか？」

…え？怒ってるつもりなんて一切ないんだけど。

「何言ってるんだ君は、私は怒ってないよ？そりゃあ廊下での噂話はちよつとイラつとしたけどそれ外に何か感じる事なんてないと思うけど」

「…ならいいんだが」

全く、朝から変な一夏だ。そう思いつつ私は一夏と授業へと向かうことにした。その後、教室に行くといきなり私が謝られたりして混乱したり、SHRでオルコットさん：セシリアが代表を辞退したいと言い出して全員の前で先日のことを謝罪。そして一夏に是非代表を譲りたいと申し出た。彼女としてはそれはある意味誠意の現れだったのだろう。実際、その話をしている時のセシリアからは誠意も感じられた。

けど、ちよつと違う。一夏はといえばんとも言えない顔をした後、もう後にも引けず『わかりました、俺がやります』と返答。

私は見た。教室の隅で千冬さんが笑いを堪えていたことに。先生としても、代表はセシリアだと思っていたらしい。

そんなこんなで過ぎていく、騒動の1週間。

4月下旬。もう大分ここの生活や環境にも慣れてきたこの時期、ISの基礎実践訓練ということで私は現在グラウンドに居る。

授業の進行を担当するのは山田先生。織斑先生はといえば、隣で山田先生に対してアトバイスをしたりしながら、私達生徒に目を光らせている。

人の噂もなんとやら。結局、私達について流れていた変な噂は現在ではかなり沈静化されたし、前と比べて生徒達からの騒音も少なくなつた。

「…まろい」

「はあ…？いきなりどうしたんだい君は」

「いや、突如としてどこから電波を受信したというか、鈍器の魔力に魅せられたと言うか」

「訳がわからないよ…それより、ぼーっとしてると先生に肅清されるよ？」

「おおう、そうだな、それだけは嫌だな——疲れてるのかなあ俺」

一夏、君は少し休もう。そう思う。

一夏は努力家だ。そしてかつ、結果を残そうとする。他の生徒に訓練風景を笑われても、嘲笑を含んで何か言われても。一夏はそれを意にも介さずに努力をしている。

約束や予定があればそれを優先し、自分の空いている時間には参考書を読んだり知り合いと討論をしている。それこそ、殆ど休みも息抜きなしに、だ。

故に、知識の吸収がとんでもなく速い。4月下旬、今の段階で言えば4月上旬にあつたあの件での技量は比喩物にならないくらい成長を見せている。

成長は認めるし、その努力はとても好ましい。私もクロちゃんも結局放っておけない、という考えで彼の努力に付き合うくらいだ。だからこそ少しは休むべきだ、そう思うが——彼はそれを聞かない。変な所で頑固だ。

あの代表決定戦の後、色々あつた。まず、一夏の頼みから始まったI Sの訓練。実はあれ、今後も定期的にやろうって話になって私もクロちゃんも乗り気だったから話を進めることになった。

そこに話を聞きつけた清香が『専用機の気配を感じ取って来ました』などと現れて、クロちゃんと一緒にデータ担当と整備担当することに。

私としては何か話が大きくなってきたな、と思つたら今度はそこにセシリアが登場。実はあれ以降、私とセシリアの関係は良好である。別に喧嘩とかした訳じゃないんだけど。

セシリアも、私が貸した本を返しに来たら『偶然』話を聞いてしまったらしく、

『そういうことでしたら、私も協力させて頂けませんか？ 少なくとも、私は遠距離戦闘のエキスパートです、その点についてなら色々とお教えできますし』

という提案があった。無論、私としては有難い。私はどちらかというところと近距離と中距離のオールラウンダーだし、一夏は完全に近接特化。というか教わる側。クロちゃんと清香はデータに整備。

最近クロちゃんには部屋に呼ばれてよくRPGなるジャンルのゲームをさせられるが、それで言う火力職：遠距離職が居ない訳である。だから純粋な遠距離戦闘のエキスパートであるセシリアが来てくれるのはありがたかった。セシリアの参加によりクロちゃんのストッパーである清香が発狂したことは言うまでもない。あの時クロちゃんがドン引きしてたのを覚えている。

なお、訓練に参加したセシリアだけど、一夏が未だに仕組みが掴めないあの仕掛けについてある程度推測はできていたらしい。

「えー、ではこれからI.S.の基本的な飛行操縦についての実践と勉強に入ります。ではまず：オルコツトさん、それから織斑君、お願いしますー」

「頑張りなよ、という言葉を投稿して一夏を見送ると『おう！』と返してくれる。うん、自信はついてきてるね。」

二人が前に出て、ISを展開する。やっぱりセシリアは代表候補生ってだけあって、展開がかなり早いのに対して一夏は手間取ってるみたい。数秒かかってなんとか白式を展開した一夏はそのままその場で数十センチ浮遊する。

「オルコットは問題ないな。織斑、流星に貴様は遅すぎる。熟練している操縦者なら展開までに1秒とかからんぞ」

「精進します！」

「…うむ、よろしい！」

おお、まるで軍隊みたいな受け答え。まさか先生もそんな返しされるのが予想外だったようで、一瞬驚いた後満足気に頷く。

やっぱり、先生ってブラコン——おっと、何かとてつもない殺気が。

先生の飛べ、という合図の後飛翔する二人。飛行についてもかなり上達している。最初は

——『おお…俺飛んでる、浮いてるぞ！ うわあ！』

等と叫びながら墜落していたのに、今見ると問題なく空中での制御は行えている。

「ふむ、飛行も特に問題ないようだな。だが…スペック上ではブルー・ティアーズより白式のほうが出力は上だぞ」

相変わらず、先生は一夏には容赦ない。流星の私もそこまで言わない、姑ですか——

おっと、今度は明らかな殺意が。

見れば顔だけは空にいる二人に向けて出席簿は此方に構えている先生。そして『ちっ』という声を聞き逃さない。先生、私の反射神経舐めないで下さい。でもその凶器（出席簿）はとても怖いので許してください。

「それでリース。騎士様の評価やいかに？」

「65点。ギリギリ及第点だと思うよクロちゃん」

ISスーツ姿でこちらに歩いてきたクロちゃんと清香に対して私はそんな言葉を投げる。厳しいかもしれないが、それでも結構甘めの採点だ。本当なら先生の言っていた展開速度の遅さ・飛行のラグ。そして見れば分かるが、空中制御が完全に安定せずフラついているのを差し引けばもつと減点される。

「甘いですねリース。もう徹底的にボロクソ言つてやればいいのに及第点をあげるとは…何かされましたか、具体的には若かり、」

「そのネタはもういいから。それとも本物の暴力を教えてほしいのクロエ」

ゴンツ。という音がした。そしてそこには仁王立ちする清香。

流石に音が大きかったせいかな生徒と先生、そして上空に居たセシリアと一夏も会話をしていたのをやめてこちらを見ている。

いや、ゴンツ。つて何。清香、素手で殴つたよね？クロちゃんその場で蹲りながら頭

抑えてるよ？

「…さて、話の続きだが山田先生」

「はい、織斑先生」

あ、この人達無視した。見なかったことにした。生徒達も一気に目をそらした。そして上空の二人も。

『…今後清香さんには逆らわないことにしますわ』

『同じく。実技教えてくれてるのがリイスとセシリアで本当に安心した。具体的には命の安心』

個人間秘匿通信で私にそういうの送るのやめてくれるかなあ!?

この二人暴走したら鎮めるのが私みたいでしょ。

「さ、さてオルコット。織斑。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は10センチだ」
出来れば見なかったことにしたのか、先生も声が疲れているように感じられる。セシリアが降りてきて完全停止。ふわり、と金髪が風に揺れてそれに合わせて決めポーズをする姿は優雅だ。だけど…今、それは不味い。

「誰が優雅に決めポーズまでしろと言った。戯けが」

「はうっ!?!」

スパンツ、とISを解除したセシリアに対して出席簿が炸裂する。こればかりはセシ

リアの自業自得だ。続いては一夏の番だ。何か遠くの方で山田先生と篠ノ之箒さんのやり取りがあつて、篠ノ之さんが何かやらかして肅清されていたが知らない。見てない。

恐らく今の一夏の技量なら問題ないだろう。10センチ、というのは厳しいかもしれないが上昇と降下についてはセシリアと一緒に教えている。練習時にも特に問題なくそれはできていたと思う。うん、問題なんて何も――

ズドオオオオン！という音が響いた。嫌な予感がして、音がした方を見れば――グラウンドに大穴。そしてその中心には一夏が。

な、何やつてるんだ君は：練習通りにやればこんなことにはならないでしょ。

一夏の墜落。それを見て先生は「何をしている……と呆れながら言う。

一夏は上空から急降下、そのまま『一切速度を落とさず』に急降下したことによりグラウンドに頭から直撃、つまり人間ミスイルだ。人間ミスイルとなつた一夏がグラウンドに墜落して、そこに大きなクレーターができた。そしてそこからなんとか立ち上がる。と一夏の白式が強制解除。

更に言うとなんか原因でセシリアと篠ノ之さんが口論を開始。また先生が制裁を叩き込み、授業を再開するというなんとも混沌とした授業時間になつた。

……ちなみに一夏があけた穴は埋めるのを手伝つてあげた。同室のよしみというか君

が遅くなると私の予定も遅れるんだ。

時刻は夜。今日の授業は全て終了し、夕食の時間も終わった後の就寝時間までの自由時間。

私の姿はIS学園の屋上にあり、空を見上げていた。空は星空で、天気は悪くなく、風が心地いい。

日本というのはとても氣候がいい。四季というものが存在していて、環境も汚れてはいない。……ここは、硝煙の臭いもしなければ鉄の匂いもない。死の気配もなければ、常に気を張る必要もない。

平和な。平和な監獄。

クロちゃんや清香は今ここにはいない。先日のクラス代表決定戦の結果、クラス代表となった一夏を祝う就任パーティーとやらが有志で開催されるらしく、そちらに参加している。一夏とセシリアは主役とやらで強制連行された。そして私は……ぶつちやけたところ、逃げてきた。

面倒くさい、という理由もある。別に人付き合いが嫌いなわけではない。ただ……少し前のようにまた根も葉もない噂を立てられたり、言われたりするは嫌だった。

——それに、

「…用件があるんじゃないですか？　IS学園生徒会長、更識楯無さん」
冷たい声、だと思ふ。

今の自分からすれば…とても冷たい声。敵意と、そして殺意を込めた言葉を振り向くと、私は投げる。

「あら、おねーさんとしては完全に気配を消してたつもりだったんだけど——」
いつから「わかつてたのかしら？」

屋上へと繋がる階段。先程までは誰も居なかったはずのそこに、月夜に照らされる人物が存在していた。

外にハネた癖のある水色の髪に、自分と同じ紅の瞳。口元には笑みを浮かべており、私が振り返った瞬間どこからともなく取り出した扇子を開く

そこには『残念無念』と書かれていた。

「最初から、と言えばいいですか？　具体的には入学の初日——今だから言いますが貴女が一夏を監視していたこと、意図的に部屋割りを変えたこと。諸々わかつてましたよ」
「…へえ、例えば？」

「更識楯無。IS学園生徒会長にして学園最強の異名持ち。現役のロシア代表操縦者であり、裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部「更識家」の当主で、その17代目。

自由国籍保持者でもある。専用機は第三世代 I S 『ミステリアス・レイディ』。…随分と苦勞されたんですね？その機体を作るのに」

自分でも目が笑っていないと思う。相手を追い込むように口元には笑みを浮かべて、相手の情報をどんどん並べていく。

…敵意とは別に、この人には恨みがあるのだ。正確には恨み半分、感謝半分だけだ。

「ツ…待って、なんで貴女がそれを」

「妹さんはご存じないんですね？ I S を組み上げられた経緯については。安心して下さい…貴女についてはまだ誰にも話してませんから。ああ、後貴女の本名は——」

「やめなさい」

敵意のある視線で彼女はそう言った。『いつから』と聞いたのはそつちではないのかと思う。

「…失礼しました。それで、私に何か御用ですか？」

「——どうして私の専用機の経緯を知っているのか、簪ちゃんのことを知っているのか、気にはなるわ。けど、今はあえてこう聞くわ。貴女は何者？」

失礼な。ずっと私達を監視していて、ちよつと藪をつついて出てきたと思つたらこれだ。それに…似たようなことを前にも言われた覚えがある。

「私の事、ある程度は調べてるんですね？ どこまで調べました？」

「両親は既に他界、その後ドイツ空軍大将のフリッツ・ベルンシュユタイン氏に引き取られる。若くしてIS関係の研究機関でテスターを勤めた後IS学園入学…残念だけど、私が掴んだのはこれくらいよ。後は——甘いものが好きなのね？ 結構、女の子らしいじゃない」

む…失礼ですね。甘いものは好きですよ、特に日本に来てからは和菓子とか日本人がアレンジした洋菓子なんてものを食べましたが絶品です。

時々、クロちゃんとお食べに行つては東さんに写真を送つて東さんを発狂させてます。立场上、外にあまり出れないからそういうのあんまり食べられないとか。

やはり東さんと叔父さんがでつち上げた、というだけあつて私が本来何なのかという所までは掴めてないらしい。

…でも、こうしてわざわざ接触してきたということは何かしら掴んでいるということだろう。

更識家については事前に情報を確認している。そして…その頭首である生徒会長の存在も。今後のことを考えて、取引を前提として協力を持ちかけてみるのもアリ、か。どうせ——この人は、絶対私が何なのか掴めないのだから。

「…どうして、私の前に現れたんですか？」

「——貴女は危険だと、判断したからよ」

冗談では無いのだろう。会長の目は真剣で、もし下手な行動をすれば…校則なんて無視してここでISを展開することもやむ無しだと思う。

「貴女の専用機に、あの試合での戦い方、操縦技術。中でも一番違和感があったのは技量よ。誤魔化してるように見えるけど、私の目は誤魔化せない——貴女からは、私と同じ気配がする」

「書類は確認されたと思いますが？私の経歴は提出した書類が全てです」

「…これは私の直感だけど、嘘ね？あの書類通りの経歴の人間が——あんな戦い方、する筈がない」

会長はそのままこちらへと歩みを進めると言葉が続けた。

「人体には急所と呼ばれる部分が存在してるわ。そして…ISを着用しての試合の場合、機体によっては急所に対するダメージ判定はより多くのシールド減衰が発生するわ」

「知ってますよ、その内容でしたら市販されている参考書にも書かれている内容だと思いますが」

「ええ、そうね——でも、それを実戦でやるのは難しい。貴女、織斑一夏君との試合でバれない程度に調整してわざと”急所からズラした位置に攻撃を入れていたわね」

…バれてましたか。といっても、先生にはわかってたんでしょうけど。

「実はこれ、一夏に対する気がつけばいいかな程度の課題だったんですが。予想外の人にバレてましたね。」

「違和感はそこよ。書類上こんな経歴の人間が、”実戦向きの戦い方”なんてしないわ。言いたいこと、わかるわよね？」

「——書類の経歴と比較して明らかにおかしい。調べてもおかしいところは何も無い、でも経歴上明らかにおかしい。つまりは、そういうことですよね？」

「そうよ。だから確かめに来たわ、貴女が敵か、それとも味方か」

「私はIS学園の生徒ですよ」

「ええ、そうね。でも私の直感が告げてるわ…貴女は、異常だと」

——なるほど、つまり私を危険分子である可能性があると判断した。それだけ、みたくいすね。

「貴女は、敵？それとも味方？　もし敵で、学園や生徒の安全を脅かすと言うなら——私が、全力で排除するわ」

「…なるほど」

少なくとも私は学園の敵ではない。自分の目的と、束さんの依頼のために此処に居る。それに、このIS学園という場所も…嫌いじゃない。だからこそ、私の返答は決まっていた。

「私は、敵じゃありません。…後、経歴に嘘はありません。ですが、ある目的のために動いているのは事実ですよ」

「…目的？」

「できれば、更識家にも協力してほしいんですが」

「内容によるわね、それは。甘いお菓子とかなら大歓迎よ？」

それはとても魅力的ですね。是非、今度クロちゃんを連れてお邪魔しましょうか。その際は会長には、財布的な意味で覚悟して貰わなければいけないですが。

そして私は…探し続けるもののキーワードを言った。

「——金色のISを知りませんか？」

中華娘、襲来

機械仕掛けの神、俗にデウス・エクス・マキナと呼ばれるものをご存知だろうか。

物語の内容が錯綜してもつれた糸のように解決困難な局面に陥った時、絶対的な力を持つ存在が現れて全てを解決するという存在であり、そういった物への総称だ。要するに、ご都合主義の神様である。

世界の何処か、とある場所にソレは存在した。

そこは暗く、壁や天井は木々に覆われており人の文明は感じられない。

そんな場所に、その絶対的な存在は佇んでいた。

——ガチャン、

鉄の音が何処からともなくした。

そして次の瞬間、ソレに向かって放たれたのは：敵意ある攻撃だ。

ミサイル、レーザー兵器、実弾射撃。何も無い場所でそんなことする必要があるのかというほどに飽和攻撃が行われる。結果として壁や天井は崩れ——その空間に、光が差

し込んだ。

——ヒュンツ

風斬りの音がした。ただ一度の、風斬りの音。その次の瞬間：それまで鳴っていた砲撃の音はなくなり、今度は爆発音や悲鳴、うめき声が聞こえてきた。

暫くすると、何も聞こえなくなった。再びその空間には静寂が訪れた。

変化があるとすれば、その空間に僅かな光が差したことだ。その僅かな光。己の身体にあたったその光を、ソレは反射させた。

』

ソレは不意に立ち上がる。立ち上がり、己を害した存在でまだ息のある存在に対して止めを刺していく。ただ無慈悲に、終わらせるように。

誰の声も聞こえなくなったその空間で、ソレは歩み：運悪くその空間に紛れ込んでしまった存在に手を伸ばす。

『…』

それは、一匹の鳥の雛だった。翼が折れ、小さな体から血を流す鳥の雛。

まだ息はあった、だが確実に助からないだろうその存在に、ソレは手を伸ばした。

伸ばした手に光が当たる。その手は——『金色』だった。

一夏の墜落事故、と言うとまるで一夏が死んでしまったみたいなので一夏の墜落騒動から何日か経過したある日。

既に4月は後半であり、うちのクラスに限ってだがほぼほぼ最初のような騒がしさはなくなってきた。

平日。いつも朝の授業の準備や友人との雑談等でざわめきを見せる教室内には、ある話題が上がっていた。教室についた時になんだろうと思ひ、馴染みの友人にしてクラスの情報通。布仏本音こと、本音に話を聞けば

『リーちゃんリーちゃん、なんかね〜2組に転校生が来るらしいよ〜』

『転校生？こんな時期に珍しいね本音』

『なんでも中国の代表候補生なんだって〜あ、これお菓子〜』

どこからともなく取り出したチョコレートやグミなどのお菓子を手渡してくるが、本音の制服はどうなっているんだろうかといつも思う。

もしかしてあの制服はI Sで、拡張領域に大量のお菓子が収納されて…冗談抜きでありそう。

実際に拡張領域を収納スペースにするというのは既に束さんがやっているのだ。あの人が、その気になればなんでも出来るのに研究に没頭すると大抵のことが面倒くさくなり、無造作に拡張領域に物を叩き込む癖がある。それを後日片付けていたのは私とクロちゃんだ。ああ…束さん、ちゃんと片付け自分でやってるのかな。

「しかし、転校生か…また変な時期にくるものだね」

「ついこの前入学式だったもんなあ。思ったらこの一ヶ月濃すぎだろ…」

入学式の直後にクラス代表のことでセシリアと試合、その特訓のことも考えたら確かに濃い一ヶ月だと思う。

…しかし、逆に考えたらこの一ヶ月で一夏はこれだけ強くなっている、ということだ。

「一夏。君はそろそろ少し休むべきだと私は思うんだけど」

「そうも言ってもらえない。この前の訓練だってセシリアに一方的にやられたんだから、直すべきところはちゃんと直さないとさ」

「…君は、自分で無理してるのわかってるのかな？」

そう言っただけ私は一夏の前に立つと、そのまま彼を見上げて右手人差し指で目の下を指して見せる。そこにはよく見れば隈がある。睡眠不足か、疲れが取れていない証拠だ。

「——昨日、私が眠ってからまた徹夜してたね」

「うっ…、それは」

「授業に響くし何より体調管理しろって言ったよね。というか、先生にもそのことで注意されたの忘れた？」

一夏の努力家ぶりは、私達のグループ間だけではなくクラス内部や教員からとても高い評価を受けていた。

何も知らない生徒や嫉妬などの感情がある生徒からは未だに嫌味や嘲笑というのは絶えないが…それでも、彼の評価は確実に良くなっている。

しかしながら、その中で問題が起こる。織斑先生が動くほどの、だ。訓練中に一夏が倒れそうになったのである。当時、それを聞きつけた織斑先生は保健室に来るや彼の健康状態が記入されたシートを確認…それはそれは怒った。

要するに、体調不良の原因は過労と睡眠不足だった。聞けば、保険室に連れて行かれるまでの数日間、私達の訓練に加えて篠ノ之さんとの訓練に自主練までやっていたそう
だ。

本人曰く『バイトやっていた時はもつと過酷だったから平気』ということだったが、保健医からも休養するように言われる始末。

それから暫く。多少はマシになったと思っただけ——

「君の努力は少なくとも周囲は認めてる。だから、少しは休むべきじゃないかな」
「…休養、か」

「次無理したら、織斑先生に報告するからそのつもりで」

その言葉に対して慌てふためく一夏。いい薬だよ、全く…。

「お楽しみの所失礼しますリイス。…何か近くないですか、やはり若」

「清香スマッシュユ！」

もはやこのクラスではお馴染みとなつてきているそのやり取りに苦笑する。というかお楽しみみて何。

この二人のやり取り、既に名物でその日そのやり取りを見るとその日はいいことがあるとか、健康に過ごせるとかよくわからない噂があるらしい。

…しかし、近い？何が？

ふと前を見て、少し視線を上げるとほぼゼロ距離に一夏の顔が。

…やや顔が赤いな君は。熱でもあるのかな？

「…リイス、動きづらいんで離れてくれると」

「ああ、ごめん。しかし一夏、ちよつと顔が赤いね。まさか風邪気味？」

「いや、全く健康だから大丈夫だ」

ならいいんだ、なら。あれ、清香とクロちゃんが何かスクラム組んでるけどどうかし

たのかな。

そしてセシリア、君も顔が赤いな。

：何だろう？このクラスでは今エセ風邪が流行ってるのだろうか。

「でもでもくおりむく対抗戦には勝つてほしいな。あ、これお菓子く珍しいチョコレート」

そこにふらりと現れた本音はそんなことを言いながら一夏にチョコレートを渡していく。

本音の中では何か特別なルールがあるらしくて、その日一度お菓子を渡した人にはその日はもう渡さないらしい。：ある意味、一番読めないというかわからないのは本音かもしれない。恐るべしI S学園。

「あ、ありがとうのほんさん。でもそれってどういうことだ？何かあったか？」

『ご存知、ないのですか!』

一夏のその言葉で今度は周囲でこちらを見ていたクラスメイト全員がまるでタイミングを合わせたようにそう言った。

多分事前に話し合いとかしてた訳じゃないよね、なんでこのクラスはこう…クロちゃんといい清香といい、どんどんアッパーになってくのかなあ。

「説明しよう！」

「うおッ?!いきなり背後に現れるなクロニクルさん!びっくりした!」

「狙いましたから。さて、説明させて頂くと来月はじめの対抗戦…1学年生の全4組での対抗戦なのはご存知ですね」

「ああ、それは先生から説明受けたからな」

「対抗戦勝ち抜いて優勝するとフリーパスが貰えます」

「えっ」

「このフリーパス、使用用途は様々で効果は1週間。学食のデザートからアリーナの優遇権利まであります」

「待て、聞いてない」

私も聞いてないんだけど。あれ…おかしいな、先生の話はちゃんと聞いていたつもりだったんだけど。

セシリアも頭の上に疑問符を浮かべている。良かった、おかしなのは私と一夏だけではないらしい。

「けどそれがマジなら、ちょっと頑張らないとな。…個人的にアリーナの優遇権利、つていうのは嬉しい。食堂の方のも捨てがたいな——」

あつれえ…なんか一夏がとてもやる気になつてるような。

そしてクロちゃんとクラスメイトの君達、何全員で『計画通り』みたいな顔してるの。

怖いよ。

「そして織斑さん、安心して下さい。現状専用機持ちの代表は1組と4組だけです。貴方がちよつと頑張つてくれるだけで貴方も幸せ私達も幸せWIN—WIN」

「お、おう…なんか頑張れそうな気がしてきた！」

クロちゃんクロちゃん、それ悪質な洗脳。後が色々面倒だからできるだけ自重してー
!?

「…その情報、古いよ」

「未知の事象!？」

あ、クロちゃんが倒れた。どこの誰かは存じませんがクロちゃんを止めてくださりありがとうございます。

そう思つて声が出した方向、教室の入口を見ればそこには腕を組んで片膝をたてながらドアにもたれている人物が。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったのよ。そう簡単には優勝できないから」

何かまた濃い人が来ましたよ…。

いや、セシリアの時も相当だったけどこつちも大概かもしれない。

わざわざ隣のクラスまで来て宣戦布告。ああほら、クラスメイト全員の目がなんか光って彼女を見てる。

「鈴?!お前鈴か!?!」

ふと、そんな獲物を狩る獣達から少女を救ったのは一夏だ。というか一夏、君の知り合いなのか。なら責任持つてなんとかしてほしい。

「そうよ、中国代表候補生 凰鈴音よ。今日は宣戦布告に来たって訳——えっ、あの、な、何!?!」

いけない、それは不味いよ凰さん…。他のクラスまだまだしも、うちのクラスでそれは不味い——ましてやさつきまでクロちゃんが一夏に優勝を唆してたのだ。

気がつけば一夏と凰さんの周りにはクラスメイト達がゆらりゆらりと集まり始める。

「…二組の代表候補生」

「フリーパス…敵…」

「大丈夫…痛くないよお凰鈴音さん」

本格的に不味い。というか本当うちのクラス、変な所でとんでもない連携する。流石の私達もああなつてしまつてはどうすることもできない——彼女涙目になってるけど助けられない。無力な私達を許してほしい。

「やかましいぞ貴様らッ!」

バンツ、バンツという音が聞こえた。それは出席簿を叩く音であり、鳳さんにとつては救世主であろう存在、

「もうSHRの時間だぞ！時間くらいちゃん確認しろこの馬鹿者共が！」

その言葉で、それまで彼女を包围しようとしていた生徒達は『申し訳ありません！』と大声で返答して自分の席へと猛ダツシユしていく。

…勿論、私達も混乱に乗じて席についた。

鳳さんといえば、一夏に涙目になりながらも「あ、後で…ひぐつ…来るから！」と言っていた。なんというか、また波乱の予感がする。これは胃薬追加しようか。

…この後、1学年の1組は魔境の地であり、準備なしで迂闊に近づくべからずという噂が流れたのはまた別の話。

「それで、向こうはなんて？」

”進展なし”。学校生活をエンジョイして下さい、だそうです

昼時。私とクロちゃんの姿は学食のテーブル席にある。そこで私はサンドイッチ、クロちゃんはカツ丼を食べながらそんな会話をしている。

向こう、というのは東さんのことだ。私は現在一夏と同室で、あまり頻繁に東さんと

は連絡が取れない。だから個室のクロちゃんが定期的に連絡を取ってくれている。

聞くところによると、学校での私達や一夏、後篠ノ之さんの写真を送ると大層に喜ぶんだとか。報告という意味合いで別に私とかは送るのはいいんだけど…変な画像送ってないか、時々不安になる。

進展なし、というのは私の探しものの事だ、あれから束さんも色々知り合いをあたってくれているそうだが、どの知り合いも『金色のIS』なんて見たことも聞いたこともないらしい。

…何か手がかりでもあれば、そう思うが焦っても仕方ない。内心でため息をつくとはサンドイツチを齧る。

うん、やっぱり美味しい。IS学園の学食はとにかくレベルが高い。そして値段もとても良心的である。

例えば今食べているサンドイツチ。コンビニとかで買うと恐らく1000円近いんじゃないかという量で500円だ。しかも、具は多めで大満足である。

とはいっても、食べきれるかどうかは怪しいのでクロちゃんにも食べて貰っている。こう見えて、クロちゃんは小柄なのによく食べる。

あれから、私個人でも情報は集めている。ある条件を提示して学園最強——更識楯無と更識家の協力も取り付けて情報を集めてもらっているが、今のところ何も無い。

まあまだ学園に来て大体一月。過去に3年も探して見つからなかったのだから、まだ早いとは思うけど。

「所でリイス」

「何クロちゃん。残り食べていいからね」

「わあいサンドイツチ！クロエサンドイツチ大好きめう！ …ではなくて、織斑さんとは本当に何もありませんか？」

…はい？

「何も無いって、何が？」

「いやですから、つまるところ関係を持つてるんですか？」

「だから関係って何、時々話題になるけど意味がわからない。どういふことなのクロちゃん」

そこで『えっ』という言葉とともにサンドイツチを食べる手を停止させて真顔になる。いや待って、私変なこと言った？

「…リイス、本当にわかってないんですか？」

「だから、何が——」

「リイスと織斑さんが、恋人関係なのかどうかでことです」

沈黙すること暫く。えっとなつまり？私と一夏が付き合っていると、そういうこと？

いやいや有り得ない。確かに同室だけど、互いのプライバシーは尊重してるし、そういう関係に発展するようなことも一切ない。ましてや、私も多分彼もそんな感情ないよ。何言ってるんだ。

「あのねクロちゃん、それこそ有り得ないよ。何？そういう噂でもまた流れたの」

「本当ですか？だってリイスは銀髪美乳ですよ？女子生徒の間にも同好会が出来るくらいの人気があるとかなんかで——」

「そういう悪ふざけはいいから。それで？」

「噂は流れてますね。リイスと織斑さんが付き合ってるんじゃないかー、っていう」

「本当に変な噂でつち上げるのが好きだなあ…、どうせまた暫くしたら収まるんじゃないよ。」

「噂自体は前からありましたよ。同室になった時も似たような話がありましたけど…どうも最近の話は、織斑さんとリイスのやり取りとかから来てるみたいで」

「はあ」

「『やり取りが完全に恋人のそれだ』とか『なんだかんだバランス取れてて間に入れない』だとか」

「くっだらないなあ…」

「で、リイスにその気は」

「ある訳無いでしょ」

聞き耳立ててるであろう生徒にも聞こえるように言った。これで少しは落ち着いて欲しい。はあ、と溜息をついたそんな時だ

「よ、リースにクロニクルさん」

「やあ一夏　…と、凰鈴音さんでいいのかな？　凰さんもこんにちは」

「えつと…こんにちは？」

噂をすればなんとやら。ご本人が現れた。二人は手にはお盆を持っており、その上には各自ラーメンにランチ。

若干凰さんは戸惑っているような気もする。もしかして今朝のアレのせいかな…大丈夫、私はまだ比較的マシな方だと思うから。あのクラスでは。

「席あいてなくてさ、ここいいか？」

「ああうん、いいよ。珍しく今日は遅めだね一夏」

「助かる。色々あつてなあ…正直、胃が痛くなりそうだ」

「胃薬いる？私、常備してるけど」

「くれると助かる…」

そんな会話をしながら二人がテーブルに腰掛ける。

「一夏、邪魔になりそうなら私達行くけど。御飯もう食べたし」

「え？いや邪魔じゃないぞ」

「知り合いなんですよ？積もる話とか、あるんじゃないのかな」

「まああるけど…二人のこと紹介したいしき」

うーん…邪魔じゃなければいいんだけど。

それから話を聞くと、どうやら風鈴音さんは一夏の幼馴染らしく中学時代に一緒だったらしい。再会するのは1年ぶりだとか。

会話を見てる感じ、普通の人だ。サバサバしてて元気のある親しみやすそうな印象。会話の内容は一夏の昔のこととか、クラス代表のことだった。

そんなこんなで話している光景を見ていて、二人が食事を終えたくらいに

「いつ、いいい一夏」

「…？突然どうしたんだよ、鈴」

風さんが慌てたようにして一夏に詰め寄る。危ないよ、もうちよつと腕がズレてたら食器が地面に落ちてた。

「…えつとその、よ、よび、呼び捨て」

「落ち着けよ鈴、ほら水」

一夏から水の入ったコップを渡されて、そのまま一気飲み。さつきまで普通に話をしていたのに何を焦ってるんだろう彼女は…

「そ、その銀髪の子とどういう関係なの!? 名前呼び捨てって——まさか付き合って、「は、はあ!?!」なんでそんな話になるんだ!?!」

「…いや一夏? 君まで動揺してる理由が私にはよくわからないんだけど。」

「というか、二人共動揺するっていうよくわからない展開でどう収集つけるのこれ。クロちゃんも何ニヤニヤしてるの。まったく…」

「ため息をついて、どうしたものかと考えていた時だ。『ああ、』とクロちゃんが言っつて。『申し遅れました。私はクロエ・クロニクルといいます。ドイツ出身で、担当はデータ解析です。それでこっちは同郷のリース・エーヴェルリツヒ。』専用機持ちで、織斑さんとは同室です」

「珍しくクロちゃんが動いて事態の収集をしてくれた。ありがとうクロちゃん、私としてはそろそろ胃が限界だったから助かるよ。」

「あれ、おかしいな。一夏はほっとしたようにしてるけど風さんの様子がおかしい。」

「さ、」

「い? 胃が痛いのかな。ラーメンって結構重いもんね。」

「それならこの東さんお手製の胃薬を、」

「一夏の馬鹿あああああ!!!」

次の瞬間、そう叫んで風さんはお盆を持って立ち上がり走っていった。

一夏を見れば『：訳わからん』と呟いている始末でクロちゃんに至っては私に向かって『やりました』とサムズアップする始末。

何なんだろこの状況：後で織斑先生に相談しよう。主に保健室で。

その心は迷走

「…はっ、はっ」

朝。まだ早朝と言っているいい時間、俺の姿はIS学園敷地内の公園にある。着ているのは動きやすいランニングジャージであり、待機形態の白式にタイマーを起動させて、既に日課となったランニングのコースを走る。

IS学園の敷地は広い。公園だけでもかなりの広さで、ご丁寧にランニングコースまで整備されている。こっちとしてはありがたいことこの上ないのだが。

セシリアとの一件後、俺は毎日朝の日課としてこうしてマラソンと、後筋トレを行っている。IS学園に来る前はもっと早く起きて新聞配達のアルバイトだとかしてたら、そこまで苦ではない。

…ただ、今日はちよつと理由あっていつもより早い日課なのだが。

「終わり、つと…」

白式のタイマーを止める。専用機、というのとはとても万能のようでもちよつとした便利機能までついている。こういうのは本当助かっていて日常生活面では特にお世話になっている。

確認すると：いつもより数分遅い、という結果だった。

その結果を見てため息をつく。だめだ——もつと集中しないと。

こうしてタイムが悪化した理由は心当たりがある。恐らく、自身のコンディションが原因だ。つい昨日もリイスに指摘されたが、かなり根を詰めて訓練や勉強に励んでいるのは事実。身体に疲労感も感じていた。

正直に言うと、俺はＩＳ学園に来るとは今でも思ってた。藍越に行つて、バイトしながら高校通つて：千冬姉に少しでも恩返ししながら卒業を目指せたらいいと、そう考えていた。

将来の夢なんてなかった。

ただただ、千冬姉に恩返しだけはしたいと——そう願ひ続けてきた。

自前で用意してきたスポーツドリンクのペットボトルを開封すると、息を整えながらそれを喉に通す。春ではあるが、まだ朝は多少冷える。体温が少しずつ落ち着いてきて、冷え始めた身体には少し冷たすぎたかもしれない。今度から温めの中でも用意しようか。

俺は、小学１年生以前の記憶がない。よく覚えていないとかではなくて、無いのだ。聞かされた記憶で知ってるのは、幼い頃に両親に捨てられて：千冬姉が一人で俺を育ててくれたこと、それだけだ。

記憶がない、ということに不便さは感じない。むしろ、よかつたとも思う。幼少期の記憶なんてきつと誰も曖昧だろうし、今の俺には今の記憶があればそれでいいと思つてゐる。

藍越は学費が安い。そして成績優秀者はほぼ学費が免除される。これでも中学時代の成績は上の方だったのだ、奨学生に入る自信もある。就職率も極めてよく、就職先も安定した企業が多い。また、それとは別に大学への進学も用意されている。本当に地元高校かよと疑いたくなるくらいだ。

中学の先生からも藍越への進学を薦められた。『お前の成績なら余裕で合格だ、安心して受けろ』と背を押されて。それがどうしてか、今はIS学園に居る。

…理不尽、だと思つた。

俺はただ恩返しがしたかっただけなのに。

辛かった。嫌だった。心が、折れそうだった。

どうして俺がこんな目に、何故頑張つてる俺がこんな仕打ちを受けなきゃならないのか。

心がどす黒い感情で染まりそうだった。暗い感情に心を閉ざしそうになった。嫌になりそうだった、心が折れそうだった時——俺は、あいつと出会つた。

“カラスと書き物机が似ているのはなぜ？”

そんなアイツ：リイスの質問に対して出した答えは『抗うこと、意思を貫き通すこと』。それに対して、あいつは答えは出ていたと言った。そしてこうも言った、『後は自次第』と。

あの時、俺の心の中で消えそうになっていた何かが：再び脈動した。
理不尽に嫌気が差していた。

諦めそうになっていた。

もうここまでだ、限界だ、と：諦めそうになった。

もし諦めたらどうなる。あのまま流れるままになれば俺はモルモットだ。政府の飼い犬だ。

きつとそれはある意味未来を確約された道なんだろう。だが——そんなもの、人の生きる未来じゃない。ただの、道具としての未来だ。

一度はそれでもいいと諦めそうになった。

——けど、今はそうじゃない。俺は、抗いたいのだ。

後日、あの時のリイスの言葉について調べた。するとあの質問には決まった答えがないらしい。決まった答えがなく、未だに討論がされるくらいの問いかけだとか。

人生も同じ、だと思った。” 決まった道があると思つてしまえばそうなる”。俺は自分で自分の可能性を、抗うという未来を殺しそうになつていた。

だから俺は決めた。I S 学園で俺なりに抗つてみると。

「…両親のこと、なのかな」

俺が今日、いつもより早い理由は：同室でもあるリイスであつた。

基本リイスは俺より早起きである。それがどういふことか、今朝は俺がかなり早く目が覚めたせいもあつてかまだ眠つていた。

起こすのは悪い、というか起こせば間違ひなく俺はそのまま肅清ルートだろう。だから俺は、少し早い日課に行こうとした——その時だ、

『…パ、——マ』

できるだけ音を立てないように、俺は準備をして部屋の入口に歩いていこうとした時だ——何か言葉が、聞こえた。

てつきりリイスが起きたのかと思つた。

しまった、起こしてしまった。そう思つて一言謝ろうとした

『パパ…ママ——ごめん、なさい』

寝言…だろう。けど寝言にしては、とても辛そうなそんな言葉。

どうすればよかつたのか、わからなかつた俺は——そのまま静かに部屋を後にした。

「あいつのあんな声、初めて聞いた」

リースは真面目である。真面目ではあるが、どこか人をからかうのが好きなような：束さんと似ているかもしれない。

常に余裕があつて、冷静で。あの噂が流れたときだつて、イラついてはいたけどかなり落ち着いていた。

：だから、なのか。あいつの弱気な姿とかそういうのは、想像ができなかった。想像できなかったから、それを聞いた時は驚いた。

学園に流れた噂にこんなものがある、俺とリースが付き合ってるんじゃないか、というものだ。そんな事実はないし、関係でもない。あいつも『くつだらな』と呆れていたくらいだ。

——結局のところ、ここ最近で俺がリースに対して持つている感情がわからなくなっているのだ。

友人である、現在藍越に通っている弾からは鈍感だとか唐変木だとかよく言われるが：それは、誤解だ。

自意識過剰：という訳ではないが、中学時代につるんでいて最近学園に来た鈴——鈴から、つまるところ好意を持たれていたことは知っている。そして、弾の妹である蘭や、箒からだつて：そういう感情を持たれていた、というのは知っていた。

それはとてもありがたいことなんだろう。自分のことを好きになつてくれる、信頼してくる、友人になつてくれる。そういうのはとてもありがたいことだ。けど結局、俺は異性からの好意にどうしたらいいのか決められなくて、ただ逃げ続けていたのだ。

リースは、なんとか壁がない。IS学園に来てからは周囲の生徒は全員俺を好奇の視線で見たり騒いだり、今時の社会でありがちな高慢な考え方というか、そんな女性というか。投げられる感情というものはそういうものばかりだった。

そんな中で、あいつだけは…違った。

初対面で、変な感情を一切なく接してくれた。

同室になつてからも、特にこれといったトラブルはない。部屋に居る時は変な話…まるで弾と話すみたいにか話できるし、心の違和感がないのだ。そんな『相方』みたいな感覚の相手に対する感情が最近わからなくなつてきている。

箒の好意は知っていた。だけど、俺はそれに応えることができなかつた。俺が、箒を異性としてではなく——友人だと思つてるから。

鈴の気持ちだつて知っていた。鈴に対する感情や関係、というのが恐らくリースとの関係に一番近いのだろう。

けど、違う。俺は…鈴も悪友だとかにしか思えなかつた。異性として見れなかつた。ではリースは？異性間の壁がなくて、特に何の感情もなく接してくれて、付き合いの

長い友人のように会話ができる。これだけ見れば、鈴だつてそうだ。けど——何かが違う、何かがあつて、それが俺にいつを意識させていた。

最近になつてその意識が強くなったのは、きつとあの噂と昨日の件だろう。鈴に『付き合つてるのか』と言われた瞬間、動揺した。

でも、そんな事実はなく。そんな関係でもなくて。そして、どうして動揺したのかも…俺には、わからなかつた。

「…もう一回走るか」

時間を見れば、まだまだ時間には余裕がある。というか、今日は早く起きすぎた。その後、俺は雑念を振り切るようにもう一度日課のランニングを始める。無理するなど千冬姉やリイスには念を押されていたけど…少しくらいいいだろう。

その後、ランニングをしていたら用務員のおじさん…名前を聞くと、轡木 十蔵さんという人と会う。今まで日課を行つていて会つたことがなかつたが、この轡木さんも毎日朝にランニングをしているらしい。

見る限り壮年の人なんだが…一緒に学園のこととか話ながら走つてみたがこの人只者じゃない。

俺は体力には自信があつた。中学時代では新聞配達や他のバイトで鍛え、学園来てからもいつも訓練に加えてそれなりに自主練もしているつもりだ。

…なのだが、この人はとんでもなく走るのが早い。しかもその速度で『ははは、この程度軽いランニングですよ一夏君』と余裕を持って言う始末。

よく見れば、足踝あたりには錘が。いや本当この人何者だよ。恐るべしIS学園。

…悩むことはあるし、自分の感情に答えを出せないというのもある。

けど、少なくとも俺は抗うと決めたのだ。

それに轡木さんという朝の訓練の師が出来たのは俺としては嬉しい誤算だ。IS学園とは恐ろしいが悪いところでは…ないように思えてきた。

「それで、君に何か言い訳はあるかな一夏」

「いや、そのつい早起きして…」

「それで20キロも走ったと。成る程——君は馬鹿なのか」

現在夜八時。夕食後に清香やクロちゃん達と別れて部屋に戻った後。私は今朝方問題というか、話に出たことについて彼と話し合いをしていた。というか説教。

情報源は生徒会長こと、更識楯無。聞くところによると、朝に一夏が走り込みをしているのを見ていたのだとか。

用務員…というか、IS学園の本来の学園長、轡木 十蔵さんと走っていたらしいが

どうにも朝の朝食時間ギリギリまで走っているのを確認されている。会長としては、ちよつと悪戯しようと思つたがそれを見て断念。流石に轡木さんの前ではふざけたことは出来ないらしい。

以前に一夏が無理して保健室に行つていふということも知つていてか、私にメールが来て発覚という流れだ。尚、先生にも発覚した模様。『…もう呆れて何も言えん』と言つていた。

「…一夏、前も言つたけどちよつと休もう。もう正直に言うけど、今の君は”異常”だよ」

「——かも、な。無理してたのは自覚してる」

「かもじゃなくてそうなんだよ。詳しくは知らなけど、篠ノ之さんとも訓練してて殆ど休んでないんですよ？」

今回の件で、一夏には白式に登録されているデータ形式の予定表を提出させた。

朝4時に起床、それから8時近くまで日課の自主練習をして、篠ノ之さんと約束がある場合はこの時間内で練習をしている。

平日はその後登校して授業に出る、休み時間や昼休みも合間を見て参考書を読んでいふように。放課後は、予定が入つていたらいつもの私達との訓練。ない時は陸上部などに頼んで練習に混ぜてもらつていたらしい。勿論、”黙つていてもらう”という約束付

きで。

そして夜は部屋で勉強や趣味に没頭。これだけ見ると、睡眠時間は大体5時間前後。彼が朝から晩まで根を詰めているのは知っていた。けど……ここまでとは思わなかった。これは千冬さんには見せられない。見せたら卒倒しそうだし、絶対怒る。修羅となつて激怒するだろう。

「一夏、取引をしよう」

「取引？」

「この予定表。千冬さんには黙っておく、代わりに……周りが落ち着いたらちゃんと休むこと。そうだね、買い物にでも行ってきたらどうか？」

「買い物、か……そういえばIS学園に来てから、殆ど行っていないな。弾——中学の友達にもちゃんと連絡してないし、会いたいな」

IS学園の設備は充実している。故に、生活の殆どが学園内で完結してしまう。一夏としても、その恩恵に預かり余裕ができた時間を訓練にということだったんだろうけど、恵まれすぎするのも考えものかな。

「どう？嫌なら今すぐ先生に連絡してもいいんだけど。この端末の送信ボタンを押すだけで多分すぐ飛んで来るよ？」

「いやそれは困る。……そうだな、わかった。対抗戦が終わって落ち着いたら息抜きにそ

うするよ。練習とかも量見直す」

やつとわかつてくれたか。

まったく、君は本当に頑固だ。こうさせるまで何度この話をしたことか：

「ならさ、リイス」

「ん、何？」

「いや、その時に買い物とか付き合ってくれないか。多分結構買い込んだりするかもしれない。多分結構買ひ込んでくれるかもしらなくてさ——」

一夏、君は私を荷物持ちか何かと思ってるのか。

だとすれば色々考え直さなければならぬ。

「私は荷物持ちじゃないんだけど」

「ああ、悪いそうじゃない。ほら、買い物する時にモノの良し悪しとかよくわかんなくてさ、それで」

「…荷物持ちだったなら断つてるところだよ。ま、それならいいよ。予定は空けておくから」

『助かる』と返答する一夏。その後、部屋の中にある急須：一夏が今日轡木さんから譲り受けたという、日本で言うところの侘寂さの中にも品がある…：でも言えばいいのか、いかにも名品と言った感じのそれでお茶を入れ始める。

「緑茶だけど、リイスはいるか」

「もうう」

緑茶は大好きだ。恐らく日本に来てから最も好んで飲む飲料品の1つで、最近では茶道部にも顔をだすようになった。

ちなみに一夏は急須と一緒に湯呑も譲り受けたそうだ。2つ。今度轡木さんにはお礼を言いに行こう。

——ドンツドンツ、ドンツ！

「何だ…？ 箒かな」

「また何かしたの君は」

「あー…ほら昨日の胃が痛いつて行つてた案件」

色々大変だなあ、そう思っていると部屋の前から声がした

「一夏あ！ ここ開けなさい、一夏あ！」

どうやら訪問者は篠ノ之さんではなく凰さんらしい。

一夏が疲れたようにドアに歩いていくのを見ながら私は『ずず…』という音を立てながら緑茶を飲む。

「なんだよ鈴、今何時だと思つて…」

「まだ夜の八時よ！単刀直入に言うのと、私今日からこの部屋に住むからよろしくね！」

「…はあ!？」

なんだか騒がしくなつてきた。空になつた湯呑みを部屋にあるテーブルの上に置くと、私も入り口へと歩いていく。

すると鳳さんは、私を見つけた瞬間私を指差す。いや、凄く気分悪くなるから指をささないでほしい

「えーと…エーヴェルリツヒさん、「もうn回目になるけどリイスでいいよ」じゃあ私も鈴でいいわ！」

勢いある人だなあ、所で私？私に何か用件かな

「リイスも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うしのんびりもできない。実はあたし何故かは知らないけど一人部屋なのよ、だからかわつたげようかと思つて」

「いや別に一夏と同室であんまり気も遣わないし色々楽させて貰つてるから問題ないけど、そこまで言うなら代わる？色々手続きいるかもしれないけど」

「遠慮しなくていいわよ！あたしポストンバッグ一つあればどこでもいけて、準備もしてきたから——つて、え？」

いきなりマシンガントークしてたのを止めて、困惑する鈴。

えっとこういう時どうすればいいんだったか——とりあえず私は鈴に『ちよつとごめん』と言うと部屋の外に出て、

「クロちゃん、居るー?」

2つ隣の部屋。個室。その住人であるクロちゃんに直接声を投げかけた。勿論わざとだ。ガチャ、という音がして1023号室の扉が開かれるとゴシツク調の私服を来たクロちゃんが満面の笑顔で現れる。

それを見た鈴はといえば『ひっ』と小さな声をあげた。何をそんなに怖がつてるんだ、大丈夫だよ多分。

「はいはいクロエですどうしましたか」

「えっと……鈴が一夏と一緒にになりたい?」らしいから、クロちゃんの部屋行っていい?」

「——ほう」
部屋のなかから騒ぐ声が聞こえる。一夏に鈴、どうしてそんなに慌ててるんだい。私は事実を言ったただだと思っただけだ

「話はわかりました。ではリイス、私の部屋にどうぞ。 ……全て私に任せてくれれば上手くいきます。任せて下さい」

「あ、うん。厄介になるねクロちゃん 一夏、もし諸々の手続き進んだ場合荷物回収に来るから——」

そのまま私はクロちゃんに手を引かれて、1023号室の前まで連行される。部屋の中を見れば随分綺麗にしてるんだなあと感じる。

その後、部屋に入る間際にクロちゃんが部屋の外に向かってハンドサインのようなものをしたように見えたけど、私は何も見てない。廊下の方から騒音とか悲鳴とか聞こえた気がするけど聞いてない。

「……」

目が覚める。寮の部屋のベッドに備え付けられている時計を見れば、まだ朝の5時半を指していた。

私を含めて3人という、少々眠りづらいベッドから身を起こして立つと、背伸びをした後にそのまま窓際へと歩いていく。

翌日。1023号室。元々クロちゃんの部屋には現在私を含めて3人の住人がいる。私と、クロちゃんと、鈴だ。

何故鈴が居るかといえば、その事情は昨日に遡る。クロちゃんと部屋で話をしていたら、ジュースが切れる。私も緑茶が飲みたかったのでそのまま部屋を出て自販機コーナーに向かうと……そこにはなんと鈴の姿が。

『鈴?どうしたのこんな夜中にこんな所で。…色々あったと思うけど一夏の部屋に行つたんじゃない。』

『…もう知らないわよあの馬鹿なんて!最低、本当最低ツ!』

『えつと…』

『リース——ちよつとアンタとクロエつて子の所に今日泊めて!』

『何か事情があるみたいだけど…とりあえず、クロちゃんには私から話すから行こう?』

『その前に、あんたに聞きたいことがあるの。一夏の事、どう思ってるの?』

『一夏のこと…? ただの友人だけど、それが?』

『——わかつたわ。それは、勝てない訳だ』

『…?何か言つた?』

『なんでもないわ、じゃあ厄介になるわね!』

…と、こんなやり取りがやつたのが昨日。

事情については詳しく話してくれなかったが、どうやら一夏と喧嘩したとのこと。

そして部屋に鈴を入れて、クロちゃんに事情を説明したら、何故かクロちゃんは納得したように頷いてポンポン、と鈴の肩を叩いていた。

あれがどういう意味だったのかはわからないけど、その後雑談をしたり、一夏の昔の話の聞いたりして、気がついたら疲れて眠っていた。

「…最低限の日課だけは続ける、そういうことかな君は」

窓のカーテンを少し開けて外を見れば、遠くに一夏が走る姿が見えた。そして、一夏の走る姿を腰掛けながら見て指導している轡木さんの姿も。

ふと——轡木さんさんがこちらを見た。どうして気がついたんだ、かなり遠くの筈なのに。ハイパーセンサーだけを起動して拡大すると、此方に向かつて笑いかけながら手をあげていた。

…本当、何者なんだあの人は。

間違いなく言えるのは、千冬さんや他の教員——そして、更識家などの有力者を束ねることが出来る存在ということだ。

とりあえず…一夏宛にメールしておく。白式をつけているなら、走りながらも確認できるはずだ。そう思つて私は『無理しちや駄目だよ、見えてるから』とだけメールを打つ。

クラスリーグマッチ、皆が言う対抗戦も近くなつてきた。それが終わつたら彼には絶対休んでもらう。そう思いつつ私はクロちゃんのを借りて着替えると、部屋の外に出た。

…そうだね、ジュースの差し入れくらいしてあげようかな。

——心の何処かで願っていたのかも知れない。復讐心なんてなくて、ただ昔の自分のままでIS学園に通えていれば、幸せだったのかも知れないって。

——祈りと呪いはよく似ている。幸福を願うことは同時に、自分を苦しめる辛い祈りでもあったのだ。

『私が願ってしまった祈りは、同時に私への呪いだっただ』

悪友 『しんゆう』

五月病という言葉がある。正確には病気の類ではないが、名前の通り五月になるとだるい、やる気が出ない、無気力、そんな状態になる精神的な症状の総称が五月病である。

5月に入り最近私達の中でもクラスの中でも五月病の魔の手を受けてぐったりして生徒も少なくは無い。一組の生徒が大人しくなっている、という事実について特定の教員や生徒会の某会長が精神的に楽になったとかならないとか。

閑話休題。

既に時期は5月で、つい先日はクラス対抗戦の詳細が揭示された。

皮肉と言うか何と言うか、一夏の初戦の相手は鈴だった。

それを見た時の鈴は『あー…丁度いいわね、やる気出てきた』などと呟いて非常に闘志を燃やしていた。

対して一夏はと言えば、『…初戦は鈴か』と元氣なく言っていた。鈴と一夏の間に何があったかは不明だけど、これだけテンションの低い一夏も珍しいと思う。

そうして、対抗戦当日。結構前から告知されていただけあつてか、アリーナの観客席にはかなりの人ばかりが出来ていた。

席に座りきれずに、立って見ている人も見るだけで確認できるし、そして聞く限り入りきれなかった人はライブモニターで観戦をするらしい。

普段、アリーナといえば私達のように練習で使用するか、授業で使うか、またはイベントの時に使用されるのが殆どだ。なのでこうして人がかなり居るといのはなんと
いうか珍しい。

少し前の朝のSHRで織斑先生から告知もあつたが、IS学園の1年以外の生徒だけではなく上級生、外部からの来賓・観客もかなり大勢居る。

それらが考える事というか、目的は恐らく一夏や鈴などの専用機持ちなのだろう。IS学園という場所で他国の技術の結晶が見られるのだ、だとしたらデータをサンプリングする為に見に来る人間だって多いだろう。

そして、データを集めてまた国は兵器としてISを強化する。他国に負けたくない、遅れたくない。そんな競争のような気持ちで、目前の利益と目的だけに囚われてISを兵器としてしか見ない。

まるで子供の喧嘩みたいに、子供の競争みたいに、ただひたすらにISを強化し続ける、『兵器』として。

…けれど、それが今の形。東さんが宇宙を目指したい、空を飛びたいと願い生み出したそれを都合よく改変させてしまったのはこれまた人だ。

どうせ、その矛先が自分達に向けられたらただ開き直るのだろう、自分は悪くないというのだろう。ISを兵器として扱ってきた人間は。

——ああ、なんだ。私も同じじゃないか。きつと私も……いつか、報いを受ける。

『第一回戦 織斑一夏 対 凰鈴音』

アリーナの電光掲示板には表示されており、1回戦目からアリーナは活気と熱気に溢れていた。

私とクロちゃん、セシリアに清香はアリーナの前の方の席をすぐに確保しようとしたのだが、現在は管制室に居る。

それは何故か。朝早くからアリーナのいい席を確保しようとして動いた私達だが、そこに織斑先生から声が掛かった。

『なんだ、早いなお前達。どうせ席の確保だろう？ ならば、私が特等席を用意してやる、ついて来い』

そう言われて連れて来られたのが管制室だ。管制室は滅多に入れるものではなく、クロちゃんと清香は大喜びして雄叫びをあげていたがすぐに出席簿という凶器で粛清された。

更に『静かにしないなら出て行け』という言葉も付いて。どうやらそれが二人にトド

メを刺したらしい。

確かに特等席と言われれば特等席だ。アリーナ内部の状況をリアルタイムで閲覧できて、しかも管制室のモニターは一般のものとは違い大型で高性能。データベースなども完備されていることから、戦闘を見るところではこれ以上いい場所は無いだろう。

…ただ、問題をあげるとすればクロちゃんの機嫌が悪い。

そして私にはその心当たりがある。

「ツ——」

いや、その仇でも見るような視線を止めてほしいんですが。

私は貴女と敵対する気もなければ、喧嘩する気もないので。

…クロちゃんもクロちゃん、篠ノ之さんを煽るようにガン飛ばすのは止めて欲しい。

本当頼むから。

管制室には篠ノ之さんも居るのだ。私としては問題はないけど、篠ノ之さんがどうしてか私を嫌っているのは知っている。

そしてクロちゃんと篠ノ之さんは、ちよつと前に一悶着あったとか。詳しくは聞いてないけど、見る限り二人の間の空気は最悪だ。できるだけ関わらないようにしよう。そうしよう…ああ、まだ何もしてないのに疲れてきた。

織斑先生に『関係者以外ダメなんでしょう？ いいんですか？』と聞いたら、何だそん

なことかと言うように返事が返された

『私の関係者だ。ほら、関係者だろう？だからいいんだよ。それにお前達があゝの馬鹿者を鍛えてやってくれているのは知っている。それに対しての私からのちよつとした礼だよ、それになるかすらわからないが』

と返された。いや先生、本当ありがとうございます。後苦勞かけます…。

そして、対抗戦の会場には生徒会長も居る。会長は対暗部の人間であり、彼女の仕事の1つは『織斑一夏の護衛』だ。

今日、この第三アリーナで行われるクラス対抗戦は新入生だけでの試合ではあるが、学園としてはそこそこ大きなイベントの1つである。

学園としての1つの大きなイベントであり、来賓や外部からの来客も当然来ている。つまり、何が言いたいかといえば『そんな中で男性操縦者でバックの薄い一夏は狙われでもおかしくない』ということだ。

無論、考えすぎかもしれないし警戒しすぎかもしれない。けど私からすれば、それはおかしいことではない。可能性としてはゼロではないし、むしろ何があってもおかしくない状況。それにご丁寧にも1回戦は一夏と中国の代表候補生である鈴の対戦。

…とにかく、一夏と鈴の試合をしつかりと見ておこうじゃないか。何もなければそれでいい。

『それでは、両者アリーナへ入場した後規定の位置へ移動し、待機してください』
そんなアナウンスが流れ2つのピットゲートからは2機がアリーナへと進入する。
1機は、一夏と白式。そしてもう1機は——鈴と、鈴の専用機『甲龍』だった。

「…鈴、その」

対戦相手。待機位置である鈴の正面。俺は気まずい気持ちで口を開いた。

…それはそうだ。つい先日俺は鈴と喧嘩して、その時にある出来事に対して答えを出してしまったのだから。それで降殆ど鈴とは会話していない。学校内で会っても、会話すらせずすれ違うことばかりだった。

そんな相手に対してどう言葉を形にしたらいいのか。俺は困っていると、

「ああもう！ウジウジして女々しい！一夏らしくなくて苛々するのよー！」

「り、鈴？」

突然。個人間秘匿回線で通信が飛んできた。

通信ウィンドウの中の鈴は苛立っているようにしており、俺だけに聞こえる通信を通じて送られる声は、とても大きな声だった。

「あたしは、自分の気持ちに整理をつけたわ。そして、自分に対する答えもね。…あんたは、一夏はあたしの親友よ。——それ以上でも、以下でもないわ」

後半の鈴の声はどこか震えているようにも感じられた。

だが…鈴は、その言葉を最後まで言い切った。通信越しではあるが、俺の目を見て。

…何してるんだ織斑一夏。男だろう。貫き通すと、抗い続けると決めたんだろう。

俺は男だ。だから…女の子の気持ちなんてのはわからない。けど、もし俺が誰かを好きになって同じ立場になったらって考えたら…少なくとも、俺は辛い決断だと思う。目の前の女の子は、鈴は。『俺の親友』は、決意を見せたんだ。だったら俺が今度は答えないでどうする。

「…あんたは、どうなのよ一夏。あたしは、あんたの何?」

息を吸う。気がつけば試合開始までのカウントダウンはスタートしている。

——あの時も、似たような状況だったな

そう思い、俺も言葉を形にする。

「鈴は、俺にとつての大事な存在だ。大事な、かけがえのない —— 親友だ」

言った。

その言葉を聞いた鈴は、ウィンドウ越しでよく見えないが…涙目になっているようにも見えた。

「あー…スッキリした。これで、またいつも通りの関係に戻れる訳ね」

「…そうだな、また いつも通りだ」

「けどね、一夏」

ブザーが鳴った。正面の鈴は不敵に笑って。

「一回ボコらせなさい、一夏」

正面の鈴の肩に存在する非固定浮遊部位。それがスライドして、中央の球体が光つたと思ったら――

俺は、打撃された。

「実はあたしもあのフリーパスっていうの、欲しいのよね。フリーパスのついでにあたしの八つ当たりに付き合いなさい！」

理不尽な――！けど、俺は理不尽に抗うと決めたんだ、だから

「上等ツ…！負けて泣くなよ鈴！」

雪片式型を構えると俺は、加速した。

「いやあ青春してますね。そしてまた同好の士が増えそうで私は嬉しいです」

「…？クロちゃん？」

「ああいえなんでもないです。ほら、始まりますよりイス」

クロちゃんの言葉でアリーナに目をやれば既にアリーナの空には白式と甲龍が試合を開始していた。

開幕パンチを叩き込んだのは鈴。恐らくアリーナの殆どが何だか理解できないであろうそれを私は、見ていた。

甲龍の肩にある非固定浮遊部位が稼動して…何かが出されたと思っただら一夏が吹き飛ばされたのだ。

「…空気だよね、あれ」

「あら、リースさんもお気づきになりましたか」

「というより見えた…かな」

私の言葉に対してセシリアは頭の上に疑問符を浮かべたようになる。それに対して『ごめん、気がついた』と言いつつ直す。

清香が携帯端末を取り出して投影キーボードとディスプレイを展開して、何かの作業の後に私達全員に見えるように大きめのディスプレイを出す。

「さっきの映像解析してみた。二人の言うようにあれは空気だね、単純に言う空気は圧縮してそれを衝撃として打ち出す特殊兵器」

「中々面白い武装ですな清香」

「うん、私もそう思う。しかも見てる限りあの非固定浮遊部位は任意の方向に撃てるみたいだし、操縦者の鈴の技量も高い」

「それに…あの攻撃は『弾が見えてない』というのも脅威ですわ」

試合は両者互角、に見えるが、経験の差はあるのだろう。

状況はやや鈴が優勢に見えた。

「確かに、弾が見えない。撃たれた瞬間に停止していればもう回避は間に合わない、連射もできる。とても汎用的で厄介な兵器ですが…弱点もありますわ」

「へえ、どんな？」

清香が興味深げにセシリアに聞くと、「そうですね…」と呟いた後。

「銃口、です。射撃武器、特に銃というのは目標とする対象に武器を向ける、視認する、などといったアクションが必要になりますわ」

「ほうほう」

「あの兵装には銃身が存在していません。よって銃身の向きで射撃方向を判断するのは不可能で、発生する空間の歪みだけでは、判断する瞬間には回避できません。ですが…」

そこで言葉を切って、セシリアはモニター内部で戦闘を繰り広げる鈴の“眼”を指差す。

「原則として銃は『見えなければ撃つことは出来ません』。つまりは、銃の銃身ではなく相手の身体に存在している銃身であり、スコープ。それを確認することができれば、反応することも可能ですわ」

「…なるほど、眼か」

「ええ、その通りです。現にほら——今、一夏さんが回避しました」

アリーナでの試合は丁度鈴の衝撃砲を一夏が回避した所であり、どうやら試合もそろそろ後半戦のようだった。

セシリアの説明は、狙撃手の意見を取り入れたとても理解しやすい説明だ。そして、ほぼその通りである。あの兵装の弱点は『相手を操縦者が視認しなければならぬこと』。

これだけ見れば銃と大差ないようだけど、大きく違う。銃というのはスコープなどを通して相手を視認することが多い。銃を構える、という動作も相手を狙うためのアクションだ。

対して衝撃砲は『操縦者が視線を動かさなければならぬ』。砲身がないなら、銃弾が見えないなら相手の体の動きを見ればいい。

確かに、一夏は最近ISを起動させたばかりの素人、それもドがつくほどの素人。実戦経験も少なく、ISの起動時間という面でも他者に劣る。厳しいかもしれないが、い

くら短期間で自主練や勉強を重ねても鈴という人間との経験差は簡単には埋められない。

だが、一夏は異常であり規格外なのだ。

そんな彼が一度見れば、どうなるのか――

多分一夏には、もう見えている。

「なるほど、ようやくタネが分かったぞ、鈴」

「何ですって?」

俺は今まで逃げに転じていたのを一転、そのままスラスタを吹かせて鈴へと突撃していく。そして――再び放たれたその『空気』を雪片で打ち払った。

…やっぱりか。

「う、嘘ッ!?!」

「見えたぞ、鈴。そのよくわからない肩の非固定浮遊部位は、俺に対して何かを打ち出している。そしてそれは見えない。さっきから俺が一方的に何かに殴られ続けているのは、お前のそれが一瞬光った時だ。そしてその何かの正体――それは、『空気』じゃな

いか？」

俺がそれに気がつけたのには理由があった。

相手を打撃する、というアクションには必ず『ダメージを入れる』という事象が発生する。

その事象は何か。この場合鈴は銃を持ってないので違う、鈴が持つ近接武器：両手に持っている2本の巨大な青龍刀もおそらく違う。

では、他に何があるのか。自分が打撃されるのは、決まってあの肩の武装が稼働した時で、中央が光った時だ。

リースは、俺達のやっている訓練の中で専用機に乗ることが絶対にならない。面と向かって戦ったのはあの決定戦の時だけなのだが：訓練時には多くのアドバイスをオルコツトさんと一緒にくれる。その中に、あるアドバイスがあったのを思い出す。

——『相手の武器だけじゃなく動作や周辺。そういうのを見るのも大切だよ』
だから俺は、暫く防戦と逃げに転じて：見た。

そうして理解したのは、鈴はあの打撃を行う瞬間“俺を見ている”。見られた瞬間に打撃されるのだ。そこまで考えて、理解した。鈴の：あの武器の正体を。

レーザライフルを使用するセシリアに訓練で何度も撃たれているから理解できたが、あの鈴からの攻撃は銃特有の衝撃や痛みではない。つまり『撃たれた感覚』ではな

いのだ。だが俺は何かに攻撃されていた、銃ではない何か——そして眼に見えない、そう考えたなら結論として出てきたのは『空気』だった。

「そして鈴ッ！ お前はその非固定浮遊部位を撃つ時に『俺の方向を見ている』。ならその目線から撃つタイミングをおおまかに予測して、対応すればいいだけだ！」

「くっ…一夏の癖にッ！」

「はっ…じゃあ鈴——本気で行くからな！」

「言ったわね一夏ッ！ あたしも格の違いって奴を見せてあげるわ！」

「ここまで来たら、後は千冬姉から教えてもらったアレを使って、バリアー無効化攻撃『零落白夜（れいらくびやくや）』を鈴に当てるだけだ。」

リース達との訓練中、顔を出しにきた千冬姉が俺に教えた事は——『瞬時加速』だった。参考書で読んだことがある程度で、教わるのは初めてだった。だが俺は、千冬姉からの教えでこれをマスターすることが出来た。

瞬時加速、簡単に言ってしまうえば大量のエネルギーを消費してゼロの状態からマックススピードの加速力を出せる、という技術だ。

だけどこの技術には欠点がある。まず、大量のエネルギーを消費するという点。だから基本的には連続的に多用する事はできないし、そもそも多用して使用できるほどの技量はまだ俺には無い。そして、爆発的な加速力を瞬間的に出すため『直線的な動きしか

できない』という事。相手に読まれれば当然対応されて不発に終わる。

つまり、恐らく鈴相手には一度しか通用しない。

そしてもし外せば、そこまでだ。次はないだろうし、撃てたとして鈴は対応してくる。だから俺は——ずっとあの非固定浮遊部位の正体を探りながら、その対応とどのタイミングで瞬時加速を使用するかをひたすらに考えていた。

そうしなければ俺は鈴には勝てない。

最弱である俺は、チャンスを作らなければ鈴には勝てない。

「…ふっ…」

「いい加減に…はあっ…」

鈴の青龍刀と俺の雪片がぶつかり合い、金属同士がぶつかり合うあまり耳にいいとは思えない音が何度も響く。

距離をとっては鈴から放たれるあの見えない砲撃を回避、そして可能なものは切り払い、それを何度も繰り返して、チャンスを待った。

そして、鈴が一瞬油断したのか、俺は鈴の背後に回ることに成功した。

今だ！——そう俺は思うと、瞬時加速を行うと同時に『零落白夜』を発動。鈴がこちらに振り向くが、もう遅い。　：貫った！

俺が勝利を確信した瞬間、それは起こった。

突如として白式から告げられる警告音、それに反応して俺は加速を急停止させて急いで後ろに下がる。鈴も機体からの警告があつたのか、その場から退避する。

そして…恐らく俺と鈴が最後にぶつかり合う筈だった位置に、一条の光、閃光が奔つた。その閃光が奔る同時に、アリーナ全体に響く衝撃。見れば、着弾点には巨大なクレーターが出来ていた。

燃え盛る着弾点はまるで地獄とでも言うかのように、業火が燃え続けており、事態がどれほど深刻かを物語っていた。

「な、何だ!？」

「い、一体何なのよ!？」

俺と鈴はお互い既に事態が事態で、試合どころではないと判断。

急いで合流すると、その着弾点。煙が上がるその位置を見ながら警戒していた。

「鈴、確認するけど…あれ、お前の攻撃じゃないよな?」

「当たり前じゃない! あんな規格外の、というか下手して直撃貰ったら確実に絶対防御貫通して即死よ!？」 そんなもの、競技に使う訳が…」

——警告、アリーナ中央部に所属不明のISを確認。対象より『白式』、『甲龍』共にロツクオンされています。

そんな警告音を聞いて、煙が晴れ始めた閃光の着弾点を見るとそこには、
「な、なんだよ…あれは」

「全身装甲（フルスキン）!?何よ、あれ」

見た目は確かに女性的なボディラインをしているが、巨大と言ってもいいその四肢に恐怖をも覚える顔面5つ目の仮面。

そこには、全身装甲のまさに『異形』と言ってもいいISが存在した。

惑いし白翼

管制室の中には警告音が鳴り響いていた。

アリーナに設置されているカメラを確認できる監視モニターには、まさに混沌という言葉が似合う光景が映し出されている。

観客席の防衛用シャツターが次々に降ろされていき、観客席の観客たちは我先にとアリーナ出口へと走っていく。

…カメラで確認する限り、逃げ遅れている人や子供も居る。だが多くの人間はそれを無視したり、『邪魔だ！』などと暴言を浴びせて逃げようとする。

そういつた逃げ遅れた人達を救助しようと動いている存在が居た。黒服の、いかにもと言った感じのエージェント達だ。

黒服達は冷静に対応を行いながら、残されている老人や子供に肩を貸したり背負ったりして、無線で連絡を取り——非常用の避難経路の扉を解除してそこに誘導していく。

この黒服達には覚えがあった。黒服達は全員外国人であり…そして、防衛シャツターの閉じた観客席で指揮を執る人物を私は、よく知っていた。

私の養父にして、ドイツ空軍大將——フリッツ・ベルンシュタインだ。

事態は一刻を争う。私は頭の中を切り替えると、そのまま千冬さんに言葉を紡ぐ
”千冬さん”」

名前で呼んだからか、管制室に居るクロちゃん以外の視線が此方へと向く。

「貴様……！ 馴れ馴れしく名前を——」

「黙っている、篠ノ之」

千冬さんと目があつた。観客席では継続して避難誘導と安全確保が行われており、長や更識家の人達もそこに加わっていた。

アリーナ内部には未だに一夏と鈴が残されている。外部からのハッキングで、一部のシステムにアクセスできないようだ。

不明機は大型。見たこともないタイプの……恐らくIS。束さんに連絡を試したが繋がらない。外部に対しての相当のジャマーが貼られているようだ、今すぐ確認するのは無理だろう。

「……何だ、”リース”」

意図を読み取ってくれたのか、名前で返される。呆然としている皆を無視して、千冬さんへと歩み出す。それと同時にクロちゃんへと視線を投げると、無言でディスプレイを展開した。

「——クロエです。発言を許して下さい。時間が惜しいので勝手に進めましたが、ア

リーナシステムへのクラッキングに対するカウンタークラックを開始、5分程で殆どのシステムは取り返せます。ですが…アリーナのシールド管制だけはまだ時間がかかります」

「構わん、続ける」

「感謝を。衛星からの不明機体の映像出します」

本来なら色々というか、問題になりすぎる言葉の数々にセシリアや山田先生からは声が上がりますが、申し訳ないけど今は無視だ。

衛星を通じて捕捉された映像と写真がクロちゃんを展開する大モニターに映されて、千冬さんはそれを真剣に眺める。

映し出されたのは、女性的なボデイラインをしているが、巨大と言ってもいい四肢に、5つ目の仮面。全身装甲の『異形』だった。

「…あいつは関与しているのか?」

「現在連絡が取れませんが恐らくNOです。また、確認できた不明機はこれのみですが周辺に対する強力なジャミングを確認。状況不明のため、他に敵機が居る可能性もあり。推定危険度は暫定Aです」

緊急時にどの程度の危機かということを表すために、危険度というものがある。通常犯罪であればD、テロや紛争についてはC、国家や団体に対する緊急事態はB、そして

…社会への影響を及ぼす事態・緊急事態での状況不明かつ詳細不明はAである。

状況としては、現状読めない。突如として襲撃されたということしかわからないが：アリーナのシールドはかなり頑丈に作られている。それも、『競技用』IS：専用機だったとしても簡単には破られないように作られている筈だ。それを簡単に破壊した、ということはそれだけで脅威でもある。

「…了解した。クロエ、お前は此処に残って管制権限の回復と、まだ残っている人間を支援しろ」

「了解。私の端末と管制室の端末を同期させます…すぐに取り返しますので、少し時間を下さい」

それを確認して私は無言で管制室から出ていこうとする、

「ま、待て！どこに行く！」

それを止める存在が居た、篠ノ之さんだ。

「何だ、まさかエーヴェルリツヒ——逃げる気か？」

「…」

「”一夏が”今危ないんだ、貴様はそれを見捨てて逃げ——」

「煩い」

イラついた状態、しかもこの状況に対応するための私としての口調で、そんな言葉が

出てしまった。

…しまった　と思うがもう遅い。

今の発言にイラついたのは事実だ。

今彼女はなんと言った？　”一夏が？”

「危ないのは、”一夏と鈴”に、まだ残ってくれてる人達。キミの発言は間違いだ」

「…あ、」

彼女と目を合わせる。

何か感じ取ったのかはわからないけど、今は優先順位がある。

「リース。第二段階まで私が許可する　——クロエもそのつもりで動け」

「…了解。無茶しますけど、いいですよね？」

「程々にしろ。後　——ちゃんと帰ってこい」

恐らく千冬さんのそれは、多く意味が込められた言葉。

私はちゃんと帰る。まだまだやる事が沢山あるし、目的も果たしてない。…一夏との約束もあるからね。

「一夏と鈴を連れて帰ってきます。それでは、」

「——Viel Glück（幸運を祈る）　リース」

その言葉に対して私は

「Ich bin gleich wieder da (すぐに戻りますよ)」

そう返した。



「さて、と…」

アリーナにある非常用出口を通り、管制室の屋上に私の姿はある。そこから確認できるのは：アリーナ内部の光景。天井から叩き割られたアリーナシールドと、内部で戦う一夏と鈴の姿が確認できた。

が、私はまだ出撃しない。クロちゃんの合図を待っているのだ。その合図までは、少し時間がかかる。

…今の私は、とてもとても機嫌が悪かった。

一夏は、私にとつての友人だ。同室になってから彼の一面をたくさん見てきて、正直もう他人じゃない。そんな一夏に危険が迫るのは、何だかとても気分が悪かった。

鈴もそうだ。接しやすくて、明るくて、元気で。流行りとかに詳しくて、雑に接しているように見えて実は気遣いができて。すごく、いい友達だ。

今の私の中にあるのは、明確な殺意と敵意。既に久しくも感じる…あの3年間ですつとそうしてきた時と同じ感覚。

目的のために殺せばいい。奪えばいい。害するなら、邪魔すれば排除すればいい。——あの日からずっと、そうして生きてきたんだから。

…でも、今の私にはあの時と全く同じ感情は持てなかった。

怖くて不安なのだ。これから私がやることを二人に見られて——そうしたら二人が離れていくんじゃないかって、そう思えて。

一夏は軽蔑するだろうか、私を見て。

関わりたくないって、思うだろうか。ああ…それは、ちよつとやだなあ。

でも、そうならきつと——そうならなんだろう。私が今までにやってきたこと。それが知られるだけの話。そしてそれは…私の自業自得だから。

割り切ろうとした。それで納得しようとした。なのに、

少しだけ…チクリ、と胸が痛くて。とても辛かった。

『聞こえますかりイス』

クロちゃんからの通信。いよいよ…かな。

覚悟を決める、まだ感じる違和感を無視して私は集中する。

「聞こえるよ、クロちゃん」

『第一段階承認完了』。まだジャミングは解決してませんが、可能な限り隠蔽工作完了。今からはオペレーターとして支援します。——いつでもいけますよ』

「ん。 ……ねえクロちゃん」

IS：ヴァイス・フリーユージェルを展開する。

そして、展開と同時にメッセージウィンドウが表示される。

『 ……機体情報が更新されました。確認して下さい』

機体名：第三世代型IS 万能機動型 ヴァイス・フリーユージェル

”装甲機能 『無段階移行』 制限レベル1”

搭載武装： 五五口径 多様性役割大型ライフルソード『シユツルム』”解除レ

ベル1”

機殻実体剣 『バルムンク』?2”解除レベル1 特殊兵装使用可

能

・ ・ 『セラフ・システム』”解除レベル1 限定使用許可”

以上。』

それを確認した後、右手には五五口径 多様性役割大型ライフルソード『シユツルム』を展開して、言葉が続ける

「…自分の気持ちがよくわからないって、だめなことかな」

『そんなことないですよ。リイス、人それを変化というんです。少なくとも…いい方向にリイスは変わっていると、そう思います』

だといいな、と呟く。そして、管制室へと通信を繋いで、言う。

「…リイス・エーヴェルリツヒ。状況に対する殲滅行動に入ります」

アリーナでの正体不明の襲撃者、千冬はこれを『異形』と呼称することにした。それとの戦い。その状況は1つの変化を迎えていた。

アリーナの空で飛び交う閃光と、鉄と鉄がぶつかり合う音、そして——その空を駆ける3つの影。

1つは織斑一夏と白式。機体の高い加速力と性能を生かしてただひたすらに『異形』の攻撃を避けながら攻撃のタイミングを伺う。

1つは凰鈴音、接近戦を仕掛ける一夏の後方から非固定浮遊部位——『龍砲』で援護し続け戦っている。

そして最後の1つは『異形』だ。

両手に装備された高出力のレーザー砲、アリーナへのシールドを貫通し、巨大な爪痕を残したそれを撃ちながら、同じエネルギー兵器のレーザーバルカンを二機に対して連射する。

「糞ッ！ 辛いな——なんだよアイツの機動力は、早すぎて中々追いつけない！」

「それだけじゃないわね。奴の兵装、あの両手のゲテモノもそうだけど、撃つてきてるあのレーザーバルカン、あれだつてかなり規格外の武装よ一夏」

状況は、あまり良くないという状況から『最悪』という方向に変わりつつあった。

圧倒的な性能と出力を誇る白式ですらも、一夏が完全に使いこなせていないというのもあるが『異形』との追いかかけ合いでは後手に回るしかなかった。そして、鈴の甲龍もまた、簡単にはその異形に追いつけずにいた。

2人が2対1の状況下で劣勢なものにはまだ理由がある。

その理由は『2人が試合をしていた』という事だ。

「鈴、エネルギー残量は後どれくらいだ？」

「…180くらいね。正直、比較的燃費のいい甲龍でも長く持つとは思えない。一夏は？」

「俺は後130くらいってところか。そして俺も、あんまり長くは持たないと思う」

エネルギー残量が最大であつて、お互いに消耗していかない状態での2対1なら、まだ

勝機はあったのかもしれない。

だがしかし、対抗戦というイベントで試合を行っていた2人は、肉体的にも精神的にも、そして機体自体もかなり消耗していた。

マシンスペック上の話をすれば甲龍と違い、白式はその圧倒的な機動力と性能の代償としてかなり燃費が良くない。

燃費が良くない上に、既に一夏は試合で瞬時加速に、不発に終わったが一度零落白夜（れいらくびやくや）を使用している。恐らく、零落白夜を使用できるのは良くて後2回。このまま戦闘を継続すると考えた場合、相手の攻撃をほぼ受けないと考えたとしても発動できて1回だろう。

「本当、ちよつと不味いかな」

「何よ一夏、まさか怖気づいたの？　じゃあアンタだけでも逃げなさい、後はあたしがやっというてあげる」

「ぬかせよ鈴、誰が怖気づいたって？　……ここで退くわけには行かない。退いたら、男が廢る」

「まったく——　一夏のそういう所、”好きだったわよ”」

「……そりやどうも！」

「無事帰れたら学食の特上パフェとやら奢りなさいよ一夏？」

「正面！」

「変なフラグを立てるな！後あれは高いからせめて大盛りにしろ！　っと！」

異形の腕から放たれるその閃光を回避し、一夏は前に出る。そして雪片で一撃を叩き込むが、巨大な腕で防御されて有効打を与える事はできなかった。

「くっそ、硬いッ！　しかもあんなデカイ図体して尋常じゃないくらい早いぞ！某粒子生成装置でも積んでるのか？　大気圏をマッハ2で飛行できるアイツなのか!？」

「一夏、それ色々不味いから！　というかそれ結構前に出てた小説に出てくる機体でしようが！　あんなゲテモノ機体なんて誰も相手にしたくないわよ！」

「だよなあ、追尾式の化け物ミサイル積んでないだけマシだよなっ！」

異形の攻撃を回避しながら、そんな日常的なふざけた会話を繰り返り広げる2人だが、そんな会話でもしなければ内心やつてられなかった。

余裕があるわけじゃない、むしろ無いというか最悪だ。だからこそ、何でもいいから会話をすることで『諦める』という事だけは避ける。

どちらかが諦めたら、きつと相手が撃墜される。2人の内心にはそんな思いがあった。

「なあ鈴、さつきから思ってたんだけどさ——アイツ、何かおかしくないか？」

「おかしい？　何がよ」

「なんというか…そう、そうだよ。動きが機械じみてないか？」

「はあ？　一夏、アンタ何言ってるのよ。　　I Sは機械……」

そこで再び異形からの砲撃。

そして一夏はそこで思う。

やはり、先程と同じではないか？　と。

砲撃を回避した後に、再び回線を開き自分の意思を伝える。

「そうじゃなくてさ、アイツの動き——パターンがあるというか、パターンに基づいた動きしかしてこない気がしてさ」

「…何が言いたいのよ」

『『本当にアレは人が乗ってるのか？』。あんな異常な形の上にパターンとしか思えない行動、それに奴のあの尋常じゃない加速度に人が耐えられると思うか？　いくらI Sを使用していたとしても、あんな常時瞬時加速に近い速度出してたら確実に人は死ぬぞ』

「——確かに、アイツはさつきからあたし達が会話している時はあまり攻撃してこない。そして今のところ『あたし達しか狙っていない』。一夏の言いたい事はわかる、でも」

「でも、何だよ？」

「無人機なんてありえない、だってI Sは…人が乗らなければ動かすことなんて出来ないからよ。仮に無人機つてもものが存在してるとしたら、そんなものあたしは聞いたこともないし、もし存在するなら世間でも有名になってる筈よ？　無人化されたI Sの使い

道なんて、ほぼ無限じゃない」

「だけど、俺は奴がどうにもパターンに沿ってしか行動しない機械にしか思えない。可能性の話だ、もし——奴が無人機だとしたらどうする？」

「何よ、勝てるって言うの？」

「チャンスを作れば、な。あれが人じゃないと考えるなら、容赦なく攻撃できる。俺の雪片の零落白夜を使ってバリアーを切り裂いて、奴を真つ二つに出来る」

「仮にそうだとして、奴にそれを当てるのは……至難の業よ？ 確率で言えば——数パーセント、ううん……もつと低いかもしれない」

確かにそうだ。

ただですら化け物じみた動きと火力を持っているあの異形は、一瞬のこちらのミスで自分達を殺すだろう。

今は何とか避けているし、エネルギーが残っているおかげで耐えているが、エネルギー残量がデッドラインを超えた状態で奴の攻撃をかすりでもしたら、即死だ。

しかしやるしかない、そう一夏が思考した時だった

『織斑さんのそれ、実はあたりだったりするんですよ』

二人の通信に割り込んできた存在が居た。白式と甲龍の通信の通信ウィンドウに新たに出現したのは……クロエだった。

「クロニクルさん!」

「ク、クロエ!」

『はいはい。いつもニコニコ現金徴収、クロエ・クロニクルです』

メッセージウィンドウの中には何やら作業をしながらドヤ顔を決めるクロエが。それを見ての一夏と鈴は、とにかく慌てた。

「な、なんでまだ避難してないんだ!?そこは管制室か!」

『まあ色々事情があります。千冬さん”達も今此処に一緒に居ます』

クロエが自分の姉の名前を直接呼んだことで一夏、そして鈴も困惑する。

何故?どうして?どうして彼女が直接千冬の名前を呼んでいるかと。

『時間がないので以下省略で。あの襲撃者、呼称名『異形』は無人机です。衛星からのデータと、私の方で機体のスキャンをしました。あれには本来あるべき反応が極僅かにしか存在していません』

「あるべき、反応?」

『はい。諸々理由はありますが:端的にいうと体温ですよ、本来ISというのは操縦者が居てはじめて稼働します。ですがあの機体にはその反応が”極僅かにしかない”。生きていないと断定してもいいでしょうね、よって無人機です』

そして、とクロエは続けた

『お二人には無理をさせました。救出が遅くなってしまい申し訳ありません』
「…それ、どういう」

『もう大丈夫ですよ。現状このクロエが知る限り、最強の戦力が応援に向かいました。
”彼女”、ぶっちゃけ今非常に機嫌悪いんでかなり強いと思いますよ』

「…彼女って、」

一夏の言葉は最後まで続かなかった。前方、対峙する無人機に対して射撃音と同時に銃弾が降り注いだのだ。

更に降り注いだ銃弾は自分達があればだけ攻撃して、ほぼ傷すら入らなかったのにもかかわらずその異形に対して明らかな傷をつけていた。

そして、その射撃音を聞いたことがあった。一度だけ、たった一度だけではあるが…覚えていると言われたのだ、彼は覚えていた。

『ほら、来ましたよ。——白銀の断刃者が』

上空を見上げる。

そこには、自分にとつてよく知る姿で、よく知る声で。だが…感じ取る違和感と直感で『他人』にし思えない少女が存在した。

銀の装甲。背中で展開されるエメラルドの三対六枚翼。 …感情のない、無慈悲な視

線を無人機に向ける少女が、そこには存在した。

白銀の断苜者

「リイ——」

一夏の呼び声は最後まで続くことはなく、彼女はその呼び声に反応せずただ加速した。

次の瞬間、リイスの姿は『異形』の正面にあり、彼女に対して反応できずに居る異形に対していつの間にか腰の鞘から引き抜いた両手に持つ機殻実体剣『バルムンク』の斬撃を叩きこんだ。

「…硬い」

胴体。人間で言うところの心臓あたりに斬撃を受け、異形は初めて”自分が攻撃された”と認識した。同時に、その瞬間はじめてリイスの存在を認識し、対応を開始する。

ゼロ距離の状態。異形はそのまま追撃をかけようとするリイスから距離を取ろうとするが、それは許して貰えなかった。巨大な胴体の背部に存在するブーストを吹かせようとするが、彼女はそれをさせない。

ブーストで逃げられる前に、彼女は異形を地面への落下という形で加速させた。そして、そのまま反応できずそのままアリーナの地面。未だに燃え盛る業火の中へと叩き込

まれた。

「——逃がすわけ、ないでしょ」

まるでゴミでも見るかのような眼。感情がない眼でリイスはそう呟いてまだ落下状態にある対象に対して、瞬時にバルムンクを即時量子収納（クイッククローズ）して同時に大型ライフルソード『シユツルム』を展開。抵抗できない相手に対して弾丸を叩き込んだ。

「リイス、なのか？」

恐る恐る、一夏が言葉を投げる。

戸惑いと、動揺が混じった表情を浮かべる二人に彼女が返したのは……人形のような、笑みだった。

「ごめん。一夏、鈴。遅くなった」

「な、なんでリイスが此処に？どうして避難してないんだ！」

「私が正義の味方で、友達を助けるために現れた —— なんて言ったら信じる？」

「なッ——」

リイスは『冗談』と短く言う。

状況が状況であるが、一夏には何がなんだか理解できなかつた。

どうしてリイスがここに居るのか、何故”あんな威力の装備を使っているのか”。

何故、自分の知らない——無機質な冷たい眼を、しているのか。

「…鈴」

「ひ、ひゃい!?!」

突然呼ばれた鈴は、呆気にとられていたのか突然呼ばれて驚いたように声を上げる。それに対してもリイスは表情を変えずに『落ち着いて』と言った。

「状況は暫定危険度A。…委員会はこの事態に対して、『学園側での状況対応』の命令を下したみたい」

「冗談でしょ!?!あんなの、あたしや他の候補生じゃ時間稼ぎがいいところよ!?!」

リイスが現地で行動を開始した後、管制室の千冬の元にはある連絡が来ていた。それは：『事体に対しての学園側での対応要請』であった。

IS学園特記事項第21項にはこうある。「本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない」と。これは生徒に対するものであるが逆に言えば：『学園内部で発生した問題については、各国がその対応や責任を負う必要はない』とも取られる。

学園において”予測外事態の対処における実質的な指揮”というのは、すべて千冬に一任されているということもあつてか、委員会は各国からの要請を受けて事態に対する学園での対処を決定したのだ。

「だから、私が出来た」

「——え？」

リースの言葉に対してどういうことかわからない、というように返答する鈴。そしてそれは、一夏もまた同じだった。

「あいつは私が”殺す”。だから、二人はもう大丈夫」

「あんた、何言って」

その時。それまで地面に叩き落されて沈黙していた筈の異形が再起動し、三人に向かって闇雲な砲撃を開始する。大出力のレーザーガトリングに砲台。流れ弾がアリーナの防壁や壁に直撃して瓦礫に変えていく。

「…天井の破壊されたバリア部分。さつき壊してもう修復始まつてるけど、あそこなら通れるから。私がアレの相手をはじめたら、すぐに脱出して」

「な、何言ってんだよ！リースだけ置いていける訳が、」

「アイツを殺すのに邪魔なんだ。キミ達は」

恐らくその言葉は、リースにとつては優しい言葉だったんだろう。異形の搭載している武装は全てが明らかなレギュレーション違反の武装。兵器としての目的を想定されているのは明白だった。

だから、自分が殺す。

今まで自分が散々そうしてきたように、ただあれを消せばいい。

一夏や鈴が手を汚せば、経歴に傷がつく。戦うことで命を落とすかもしれない。

けど、自分ならいい。

今まで散々そうしてきたし、こういう状況にも慣れてる。

それが——リイスが出した『答え』だった。

その答えが周囲に対してどう思われるかも考えずに。

異型が砲撃を放つ。既に周囲に対しての乱射になっているそれを回避しては斬撃を叩き込む。戦闘開始から僅か5分。一夏と鈴では足止めが精一杯という状況だった異形の至る所には、ヒビや損傷が見えていた。

「……もう一度言うよ、邪魔なんだ」

「ツ——俺は、」

迷う一夏の近くに鈴が来て、肩を叩いた。

「撤退するわ。一夏、それでいいわね」

「鈴ッ!?!」

「……私達はリイスの足手まといにしかなくてないのは、十分に理解したわ。この5分でね。だから撤退するのよ」

それは事実だ。異形は、周囲に対して無差別の砲撃を行っている。それは意味がない

ことではなく、三人に対しての攻撃だからだ。威力と物量に物を言わせた、飽和攻撃。そんな攻撃が行われる場所に、既にシールドがエンプティ近い二人がいれば答えは明白。掠めれば、死ぬのだ。

「納得できない気持ちはわかるわ、でも今は行くわよ一夏」
「…ツ、分かつ——」

『わかった』。一夏は、渋々そう返答しようとした時だ。

「一夏あー！」

その場の全員が、見た。

突然、声が響いた。その姿を見たリイスは、予想外の事態だからか無表情な目が見開かれていた。

一夏も。鈴も。その姿を視認し、血の気が引いた。

そして… 異形の攻撃対象としての視認先”としても。認識された。

既に無人となった中継室に居たのは、箒だ。

そして手には…中継室にある、実況用のマイクが握られており、彼女の声がスピーカーを通して響いた。

「馬鹿っ！何してる筈！」

「男なら……それくらいに敵に勝てなくてどうする！」

異形が動く。

周辺に対する無差別砲撃を停止して、そのセンサーレンズは——筈を捕らえていた。

ガコン、という音がした。それは、死刑宣告。異形の腕に存在する大口径のレーザー

砲が筈に向けられた。

砲身のエネルギーが高速充填される。一夏が慌てて異形にに対して止めに入ろうと

するが——間に合わない。

異形と一夏、鈴の距離はかなり離れており、瞬時加速を行っても砲撃までには間に合

わない。

一夏が叫ぶ。逃げろ、と。

その場面で、動きを見せる存在が居た。リースだ。

チャージが完了して、筈に対する砲撃が彼女の身を焼こうとした瞬間、

異形の腕が、斬り飛ばされた。

「邪魔」

それまで、異形の遙か遠方に居たはずのリースが……大きく広げられたエメラルドの翼

を背に中継室の前で2本の剣。バルムンクを構えていた。

◆ ◆ ◆
…これは、私のミスかな。

センサーの左上の表示される『00:10』というカウントがスタートをしたのを確認しながら私は思う。

篠ノ之さんがあんな行動に出たこと。それは私にとつてのイレギュラーだった。

正直に言うと、無謀だ。あれに何の意味があるのかはわからないが、私の理解できない何か特殊な意味があるんだろうか。

何にせよ、下手したら死んでいたのだ。それ程の価値がある行為…だったのかな。

通常なら篠ノ之さんへの砲撃に対応するのは、あの状況だと絶対に間に合わない。機動力のある白式で瞬時加速をしたとしても、だ。

だから私は——切り札を使った。

私のIS…パパとママが作ったと思われるこの専用機に搭載されていたシステム。限界を無視した、無制限の加速を可能にするとまで束さんに言わせたシステム——『セラフ・システム』。

私が束さんに保護されるまでにこれを使ったのは全部で3回。かなり不味い所までいったのは…千冬さんの時。

セラフは、使用時には身体に甚大な負担が発生する。それは機体がある程度軽減して

いるといつても、軽減の限界を超えた負荷は搭乗者に対して直接ダメージが行く。

だから私は、これを知った時緊急時にしか使用しないと決めていた。いわばこれは：“命を消費するシステム”なんだ。

その代償として手に入るのは、無制限の加速。限界を無視した加速能力。

私がああ3年間、生きてこれたのはこのシステムと、自分の異常体質。そして：ヴァイスのお陰だった。

：が、今のこのセラフにはリミッターが掛かっている。それも、束さんが嚴重に口ツクしたものが。

通常の状態ではセラフは使えない。これは、私が同意の上で束さんが使えなくしたからだけど：有事の際・緊急時は権限を持つ人間の承認があればセラフを使用できる。そして、その権限を持つのが束さんと、千冬さんだ。

どちらかの承認の後、クロちゃんが解除コードを入力。そうして初めてセラフを使用可能になる。強制解除コードというものもあるけど：少なくとも、私に使う気はない。本来なら、あまり使いたくないシステム。無制限なら命を代償として、制限付きでもかなりの負担が掛かるんだから。

全神経を集中する。制限付きでのセラフは第1段階での使用は10秒がリミット。それを過ぎると強制的に解除される。

だから、この10秒で私はあの無人機を”殺す”。

「…キミは、邪魔なんだ」

カウント残り6。ISのイメージ・インターフェースを通してバルムンクの特特殊機構を発動させる。

機械的な音と同時にブレード部分が中央から割れるように変形し、両刃の剣であるバルムンクのブレード部分からはレーザーブレードが展開される。同時に加速。加速にして二重瞬時加速相当の速度で、加速する。

カウント残り4。反応できない無人機に対してバルムンクを片方突き刺す。そして残った左手を装甲が比較的薄い脇下から切り上げ、切断した。

無人機が逃げようと回避行動を取ったので、背中を見せた瞬間左手のバルムンクを即時量子収納（クイッククローズ）。シュツルムを展開して射撃。スラストターを破壊した。カウント残り2。推進力を失った無人機が落下していく。こちらを視認し、肩部と頭部に存在しているバルカンで反撃してくるが、狙いがブレすぎている上に私には見えていない。

そのまま落ちていく無人機に向かって加速——胴体に向かって、2本のバルムンクを横薙ぎにした。

カウント残り0。タイムアウト。

落下の途中で私は静止して、アリーナの地面へと落ちていく真つ二つになった無人機を確認する。　：流石に、これだけやれば無力化できたとは思う。

状況を確認する。無人機は無力化、鈴と一夏は——上空にまだ居る。逃げろって言つたはずなんだけどな。

中継室も確認する。こちらは無人。：ちゃんと逃げてくれたみたいでよかった。

：でも、あの一夏に対するアナウンスは何か意味があったのかな。

何かの暗号連絡？だとしたら余程重要な事なのか——

「っ……ちよつと、疲れた」

カウン트가ゼロになって、セラフの効果が切れてすぐ。やはりというか、リバウンドがきた。息を吸えば、内臓に違和感がある。微かにだけど口の中に血の味もした。フラつきも……少しある。

だが、無人機は落とした。一夏や鈴には色々言いたいこともあるし、逆に言われるかもしれないけど、とにかく一度戻って——

『リースつ！上です！』

「……！」

突然、クロちゃんの大声が聞こえた。

上、という言葉聞いた瞬間に反応をしようとしたけど——セラフ使用直後の影響で、感覚が低下しているせいか反応できなかった。

「くうツ……これ、不味いかな」

直後に私を襲ったのは、光と衝撃だった。緊急時に作動する防衛機構の役割も果たす背中のエネルギーウィングが私の前方に展開し、守ってくれたお陰でまだ生きてはいるが——クロちゃんの通信がなかったら、危なかったかもしれない。

生きてはいる、だけどエネルギー残量は今ので一気に減った。できれば当たってほしくない予感がしながら私は上空を見れば、一夏と鈴も同じ方向を向いており、

「冗談、キツイよ……」

そこには、先ほどとよく似た無人機が無傷で存在していた。

確かに、セラフの使用直後で身体に違和感があったのは事実だ。反応が鈍くなっていたのも事実。だけど……ハイパーセンサーは油断せず稼働していた筈。それに一夏と鈴も居るんだ、私が油断していてもあつちのセンサーに引っかかるから筈がない。

じゃあなんで——どうして気が付かなかった？ つ……それよりも、不味い。

私は先程の直撃を食らったとは言え、まだなんとか戦える。だけど、一夏と鈴はもう

エネルギーがデッドラインなんだ。

それに相手は鎮圧・殲滅仕様の無人機：今試合のために競技専用として調整されている装備じゃ有効打撃は入らない。

「一夏！鈴！今すぐ逃げて！流石にもうさつきみたいには行かない！」

焦った声で私は言う。先程のようにはいかない、もうセラフは今の局面では使用できず：私も油断して被弾してしまった。二人を守りながら戦う、というのは不可能だ。

案の定というべきなのか、まだエネルギーはデッドラインじゃない。

いつも通り、そう——いつも通りに戦えば、戦うことは出来、

「ツ……こんな時に、」

まただ。また、身体への負担が来た。

そして：時間にして1秒。私はその場から動けなくて、反応も出来なくて——

「……え？」

気がつけば、無人機が正面に居た。そして巨大な腕部で鷲掴みにされる。

その衝撃で両手に持っていたバルムンクを手放してしまふ。手放したそれが自動的に量子化されて、私は無手のまま無人機に拘束されてしまった。

しまった。最悪だ。この状況では武器を展開できないし、エネルギーウイングでの防御も機能しない。セラフも先程の無人機に対して、“篠ノ之さんを助けるために”使っ

てしまった。

それにどうして反応がなかった。オペレーターにはクロちゃんが、少なくともこの局面には専用機が三機居たのに、どうして——

なんて最悪のタイミングで、こんなことに——タイミング？ 最悪？

「……まさか、」

無人機は私を鷲掴みにしている腕の力を、少しづつ強めている。まるで甚振るように。愉しむように。

そして、私を捕まえている腕を：救援に入ろうとした一夏と鈴に、見せつけるように前へ出した。つまり、人質でもある：ということなんだろう。

最悪のタイミングで、こいつは現れた。

つまり：こいつは ” 最初から居た 見ていた ”

怖いと、恐ろしいと感じてしまった。少なくとも私は油断していないつもりだった、オペレーターのクロちゃんだってそうだろう。

クロちゃんの技術はすべて東さん譲りだ。あの子が使う端末やプログラムだって、並のものではなく ” 世界最高位 ” レベルなのだ。

私の専用機のセンサーにもその応用が搭載されている。なのに——こいつらはそれに感知されなかった。つまりそれは、東さんと同じかそれ以上の存在ということにな

る。

よく見ると、この無人機は先程撃墜した無人機とは装備が異なっている。徐々に力を強めて、私を握りつぶそうとしていくその腕に対して、シールドも減っていく。

五つ目の顔は…嗤っているように見えた。私のシールドが、命がデッドラインに近づいていくのを愉しむかのように。

——ここまでか。せめて…一夏と鈴だけでもなんとか逃げてほしいな

目的がある。復讐という目的が。

まだ生きていたい、IS学園という場所に居たいという願いが。

だけど、諦めにも似た感情が生まれてしまった。

そしてそんな中で…ふと浮かんだのは、努力家で無茶ばかりする少年の姿だった。

…君との約束。守れなくてごめんね。

「生きることを諦めるなッ！」

突如少女の声が響いた。聞き覚えのない少女の声が。

そして、声の後に何かが此方に向かつて飛翔して——それが私を拘束していた無人機に対して砲撃した。

それによつて、無人機がバランスを崩して：私は空中に投げられるような形になった。

「けほっ…けほっ…。助かった？」

表示されるセンサーを見れば、そこにはアリーナの遥か上空に不明機が居る、と示していた。見れば、無人機が攻撃されている。攻撃しているのは：黒い、飛翔する剣の刃だった。

「こちらドイツ空軍IS配備特殊部隊『Hundewetter』所属。東雲マドカと『黒式』——これより、IS学園を援護する」

黒い騎士が、舞い降りた。

黒式

その少女は、空に存在した。

小柄な身体に、肩ほどまである黒髪。そして鋭い吊り目。恐らく、彼女を見た多くの人間が言うだろう。『織斑千冬に似ている』と。

少女が身に纏うのは、”黒”。その見た目は一夏の白式と酷似しているが、白式と違い背部に存在するウイングスラスターが中型であり、少女の手には黒い、少女の身より長大なバスターソードが握られている。

「こちらドイツ空軍 I S 配備特殊部隊『Hundewetter』所属。東雲マドカと『黒式』——これより、I S 学園を援護する」

少女。マドカは無人機に対して初撃を叩き込んだ兵装、”MFTB”というBT兵器にそのまま無人機に対しての追撃をさせ、開放回線でそう言い放った。

「ドイツ空軍…お養父さんの所の、」

『正確には少し違う。リース・エーヴェルリツヒ』

態勢を立て直して、一度下がったリースに対して送られたのは、少女。マドカからの個人間秘匿通信だった。

『私はドイツ空軍の所属ではあるが、正確には姉さ、いや——篠ノ之束の関係者だ』
「束さんの……？」

『少々、篠ノ之束の所で面倒なことになっているらしくてな。私の上官に連絡が来て、それで急いで駆けつけたのだが——すまない、遅くなった』

命を救われた、リイスはそう思った。

もし彼女が現れなければ……自分は今頃ミンチだっただろう。考えただけで恐ろしい。送られてきた個人間秘匿回線のコードは間違いなく束が作成したものであり、それを使ってきたということは間違いなく味方だということは理解できた。

『お父君からお前のことは聞いています。……その二人を連れて撤退しろ。後は私が引き受ける』

その言葉を理解できないリイスではない。先程、自分が同じようなことを言ったように——今の自分達は、ただの的でしかない。

「……信じて、いいのかな君を」

『さてな。それは任せる。……そうだな、1つだけ言うとすれば私も目的がある。私の復讐というものに対してのケジメ、それをつけにきた』

マド力は加速する。そして、“MFTB”で確実にダメージを入れながら、長大な剣を無人機に向かって叩き込む。それを無人機はガードしようとするが、たった一撃。分

厚い部位に対する攻撃にかかわらず、それだけで無人機の防御機構を全て貫通してダメージを与えた。

『さつさと下がれ。死なれては私が困る。：目の前で、生きる事を、抗うことを止めて諦めてほしくはないんだ。私が今の可能性を作る、だから行け』

「二夏、鈴」

未だに残っている二人に対してリイスは声を投げる。

「…撤退しよう。後は、彼女の出番だ」



「——さて、」

リイス達が撤退した後のアリーナ。少女がただ一人だけとなった場所でマドカは一言呟いた。

「…ゴーレム型。かつて篠ノ之束もが破棄した、忌むべき存在」

無人機に向かって加速した。

マドカの機体にはビット兵装以外の遠距離武器が存在しておらず、ほぼ一方的に撃たれる形になる。盾の類も存在していない。これは、彼女が必要としなかったからだ。

『私には守るといふ装備は不釣り合いだ』、そう言つて。

一方的に攻撃される。そんなことは彼女も承知の上だった。機動力と攻撃力に特化したこの機体の防御能力は低い。更に言うなら、この“黒式”の最大シールドエネルギー量は他の専用機と比べても低い。

——過去に対する復讐。それに対して答えを出した少女が欲したのは、純粹な刃だった。

護るための盾ではなく、全てを切り裂くための刃。それが、彼女なりに出した…切り拓くという意味を込めた、復讐への答え。

加速する。両手には少女の身の丈より長大なバスターブレードが握られている。加速し、同時に展開させていた“MFTB”を戻しバスターソードの刃部分に結合という形で収納する。

そして、薙ぎ払う。無人機が放つレーザーガトリング、そして…レーザー砲すらも少女は切り裂き、刃がそれを喰らい尽くした。

「悪いが私にはビーム兵器は無駄だ」

切り払われるビーム兵器。本来なら直撃すればISに対して甚大なダメージを与え

るそれは、少女に対してはただの補給行為にしかなくなっていなかった。放たれるビーム攻撃。それらは全て、少女が持つ長大な剣に”吸い込まれて”いたからだ。

「ISの無人化、それを目指して考案されたゴーレム型。…が、本来搭乗者とのリンクがあつてはじめて稼働するISを無人化させるのは困難だった」

かつて、計画があつた。それはISを量産し、無人化させるといふ計画。

東はこれに対して明らかかな嫌悪感を見せた。彼女としては、それは本来のISやコアという存在からはかけ離れた、それも逸脱したものだったのだから。しかし、開発関係者はそれを知りもせず計画を進行。だが研究は凍結されることになる。ある理由が原因で。

「既にそれはISではない。ただの機械人形…いや、”死体”だ」

バスターソードの一撃。その重さに耐えられず、無人機がアリーナの地面へと落下させられたことでマドカとの距離ができた。同時に。マドカが言葉を紡ぐ。決意の言葉。

「かつての私は犬だった。そして今もなお犬として、猟犬としてここに居る。——」
V o r d i e H u n d e g e h e n”。犬の前に立って、生きていられると思うなよ」

バスターソードを構えた。構えられたその刀身は——黒く光っていた。

「行くぞ雪片」。単一仕様発動……無縫影月」

黒の刃が、その場に顕現した。

歩く。

アリーナの非常用通路、そこを抜けて学園本館を目指す影が3つあった。リースと一夏、鈴だ。そしてリースは、鈴に肩を貸されながら歩いている。

「……めん」

三人は無言で歩いていた。三人はどう話していいのかわからなかったのだ。一夏と鈴の中にはあの戦闘でのリースが……本当に彼女なのか、という困惑が。

そしてリースの中には——そんな自分を見られて、その上でどう言葉を形にすればいいのかわからなかった。

無言。そんな中言葉を放ったのはリースだ。

「助けに来たつもりが怪我して、死にそうになって。二人を危険にさらして……めん」

「——言いたいことはあるわ、でも今はこれで勘弁してあげる。馬鹿ねリース、あたしはあんたのこと頭のいい優等生だと思ってたんだけど」

「…鈴？」

「…あたしは代表候補生よ。この意味、わかる？」

とにかく、と鈴は続ける。

「あたしはここにいて、一夏も、みんなもここにいます。…あんたが傷ついたら、辛いじゃない」

その言葉に対してリイスは言葉を返せなかった。そして一夏も——今の気持ちを言葉にしているのか、どう言葉をかけたらいいいのかわからなかった。迷う。結局この場に
いる全員が迷っているのだ。

「た、助けて！」

そんな無言の空間に声が響いた。三人の知らない声だ。

見れば、今歩いている非常用通路の進行方向。そこに、地面にへたり込む人の姿があった。S学園の制服。リボンの色は青色であり…学園の一年生であることが伺えた。

「生徒…？大丈夫か！」

そんな姿を見て真っ先に動いたのは一夏だった。彼はその一年生に駆け寄るとすぐに安否を確認しようとする。

「え——織斑君!? ……防衛シャツターが降りて、それで黒服の人に誘導されたんだけどその……途中で転んじやって、怖くて動けなくなってる、」

「逃げ遅れたのか……。でも大丈夫だ、俺達と外まで行こう。この先に出口が——」

「……待って一夏」

逃げ遅れた生徒の救助。それは一夏からすれば、ただの救助行為であり”誰かを助ける”という行為だった。本来なら止められることなんてない行為。それを制止する存在が居た。

「キミ、名前は？」

「え？私……？ 1年3組の谷口 凜子だけど……」

「——ありがと。災難だったね、私達も試合中止の連絡の後防衛シャツターが降りたりシステムの誤作動？とかで暫く閉じ込められてたんだ」

「そ、そうなんだ。えっと……エーヴェルリッヒさん、だよな？」

「うん、そうだよ。私は会場設営の手伝いでスタツフしてただけど本当に災難。所で……ここアリーナの南側避難経路なんだけど、どうしてここに居るの？」

リースのその言葉。その言葉の意味を汲み取ったのか、鈴は肩を貸したまま身構えた。同時に鈴は一夏のI Sスーツを無理矢理引っ張り、自分達の方向に手繰り寄せる。無理矢理ということもあって、一夏がそのまま後ろに交代してバランスを崩す。

「な、何すんだよ鈴ッ——」

「離れてなさい一夏……なるほど、そういうこと」

アリーナには四方に緊急時用の非常用通路が存在している。そして、アリーナ自体の通常入り口・出口は1つだけ。北側である。

今回のリーグマッチ、外部からの来賓や来客も多いということで実は観客席には指定席がある。一般・生徒・来賓・VIPの4つに分類され、それぞれが東西南北側の席に分類される。管制室は南側。そして今回、リス達はマドカの言葉の後撤退。”姿を見られることが比較的少ないであろう”南側の通路から出ようとした。

つまり、ここに生徒がいるのはおかしいのである。

南側の観客席はVIP席だ。各国のお偉方が確保している場所であり、”一般生徒は絶対に座れない”。対して一般生徒の席は北側。鈴がおかしいと感じたのは、これが理由だ。

「おかしいな。私、スタッフだから知ってるんだけど……南側避難通路ってVIPの人が誘導された先なんだよね。一般生徒は席から最も近い北側の通路から避難誘導されたはず。——なんでここに居るの？」

次の瞬間、リスの行動は早かった。問いかけた少女が突然焦ったようにして、何かを取り出そうとしたからだ。負傷して、判断能力も鈍っているとはいえリスの反射神

経は並ではない。だからリイスはそれを見た瞬間、空いている右手に、拡張領域内部から拳銃を取り出して――

――パンツッ！ パンツッ！ パンツッ！

銃声が3度木霊した。

それはリイスからのものであり、一夏も、鈴も。ただ何が起こったか理解できなかつた。

「…痛い、痛い痛い痛いッ」

撃たれたのは谷口という少女だった。肩からは血が流れており、その血が制服を赤く染めている。通常ならばただの殺人行為とも取れるその行為――だが、状況が異なつた。

少女から少し離れた位置。位置にして後方に拳銃が落ちていた。携帯可能な小型のものではあつたが、間違いなく人を殺傷できるそれが、そこには存在した。

撃たれた痛みに悶える彼女を意に介することなく、リイスは右手で拳銃を構えたまま、言う

「…何が目的？」

「ひっ」

小さな悲鳴が聞こえた。それは明らかかな、”場馴れしていない”声だった。その声に對してリイスは違和感を感じる。

その違和感を確かめるために、もう一度リイスは撃った。

銃弾は少女の目前。もう少し前に撃てばアキレス腱にでも当たるとは思っていたのではないのかという位置に着弾した。

「いやあ！死にたくないッ！」

悲鳴。命乞いの声。 ……それでリイスは理解した。

「リイス！」

「キミは黙ってて一夏」

「ふざけんな！銃なんて取り出して、彼女を殺す気か！」

「場合によつてはそうする。それに、向こうもこつちを撃とうとした。 ……一夏、煩いから黙っててくれるかな？」

有無を言わさない、覚えのある目。とても冷たい視線を向けられた一夏は狼狽した。狼狽して、心が痛くなつて。だが——言い返せなかつた。

「もう一度聞くよ、目的は何？」

「わ、私…VIP席の人に言われて——それで、」

「…VIP? 何を言われたのかな」

「スマホを渡されて、それで”アラムが鳴ったらボタンを押ししてくれるだけでいい。今回のイベントのお手伝いだから”って言われて——それで、専用機もくれるって」

有り得ない、馬鹿な話だと思った。

専用機とは各国や研究機関が莫大な労力と資産をつぎ込んで作製されるものだ。そんなものを赤の他人に”手伝いをしてくれたらあげる”なんていうのは明らかにおかしい話だ。

少し考えれば分かるはずだ。そんなことは。仮に余程の権力者だったとしても…即断でそんなことは簡単に決められない。

「あの拳銃は?どこで手に入れたの?」

「…ッ、その人から貰った。使うことはないだろうけど、もし見つかったら使いなさいって言われて」

「銃を向けた意味——わかってるよね?」

カチャ、という音と共にリイスはもう一度少女に対して照準を合わせる。そして、少女からは怯えたような悲鳴が上がる。

「…、殺す気はなかったの!ただちよつと脅かしてやればと思つてやつただけよ! それに、あの薬だつて」

「…薬？」

「ISに対する適正率を上げるためとかなんとかで…専用機に乗る時に必要になるから”打ってくれ”って——」

その言葉に反応する存在が居た。鈴とリースだ。

鈴は代表候補生としての教育や訓練を受けている。だから、ISの基礎・応用理論については理解している。ありえないのだ。そんな薬は。そんな適正率をあげる薬なんてのは、存在していない。

ISの適正というのは、ほぼ上がることがない。

例外として、専用機持ちやコアとのシンクロ率によりこの適性が変化することはあるが…薬で変化させるということは、不可能なのだ。

「ちよつと待ちなさいよ。ISの適正を上げる？有り得ない、そんな薬存在するはずがないのよ」

「でつ、でもあの男の人はこれで専用機にも乗れるようになるって」

リースは言葉に違和感を覚えた。

男？その男が彼女に薬を渡して投与した…そして恐らくは——あの2機の無人機を学園内部に侵入させる手引をしたのは、彼女だ。

（——待って、だとしたら）

アリーナを襲撃したあの無人機。そして、恐らく最初から居た可能性がある2機目。アリーナの襲撃、その目的は何？何かの目的があつて…全部計算づくでやつていたとしたら？

恐らく”この少女のことも計算の内”

「ね、ねえ…」

「何？」

少女を見る。見れば、視点は定まっておらず呼吸が荒い。…様子がおかしい。

「さつきから身体が熱くて、なんか頭もぼーっとしてきてて…私、家が資産家なんだ。欲しいものならなんでもあげるから、命だけは助け——おえっ！」

「ツ！鈴、私はいいいから今すぐ一夏の目を塞いで！」

その叫び声で鈴は無理矢理一夏をしゃがませ、頭を抱きしめるような形で彼の視線を塞ぐ。支えを失つて倒れそうになるが、リースは銃を構えたまま壁に手をつき、それを阻止した。

「な、なんだよ鈴！いきなり何するんだ——」

「動いちや駄目一夏!…こんな、こんなやつて!」

こんな光景、一夏に見せられるわけがない。リイスは目前で起こるソレを見ながら思う。

谷口という少女は、少女からモノへと変わろうとしていた。

先程の彼女の言葉の後、口からは大量の血が吐き出された。それを切つ掛けとするように、鼻や眼。皮膚などからも同じように大量出血が起こった。更に、出血があつた部位から千切れるように身体が裂けていき——その少女は此方に助けを求めながらその痛みに蝕まれ…死んだ。

エボラ出血熱。リイスの頭の中に浮かんだのはそんな、人を死に至らしめる病名だった。

…だが、エボラ出血熱とは症状が違う。彼女に対して起こったのはそれよりもっと酷い症状だ。恐らく、これも何者かの計算の内。彼女が投与したという薬は…この症状を引き起こさせるものなのだろう。

ならどうして? どうして今まで発症しなかった。 ”また見計らつたように” 症状が発症した?

わからないことだらけだった。だが、今は

「…一夏、眼を瞑つて。そして絶対に開けたらだめだ」

「——どういふことだよ、一体何が起こってるんだ」

「キミは見ちゃいけない。見たら……傷になる」

この後、三人はアリーナから出て外にて事態にあたつていた更識楯無とその関係者により保護され報告を受ける。2機目の無人機は無事撃墜。それを行った少女……自らのことをマドカと名乗る少女も既に合流していると報告を受けた。

谷口という少女については、間違いなく三組の少女であった。しかしながら、あまりいい噂がなかったことも判明。リスからの報告を受けたドイツ軍部が遺体の確認に向かったが……そこには、遺体といつていいのかすらわからない、臓器や肉片、骨といった……人だった何かしか残っていなかったそうさ。

対応に当たったドイツ軍特殊部隊の担当者はこう語った。

『身体の中から何かに喰われたように見える』と。

決別 『こたえ』

クラス対抗戦での襲撃事件。世間に対するこの騒動についての報道は、実験中だったISの事故として片付けられた。それを疑う人間も居たようだが、一般人からすればそんなもの時間が経てば忘れるし、深入りしようとした人間はそれ相応の対応を受けた。

世間に対する公表はそうだったが、実際には異なり：事実を知る人間の間では、慌ただしさを見せていた。今回の襲撃事件の真相は：学園だけにとどまらず、篠ノ之束の所にも飛躍していたのだ。

対抗戦当日。篠ノ之束が主に使用しているメインロボのうちの1つが襲撃される。しかも、そのロボには当時束も居た。襲撃者は不明。だが襲撃を実行したのは複数の無人機。

センサーに感知されずの襲撃となったため束も迎撃に苦戦。そこに救援として招集したのがマドカだ。その後、『嫌な予感がする』という束の直感でマドカに学園行きの命令が下り、無人機と交戦。これを撃墜。

学園側の騒動でも不可解な問題が残った。

変死体：というよりは、ほぼ肉片の状態で見えられた学園の生徒『谷口 凜子』だが、

彼女の遺体を学園側で調べた所…残ったていた肉片から肉食性のナノマシンが検出された。

この肉食性ナノマシンについて学園側は調査。その結果について、関係者はぞつとした。これは感染者…というよりは、投与者の体内で潜伏し、特定の信号で作用するというもので…記録される限り過去に戦争やテロで使用されたことはなかった。

また、彼女の保有していたスマートホン型の端末は、市販されているごく一般的なもので…内部を調べても怪しいプログラムというのは発見されなかったが、メールの送信履歴に不審なものがあった。

タイトルは空白で、宛先は学園のホームページからも送信できる、問い合わせ専用アドレス。その内容は

『リサイクルって大事だよね?』

という内容で、全く意図は不明。

彼女の両親についても問題が起こった。対抗戦当日、資産家である彼女の両親は対抗戦に招待をされており、VIP席の確保がなされていた。更識家の調査で判明したのは、彼女の両親は死亡。しかも、見つかった遺体から恐らく対抗戦当日に死亡した物と断定された。

死因は異なり、父は首を斬られて殺害。その首は殺害現場である自宅内のテーブルの

上にあつた皿の上に置かれていた。母親については下半身が存在しておらず、そのミンチと思わしきものが自宅風呂場から発見されていた。

猟奇殺人であるが……これが何を意図するのも不明、更識家ではこの事件について引き続き調査を進めている。

これが、今回の騒動での出来事の全貌。どの案件についても犯人は特定されておらず、また手がかりもない上に、意味がわからないメッセージだけが残される。

結論から言うと、学園側と、そして束は一方的に掻き乱されたのだ。

……が、それは手がかりを掴めなかった。という話である。掴んではないが、”わざと残された”手がかりはあつた。

それはリース達が聞いた、谷口凜子の口から出たキーワード。

”男がナノマシンを打った”ということだ。

対抗戦当日深夜。IS学園敷地内、現在は立入禁止となつている第三アリーナの内部に千冬の姿はあつた。スーツ姿、そして……手には一振りの日本刀。彼女は、ある人物と

相對するためにここに来ていた。

瓦礫がまだ残るアリーナのフィールド、そこに足を踏み入れる。そして見れば…目的の人物は、既に存在した。

「…」

騒動が嘘であるかのように、夜空は晴天であり満月だった。そんな月の光に照らされる… I S 学園服姿の少女”を見ながら千冬は言葉を放った。

「——久しぶり、と言え方がいいのか。姉さん」

肩ほどまである黒髪に、吊り目。千冬からすれば、昔の自分と瓜二つの少女が言葉を返した。

「ずっと私は一人だったよ。あの時、姉さんに見捨てられてから」

「ツ…、ああそうだ。私はお前を見捨てた。見捨てて…一夏を選んだ」

千冬へと紡がれたのは、少女の過去の絶望。

「憎かったよ、何度も恨んだよ…辛かったよ、私は」

「…わかっている。私は、お前にそう思われても仕方のないことをした」

一步。また一步と、少女…マドカが千冬へと歩みを進めた。

続けて少女の口から紡がれるのは、怨嗟と憎しみだった。

「何故？ どうしてって、何度も思った。」 どうして私を選んでくれなかったの？ って」

「…ああ、」

「死にたかった。でも死ねなかったよ。何度も私は利用価値があるからって、道具みたいに使われたよ？」

「——すまない」

「普通の生活をしている姉さんが羨ましかった。世界最強に上り詰めた姉さんが眩しかった。…」私の弟」と幸せそうにしている姉さんが、何より憎かった」

「ツ…すまない、」

それは、少女の疑問と羨望。

対して千冬の口から出るのは、後悔と謝罪の言葉ばかりだった。わからなかったのだ、目の前の——己が見捨てた少女に、どうしてやればいいのかを。

「私を、殺しに来たのか」

「…何でそう思う、姉さん」

「私はお前を…円を見捨てたツ！辛かっただろう…怖かっただろう…。だが、私は見捨てたんだ！恨まれて、憎まれて当然のことをした！」

叫び。普段の織斑千冬からは考えられない叫びが木霊した。

絶対に弱音など吐かないと誓った。そして、世界最強として君臨し続けるため己を殺した。

選択したからには後戻りなんて出来ない。ずっとそう思い続けて。後悔と罪の意識を抱え続けて。そんな中の…殺してきた己の言葉が、千冬から出た。

「——そうだな、私は姉さんを殺しに来た」

「そう、か…」

千冬は、死のうとしていた。かつて自分が最大の後悔と共に、見捨てた少女。それに対して…償いが出るなら、命だつて差し出す覚悟で今日此処に来たのだ。

世界最強という仮面の下で、自分を殺した。殺した自分が持っていた…最大の後悔。

だからこそ、弱さという懇願が出た。許して欲しい、という。

持ってきていた刀は、自分のある縁に関わるものだ。償いとして、ケジメとして。もし妹がそれを望むなら、と…自らを殺すためにそれを持つてきたのだ。

だから千冬は言おうとした。望むなら『私を殺せ』と。

「…私は、姉さんを殺す。」織斑」という姓を捨てて、姉さんを殺しに来た」

——しかし、妹が放ったのはそんな答えではなかった。

「姉さん、…今日此処に、死にきたんだよね」

「凶星だった。それで償えるならと、そう思つて。」

「私は——そんな生きる事を諦める奴が大嫌いだ。私が絶望の中で、苦しみの中で藻掻いてきたのに死にたい？ 反吐が出る。甘えるなよ姉さん」

「なツ…私は、お前に許されたくて、だから」

「ああ、やっぱりか」

「マドカは何処か、納得したように言った。」

「“やっぱり姉さんの足枷は私だった”。なら尚更だ…言つたらう、私は織斑の姓を捨てに来たと」

それは、少女の決意だった。

地獄の底で、絶望の底で。痛みと疑念に苛まれ、その先に出した…復讐という行為での答え。

「…私は確かに絶望の中に居た。だがその中で、私を命懸けで救つてくれる存在が居た。感情を教え、生きる道を示してくれた存在が居た。その人達のお陰で、また生きようと思えた」

少女は言う。決意を、復讐という形にした、言葉。

「だから私は、織斑としてではなく……東雲として。東雲マドカとして、もう一度生きようと誓った。手を伸ばしたあの大馬鹿達に恥じないようにみつともなく生きようと決めた」

姉を恨んだ。弟を恨んだ。憎んで妬んで、殺したいとも思つた。

そんな一度は“殺意”という復讐に心を染めそうになった少女の手を引く存在があつた。そして、その復讐は別の形に変化した。

それは、復讐だ。”決別”という、復讐。

「……私は、貴女の妹で最悪だった。そして、貴女を許すつもりもない。けど、生きていくれて良かった。それだけは嬉しかったさ」

「——円」

満足気に、吹っ切れたようにマドカはふつと笑うと、そのまま千冬に背を向け、彼女とは逆方向に歩き出す。

「その名前はもう捨てた。私は、東雲マドカだ。——私が生きるために、さよならだ”織斑先生”」

時期は5月末。既に対抗戦から一月近くが経過しており、あの騒動の記憶もクラスメイト達の中では古いものとなり始めていた。

流石に早すぎないかと思うかもしれないが理由がある。それは：対抗戦以降、イベントが連発したからだ。

対抗戦の後、更識楯無と名乗る学園の生徒会長に保護された俺達。保護されて、すぐに身体に異常があつたリイスは保健室へと搬送された。

：一緒にリイスを載せる担架と走つて生徒会長がとても心配そうにしていたのをよく覚えている。リイスは、会長とも知り合ひだったのだと思う。

話したいことがあつた、言いたいことがあつた、聞きたいこともあつた。とにかくすぐにリイスと話したいと。俺は：そう思った。

けど、それは叶わなかつた。あいつが運ばれた学園の医療棟の病室には：『面会謝絶』の文字があつたのだから。リイスの身体への負担が相当だったらしく、1週間は面会禁止と言われて結局その間——姿を見ることができなかった。

鈴やセシリア達相当心配していた。そして、クロニクルさんに至つては：暫く登校を拒否していた。『私がリイスを殺しかけた』と：千冬姉が面談するまで言い続けていたらしい。

そうして、1週間が経過して——リイスは戻つてきた。”まるで何もなかつたかのよ

うにして”。

対抗戦の件、特にあの無人機と…谷口という生徒については嚴重な緘口令が敷かれた。少なくとも…あの谷口という子については、鈴に無理矢理目を塞がれていて、リスにも絶対見るなど言われていて何も見ていない。

覚えているのはリスの『傷になる』という言葉と…ただ耳に聞こえてきた、何かが千切れる音と、悲鳴だけだ。

リスは人付き合いが良くても一組の中では友達が多い。だから、あいつが戻ってきた時はちよつとした騒動になった。クロニクルさんは泣きつくし、セシリアと鈴は深刻な表情でリスと何か話していたし、のほほんさんや、清香達には抱きつかれていた。

それに対してあいつは…”いつもと変わらない”ように接していた。『ちよつと怪我しただけだから、もう大丈夫』とそれだけ言つて。

その態度は、俺に対してもそうだった。戻ってくるやいなや俺は、話そうとした。言いたいこと、話したいこと、聞きたいことを——けど、その話題を振ろうとするたびにリスはそれを避けるのだ。話題を逸らそうとしたり、はぐらかそうとしたり。やや強めに聞いた時は…無視までされた。

——俺は、わかつてしまった。彼女が…俺が知らない世界の住人だということが。

覚えているのは、あの冷たい目。そして、無機質な感情に、慈悲がない言葉遣い。違う、あれはライスじゃないと否定したかった。

：そんな俺にとどめを刺したのは、あの銃声だ。

迷いなく、何の感情もなくあいつは——あの時撃った。

焦つて止めに入つた俺にも言つたのだ、『必要ならそうする』と。

自分の中の彼女のことをどんどんわからなくなつていた。気持ちについても、どちらが本当の彼女なのか”についても。だから確かめようとした。そんな俺に対して返されたのは、いつも通りだった。

拒絶された。否定された、と。そんなことないってわかつてる筈なのに——そう、感じた。

ライスが戻つて来た、ということも対抗戦の記憶を薄める要因にはなっているだろう。が、他にも理由はあつた。：転入生だ。

恐らくこれが、ライスのこと以外で最も俺を驚かせた出来事。転校生がやってきたのは騒動から一週間弱後。ライスが戻つてきて数日後だ。

『ドイツの軍学校から今回転校してきた東雲マドカだ。長く外国に居たが、生まれは日本。：日本の文化にも久しく、何かと助けてもらうこともあるとは思うがよろしく頼む』

恐らく、俺だけではない。クラス全員が目を疑った事だろう。転校してきたのは——千冬姉と瓜二つの、同じ年の少女だったのだから。

当然、クラスメイトだけではなく学園の生徒が多く詰め寄り、本人はやや困ったようにしていたが質問に答えていた。その中でハッキリと言っていたのが、

——『織斑先生と似ているとはよく言われるよ。ドイツでも同じことを言われたからな。……だが、私は』先生とは無関係だ。何か期待されたのかもしれないが、期待に応えられなくてすまないな』

確かに千冬姉によく似ている。が……なんとというか、雰囲気は全く違う。俺も東雲とは会話をしたが、やや男っぽい口調なだけで普通に笑うし、冗談も言う奴だった。似ているだけなんだと、それでわかった。少なくとも俺に千冬姉以外の姉や妹がいた記憶なんてのはないし、第一居れば箒や束さんが知ってる筈なんだから。

……と、こんなことがあつて生徒からすれば盛り上がり放題のイベントが連発して、多くの生徒からはもうあの騒動の記憶は薄れていた。

対抗戦が終わっても慌ただしい日々、その中で俺は……自分への逃げと、もしかしたらチャンスが出来るかもしれないと考えあの話をリスに提案しようと考えた。

約束していた、対抗戦が終わったらちゃんと休む。という話を

その日の夜、私の姿はIS学園ではなくとあるホテルにあった。

着ている服はいつもの制服ではなく、黒のワンピース。学園に来る前に束さんが選んだものだ。季節は既に夏が近くて少し暑い、だから夏向きのものを着ようと学園を出る際にクロちゃんに勧められた。

学園からモノレールで中央駅まで移動してそこからすぐ。IS学園が見える沿岸公園の近くにある高級ホテルに私は来ていた。

招待が来た時は正直困った。あまり派手なドレスとか、そういうのは好きじゃないし……悩んでいた時に言われたのは『私服で構わないし、そこまで畏まるような場所でもない』という言葉。そんな言葉に甘えての服装。そして——渡されたカードキーを使って、ホテル内の最上階にある部屋に私は向かう。

「リーちゃああああん!!!心配したよ!怪我大丈夫?痛くない? : 何処の誰かは知らないけどよくも束さんのリーちゃんに怪我させてくれたね。見つけて死ぬより恐ろしい目に合わせてやる」

「た、束さん……怪我はもう大丈夫ですから。一週間もお休み貰って、ちゃんと回復してま

すから落ち着いて下さい」

「本当に心配したんだよ? …でも、本当無事でよかった。マドつちもよくやってくれた」

部屋の中には二人の人物が居た。一人は、束さん。あの騒動の後、データを全部まとめて存在しているラボを全部破棄したらしい。現在は新しいラボを作成しており、その一箇所だけで活動をしている。そして、私を助けてくれたあの少女…既に顔合わせは済ませているが、マドカについても話は聞いている。やはり先生の関係者で、色々あったとか。

「入院したと聞いた時は私も気が気ではなかったぞ。…リス、お前は私にとっての娘のようなもの。あまり心配をかけてくれるな」

「ありがとうございます。えと…お、お義父さん」

あれ、私変なこと言っただろうか。何故かお義父さんは急に後ろを向いて悶ている。

私の養父であり、ドイツ空軍大将——フリッツ・ベルンシュタインさん。その姿もここにあり、私も直接会うのは入学式前以来だった。

私が此処に来ているのは、対抗戦の事後処理と調査で暫く此方に留まるお義父さんに『食事でもしないか』と誘われたのと、対抗戦での出来事についての話をするためだ。束さんに背を押されて、ソファに座ると——コホン、と束さんが咳払いをした。

「…で、話に入る前に何だけど。リーちゃん」

「は、はい何ですか？」

「箒ちゃんから謝罪って、あつた？」

謝罪って…もしかして、対抗戦の時のあれについてだろうか。

「報告は聞いているよ。…箒ちゃん助けるためにセラフ使って、その後にもう一体にやられそうになったって」

「ああ…作戦中のイレギュラーです。それを想定できず、対応できなかった此方に落ち度はあります。…彼女に非はありませんよ」

「でも、」

「もう終わったことですから。それよりも——ご報告することがあります」

真面目なトーンで話をして、その意図を汲み取ってくれたのか東さんは渋々言葉を止める。お義父さんもどこか納得していないように見えるけど…もう終わったことなんだ。

「…報告書にあえて書かなかったことについて、直接具体的な報告だけはしておいたほうがいいと思って。あの無人機と、そして谷口凜子についてです」

「聞こうか」

「まず、あの無人機…谷口凜子が手引したのは間違いないでしょう。彼女がそれらしい

発言をしていました」

彼女の所持品からは怪しいものは見つからず、保持していたスマートホンについても怪しい点がなかったというのが捜査結果ではあるが——私は直接聞いているのだ、『手引した』と取れる内容を。

「彼女の死因については…直接見ています。東さん、彼女から見つかったという肉食性ナノマシンについて何かわかりましたか？」

「…残念だけど、あれがどこでどう生み出されたのかはわかんなかった。けどどんなものか、というのは解析できたよ」

「——お聞きしても？」

東さんは珍しく乗り気ではないというか、深刻そうにして投影ディスプレイを展開。それを私とお義父さんに見える位置に置いた。

そこには、あの少女を”食い殺した”肉食性ナノマシンについての詳細が書かれており…私は、内容を見てぞつとした。

「簡単に言うと、あれはエボラ出血熱をベースにした生物兵器だよ。…ベースと異なるのは、”感染者から他者に感染しない”という事と”発症すると生体組織を喰い破られる”という点。恐らくだけど、これはピンポイントで特定の対象だけを殺傷することが可能だと思われる」

「それってつまり、大勢の中に何らかの方法でばら撒いて…その中で指定した対象だけを殺せるって事ですか？」

「うん。ただこれはまだ束さんの仮説だから、そうとは限らない。追加させてもらうなら…発症のタイミングも、恐らくコントロールできる」

最悪だ。

感染者はあの症状を確実に発症して、しかも推測の段階ではあるが複数に対して同時使用可能で更に発症も任意に操れる？今まで何度か生物兵器というものは見てきた。使われた所も見て…自分だけが助かったこともあった。だからある程度は理解できる。これは、今までにない程に最悪最凶の兵器だ。

「束さんもこんなにヤバいの見たのは久しぶりだね。…ただ、確かにヤバい代物だけど対策はできそう」

「対策、ですか？」

「このナノマシン。オリジナルコアを使用しているISには反応しないんだ。…つまり、コア使用ISを纏っている限りは絶対に発症しない。理由はまだ説明中だけど…コアに対して拒絶反応起こして貰うっばいんだよね」

対策がある、その言葉を聞いて安心した。もし対策できるならまだやりようはあるからだ。

「…ま、このナノマシンとか諸々のことは束さんに任せてよ。ちょっと、束さんも今回プチギレてるんだ。このナノマシンについても、研究所潰しについても、リーちゃんに怪我させて殺そうとしたことも、いっくん達を襲ったことも。そして——完全にキレたのは、あの無人機だ」

…そう、恐らく最大の問題点はこれにある。

現れたのは確かに無人機だった。人が乗っていないで稼働しているのも調査でわかつている。

”人が乗っていないなかったのは事実なんだから”

「本当ツ…ふざけてる。心底反吐が出る、よつぼど犯人は束さんを煽るのが上手いみたいだね——最悪のシステムを投入してきたんだから。しかもご丁寧に煽りのメツセージまで残してね」

あの一件で絶対に公表できないことがあった。あの無人機は無人機であるが…無人機ではなかった、ということだ。

戦っている時に嫌な予感はしていた。それが確信に変わったのは…私を握りつぶさうとした無人機を見た時だ。通常の人工知能なら、あそこまで人間じみた動きなんてし

ない。情け容赦なく私を殺していた筈、なのに……あれは愉しむように私を甚振っていた。

撃墜された二機の無人機。その残骸のコア部分からは……人間の脳と思わしきものが見つかった。コアは製造時期不明の、専用機に及ばない粗悪品であったが——それに接続されていたのが、人の脳だ。

これを当時モニター越しで報告として見た東さんは……完全にキレていた。バアン！という打撃音を響かせ、通信先であるラボのテーブルを思いつきり殴るほどに。……そして、その殴った手には血が滲んでいたのを私は見た。それ程に、東さんの怒りを買ったのだ。

最悪のシステム。つまるところの人体をパーツとして扱ったISである。東さんは言っていた、これは自分でも忌避した……人が絶対に手を出してはいけない禁忌だと。

「……東さん、お義父さん。これは私の推理です。あくまでそれとして聞いて貰えますか？」

私にはある推測があつた。そして、その推測が形になつていったのは——あの少女の死に際。

事件の全貌を見ると、対抗戦当日に東さんの研究所が襲撃され、そしてあの少女の両親も殺害されていた。対抗戦ではタイミングを狙ったかのように無人機が現れ、事態に

対しての解決に向かった私に対しても、最悪のタイミングで2機目が現れた。そして、撤退時には…あの少女が居た。その少女は騒動の手引をしていた人間で、見計らったかのようなタイミングで死亡している。

全部繋がっている。もしこれが…犯人の計画通りに全てが進んでいたとしたら？東さんを煽ったのも、無人機を投入したのも、わざと協力者を餌にして、こちらを扇動するような行為をしたのも、何もかもがそうだとしたら。

” 全く別の目的で犯人は動いていたんじゃないのか ”

そう思えてならなかった。

「恐らくというか、その通りだと思うよりーちゃん」

「…うむ。私もそうとしか思えん。もしかすると、マドカ君の介入すらも予測の内ではないのかと、思えるほどにな」

もし、そこまで考えていたとしたら…一体犯人は何者だ。

ここまで狡猾に計画を進めていた犯人は――

「…心当たりは、ある」

言葉を作ったのは、東さんだ。

東さんは暫く迷ったようにして、私を見た。

「リーちゃんの話聞いて合点がいった。…だから、大事な話がある」

「東さん…？」

「恐らくだけど、犯人は亡国機業に与する者で、目的は…世織計画と呼ばれる計画だと思う」

そして、と続けた

「これは東さんの協力者の推測だけど——世織計画には、金色のISが関与している可能性が高い」

ドクン、と。心臓が跳ねた。

第二章 『機械仕掛けの演者達』

ひだまり

時期は6月。私は一夏とともに、学園から少し離れた商店街。そこにあるお宅にお邪魔していた。

こうしている理由は数日前、”いつも通り”授業を終えた放課後にまで遡る。その時、教室でクロちゃんと話していたのだけど、

『リース、今いいか?』

『どうしたのかな一夏。ああ、訓練はちよつとお休みだよ? 前も言ったけど君は少し休むんだ』

『うっ…わかつてるさ。その休むって話なんだが——ほら、前言つてた約束』
『ああ。”付き合う”約束? うん、覚えてるよ?』

その時ガタツ、という音が教室の中で次々に鳴った。

何かが割れるような音とか、砕ける音もしたように気がした。

ふと見れば顔を真っ赤にしながら自分の世界にトリップしてるセシリア、真剣な目つ

きをしてスマホで連絡を取る清香と何やらクラスメイトに対して指示をしているクロちゃん。クラスメイト達はいえ、それまで騒がしく会話しているのが嘘のように静かになり…歴戦の兵士のように荘嚴な表情をしてこちらを見ていた。

更に言うならいつのまにか鈴まで『話は清香から聞かせて貰った』と言いながら教室入り口に現れていつぞやのポーズをする始末。あの登場の仕方気に入ったのかな。マドカにまで憐れみにも似た目で『頑張るんだぞ…』と束さんが作った個人間秘匿回線で言われる始末。

『…なんか、壮大に勘違いされてる気もするがいいか。来週の日曜って暇か?』

『時間は空けておくって言ったじゃないか。空いてるよ』

『朝からだけど、大丈夫か?』

『もう忙しくないし落ち着いたからね。折角だから、期待してもいいんだよね?』

『程々にしてくれ…。俺も限界があるからな』

一気にクラスが騒がしくなった。

『ついにきたのか!おそい!』、『おめでどう…おめでどう…!』

『今すぐ各組に連絡!連絡遅いよ何やってんの!』、『期待…限界?織斑君?リイス?い

や逆もアリか…!』

とか色々聞こえたけど、何がどういう意味なんだろうか。

私と一夏は前々から約束していた買い物のお話をしているだけだよ? そのついでに色々と奢ってもらおうとしただけ。そんなに騒ぐことでもない気もするけど…。

そんなちよつとした騒ぎがあつて、約束の日曜日。私は画面に表示される『YOU WIN』という文字を確認した後、後に気を緩めた。

「ば、馬鹿な…また負けたあ?!」

「マジかよ…弾つて、『起動戦士ガンタム VS IS アルティメットブースト・ON』でも全国レベルだぞ…!」

『五反田 弾』さん。

一夏の昔からの友人の彼は、赤のロン毛に体格のよさもあつてか、頼れるお兄さんという印象を感じさせた。実際、妹さんがいるらしい。

最初一夏とお邪魔した時には大層驚いていた。一夏と何か話していて、後ほどどうかしたのかと聞けばIS学園の生徒と会うのは初めてだからと言っていた。

現在、私達がやっているのは『起動戦士ガンタム VS IS アルティメットブースト・ON』。今非常に人気の高いゲーム。と、ちよつと前に五反田君から説明を受けた。発売から結構経つ今でも、かなりの人気と知名度を誇るゲームで、特に千冬さんも

出ているということもあつてかつい最近オンライン化されたとか。

要するにI Sの实在している専用機と大人気のロボット作品ガンダムシリーズの格闘ゲームで、使用可能な機体はかなり多い。

私はクロちゃんに勧められてR P Gとか、シユミレーションとか、そういうゲームをしたことはあつたけどどういったアクションとか格闘ゲームはしたことがなかった。前にやってみたくと話したことはあつただけど、はぐらかされて結局プレイできなかった。でこうしてやってみるとこういうゲームも中々面白いかもしれない。

「あ、その着地取れる」

「嘘お!?」今のラファスぺの有線キャンで取れるのかよー!」

部屋の中にある大型液晶テレビには再び『YOU WIN』の文字が。

使用している機体はラファールリヴァイヴ・スペシャル『幕は上げられた(シヨウ・マスト・ゴー・オン)』。防御寄りの性能なのに、装備は攻撃的という中途半端な位置づけから、玄人向けと言われたんだけど…山田先生がモデルだしということを使つてみた。

個人的には悪くない使い心地。武器の弾数が多いからやりやすい。特にこの防衛兵装がシールド合わせて3つあるというのは気に入った。

画面の山田先生の顔と機体のシルエットのアイコンには『I S WIN』と表示が出て

いた。あれ、もうそんなにやってたのか…。

「あ、ありえない…馬鹿な、これは夢だあ…」

「だっ、弾！落ち着け弾！自分を見失うな！」

「落ち着けるかあ！最初は初心者って聞いて適当な機体でプレイしてたと思ったらこのザマだぞ!!」 最強ランク扱いの暮桜とかまで使ってこれはねえ…!」

何この空気。そして一夏、なんで君は私をバケモノを見るみたいな目で見てるんだ。

私がアーケードコントローラーをそのまま一夏にパスすると、

「なありイス、こういうゲームって本当に初めてか？ドイツに居た時とかもやってなかったのか？」

「私向こうに居た時は殆ど仕事だったよ。ゲームの類はクロちゃんに色々やらせて貰ったけど、格闘ゲームははじめてかな。…前にやらせてって言ったんだけど止められて」

「ああ、うん。…そりゃクロニクルさん止めるわ」

「何か言った？」

「いやなんでも。ほら弾、俺が相手してやるから立ち直れって。俺相手なら勝てるだろ…」

「慰めじゃなくて追撃だわ…はあ…」

再び対戦開始。一夏はフルグロスで、五反田君はグスイーかあ。あ…あの硬直取る。

試合終了、五反田君の勝ち。

「あの硬直って、取れないのかな」

「え？どういふことだエーヴェルリツヒさん」

「いや一夏のフルグロス、開放…でいいのかな？それ吐いて、解除入った瞬間に無理矢理降りたけどあれって取れない？」

「あ…無理じゃないかな。あのタイミング誘導切るし」

「先置きは？グスイーって粒子砲任意方向に照射できない？後誘導ミサイル」

「粒子置きはできるだろうけど難しいかなあ…多分先読みできないと無理。誘導ミサはいけそうだ、今度やってみよう」

なんだろう。格闘ゲームって凄く楽しい。でもちよつと疲れたので休憩しながら一夏と五反田君の見学。…うわあ二人共凄く楽しそうに互いに罵声浴びせながらプレイしてる。男の子ってこういう友情もあるんだな、ちよつと羨ましい。

そんなことを考えながら、二人の対戦風景を眺めていた時

「お兄ー、さつきからお昼ご飯出来たって言ってるじゃん！ さつきと食べに降りてー」

「一夏ア！お前は一度修正されなきや駄目なんだ…！　　つて、蘭？」

「強機体ばつか使つてんじゃねえよ！この機体厨が！　　ああ蘭、久しぶり。邪魔してる」

…あ、五反田君が勝った。

右手を掲げでガッツポーズする五反田君、そして打ちひしがれる一夏。

そんな状況に一人の人物が現れた。

「え、えーと…お兄何してるの？　　つて、一夏さん!?　　と、ええと…ご友人、ですか？」

なんとというかこの状況を見てちよつと辿々しく、声がぎこちないというか震えている少女。恐らく五反田君の妹さん…五反田　蘭さんだろう。

「初めまして、一夏と同じクラスのリース・エーヴェルリツヒです。名前長いからリースでいいよ、よろしくね」

「お、お久しぶりです一夏さん。　　えつとはじめまして、五反田蘭です。　　蘭と呼んで下さい。　　リースさんもよろしくお願いします」

礼儀正しい子だなあと思う。ただその格好はちよつと…良くないと思う。薄着と言うかラフというか、シヨートパンツにタンクトップはあまり感心しない。…自宅だしいいんだろうと思ったのかな。私も寮で結構軽装着ることあるし。

話してみると、いい子だった。ただ…一夏と話す時になんか余所余所しくなつてた

し、なんか変な質問も色々された。一夏の学園でのこととか色々聞かれて同室の話した時は顔真っ赤だった。風邪かな、薄着だし。

「えつとお昼ごはんが——あれ、そのゲームって」

「ん？ 何だ蘭、知ってるのか？」

一夏が蘭さん、でいいのかな。彼女に対してそう質問すると、蘭さんは『ええ』と返答した。

「私の学校の友達がそのゲーム好きなんですよ、それでよくやっていて——」

「よし蘭、だったらリスと戦ってくれないか」

「おい蘭、お前エーヴェルリツヒさんと戦え」

「え、ええええ!？」

無茶振りだろう。というかお昼ごはんとか言っただけでなかつたつけ、いいのかな…。

突如としてそんな発言をした一夏と五反田君に対して言葉にこそしなかったが、内心でそう突っ込む。いや、まあ…確かに戦ってみたいというのはあるけど。

「私はいいけど、えつと…」

「そ、それじゃあー戦だけ…よろしくお願いします、リスさん」

「ん。よろしくね、蘭さん」

どんな機体使うのかなとか考えながら、アケコンを持った蘭さんを確認すると機体選択。

私はさつき五反田君が使っていて面白そうだった、グスイーガンタムを選択。大体の挙動とかも：見てある程度覚えた。対して蘭さんは——U2ゴーンか。

U2ゴーンは最高コストの機体で、火力が高くトリツキーな機体。それ故にかなり癖があつて、玄人でも使いこなすのには結構苦労する。：と、見学してる時に読んだ『これでわかる機体全集』というのに書いてあつた。この機体が出てる原作は知っている。クロちゃんが大絶賛していて、部屋でDVD見せられたけど：すごくよかった。

U2ゴーンの特徴的な武装としてはIS-Dという特殊時限強化と、射撃武器であるビームマクナム。そして規格外性能と言つても過言ではないアシスト射撃。使いこなされるとできれば相手にはしたくない機体だけど：蘭さんはどう見てもお嬢様だ。今日はじめたばかりの私でも多分勝てるだろう：と、考えてしまった。

——案の定と言うか、後で私はそれを後悔することになるんだけど。

機体選択が終了して戦闘開始。お互い射撃で牽制しあつて暫くが経過。

予想よりやる、強引に攻めるしかないか。

そして踏み込む。お互い体力がレッドゾーンの状態で刺し違えて相打ち。これ：か

なり辛いかも。

試合も終盤。一気に畳み掛ける

「貰った!」

一気に私は時限強化を発動して蘭さんのU2ゴーンに突っ込んでいく。これで決める、そう思った。

「それはこちらの台詞です、貰いました」

「ッ!?焦った……!」

ヴァンネルミサイルを置いた瞬間に蘭さんはIS—Dを発動。そしてIS—Dの特殊能力として『ヴァンネル系の兵装は無効化される』。

さつきから使わないで下がりがつつアシストとメインばかりと置いていたら、これが狙いか。何とかしなければと思ひ、遠距離戦闘を仕掛けようとするが、IS—D発動状態のU2ゴーンには簡単に追いつかれてしまう。

このままではフルコンボ確定だ。そう思って無理矢理ブーストゲージを使って逃げるが――

「この瞬間を待っていましたっ!」

「しまった……!」

焦った、そう思うがもう遅い。

換装が解除された硬直を消そうと無理矢理降りようとしたが：先程焦ってブーストゲージを全て吐いてしまった。そこに蘭さんのU2ゴーンのサブ兵器が直撃してスタン、フルコンボが叩き込まれて：残りの体力がゼロになる。そして、画面に『LOSE』と大きく表示される。完全に、負けた。

「負けたよ蘭さん、強いね」

「い、いえ、私もかなり危なかつたです。クラフトで時限強化からの粒子砲3連、そしてデイレイ明けからの覚醒で一気に換装ゲージと残弾回復されて、連続換装で押し切られるかと思いましたが、危なかつたです。それに射撃覚醒でしたし警戒もしましたよ」

「あれを凌がれたのは予想外だったかな。アシストキャンセルとI S Dのタイミング、全部考えてた？ メイン射撃もあんまり積極的じゃなかったよね、ブースト調整？」

「はい、リースさんの動きはなんとというかこつちの様子をみて反応してましたから迂闊に攻めるのは危険だと判断しました。だったら、大人しくU2ゴーンの特性を生かしてセオリー通りの戦闘がいいのかなあって」

「…本当にお見事。今日はじめてこういうゲームしたんだけど、凄く勉強になったし楽しかった、ありがとう」

「あ、あれで初めてですか…？ は、ははは。流石に次は負けると思いますが」

そんな私と蘭さんの会話を見てただ唾然としている一夏と五反田君。おかしいことでもあつただろうか。

「一夏さん？ お兄？ どうかしたの？」

「一夏？ 五反田君もどうしたの。そんなまるで死んだ魚のような目をしてるメツザーラのパイロットの目みたいな目をして」

「い、いやあ……」

「規格外って、本当に居るもんだな。しかも身近に」

私と蘭さんは何のことか分からずに、お互い顔を見合わせて頭の上に疑問符を浮かべるしかなかった。



場所は移り、五反田君の家の…といっても彼の家自体が食堂なので、店のテーブル席に通された。

何故か蘭さんは着替えてきていた。見違えるというか、なんとというか。ラフな格好でもお嬢様だなあと思っていたけど、ちゃんとした洋服を着るとその感じがかなり強くな

る。

そんな格好になった蘭さんが私達の席の近くに立っており、そこに私と一夏。遅れてやってきた五反田君が座る。

他のお客用のテーブルから『ややエロ』『エイプキラー』『天動型佐山宇宙』等と聞こえたが、きつと気のせいだろう。

席に座ると二人の祖父である五反田 厳（ごたんだ げん）さんがお昼を持って来てくれた。私はその際に「ありがとうございます、ご馳走になります」とお礼を言ったんだけど、

『ほう、今時の子供にしちゃあお嬢ちゃんは礼儀正しいじゃねえか、——それに、お前さん中々いい目をしている。 気に入ったぞ、遠慮なく食え』

と言っていた。

いや、気に入ってもらえたなら嬉しいけど…何でだろ？ あの人からはとてつもないオーラというか、歴戦の気配と言うか。もしかしたらあの人、只者じゃないんじゃないだろうか。そう思いながらの昼食。

感想から言えば、かなりおいしかった。日本食とか、こういった定食にはこっちにきて、箸の使い慣れができるようになってから食べるようになったけど…ちよつとした感動かもしれない。

特にこの野菜炒め、名前は『業火野菜炒め』というこれには大満足。野菜のシャキシャキ感と丁度いい調味料の味と風味でご飯が進む。それを厳さんに伝えると、『おかわりいるか?』と聞かれた。残念だけど、私はそこまで食べない。

今回はご馳走して頂けるといふ話で、次回からはちゃんとお客として来ようと思つた。聞くと鈴とは顔見知りらしいので、今度は鈴達と来ようか。

食後色々会話をした。私が先程の試合について五反田君と機体考察した後、別の話題で一夏が地雷を踏んで、暫く一夏と五反田君が口論してたり。その間私はと言えば、厳さんが出してくれたお茶をずっと飲みながら二人のやり取りを傍観していた。

うん、このお茶も中々だ。最近世界的に有名な会社：IAIだったか、あの会社が出している『来客用ま口茶（来客用 まろやかで口溶けのいいお茶）』に並ぶほどの味だ。このお茶にしても、あの会社のお茶にしてもやはり日本のお茶とは素晴らしい。一体どんな葉を使っているのだろうか。

蘭さんがIS学園を目指すと言つて、一夏に対して色々言つていたけど：私には特に関係ないし、私が何か言えるわけじゃない。ISを人殺しの兵器として使っている私に、蘭さんに対して言えることなんてなくて。だから私は：どう思いますかと聞かれても「いいんじゃないかな」と答えるしかなかった。

そんなお昼の後。私と一夏、そして五反田君と蘭さんで午後からはゲームセンターへ。それが終わった後、一夏と買い物に行った。

ゲームセンターでは、音ゲーなるゲームを教えてもらったり、アーケード版の『起動戦士ガンタム VS IS アルティメットブースト・ON』で対戦した。

チームは私と蘭さん対一夏と五反田君だった。後に聞いた話だけど、その時の様子は地元で、

『化け物クラスの女の子2人組がゲーセンで一方的に無双していた。何度も多くの人間がその2人に挑んだが、誰も勝てなかった。そしてその2人のタッグはそれ以降現れない伝説的存在』

等と、そんな噂が流れて、それが伝説に昇華したとかなんとか。

また、学園に戻って数日後。私と五反田君の対戦がオンラインのリプレイに残っていたらしくて話題になってるとクロちゃんに聞く。そしてとりあえず見て欲しいと言われて動画サイトに投稿されていた動画を見せられて、

『つよい』

『コノシユンカンヨマツテイタンダー トウヘアー!』

『ラファスぺSランク説』

『暮桜でラファスぺに負けてて草も生えない』

などのコメントを見せられた後「リスもうオンラインはやっちゃだめです。後アーケードもだめです」と言われたのは別の話。

そんな慌ただしくも、とても楽しい休日は過ぎて、特に何も無い学園での日々が続いたある日。それは突然訪れた。

学園内にまた…というより、とても変な噂と、転校生の話が出たのは。

黒兎、来る

その朝の私は、自分でも上の空だったと思う。ずっと考え事をしていて、朝クラスメイトに話しかけられも『ああ、うん…』とか『そうだね…』という言葉しか返していなかった。

考えるのは、先日のホテルでの話だ。

金色のIS：あいつが、この前の対抗戦の件に関わっている。ずっと追い続けてきた。あの日からずっと、ただあの金色のISだけを探して。そんな存在の、手がかりと言っているのはわからないけど…姿が少し見えたのだ。

やっと見つけた。そう思った。だけど…思ったのだ、”あの金色のISは何者なのか”と。

私が3年間、ずっと世界中を回っても何も見つからなかった。東さんが全力で探しても、今の今まで何もわからなかった。…協力者のイワンさん、会長、東さん、お義父さん。お義父さんの部下のエージェントの一部の人も協力してくれている。正直に行つて、我ながらこの情報源は全て過剰とっていいほどのものなのだ。下手をすれば、大國を相手にもできるほどに。

なのに、何も出てこない。”まるでそこには存在していないみたいに”。

あの対抗戦は恐らく全て仕組まれたもの。それも、犯人の何もかもが計算の内だったんだろう。目的はわからない、なんで襲撃を掛けたのはわからないし…どうしてわざと勘繰られるようなことをしたのかも。

にも関わらず、手がかりはない。まるで——あの金色の I S みたいだ。

世織計画。亡国機業。それに金色の I S は関わっていると聞いて、歯車が噛み合った気がした。仮に。亡国機業と金色の I S が何らかの関係性が存在していたとして、それは何？

「…デウス・エクス・マキナ」

「は？どうしたんだよりイス」

「——え？ あ、ごめん。ちよつと考え事してて」

「…そっか」

朝の S H R の前。ちよつとした用事で私と一夏は用務員室に用事があり、顔を出していた。発端は今朝だ。『そういえばあの急須のお礼ちゃんと言つてない』と一夏が言い出して急遽顔を出しに行った。

轡木さんはほぼ一人で学園全体の用務をされているらしく、日中は忙しい。それはそうだ…一夏は知らないみたいだけど、あの人は学園長だ。用務に加えて学園の運営管

理。本当頭も上がらないし色んな意味で怖いし。でも感謝もしている。

と、そんなお礼から教室に戻る途中。歩きながらに私は：独り言のように呟いてしまった。デウス・エクス・マキナ。機械仕掛けの神、絶対的存在、ご都合主義の神様。何もかもの因果関係を全て無視して解決する、絶対神。

機械の歯車が噛み合って動くように。対抗戦とあの金色のI Sは繋がっていたとしたら。きつと何か：もつと複雑で、暗い深淵なんじゃないかと思えて仕方なかった。

：いけない。

何をしてるんだろう。私は：一夏の前ではいつも通りでいると決めた筈だ。彼は、この件には関係がない。私がやっているのは下手をすれば命に関わることなのだ。そんなことに、彼を巻き込む訳にはいかない。私の目的に彼を関わらせるわけにはいけない。

一夏は優しい。努力家で優しく、正義感が強い。

：嫌だった。彼を巻き込むのが。どうしてなのか、わからなかった。対抗戦の時私を見る一夏の目を見て感じた、あの違和感が。あの痛みが何なのか、わからなかった。

「一夏」

足を止める。まだSHRまでは多少時間があり、別にゆっくりでも問題はない。

「どうしたんだよ」

「この前は五反田君とか蘭さんと遊んだりしてたから、買い物あんまりできなかったでしょ」

「あー…そうだな、つてそうだよ——織斑先生に頼まれてたの、買い忘れてる。これは煩そうだなあ…」

「それつて緊急の物？」

「いや、そこまで急がない物だけど、」

「だったら…今度は私に付き合つて貰つていいかな？」

…きつと、逃げだったんだろう。

亡国機業、世織計画、金色のIS。そのどれもが、関わりうとすれば命に関わることだ。それを知つて尚、今後一夏に対してどうすればいいのか。みんなに対して、どうしたらいいのか。それに対しての答えが出せない…自分への逃げ。日常という、温かい日溜まりへの逃げ。

「今度でいいよ。私の買い物に付き合つてくれないかな？」

彼への違和感、感情。今までそんなことなんてなかったのに、ただ自分を殺してきたのに。

それができなくて…私は、逃げた。

「転校生ねえ…」

転校生。もし普通の学校であれば転校生が来るだとかそういう噂や話題が出れば盛り上がるだろう。

『男の子かな？女の子かな？』と妄想を膨らませる女子、『可愛い子がいいな、ちなみに俺のタイプは——』などどうでもいい己の性癖を暴露する男子。そんな淡く苦い思い出を思い出して悶死しそうになった天の声がいるとかいないとか。

閑話休題。

残念ながら、ここは普通の学校でもなければ男なんて一夏しか居ないI S学園。更に言うなら転校生の噂が立っているのは一組である。

悲しきかな、この一組の生徒達の大半は既にある意味歴戦の戦士であり、よく訓練されている猛獣なのだ。つまり、どういふことかと言うと

——ここで教室内の風景を見てみよう

「転校生？ そうなんだ。 ナギー、光バ主指定お任せでいい？」

「今更転校生が来ても…ねえ？ ああうん。指定ちよつと待つて。つて光バ完成してるの？ うわあ剣染…清香半端ない…」

「ナギも闇パ完成してるでしょ。私からすればそっちやりたいよ…… あ、リース整備データ後で出してね。定期メンテやるから」

転校生については知ってはいるものの全く興味のない清香とナギ。

「おりむーおりむー、珍しいお菓子手に入ったのー、あげるー」

「へえ、変わったグミだな。なんて言うんだこれ？」

「えーつとねー…最近発売されたグミタイプ『俺の汗 塩味』」

平常運転だが、そもそも話題にすら出さない本音。尚、一夏はSHR前に関わらずはこの後全力ダツシユで自販機まで走った。

既にそんな転校生なんてイベントはこの一組の中では慣れてしまったことなのだ。特に5月後半でマドカが転校してきて、それがあまりにも衝撃的だったということもあり既にこの兵どもは並大抵のことでは動じなくなっている。

そんなクラスの中、比較的まだ常識人である専用機持ちと愉快な仲間達とはいえば。「ですからマドカさん、貴女はもつと服装に気を使ってですね…」

「何を言う、服装には気を遣っている。セシリア、衣料量販店とは素晴らしいな…あの価格で多くの機能的な服が揃っている」

「で・す・か・ら！ もつとお洒落な服とか、お店とかに行ってください！ 今のマドカさんは衣料量販店に踊らされてるだけの人形ですわよ!？」

「なっ…衣料量販店を侮辱するか！ お前こそ、あんな高価で派手な服を大量に買って、それを私服として頻繁に使用するのか!? それこそ、コストの無駄遣いだとは思わないのか!？」

…こちらも順調に染まっているようだった。

色々おかしいいつも通りのクラスを見て苦笑いしながら、リイスとクロエはその風景を眺めていた。そんな中、クロエが小声で。更に言うなら周辺への盗聴防止までつけて言葉を紡いだ

「所でリイス、お話する案件が2つほど」

「…とてつもなく嫌な予感がするのはもういつものことかなあ。 何、クロちゃん」

『失礼ですね、1つは真面目な話です』とむつとしながらクロエは言った。1つはとはどういうことだと思うが。

「束様が新しいI Sを制作されているそうです。 …現状の『白式』、『黒式』に並ぶ最後のI Sを」

「いいとも悪いとも言えないねそれ。 …というか、最後つてどういうこと」

” 現行で束様が制作された規格外扱いのI S ” ということらしいです。束様も制作は本意で無いそうですか」

「…だろうね。詳しいことはまた改めて聞くけど、何かモチーフとかあるの?」

気になった。一夏の白式とマドカの黒式。それは既に存在していたコアを使用したISであり黒式についても東が制作したものだ。

白式には展開装甲というものが武装に使われていて、一次移行でありながら零落白夜という単一仕様を持つ。そして黒式にもある欠陥があった。白式と…ある意味よく似た欠陥が。

安全性という面での意味もあるが、明らかにオーバースペックの機体性能を制御するという意味合いである程度の安全制御はされているが、それでも規格外。そんな規格外の二機、それに並ぶ最後の機体について、制作理由にリイスは心当たりがあった。故に、ふと気になったのだ。

「確か…錬金術らしいですよ」

「それって、黒化（ニグレド）・白化（アルベド）・赤化（ルベド）？ なら、最後に来るのは赤だけど…その機体、誰が乗るの？」

「そこまではまだ。ただ…東様、かなり悩んでいました」

クローエのその答えに対してリイスは深刻な表情で『…そっか、わかったよ』と返して言葉を続ける。

「それで、もうひとつの話は」

「実はよくない噂が流れていまして… 話せば長くなるのですが…」

「できるだけまとめてお願いできるかなクロちゃん」

「今月末の学年別個人トーナメント。優勝したら織斑さんと同室になれるという噂が流れてまして」

「まあその類…なんなら今すぐにも代わる？というかクロちゃん早く同室にしてくれって先生に、「問題はここからです、リイス」…どういうこと？」

リイスとしても、学校側都合といえどいつまでも一夏と同じ部屋というのは不味いだろうとは考えていた。だからこそ、そんな噂が立つなら直接先生と話をすると考えたが、その言葉は途中で途切れた。

「それにあたって、色々関係が噂されてるリイスと一緒に部屋になれるという話がですね」

「どうしてそうなったの」

頭を抱えた。どんな理屈で考えればそうなるのか。仮に、噂が事実だったとして自分なんかと同室になっても特に何の意味もない——と、リイスは考えていたのだが

「いや、それがですね。実は1年生にはリイスのファンも多く、同好会があるくらいです」

「あの話本当だったの?! いやまって、色々おかしい」

「主に一組の生徒が半数を占めているようですが。で、是非とも同じ部屋になりたいと

「う人がたくさんいました」

頭を抱えた。つまり、今もこの瞬間、飢えた野獣（クラスメイト）に見られているということだ。普段、普通に接して問題なく会話をしていたのにどうしてこうなった、羊の皮でもかぶっていたのか。

「…ドイツ帰っていい？」

「しようがないにやあ… だめです」

「もう一週間くらい入院してきたい。はあ…」

朝からストレスと疲れで心労が限界に来そうになって項垂れていると、丁度時間となり教室には千冬と真耶が現れる。そしてSHRが始まるやいなや、クラス全員が静まり返り真耶へと注目する。

「え、ええとですね…今日はなんと転校生を紹介します。しかも二人です！」

と、普通ならここで歓声とか驚きの声なんてものが上がるんだろうが一組生徒は表情をほぼ変えずに真耶への注目を続けている。

「え、えーとお…」

涙目になっている真耶を察したのか、クロエがクラスメイトにだけわかるように、スツとサインをして一言。

「せーの」

『えええええつ?!』

それと同時に。教室内には『転校生だつて!』『どんな子かな!』などという歓声が。それを見た真耶は涙目のまま

「お、お気遣いありがとうございます皆さん…。では、入ってきて下さい」

山田先生の合図で転校生が入ってくる。それまで転校生なんてどうでもいいと考えていた一組生徒達だったが…この後の出来事で、それは『やらせ』ではなく『驚愕』に変わるこゝとなる。

「なん…だと…」

クラスの誰かか呟いた。転校してきた生徒。そのうち一人は——男子生徒だったのだから。



「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなこともあるかと思いますがよろしくお願いします」

『クロちゃん、マドカ』

その転校生が教室へと入り、自己紹介をした。そしてその後、皆に質問攻めされてい

る間に通信を飛ばした。

最近、この身内限定の回線もリニューアルされた。より秘匿性を高めて、利便性を高めた：だったか。それが束さん制作、個人間秘匿回線通信サーバー、通称『兎鯖』。

今までは個人間秘匿回線で直接やり取りをしなければならなかった。更に、回線使用時にはハイパーセンサーを起動しなければならぬという手間があった。それをより簡略化させ、第三世代のイメージ・インターフェースを利用・応用することで、日常生活の中で伝えたい言葉やデータのやり取りを簡略化させるといふものがこれだ。

会話もチャット方式で表示され、ログも残る。そしてその会話は利用者には見えないうチャットウィンドウとして展開できる。…本当束さんは天才か。こっちの方面でもこれ、特許とか取れるんじゃないかな。

フリーチャンネルという場所は束さんに利用許可を数日前に貰ったので、今後の利用方法とかも考えよう。鈴とセシリアにも後日教える。

” [ルーム参加者] ” 通信兎 ” エム ” ” 栗鼠 ”

【通信兎】『はいはいクロエです。あれ女ですよ、バレバレです変装舐めてるんですか』
 【エム】『あれは女だな。…歩き方、体の振れ、それにあの胸。全てに違和感がありすぎ
 』

【通信兎】『マドカは胸あんまりないですもんね』

【エム】『黒式で今夜のおかずの材料にされたいかクロエ、そういう貴様もないだろう私より』

【通信兎】『従順な野獣をそちらに差し向けて今夜のおかずにしませうかマドカ？』

”

『ははは、こやつめ』と同時に二人が言う。あの…二人共、私の通信…。

”

【栗鼠】『満足したかな君達。私もあれ女の子だと思うけど…そんな情報とかあった？』

【通信兎】『例の件で立て込んでましたから見逃した…かもしれないね、探り入れてみます。マドカ、そっちはどうですか』

【エム】『聞いてない。こちらもスクールに問い合わせてみる』

”

そこで丁度騒がしさが落ち着きを見せて、先生が『落ち着け馬鹿者共！』という声が響く。どうやら、次の転校生の自己紹介に入るようだ。

「では入ってきて下さい。」　「ボーデヴィツヒ」さん

そうして二人目の転校生が教室に入ってくる。

あれ、待つて。今とても聞き覚えがある名前が――

” 兎鯖” を確認すると『すごく聞き覚えがある名前が……』『ああ、聞こえたな……』というログが。そうして教室に入ってきた二人目は：私がよく知る人物だった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。出身はドイツ、一応代表候補生だ。好きな食べ物は芋羊羹と信玄餅、純度100%葉茶も好きだ」

多分、私達全員自分の席で真顔になっていたと思う。そんな私達の状況も知らず、”ラウラ” は質問される内容に対してスラスラと答えていく。

”

【通信兎】『リイス：ドイツに帰りましょう』

【エム】『とても嫌な予感があるので私も厄介にならせてくれ』

【栗鼠】『君達現実逃避して私に丸投げするの止めない!? 待つて、聞いてないんだけど』

聞いてないのだ。確かに私は東さんと環境上頻繁に連絡取れないし、お義父さんへの連絡も定期的だったのは事実だ。けど、何で。どうしてあの子がここに居るんだ。

生徒からの質問に答え、一言断った後ちらり、と私の方向をラウラは見た後……一夏の

所まで歩いて行く。一夏とラウラは面識がないはず、なんで？そしてどうしてこんなに嫌な予感がするの。

「貴様が、織斑一夏か」

「へ……あ、ああそうだけど——」

「ふむ。なるほど……本来なら貴様には色々言いたいことがあるのだが、そうすると姉様に迷惑がかかる。貴様は私の”未来のお義兄さん”になるかもしれないのだから」

問題発言が聞こえた。それはどういう意味かなラウラ。なんで一夏がお義兄さん？

「姉がいつもお世話になつております。これはツマラナイモノですがどうぞ受け取つて下さい。——後、今日からお義兄様（おにいさま）と呼ばせて下さい」

そうして、どこからか取り出したどこぞの優良企業が出しているお茶葉と洋菓子詰め合わせセット『昇天』を差し出した後……日本人も大満足なお辞儀で爆弾を投下した。

……勿論、この後大騒ぎになり私は捕まり一夏やラウラも包囲され。恐らく女性だろうシャルルさんが先生の隣で引きつった笑顔を浮かべていたという大惨事。とにかく、後で諸々事情を聞かせて貰おう。私はそう心に決意するとともに、黒板に手をつきながら俯きため息を吐く先生に同情していた。

すれ違う心

ラウラとシャルルが転校してきた当日のお昼休み。学園本館から出て、生徒会室が存在している職員棟をあがった先にある屋上。そこにある屋上庭園にリース達の姿は存在した。

珍しくあからさまに顔をひきつらせているのはリース、そしてリースに抱きつきながらに幸せそうにしているラウラ。それを見ながら疲れた顔をしているマドカとクロエだ。

一夏達には『ちよつとお話してくる』とだけ伝え、返答を待たずそのまま此処に連行してきて今に至る。

「それで、」

「はい！なんでしようか姉様！」

「ばあつ、と。まるで尻尾を振っている犬のように嬉しそうにして、リースの制服に擦り付けていた顔をあげるラウラ。弁明しておくと彼女は犬ではない。兎である。いろいろな意味で。」

「なんで君がここにいるのかなあラウラ…私、お義父さんとかから何も聞いてないんだ

けど」

その言葉に対して頷くクロエとマドカ。リイス、クロエ、マドカは篠ノ之束の関係者であり……亡国機業や世織計画について知る人間である。そして、各々目的を持って動いていた。

ドイツ空軍の一部と篠ノ之束、更にドイツ政府は協力関係にある。この事実は世間に公表はされていないが、束とドイツの間取引があつてそれを互いに秘匿するという契約がされている。

つまり、ラウラがもし学園に来るといふ話があればその詳細について連絡や資料が来るはずなのだ。にも関わらず、そんな話はなかった。例えるなら、男女交際でやや特殊な病氣と性癖を持った女性だ。まさに今のラウラは俗にいう『来ちゃった』状態だったのだから。

「はい！ 姉様が結婚されると聞いて」

「誰に吹き込まれたの」

「クラリツサです！」

「あの人は……ぐ、具体的に何を言われたのかなあラウラ……」

そこでラウラはリイスに抱きついたまま思ひ出すような素振りを見せて、

「姉様が織斑一夏と同室の仲だと聞いて、それをクラリツサに話したら」 将来を誓う関

係 だと聞かされました」

「…いや、そんな事実ないからね？ その同室っていうのは誰から聞いたの」

そろり、そろりと屋上庭園から逃げようとする影があった。クロエである。そんなクロエの気も知らず、ラウラはそのままの状態でリースの背中側。逃げようとしているクロエを指差した。

「クロエです」

「クロちゃあああああん!？」

全力で逃げようとするクロエ。だが、それを許さない存在が居た。マドカだ。クロエはデータ系であり、マドカは実戦型。それも修羅場をくぐり抜けてきたような人間だ。故に、もがいても逃げられるはずもなく…マドカに拘束され、そのままリースの前まで連行された。

「あ、あのですねリース。これには深い訳が」

「慈悲はあげる。言い訳くらい聞こうか」

「じ、実は少し前にラウラと連絡した際に…同室のことを話してしまいました…」

「ああうん…それでラウラがそのことをクラリツサに話して、勘違いしたと。クロちゃん無罪——クラリツサは有罪、どうしてやろうか」

リースがクラリツサに対してどうしてやろうと考えていると。

「ま、待つて下さい姉様！私が勘違いしたのでしようか…？だとすればクラリツサに罪はありません！部下のやったことは私の責任でもありません、どうか私を罰して下さい！」

「ラウラは本当純粋な子だよねえ…ああうん、なにもしないから大丈夫。冗談だから、ね？」

”

【通信兔】『狂犬みたいだった影が完全に消えてますね、流石ですリイス』

【エム】『完全に犬だな。 …どうやったらこんな忠犬が出来るんだ』

”

そんな会話が個人間秘匿通信回線鯖 兔鯖 でされて、ため息を吐きつつ涙目になっているラウラを慰める。

「で、話戻していいかな。何も聞いてないんだけど…どうしてここにいるの？」

「それは、」

「クロちゃん盗聴防止してくれてるから大丈夫だよ。それにここ、滅多に人來ないし」「つまりこのような場所で織斑一夏とあんなことやこんなことをされていたのですか！？」

「またクラリツサか。そういう関係じゃないと何回言ったら… そろそろ怒るよ」

流石に不機嫌そうなりイスに気がついたのか、ラウラはコホン、と咳払いをして――
「…大将閣下から言われてきました。今後、”君の力が必要になる可能性が高い”と言われて」

「なるほど。てことは…もう、亡国機業とか、例の件については聞いてるね？」

「Ja（ヤー）。資料を確認した時には信じられませんでした。まさか、あんな兵器が実在するとは…それに無人機とは」

元々、ドイツは国として篠ノ之束と協力関係になることを複雑に思っていた。束との協力関係、正確には空軍上層部との個人的な関係があるということとドイツ側は『触らぬ神に祟になし』という考えで黙認していた。

しかし、その関係が変わった出来事があった。IS学園での襲撃事件である。

ドイツは色々問題を起こす国だった。といっても、一部の研究機関の話ではあるが。リスが過去に襲撃した違法研究施設の中で、ドイツの施設は3件。全てが人体関係の施設。

更に言うなら、既に束により肅清を受けたが…今ここにいるラウラが生まれる過程や、越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）についての研究。違法研究、特に人体とISを結びつけるものについては束は忌避しており、度を越えたものについては相応の処罰を下している。そんな中での無人機。その無人機には人の脳が使用されており、束の個人

的事情を言えば愛娘のような存在を負傷させられたのだ。

東から取引を持ちかけられたのだ、ドイツは。

身内のついでに、ある程度の研究開発への助言はしてやる。だから国の力を使って”私に協力しろ”と。これは破格の取引だ。ISの生みの親である東にどんな形であれ協力をして貰えるかわりに、東に協力するというのはメリットしかない。

しかしドイツは知っていた。自分達がどんなことをやらかしてきたのかを。つまりこうも取れるのだ。”お前らの国で行われていた違法研究についてとりあえず黙っておくから協力しろ”と。

半ば脅しに近い取引ではあったが、ドイツはこれを了承。そして東が早速ドイツに対して言ったのは——ラウラの学園行きだった。

「私は、大将閣下の命と…：自分の意志でここに来ました。そして姉様、貴女の力になりた」と、そう望んで私は此処に居ます」

「…ラウラ」

「私には貴女の復讐はわかりません。詳しくも知りません。ですが…：私を殺してくれ”貴女の力になりたい、傍に居たい”

ラウラ・ボーデヴィツヒという少女は一度死んでいる。そして、それを殺したのはリースである。かつての彼女の復讐は『生まれてこなければよかった』という、生に対

するものだった。

「私の復讐は、まだ終わっていません。：見つけていないんですから、真相を」

そして——彼女は今も探す。”許せない”という感情で、ある事件の真相を。

「私も、答えを探しに来ました。”ラウラ”として。：今はちゃんと、ここにいます」

その言葉に、どれだけの想いが込められていたのだろうか。：リイスはその言葉に對して

「——今度からは、ちゃんと連絡するんだよ」

「ツ… は、はい姉様！」

ラウラが学園に来たのは、自分の養父と彼女なりの理由があつてのこと。そして…亡国機業と世織計画に對抗するための戦力として、というこはリイスは理解できた。

が、

「…よくわかつたよ。ラウラ、でも一番大事なことを忘れてる」

「大事なこと…に、日本の作法。アイサツとツマラナイモノに何か不備でもありましたか!？」

本當この知識どこで仕入れてきたんだらうかと考えるが、恐らく当たっているだらう

原因に心当たりはある。やはり制裁しておこうと決めて、言葉が続ける
「なんで連絡がなかったの」

沈黙。

ラウラが沈黙して、リイスから目をそらした。

「例の件とかラウラの復讐とか、それはわかった。 …でもそれって」学園に来た理由

”だよね”

「は、はい。そう…です…」

「連絡がなかったのはなんで？ …まさか、連絡できないくらいのこと態がドイツであったの？ 黒兎隊とかに何かあった？」

非常に真面目に、心配そうに聞いてくるリイスに対してラウラは目をそらし続けて、
若干震えていた。マドカとクロエも『何か聞いてるか？』『いえまったく』と、疑問する。

「こ、個人的な理由で恐縮なのですが」

「…？」

「そのほうが”さぶらいず”になるとクラリツサに教えられて博士と大将閣下に相談しましたら…その…の、乗り気で…」

人が三人分。ずつこける音が屋上庭園に響いた。

尚、この件について後日関係者がこつぴどく苦情を言われたのは別の話。

「…で、私としては一夏や諸々の人に誤解を解かなきゃいけないってもうかなり疲れ気味な訳だけど」

「お義兄様つていい響きじゃないですかリス」

「クロちゃん他人事だと思って…まあなんとかする。それで——シャルル君？のことだけど」

とりあえず、一夏については夜にでも話をしておこう。噂についても話しておいたほうがいいのかなあ…

しかしながら、本当に私と一夏の噂はよく建つ。別に付き合ってる訳じゃないし、そんな関係でもない。

…第一、私が一夏と釣り合う訳ないじゃないか。

「ラウラ、一応聞くけど何か聞いてる？」

「いえ、何も…。男ではないのは間違いありません。身体に男性独特の特徴がなさすぎるかと…」

その通りなんだよね。あれはもはや書類だけ無理矢理作ってコスプレしてるだけのレベル。一般生徒は騙せても、ちよつと目利きの人には見抜かれるくらいに杜撰な変

装。恐らくセシリアも鈴木も気がつくだろう。

思い出すのは、午前の授業。6月からはISの実戦演習ということで、一組と二組。三組と四組という組分けで授業をすることが決まった。そしてその合同授業。専用機持ちのうち、セシリアと鈴対一夏とマドカの演習が行われる。結果は一夏マドカペアの勝ち…というより、マドカが一方的に一夏を振り回して勝った。

その間、シャルルさんが何をしてたのかを私はちゃんと見ていた。”首元のネックレストップに手を伸ばして触れながら演習を見ていた”のだ。推測ではあるけど、多分あれは録画。それもアナログな方法を用いてのもので、探知対策だと思われる。

不審な点はまだある。演習での着替えは男子…つまり一夏はアリーナの更衣室だと決まっている。本館からアリーナまでは距離があり、時間がかかる。にも関わらずシャルルさんの着替えは非常に早かった。

「男装の理由は間違はなく織斑さんでしょう。ですが…あまりにも杜撰すぎて逆に不審です。彼、もとい彼女はデユノアですよ？」

「まあ男性操縦者が第一目的。そして他の専用機のデータも採取するのが第二目的と考えるのが妥当だが…クロエの言うとおり杜撰過ぎる」

彼女が男装している目的は色々考えられる。デユノアといえれば世界的なISシエア第三位の大企業だ、それを考えれば尚更。ハニートラップという線が一番濃厚かな。企

業にとって一番都合がいいのはそれだけ——男装の意味は一体？

…仕方ない。ちよつと動くか。

「クロちゃん、マドカ。話してた通りちよつと東さんとかスコールさんに問い合わせてみてくれる？」

「わかつた、今夜部屋に戻ったら確認しよう」

「東様にも聞いてみます」

ちよつと手荒になるけど…私には考えがある。”わからないなら出てきて貰えばいいんだ”

「ラウラ」

「はい姉様！」

「ちよつとやつてもらいたいことがあるんだけど、いいかな？」

そうして私は、此処にいる全員に話した。

彼——もとい、彼女をあぶり出す作戦を。

「…以上がラウラのあの言動の理由と、最近出回ってる変な噂について。本当疲れるね」
「な、なんていうかユニークな子だよ…。いきなり『お義兄様と呼ばせて下さい』なん

てびっくりした」

夜。寮の部屋でリイスは朝のSHRの事についてと、最近出回っている噂について話をしていた。朝の問題発言についてはリイスが7割位でうちあげた理由を説明しており、更に最近出回る噂についても話済み。

「ラウラ、小さい時から事情があつて両親居なくて…それで引き取られた先でも箱入り娘同然に育つたからちよつと純粹というか、常識がないというか…ごめんね一夏」

「もういいって。でも、噂なあ…。本当その噂どこから出てきたんだか」

既に一夏にとつても自分とリイスの関係を噂されることは慣れている。その事実について聞かれたことはあるが『そんな事実はない』とキツパリ言っている。しかし今回はちよつと訳が違う。"クラス別個人トーナメントで優勝すれば、リイスか織斑君。好きな方と同室になれる"という噂だった。以前、リイスが媚を売って決定戦に勝つたとか、既に付き合っているなどという噂は流れたが今回はちよつと質が違う。

「…所でリイス」

「何かな?」

「何で荷物片付けてるんだ?というかその拡張領域収納すげえな、俺も欲しいわ…」

寮、一夏とリイスの部屋。リイスは自分の荷物をまとめては拡張領域に収納するとう作業を繰り返していた。

彼女の私物は常に整理整頓されている。だからそれに対して一夏は疑問を抱く。な
んで片付けしてるんだ、と。

「白式は単一仕様の関係で空き領域ないから無理だと思うし、これ知り合いがテスト扱
いで作ったのだから。あれ、先生から聞いてない？」

聞いていない。と一夏は思う。

「いや、シャルル君転校してきたでしょ？その関係でまた急遽部屋割り変更になったら
しくて。それで私、クロちゃんの部屋に移動」

「……え」

時間が止まったように固まる一夏。当のリースはといえば、『あれ、何処に片付けたか
な……』などと呟きながら片付けを継続している。

「所で、昨日の約束だけど——」

「ど、どういうことだよ！」

突如。大声が部屋に響いた。それは一夏からのもので、焦ったように一夏はリースを
見ていた。

「……いや、だからね。シャルル君がこの部屋に入ることになったから、私はお引越し。
2つ隣の部屋に移動するだけだよ？どうしたんだい君は」

「ッ……移動って、今すぐじゃないと駄目なのか」

「今日中にやれつて先生からも言われてるからね。 ……てつきり、私は君にも連絡が行つてるものだと思つてただけだ」

部屋の移動。これはリイスのある目的のためであるが…個人的な理由でも、部屋を移動したいという気持ちがあつたのだ。

その理由は自分の中の感情。これ以上…違和感を増やしたくなかつた。その違和感はいつか自分を追い込む、きつとそれは一夏すらも追い込む。

”わからない感情への恐怖”。それが、リイスの中にはあつたのだ。

「明日にはシャルル君来ると思うよ。まあ流石にずっと同室つて訳にもいかないよ」
そして、リイスは地雷を踏んでしまう。

予想もしていなかつた、彼女にとつてもイレギュラーな地雷を。

”君には散々甘えさせて貰つたからね”。 ……本当ありがとう、助かつたよ」

「…んだよ、」

「え？何か言つた？」

「なんだよそれッ！」

一夏の中で何かが切れた。そして、リイスの肩を掴んで向かい合おうとするが…位置が悪かつた。そのまま壁に対してリイスを押し付ける形になってしまう。

「い、一夏？」

「…何が甘えさせてもらった、だよ。散々護られて、優しくされて、何も知らないのは俺
だろ！——あの対抗戦の事だつて、」

禁句だった。リイスにとつては対抗戦での出来事は出来るだけもう話したくないも
ので…特に、その真相を知る人間としては一夏をもう関わらせたくなかつた。一夏は意
図しなくても見てしまった。あの…対抗戦での少女と、リイスのやり取りを。

それはリイスにとつては触れてほしくない、聞いてほしくないことだつた。彼女に
とつての違和感が大きくなる原因であり、その話をされると嫌だつたから。見てほしく
なかつたのだ、本当の自分を。見てほしくない理由さえわからずに。

違和感を生まれさせる禁句。それによつて湧く感情を拒絶しようとして、リイスも一
夏を睨みつけると、壁際に追い込まれている状態で彼を突き飛ばした。互いにとつての
地雷、禁句。それが連発される中で、リイスは言つてしまう。

最大の禁句を。

「…一夏、君には未来が約束されている」

「何言つて——」

「君はそのまま従つていれば安全なんだ」。未来も、安全もきつと約束されている
…それでいいじゃないか」

それは事実だろう。一夏は男性操縦者であり、その未来と安全性は望めば日本政府が

保証する。実際、学園での生活を支援している一部も政府なのだ。

世界只一人の男性操縦者。同時に身の危機だつて生まれるが…基本的に国や政府が彼を護る。利用するために、データを欲するために。

更識家がいい例だ。生徒会長である更識楯無、更識家の人間達。それらもまた一夏を護るという任務を受けている。それも、政府からだ。リイスは対抗戦を終えて、真相を知り、こう考えていたのだ。『一夏はそのまま何も知らず、平和に暮らすのがいい』と。間違いではない。きっとそれは客観的に見れば一夏にとって最良の選択。最も安全で、未来を守られるという選択。…だが、そこに本人の意志なんて存在していない。”
護られる”というのは受け身なのだ。

誰かにそうされている、それは見方を変えれば——選択の権利を全て捨てて、全て殺しているということなのだから。

「お前はどうかんだよリイス！いつもなんでも一人でやって、全部完璧にこなして見せて！…対抗戦の時だって、全部自分でやろうとして俺達を跳ね除けて！ 鈴の言葉の意味が、わからなかったのかよ！」

「…それは、心配かけたとは思ってる。不甲斐なかったとも思うよ、でも」

「そうじゃない、なんで…なんでわからないんだよッ…」

リイスにとっては理解できなかった。対抗戦での件は、全てが自分の不甲斐なさど力

足りずだと思つていたからだ。箒が無人機に襲われて殺されそうになったことも、自分が死にそうになったことも、何もかもが。

「お前のその完璧主義や、全部自分でなんとかしようとするそれを強さだと思つてるのかよ、だったらそれは大間違いだ——それはただの、強がりと自己犠牲だ！」

「ツ……」

パンツ、という乾いた音が響いた。

それはリースからのものであり：打撃されたのは、一夏だった。

自分がやったことに対して一瞬見開くが、すぐに一夏を睨むような視線へと戻る。

「君に、何がわかるんだ」

「わかんねえよ。ただ強がつて、一人で傷ついて、”いつも通り”を装うお前の気持ちなんてわかるかよ」

互いに冷静ではなかった。だからなのか、お互いが思つていた言いたいことや、思つていたことが吐き出されていく。

「——やっぱり、だめだ」

リースは息を吸い、深呼吸すると……まるで呪いのようにその言葉を呟いた。

「……君と私は、真逆だ」

そのままリースは一夏を押しつけて、部屋の入り口へと歩いていく。

一度は一夏がこちらに踏み込んで、リイスはそれを拒絶して逃げたのだ。なのに、また踏み込まれた。そうされる違和感、それに対してリイスは——ただわからなくて、耐えられなかった。

「Auf Wiedersehen」：一夏。あの約束はナシにしよう。それと殴つて、ごめん」

リイスが走つて部屋を出ていきバタン、という扉が閉じられる音が聞こえる。部屋に一人だけ残された一夏は——『何故、どうして』という憤りと、自分に対する別の怒りがこみ上げながら立ち尽くすしか無かった。

迷い路の導き手

『とまあ、こつちの情勢はそんな感じだ。 …嬢ちゃん、大丈夫か?』

画面の中。“イワン”と呼ばれるサングラスにスーツ姿。明らかにマフィアやその類の人間に見える男性は、通信相手である学園の女子寮1023号室に居るリースに言った。イワンと通信をしているリースの雰囲気は、本人以外が見れば明らかにおかしいと感じ取るほどに…どこか沈んでいた。

「…大丈夫です」

『そうは見えないがな。 …何だ、彼氏と喧嘩でもしたのか』

「私にはそういう人は居ませんよ」

『こりや重症だ… まあ個人的な話はこれくらいにしよう。 —頼まれていた事について報告させて貰いたい』

その言葉の後、リースの通信ウィンドウの横に別のウィンドウが展開される。それは複数のデータグラフと、ある調査報告書。

題目は『デュノア社に関する調査報告書』だった。

『わかっていると思うがオフレコだぞ?デュノア社だが、実は俺達も裏取引って形で商品

を卸したことはある。つまり、この事実が何意味するかわかるな?」

「…デユノア社は武器や弾薬を会社として購入していた、ということですか」

『名目上は実験とか研究の為だが…IS関係の商品、それも”制御装置なし”のものを買ってる。だがこれはかなり前の取引データだな…嬢ちゃんが欲しいのは、最近の难道?』

リースが欲しいのは最近のデユノアについてだった。だが、オフレコとして今聞かされた話は非常に興味深いものでもある。”制御装置なし”のIS用品…これは、量産品装備に存在する安全装置を排除したものに当たる。

一般的なISは、アラスカ条約で軍事利用が禁止。そして生産される量産機体や装備品には競技用としての調整が施される。これが、制御付きと呼ばれるものだ。マドカやリースなどのISには束の手が入っており、場合に依じてその制御が取り外せる。しかし、このような例外がない限り一般的に量産されている量産装備の制御装置は簡単には外せないようになってる。

もし、無理矢理制御装置を外すと自動的に信号が送信されて一発でバレる。だからこそ裏での取引がされるのだ。特殊な方法を用いるとは言え、この制御装置は外せるのだ。非常に高いコストと手間を必要とするが、その制御なしの装備について過去に取引があった。それを知れただけでもリースにとっては収穫だった。

「はい。最近のデュノアについて、何か変わったことかありませんか？」

『そりゃあ、ありまくりだぜ嬢ちゃん…』

「それ、どういう——」

画面の中。イワンが額に皺を寄せて、サングラス越しでも明らかにいいようには思っていない、という表情で言葉を続けた。

『詳しいことはさっきの報告書にも書いてあるが…そうさなあ、これはサービスでちよつとした話をしてやろう』

「いつもサービスしてくれますよね、イワンさんは」

『お得意様で更に恩人だからな嬢ちゃんは。サービス精神溢れてるだろ？ …まず結論から言うと、デュノア社はうちの界限だと評判最悪なんだよ最近。なんでも、外道の道に堕ちたとか』

「何かをやった、ということですか？」

『証拠も確証もないただの噂だよ。誘拐をやったとか薬物実験を裏でやってるとか、人体実験に手を染めてるなんて話もあつたな』

「ツ…それって」

『恐らくクライアント、篠ノ之束が探してるものの可能性はあるかもしれない。なんせデュノアといえばI Sの量産機シェア世界三位。 …あくまで噂だよ』

制御なしの量産機装備、黒い噂。怪しさを疑うならこれ以上のものはないだろう。しかし、まだ足りなかった。疑う、というだけではだめだったのだ。それだけでは、リスにとって彼女を疑うには足りなかった。

「クロちゃん、あのデータ：イワンさんに送れる？」

「いや送れますけど：：リス、かなりギリギリの橋ですよ？　これ一応学園の機密情報なんですから」

「今更気にするのクロちゃんは。第一：：会長に許可は取ったよ」

「うわあ。ならいいですね、はいポチつとな」

送信されたのは、「学園側が保管するシャルル・デュノアのデータ」と、教室での写真。送信されたデータを画面の中で興味深げに目を通したイワンは『ふむ』と呟いて、『：：なるほどな。二人目の男性操縦者、ね。ニュースで見えてはいたがそういうことだったのか。デュノア社も思い切ったことをしたな』

通信先。そこでイワンが『ちよつと待つてろー』という言葉の後何かをゴソゴソと探し始めた。そして、戻って来たイワンの手にあつたのは：：古い、ボロボロのファイルだった。

『嬢ちゃん、知りたいのもしかしてこのシャルルって子の情報か？』

「は、はい。そうですが——」

『これもまたサービスだ。それも…本当なら大金でも貰いところなんだが、どうにもきな臭いからタダでいい。嬢ちゃんのお陰でコネができたドイツ軍にもいい思いさせてもらってるからな』

イワンは情報通の男であり、武器商人である。故に商売の話には煩く妥協を許さない。そんな商売においては金の亡者とも言える男がそこまで言うものとは何か、リースとクロエはそれが気になった。

『結論から言うぞ。このシャルルつて子は確実に実在している。…が、”シャルル・デュノア”という人間はもうこの世に存在してないんだよ』

そんな、とんでもないことをイワンは言った。

「…で、何があつたのよリース」

「何がって、特に何も無いよ鈴」

6月。既に中旬過ぎに入るのではないかという時期、私の部屋は鈴の部屋にある。土

曜日ということもあり、他のメンバーも各々の休日を満喫している。

セシリア、マドカ、クロちゃん三人は学園から少し離れたショッピングモール『レゾナンス』に。暴れながら逃げようとするマドカを拘束して私服で外出する姿を私は見ている。先程から“兎鯖”ではマドカからのSOSのような文章が飛んでいるがきつと気のせいだろう。

ラウラとはいえば、転校当日の一件がいい方向に転んだのか、クラスの友人と茶道部の見学に行った。『おいしいお茶が飲めるよ』という言葉に食いついて目を輝かせていたと、一緒にいるナギから連絡があった。そこには和服姿で目を輝かせながら和菓子を食べすラウラの写真が。これ、クラリッサに送ったら喜びそうだなあ。

「大アリでしょ。…あの話、本当なんですよ」

「私と一夏が喧嘩して、それで部屋移ったって話？ 一部間違ってるけど…大体はあつてるよ。事実」

…喧嘩、と言っているんだらうかあれは。今思えばやってしまったとは思うけど、言いたいことを全部言えたのは良かったのかもしれない。

あれ以来、私は一夏と会話をしていない。学校で会っても話す気もなかったし、違和感も感じなくなった。これでよかつたんだと思う。

「あの馬鹿、一体何やったのよ…」

そんな鈴の眩きが聞こえたけど、私は聞かなかったことにした。∴個人的な事情もあるし。

「でも、丁度よかつたのかもかもしれないね」

「部屋の移動？　そういえば、あたしが押しかけた時もすんなりとOK出してたわよね。結局あの時は先生に却下されて肅清されたけど」

あの時。対抗戦の前に鈴が押しかけてきた際、私はそのまま手続きが問題なく進むなら部屋を移動してもいいと考えていた。結局あの時は先生が却下して無かつたことになったけど∴こんなことになるなら、あの時代わつておいたほうが良かったのかな。

「∴で、あたしの部屋に来たのは」

「暇だつたから。皆各々どつかいっっちゃつてて」

「さいで」

鈴の部屋の本棚。そこに存在する、分類上はライトノベルというカテゴリーの本。鈴イチオシの作者さんということで、その人が比較的昔に出されたという作品の第二巻に手を伸ばす。

この作品は1〜7巻までで全14冊のヘビイノベルと読者の間では呼ばれているらしい。日本にはたうんページと呼ばれる住所録や、こうじえんという辞書があるそうだが、それを彷彿とさせる厚さ。

最初はその厚さを見て正直言つて引いた。『これ、鈍器?』と思わず鈴に言うほどに。でも意外や意外、これがどうして、中々に面白い。曰く、どうやらこの作者の作品に魅せられ、中毒患者や末期患者と呼ばれる人種がいるらしいけど、それについてはよくわからない。

だが確かに、この面白さなら魅せられるのも仕方ないのかもしれない——うん、気がつけば1000ページ程度なら普通と思える。どこもおかしくは無い筈。読みきれなかつたら鈴に借りよう。そして次はこの作者さんの新シリーズや他の作品も是非読んでみたい。おっと、こんなところに純度100%茶が。

「ああー! それ…私が飲もうととつておいた純度100%茶…」

「ふえ? あ…ごめん鈴。えっと、新しいの買ってくる?」

「いいわよ、こんなこともあるうかと箱買いしてあるからそつちの冷蔵庫にまだあるし。

…上の空になつてるわよ、リース」

”いつも通り”のつもりだったんだけど…そんなに、おかしいかな。

クラスメイトからも元気がないと言われた、私らしくないとも言われたし、今みたいはどこか抜けているとも言われる。おかしいな。一夏と別々の部屋になつて、違和感も感じなくなつて。…それで、いつも通りだと思つただけだ。

どうにも調子がおかしい。そう思いつつ私は、飲んでしまったペットボトルのお茶を

引き続き口に運ぶ

「リースつてさ、一夏のこと好きなの？」

「ごほつごほつごほつ…な、なんて？」

咽た。思いつきり。下手したら鈴の本にお茶がかかっていたかもしれないが、今確認したらセーフ。

「いや、だからさ。一夏のこと好きなの？ つて」

「…どうなんだろう、あつ」

無意識…だったんだと思う。鈴のそんな質問に対して、以前のような否定ではなく

「どうなんだろう」と返してしまった。けれど、私は一夏を好きという感情がない。故に、友人だと…喧嘩をするまでは思っていた。

鈴をみればとても悪い笑顔でニヤニヤしていた。そして満足気に頷きながら、ベッドの横にあるダンボールからお茶を取り出す

「…どうなんだろう」ね。ちゃんと聞いたわよ？ そのお茶、無駄にしちやつたからこれあげるわ。特別よ？」

スツ、とテーブルの上に差し出されたのは『厳選葉純正100%茶』。まさか、こんな所でお目にかかれるなんて…。販売開始から数量限定で限定販売され、怒涛の速さで売り切れ。その存在の話を聞いた時には既に販売を終了しており、残念に思ったが——実

在していたなんて。

「しかも緑茶タイプよ。まあそれ飲みながらちよつと聞かせなさい　ねえリース、あんたさ…人を好きになったこと、ある？」

…人を好きになったことなんていうのは、多分ない。

幸せだったあの頃、小学生の頃に誰かを好きになったことなんてのはなかったし、全部失つてからは…ただ、復讐だけを考えた。東さんに保護されてからもずっと、復讐と東さんやお義父さんへの恩返しだけを考えて、

——ただ、”強くなろうとした”。

「…ないと、思う」

「——でしようね、あんた不器用そうなもの」

とても心外なことを言われた気がする。これでも、作業などをする際に器用さは自信があった。だから私はむつとしたようにして、言葉を——

「自分に、他人に、周囲に。そういうのに対して不器用よね、あんたは」

返せなかった。

「…リース、対抗戦のこと少し話してもいい？」

「——聞かれても、答えられないよ」

「わかつてるわ。その話じゃない。私があんたに言ったこと…覚えてる？」

——あなたが傷ついたら、辛いじゃない

覚えている。だからこそ、私は強くなりたいと思った。

復讐のために、不甲斐ない自分のせいで心配されないうために。

…だから、もつと自分を殺そうと思った。

甘さがあつたからああなつたんだ。油断があつたから、情けがあつたからああなつたんだ。なら、そんなもの捨ててしまえ、と。少なくともあの3年間はそうしてきた筈なのに…それが、此処に来て緩んだ気がした。

「…不甲斐なかつたとは思ふ、ごめん」

「あんたね——それ、一夏に同じこと言ったの？」

言った。喧嘩した時…対抗戦のことを聞かれて、全く同じ答えを返した。

「…言った」

「なるほど。そりゃ…一夏怒るわ、納得した」

鈴が私を見て、呆れたように溜息をついた。どういう…ことだろうか。

「あたしはね、あんたのこと友達だと思つてる。一組は愉快な生徒が多くて、正直あたしは羨ましいのよ。そんな…そんな楽しくて、愉快的な友達が一人でも居なくなつたり、怪我したりしたら寂しいじゃない。辛いじゃない」

「私は、”みんな”が無事なら、それでいいって思つて——」

「その中に、あんたは居るの?」みんなの中に、あんたはいるの?」

言い返せなかった。そう聞かれてしまったら、答えは決まっていた。その中に…きつと自分は居ない。一夏や鈴の手を汚すから、経歴に傷がつくから。でも、自分ならいいと思った。今まで、そうしてきたのだから。

「…あたしき、一夏が好きだったのよ」

「——え?」

突然、鈴がそんなことを言った。

「でもね、フラれちゃった。…一夏にとつてあたしは『親友』なんだつて。それ聞いた時は嬉しかったけど、悲しくもあつたわ。きつと一夏には、別に好きな人とか、気になつてる人が居るんだなつて…そう感じた」

「…鈴、その」

「リース。あんたはもつと誰かに甘える事を、頼ることを覚えなさい。そうね、試しにこのあたしに頼つたりすることからはじめてみなさいよ」

む、無茶苦茶だと思う。

それに、頼つたりと言つても——

「じ、じゃあ」

「ん?なにになに?この鈴さんに任せなさい!」

「…このお茶、わけてくれないかな」

沈黙。

なんだろう、真面目な話をしていたつもりだったんだけど…この瞬間鈴が固まった。そしてフリーズすること数秒。いきなり鈴は『あー…ううい？…あちよー！』などと言いながら頭を抱えて、よくわからない動きをした後再び席について

「に、二言はないわ！」

「声震えてるけど…。無理ならいいよ？」

「任せなさい！もつと頼っていいのよ！」

「いやだから声——うわあ！」

次の瞬間。ビニール袋に複数詰められたペットボトル茶を渡される。えっと…本当に貰っていいんだろうか。

「貰わないと怒るわよ」

「ええつと…」

「本当に特別よ？それ…結構するんだから」

知っている。確か1本300円位したと思う。流石に後日何か返そう。鈴は『まあ』と私に言っ

「人を頼るとか、好きになるとか…ちよつと考えてみなさい。今はわからなくてもゆつ

くり答え出せばいいわよ——” わからない”。それに気がついただけでも、いいじゃない”

「…その、ごめ」

『ごめん』と。そう言いそうになった。

だけど鈴は私に対して手を前に出して『違うでしょ』と言って

”ありがとう”よ、リース。…それからもつとあたしの部屋に来てもいいのよ？ どうせ、一夏と喧嘩したのだから別の原因がまだあるんでしょ。中学の時も大体いつもあいつがやらかしてたんだから。時間がある時はきなさい、個室だから暇なのよ”

「…うん、ありがとう」

「いいのよ」

人を頼る、甘える、か。具体的にどうすればいいのかなんていうのは…まだ、よくわからない。

好きになる、という気持ちもどういったものなのかわからなくて、一夏に対する感情がそれなのか、というのも…正直わからない。

けど、今日鈴といういろいろ本音を話せてよかったと思う。…少なくとも、私はその”わからない”ということに気がついたらと思うから。

「鈴ってさ」

「ん？何よ」

「いいお嫁さんになりそうだよね」

『あんたが言うなあ！』と鈍器のような小説で頭にツツコミを入れられた。な、なんで……理不尽じゃないかな……。

そう思つて頭を擦っていると、コホン という咳払いが聞こえた。

「当然よ。あたしを誰だと思つてんの？ 料理もできて気配りもできる頼れる存在。

凰 鈴音よ？」

無垢な来訪者

その日の朝の彼は、とても気分が悪かった。

最近、というよりはリースと喧嘩してからの一夏はクラスメイトが見て明らかにおかしいと感じ取るくらいには、勢いがなかった。

一夏とリースが喧嘩して部屋を出た、という話はやはりと言うべきなのか、学園内へ翌日には広まっていた。それまでであった同室になれる、一夏と付き合えるなどの噂が嘘のように、学園内部では二人の喧嘩について話題になった。

問題になったのは別にもある。一夏とリースが喧嘩をしたのではなく、喧嘩別れした”という話もやはり出た。この噂について二人は生徒から各々言及を受けたが

『知らねえよ、リースなんて』

『知らないよ、一夏なんて』

と、返答される始末。それである意味諦めが付いた生徒もいるとか居ないとか。

「…やらかしたのは、どっちだろうな」

「え？どうかした一夏？」

「いや、なんでもねえよシャルル」

己の机の近くに立つシャルルに対してそう言うものの、声には元気がない。

いつも通り。一夏はシャルルが部屋に来てからも、内容を見直した日課の朝トレは続けていた。…が、走り込みのタイムは落ち、いつもなら時間に余裕を持って終わっていた日課は時間ギリギリまでかかっていた。

一夏の朝トレの師でもある轡木 十蔵にもこの変化は見えていた。それについて何かあったかと聞いても『ちよつと疲れてるだけですから』と返すだけだった。事情についてある程度知っているクラスメイトからも、噂そつちのけで心配をされたが…彼は、これにも同じ反応を返していた。

あの日のやり取り。一夏にはまさか、あんな喧嘩になるとは思っていなかったのだ。発端は明らかに自分だ。自分があんなことを言ったから喧嘩になった、それは理解していた。

喧嘩の中で…見たことのないリスの表情や感情を見た、一夏はそう感じていた。自覚はある。自分が悪いということも、冷静さを欠いて色々言ってしまったことを。だが許せなかったのだ——リスのあの言葉は、自分に対して”全てを諦める”と言っていたのだから。

「そういえば一夏。君は放課後に専用機で特訓してるって聞いたけどそうなの？」
「あ……やってるぞ。俺は他のみんなよりISの操縦技術や経験が少ないからさ」

「僕もそこに加わっていいかな？ 専用機も持つてるし、同じ男同士君と仲良くもしたくて」

「何言ってるんだ。男一人で色んな意味で辛かった中、お前が来てくれて助かってるんだぜ？ 訓練は別にかまわないぞ。えっと…リイ——」

シャルルに話しかけられて、訓練の話が出る。その受け答えの言葉の途中——そこで、言葉を切った。『リイス』と呼びそうになってしまったからだ。元々、このほぼ日課、というよりは日常になっている訓練は一夏が頼んで、リイスと始めたものだ。以降はセシリア、鈴、清香、クロエと人が増えたが、訓練内容やスケジュールを管理していたのはリイスだった。

そんな彼女は現在訓練には来ていない。クロエも同様に。

だから現在はセシリアが管理をしてくれている。のだが…一夏は、いつもと同じ感覚で。それが当たり前だというように、リイスの名前をつい呼びそうになってしまった。

「…馬鹿だな、俺。セシリアー、ちよつといいかー？」

呼ぶと、クラスメイトと会話をしていたセシリアが、一言断りを入れた後にこちらへと歩いてくる。

「どうしましたか？ 一夏さん」

「ああ、うん。放課後の訓練の件なんだけど…」連日”で悪いんだが、シャルルも混ぜて

もらっていいか？」

「シャルルさんも…ですか？」

一瞬。考えるような、そんな素振りを見せるが…すぐに、

「いえ、大丈夫ですよ。…失礼ですけど、メニューを見直したいのでシャルルさんの専用機について教えて頂いてもいいですか？」

これは、セシリアの罠だ。

セシリアは既にシャルルが男性ではないということに気がついている。それも、転校当日に。彼女は努力で上り詰めた、努力型の天才だ。故に、女性だと思った瞬間からの行動はとて早かった。

イギリス本国への確認、実家の管理をしている管理人メイドへの聞き込み、己で集められる限りの情報をすぐに集めてみせた。が、残念ながら確証を得る証拠は掴めず。ただよくわからない噂話だけをつかむことに成功していた。

…こんな罠に引つかかる訳がないとセシリアは踏んでいた。試しに仕掛けた、それで反応を見ればという程度に思っていたのだが、

「僕の専用機はラファール・リヴァイヴ・カスタムII。リヴァイヴのカスタム機だよ。武器はオールレンジ対応したものがあわせて使えると思う」

「ッ…!? ありがとうございます、では後ほどメニューを一夏さんの所に送りますので、

受け取ってください」

「うん、ありがとう。オルコットさん」

動揺を無理矢理隠したセシリアは平静を装い、そう返した。信じられなかった。まだシャルルの専用機については授業や課外で一度も使われていない。にも関わらず、専用機の詳細を明かした。

例えば、トランプなどで対戦をして相手に最初から手札を見せるだろうか？勝ち負けにこだわり、何か目的があるならそんなこと絶対にしない。なのに、シャルルはそれをしたのだ。何か理由があったのか、それとも…素でやったのかは不明ではあるがこれはおおいにセシリアを混乱させた。

そんなセシリアを見ながら一夏は『どうしたんだ？』と思っている——丁度、SH Rの時間となった。

教室の扉が開くとともに、千冬が入ってくる。それに続くように真耶も。いつもと同じように一斉に生徒がおとなしくなり、千冬が教壇に立った。

「おはよう諸君。早速だが、連絡事項がある。……今月末より開催が予定されている学年別個人トーナメントについてだが、ルールの一部に変更があった。トーナメントはダブル・トリプルという区分での開催となり、それにあたってシングルでの参加は不可能となった」

流石にこれは予想をしていなかったのか教室内からはざわめきが聞こえ始める。それに対して千冬は『まだ話は終わってないぞ』と続けて

「また、参加についても強制はされない。この中には当然整備科志望の者もいるだろう、先日行った面談において整備科志望と回答している者には参加は強要しない。……が、これは課外扱いの単位にもなることを覚えておけ。参加希望者は参加区分と、二人、もしくは三人で申請に来るように。以上だ」

そんな千冬の言葉。一夏は生徒のざわめきの中で考えることがあった。

「ダブルス、もしくはトリプルスカ……」

誰と組むか。それを考えているといつのまにかSHRが終わり、授業前の準備時間になった。……その瞬間、まるで地震でも起こったかのような地響きが発生した。それは生徒達からのものであり、一組の外からのものだった。一組生徒はいえ、それを見て『いつものことか』というように傍観しながら各々の作業をしている。

「織斑君！私と組んで！」

「何いつてるのよ！織斑君は私と組むのよ！」

「シャルル君！私と組んで！練習で優しく、時には厳しく指導してえー！」

「ちくわ大明神」

「誰よ今の。あ、抜け駆けしないでよ！」

大惨事だった。教室に押しかけてきたのは一年、他のクラスの生徒達だ。授業前の5分の準備時間、その時間はある種の自由時間である。他のクラスから全速力で走ってきた生徒達は、主に一夏とシャルルの机の周囲に集まりそんな『組んでくれ』と駆け寄った。

尚、彼等に比べると数は少ないもののリース達の所にも人が集まっていた。特にマド力は千冬似であり、実力も折り紙つき。しかも女性にしてはイケメンという部類に低身長でかわい、と非常に人気があつた。そんなマド力とはいえば、生徒の波を見た瞬間全力退避。リースの所まで駆け寄ると『残念だが私はリースと組む。ああ残念だなすまないな!』と生徒達に言つて狙いを変更させる。当然犠牲になるのは一夏とシャルルだ。

セシリア達にも生徒が押しかけようとするが、一組の一部の生徒が『あーはいはい、そういうのは事務所通してねー』などといいながら遮断。これを手配したのはクロエ。行き場を失つた生徒が更に二人へと押しかけていく。気がつけば教室の外の廊下まで生徒が大量にいる状況になっていた。

「僕は一夏と組む約束をしているので!ごめんなさい!」

声を発したのはシャルル。それまで詰め寄っていた生徒達は、動きを止めてシャルルに注目する。

「そ、そうだな！男同士で組みたいって思ってたき！悪いな皆！」

一夏のその言葉。それにより押しかけていた生徒は『仕方ないかー』『男二人つていうのも絵になるし捗るからね！』『その話について詳しく話そう』などと言いながら波が退くように撤退していく。それを見て、二人は訪れた安息に対して安堵する。

その姿を見ながらニヤリ、とポーカーフェイスの上に笑みを浮かべる少女が居た。クロエだ。

同日。放課後、箒は上機嫌で寮の自室にあった。

箒の人間関係は悪くなかった。同室である鷹月静寂とは良好な人間関係を築いており、少ないながらも友人と呼べる存在は居た。彼女はリイスを嫌っている。それは、彼女の個人的な感情……激情と言ってもいいほどの、一夏に対する感情からだ。

そんな箒だったが、内心複雑だと思ふ事態があった。それが……対抗戦での出来事。

——『危ないのは、一夏じゃない』『邪魔』

一夏を応援したい、活を入れたい、そんな思いで管制室を飛び出して。中継室で取った行動により、命を落としかけた。それを、どんな形であれ助けられたのだ。『邪魔』という侮蔑の言葉付きで。

悔しかった、力がないのが。

欲しかった、一夏の近くに居られる力が。

憎かった、妬ましかった、一夏の近くに居るリースが。

一夏の一番の理解者は自分だ。

一夏と最も付き合いが長いのは自分だ。

一夏を一番好きなのは、自分だ。

だから許せなかった。一夏の意識を逸らす存在が。

そんなリースが、一夏と喧嘩して部屋別れしたと聞いた時は心が踊った。嬉しかった。醜い感情がどんどん溢れた。結果、今自分は一夏と放課後一緒に居られる。朝の自主練に、放課後の訓練。そこで一夏と最も近くに居るのは自分だ。

そう、箒は思っていた。思って、故に上機嫌だった。

これから”一夏と”訓練なんだ。急いでいかなければならない。

一夏には私がいなければならぬ。

そんな病的なまでの”依存”であり”愛欲”。それが、今の箒の理だった。一夏の所に行こう、そう考えていた時だ

ドンツドンツドンツ

「…む？誰だ？」

突然、部屋の扉が叩かれた。

特に人と会う約束はしていないし、ルームメイドである静寐の来客だろうか。本人は現在不在だが。誰だろうか、そう思つて扉を開ければ――

「たのもう！」

扉を閉じた。箒は見なかったことにした。

おかしい、そんな馬鹿な。あのアツパー集団の中でも最近現れた存在であり、クラスメイドからは『期待の新星』などと言われている存在がこんなところに居るわけがない、そう思つて恐る恐る扉をもう一度開ける。

「たのもう！篠ノ之 箒の部屋はここで間違いないだろうか！」

再度閉じた。現実を認めたくない。

そこに居たのは、銀色の髪に“オッドアイ”。小柄な身体に特に改造が施されていない制服を身にまとつた一組に現れた異端児。

ラウラだった。

「ボーデヴィツヒ？ 私なら居るが…何か用だろうか？」

「ラウラでいい。実は、篠ノ之 箒。お前に頼みたいことがあつてここに来た」

諦めて扉を開けば、そこには何やらやる気のラウラが。

「はあ…箒でいい。フルネームは違和感がある」

「では箒、実は頼みたいことがあるのだが」

頼みたいこととはなんだろうかと箒は思う。

ラウラのことを嫌っているわけではないが、特別接点もなかった。それがいきなり押しつけてきたのにはなにかがある。それもとてつもなく嫌な予感が。そんな箒に対して、ラウラは言葉が続けていく。

「実は頼みにくいことなのだが…」

「言ってみろ、聞かなければなんとも言えん」

「私に習字を教えてくださいられないだろうか」

箒が固まった。

硬直すること暫く。固まる箒を不思議そうにラウラは見ており、箒は理解するのに時間を通してしまった。

「し、習字？習字とは…あの筆と墨を使って字を書くあれか？」

「日本には他の習字があるのか？」

「い、いやないと思うが…いきなり、どうしてだ？」

『うむ！』と元気よく返答し、ラウラは言った。

「ハタシジヨウ、とやらを書きたいのだ、織斑一夏に」

そんな、とんでもないことを言われた箒は唾然とするしか無かった。

訳がわからない。何故自分が習字を教えなければならぬのか。そう思い、断りを入れようと思つたら――

「何故私が習字を教えなければならぬ……書道部に頼んだりも出来るだろう」

「書道部には既に行つたのだが、トーナメントが近いこともあつて暫くの間部活動は中止と言われてしまつてな」

「ああ……そうか部活動の中止期間か　――だが、何故私の所に？」

思い出す。既に6月後半にはいる状況であり、学年別個人トーナメントは全学年にとって非常に大きなイベントということもあつてか、間近になつた現在は多くの部活動は活動を休止している。

一年生に対しては一部の参加は任意とされたが、他の学年は強制的に全員参加である。そのこともあつてか、他学年は現在とても忙しい。

「うむ。篠ノ之東博士から、『箒ちゃんは字が上手いんだよ!』と話を聞いていたことを思い出してな、それでだ」

その言葉に箒は釣られた。彼女は慌てて部屋の前を確認して、そのまま誰も居ないことを確認するとラウラを部屋の中に引きずりこむ。

「ね、姉さんの知り合いなのか!？」

「知り合いというか保護者というか娘というか」

「む、娘え!?!あの人結婚したのか!?!」

「いや、そんな話は聞いてないな。話すと長くなるし色々機密もあるので以下省略するが一応知り合いだ」

『ありえない』、と箒は思う。自分の姉がどんな人かは知っている。故に、大変失礼だが友達やその類は居ないと思っていたのだ。

なのにラウラは知り合いだと言いつつた。ある意味、とてつもなく大きな敗北感が箒を襲った。

「あつ、今の機密なのでそこのとこよろしく頼む。多分他人にバレると肉体改造されたりして技の一号力の二号みみたいなことになる」

「随分軽いなあ!?!あ、頭が痛くなってきたぞ…」

「なんだ風邪か?それはいけな。風邪薬をあげよう——きつと3秒で素直になれる」

「その怖い薬やめてくれないか。ああもうわかった!教える、教えればいいんだらう!」

諦めたように箒は言った。それに対してラウラは「ばあ、つとまるで犬に天使を足し

よような微笑みで『ありがとう箒!』と返し、かわいいものに弱い箒はそれで変な方向に目覚めそうになったとかそうじゃないとか。

「しかし、何故一夏に果たし状を? …エーヴェルリツヒの差し金か?」

「何故姉様が出てくる。いや、個人的な理由だよ。とても個人的な、ただの八つ当たりさ」

「八つ当たり、だと?」

「ああ、八つ当たりだ。そして興味もある——織斑一夏とはどれだけ強いのか、ということにな」

箒は見た。興味がある、という言葉聞いた時はラウラも一夏を好きなのだと思つたが…目を見て違ふとわかつた。あれは、恋をしている目ではない。戦う者に対しての興味、知りたいという探究心であると。

「…詳しく聞いても、いいだろうか」

「む?面白い話ではないぞ?」

「構わない。聞かせてくれ」

一夏は、自分の想いの人だ。故にその一夏に関係することを箒は知りたかつた。八つ当たり。それと一夏が…何の関係があるのかを。

「…時間はいいのか?その制服の下のISスーツ。どこかに行こうとしたのではないか

？」

「よく見ているな。先程、断りの連絡は入れたさ」

『そうか』、とラウラは返して

「第2回モンドグロツソ。その結末を：知っているだろうか」



私は自分勝手に、歪で、一方的な理由ではあるが、たった1つだけ許せない事がある。それが：織斑一夏だ。私はアイツを、彼を許す事だけは、簡単には出来なかった。

本当を言えば、転校初日一発殴らなければ気がすまなかった。：が、そんなことをすれば姉様に迷惑がかかるから抑えたが。

理由は自分でもわかってはいるが、とても自分勝手に、一方的な理由。

『あの織斑一夏という男は、教官の在り方を汚した。在り方を汚して、その存在に傷をつけた』

なんて一方的で理不尽な理由なのだろうか、そう自分でも思う。だがあの織斑一夏のせいで教官は：第2回モンドグロツソにおける優勝を逃した。

私は事実を知っている。その事実とは、第2回モンドグロツソ開催中に織斑一夏は何者かによって誘拐され、そして教官は自身の弟である織斑一夏を助けるために試合を棄

権した。結果として、その試合を棄権した事により：世間では教官に対する言いたい放題の罵倒や言葉が投げかけられた。

『最強の座を捨てて逃げ出した織斑千冬』ブリュンヒルデ』

『第2回モンドグロツソ決勝戦、ブリュンヒルデが試合を棄権 裏で動いていた事情！』

『ブリュンヒルデの裏金事情 大会裏に迫る』

そんな、事実とは全くかけ離れた事をマスコミはやりたいように当時は報じたのだ。

無論、すぐに報道規制が入った。

知人の伝で聞いた話ではあるが、本来なら決勝戦で戦う筈だった人物、イタリアの代表操縦者である『アリーシャ・ジヨセスターフ』、そしてアメリカでは多くの意味で有名である『ナターシャ・ファイルス』がその報道された内容と、報道した側に対して尋常ではないほどの怒りを露にした、らしい。

結果として、事実上第2回モンド・グロツソのブリュンヒルデ受賞者と有名人、そして事情は知らないが私の本国：ドイツや他の数ヶ国の政府から圧力を掛けられて、すぐにマスコミやあることない事を言っていた者達は黙った。

しかしそれによつて傷つけられた、教官の名誉。”世界最強”という称号には傷が付いてしまった。確かに、逆に考えてみれば不謹慎では在るが：織斑一夏が誘拐されなければ、恐らく私が教官とドイツで出会う事は無かった。そして必死に足掻いていた私

が、教官と出会い、多くを教わり、今のようになんかの意味で一人の『ラウラ・ボーデヴィツヒ』という存在として自立する事は、無かつただろう。

自分がそう考えているのはとても不謹慎な事だ。けれど、織斑一夏がそうならなければ今の私は居なかつたのだ。歪んでいるかもしれないが…その点だけについては、彼は感謝した。

だが、織斑一夏が誘拐などされなければ——教官は、織斑先生は恐らく世界最強として未だに君臨できていたのだ。勿論そんなもの、私の妄想だ。こんな事を言えば織斑先生や先生の熱狂的な信者達に何を言われるか分かつたものではないが…決勝に出ていて負けていた可能性だってある。

モンドグロツソというのは国家代表や化け物の集まりだ。その文字通り、一人一人が天才などではなく化け物レベルなのだ。

だからいくら教官が強くて最強だと謳われようと、『負ける可能性はあつた』のだ。それに、確実に勝てる保証も無いのだし未来について都合よく予想できても、確実にわからない以上『出ていけば優勝できていた』などと軽々しい事はいえない。

だけど、逆に言えば『出ていけば優勝していた』も言えるのだ。私は自分の恩師であり、今の私という存在にしてくれた織斑先生の存在を汚した彼を、許せなかつた。そう思ったからこそ、都合のいいように現実を解釈してしまつた。

——『私にはな、弟が居るのだ。その弟を見ていると時々思うんだよ、私が追い求めていた強さと言うのは：こいつの持つ、内なる心に持つそれではないかとな』

かつて織斑先生は、そう言っていた。

今の私にも、理解できなかった。

あの織斑一夏という男には本当にそんな強さがあるのか？

言つて悪いかもしれないが、私には奴がそこまで強いとは思えなかった。どうして姉様が気にかけているのかも：理解できなかった。

かつて姉様に対して感じた、全てを焼き尽くすような炎にも似た意思。

織斑先生に対して感じた圧倒的な力と強さという念。

そして：現在の私の後見人。本国のあの人に感じた、絶対的なカリスマと存在に対して恐れ戦くほどの、力。

そんなものがあの織斑一夏からは感じられなかった。

『こんな男の為に、教官は自身を犠牲にしたのか、自身の美しいともいえるそのあり方を汚したのか』

どす黒い気持ちと感覚。一方的で歪んでいる気持ち。そんな織斑一夏に対する気持

ちが私にはあった。

◆ ◆ ◆
 教えられない内容を全部カットして、つまるところ『殴り合いで対話してみたい』とラウラは説明をした。結果、箒は興味深げに話を聞いていたが——本題である理由について顔をひきつらせていた。

「は、話はなんとなくわかった…しかし、どうして果たし状なのだ」

「うむ。日本では相手に真剣勝負を挑む際にハタシジョウという煽りと宣戦布告が書かれた書物を相手に渡すことが礼儀だと聞いて」

「誰だそんな歪んだ知識教えたのは。少しあつてるのに色々間違つてるぞ」

「武器のエコロジとして竹槍にZENの力を込めて呪言を書いた札を掛けて投擲兵器にするとも聞いたことがあるが」

「…今度私が正しい日本について教えてやる」

『本当か?!私はお茶と和菓子が大好きなのだ!』と目を輝かせるラウラを見ながら箒は思う。ドイツはどうなっているんだと。外国人が日本文化について誤解をするというのはよくあることだ。だが“ここまで”あっているけど間違っている”というのは見た

ことがない。

「…それともうひとつ」

「なんだ。もうここまでできたら並大抵のことでは動じないぞ」

「月末のトーナメント、私と組もう」

流石に箒は驚いて、耳を疑った。

抗いの選択者

夜。とても静かな夜。既に6月後半で季節は既に夏が近く、初夏と言っていていくくらいの気候。

IS学園は人工島である。周囲は海に面しており、屋上からは夜の街が放つ光や、その光に照らされる海がよく見えた。

学園の屋上。正確には職員棟屋上に彼は存在した。

「…はあ」

ため息。それは、最近の自分に対するものだ。

リースと喧嘩して、日課や訓練にまで支障を出して。

色んな人に心配かけて、どうしようもなく調子が悪い。

「君に何がわかるんだ」…か」

最近ずっと考えているのは、リースのことだった。あの時はあんな強気に返答したが、自分は彼女のことについて何も知らないのだ。

ただ…少しの間同じ部屋に居て、話して。それだけの関係。そんな相手のことを全て理解しているのかと聞かれればNOだ。そんな関係をおかしくしてしまった出来事に

心当たりはある。あの対抗戦での事件だ。

無機質な言葉、感情のない目、慈悲すら一切ない……あの態度。

響く銃声と、躊躇いなく引き金を引く彼女。

人を殺そうとしているのに一切の迷いがなかった。

あの日、己が見たものをすべて信じたくなかった。否定したかった。

”あれはリースではない”と。思いたかった。

自分が知る彼女は、あんなに……冷たく、無慈悲ではなかった。よく笑って、人をからかうのが好きで、いつも苦労人のような役回りにため息をつきながらもこなしている、そんな少女。あの日、あの出来事で理解した。”自分は何も理解していなかった”と。

思えば、一度もリースは弱音を吐いたことがなかった。正確には、”人前で”だが。たった一度だけ聞いたことがあった……リースの、弱音を。

『パパ、ママ……ごめん……なさい』

とても弱くて、辛そうで。そんな言葉を一度だけ聞いた。今まで見てきた彼女でそんな言葉も声も聞いたことがなくて……驚いた。

思う。きっと自分は”護られていた”のだと。

自分一人の力なんて言うのはとても無力なもので、何かに護られなきや何もできなかった。姉、政府、学園：リイス。そんな存在にただ護られている自分に対して腹が立った。無力だと、そう実感させられた。

だからなのか、あんな言葉が出たのは。

全部自分でやって、一人で傷ついて、何かを護ろうとしてるように見えて。一人でそんな“強がり”をしているリイスが嫌だった。けど実際は：自分にそんなこと言う資格なんて無かったんだ。”自分は護られている立場なんだから”。

そう、”られている”という考え方をちゃんと認識していなかった自分にはわかるわけなかった。言う資格もなかった。安全な立場からただ言葉を並べているだけ。そんな口だけだったのだから。

——”君はそのまま護られていればいい”

あの時のリイスの言葉。あの言葉だけは許せないと思った。自分にあの日：初めて会った日にあんな質問をしたお前がそれを言うのか、と。

だが：冷静になってみれば、最低なのは自分だった。対抗戦の日、間違いなく自分は護られているだけの存在だったのだ。抗いたいと、貫き通したいと願ってもそうするだけの力がなければ：それはただの願望だ。

もつと言うべき言葉があったんじゃないのか。

もつとうまくやる方法はあつたんじやないか。

…そう、思えて仕方がなかった。

自分が知らないリイスが居た。無慈悲で、無感情の彼女が。

自分が知らないリイスが居た。とても弱々しくて、辛そうな声を出していた彼女が。

わからなくなっていた。自分の彼女に対する感情が。ただ…知りたいと思つた。あいつのことを。放つておけなかつた、例え自分にその資格がなくても、自分を追い込んでいくあいつを。

今後、リイスとの関係をどうしたらいいのか。それを迷っていた時だ

「こんな時間にこんな場所で夜遊びか青少年。 …一人で黄昏て、まるで中年のおっさんのようだぞ」

ふと。振り返ればそこにはよく知る姿があつた。

「織斑先「今は勤務時間外だ。いつも通りでいい」…千冬姉」

スーツ姿。手には二本の缶コーヒを持っており、千冬はそのうち一本を一夏に対して投げた。

「まだ就寝時間前とはいえ、寮から離れたこんな場所にいるとはな …更識から聞いた時は、少し驚いたぞ」

「へ？最後の方なんて言ったんだ千冬姉」

「気にするな。それより…こんな所で一人でどうした。まさかそのフェンスから飛び降り自殺でもなんて考えてなかったろうな」

「少なくとも俺はまだ生きていたいよ。ちよつと、考え事というか…一人になりたかった、というか…」

千冬はそれに対して『ふむ』と呟いて、

「女か」

「んなつ!？」

「しかも誰のことか当ててやろうか。——リイスだろう」

その通りだった。しかしどうしてわかったのか、自分の姉は世界最強であると同時にエスパードでもあるのか。

「で、どうなんだ」

「…まあ、うん。なあ千冬姉、リイスと知り合い——なんだよな？」

思い出したのは、学園に来てすぐのリイスの言葉。かつて千冬に色々教えてもらったいたという言葉だ。つまり、自分の姉とリイスは知り合いだったということになる。なら…何か、知ってるんじゃないかと思った。

「…誰から聞いた」

「学園来てすぐの時に、本人からだけど…。昔、千冬姉がドイツに来たことがあつてそれでその時に知り合つた、つて」

勿論これは嘘。実際には、千冬とリイスは知り合いではあるが…師弟関係であると同時に、過去に殺し合つた関係でもある。それを一夏は知るわけもなく。また、千冬もそれを話すつもりは毛頭なかつた。一夏の返した言葉に対して千冬は『まあな』と呟いて肯定として、首を縦に振つた。

「…あいつのこと、教えてくれないか」

「一夏、お前の今の発言は…土足で他人の心を荒らしているのを理解しているか？」

「——え？」

「他人に対して、別の他人について教えてくれというのは…人の心に勝手に踏み入ることと同義だ。もし、知りたいと望むなら…知りに行け」

言われ、その通りだと気がつく。また自分はやつてしまうとところだったのか。と、己への嫌悪感が湧いた。しかし、知りに行けと言われてもその方法がわからない。どうすれば、リイスについて知ることが出来るのかが、わからなかつた。

「まあ、いい。そういう過ちは若さゆえの特権だ、悩め」

「なんだよ千冬姉、まるで自分が年取つたみたいに——いてえっ！」

バシン！という音が頭から響いた。打撃されたのは一夏であり、千冬の手にはどこか

らともなく取り出した出席簿が存在した。痛みと衝撃から目覚め、顔を上げれば……そこには、ジト目の姉が存在していた。

「私はまだ二十代だ。次に同じようなことを言ったら……そうだな、実家のお前の部屋にあるあのノートを一組に投げ込むぞ」

「なッ……ひ、ひどすぎるぞ千冬姉！あれを他人に……それも一組に公開されたら俺は生きる道がなくなっちゃうー！」

「なんだったか……」闇夜ヲ切り裂ク光ノ翼”だったか、そういえばよくわからない絵なんかも——」

「やめてくださいいしんてしまいます」

悶え、そして声は震えながら懇願するように言う一夏を見て千冬は『気をつけろよ』と言葉を放ち、

「……どこまで知っている」

「え？」

「あいつについて、どこまで知っている」

聞かれ、一夏は答えた。対抗戦でのことを。自分が見たものを。そして、自分と喧嘩をした時のリスについて。そこまで聞いた千冬は一切何も反応しなかったが……あの寝言、彼女が一度だけ吐いた弱音について一夏は話す。

己の姉ならもしかしてと思つての行動だった。そして、それを聞いた千冬は目を伏せて、言葉を紡いだ。

「…そうか、”やはりな”。一夏、あいつのことをどう思っている」

「どうつて、何が」

「リースのことを、一人の女としてどう思っているかということだ」

沈黙した。

織斑一夏は鈍感な人間ではない。小学生の頃に知り合つて再会した箒からの好意にも、中学時代に鈴から好意を持たれていたことも知っていた。だが、そのどれもが一夏にとつては“恋愛”に結びつくものではなかった。

箒に対しての感情は、恋愛ではないと理解していた。これは、幼馴染に対する感情だと。鈴に対しての感情も、恋愛ではないと理解していた。親友と思つたからこそ、その想

いに対して決着を付けた。

では、リースはどうなのか。そう考えた場合——答えはすぐに出なかった。”わからない”、そんな思いが：一夏を支配していた。

「わからない、と思う。あいつの傷つく所を見て、一人でなんとかしようとするのを見て、腹が立った。とても嫌だった。”護られてる”つて感じて、とても嫌だった」

「…なるほど。一夏、お前とリイスは真逆だな」

放たれたその言葉。その言葉に一夏は目を見開いた。

——『私と君は、真逆だ』

あの時。リイスが震える声で言った言葉をよく覚えている。その意味がわからなくて、ただ迷い続けた。が、今それと同じ言葉を姉は言ったのだ。

「真逆だよ、お前とリイスは。一夏、お前は…護られて、その中で”誰かに頼る”事を知っている。それは、お前が弱くて自分の力量を理解して弁えているからだ」

そして、と続けて

「リイスはその逆だ。一人でなんでも出来る。だが”誰かに頼る”ことを知らない。そして…そんな中で更に自分を犠牲にしようとする。身を削ってでも”強くなろうとして”な」

それが、恐らく止めになった。

真逆という意味の答え。見えなかった何かが、見えたからだ。

「簡単に言ってるやろう。本当の意味で心を開いてないんだよ、あいつは。そして一夏、お前は開いている。その差は”頼る”ということだ。」

「心を、開いてない？」

「そうだ。心を開かない、ということば、信用していない」とも取れる。その心の根本で、お前とあいつは真逆だ」

その言葉を聞いた瞬間、心の中の何かが晴れた気がした。同時に、湧く感情があつた。怒りだ。どうして信じてくれなかつたんだ、そんなに自分は弱かつたのか、という感情が。

理解する。自分がリスに求めていたのは「頼つて欲しい」という感情だつたのだと。一度も弱音を吐かなかつたのは、一度も欲張らなかつたのは、一度も此方の言葉を見てくれなかつたのは、

——全部、信用されてなかつたからだ。

ああ、そうかと理解する。

真逆の意味が、自分のこの違和感が、この気持ちだ。

「もう一度聞くぞ一夏、あいつを……リスをどう想っている」

雲は晴れた。答えも見つかつた。

「——リスなんて、大嫌いだよ。何もかも」ひとりぼっちで片付けようとしてき、そんなに俺って信用無かつたかよ。不甲斐なかつたかよ」

一夏は、”頼られたかった”　だが、頼られたかった本人から向けられたのは”護られる”という行動だった。

リースは、”頼りたかった”　だが、そもそもそれがどういふことなのかわからなかったと同時に、関わることで他人が傷つくことを恐れた。

故に、真逆。その根本は真逆であり、”一夏は信用されていなかった”。

そしてリースもまた、根本では”頼りたいのに頼れなかった”のだ。

弱みを見せなかつたのも、弱音を吐かなかつたのも、全部一人でやろうとしたのも。

全ては心を閉ざし、根本でリースが一夏を信用していなかつたからだ。

だからこそ一夏は、決める。

抗いの、答えを。

「…よく言うぜ、リースも。不甲斐ないのはどっちだよ！信用されてなくて、頼られなくて、不甲斐ないのは俺だろう！」

腹が立った。あの言葉は…あの『不甲斐なくて申し訳なかつた』という言葉は、自分を擁護するものだ。同時に、自分を追い詰める言葉でもあつた。ああそうか、己はあの少女に…頼つて欲しいのだ。信じてほしいのだ。心を開いてほしいのだ。

思ひ出すのは、あの日の言葉。“カラスと書き物机が似ているのはなぜ？”という言葉。——その答えとして、抗うことを己は望んだ。では、彼女は？彼女はどんな答えを

出した”？

まだ聞いていないと思った。ずるい、とも。

だからこそ、確かめようと。どんな答えを出したのか確かめようと思った。

”自分を、可能性を殺したりイスなんて嫌いだ”。　…千冬姉、決めたよ、俺は”

「ほう？何をだ」

「俺、行くよ。あいつに抗って、答えを知りに。　本当はどう思ってるのか、それを確かめに。後悔とか挫折とか、そういうのはそれを知ってからでいいと思ったから」

息を吸う。そして、形にする。

”何がわかるんだ”　そう言うなら、知りに行くさ。拒絶するなら、もう一度、何度でも知りに行つてやる」

もし理由を聞かれれば、こう答えるだろう。『真逆だったから』と。

だからこそ意識したのだと。だからこそ、共にありたいと願ったのだと。

だからこそ、抗いたいと望み。彼女に”抗って欲しい”と、そう思った。

告げる。わからず屋で、ひとりぼっちの少女に対しての——答えを

「俺、告るわ千冬姉。　…あのわからず屋に、頼らせてやる」

「ただいまー、って…シャルル？いないのかー？」

屋上での一件。自分に対しての答えと今後について答えを出した俺は寮の部屋に戻っていた。ふと、1023号室の前を通る時に足を止めそうになったが——やめた。きつとまだだと、そう思ったから。

時間を見れば既に消灯時間が近い。それに気がついたのは千冬姉だった。

『「よい答えを」、青少年。だがもう時間が危ないな？ 肅清準備でもしておこうか』

そんな言葉を受けて猛ダツシユ。流石に肅清は受けたくない。そして、急いで戻り寮の扉を開く。が…そこには居るはずのルームメイトの姿がない。

（おかしいな、出かけてるのか…？ って、ん？）

部屋に入り、見渡すがベッドや机周辺にシャルルの姿はない。が…音が聞こえた。水の、流れるような音だ。

「なんだ、シャワーか。って…そういえば、ポテイソープ切れてたんじゃないか？」

そう思い、備品が置いてある棚からボディイソープ『泡嬢』を取り出す。ネーミングセンスで購入を戸惑ったが、聞くところによるとても評判が良いんだとか。セールス文句は『清潔という極上の快楽と満足をアナタへ』。色々アウトだと思ふ。相変わらず風呂場からはシャワーの音が聞こえる。しかし……どうしたものか。

流石に男同士とは言え、いきなり風呂場に入る訳にもいかない。そんな趣味もなければ性癖もない。普通に考えれば、もしこのまま『シャルル、ボディイソープ』なんて言つて風呂場に突入なんてすれば勘違いされる可能性は大きい。

一声かけて置いておくか、そう考へて、俺はシャワールームの扉へと声をかけようとして、

ガチャ

ガチャ、という扉が開く音がした。それは近くからのもので、水音が大きくなつたことからシャワールームの扉だと理解する。なんだ、丁度取りに来たのか。そう思つて俺はボディイソープのボトルを持ったまま、扉の方向を向くと――

「い、いち……か……？」

「へ？」

脳の思考が停止した。そして恐らく、俺の身体も時間が停止したように固まっていただろう。声が出た、間違いなくシャルルのものだ。目前に居るのは、金色の髪に紫の瞳。間違いなく、シャルル・デュノアだと理解する。

「な、なんでここに？ 帰りまだ遅くなるとか言っただけじゃなかった？」

「い、いや……修羅に急かされたというかなんというか——」

だが、決定的に違うことがある。目前に居るのは少年ではなく少女なのだ。胸があり、男性独特の特徴がない。ま、まさか——

「シャルル、お前……男性と女性が入れ替わるのか？」

「そんな訳ないよ!? なんで一夏はそういうアッパーな思考するかなあ!? ……つて、きやあッ！」

鋭いツツコミの言葉の後。悲鳴をあげてシャルルがシャワールームに逃げ込んだ。いや、その判断はありがたい。というか俺も男なので、色々不味かった。何がとは言わないけど。

とにかく、今は——当初の目的をとりあえず果たそう。

「ボ、ボディソープ……ここに置いておくから。あ、後……その、悪い！」

それだけ叫ぶように言っただけで、ボディソープを置くのと脱衣所から出た。

訳がわからない、そう思う。というか、今日は変なことばかり起こるのか。

リスに告ろうと決めて、知りに行こうと思って。

それで、どうすればいいかって考えようと思つたら——これだ。

ということは、シャルルは女の子で男装していた？でも、何で？

思考して、考え、思い当たる。そして思い出す、“自分がどういふ存在なのか”を。

(狙いは、俺か……?)

とてつもない面倒事に巻き込まれた気がする。



気まずい、そう感じてしまうのはきつと間違いではないだろう。

先程のシャワーの後、シャルルはぎこちない動作で脱衣所から現れて、俺が今腰掛けているベッドの隣。いつもシャルルが使っているベッドに腰掛けた。そのままずっと沈黙状態だ。俺としても聞まずいという思いはあつたし、どう言葉を投げていいのかわからない。

時間を確認するためにチラリ、とベッドに存在しているデジタル時計を確認すると……この状態で1時間が経過していた。俺としてはまだ5分とか10分のつもりだったんだが、もしかして本当に思考している間は時間の流れが変化するかそんな力があつたりするのか。

いや絶対ない。現実逃避はやめよう。さて——

「あー……茶でも飲むか？」

「お、お願いできるかな」

彼……というより、彼女の肯定を確認して俺はそのまま立ち上がり台所へ。備え付けの電気ケトルでお湯を沸かして、いつも通り……リスに淹れていた時と同じ手順で準備を進めていく。

ふと、いつも使っている譲り受けた湯呑みが目に止まった。そういえば、喧嘩してから一度も使っていない。

最も手近なところにあつたのがそれだったからか、俺はそれに手を伸ばそうとしたが——やめた。これは、アイツの湯呑みだ。勝手に使うわけにもいかない。そう思って、手間ではあつたが台所の収納扉。そこにある備え付けのマグタイプの湯呑みを手に取ると、お茶を淹れる。

「ほい、緑茶だ」

「あ、ありがとう——きやつ!」

お茶が熱かったからか、それとも別の理由なのかはわからないが突然シャルルが手を引っ込めて、湯呑みを落としそうになる。慌ててそれを俺は受け止めたが——非常に熱い、できたてのお茶がそのままこぼれて手にかかってしまう。

「あつっ!」

「ご、ごめん！大丈夫？」

「あつつ……大丈夫、ちよつと熱かったただけだから。——それより、その」

「……？」

言いくい。慌てて湯呑みを左手で受け止めて、なんとか地面にぶちまけるといふ大惨事だけは避けたが——今度は別の問題が発生する。

今のシャルル、彼女はスポーツジャージ姿。そして既にバレたから隠していないのか、その胸には女性特有のふくらみがある。それほど大きいわけではない、という印象を抱くのは失礼だろうが——その胸が、僅かに開かれているジャージのファスナー部分から見えてしまっている。更に言うなら、此方を心配するようにお茶がかかった俺の腕を心配そうに見ている。胸に抱き寄せて。

「離れてくれると、ありがたいんだが。胸が、さ」

「ッ——!?!」

キヤツチした湯呑みをそのまま受け取ると、一步慌てて下がり身を隠すように身体を抱く。……こういうのをラッキースケベというのだろうか。リスとはそういうことは一度もなかったし、こういった部屋トラブルは恐らく初めてだ。

「い、一夏のえつち……」

「そこはかたなく冤罪だと思っただが。はあ……それで、」

本題を切り出す。要するに、男装とかの目的だ。

「男装していたのは、何でだ？」

「……実家から、そうしろって言われて」

「実家っていうのは……デュノア社か？あのIS量産機シェア世界第三位の」

「うん、あつてるよ。その社長が僕のお父さんなんだ」

そこから、話を聞かされた。自分が愛人の子供であること。経営危機に陥って、イグニツション・プランから除名されたこと。そして、その経営危機解決とデュノアの広告塔としての役割のため男装をさせられて……俺の白式と、世界ただ一人の男性操縦者のデータを盗もうとしたのだと。

イグニツション・プランについては以前、訓練の時にセシリアに教えられていた。正式名称は欧州連合統合防衛計画。当初からトライアルで参加しているのはイギリス・ドイツ・イタリア・フランスの全部で4カ国。だが現在は、そのうちフランスが離脱。そしてドイツも離脱している。その二カ国の離脱理由は不明だったが……今ので理解した、フランスは除名されたのだと。

このまま行くと、フランス。つまりデュノア社はISの開発権利や諸々の支援をカットされて会社として存亡が怪しくなる。故に、今回広告塔として、スパイとしてシャルルを送り込んだ。

「それ、親父さんに言われたのか？」

「うん、”命令”された。……すごく、辛かったよ」

辛かった、とはどういうことだろうか。

聞く限り、シャルルは愛人の子供で、父親であるデュノア社社長がまるで道具のように彼女を扱っている——そういうように取れたのだが。

「お父さんね、凄く忙しい人なんだ。でも……愛人の子供だからとかそういうのは気にしない人で、こっそりとよく僕とお母さんに会いに来てくれたんだ。誕生日には絶対会いに来てくれて、表面上誤魔化すためキツイことも言われたけど、すごく大事にしてくれた」

「……いい、親父さんだったのか？」

「うん。僕もお父さんが大好きだった。けどね……お母さんがいなくなつてから、おかしくなつちやっつたんだ。何かに取り憑かれたみたいにISの研究を続けて、それで——結構強引に僕を本社に連れてきて、適性検査とかを受けさせて。その結果適性が高いことがわかったからっていう理由で候補生にされてね、それからは、優しい面影なんてなくなつて。本当の道具みたいに扱われた」

正直、わからなかった。父親に命令されたと言っているが、話を聞く限り父親はいい人のようにも思える。

違和感を感じる。”まるで親父さんは焦ったようにしている”ようにも聞こえた。それは、経営危機からか？それとも何か別の理由なのか——

”それに、ただの広告塔というだけでは男装についてが説明がつかない”。

もし、そんなことをしていたのが公になったら？一発で会社としてはおしまいだろ。そんな博打、それも無理を通すような博打に出たのは何故だ？

「でもね、一夏」

思考という沼に嵌りそうになった時。俺はシャルルに呼び戻された。ふと、顔を上げれば目の前にシャルルが存在しており——そのまま俺はベッドへと押し倒された。

『何をするんだ』、と拒絶の声をあげようとした。だが……それはできなかつた。シャルルの目には涙が浮かんでいた。そして——その目には、色が存在していなかつた。病的なまでの何か。強迫観念とも感じる何かを、俺は感じた。

「……一夏のデータと、白式のデータを持ち帰れば、きつとお父さんは元に戻ってくれるんだ」

「ツ！お前何言ってるんだ！いいからそこをどけ！」

”男装を絶対に続ける”って言われてたけど、バレちゃったなら仕方ないよね？ だから一夏、君にお願いがるんだ」

嫌な予感がした。とてつもなく、恐らく本日最大級の嫌な予感だ。

「既成事実、って言葉があるよね。ねえ一夏——僕を助けると思つて、そうなつてくれな
いかな?」

「お前何言つて、」

” 甘えさせてくれないかな? 一夏」

甘く、蕩けるような言葉で言われた。

もし、俺が今の俺じゃなかったら、答えを決めてなかったら、きつと抗えなかったと
思う。その言葉を聞いた瞬間、浮かんだのはアイツの姿だった。アイツはそんなこと一
度も言わなかった、ずっと傷ついて、すべてのことに対して『ごめん』と言つてなんと
かしようとした。一人で、たった一人で。

これは、” 甘え” じゃないと。” 利用” だと……そう感じた俺の行動は、早かった。

「ふざけんなツ——くつ……」

跳ね除けようとする。だが、その華奢な手から信じられないような力で抵抗されて、
何故か身体に力が入らなくてそれはできなかった。ふざけるな、” それは甘えではない
”。そんなものを俺は受け入れるつもりなんてない。

そう考え、再び抗おうとした時。

「話は聞かせて貰いました! やつと尻尾出しましたね泥棒猫。あ、リース抑えて下

さいね?なんで不機嫌なのは予想がつきませんが抑えてください」

バンツ!と部屋の扉が開かれた。

部屋には鍵がかかっていた筈だ。そしてここはIS学園、かなり嚴重なセキュリティの鍵だった筈だ。にも関わらず、それが呆気なく開いた。そしてそこに存在したのは――『大成功!』と書かれた扇子を持つ更識楯無生徒会長と、何やらポーズをとるクロニクルさん。

そして、

「……ッ」

「リイ、ス――」

明らかに不機嫌なオーラを纏い。紅の瞳をジト目にしてこちらを睨む、リイスだった。

シャルロット・デュノア

正直に言つて最悪だ。と、一夏は思う。

傍から見れば今の状況はまさに男女のソレだったのだから。

寮の部屋、鍵は掛けられており、ベッドの上には男女二人。

そして己がベッドに押し倒されており、スポーツジャージが開けて見えるものが見えているシャルルには馬乗りになられている。

そんな状況でのこの展開。しかも——よりによって、一番誤解されたくないような相手に見られた。ジト目つきで。

「……会長、私帰つていいですか」

「え、えつとねリイスちゃん？ 気持ちにはわかるけど、お願い落ち着いて。ね？」

「何故かとても気分が悪いので、是非とも帰りたいんですがダメですか」

「お願いだから我慢して、ね？」

『はあ』、とため息をついた後に再びジト目でこちらを見るリイスを見て、一夏は気が気ではなかった。

「さて、シャルル・デュノアさん。いいえ——」シャルロット・デュノアさん。ようや

く捕まえましたよ、こうしてそちらから出てきてくれるのを今か今かと待っています。あつ、ちなみに今この辺にはジャミング張つてあるので騒いでも無駄です」

ビクリ、と。己の体の上にいる彼女が震えた。クロエ達はそのまま部屋の中に入つてくると、鍵をかけなおしてこちらへと歩いてこようとして――

「……ないでっ!」

カチャリ、という音がした。それは己の近くからであり、馬乗りになつている彼女からだった。

冷たい何かが肌に当たった。冷たくて、鉄のような冷たさ。同時に人の命を奪うことが出来る冷たさを持つモノでもあった。拳銃だ。目を見開く。が、このまま暴れたら確実に己は撃たれるだろうという確信があつた。故に、抵抗はできなかった。

シャルロットとはいえば、焦つたようにして銃を一夏に突きつけながらクロエ達を見ている。

『やれやれ』といったように三人が足を止めた。そしてその中でリイスは――先程より更に嫌悪感を露わにしていた。

「おっと、困りましたねこれは。もしかして私達がこれ以上動くと思つたら織斑さんを撃ちますか?」

「……そうだよ。それ以上こつちにきたら、一夏を撃つ」

「それは大変です。——リイス、いいですよ」

クロエのその言葉の後、リイスの姿がシャルロットの視界から消えた。彼女は動揺した。が、「消えた」と認識した瞬間からの行動は早かった。安全装置を解除、そしてそのまま一夏へと突きつけた銃の引き金を——

「私ね、今すごく気分が悪いんだ」

瞬間。声が聞こえたと思つたら腕への痛みと同時にシャルロットの見ている世界が回った。いつのまにか自分の背面に居たリイスに腕を捻られ、構えていた拳銃を落とす。そしてそのまま——部屋の床へと叩きつけられた。彼女は見た、とても不機嫌そう。今かもこちらを殺すのではないのかという程に冷たい、リイスの目を。

「……なんだろうね。一夏に銃を向けられてすごく嫌だった。君にも色々事情はあるみたいだけどね」

事情、という言葉に一夏は疑問した。それは男装のことやデュノア社から言われて自分のデータをとろうとしていたことなのかと。そんな疑問に答えるかのように、クロエと楯無が歩み寄ってきて、クロエが言葉を紡いだ。

「リイス、ちよつとやりすぎです。彼女の腕折れますよ、それ以上したら」

「——銃を向けたのは相手からだよ」

「不機嫌なのはわかりますが落ち着いて下さい、お願いですからその『やっぱり上げえよ

「リースは！」みたいなことやめてください」

「ラウラだったら『流お姉』とか言いそうだねそれ」

「いいからもう離してあげてください」

クロエになだめられて渋々、といったようにシャルロットを解放するリース。そして、解放してすぐに拳銃を回収する。

「では答え合わせと疑問の解決と行きましようか」

「つ……僕を、どうするつもり？ フランス本国に突き返す気？ それとも、脅迫？」

「ですから言ったじゃないですか、答え合わせと。 まあ強いて言うなら——会長、どうぞ」

そこで楯無は再び扇子を広げて『待つてました！』という文字をシャルロットに見せながら言う

「答えから言う」とどちらでもない”わ。というより……私は貴女の味方よ？ シャルロットちゃん」



リース達三人が一夏とシャルルの所に現れて暫く。一夏とシャルロットはといえば、寮のテーブルに座らされており、三人は立った状態でその前に立つ。そして、リースと一夏といえは目を合わせることすらしない。リースはそっぽを向いており、一夏は気ま

ずそうに視線をそらしている。更に言うなら、最初の突入でのリースの行動が効いたのか、シャルロットもリースとは目を合わせそうとしなかった。

そんな中、最初に口を開いたのは楯無だった。

「シャルル・デュノア、いいえ、正確には、貴女はシャルロット・デュノア」ね？」

「……はい、そうです」

「単刀直入に聞くけど、」弟「さんの名前を名乗ったのは貴女の父親の指示ね？」

弟、という言葉に対して一夏は思わず驚きの声をあげる。それを気にしないように楯無は続ける。

「リースちゃんから相談受けた時は驚いたわ。けど……もつと驚いたのはその後。話された事情でなーんか色々おかしいと思って、うちでも色々調べてみたのよ。そしたら——なんか変な噂、掴んじゃったのよね」

この噂、というのはセシリアも掴んでいたものである。そして……セシリアは事情を知らなかったためそれは関係ないものだとは判断していた。

だが、しかし。この噂こそが全てに対するファクターだったのだ。

「デュノア社が第三世代ISを完成させた」。こんな噂よ。何も知らなかったら気にしないわね？ フランスは既にイグニッション・プランからは除名、そしてデュノア社は経営危機状態でそれどころじゃないんだから」

「ッ……」

「けど、おかしいわよね？なら貴女をI S学園に送り込む必要がない。ましてや二人目の男性操縦者として男装させてまで一夏君に近づく理由がない。じゃあ、なんで？つて疑問したの」

フランスとデュノア社の根本的な理由は第三世代型の開発とイグニッション・プランにある。もしそれが事実なら、問題は解決されていることになる。ならば第三世代I Sをシャルロットか誰かに持たせて女性としてI S学園に入学させたほうがメリットはある。

「にも関わらず、”わざわざ男装させた”。それも、とんでもなく杜撰な。書類も楯無が確認すれば完璧な偽造ではなく、穴がある。それはまるで準備もなしに準備したかのような、そんなものだ。」

「つまり、もしその噂が本当で今こうしているのは……別の理由。ねえシャルロットちゃん」

「なん、ですか……？」

「なんでさつき脅されると思ったの？」

楯無のその言葉。それによってシャルロットは目をそらしてしまった。そして、それはあることに対する肯定だ。一夏はどういうことかわからない、というようにしてい

る。そしてそんな一夏に対して楯無はわかりやすく説明を始める。

「一夏君、私が誰か知ってるわよね？」

「は、はい。二年生の更識楯無生徒会長……ですよね？」

「うわやっだ私一夏くんの名前覚えられてた！ 凄い嬉しい！ お願いリイスちゃんそ

の目で殺すような視線やめて。クロエちゃんもドン引きするのやめて、傷つくから」

「ホン、と咳払いをして続ける。

「私は更識楯無。一夏君、生徒会長が意味するのは何？」

「それは——学園最強、ですか？」

「そうよ、大正解。悪いけど、私の名前を知らない生徒なんて学園には居ないわ。そして

このシャルロットちゃんもそれは理解している筈」

更識楯無。その名前を知らない生徒はIS学園には居ない。学園最強の異名持ちで

あり、ロシアの代表操縦者。そして——

「じゃあ一夏君。”生徒会長の役割は？”」

「それは、学園最強であり続け、有事の際には学園と生徒を護る—— あっ」

そこで楯無は『満点！』と書かれた扇子を一夏に見せる。そして一夏もまた、その意

味が理解できた。

「脅す必要がない。というより脅すわけがない”のよ。私は学園の味方であり生徒の

味方よ？それはつまり、”貴女の味方”ということ——シャルロットちゃん。貴女、誰に脅されてるの？」

その言葉に対してシャルロットは、迷いという返答を返した。

無言ではあるが、視線は楯無を見ており、その挙動も安定していない。

「クロエちゃん、バトンタッチ」

「はいはいクロエです。シャルロットさん、貴女の行動や存在には色々おかしいところがありました。一番不審だったのは、杜撰過ぎる男装でした。正直、転校初日から女性だということはわかってたんですよ。でも、その理由がわからなかった」

クロエは投影ディスプレイとキーボードを操作すると次々にウィンドウを作成し、それを室内の空中に展開した。そこにあるのは、デュノア社のデータだ。取引内容から動向まで、細かく分析されたデータ。

「私達も貴女についてや会社については調べました。でも、何も出てこなかった。……ですが、貴女その杜撰な男装とある情報のお陰で掴みましたよ。事の真相を」

最後に。クロエが投影したデータでシャルロットは明らかな動揺を見せた。そこには——「シャルル・デュノア」について報告書と書かれていた。

「シャルル・デュノア。デュノア社の社長であるアルベルト・デュノアとその本妻、シャリーイ・デュノアの間に生まれた実子。ですが数年前、貴方で言う所のお母様が亡

くなった年に死亡している。死因は——あえて伏せます。これはちよつと、酷すぎます」

「なんで——」

そこでシャルロットは初めて行動を見せた。それは——怒り、怒りであり慟哭だ。

「なんであの子の事を知ってるのッ！」

「ちよつとした協力者が居ましてね。幾ら隠蔽して誤魔化しても、社内での情報は隠されませんよね？」　なーんでこれだけ完璧に隠せたのかはわかりませんが……貴方、恐らくこの関係のことで脅されてましたね？」

「ッ……」

「凶星ですね。実はとある知り合いの情報では、デュノアの評判は最悪最低なんです。拉致に薬物、人体実験なんてやってるって聞きましたが……ぶつちやけこれ本当ですか？」

「違うッ！お父さんはそんなこと——」

そこでシャルロットは気がつく。自分が釣られたことに。

急いで口を閉ざすがもう遅い。クロエは『なるほど』と言って続けた。

「今この部屋、ある種の隔離空間なんで大丈夫ですよ？　……つまりこういうことです

よね。噂は本ただけど” やっているのは違う人間”。そして貴女はその人物に脅され

ていた」

一夏は息を呑んだ。クロエがここまで話せば一夏でも理解はできたのだ。そしてシャルロットとはといえば——暫く項垂れ、震えていたが息を吸い、そして。

「……全部、話すよ」

観念した。

「シャルルは、ある実験の犠牲になったんだ。そのせいで……死んだ。デュノア社、正確には開発陣の一部は——禁忌に手を出したんだよ」

「その禁忌とは？」

「人の意思をコントロールする実験。僕やお父さんはこれをこう呼んでた——脳変性接続（マインド・ダイネイチャー）って」

脳変性接続。つまり、人の意識そのものを変化させる研究。

人の脳とは、即ちその人間の存在をも表す。そのことから、脳については昔から議論が続けられていた。シャルロットが言ったのはつまりこの脳を人の意志でコントロールし、変化させるという研究である。これは、ある種の到達点であると同時に悪魔の所業でもあった。

「……脳変性接続。この研究によって、デュノア社は“男性操縦者”を生み出そうとした」

「そんなことが可能なの!？」

驚き、言葉を上げた楯無に対してシャルロットはどちらでもない、というように首を振った。

「僕が知る限り、不可能です。……シャルルはその脳変性接続の実験の被験体になって死にました。それがあの日の、お母さんが殺された日です」

「殺されたというのは？」

「詳しくは僕にもわかりません。公式には病死で、実際僕もそうだと思ってました。だけど……遺書があったんです。その遺書の内容は、シャルルの死亡原因である研究についての存在が書かれていて、お父さんとシャーリイさんはそれに関与していない、と」

「会社のトップに黙つての研究とは……思い切つたことをしますね」

「それからです、お父さんが狂つたようにISの研究をするようになったのは。その後
のことは一夏に話した通りです」

つまり、まとめるところだ。

シャルロットの母親が亡くなった日に、シャルル・デュノアも死亡。そしてそのどちらに対しても人的要素が関与していた。シャルロットの母親については病死に見せかけた殺人。シャルルは研究の被験体となって結果死亡。その後、デュノア社長が狂つたようにIS開発をするようになって、その過程でシャルロットのIS適性が判明。候補

生となり、今に至る。

「でも、それだと脅されていたというのが説明つかないわね」

「本題はここからです。デュノア社の一部の行き過ぎた研究……脳変性接続。これについて、どうやって知ったのかは知りませんが知る人物が現れたんです」

「その人物とは？」

「……僕も、盗み聞きみたいな形でお父さんとの会話を聞いただけなのでわかりませんが、相手はこう名乗ってました——ファントム、と」

その言葉に対して反応する存在が居た。リースとクロエだ。ファントム。それは直訳すれば亡霊や幽霊、影という意味である。そして——

「亡国機業」

先程までの不機嫌な眼ではなく、殺意と敵意が籠った眼でリースが呟いた。

「……なるほど、そういうことですか」

「とんでもない面倒事みたいね、これは」

クロエに続き楯無も、軽口を叩いているが深刻そうな口ぶりと言った。その中で一夏だけが何のことかわからない、という表情をしていた。

そんな中、リースはため息の後、

「——デュノアさん。真面目な話をしよう」

「な、何かな」

「何でそんなに怖がってるのかな君は。……シャルルさんは脳変性接続の被験体選ばれた。もしそれに何かの理由があるとすれば、全部推測ができる」

「推測？」

「もしかしたら次の被検体は君だったのかもしれない」ということだよ。もしそう考えるなら、あの杜撰な男装も、穴だらけの書類も、無理矢理二人目の男性操縦者と公表したのも予想ができる。君を、護るためだ」

もしもシャルル・デュノアが被検体選ばれたことについて何らかの理由があるとすれば。そして、彼女の母親が殺害されたことがそれに関係しているとすれば。あくまで可能性の話ではあるが、次の被検体は彼女だったのかもしれない。

男性操縦者を作り出すために、最初は男性であるシャルル・デュノアを被験体とした。そして、ISを両性で使用可能にすることを目的として女性の被検体を欲していたとしたら？ 最もシャルル・デュノアの被験体データと比較しやすく、またやりやすいのはデュノア関係者。

つまり、シャルロットである。

それをもし、デュノア社長が知っていたとすれば？そして、本当に社長が彼女を大切にしていたとすれば？護るだろう。どんな手段を使っても。”研究者や亡国機業

でも簡単には手を出せない方法で”。一夏のデータ採取も、白式のデータについても。全てが男装を誤魔化すための建前。

無理矢理な方法で二人目の男性操縦者をでっちあげ、それを世界に公表すればどうなるか？間違いなく世界の注目は彼女……いや、”彼”に向くだろう。

「——そんな。じゃあ、お父さんは　ツ!?お父さんが危ない！」

もし、その全てをデュノア社社長が独断でやっていたとしたら?……その結末は、予測がついていた。だからこそ、既にクロエは手を打っていた。

『マドカだ。聞こえるか』

部屋の中。突然通信ウィンドウが展開された。その中に居たのはマドカだ。ISスーツ姿で、右手にはアサルトライフル。室内にいる彼女の映像が映し出された。そんな彼女に対して言葉を投げたのはクロエだ。

「どうでしたか、マドカ」

『——キツいかもしれないが、映像を送る』

送られてきた映像。それを見て全員が言葉を失った。そして……シャロットだけが、言葉にならない声をあげていた。

『見ての惨状だ。施設内部の研究者は全員死亡している』

送られてきた映像。そこには　——頭のない遺体と、下半身が存在していない遺体が

存在した。

”同じだった”。あの日の、裏で起こっていた事件と。

対極の対立者

マドカから送られてきた映像。その中に映されていたのは惨劇だった。それを見てのシャルロットの行動は早く、焦ったようにモニターの中の彼女に詰め寄った

「お、お義父さんは!? お義父さんとシャーリイさんは無事なの!」

殺されている研究員は全てがデュノアの間人であるとしシャルロットはひと目でわかった。デュノアの研究員が無着用している白衣の胸の部分には特徴的な目印があったからだ。

それは、会社のロゴマーク。かつて己の両親が開発部から新しい白衣が欲しいと連絡を受けて、茶目つ気を入れて作成したものである。評判もよかった。その研究員が殺されているということは、間違いなくデュノアの施設。そして恐らく——デュノア夫妻がいる場所でもあったのだ。

『……安心しろ、シャルロット・デュノア。夫妻は無事だ。とはいっても、間一髪だったかもしれないが』

「どういふことですか、マドカ」

クロエの質問に対してマドカはモニターのの中にデュノア夫妻を映して安全を確認さ

せる。社長の方は負傷しているが、命に問題はなさそうだった。その後、マドカは言葉を紡ぐ

『続けて報告がある。デュノア社保有のこの施設に来る際に無人機に襲われた。恐らく——あの時と同じ、人体ユニット搭載型だ』

襲撃された、その言葉を聞いてリイス達の表情が険しくなる。

生体ユニット搭載型無人機。ＩＳ学園の対抗戦を襲撃した存在であり、その兵装全てがレギュレーション無視の殺傷設定。更に、量産コアに人の人体を接続するという非人道兵器でもある。

それがマドカを襲った。つまりそれは……あることを意味する。シャルロットの父親と話していた人物は“フアントム”と名乗った。対抗戦の無人機は束曰く亡国機業の仕業だった。だとすれば、今回の無人機もまた亡国機業のものである可能性が高い。それが意味しているのは——デュノア社は亡国機業と何らかの関係性があるということだ。

『正直言つて、惨いなこれは。調べてみたが……研究員のＩＤカードが出てきた。間違いないくデュノアの研究員だろう』

「デュノア夫妻を護ろうとして殺された、そんなところですか」

『……恐らくな。遺体もかなりの数がある。なんとも悪趣味な殺し方だ、反吐が出る』

「聞いてもいいかしら？」

そこで疑問するように言葉をクロエへと放った人物が居た。楯無だ。

元々、楯無はリースの協力者であり、彼女が金色のISを追っていたことについては知っていた。しかし、彼女の背後関係については何も知らないのだ。その状況。それで今、モニターの中にはマドカ、この場所にはリースにクロエ。しかも全員無人機について知っていたとなれば、疑問もした。本当に何者なのか、と。

それは一夏も同じだ。一夏は何も知らない。何故リースが金色のISを追っているのかも、今までどんなことをしてきたのかも、背後関係についてもだ。

「……」まできたんだから教えてくれないんじゃない？ 貴方達は何者？ どうして亡国機業のことを知っているの？」

「——そうですね、でもその前に」

言葉を放ったのはリースだ。元々、楯無に協力を持ちかけたのはリースだった。リースとしては、ここまで関わった上に、更識家としても亡国機業と敵対しているのであれば、詳しく話してもいいと考えていた。

だが……その前に。彼女にはやることがあった。

「一夏を、この部屋から出して下さい。彼は無関係です」

それは、リースにとっては優しい言葉だった。対抗戦の時は襲撃され、不可抗力でこ

こちらの事情に関わってしまった。そして今回は、シャルロットが起こしたアクションが原因となり事情に関わろうとしている。だからこそ、彼女は関わらせたくないと思った。幾ら喧嘩をしても、己にとつてのいちかは……傷ついてほしくはない人だったのだから。

「ふつぎけんな！いい加減にしろよ！」

そんな彼女に対して一夏が返したのは怒りだった。

「無関係？ふぎけんなよ——ここまで巻き込まれて、大事な人達が危ない目にあつて、それで尚関わるなつてのか！」

「そうだよ。君には無関係だ一夏。君のそれは、ただの正義感だ、勇気でもなんでもなくただの無謀。……関われば、命に関わるんだ」

怖かった。恐れていた。彼が、一夏が傷つくのが、大切だと思つた誰かが傷つくのが、でも自分ならいい。今までずっとそうしてきたんだから、自分が今更いくら傷つこうと今更だと。

だから殺した。他人を、敵を、誰かを、自分を。そうすれば全部うまく行くと思つたから。

これでいいんだ。これで本当の『さよなら』だと、リイスは思った。

「——やっぱり、お前の言うとおりだよリイス」

「……わかってくれればいいんだよ。会長、一夏を、」

「やっぱり俺とお前は真逆。正反対ってことだよ」

返されたのは予想もしていない言葉。それは、あの時己が彼に対して言った言葉だ。リイスはそれを「立つ場所が違う」という意味で言った。そもそも、生きている世界が違うのだと。だからこそ彼を否定した。わかるわけがない、と。

一夏は目を閉じて、息を吸う。そして立ち上がると寮の入り口へと足を運び、楯無を見たと意を決したように言葉を作った。

「会長、このまま織斑先生のところに行きます」

「……言いたいこと、あるんじゃないの?」

「ありますよ、沢山。でも今この場でする話じゃないです。シャルル いえシャルロツトのこともあります。今の俺は、邪魔なだけです」

ただ と続けた

「リイス、明日……大事な話がある」

「大事な、話?」

「——俺とお前は真逆だよ。だから、俺はお前を認めない。俺は、お前を否定してやる」

「君は何を言つて、ち、ちよつと!？」

慌てるリースをそのままにして、一夏は部屋を出る。

彼は思う。否定して、歩み寄つて。それで——正しく間違つていこうと。

『……それで、私はデュノア夫妻を保護して戻つていいのか』

「え、ええ。お願いしますマドカ。行き先はそうですね——ドイツ。ラウラのお義父さんの所の秘密警察と言つたほうがいいかもしれませんね。あの方の所なら絶対に安全でしょう」

珍しく慌て、動揺するリースを見ながらクロエはどこか安堵したような笑みを浮かべる。ともかく、今は状況の整理と解決が先だ。そう思い、マドカにデュノア夫妻の保護の指示を出すと、一夏が部屋を出た事を確認して話し始めた。

「では、このクロエが説明させて頂きます。更識楯無生徒会長。私達はある目的と、あつたことを阻止するために動いています」

「それは、何?」

「更識家も追つている相手。亡国機業への対抗と、世織計画と呼ばれる計画を阻止すること。そして、金色のISを見つけることです」

翌日早朝。朝のSHRの時間前、私の姿は教室にある。

昨日の一件の後、色々あった。まず、デュノア夫妻について。夫妻の安全を確保したマドカはそのままスコールさんが手配した車などを利用してドイツに入国。ドイツに入ってしまったらもうこつちのものである。国のエージェントに連れられて、ラウラのお義父さんの所に行く。そのまま夫妻は保護されることになった。

デュノア社の運営については問題はなかったらしい。今回の件は表には出ておらず、一部の人間しか知らなかったのだとか。デュノア夫妻の信用が置けるという事情を知る人間に連絡をつけて、暫くの会社運営を頼んだのだとか。

デュノアさん——シャルロットについての処分というか、対応は会長が行うことになった。学園の特記事項。これはとても大きな力を持つており、それは国にすら干渉するレベルだ。だからこそ、会長は上の人……つまり、轡木さんと話し合った上で”学園での保護”を決定した。これによって、少なくとも最低3年間。もしIS学園提携のIS大学も含めれば7年間は彼女の身の安全は学園と更識家などにより保証される。

恐らくこの後のSHRにでも、彼女が女子生徒として転校してくるだろう。……ちなみに、夫妻の保護にあたったマドカは徹夜だったからか現在自分の机で爆睡中。『すうすう』ととても無防備に寝ているけどあれは色々不味い。ここはIS学園、比較的

既に手遅れの一組と言えど獲物を狙う野獣はいる。現に、少し遠くに目をやればそこにはカメラを構えて笑顔の生徒が。マドカー、撮られてる撮られてる。

とりあえず、今回のシャルロットの件やデユノア社について。そして裏で動いていたと思われる亡国機業に……あの脳変性接続という研究については、束さん達には報告してある。驚いたのは、束さんをもってしてもその情報を掴めていなかったということだ。今回の発覚は、デユノア夫妻がシャルロットを学園へと逃して、それによつて発覚した出来事。幾らデユノア内部に対しても捜査力を持つイワンさんや、天災と謳われる束さんをもってしてもわからなかったのだ。

なお、シャルロットは昨日のあの後、個室に連行されている。具体的には会長の部屋。寮の新しい部屋が決まるまでは、会長の部屋で保護とという意味合いでも匿うのだとか。

「ところでリース」

「何、クロちゃん」

色々やることはある。面倒事もある。が……亡国機業の尻尾は掴んだ。それだけでも私としては御の字だ。とはいったものの、やや疲れているのは事実。昨日の一夏とシャルロットのやり取りだつて、なんていうか腹が立ったし。そんな時、クロちゃんに話しかけられて我に返る

「昨日の織斑さんの言葉について心当たりとかあるんですか？」

「……私、一夏と喧嘩してからほぼ口利いてないよ。大事な話って言われてもね」

プライベートのことで言うなら、気になっていることがある。昨日の一夏のあの言葉だ。

「私を否定する、認めない。か——まあ、私は彼に嫌われても仕方ないこととしたと思うし、自業自得かもね」

「最初からマイナス方向に考えるのはどうかと思いますよ」

「でも、それ以外考えられないよクロちゃん。私は、一夏に酷いことを言った。そうだと思っけていても、多分あれは……言っちゃいけないかったんだと、思う」

でも、それによって一夏がもうこっちに関わらなくていいのならそれでいいと思っただ。東さんの依頼だって、関わり合いがなくても護ることくらいはできるんだから。

……鈴には、人を好きになるとかそういうのを考えてみるって言われたけどまだよくわからない。今まで異性を好きになっただけじゃないからわからないというのもある。けど私は、誰かを好きになっただとして自分の復讐や争いにその人を巻き込むのが怖いんだと思う。

それでもし、その人が死んだら？ 傷ついたら？ きつとそれは辛いし、嫌だ。

矛盾していると思う。じゃあ東さんは？ クロちゃんは？ お義父さんや、会長やマド

力は？既に関わっている人なら良くて、これから関わる人は駄目なのか。そう考えるともつとわけがわからなくなつて、自分が嫌になつた。

「ねえ、クロちゃん」

「なんですかりイス。またマイナス発言したら怒りますよ」

「……人を好きになるつて、どんな感覚なのかな？」

不意に。周囲の空気が沈黙した。

不思議に思つてクロちゃんを見れば、最近読んだスマホアプリゲーム『あいえすっ！』に出てくるマンガ版千冬さんがたまにやっている真顔のような表情を浮かべたクロちゃんが。そして周囲を見ればセシリアや他のクラスメイト達もこちらを見てフリーズしている。私大当たりじゃないよ。

何故か居る鈴と清香を見れば満面の笑みでサムズアップしており、マドカは相も変わらず寝ている。しかし、どうかしたのだろうか。

「リイス？ えつと、もう一度お願いしても」

「ごめん、聞こえなかったかな。人を好きになるつてどんな感覚なのかな って」

おかしいな。クロちゃんを見れば喜んでような困っているようなそんな表情。再びクラスを見ればゾロゾロと私の所に集まつてきている。え、待つて、何？

「リーちゃんリーちゃん、好きな人できたのー？」

「んー……というより、その感覚がよくわからないのかな。好きな人、かどうかと言われると」まだわからない」

本音の言葉に対しての答えをそれを返した瞬間、集まってきたクラスメイトから歓声があがる。

『リースが恋！それも無知無理解シチュー！』

『相手は——いや、もうわかりきってるね！』

『もうさつきとくつつくといいいんじやないかなあ あ、HL織斑先生行く人ー』

『今すぐ各クラスに通達！ 私行くー、盾でいいー？』

なんか中に変なのが混じつてた気がする。というより君達はなんでそんなに盛り上がってるんだ。再度クロちゃんを見れば返答に困っている。どうしようか、そんなことを考えていると、

「おはよう、みんな」

教室の入口から声が聞こえた。

聞き慣れた声。でも最近、少し遠くなったような男性の声。教室の入口を見れば、そこには——いつもと同じように笑顔で挨拶をする、一夏の姿があった。

一気に教室内が騒がしくなった。一夏はそれを意に介する事なく、いつも通り自分の席に——つて、え？

「おはよ、リース」

「……おはよう。一夏」

席にはつかなかった。まだ確かにSHRまでは少し時間があるが、これには驚いた。喧嘩してから、私は昨日の一件以外で殆ど一夏とは会話をしていない。学園内であつても、無視するか見ないふりをしていたからだ。だから、朝に会話したりするなんてこともなかった。

一夏はそのまま、私の席まで歩いてきたのだ。そして、何もなかったかのように挨拶してきた。思わず動揺してしまつて、挨拶もぎこちなく返すこととなつた。

「——昨日の話、なんだけど」

「……なにかな。私は君と話すことなんて、」

「俺さ、リースが好きだ」

……え？　今、一夏はなんて？

一夏へと顔を向けて見れば、至つて真面目で、笑顔を浮かべていた。理解が追いつかない。あ、ああそうか。きっと聞き間違いだろう。

全く、喧嘩しているとはいえ嫌がらせにしてはこれは度が過ぎてるんじゃない——

「俺さ、自分に素直になろうって決めたんだよ。だから告ろうって決めた。一人の女の子として、リースが好きだ」

「え、あ……その、ええと？」

聞き間違いでも何でも無かった。一夏は「女の子として私が好きだ」と言った。動揺して頭も回らないし、返答も慌てきつた言葉でおかしくなっていると思う。

動揺して、混乱して。でも、彼のその言葉を聞いた時……とても、暖かかった。安心して、嫌な気分じゃなくて。きっとこれが鈴の言っていたことなのかなって思った。

……だけど。

「——私は、君が嫌いだよ。大嫌いだ」

否定の言葉を口にする。好きという気持ちはわからないけど、彼の言葉を聞いた時暖かかった。嬉しかった。安堵にも、安心にも似たそれがあつて、許されるなら——甘えたい、と思つてしまった。

けど、そんなものは許されないんだ。

それを許してしまえば、彼は巻き込まれる。傷つくかもしれないけど、命を落とすかもしれない。だから駄目なんだ。彼を否定しなければならぬんだ。

「正義感を振りかざして、私に関わりとうとする君が嫌いだ。人の心に踏み込んで、知ろうとする君が——私は、大嫌いだ」

そう、だから。

「もう、私に関わらないでくれないかな一夏。私は、君が大嫌いなんだ」

否定に否定を重ねて。そして、拒絶の言葉として私はそう言った。

これでいいんだ。きつとこれで、彼はもう私に関わらない。

「……リイスつてさ、嘘が下手だよな」

「——え？」

「自分で気がついてないのか？お前、嘘つく時一瞬目が申し訳なさそうになってまばたきするんだよ。どれだけ一緒の部屋だったと思ってるんだ」

「ツ……そんなの、ただの言いがかり、」

「それに、俺だつてリイスの事が嫌いだよ。ああ、大嫌いさ」

拒絶の言葉に対して返されのは、己に対する拒絶だった。

「言つたよな、喧嘩した日に。リイスと俺は真逆だつて。ああ、そうだろうよ。だからこそ、その真逆の立場にいる俺だからこそ言える。そうやって一人でなんでもやろうとして、誰も信用しないで、頼ろうとしないで。無理ばかりしているお前が、俺は大嫌いだよ」

「……だつたら、いいじゃないか。もう関わる必要なんて」

「そんな嘘をついて無理をするお前が大嫌いだ」

私が、嘘をついてる？無理をしている？……確かに、無理はしていたかもしれない。けど嘘なんてついてない。

「——ハッキリ言つてやる。弱いな、お前」

「……弱い？ 私が？」

「ああ、弱いきさ。そうやつて一人でやろうとして、誰にも頼ろうとしないで。でも人には散々言いたいこと言つてさ。どうせ自分ならいいとかそんな事思つてんだろ？ 自惚れんな馬鹿」

「なっ——馬鹿つて、」

「馬鹿も馬鹿。大馬鹿だよ。だから、そんなリイスが大嫌いだ。……けど、俺と真逆なお前を、俺は好きになった。俺さ、まだまだ頼りないし弱いかもしれないけど、頼つて欲しいんだよ。信用してほしいんだよ、お前に」

そんなこと、できるわけがない。頼れば一夏が傷つく。例え、一夏がそれを望まなくても。好意を向けてくれる……というのは、嫌じゃない。でもそれによつてもし一夏が傷ついたら？ そんなの、絶対に嫌だ。

「ツ……駄目、だよ。私は君が嫌いだ。大嫌いだ。そんなことを言われたつて、私は」
「知つてる。俺も嫌いだよ、大嫌いだ。俺、結構強引な所あるからさ。だから——絶対

リースが折れるまで退かないからな」

「……馬鹿だ、君は」

「ああ、知ってる。というかお前にだけは言われたくない」

本当、頑固だ。これだけ拒絶しても、もう関わるなど言っても。一夏はまだ関わろうとしてくる。私を、見てくれている。弱いくせに、まだ実力も足りてなくせに。それでもなお、絶対に諦めない。抗って、その意思を貫き通そうとする。

——馬鹿だよ、本当に。君は、大馬鹿だ。

「——ごめん一夏。君の気持ちには、応えられない」

「……そっか。じゃあリース、後一度だけチャンスをくれないか」

チャンス？何の？

「今度の個別トーナメント。俺はタッグで参加する。だから、そこで戦おう。それでも俺が勝ったら、もう一度答えを聞かせて欲しい」

「……馬鹿なのか、君は」

トーナメントには当然ながら、他の専用機持ちも出場する。セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット。区分は不明だけど、その中にタッグで出場する人間も居る筈だ。専用機持ちでなくとも、技量が高い生徒も居る。にも関わらず、そこで私達と当たるまで勝ち続ける？自惚れもいい所だ。馬鹿だ、と。そう思った。

しかも私に勝つ？一夏が？……正直言つて、私は負ける気がしない。それに、私の相手はマドカだ。彼女の實力は折り紙付きであり、そして専用機である黒式もまた、非常に高いスペックを誇っている。

「やれる、やれないじゃねえよ。やるんだよ。お前に証明してみせる為なら、もう一度答えを聞く為なら、それくらいやらないと男じやないだろ？で、どうなんだ」

「——そこまで言うからには、ちゃんと覚悟できてるんだよね、一夏」

「もし途中で負けたり、お前に負けたりしたらもうお前には絶対関わらない。けど……もし勝てたら、話をさせてくれ。もう一度、答えを聞かせてくれ」

ここで断つてしまえばいい。そんな約束をする必要なんてなくて、ここでもう一度一夏を拒絶してしまえば全て終わる。

そう理解していたはずなのに。何故か、どうしてなのか、私は——
「……いいよ。もし私に勝てたら、答えをもう一度返そう。話も聞こう」

”期待してしまった”。それだけ言い切った一夏に、自分がいくら拒絶しても諦めない一夏に。私はそんな彼に期待して、その勝負を受けてしまった。

それぞれの想い

「ふあ……結論から言うが、相性は最悪だ」

個別トーナメントまで1週間を切ったある日の昼。眠そうにしながらテーブルの上にあるアイスコーヒーを飲み、マドカは眠そうに言った。

彼女がこんな状態なのには理由がある。ここ最近、というよりはあの部屋での一件以降ほぼ休み無しなんだとか。

デュノアの件についての報告レポート、東やスコールに対する定期連絡。保護されているデュノア夫妻の安否確認とその関係手続き。更に、シャルロット本人の転校手続きも彼女がやった。ある程度片付いてはきているようだが、それでも連日無理が続いた。授業中に寝るとどうなるかわかったものではないので、休み時間は大抵寝ているという結果になった。

無事に、というべきなのかシャルロットの保護も学園側で正式に決まった。女の子として転校してきた際には確かに驚かれたが、一組としてはその日の朝にはもつと衝撃的なことがあり、その話題で持ちきりだったためあまり詮索もされなく無事に済んだ。

そんな、彼女の仕事が落ち着いてきたある日。リースとクロエ、マドカの姿は学園の食堂カフェテラスにある。各々飲み物がテーブルの上に置かれている状態で、マドカは続けて投影ウィンドウを展開すると言葉を続ける

「私の黒式の特特殊武装については、説明したな？」 雪片式型・天（ゆきひらにがたまつ）”には……まあつまるところ、例の装甲が使用されている。それによってビーム攻撃であれば無効化することは可能だ。が……」

「リヴアイヴの装備の殆どは入れ替えが可能であり、しかも実弾系の装備が多い。だから無効化できない」

「その通りだよリース。世代差や性能差、後は技量差があつたとしても弾幕を張られるとかかなり辛い。アリーナのルール上、”MFTB”でシールド防御してもダメージ判定は入るからな」

実戦と競技で異なる点がある。それは、防御判定だ。実戦で防御を行つても、基本的に機体へのダメージがなければシールドが減衰することはない。が、競技としてのISバトルとなると話が変わる。競技では、防御判定でもある程度のダメージが入る扱いとなり、シールドが減衰する。

当然攻撃の強弱にもよるが、射撃飽和攻撃でのダメージ判定なら、大きくないダメージでもシールドの減衰は入るのだ。

「更に言うなら、黒式の元々のシールドエネルギーは他の機体と比べて低い。これは性能の殆どを攻撃に回したからだが……競技ルール下では、私の黒式は物理射撃攻撃に極めて弱い。セシリアが使用しているブルー・ティアーズのBT兵器やレーザースナイパーライフルであれば吸収は可能だろうが、他の専用機のビーム兵器なんて少ないだろう」

その通りである。セシリアの主力兵装はミサイルを除きビーム扱いであるが、鈴の甲龍は近接型。衝撃砲も物理判定である。ラウラの専用機もほぼ全てが物理兵器。つまるところ、大火力を持った専用機などに対してはマドカは絶大な力を発揮するが、量産機などに多い物理射撃にはとことん弱いのである。

「というより、私達のチームは火力に特化しすぎている。黒式もヴァイス・フリーユージェルも近接万能型。基本的な戦術は近づいて大火力で叩き潰すという戦術になる」

「二人共アタッカーだからね。一応私の方にはシュツルムあるし、中距離支援なら出来るけど」

「では私がメインアタッカー、リースが中距離支援兼アタッカーということにしよう。実弾兵器は……なんとかする。最悪斬ればいいんだ」

眠そうに欠伸をしながらマドカはとんでもないことを言った。つまり、銃弾を斬ればいいということなのだ。そんな神業ができる人間などそうはいない。リースも異常な

反射神経で見えたとしても、銃弾を全て叩き切るなんて芸当は不可能だ。眠そうにしながら、まるで簡単なことだと言いつつ、マドカに対してリイスとクロエは苦笑すると話を続ける

「それで、リイス」

「何、マドカ」

「私が寝ている間に色々あったらしいが、お前としてはどうなんだ」

「……一夏に告白された件？」

あれから数日。校内の話題は一夏の告白の件で持ちきりだった。そして、リイスがそれを「一度断った」という話も。それはそうだ。あの時は多分自分も一夏も熱くなつてて周囲にまで気を配ってなかったが、教室内であんなことをしていたのだ。当然、人目があった。

（一夏は狙ったのかはわからないけど、その大衆の中で私に告白して、あれだけのことを言い切つたのだ ……本当、馬鹿だと思う）

そうリイスは思う。一夏がリイスに告白したという私も話題になったが、それ以外の話題もあった。それは、「一夏がトーナメントで負けない」と宣言したことだ。これについては、悪い噂も出た。調子に乗っているだとか、男が女に勝てるわけがないだとか。これについて一夏は他の組の生徒から絡まれたりしたそうだが、スルーするか、『俺は勝

ちますから』と返したそうだ。

「彼の問いかけに頷いたら彼を巻き込む。それが何を意味してるのか、わからないマドカじゃないよね」

「まあ、な。なら——個人的な感情でなら、どうなんだ」

「個人的な？」

「事情一切無しで、お前の個人的な想いだけで言うとうどうなんだってことさ」

リースは迷う。事情一切無しで考えるなら、恐らく己は一夏の手を取っていたからだ。一夏は客観的に見れば、今時の男性とは思えないほどに強く、頼れる人間である。

正義感が強く、大事なものを守りたいと努力し、絶対に折れなくて諦めない。何よりも——リースは、自分と対極である彼に対して、憧れや嫉妬。そして、他の感情を抱いていたのだから。

「……」 わからない」よ。私が、一夏のことが好きなのかってことは」

「——そうか。すまない、野暮なことを聞いた。話は変わるが、お前篠ノ之箒に何かしたのか」

「へ？」

「いや、だから。篠ノ之箒に何かしたのか？ 彼女、ずっと殺意に近い視線でお前を見てるぞ」

心当たりはあった。恐らくは、自分が一夏に告白されたからだ。彼女についてリイスは束から聞いていたのだ。そして、恐らく一夏に対して好意を持っているということも。

「——私が一夏に告白されたから、だと思おう」

「ま、だろうな。はあ……もしお前を一人にしたら、あいついつでもお前を殺しそうだぞ。無理だろうが」

「正直、どうしたらいいのかわからなくなってる」

わからなくなっていた。前なら、『一夏のこと好きじゃない』と一瞥していた。でも、今は。すぐにそう返せなくなっていたのだから。

仮に。一夏のことを好きだったとしても、自分はその気持ちに対して素直になるわけにもいかないのだ。巻き込めばきつと彼を傷つける。彼を殺す。だから、駄目なのだ。

「でもお前は、織斑一夏のあの勝負を受けたんだろう。断れた筈だ」

「——なんでだろうね。本当、なんで受けたのかもわかんなくて」

理解はしていた。自分は、彼に期待したのだ。何を期待したのかさえもわからない。だが——その期待に応えてくれる、そんな気がして、彼の勝負を受けた。そんなことを言えるわけもなく。自分の気持ちもよくわからないまま。内心、リイスはかなり困惑していた。

「まあいい。いい答えを、リイス」

「……う？よくわからないけど、わかった」

そんなこんなで過ぎていく昼休み。リイスはまだ、自分に対しての答えを決められずに居た。

夜がある。それは、とても静かな夜だ。

季節はすでに初夏であり、半袖の軽装でも問題なく過ごせるほどの気候であり、夏特有の暑さもすでに感じられる。それは夜でも変わらない。蒸し暑い、と表現される暑さの中で剣を振るう存在が居た。

——ヒュンツ

風斬りの音がした。それは、真剣による風斬りの音だ。

同時に、鉄同士がぶつかると鈍い音も。それが何度も何度も繰り返される。

月夜に照らされる影があった。一人は女性、一人は男性だ。暫く打ち合っていたその影は、最終的に男の側の影が吹き飛ばされることとなって勝負がついた。

「甘いぞ一夏。その程度で、あいつに勝つ気か？ 自惚れも大概にしろ」

「ツ……まだやれるぞ千冬姉！俺は、絶対あいつに勝つんだ！」

起き上がり、真剣を構え直す一夏を見て千冬は『やれやれ』といったようにため息を付いた。

「だが、少し休憩だ。流石に3時間も続けてとなると少々疲れたのでな」

「なんだよ千冬姉、まだ老人つて年じゃ——おわっ！」

再び風切の音。今度は投擲されるような音であり、投擲されたのは千冬が持っていた刀。その刀は綺麗に一夏の立つ場所より一步前の地面へと刺さり、それを見て彼は青ざめた。

「何か言ったか」

「イイエ、ナニモ」

よろしい、という言葉の後千冬は近くにあるバッグまで歩くとそこからスポーツドリンクを取り出す。そして、そのうちの一本を一夏へと投げる。

「それでも飲みながら聞かせろ一夏。……本気でリースが好きなんだな？」

「——ああ、好きだ。俺はあいつが好き、だから知りたいんだ。あいつのこと。千冬姉は言つたよな、”知りたいなら知りに行け”つて。だから俺は、あいつのことを知りに行こうと思う。知つて、それでその上であいつと関わりたいって思つたから」

「お前の思っている以上に、あいつが背負ってるものは重いぞ」

千冬のその言葉は事実である。元々、リースの保護の切っ掛けとなったのは千冬とリースの戦闘が原因だ。結果、リースがリミッターなしの限界突破瞬時加速を使用し、その負荷が原因で倒れる。その後、保護という形になった。

そして千冬もまた、リースから事情は聞いていた。両親が殺されたこと、金色のISSのこと、その復讐のために3年間ずっと裏稼業のようなことをして、世界を回っていたこと。彼女としても、その内容を聞いて、思うことがあったほどだ。”どうして子供の頃からそんなことをしなければならぬのか”と。

生きるために誰かを殺し、生きるために依頼を受けて沢山殺した。時には自分と変わらないような子供を、時には違法薬物を栽培している親子達を。襲われることもあったと聞いた。そして、そんな相手すらも殺した。そうしていくうちに、彼女は慣れたのだという。

——他人を殺すことに、敵を殺すことに、自分を殺すことに。

そうしなければ生きれなかった。そうしなければ、復讐のために動けなかった。生きるために、仕方のないことだった。リースから千冬は聞いた。

「……千冬姉だから言うよ。それは知ってる、あいつが俺の生きてる世界とは違う人間なんじゃないかって感覚は、あつたんだ」

「いつからだ」

「対抗戦の時。あの時の無人機と戦っている時のリースの目や雰囲気、そして——あの、躊躇いなく銃を撃った時の、あいつの言葉や目。きつと、そういうのに慣れてるんだろ うなって思った」

「——そうだな。あいつには、色々複雑な事情がある。それも、とんでもなく重い事情が な」

「だから最初は、怖くて認めたくなかった。あれはリースじゃないって。だけど……俺 には、本当は違うんじゃないかって思えてならなかったんだ」

「違う？何がだ」

「あいつのたつた一度だけの弱音、それを聞いた時とても辛そうだった。苦しそうだった。思ったんだよ、あいつは無理してるんじゃないかって。そして……喧嘩して、お互 いに真逆だつて思つて、ハッキリわかった。あいつは、自分を殺してるって。自分を 殺して、傷つけて」

息を吸つた。そして、一夏はその想いを口にする。

「例えどんなものを背負つていても、俺はあいつが苦しんでるのを見たくない。だから ……少しでも俺が助けになれば、背負えたらなって。そうやって歩いていけたらいい なつて思つてき。上手く言えないけど、俺はあいつに無理してほしくなくて。笑つてほ しいんだよ、信じてほしいんだ」

それは、想いだ。一夏が持つ彼女への想い。同時に、理解したい、知りたいと望む、彼が持つ相対への目的だ。

「お前のことを好きになつた男は、とても諦めが悪くて——ただお前に笑つてほしいんだ、つて」

一夏は思う。きつと、リイスは自分を拒絶するだろうと。その理由はわかっていた。自分を護るためだと、何かに巻き込みたくないからだ。けれど……己は違つた。"られる"というその行動が嫌だつた、好きだと思ふ相手に一方的にそうされるのが嫌だつた。だからこそ、自分も強くなりたいと望んだ。そうして、彼女を護りたいと。頼られたいと。

関わりたいと望んだ。己の意思で。例えそれがどれだけ重くとも、既に一夏には——彼女に関わる覚悟ができていたのだ。

「——」強くなつてきたな、一夏。正直お前にそこまで言わせるリイスに妬けるよ」
「千冬姉？」

「休憩は終わりだ。立て、一夏」

そう言われ、スポーツドリンクのペットボトルを置くと、真剣を構えて改めて千冬と相対する。そんな一夏に対して、千冬は言葉が続ける

「一夏。お前の想いはよくわかつた。だが……想いだけでは何の解決にもならん。今

のお前では、絶対にリイスには勝てない」

「わかっている。でも……それでも俺は勝たなきゃならないんだ。あいつに」

「——そうか。なら、その想いと覚悟に免じて勝つためのヒントをやろう」

「勝つためのヒント？」

それは、恐らく一夏が唯一リイスに対抗する方法。今の状況でたった一度でも勝てる可能性がある、ただひとつの方法。そしてそれはかつてリイスと殺し合いをして、彼女を倒している千冬だからこそできたことであり、彼女でなければわからないことでもあった。

「あいつが消えたような動きをしているのは身をもつて経験しているな？ それに対してお前が今できる対策と、そして——私がかつて世界最強に上り詰めた、1つの技だ。それを教えてやる」

千冬の構えが変わった。抜刀されていた真剣を鞘へと戻したのだ。

そして、構えた。その構えは——かつて、一夏も見たことがあるものだ。モンド・グロツツ、かつてその場で千冬が見せた構え。

居合の構えだ。

一夏と千冬が相対してたその夜。別の場所で動きを見せる存在が居た。

黒髪のセミロング。鋭い吊り目。千冬と瓜二つの少女はスマートホン型の端末を手にしながら、学園の外を歩いていた。

「間違いないのか、スコール」

『私を誰だと思ってるのマドカ。——デノアの例の研究に参与していた研究員、全員が殺されたか行方不明になってるわ』

「消息は？一人くらい掴めないのか」

『とつくにやったわ。それもオータムが直接ね。　だけど、何も掴めなかったし証拠らしいものも出てこなかったわ』

その言葉に対してマドカは思わず苦い顔をした。己の保護者、つまるところスコール達がどんな人物なのか知らない訳ではない。

元亡国機業構成員にして”幹部級”。10年ほど前までは米国のある研究施設で研究責任者をしており、同時に極めて優秀なIS乗りでもあるスコール。そして、口は悪く横暴ではあるが——己の中で自分の元姉と並ぶほどの”最凶”の実力と、諜報や工作などのプロフェッショナルであるオータム。更に、同時期に亡国機業から離脱してきた構成員達も、どの人材もがトップクラスの技量持ち。

そんな人間達が動いて、かつオータムが直接動いたにも関わらず何も出てこなかった

ののだ。まるで同じだった。あの対抗戦の時と。マドカは、誰かの掌でまた踊らされている感覚に陥り恐怖した。

『……今回の件について、東やドイツも動いているわ。そして、保護されているデュノア夫妻もね。夫妻からの情報提供を元に色々わかってきてはいるみたいだけど、肝心の亡国機業についての情報はサツパリよ。しかしまあ、』

そこで、電話先のスコールは一度言葉を切った。

『とても悪趣味な研究ね、この脳変性接続というのは』

「人の脳を改竄して書き換える。ある種の到達点だとは思いますが、やはりな」

『そうね、ある意味ではこれは到達点よ。けれど——かつて、私も目指していたのはこんなものではないわ。これは、ただの人を人形にする技術よ』

「……私も、これを認める気はないさ。今後の動きについては？」

その言葉に対してスコールは『少し待ちなさい』と言って、暫く。マドカの目の前には通信相手にしか見えないウィンドウ、個人間秘匿情報表示（プライベート・ウィンドウ）が表示される。

『東やドイツについては動きがあるけれど、それについてはリースちゃんやラウラちゃんに連絡が行くと思うわ。私達個人で言うなら……そうね、ある対策を打つことにしたの』

「対策だと？それは、亡国機業に対するものか」

『正確には亡国機業と、今後の有事に備えての対策よ。それについて連絡が2件ほど』

「聞かせてくれるか。大丈夫だ、今日は時間がある。鬼の寮監査官もどうやら今日はいないようなのでな。精々不良というのをやってやるさ」

『後で千冬に連絡しておくわね』

「やめてくれ、主に私が物理的に死ぬ」

『冗談よ。まあ若いうちはそういう不良みたいなことをするのもいいことよ？ これ、年の功』

「そんな年だったか？ スコール」

『あら嬉しい。さて、話を戻すわ』

コホン、と咳払いをしてマドカの目前にある個人秘匿情報表示に新たな情報を表示する。

それは、米国についての情報だ。

『米国に動きがあったわ。アメリカとイスラエルの非公式での協力開発された軍事 I S ”銀の福音”。この稼働実験とテストが夏に行われるそうよ』

「……軍事 I S。つまり、”制御なし”か？」

『ええ、そうよ。そしてこのために、アメリカの国家代表イリス・コーリングとナター

シャ・ファイルスが動くことになったわ。そして——』

「ッ!?まさか、」

個人間秘匿情報表示に表示されたデータをそれを見てマドカは目を見開いた。そこに表示されていたのは、一人の少女のプロフィールだ。

その少女はまるで人形のようなだった。薄い小麦色のロングヘア。肌は白く無表情、半眼であり、少女としては小柄な部類に入るだろう。

そして、名前の欄にはこう書かれていた。

——”エクスカリバー”と。

『この件と亡国機業に対して、”エクウ”が動いたわ。指示は……ホワイトハウスでしようね』

「——米国が私たちに味方する、ということか。なんとも皮肉な」

『けれど、エクウの実力は知ってるわよね? あの子が動いたということは、あの子の意思で決めたということよ。でなければ、米国はあの子に対して動かない』

「……大事になってきたな」

『貴女に会いたがってたらしいわよ? エクウは。懐かれてるじゃない』

「おかしいな。私はあいつと一度やりあってる筈なんだが」

色々思うことがあり、ため息をつくマドカ。恐らく己が考える予想は先のものであ

り、あたっているとも限らないがとても疲れを感じた。更に、それに追い打ちをかけるようにしてオータムは言葉を続ける。

『それから、近いうちでの連絡が2つ目』

「もうどうにでもなれ。それで、何だ」

クスリ、と。通話先のスコールが笑った。

『近いうちにI S学園に新しく教師が赴任すると思うわ。

——オータムが』

思わず、マドカは言葉を失った。

信頼 『ともだち』

一夏の告白騒動。それが原因で、動きを見せる存在が居た。

IS学園の道場、現在は部活停止期間ということもあつてか二人しかその場に居ない場所で竹刀を振るう存在が居る。箒だ。

「……………ふっー」

一心不乱に、まるで何かを振り払うようにひたすら素振りをする箒。そんな彼女には考えることがあつた。

（どうして、何故だ。何故私ではない？ 一夏、お前のことを一番理解しているのは私だ。一番好きなのも私だ。なのに、どうしてなのだ！）

本来、こういった竹刀の素振りや座禅などは雑念を捨てて集中してやるべきものである。でなければ、その動きに鈍りが生じるからだ。箒の現在のそれは、本来の彼女のそれではない。力が入りすぎており、振るわれている竹刀も勢いが強くブレている。まるでそれは、今の彼女の心のようであつた。

（私は一夏より強い。一夏より強くて、一夏と付き合いが一番長い。なのに、どうして——どうしてあいつなのだ！）

箒が考える、というより蝕んでいるのは先日の一夏の告白騒動だった。あの一件はある種、全ての終止符になったのだから。

一夏がIS学園という環境下で選んだのは、リスだった。そうだろうという予測を立てていた生徒や、既に諦めをつけていた生徒も居たが、先日の騒動はまだ諦めていなかった生徒達に対してのとどめとなった。

そして、箒もまたその一人である。一夏はリスに対して告白。実際の所、彼女はその告白に対して拒絶を示していたがある約束を承諾。結局の所、返事は持ち越しになった。

理解できなかった。どうして自分に対しての告白でなかったのかと。

理解したくなかった。自分ではなく、一夏は他人を選んだのだと。

一夏がああしてリスに想いを告げた以上、もう己が告白しても無駄だと思った。実際、今の一夏にはリスしか見えていないのだから。

一夏は悪くない。悪いのは誑かしたリスだ。そうでなければ一夏が自分を選ばないはずがない。だが、そんな酷く醜い想いを抱くと同時に箒は理解もしていた。

一夏は悪くない。悪いのは——想いを告げず、向き合わなかった自分だと。

それを認めたくなかったのだ、箒は。

鈴は全てに対しての清算という形で、一夏は親友であるという答えを出した。その上

で一夏と正面から相對して、全て終わらせた。箒にはそんなようなことができなかったのだ。それは、怖かったからだ。認めたくなかったからだ。

そう思っていた中で、とどめを刺された。それも、一夏から。結局の所、いくら箒が想っていても一夏はその想いには応えない。気がついていても応えないのだ。既に彼は、別の答えを出しているのだから。

（違う。違う、違う、違う。違う違う違う違うッ！ あんなの一夏じゃない、私の知っている一夏はあんな一夏ではない。あれは、私が知らない一夏だ。だから、あれは一夏ではない！）

否定する。現実を、全てを。

そんな箒に対して、言葉を投げる人間が居た。

その人物は、道場の中で正座しており、制服姿でずっと箒の素振りを見ていた。

「——劍が鈍っているのではないか、箒」

「……!? ラ、ラウラ？ いつから居たのだ」

「む？ 失礼だな。」 最初から居たぞ。道場での練習を見学していくと、そう話したではないか」

「そう、だったな。すまない——ちよつと、呆けていた」

「疲れが見える。一度休むといい。ほら、茶だ」

そう言つてラウラは自販機で販売されているお茶、『ロイヤルま口茶500ml』を箒へと手渡す。箒はそれを受け取り、開封して飲むと息を吸い、

「すまない、ラウラ。大分落ち着いた」

「冷静さを忘れるなど、私は父上に教わつた。少し冷静になるといい、箒」

「……すまない」

「ふむ。何か悩み事か？ 私で良ければ聞くぞ？ 私は日本については副官から教わつていてな、大抵のことは覚えてるのだ」

「その副官、色々間違つてるから代役探したほうがいいと思うぞ」

箒とラウラの関係は悪くなかつた。最初こそ突然押しかけてきたラウラに困惑した箒であつたが、打ち解けるのに時間はかからなかつた。更に言うなら、シャルロットの件で部屋割りが一部変更。その影響で箒のルームメイトがラウラに変更となつた。箒からすれば、猫を飼っている感覚というか、手のかかる妹のような感覚であつた。

つまるところ、箒としては「妹が居たらこんな感じ」という状態だつた。ラウラはとも自由で、色々間違つていて正しい日本の知識が豊富である。故に、放っておけない相手だつた。

余談ではあるが、箒が習字を教えた所短時間で上達。見事なまでの果たし状を作成し、血判を押そうとナイフで指を切ろうとして全力で箒が止めたのは別の話である。

「ラウラ、聞きたいことがあるのだ」

「何だ？私で答えられることならなんでも答えるぞ？」

「……エーヴェルリツヒは、どんな奴なんだ？」

その言葉に対してラウラが返したのは、考えるというアクションであった。

「……優しく不器用な人だよ、姉様は」

「どういう意味だ、それは」

「詳しくは話せない。人のことだからな。ただ——そうだな、どこか箒と似ているかもしれないな」

（似ている？ 私とエーヴェルリツヒが？）

疑問する。自分と、自分の恋敵といつてい存在の何処が似ているのかと。同時に思う、似ているのなら何故私を選ばれなかったのかと。

「箒も優しいだろう？現に、私にとてもよくしてくれている」

「そ、それは。お前は同室で……タツグのパートナーだからであってだな、それに——危なっかしくて見てられん」

「失礼だな箒は。私が危なっかしい？ちゃんと日本については学んできているぞ？」

「いや本当副官とかそのあたりまともな人探せないか」

『ドイツはみんなあんな感じだ！』と返すラウラを見て箒はため息。順調に自分も一

組に感応してるなと思うのはもう手遅れなんだろう。

「そして箒、お前も不器用だ。箒、一度手合わせを願えないか」

「手合わせ、だと？だがラウラ、お前剣道というのは——」

「うむ！箒のを見学していただくくらいでサツパリわからん！」

だから、とラウラは続けて

「通常戦闘方式でやろう。武器は近接武器……そうだな、使用していいのは竹刀などの競技武器のみ。地面にダウンするか相手が降参のサインを出したら終了。どうだ」

「……いいだろう。ちよつと待て、今切り替え操作をする」

道場にある管理装置を操作して、一部の床を畳に変更。それを確認して、箒とラウラはその上に立つ。

「では、行くぞ。怪我をしても知らないからな」

「安心しろ、これでも軍で訓練は受けている。遠慮なく来い」

箒は竹刀。ラウラは無手。一見無防備に見えるラウラに対して、箒が踏み込んだ。



手合わせを開始して既に10分近く。箒、ラウラ共に息は多少あがつてきており、汗も見えた。しかしラウラは疲れを見せながらもまだ余裕、というように箒の射程へと踏

み込んだ。

(ツ……やり辛い！)

一気に懐まで潜り込まれて、鋭い拳や足技を入れようとしてくるラウラを捌きながら、箒は思う。相手は無手、此方は竹刀。その時点で射程の差があるということを理解できない箒ではない。

レンジ差。それを考慮すれば優位なのは箒である。だが状況は違う。圧倒的にラウラの優位だった。

「私の目は少々特殊でな。姉様程ではないが、人並み以上の反応は出来るぞ——例えば、こんな風に」

パシントツ！という音がした。

それは箒の持つ竹刀が何かにぶつかる音であり、ぶつかったのはラウラの掌だ。振る下ろされた竹刀。それをラウラは最低限の動作で回避しつつ、片腕で掴んでみせたのだ。そのままラウラは無理矢理竹刀を己側へと引き寄せようとする。これは、自分にとって一方的に優位な距離を確保するためだ。

竹刀というものは射程距離がある。振るわれる剣筋は鋭く、隙がない。かつて剣道で全国優勝を果たしたただけはある実力が、そこにはあった。故に、ラウラはその剣筋の”適正距離”に入ることを警戒した。そして至る。剣筋が振るわれない、振るえない距離

に行けばいいと。

だからラウラはあえて踏み込んだ。一定以上の距離を保ったままにしていると、距離から逃れていても箒の太刀には補足され続ける。そうすれば、いつかは捕まる。ならば、”補足できない距離”に入り込んでしまえばいい。

逆に捕まえ、引き寄せる。ゼロ距離ならば竹刀は振るえないからだ。

それは箒も理解していた。だから――

「さっせん！」

竹刀を無理矢理振るようにして、小柄なラウラの身体を揺らす。揺らされ、僅かにできたそのふらつきを箒は見逃さない。そのまま無理矢理竹刀をラウラから振り払い、再度距離を取ると構え直す。

「ふむ。今のはいけたと思つたのだが　日本で言う所の、肉を切らせて骨どころか相手も真つ二つ。　だつたか」

「ず、随分物騒な諺だな。それもドイツの副官の受け売りか？」

「うむ！日本には敵対する相手に対してもオモテナシの心とアイサツを持ってバクサツすると聞いている」

「なあラウラ、冗談抜きで部下は選ぼうな？　後……今度の休みに正しい日本について

私が教えてやる」

「本当か！私は和菓子がいいぞ！信玄餅食べよう信玄餅！——おっと、隙があるな」
箒の隙をつけて距離を詰めると、そのまま鋭い横蹴りが箒へと繰り出される。それを箒は後ろに後退することで再び回避する。

「鋭く、正確で、そして落ち着いた剣だ。本当に日本のケンドーとは美しいな。だが——
ふっ！」

「な、しまっ……ぐうー！」

箒の竹刀での振り下ろし。それを回避するとすかさず懐へと入り込み、ラウラの拳が箒の腹部に入った。鈍い痛みを箒は感じる。だが、その痛みを身を任せればこのままラウラの連続攻撃の餌食だと判断して、無理にでも竹刀を振るう。

「その中には迷いがある」。やや太刀筋も力んでいるようにも感じるし、ブレも見えない。

「ッ!?私は、」

「もらうぞで」

一瞬の迷い。たったその数秒、箒の動きが鈍った。そして、ラウラはそれを逃さない。そのまま竹刀を掴み、抵抗する暇を与えずに引き寄せると、竹刀を持つ腕を掴んで——

「そお、いー！」

背負投をした。そのまま箒は畳へとダウンすることとなり、勝敗は決した。

「……しまった、ここは ソイヤツ！ だったか」

「いや、両方違うから安心しろ」

畳から起き上がり、冷静なツツコミを箒は入れる。それに対してラウラは『なんと?!
これが日本のカラテワザと聞いたぞ!』と驚いている。

「悩み事か、箒」

「——そうだな、悩み事だな」

「私で良ければ聞くぞ? さっきも言ったが」

「……言えないさ。ラウラはエーヴェルリツヒと仲がいいのだろうか? なら、尚更だ」

「それとこれとは別問題ではないか? 確かに私は姉様を敬愛しているが、箒のことも少なからず他人ではないと思っっているぞ? それとも、私はまだ信用がないか? ちよつと悲しいぞ」

そのまま畳の上に体育座りをして、畳に”の”を書きながらしよぼくれるラウラを見て、慌てて箒は『そ、そうではなくてだな』と返す。

「——聞いてもらってもいいか、愚痴だし、酷い内容だぞ。きつと、軽蔑するぞ」
「それは聞かないとわからないだろう。聞こう」

箒はラウラの隣りに座ると、道場の天井を見上げ、息を吸う。

「……一夏の告白騒動については、知っているな」

「ああ、この前の。まったく織斑一夏め、よくも姉様に手を出したな。やはり果たし状を叩きつけて倒した後に拷問にかけようと思うのだ。きつと3秒位で更生してくれる」

「落ち着こうなラウラ？ 後、電圧は考えろ —— あれ、私は今何を」

「むっ……：：：：そうか電圧か。ふむ、強すぎず弱すぎずというのは難しいからな。それで、なんだ」

「い、今のはなしで頼む。コホン——」

そうして箒は再び息を吸い、

「私はな、一夏が好きなのだ。誰よりも、あいつが好きなのだ」

「おお、恋か！ 私はまだしたことがないから羨ましいぞ！」

「お、怒らないのか？」

「何をだ？」

「私は——お前の敬愛しているエーヴェルリツヒに告白した一夏のことが好きだと言っただぞ」

「誰を好きになろうと自由だと副官から聞いた。箒は織斑一夏が好きなのだろう？ 別にいいのではないか？ それで、続きは」

箒は、自分の毒気を抜くようにラウラへと話をしていった。自分が一夏が好きということ、付き合いが長いこと、色んな面を知っていること。小学生の頃、こういうことが

あつて好きになつたということ。それをラウラは逃すことなく真剣に聞いていた。

「なのに、一夏は私ではなくエーヴェルリツヒを選んだ。憎いのだ、あいつが。殺意にも近い憎悪が抑えられんのだ。軽蔑したる？これが、私だ」

「——憎悪というものは、誰でも持つものだ。私も、その経験がある。そして、今もなおその憎悪を持つている」

返されたのは肯定の言葉だった。それに対して驚いたのは箒だ。てつきり、自分の醜さを暴露して嫌われるだとか思っていたからだ。それをラウラは「当然のこと」と、受け止めた。

「……私はな、ちよつと経歴が特殊でな。そのせいで少し前までは荒れに荒れていたのだ」

「ラウラがか？信じられないな」

「力を信じ、溺れ、過信し。敬愛する人達の言葉すらも私は耳を傾けなかつた。ただひたすらに憎悪を抱き、力を振るおうとした。そのせいで、惨事になりかけたのだ」

それは、かつてのラウラの後悔。千冬と出会い、ドイツ軍I S配備部隊のトップにまで上り詰めた後の話。その後、ラウラはある事件が原因で荒れた。荒れて、憎悪を根本として力を振るつた。

諦めかけた、『生まれてこなければよかった』と思い、生きる事を。

「箒、聞いてもいいだろうか？」

「何だ？」

「織斑一夏には想いを告げたのか？」

「なっ、なななな——」

その質問に対して慌てふためく箒。対してラウラはキョトンとしており、言葉が続ける。

「私は恋をしたことがないからそれがどういうものかはよくわからない。だが、言いたいことを言わなければ相手には伝わらないし、わかりもしないだろうか？」

「そ、そんなことをしなくても一夏は私の気持ちを理解してくれる。態度で、きつと見してくれ。」

「流石にそれは無理があると思うぞ。」態度で理解しろ” というのは相手に対する命令だと、理解しているか？」

言葉を返せなかった。その通りであり、自分もなんとなくそれを理解していたからだ。だが、それをやめることはできなかった。怖かったのだ、想いを告げることで関係が変わることが。拒絶されるのではないのかという恐怖があったから。だからこそ、己の心の中に”勝手な理想の織斑一夏”を描き続けた。そして何かあるたびに、その周囲と本人に対して憎悪した。

醜悪である、と理解してしてもそれをやめることができなかった。

「では——では私はどうすればいいのだツ！　一夏はエーヴェルリツヒが好きなのだぞ!? 今更、今更私にどうしろというのだ！」

そう、今更だった。箒の一夏に対する好意というのは昔から持っていたものだ。それがより強くなったのは、IS学園で再会してから。学園で毎日、教室で顔を合わせたり、朝に共に訓練をしている時にでもチャンスはあった筈なのだ。なのに、箒はそれを”理解しているもの”だと解釈した。都合のいい織斑一夏は自分を見ていると、自分の気持ちを理解していると。だから、自分を見てくれると思つてしまった。

現実にはそうではない。一夏はリイスが好きであり、箒本人からすれば鈍感だとか唐変木だとか思つていた本人が大衆の中で告白をした。それが原因で、都合のいい織斑一夏という存在が崩れた。箒を現実へと引き戻した。結果として、憎悪し、妬んだ。一夏を、リイスを。

「……箒、織斑一夏が好きなのだな？」

「ああ、私は一夏が好きだ。だが、もう今更だ」

「まだ好きか？」

「好きだよ、ああ一夏が好きだ。諦めたくなんて、ないさ」

その言葉を聞いてラウラは『ならば、』と言葉を投げ、ある提案をした。

「私と一緒に果たし状を叩きつけよう、織斑一夏に。そしてその場で全て吐き出せ、箒」
「……吐き出せ、だと？」

「そうだ。織斑一夏は箒からすれば鈍感であり唐変木なのだろう？なら、言わなければわかるまい。だからこそ、全部叩きつけるのだ」

「だ、だが。一夏はもう答えを出した、あいつの眼には——私は映らない」

「最初から諦めるのか？随分と意気地がないのだな？」　　”織斑一夏に対する想いや憎悪はその程度か？”

挑発するように、呆れたようにラウラは言った。対して箒はそれに明らかな怒気を見せていた。

違う、と思った。一夏が好きというのは本気であり、誰よりも好きだという自負もある。だからこそ箒はラウラのその言葉に対して憤慨したのだ。己が一番であると、考えていたから。

「私には恋なんてものはわからん。だが……気がかりなことを抱えたまま、ずっと気にしていくつもりか？ そんなもの、辛いだけというのは私は知っている」

「——それは、経験談か」

「うむ、そうだ。やってみなければわからないという言葉もあるし、それに——ちゃん

と、清算したほうがきつと楽だぞ」

ラウラの言葉は正しい。箒としても、もう結果が見えている可能性が高いそれに対しての想いをいつまでも引きずれるとは思わなかったからだ。いつかはケジメをつける時が来る。遅かれ早かれ、だ。それが——今になっただけだと思った。

ふと思えば、これほど親身になつてくれる相手は今まで居なかつたと感じる。過去のクラスメイトはどこか余所余所しく、今まで関わつてきた人の多くは自分を“篠ノ之東の妹”としか見なかつた。

剣道の全国大会決勝でも、とても醜い勝ち方をした。結果として、相手のスポーツマンとしての心を折り、涙を流させた。それに対して言われたことも——また、己の姉の関わることだつた。

誰もが親身になつてくれなかつた。いや——関わろうとしてくれなかつたのだ。箒自信も不器用なところがあり、学園に来るまでは友人も少なかつた。一組の生徒が少々特殊で親しみやすいというだけで、そんな親しい人間は今まで居なかつたのだ。だから、面として真面目な話や相談をできる相手も殆ど居なかつた。毒を吐けるような相手も、心を見せられる相手も。

ラウラがここまで親身になつてくれているのは、己を心配してくれているからだ。そして、“一人の友人”として見てくれているからだ。

(……ああ、本当。馬鹿なのは私か)

友人、それも親身になってくれる友人。それができて理解できた。結局自分は全てを都合よく解釈し、自身が嫌っていた姉を都合よく利用していただけなのだ。姉の存在を無意識に利用して、都合が悪いことは聞かないふりをするか言えなくした。思う、自分は予想以上に醜悪だったのだと。

そんな自分に対して歩み寄ってくれた——この無垢で、常識が色々とおかしなルームメイトであり友人がどれだけ貴重な存在なのか、再認識した。だからこそ、箒も覚悟を決める。せめて、無駄かもしれないが全ての想いを清算するために。

「ラウラ」

「む、何だ」

「力を貸してくれるか」

頼った。初めて誰かを、信ずる誰かを頼った。

一度素直になってしまえば、箒ノ之箒という人間の心という刃は鋭かった。ただ信ずる、決めたことに対して全力で挑む——まさに、武士そのものでもあった。そんな箒の言葉に対して、ラウラは嬉しそうに笑顔を浮かべて、言葉を返す。

「勿論だ。とりあえず果たし状だな！血判がやはり必要か!? ナイフあるぞ!」

「お、落ち着け。後ナイフは危ないから仕舞え——そうだな、果たし状。もう一通作る

か」

「やるからには盛大なほうがいいな、うむ」

「それも副官の受け売りか」

「いや。父上の部下の方の受け売りだ！ドイツ最強のＩＳ乗りだと聞いている。『情熱の炎で総てを焼き尽くせ』という言葉をよく聞いていた」

箒は思う。最近色々変な方向に認識が偏ってきている変態国家ドイツにおいて最強のＩＳ乗りとはどんな人物なのかと。聞く限り、とんでもない大火力持ちの専用機なのかとか色々考えるが、考えて恐ろしくなったので途中でやめる。恐るべしドイツ。

「では、まず果たし状を作ろう。そして作戦会議だ！」

「だ、だが……私は専用機を持っていないぞ？ きつと、ラウラの足を引っ張る」

「何、案ずるな箒。力を貸すと言っただろう？ 織斑一夏、奴には私も用がある。だから

——道は私が作る、障害は私が全て排除する。だから箒、」

それは、ラウラの箒に対しての願いの言葉。

同時に、自分の分も頼んだという——託しの言葉でもあった。

「全部ぶつけて、ぶん殴ってこい。言っておくが——私は強いぞ？」

そこにあつたのは自信だ。自信と、嬉しそうな笑顔。

そんな表情をして胸を張るラウラがそこには居た。

相対の決戦場

トーナメント当日。IS学園は賑わいを見せていた。

IS学園の入り口である正門や、人工島に降り立つターミナル駅には大量の人が存在しており、アリーナ以外でも賑わいを見せていた。

この学年別個人トーナメントとは、IS学園生徒にとっても来賓や各国関係者にとっても大きなイベントであった。期間は1週間かけて行われ、本来生徒は全員強制参加が、今回は「実験中のIS暴走事故や各国での事件」から大幅にルールが改定されている。1年は浅い訓練段階での先天的才能評価を目的とし、2年はそこから訓練した状態での成長能力評価、そして3年はより具体的な実戦能力を評価する。3年の場合、IS関連企業からのスカウトや各国の重鎮などが顔を出す大掛かりなものになるのだ。

人が多い理由は別にもある。それは、今年の一年生は特に優秀な生徒が多く、また専用機持ちも過去最多であるからだ。リス、マドカ、一夏、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、専用機未完成のため打鉄での出場となるが楯無の妹でもある簪。数えるだけでも8人の専用機持ちが存在している。特に一夏とマドカに対する注目度は高く、それを目当てに見に来ている観客も多い。

一夏が注目されているのは言わずもなだった。世界唯一の男性操縦者であり専用機保有者。更に言うなら、彼の日々の努力はそれを知る各国のIS関係者にはとても高く評価されていた。実際、国への引き抜きを希望する国があるくらいだ。当然ながら、それは学園と東などの手によって遮断されているが。

マドカについても期待が多く寄せられている。本人が『似ているとよく言われますが、織斑先生とは無関係です。何なら血液検査なりなんなりしてくれても結構です』と言つて、無論誤魔化したものであるが完璧に偽造したデータを提出しているにも関わらず、織斑千冬に似ている、そして実力は世界レベル、などと評判が立ち注目がされている。マドカ自身は既にドイツ所属の扱いなので、手を出そうとする各国関係者は少なかった。各国としてもドイツにはあまり手を出したくないのだ。

人物以外で言うなら、特に注目されているのがやはりこの二人の二機。白式と黒式である。この二機は、公式発表上兄弟機にあたる。白式・黒式共に東が制作したものであり、”コアは特殊なものを使用している”。外見もほぼ同じであるが武装が異なる。白式は実体剣とビームソードに切り替えができる変形型機構剣であるのに対して、黒式はほぼ実体剣にMFTBと呼ばれる遠距離兵装が二機のみ。性能は両機共に第三世代の中では現行最高位レベルであり、そんな期待に対しての注目はあった。

そんな賑わいを見せるトーナメント当日。1学年の個別トーナメントは第三アリー

ナにて、タッグ・トリプルの部が分けて行われる。専用機持ちで言うならば、タッグでの参加者はリース、マドカ、一夏、シャルロット、ラウラのみである。鈴やセシリアはといえば、他組のある生徒と共にトリプル区分で出場を申請している。

余談ではあるが、鈴とセシリアの相性は極めていい。最初は息が合わず口喧嘩をしょっちゅうしていたが、二人共代表候補生。そこは己の改善点を見つけ出し、チームを組むにあたって改善をした。結果、近距離型かつパワータイプ。衝撃砲により中距離援護も可能とする鈴、遠距離特化型にしてビーム兵器にBT兵器という大火力担当のバックアタッカー兼サポーターのセシリアという、なんともバランスの良い組み合わせができてしまった。一度、二人相手に楯無が稽古をつけたことがあったが曰く『勝ったけど戦術が面倒臭すぎてもうやりたくない』と零すほどだった。

生徒達の間でも盛り上がりを見せていた。一夏が大胆にも大衆の目前でリースに告白。その際はOKを貰えなかったものの、もし勝負に勝てばもう一度チャンスを貰えるというリースと一夏の勝負は既に学園全体が知っており、その結末がどうなるのかと盛り上がりを見せていた。

別の理由もある。数日前、転校生であるラウラと箒が揃って一夏に対して果たし状を突きつける。これについて一夏は困惑した。聞けば、ラウラは『やっぱり個人的な理由で一発殴って一撃必殺しないと気がすまない』という理由。そして、箒はといえば、

——勝負をしよう。そして、全部清算しよう一夏。トーナメントで待っている

と、一夏からすれば信じられない行動に出た。今まで箒はこういった行動らしい行動を見せなかったのだ。好意や気持ちには一夏は気がついていたものの、誰か一人を選んだ今どう言葉をかけていいのかもわからなかった。そんな中での果たし状。それを受け取って内容を見て。一夏も覚悟を決めていた。

そんな、各々理由がある戦い。それに挑む日。1学年トーナメントタッグ部門の試合前待機時間。各人の姿は、配置されたピットにあった。

◆ ◆ ◆
「しかし、変なことになったな」

「何が？マドカ」

第三アリーナ第一ピットゲート。そこに存在する一学年待機所、マドカは開場前のアリーナの様子を写すモニターを見ながらそんな言葉を呟いた。そして、疑問を返したの
はリスだ。そんな彼女に対して、マドカは苦笑しながら言葉を返していく。

「鈴とセシリアは四組の……更識簪か。会長の妹。彼女とトリプルス部門で出場。ダブルス部門での出場は綺麗に偶数だ」

「確か二人が練習の帰りに知り合つて、本来ダブルス区分希望だったのを変更したんだっけ」

「鈴と更識妹の趣味が見事にマッチしたというのもあるそうだが。香港警察はいいぞ」

「……マドカ、もしかして好きなの？ 香港警察」

「大好きだ。英雄故事とか特に」

珍しく熱が入つたように言うマドカを見てどう言葉を返していいのか悩むリイス。普段から彼女は冷静であり興奮することがあまりない。そんな彼女が目を輝かせそんなことを言っているのだ。相当好きなのだろうと推測する。そんなことを考えていると、咳払いをしてマドカが言葉が続けた。

「ご丁寧に織斑一夏のペアとラウラのペア。そして私達のペアの三組の間には因縁や思ふことが互いにある。見事に綺麗に当たることになつたと思つてな」

「また亡国機業が仕組んだとか言わないよね？ 流石に冗談きつい」

「まさか。あり得ないだろ、ただの偶然。とても奇妙な、そんな偶然さ」

因縁。というよりは、決着をつけるべきことが各々にはあつた。

リイスは一夏に対しての関係や想いへの決別を目的に。

一夏はリイスに対して手をのばすために。

箒は、己の気持ちに対して決着をつけるために。

ラウラとしても、一夏に対して思うことはあるようだが、二の次程度という気持ち。彼女にとって今最も優先しているのは「頼ってくれた相手に応えること」なのだ。そんな何かしらの理由がある人間の中で、唯一目的がハッキリしていないのがマドカだ。「ところで、なんでマドカは何で私と組んで出ようと思ったの？今まで聞きそびれてたけど」

「フリーパスだ」

リース固まった。それは、以前にもどこかで聞いたキーワードだったからだ。

「今回の個別トーナメントで優勝すれば、1週間色々なことに使える超便利フリーパスが貰えると聞いた。詳細を知ったらとても興味深くてな？」

「あー……対抗戦の時のアレかな。ほしいの？」

「できれば。といっても、実はそれは後付で本当の理由は別にあるが」

「それは如何に」

「あの時の生徒達の雪崩に巻き込まれて死ぬくらいならリースと組んで出たほうがデータも取れるし有意義かと思ってるな」

「ああ……さいいで」

確かにあの時は凄まじかったと思う。未だかつてないほどの生徒の波が一組に押し寄せ、それを一組生徒が誘導やら整理していたくらいだ。結局、お目当ての一夏やマド

力などの専用機持ちは既に組んでいるということ。その場は収まったのだが。

「そういうリイスは何故出た？ お前は整備科志望だし出場辞退も出来たはずだが」

「いや、私を捕まえておいて君はそれを言うかな。 ……そうだね、なんで出たんだらう」

「——織斑一夏、か？」

その言葉に対してリイスはすぐに返答できなかった。その通り、というのもあった。あの時己は彼に対して期待してしまった。それが理由で、勝負も受けた。彼女自身もわからなくなっていて、惑っていたのだ。自分の気持ちと、彼に対する想い。それを考えた上での自分の立場からの気持ちについて。

迷いの中で出したのは拒絶だった。結局の所、リイスは一夏を巻き込みたくないのだ。巻き込めば彼を傷つける。危険な目にだってあうかもしれない。だからこそ、”また自分を殺した”。

「……マドカに嘘ついても仕方ないよね。うん、そうだよ」

「いいのか？ 本当に」

その意味をリイスは察していた。つまり、今回のトーナメントでどんな形であれ一夏との関係は決着がつく。そしてリイスは、結論として拒絶を選んだのだ。本当にそれでもいいのか、と。マドカは言いたいのを理解できた。

「うん、いいんだこれで。私は負けない、負ける訳に行かない。……負けちゃ、駄目なんだ」

「……わかった。それがお前の答えなら私はそれに応えよう。私とて、負ける気はないさ」

「負ける訳に行かない」。そんな強迫観念にも似たそれが、リースの心にはあった。競技ルール下では、特にこの二人の制約は大きい。リースは機体の性能制限。マドカも同様であり、機体のシールド値が低い上に、競技ルールでは防御しても強制的にシールドが減衰させられる。更に言うなら、マドカは単一仕様の使用も不可能。

彼女の黒式の単一仕様。"無縫影月"は、極めて強力であり、実戦向きの単一仕様である。"ありとあらゆる防御機構を無効化して破壊する"というデータラメ極まりないもので、ISの絶対防御すらも例外ではない。デメリットもリスクが高いものであり、そんな単一仕様を競技で使用できる訳もなかった。

故に、二人共制約下。だが――

それでもなお、リースは自分を犠牲にしても、己を殺しても彼を拒絶したいと望んだ。



第三アリーナ第二ピットゲート。その一学年待機所には、並ぶ二人の影があった。一

人は長い黒髪をポニーテールにした少女。もう一人はオッドアイに銀髪の小柄な少女であり、二人共I Sスーツ姿である。

「いよいよ、か」

「うむ。箒、気持ちの整理はつけたのか？」

隣に立つラウラの言葉に対して、箒は会場の様子を移すモニターと、現在は名前が伏せられている状態となっているトーナメント表を確認しながら言葉を返す

「……ああ、つけたさ。ケジメはちゃんとつける。それと、ありがとうラウラ」

「ならいい。しかし何故礼を言う？何に對してのものかわからないのだが」

「きつと私は、こうしてラウラと組んでいなければ——ずっと、引きずっていたと思うから」

ラウラとの友人関係。それは箒にとっては大きな変化を生んだ。それも、いい方向に。今まで箒は、自分にとって同性の友人というのは少なかった。同性で、それも本音を遠慮なく吐ける相手というものがいなかった。

誰もが自分を“篠ノ之束の妹”として扱った。誰もがそのような目で見た。教師も、クラスメイトも、大人も。誰も彼もがそうだった。全てがそうだった訳ではない。だが、そんな中に心を開いて遠慮なく接することができる相手はいなかった。

故に、篠ノ之箒という人間の思考や想いは、歪んだ方向へと変化していたのだ。極端

な話、自分が姉である束を嫌っておきながら、自分は姉の妹だから都合のように解釈しても問題ない”というように、無意識に考えていた。結果、一夏に対しての一方的で押し付けな想いが形を成した。

本当は誰かに相談したかった。一夏のことを、自分の辛い気持ちを、姉に対するコンプレックスを。けれどそんな相手は居なかった。だからこそ、篠ノ之箒という人間の個性は歪んだ方向へと変化したのだ。

そんな中で箒はラウラと知り合った。出会いこそとんでもないものだったかもしれないが、箒にとつては心置きなく接することが出来る友人ができる切っ掛けだった。ラウラに対して話した。一夏への気持ち、自分の辛さを。そして彼女はそれを親身になつて受け止めてくれた。

それが箒にとつての救いになった。救いとなり、変わるチャンスとなつたのだ。

「私は友人に対して当然のことをしたまてだ。それに箒、礼を言うのはまだ早いのではないか？ トーナメントはこれから始まる」

「……そうだな。ああして果たし状まで突きつけたんだ、全部終わらせるさ。全部な」

箒が望んだのは、己の思いに対する決着だった。

一夏はリイスを選んだ。それでもなお、箒は一夏が好きなのだ。だからこそ問おうと決めた。結果なんて見えているかもしれない。だが……その気持ちを伝えることに意

味があるのだと、この友人に理解させられた。ちゃんと伝えなければ、向き合わなければ。何も伝わらず理解もされない。ただ持っているだけの想いとは呪いだ。それは心を蝕む。

それに気がついたからこそ、箒は望む。己の想いと呪いに終止符を、と。



第三アリーナ第三ピットゲート。その待機所にあるのは、IS学園内でも一人しか居ない男子生徒と、中性的な容姿をした少女だ。

一夏とシャルロット、二人の表情はそれぞれ異なる。一夏の表情と目は真剣そのものであり、明確な闘志が感じられる。対してシャルロットは、それを心配そうに見ている。

「一夏」

「ん？なんだよシャルロット」

心配そうに言葉を投げたのはシャルロットだ。彼女の処遇についてはIS学園、そしてフランス政府にドイツ政府までもが保証している状況である。亡国機業、その存在を知らないフランス政府ではなく政府としてもテロへの対策としての用意はしていた。そんな中でのフランス国内、しかもデュノア社での一件である。事態を深刻と見たフランス政府はドイツから直接突きつけられた報告書と、束による圧力、更にはIS学園上層部からの圧力で動くことを決意。身柄を少なくとも3年、最大7年から9年。つまり

IS学園入学から最大でIS大、大学院卒業までは学園での身柄保証を許可した。今後、彼女の身柄付いては学園が責任をもつことになり、デュノア夫妻もフランスの事態が終息次第デュノア社に戻るとのことだった。

余談ではあるが、全ての種が明かされて不謹慎ではあるがデュノア社長は荷が降りたという。『もう娘に嘘をつかなくていい、最悪の結末だけは回避できてよかった』と言っていた程だ。本当に彼と、そして彼の妻はシャルロットをも愛していたのだ。だからこそ、どんな手を使っても守りたかったのだという。

そんな心配そうに見ているシャルロットの首には、いつものリヴァイヴの待機形態はない。代わりに、首にはチェーンに通された指輪が存在していた。

「……大丈夫なの？ 僕が言うのもあれだけど、リイスとマドカは間違いなく1年生最強。下手したら学園内でも最上位レベルだよ？」

それは事実だろう。マドカとリイスにあって、他の生徒にはほぼないもの。それは実戦経験だ。潜ってきた修羅場の数が違う。リイスは3年間、1人で世界中の紛争地帯や違法研究施設を1人で歩いてきたのだ。そして、それだけ多くの人間をも相手にしてきた。マドカも同様だ。元亡国機業にして、その実働部隊。かつてはM（エム）などと呼ばれ、テロリストや亡国機業に害をなす相手を排除してきた。

二人の実力もさながら、専用機も頭が抜けている。ヴァイス・フリーユゲル、黒式共

にリミッター下であっても他の専用機と比べると抜きん出た性能を持つ。そんな二人は一年生の中では優勝候補。對抗馬と言われていた鈴セシリアペアは突然のトリプルス変更となり、生徒の中では恐らくあのペアが優勝だろうと言われていた。

そんな相手。一夏にどんな理由があれど、一度リースの恐ろしさを目の当たりにしているシャルロットにとっては不安が残っていたのは事実だった。

「だからどうした」

「……え？」

返されたのは、そんな言葉だった。一夏はそんな言葉を当然のように、まるで問題ないというように言ったのだ。

「やれる、やれないじゃないんだ。」やるんだ。俺はリースを倒す、その為に——今日まで地獄を見てきたんだ」

「地獄って？」

「……思い出したくない千冬姉との特訓だよ。何日か千冬姉が居ない日があっただろ、その時にちよつと千冬姉に連れられて特訓に」

「うわあ。ち、ちなみにどんな？」

「鬼軍曹も真つ青な訓練だった。いや、本当に思い出したくない。けど——対策はできてる」

シャルロットはその目を見た。一夏の目は、諦めてはいなかったのだ。むしろ、勝つ手立てがあると切り切り、絶対的な相手に対して「勝つ」と言い切った。その目は諦めておらず、ただ立ち向かうことを、抗うことだけを考えている。彼女がそんな彼を見て思うのは、憧れと「彼女に対する」羨望だった。

「……少し、リイスが羨ましいな」

「ん？ すまん、モニター見てた。何だつて？」

「なんでもないよ。でも対策つて？」

対策。それは、リイスのあの消えたように見える動作への対策だ。シャルロットは部屋での騒動で身をもつて理解していたからわかるのだ、あの時彼女の気配すら感じなかったこと。気がついたら死角に居たこと。故に、その怖さはよく知っていた。

「ああ、リイスのあれについては対策できてる。ただ——他のについては無理だ。あんなの、まともに戦って勝てる相手じゃない」

「リイスの異常なほどの反射神経？ ……確か、常人じゃ考えられないくらいの反応速度なんだよね」

「正直言って異常そのものだ。理論的には、恐らくこつちが脳内で1アクションを行つたのに対してあいつは2アクション以上とれて、実際にそれを行動として処理できるんだ。正面から戦えば勝ち目なんてない」

一夏はリイスについてのある程度の情報を千冬から聞いていた。勿論、千冬も伏せるべきところは全て伏せたが、彼女の反射神経や特殊な技法についてはヒントを与えていた。そして、一夏は特訓の中で技法については対策を用意した。だが、反射神経だけではどうしようもなかったのだ。対策が取れるようなものではなかったのだから。

だからこそ、そんな相手に対して勝つ方法を考えた。そして今回のトーナメントは競技ルールであり、タッグなのだ。それを利用しての対抗手段というのはあった。

要するに、“まともに戦わなければいい”のだ。向こうにはマドカが居て、此方にはシャルロット。乱戦状態で全ての情報を把握し、対応することなどほぼ不可能だ。仮にそれをリイスができたとして、それは恐らく永遠には続かないと一夏は踏んだ。

「でも驚いたよ。まさか僕の転校初日に一夏がリイスに告白してたなんて。しかも、大勢の前で」

「う……い、今思えば凄いいことしたんだよな俺。未だに思い出すと恥ずかしい」
「みんな二人のやり取り聞いてて顔真っ赤だったって聞いたよ？ ……でも、決めたんでしょ？」

織斑一夏は諦めない。絶対に、何があっても。抗い続けると決め、立ち向かうと決めた。

そうさせてくれる切っ掛けをくれた少女。その答えをくれた少女を好きになり、自分

に嘘をついて傷つける少女の力になりたいと望んだ。

きつと、彼女と出会わなければ自分は腐っていたから。

きつと、彼女と出会わなければ諦めていたから。

どす黒い感情に支配されて、何もかもを呪っていたと思うから。

「ああ、決めたさ。俺、凄いいしつこい奴だからさ。リスに振り向かせる。振り向かせて、俺のこと見させてやる。……そうじゃなきや、何もわからないし何も知れないと思うから」

「凄いいこと言ってるの自覚してるかな一夏、聞いているこっちが恥ずかしいよ。でも、そう決めたなら一夏は折れないよね。なら僕は、その手伝いをさせて貰うだけ。一夏達には恩もあるしね」

それに、と続ける。

「……今回のトーナメント、”この子”のテスト稼働も兼ねてるんだ」

「デュノア社の真正正銘、本物の第三世代機か？」

「うん。デュノア社、お父さんが極秘で開発してたつていう第三世代機。……この機

体には、お父さんやシャーリイさん、開発に関わってくれた人達、そしてお母さんの想いが詰まってる。だから、僕も僕らしくやってみることにするよ。シャルル・デュノアじゃなくて、シャルロット・デュノアとして。そのためにまずは、君の力になるよ

一夏」

デユノアの第三世代開発。それは嘘ではなく事実だった。正確には「開発されていた」だが。

イグニツション・プランでの除名、それより遙か前よりデユノア社長は第三世代機の開発を行っていた。その開発には極一部の研究者に、彼の妻。そしてシャルロットの母親しか関与していなかった。亡国機業のデユノア社への干渉、シャルルの殺害、諸々の事情がありその存在を完全に伏せていた。

しかし今回、その問題の多くが解決され表に出せるようになった。それが、現在の彼女の専用機である。名を、『ウエンティ』といった。シャルロットの才能に特化した完全な専用機であり、同時に第三世代の中でも今後の量産と、コンセプトである全距離万能型ということを重要視した機体である。

拡張領域は従来のリヴァイヴの3倍。機動力やパイロットからの伝達も桁違いであり、他の専用機と同時に運用されることも想定された特性をも持つ。彼女は、このトーナメントより少し前。極秘にマドカが受け取ってきたアタツシケースに嚴重に保管されたそれを受け取った。そして、中身を見た時、彼女は思わず涙した。

——これ、お母さんの指輪だ

その中身は、シャルロットの母親の形見である指輪だった。そして、同封されていた

手紙が存在した。それはデュノア社長と社長夫人からのもので、中にはデュノア社が亡国機業と呼ばれる組織に脅され利用されていたこと、脳変性接続と呼ばれる研究がその引き金になったこと。シャルロットが大切にしていた弟、シャルルのことについてと、シャルロットに宛てたメッセージが書かれていた。

彼女の両親は、シャルロットに自由に生きて欲しいと望んだのだ。もう、亡国機業の脅威もない。脅されることもなくて、嘘をつかなくてもいい。だから、自分達は大丈夫だから自分の思うように生きて欲しいと。そう望んだのだ。

故に。そのための第一歩として、罪滅ぼしと恩返し。そういう意味合いで、シャルロットは一夏に協力しようとしたのだ。

「……すまん、頼らせてくれ。もし、あいつらと当たったら作戦通りに」

「うん。わかったよ——チャンスを作ればいいんだよね？」

「ああ。一回でいい。二回目は通じないだろうし、その一回で全部終わらせる。……

あいつを、倒す」

一夏とシャルロットには作戦があつた。それは、リスとマドカに勝つための秘策だ。そしてそれは恐らく一度しか通用しない。いくらマドカとシャルロットの機体の相性がよく、此方が有利といえど相手もそれはわかつているはずだ。当然対応してくる。故に、たった一度のチャンス。その一度で一夏は零落白夜を叩き込み、勝つことを

選択した。

勝って、そしてもう一度話をしよう。そして、自分のことを見させてやろう、頼らせてやるんだ、と。そう心に決める。

『間もなく開始となります。一年生、タッグ部門の対戦表を発表します。参加者の皆様はモニターを確認して下さい』

そんなアナウンスが流れる。見れば、モニターにはトーナメント表が表示されており、対戦カードが全部オープンされた。

「……マジか」

「なんとも、これはいきなりだね」

一回戦第1試合。そこに書かれていたのは、

篠ノ之箒&ラウラ・ボーデヴィツヒ VS 織斑一夏&シャルロット・デユノア
という文字だった。

レギオン

IS学園第三アリーナ。そのフィールド上空には対峙する二組が存在した。

一夏とシャルロット、そして箒とラウラだ。試合開始前では多少時間があり、互いのチームは待機位置でそのまま待機している。

一夏としては、気まずい思いだった。突きつけられた果たし状、その内容を見て。その上で箒の気持ちを知っていて。だからこそその想いには応えられなかった。既に自分是谁かを選択している。そして、迷わないと、そう決めている。

……が、それでも尚。やりきれない気持ちというものはあったのだ。

また、予想していない事態が発生する。それは、ラウラの専用機だ。事前の情報ではラウラの専用機はドイツの第三世代型、レーゲン型。射撃よりの万能機であるという話だったが――

(……なんだ、あの機体は)

目前。ラウラが纏っている機体はレーゲン型、シュヴァルツエア・レーゲンではない。確かに、シャルロットの三世代専用機も今回ののが初めての公開となるが、まさか彼女以

外に新型機を持つてくる相手がいるとは思わなかったのだ。

見た目のそれは、シユヴァルツエア・レーゲンとよく似ているが搭載されている武装が違う。両肩には背中側に向けて収納された大型レールカノンと思わしき武装が2門。それぞれ両肩に確認できる。機体後ろ側、彼女より少し上の後方には大型ジェネレーターと思わしき非固定浮遊部位が両肩に存在している。カラーリングはシユヴァルツエア・レーゲンと同じ黒ではあるが、以前授業で見たものと異なる。間違いなく高火力型であると推測できた。

そして、一夏はシユヴァルツエア・レーゲンについての恐ろしさをよく知っている。事前に公開されている専用機についての情報は調べておいたからだ。レーゲン型の特筆すべき兵装、それはA I Cと呼ばれる兵装だ。物理兵器や近接攻撃であればほぼ無効化されてしまい、有効打を与えられなくなる。弱点は存在しているが、それについても対応済みだろうと推測する。

物理兵器をほぼ無効化することから、此方との相性は最悪だろうと考える。一夏自身は近接武器である雪片式型のみであり、シャルロットの三世代機も今回搭載している兵器の多くが対マドカ用に物理兵器である。

待機位置について、互いのチームともに誰も言葉を発しない。そんな中で一夏は『どうする』と考え沈黙が流れた時、

「——ドーム、織斑一夏さん。ラウラ・ボーデヴィツヒデス」

ラウラがその場、しかもアリーナの上空という浮遊状態のまままで両手を合わせお辞儀と共にそんな言葉を投げってきたのだ。

これには一夏は困惑した。お辞儀に言葉からは挨拶だと思われるがなんとも独特な挨拶である。そのまま返せばいいのか、それとも特別な返し方があるのかと迷っていると、ラウラが怪訝そうに言葉を投げる。

「……む？日本では戦場の相手はどのような相手だったとしても、最初にアイサツするのが礼儀だと聞いているのだが違ったか？コジキ、とやらにも書かれているとも聞いたが」

「あー、多分それ凄い誤解というか、変な方向に毒されているというか。えっと、ボーデヴィツヒさん？」

「ラウラでいい。もしかしたらやはり貴様は私のお義兄さんになるかもしれないのだからな？」

どこかから叫び声と呆れたような声が聞こえた気がするが気のせいだろう。主に第三ゲート辺りから何か聞こえた気がするがきつと気のせいである。本当にこの知識はどうやったらかこまで歪んで伝わるのかなどと考えつつも、一夏は苦笑する。

「かもしれない、じゃなくなてなるだろうな。未来で」

「ほう？言い切るではないか。少なくとも私は貴様が姉様に手を出してあまつさえ大衆の面前で『俺の嫁にする』発言までしたのだから、多少敵し目の拷問にでも掛けてやろうかと思っていたのだが」

再びどこから声が聞こえた気がするが気のせいだろう。今度はその声を落ち着かせるどこか千冬に似た少女の声も聞こえたりもするが気のせいである。流石に箒とシャルロットも若干引き気味にラウラを苦笑いしながら見ているが、当の本人は全くそれを気にしない。

「悪いけど、それは受けられないかな。——俺、負ける気ないしさ」

「……ふん。言い切ったな？ 本当なら個人的理由で一発殴って すぐく……一撃必殺です…… というようにしたかったのだが、まあそれはもういい」

「おいなんだその物騒な一撃は」

「私の父様の部下の方の決め台詞でな？ 気に入っている。さておき、私は貴様に問わなければならぬ。本当に姉様に勝つ気か？」

「ああ、勝つき。その為に俺は今日ここにいるんだ」

「自分の力量、そして姉様の実力を理解していない訳ではあるまい？なぜ挑む」

「あの馬鹿に言っただけのこと、伝えたいことが沢山あるんだよ。それに——やって

みなきや、わからないだろ？」

「……そうか。なら、私くらい倒せなければ話にならないな？ 見せてみる、お前の力と覚

悟を」

「言われなくとも」

そこでラウラは『さて』と呟いて箒を見た。

「こんな感じでもいいか箒！ 私は言いたいこと全部言ったぞ！ 約束通り今度の休みにレゾナンスにあるという和菓子のおいしいお店とやらに連れて行つてくれ！」

「全部台無しだラウラ！ う……た、頼むからそんな泣きそうな目でこっちを見ないでくれ」

「わ、和菓子はなしか……？」

「ちゃんと連れて行く！ だから頼む、そんな泣きそうにならないでくれ！ ち、違うんだ

一夏にシャルロット。これは、その」

大変そうだなあ、などと一夏とシャルロットは考えながらもそれを温かい目で見守る。暫くして、箒がやや疲れたようにしながら一夏を見た。

箒としても、そして一夏としても最初ラウラから会話を切り出してくれたのは助かったのだ。互いにどう切り出していいかわからなかった、そのな状況でそれを理解してくれてなのか、それとも素なのかはわからないがラウラが先に話を切り出してくれた。

「……一夏。果たし状は、読んだな？」

「ああ、読んだよ。話、あるんだよな」

「——ああ。聞いてくれるか」

「勿論だ」

箒が一夏に対して叩きつけた果たし状にはあることが書いてあった。それは、話したいことがある。言いたいことがある、というものだった。そして一夏も、それが何なのかというのは察していた。

「私は、お前が好きだ一夏。ずっと、ずっと好きだった。そして今も、一夏のが好きだ」

想い。それは、一度は呪いになりかけた想いだ。

箒ノ之箒が自分の中で大切にしてきて、同時に彼女自身を蝕んできたもの。そして、それに対して決着をつけようとするものでもあった。

「小学生の時、虐められていた私を助けてくれたお前を見てただかっこいいと思った。それが最初、千冬さんと出会って、道場で剣道をして、沢山お前と話していくうちにどんどん好きになった。……学園で再会した時、お前を見て思ったよ。とても男らしくなっていて、私知っている一夏だと思って。それで、もっと好きになった」

その言葉を一夏は、ただ真剣に聞いていた。箒から一度も目を逸らすことなく、真剣

に。

「剣道の全国優勝な、お前は褒めてくれたが——とても酷い勝ち方をしたんだ。ただの暴力に近いものでの勝ち方を。お前に褒められて嬉しくて、でもあんな勝ち方をした自分が許せなくて。本当、自分がわからなくなった」

続ける。一夏に対して、思っていたことを箒はどんどん吐いていく。

「お前を独占したかった、都合のいいように解釈したかった。私の理想の一夏だけを考えて、ただそれに縋ろうとした。……だが、お前はもう選んだのだろうか？ 私ではない、あいつを。エーヴェルリツヒを」

「……ああ」

「どうしようもなくなつて、迷つて。そんな時相談できる友達ができて、それでわかつたよ。私の今までの在り方が間違っていたのだと。そして決めたんだ——全部、決着をつけよう」と

箒は息を吸う。対して一夏も、目を逸らすことはしない。

告げる、全ての想いへの清算の言葉を。

「一夏、私はお前が好きだ。だから、お前の答えを聞かせて欲しい」

「……すまん、箒。俺は、それには応えられない」

「——そうか」

「箒の好意は知っていた。でも、俺にはどうしてもそれを異性同士の関係に結びつけることができなかった。ずっと逃げていた俺にも責任は、あると思う。ごめん」

「……まったくだ、人の好意に気がついておきながら放置とは、焦らしもいい所だ」

試合開始が近くなり、カウントダウンがスタートした。それを一夏と箒は確認する。

「もし、私が勝てたらお前はまた私を見てくれるだろうか？ 勿論、冗談だが」

「それは、きつとないな。だって俺——負けるつもりないしな」

「ラウラに引き続き私にも言い切ったな。だったら、」

試合開始のカウントダウンが残り5秒を示した。箒はふつと笑うと打鉄のカスタム機の長刀を後付で存在する鞘ごと構えた。

「見せてみる。私を振って、ただ一人を選んだその想いを。その覚悟を。……私の諦めが完璧に付くくらい。見せてみる」

◆ ◆ ◆
試合開始の瞬間。誰もがまだ動かない中。箒が真っ先に踏み込んだ。

◆ ◆ ◆
試合開始直後。一夏は己に対しての衝撃を感じた。鈍く、だが鋭い衝撃だ。それにより開始地点からの後退を余儀なくされ下がる。確認すれば、シールドエルギーが減少している。

(ツ………今のつて)

「動揺する。」何故なら一夏は今の動きは知っていたからだ。だが、そんなことを考える余裕もない。これはタッグ同士での対戦だ。当然ながら、ラウラの攻撃も飛んでくる。反応できない一夏に対してのシャルロットのフォローは早かった。

「一夏！下がって！」

「あ、ああ！」

撤退と同時に。シャルロットが両手に展開した大口径アサルトカノン、『ガルム』を連射。その銃弾が箒へと放たれる。動作の直後ということもあり、箒は完全に反応はしきれずに居た。ましてや、箒の機体は打鉄の近接型カスタム機。本人が見えても、機体の反応が追いつかない筈だった。

「やらせんよ」

声が聞こえた。ラウラの声だ。同時に、箒へと放たれた雨のような弾幕が全て”停止させられた”。

「すまん、ラウラ！……先走ってしまった」

「何、気にしなくていい箒。道は作ると言った。故に、障害は全て私が排除する」

息を呑んだ、それは一夏のものであり、シャルロットのものでもあったのだ。箒の後方。自分達より高い高度に存在したのは漆黒だ。漆黒に、所々に存在する銀のライン。そして何より、

「洒落になつてねえ……い！」

それは要塞だろう。大火力とA I Cという防御力を持つ、要塞。

上空のラウラは両肩に存在する大型のレールカノンに加えて”自身の左右真横の宙に展開された”高射砲の砲門をこちらへと向けていた。全4門。しかもそのどれもが大火力であり、当たれば一撃で殆どのシールドを持つて行かれるであろうそれを見て、二人は息を呑んだ。

そして問題は別にある。今の一夏とシャルロットの位置は開始地点からほぼ変わっていない。対してラウラは後方に下がって更に高度まであげているのだ。距離的にはそこまでではない。狙撃などが必要になる距離ではなく、アサルトライフルの有効射程内。だが――

”中距離に対してA I Cを展開された”

情報と違う。A I Cというのは、機体の正面にしか展開できないはずなのだ。慣性を停止させるというのは反則染みた能力であり、その発動と使用には莫大なエネルギーと集中力が必要になる。よって、そんな離れた距離に対する戦況の情報処理能力が普通の人間には不可能だ。ただですら、前方に展開するだけでも集中力と視認する対象への処理能力、そしてエネルギーを食う。にも関わらず”多少距離があるシャルロットの射撃を停止させた”。

意味がわからない。そう一夏は考えていると、対戦相手の機体情報が送られてきた。未公開機体。つまりラウラやシャルロットの機体については、試合開始してから暫くして互いのチームに公開されるようになっていた。それを思い出した一夏は急いでそれを確認した。

確認して、ある種絶望することになる。

『 ” 対戦相手の情報をルールに基づき公開します。確認して下さい” 』

” 機体名：第三世代型 I S 全距離制圧型 レーゲンタイプ改良型 I S ” レギオン

搭載武装：大口徑レールカノン？ 2

非固定浮遊領域展開兵装 高射砲イグニス？ 2

プラズマ手刀？ 2

ワイヤーブレード？ 6

中距離 A I C 制御装置？ 2

以上。

』

「自チームの機体情報です。確認して下さい」

機体名：第三代型 I S 万能射撃型 ラファール型 I S” ウエンティ”

搭載武装：大型拡張領域記憶装置（領域制限なし）

支援接続機構” リヴァイヴ”

反応型自動防御機構” ガーデン・カーテン”

...

以上。』

「さて、機体情報もお互い公開されたことだし。改めて名乗らせて貰おう」

ガゴン、という音が聞こえた。それはラウラの機体からのものであり、全部で4門ある砲塔が全て、一夏とシャルロットへと向けられていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒと、我が専用機レギオン。そして、」

不意に。ラウラの専用機、レギオンの肩部後ろに存在する A I C 制御装置の一部がカパツという音を立てて開かれる。そして、そこから現れたのは——二機の丸く、色はそれぞれ黒と灰色。頭には耳らしきものが生えている丸型ロボットだった。

『ヤツテヤルゼ、ヤツテヤルゼ』

『デバンダヨ、ウレシイネツ』

喋った。制御装置にはそのロボットらしきものの固定位置があるのか、ただ身体の半分だけを見せ、目を光らせながらそんなことを言ったのだ。

「ドイツ I S 開発部門特製。I S 制御支援ユニットの黒兎（シユヴァルツ）と灰兎（グラウ）だ。少々私の専用機はじゃじゃ馬でな？ 制御に助けがいるのだ。許せ」

競技上、これは特に問題がない。というより、今まで支援ユニットを必要とする程の専用機が存在していなかったのだ。ラウラの専用機はある種世界初、その第一号に当たる。当然これには会場の人間達も驚いた、各国の関係者はただ驚きラウラの専用機“レギオン”について情報を集めようと必死になっていた。試合をしつかりと記録し始める者、他国の I S 関係者と討論をしながら試合を考察する者など様々だ。そんな中に、ラウラの姿を見て微笑む男性が居たのは別の話。

第三世代とはイメージ・インターフェースが主題になっている。搭載した兵器を稼働させ制御するにはかなりの集中力が必要で、未だ実験機の域を出ないというのが実情である。その問題を外部補助という形で解決し、発展させたのがラウラのレギオンである。

要するに、操縦者だけでは集中力を必要としすぎて問題点が大きすぎるならそれを補えばいいという考えだった。しかし I S のコアとは特殊なもので、大抵の AI では機体

とコアに対してマツチングしない。そこでドイツが考えたのが、進化するAI。つまり操縦者であるラウラから人間について学び、進化し、ISとの適合率を高めるというものであった。

そんな存在によって、ある種操縦者に依存する解決方法を生み出したのがドイツだった。そして、ドイツのIS開発部はある結論に至った。『燃費問題が解決されるなら、火力の高い武器を搭載しても問題なくね?』というものである。その結果、レギオンに搭載されている兵装のほぼ全てが大火力。しかも、一撃で大打撃を与えることが可能なものばかりとなつてしまい、結局それが原因で燃費問題がまた逆戻りしたのだが。

「——さて、織斑一夏。もう一度言っておくが私を、いや……私と箒をも倒せないくらいでは姉様には勝てんぞ?」

「……さっきのお返しとか?言ってくれるじゃねえか」

「ふっ、お返しだ。そして更に言うなら、我が友の目的の為。頼ってくれた友のケジメのため——精々、暴れ撃たせて貰う」

レールカノンにエネルギーがチャージされ、その砲身が一夏達のいる方向へと向けられたまま射撃しようとした時。『あつ』とラウラは抜けたような声をあげた

「後私の個人的な理由で和菓子のため! その為に墜ちる織斑一夏!」

「全部台無しだ!」

4 門同時射撃。そしてその連射を空中から放ちながらそんな言葉を投げられて、一夏は思わずツツコミを入れながらそれを全力で回避した。

それぞれの理由がある戦い。そのうちの第一戦が、開始された。

愛しき想いよ、さようなら

「いやあ青春してますねえ、私こういうの大好きです。というか今回のトーナメントなんて青春バトル物そのものじゃないですか？あつても個人的に一番嬉しいのはリイスの変化だったりしますが」

第三アリーナ管制室。そこには本来なら居ない姿が存在する。クロエと、そして清香だ。何故この二人がここにいいのかと言えば理由がある。それは大体、千冬のせいである。

以前、何度かクロエに対して千冬はデータの採取などを依頼したことがあった。そのせいでクロエ自身の本来の才能、というのが学園全体にバレることになった。篠ノ之束に娘同然に育てられ、その元で直接ISについてや多くのことを教えられて育つたのだ。無論篠ノ之束に育てられたということは一部の人間しか知らないが、その才能は隠せない。彼女の才能に目をつけた整備科の生徒や教員に以降絡まれるようになり、頻繁にこのような手伝いをしている。これについて、本人としては別に嫌ではないようだ。むしろ、楽しんでやっている節もあるくらいである。

清香が居るのにも理由がある。そしてこれについても、クロエと似たような理由ではあるが。清香は国家ⅠS整備技師資格二級という、ⅠS業界ではとてつもなく凄い資格持ちである。そして彼女の才能についても、整備科からこれまた目をつけられていた。彼女の機体メンテナンスに関しての能力はとてつもないもので、本来一日かかるものを数時間でやつてのけたり、メンテナンス時にデータ解析と同時に作業をやつたりとんでもない才能の持ち主なのだ。そして、彼女はリースの専任整備士でもある。そのことからクロエ共々、一緒によく駆り出されるのだ。

学園では一年のこの二人のことを、情報のクロエと技術の清香と呼ばれ将来有望。絶対に整備科に来させると心を決める先輩生徒達がいるとか。

「まあ織斑君がリースに告つた時はびっくりしたね……何も進展なかったからそのままかなって思つてたら、まさかの」

「織斑さんは男見せましたよ。不肖このクロエ、思わず惚れそうになりましたもの。惚れませんか?」

「知ってる。というか、クロエは昔からリースと知り合いなんだよね? どんな感じに変わつたか聞いても?」

その質問に対してクロエは若干迷つたようにして、投影キーボードを叩きながら言葉を返していく。

「そうですね。極端に言えば、リイスは誰も信じてないんですよ」

「誰も信じてない？」

「言葉通りです。彼女のお義父さんも、周りの友人も。そして私も、信じられてなんて居ないんです。ああ、誤解しないで下さいね？人に対しての信頼、という意味ではなくて根本の問題なんですよきつと」

「……えつとつまり、自分以外誰も信じてないってこと？」

「大体は。リイス、いつも一人なんです。一人でなんでもやろうとして、抱え込んで、それをバレないようにして。……そんな弱音を誰にも打ち明けないんですよ。それって、他人は信用されてないってことじゃないですか？」

クロエは投影キーボードを叩きながら、モニターに目をやる。そこには既に試合を開始した一夏達の映像が流れており、それを見て苦笑した。

「けど、そんなリイスがIS学園に来て少し変わったんです。雰囲気も落ち着いたようになって、よく笑うようになって。そして……本人気がついてるのか知りませんが、少しづつ他人に心を許すようになったんですよ。私、凄く嬉しかったですよ」

「その言い方だと、まだまだ問題があるように聞こえるけど」

「ありますよ。だって、リイスはまだ誰にも心を許してないんですから。弱音は誰にも言わない、辛いことは、苦しいことは全部抱え込もうとする。……きつと、言わない

だけで織斑さんのことだって、悩んで。また無茶してるに決まっています」
だから、とクロエは言った。

「私は、リイスに負けてほしいと思つてます。そして織斑さんの言葉がどうかリイスに届きますように、そう思つてます」

ふと、清香に対してこぼしたその言葉はきつと彼女の切なる願いだった。

「くっ……やり辛い！」

レールカノンと高射砲。合計4門の連射砲撃を受け、それを回避しながら一夏はぼやく。

加速し、風を切り、空中の特定の位置で固定状態になりながら砲撃を放ってくるラウラに対して接近を試みる。だが、

「やせん！」

「また箒か！一々カバーが的確すぎんだよ！」

ラウラへの一閃。それを阻むように箒が前へと出て”鞘ごと”で雪片を受け止めた。その動作が何を意味するのかを一夏は理解していた。だからこそ、そのまま無理に踏み

込まずに下がることを選択した。

それは正しい選択だった。次の瞬間、それまで一夏がいた位置には『ブオン』という無理に風を切ったような音が響いたのだから。雪片を受け止めた鞘、そこから引き抜かれた長刀での一閃だ。

「……なんでその技術を、なんて聞くのは野暮だよな?」

「ああ。もしかしたらお前も千冬さんから教えてもらっているかもしれないな? ——
元々これはうちの流派の技術だ。私が知らない訳がないだろう?」

「だよな、つと!」

箒がやっているのは一種のカウンターだ。相手の攻撃に対して反応し、その動作の硬直に対して致命打を入れるカウンター。篠ノ之家とは、束が有名になりすぎていて忘れられがちではあるが元々は名のある剣術道場だ。その技術は先祖代々受け継がれる程の。箒もまた、その家系の1人であり継承者でもある。篠ノ之流という剣術について皆伝しており、その技術は剣技というだけで見れば日本有数と言っている。

そして、一夏や千冬もまたこの道場の門下生でもある。千冬の技術の多くは篠ノ之流という剣術をISに応用したものであり、それによって最強の座まで上り詰めた。一夏はその千冬を師とし、技を教えてもらっていた。それはISを使つての技術であり、かつて世界最強にまで上り詰めた技術だ。しかし、それを幾ら応用しようと、ルートは同

じ。篠ノ之流である。つまり根本は変わらず、その千冬の技術に似たようなことを箒も再現できるのだ。

「とうか、俺が言うのも何だけど本当セコいよなそれ！ 防御してるのにシールド減らないんだからさー！」

「負け惜しみか一夏？ ……実は私もちよつとセコいとは思ったが」

この試合三回目。どこかから声が聞こえた気がした。今度は管制室からのものであり、それを宥める生徒の声も聞こえた気がした。

競技ルールにおいては、様々な特殊ルールが存在する。そのうちの1つが、防御しても減衰を適応したダメージがシールドから差し引かれるというものだ。しかし、例外という穴がある。それは”防御した場合”であり”弾いた”場合は減衰が発生しない。箒は一夏の攻撃を鞘で受け止めて、刀で反撃した。これは判定上防御機構での防御ではなく武器で弾いたという判定となり、シールドが減衰されない。

一夏が撤退したのを確認して、それに合わせるようにしてシャルロットが前に出てきた箒へと弾幕を形成しようとした。が、

「その武器は邪魔だな、うむ」

「なッ……ワイヤーブレード!? こんな距離まで!?!」

銃を構え、撃とうとした瞬間。シャルロットに対して高速で迫る存在があった。それ

はラウラの機体「レギオン」の肩と腕部から放たれたワイヤーブレードであり、射撃の際に視界に箒を捕らえていたシャルロットはそれに反応できずに居た。

結果として、ワイヤーによって両手に構えていたガラムを捕獲されることになる。捕縛され、それは空中へと投げられるとワイヤーブレードによって切断された。

「まずは2つだ。さて、後どれだけ残っているシャルロット」

「——なるほど、僕を直接狙わなかったのはそういうことか」

ラウラの狙いは、射撃体勢に入つて隙が出来た彼女ではない。彼女よりもつと優先すべき攻撃対象がいると判断したからだ。

それは武器。シャルロットの持つ武器だ。ラファール型の最大の特徴は大容量の拡張領域にある。そこに事前に武器をインストールしておくことで、自由にその武器の展開と収納が可能になる。どんな状況においても一定水準以上の動きができるようになるための仕様だ。

そして恐らく、彼女の三世代機「ウエンティ」も機体データから見てもそれを継承している。ラウラは考えた。三世代機にしてラファール型の特性を受け継ぐというのは敵にするとともて厄介。故に、その特性を最優先で潰そうと考えた。

限界があるのだ。記憶できる武器や兵装には。無尽蔵に武器を格納できるわけではなく、機体のキャパシティや競技ルールにおいての制限。それによって保有できる武器

は多くても10種類程度。つまり、シャルロットの機体もこの試合形式ではその莫大な記憶領域を完全に活かせないのだ。

「確かに速い。速く、そしてお前からの伝達速度もほぼラグがないのだろう。攻撃が的確で全く武装の展開や収納にラグがないことからそれは理解できたよ。ああ、とても驚異的だ。1人で全ての戦況に対して的確な対応を可能とする機体なのだから。だが、」

ラウラが右腕を前に出して、それをシャルロットへと向けた。距離にして中距離。つまり——ラウラの射程内だ。

「動けないっ……AICか！」

「先に休んでいるといいシャルロット。何、痛くはないから安心しろ」

「それ凄く誤解されそうな発言だから言葉選んで—— ああもう！一夏！」

AICで動きを封じられ、ラウラから4門の砲塔を向けられた状況。普通に考えればこれはほぼ詰みである。AICにより動きを完全に封じられ、その状況では武器の展開もできない。だが、そんな状況で彼女は笑っていた。

それを不審に思い、ラウラは警戒を強める。そして、大至急シャルロットを落とさなければという結論に至り、空中で動きを止めてレールカノンをチャージし始めた。

「待ってたぜ、それを！」

声が響いた。それは一夏からのもので、彼は戦っている筈を専用機と量産機の出力差で無理矢理押しつけると、本来彼が持たない物を展開した。銃弾が連射される音、それが一夏から響いた。それに対してラウラは驚くしか無かった。

白式には遠距離武装が搭載されていない。にも関わらず、ラウラが聞いたその音は間違ひなく銃声。そして、それにより驚いてしまうことでAICを解除してしまった。

ラウラの専用機、レギオンには弱点が幾つかある。どうしようもなく、仕様上仕方のないといつていい弱点が。それが重武装である。レールガン2門に高射砲イグニスがあれば連射砲撃ができない。だからこそラウラは、開幕からずっと筈の後方。一夏達から見ても常にバックアタッカーの位置を保ち続けていた。砲撃兵器を展開しなければ高機動型としての動きも可能である。レギオンにはワイヤーブレードにプラズマ手刀も搭載されているのだから。

しかし、この試合においてそれは悪手になる。筈は完全な近接型であり、相手チームの一夏達も近中距離の構成。この状況で自らも火力の低い武器を持って近接戦闘行くのは愚策だった。だから、ずっと後衛に回った。

それが裏目に出た。重武装を展開したままでの不意打ち、それに対してラウラは見えていても機体の反応が追いつかなかった。結果として一夏が放った銃弾の全てを直撃

として受けることになる。

「やっぱりな」

一夏が笑った。それは、あることを確認したからだ。

「ラウラ、お前のその中距離まで届くA I Cは確かに驚異的だ。捕まったら身動き取れなくされて、そこに砲撃ドン、だもんな？」

「……ふん、言いたいことがあるなら言えばいいだろう織斑一夏」

「そのA I Cは連射できない」。そして発動には莫大なエネルギーを消費する、違つか？」

開幕でシャルロットの弾幕を止め、先程もシャルロットの動きを止めた。そして、試合開始20分が経過する現在までラウラがA I Cを使用したのは全部で3回だけ。流れ弾やラウラに対しての攻撃の多くは箒がフォローに入るか、彼女自身が無理矢理防御していた。もし、無尽蔵にA I Cを撃つことが出来るなら物理兵器しかないこの場においてまさに無敵の筈なのだ。にも関わらずそうはならない、むしろラウラは極力A I Cを撃ちたくないように立ち回っている。

その違和感に一夏は途中で気がついた。だからこそ試合中何度もシャルロットに頼んで箒とラウラ、交互に対しての制圧射撃を頼んだ。結果としてラウラにもシャルロットの専用機の弱点に気が付かれてしまうことになったが、一夏は確認を得ることが出来

た。

「中距離に対してまで届くA I C展開能力。それを無尽蔵に撃てるなら対物理兵器最強のはず。にも関わらずお前は最初から撃ちたくない、というように動きをしている。そこから考えれば予想はつくさ。お前、シールド残り少ないだろ」

「……ふん。さて、どうかな?」

ブラフだった。実際にラウラのシールドは開幕830と他の機体より遥かに多い数値だったのにも関わらず現在は300。既に半分を切っており、その多くの消費原因が砲撃とA I Cによるものだ。それを見透かされないように最初からラウラは常に後衛に専念した。が、それもバレてしまった。

それを予想したからの一夏の行動と指示は早かった。

「シャルロット!」

「任せてっ!」

A I Cの拘束から開放されたシャルロットは、再び両手にアサルトライフルとショットガンを展開。そのうちアサルトライフルのほうをラウラへと連射した。結果、アリーナの空での戦況は2つに分断されることになる。一夏と箒、シャルロットとラウラ。ふたつの戦場が出来上がった。

「ちっ……!分断されたか!」

「君の相手は、僕だよ」

「……不本意だが、いいだろう。だがシャルロット、お前の武器は後何本だ？ 既に3本は見ているぞ」

「——さて、何本かな？ 悪いけどまだ弾切れじゃないよ」

「生憎こちらはまだ弾はあるのでな —— すまない箒！ 後は頼む！」

逆側の空。そこで一夏と対峙する箒に対してラウラは叫ぶ。それに対して箒は返答として、力強く頷いた。

ラウラはシャルロットと対峙し、展開していたイグニスを解除すると不敵に笑い、何かの真似をするように言った

「見せて貰おうか、フランスの第三世代とやらを」

「それ、赤い人の台詞だからラウラが言ってもあんまりあつてないと思う……」

『なんと!』とラウラは驚く。それを見てシャルロットは既に何度目になるのかわからないことを思う。ドイツは一体どうなっているのか、と。

黒と橙の射撃戦が、開始された。



ラウラとシャルロット。二人の戦いが開始されたのを確認した俺は、再び対峙し箒と

視線を交わした。雪片を正眼に構え、対しての箒は長刀を鞘に入れたまま腰に。だが、右手はその柄を握っていつでも抜刀できる態勢。

「こうして試合をするのは、いつぶりだろうか一夏」

「多分小学生の時以来だ。あの頃は一度も箒に勝てなかったな、俺」

昔を懐かしむように言われた言葉で思い出すのは、小学生の頃の話だ。

あの頃俺は、箒が虐められているのを助けたのを切っ掛けに箒と知り合った。そして、それから篠ノ之神社によく行くようになり、今は行方がわからなくなっている柳韻さんに剣道を習うようになった。

懐かしい、思えば全てが懐かしかった。剣道を習い、束さんと出会い。本当にいろんなことがあったと思う。

「私に負けてはいつも悔しそうにしていたな、一夏は」

「そりゃ悔しいだろ。だって、俺男だぜ？ 勝負するなら勝ちたいに決まってる。だからあの頃、ただ悔しかったさ」

「……何度も何度も私に挑んできたのをよく覚えてるぞ。負けても、ヘトヘトになっても。何度も何度も挑んできては、私に負けていた」

「うっ……結局、そのまま箒が転校することになって一度も勝てなかったな、俺」

「私の勝ち逃げだな？ けど——そうやって何回も立ち上がるうとする一夏を見て、

かっこいいと思ったよ」

「そう思ってくれたなら嬉しいな。男としては、ダサいの一言だったんだが」

「そんなものなのか？」

「ああ、そんなものだ」

ISの事があつて。それで箒は転校することになってしまい、学園で再会するまでは疎遠となつてしまう。結局、一度も勝てなかつたな。けど……それは、今までの話だ。

「けど、」

「む？」

「もう負けない。俺は、お前に勝つよ箒」

あの頃、弱い自分が嫌だった。千冬姉に憧れて、強さに憧れて。同じ年齢で自分より遥かに強い箒に憧れて。強くなりたかつた。強くなって、何もかも守れるくらいの力が欲しいと望んでいた。

「ただどそれは、今までの話だ。俺は——誰かのためにではなく、自分の為に。自分が”誰か”を護るための強さがほしいのだ。」

ここで負けられない。俺には、絶対に勝たなければならぬ相手がいるんだ。とんでもなく強くて、だけど自分に対して嘔吐きで、意地っ張りのあいつに。

「私は、小学生の頃のがむしゃらな一夏に心惹かれた。そして……学園に来て、ただひた

すらに抗おうとするお前に、もつと惹かれた。けれど、お前には私ではない誰かがもう心の中に居たんだな」

「……すまん」

「謝るな一夏。私とて、ケジメをつけにきた。だから、言わせてくれ——好きだったよ一夏」

箒が姿勢を低くして構えるのが見えた。その目はただ俺を捕らえていて、どこか泣きそうだった。

「……ありがとう、箒。俺を好きになってくれて。それと、ごめん」

「もう、言葉はいらぬ。この試合で全部終わりにしよう」

「ああ、全部終わりだ。箒」

「——伝えたい気持ちがある相手がいるのだろう。なら、私くらい倒していけ。往くぞ」

そんな言葉とともに箒が踏み込んできた。

箒の機体は打鉄のカスタム機。機動力では白式に劣り、出力でも劣る。

しかし俺は、その打鉄から繰り出された一閃を受けて大きくのけぞることになった。

「ツ……重いな！」

その一撃が重い原因はひとつ。箒のあの構えだ。抜刀術と、その弱点を補うための太

刀筋。篠ノ之流のルーツは俺も聞いたことがある、『最大の力を最高の速度かつ最善のタイミングで繰り出す』というものだ。

だからこそ、その抜刀されての一撃はとてつもなく鋭く重い。専用機と量産機であったとしてもこれだけの衝撃なのだ、これが専用機同士と考えるとぞつとする。

踏み込まれ、そして下がった俺に対して更に踏み込まれる。このままでは一方的。だから、

「おお……ッ！」

ガキーン、という鈍い音が聞こえる。それは俺の雪片と箒の抜刀された長刀がぶつかる鈍い音。鏝迫り合いの状況に持ち込み、そのまま専用機の出力で無理押ししていく。

抜刀の一撃はとてつもなく鋭く、驚異的だ。ISに乗って尚その技術を再現する箒は、やはり剣道において全国最強というだけあると思う。俺が今恐れるのはその抜刀術だ。そしてその技術は、俺も知っている。だからこそ——対策が取れた。

剣を抜かせればいいのだ。抜かせてしまえば立て直すまで抜刀術は使えない。

「くっ……出力差が！」

「卑怯、とか言うなよ箒？」

「誰が言うか、馬鹿者」

箒の鞘は左腰に固定される形で構えられている。そして、姿勢を低くして右手が柄に

添えられている。なら、無理矢理な態勢に持ち込んで左からの攻撃に移せばいい。そうすれば、箒は刀を抜かざる得ない。抜かなければ雪片の一撃を貰うからだ。

だからこそ無理矢理抜刀させた。そして、もうこれ以上鞘には刀を戻させない。そうすれば、またあの鋭い攻撃が飛んでくる。何度も雪片の斬撃を箒へと繰り出す。休むことなく、無理矢理距離をとられそうになってもそうはさせず、ただ連続で斬撃を繰り返す。

しかし、雑な一撃ではない。その一撃一撃には意識を集中させる。俺だつて篠ノ之流という剣術を習っていた人間だ。だからこそ、その極意は知っていた。疾く、鋭く。それを意識した連撃。重さを捨て数を増やし、鋭さを追求した剣技——それが、俺が千冬姉から教えてもらった技術の1つだ。

「つあつ——」

何度ぶつかつたかはわからない。その中で、箒が苦悶にも似た声をあげて、体勢が崩れた。それを見逃さない。すかさず踏み込んで、下段からの切り上げ。それによつて箒の長刀を弾き飛ばした。

「しまつ、」

「——終わりだ、箒」

弾き飛ばされた刀に対して箒の注意が逸れた。それは、きつと数秒の時間。けど、こ

の距離でならそれは十分過ぎる時間だ。

そのまま俺は、白式の単一仕様を発動させる。発動すると、すぐさま雪片の刃が変形して光の刃が形成される。

「……見事だ一夏。流石、私が好きになった男だ」

零落白夜が発動している雪片をそのまま振りかぶり、無防備になった箒へと振り下ろした。そして、振り下ろす直前に聞いたのはそんな言葉で、箒は——笑っていた。

『篠ノ之箒、打鉄、シールドエネルギーエンプティ！ 及び、シャルロット・デユノア
 ”ウエンティ”、ラウラ・ボーデヴィツヒ”レギオン”共に戦闘継続不可能！ よって
 一回戦第1試合、勝者織斑一夏&シャルロット・デユノアペア！』

◆ ◆ ◆
 試合終了後、一夏は箒に話をしようとした。

何を話せばいいのか、なんてことはわからなかった。けど——もう一度ちゃんと話せばと、そう思った。だが、それは叶わなかった。第二ピットゲートの選手控室。そこにシャルロットと共にいくと、そこに箒の姿はなくラウラの姿だけがあった。箒は何処に行ったのかと、慌てた一夏に対して言葉を投げたのはラウラだった。

『織斑一夏、箒から伝言がある』

『箒から?』

『少しだけ一人にして欲しい、だそうだ。少々疲れていたようなのでな。私からも今は箒を休ませてやってほしい』

『……そっか。わかった』

『先程の試合、いい戦いだっただ。シャルロットとの戦いが不完全燃焼なのは不満だがまあいい。——さて、』

『何だよ?』

『私の勝手と八つ当たりだ、許せ』

パンツ、という乾いた音が木霊した。それはラウラからのものであり、小さな手で頬を叩かれたのは一夏だ。

『これは、私の分と箒を泣かせたお前への八つ当たりだ』

『——ああ、すげえ重いなそれは』

『私は敗者であり、お前は勝者だ。……だが、敗者の私から貴様に頼みがある』

『頼み?』

『姉様に勝ってくれ。箒を振って、私にも勝ってみせたのだ。……だから、少しだけ

私も期待させてくれ。姉様を、倒してくれ』

ラウラから出た言葉に対して一夏は驚くしか無かった。ラウラはリイスを敬愛しており、同時に強者でもあると思っっているのだ。そんな彼女からでたのは「リイスを倒してくれ」という頼みだった。その言葉に驚いている一夏に対してラウラは続けて言葉を投げた。

『……姉様には、必要なのだ。頼れる誰かが。私ではそれになれなかった、頼って貰えなかった。だから織斑一夏、お前に託す。お前の、可能性に』

それだけ言うとなら『さて、私は箒のところに行く』とだけ言っただけで控室を出た。一夏は思う。重い物を託された、と。だが——それは当然だとも思った。自分はそうするために此処に居るのだから、倒すべき相手がいるから此処に居るのだからと。

トーナメントは順調に過ぎていく。リイスとマドカのペアは丁度トーナメント表で言う反対位置であり、もし闘うとすれば決勝だった。一夏とシャルロットも順調に勝利を重ねた。重ね、そしてたどり着く。

個別トーナメント一学年タッグ部門、それももう大詰め。決勝戦と表示されるカードに表示されていたのは『織斑一夏&シャルロット・デユノア VS リイス・エーヴェルリツヒ&東雲マドカ』という文字だった。

平行線上の想い人

時刻は既に夕方。個別トーナメントの中には数日掛けて開催されるものもあるが、一学年生のタッグ及びトリプルス部門のトーナメントは初日で終了する。1週間も掛けて行なわれる理由、その多くは2年生と3年生の評定の為だからだ。故に、一学年は初日で終了。

これについて一学年生はとても楽だとかで歓喜の声をあげていたが、上級生は違う。『ああ、自分も一年の時あだったな』などと考えつつ残り6日間あるトーナメントや評価のことを考えつつげっそりしている。そして同時に思う、来年からはお前達の番だぞ一年生と。

そんな一学年生のタッグ部門は現在盛り上がりを見せていた。決勝戦は一夏シャルロットペア対リイスマドカペア。一夏のチームは初戦からラウラのチームと当たり、最終的に勝利したことで注目を増した。

ラウラはドイツの代表候補生、更に言うならシャルロット共々新型機を持ち出している参戦となり初戦から激闘を演じた。その様子に観客の多くは息を呑み、中にはドイツに對して恐怖した人間やデユノア社との再契約を考えた人間も居たとか。

その後も息の合ったチームワークで順調に勝利を重ね、決勝へと上り詰めた一夏達。一夏は男性操縦者であり、短期間で代表候補生にまで匹敵する成長ぶりを見せ、同時に努力も知られている。だからこそ各国関係者の注目は増した。

対して、リース達のチームの注目されていた。一回戦を開幕2分以内に”両機撃墜”という形で勝利を収めたことで、観客を驚かせた。それだけではなく、決勝戦まで全ての試合を5分以内に両機撃墜という形で勝利しておりマドカとリースのコンビネーションも完璧といつてよかった。観客からはリースについてドイツの代表なのではなどと噂されたり、マドカに対してブリュンヒルデの再来とまで称された。

実力的には圧倒的な力を見せているリースペアが優勝だと言われた。しかし、観客の中には一回戦であれだけの活躍を見せ、短期間でこれだけの成長を見せた一夏のペアの可能性もあると意見が割れ、決勝戦は特に注目されていた。観客についても一回戦の時点でまだ多少空きがあった自由席や来賓席も詰めなければ座れないというほどに人が集まっており、会場に入れなかつた観客は臨時で設置された外にある大型モニターでの観戦となった。

この戦いは一夏にとつても、リースにとつても大きな意味があつた。一夏はリースを倒して、自分を認めさせるために。話をするために。リースは一夏を拒絶するために。自分に関わらないようにさせるために、もう自分の都合に巻き込まないようにするため

に。

一夏の受容と、リイスの拒絶。正反対の二人の決着の時が、遂にやってきた。

「……本当、ここまで来るなんてね」

第一ピットゲートの選手控室。モニターに表示される対戦カードを見ながらそんなことを呟いた。日本には有言実行、という言葉がある。正直に言えば私は、一夏ではウラ達には勝てないと思っていた。

一夏の才能と成長速度は天才を通り越して異常だ。たった数ヶ月で代表候補生とともに戦えるくらいに成長するなんて言うのは、普通に考えればありえないことだ。

けど、ウラは候補生の中でもかなりの異質。その才能、技術、何より軍での実戦経験。他の候補生にないものをあの子は持っていた。にも関わらず、結果として負けてしまった。試合を見れば一夏とシャルロットの作戦勝ちだった。

今回のトーナメント、出場している生徒の多くはレベルが高い。にも関わらず一夏は、ここまで全ての相手を倒して決勝まで登ってきてみせた。”絶対に負けない”、大会前に他の生徒に対して言ったように、本当にここまでは負けずにいるのだ。

けど、それもここまでだ。……私は、一夏に勝つ。勝たなきゃならない。一夏がこれ以上私に関わることに、それは亡国機業や世織計画。そして——私の醜い復讐に関わることになる。

そんなことはさせちゃだめなんだ。彼は織斑一夏。世界唯一の男性操縦者で、こつちの世界とは関係のない普通の世界で生きている人なんだから。鈴に言われたあの言葉。人を好きになるとか頼るといふことを考えてみるという言葉を自分なりに考えたけど、まだ答えは出ていない。

一夏に告白された時、感じたことがない気持ちがあった。それは嫌なものではなくて、どこか安心するようなものだった。けど、私はそれを殺した。それを受け入れてしまおうと一夏を巻き込むと思ったから。

——本当の、復讐をしたいと望む私を彼に曝け出すことになると思ったから。

「さて、どうするリース」

「決まってる。全力で、完膚なきまでに叩き潰す。……二度と起き上がれないくらいに、あきらめがつくくらいに」

「——ふむ。もう一度聞くぞリース、いいのだな？」

それはきつと、一夏についてだろう。私はこれでいいと、最初から決めている。一夏が自分から言い出したこの勝負。これに一夏が負ければ大恥であり、きつと私に関わっ

てくることはもうないだろう。だからこそその全力。私の今出せる全力を以て一夏を墜とす。私の想いとか気持ちの問題ではない。大事なのは、私とこれ以上関わることによって生まれる問題だ。

”巻き込みたくない。関わらせたくない”。だから、私は――

「……愚問だよマドカ。最初から答えなんて、決まってる」

「そうか、わかった。――だが、問題があるな」

「シャルロットの専用機？」

シャルロットの専用機、フランスの第三世代型IS”ウエンティ”。そのスペックデータを一回戦でマドカは確認して苦い顔をしていたのを思い出す。想定していたより遥かに分が悪いのだ、マドカとシャルロットでは。

機体上の話をするならマドカの黒式のシールドエネルギーは400。対してウエンティが520。ラウラのレギオンは大型ジェネレーター搭載の重量機ということもあって830という破格のシールド値を保有しているがあれは例外。黒式は性能の殆どを攻撃と機動力に回しているため、シールド値がほぼ最低値の状態である。実戦ならともかくとして、多くのルール下でシールドの減衰という概念が存在している中でマドカはかなり不利なのだ。

防御してもシールドが減る、かといって無理に加速してもシールドが減る。当然なが

ら攻撃を受けてもシールドは減る。減衰というルールの中ではマドカは致命打になるようなダメージは一度たりとも許されない。だからマドカはここまでの試合、”被弾を一度もしていない”。全てを技量で回避し、黒式の持つ”雪片式型・天”で切り伏せてきた。

「個別トーナメントの競技ルール上、最大で持込可能な武装はジェネレーターや外付け等を除いて全部で10種類まで。そして恐らく、一回戦を見る限りウエンティには上限までの武装が搭載されている可能性が高い。……ここまでの試合で確認できた武装はまだ4種類だ、何を隠しているのかわからん」

「マドカの黒式はビーム系の攻撃に対しては反則染みた性能だけど、物理兵器にはあまり強くないもんね」

「ああ。今まではリヴァイヴや打鉄だからなんとかあったが……今度は専用機だ。今までのようには行かず予想より相性が悪い。恐らく何か隠し玉があるのだろうが、それすら見当もつかない」

「……どうする？ 私にシャルロットの相手しようか？」

それは私にとってある種の提案だった。勝つために提案した、作戦。マドカとシャルロットの相性は最悪だ。だからこそ私が彼女の相手をすればいいと考えてのことだった。

「——いや、リイス。お前は織斑一夏と戦え」

「でも、相性面で問題が、」

「そういう問題じゃない。……勝ち負けの問題じゃない、ちゃんとお前は奴と決着を

付けてこい」

「っ……」

「お前も奴も、そのためにここにいる。結果はどうなれ、ちゃんと相対すべきだと私は思う。お前は、勝負を受けたのだから」

マドカの言いたいことは理解できた。相性の善し悪しに関係なくシャルロットは自分がなんとかするから、一夏との決着を付けてこいということだろう。彼女は『任せておけ、私を誰だと思ってる?』といった後に言葉を続けた

「さて、最後の確認だ」

「……確認?えっと、作戦の?」

「そうじゃないさ。作戦なら最初からあつてないようなものだろ。近づいて斬る、対戦相手は叩き落とす。——もう一度聞くぞ? 個人的な想いだけではお前はどっと思ってるんだ」

「だから、私は——」

「真剣に答えろ。……それによって、私は覚悟を決めなければならん。リイス、織斑一

夏が好きか？」

返答できなかった。なぜなら、どうしたらいいのかわからないからだ。個人的な想い、それだけで言うとうすぐには返答できない——だって、

「私は——」

マドカに対して返答を返した。それに対して彼女は満足気に笑うと『わかった』とだけ言うて

「……シャルロットは任せろ。だからお前は、全てに対しての決着を付けてこい。何、私もフリーパスのために精々頑張ってみるさ」

そう、返した。

第三アリーナの観客席。既に入り口には『満員』と表示された電光掲示板が設置され、会場内部にも立ち見が出るほど人が溢れかえっていた。

決して他学年の競技に人が居ないわけではない、実際楯無が出場している二年生の競技部門のトーナメントも似たような状況であり、来賓関係者の多くは三年生の競技会場に居る。

一年生の第三アリーナは特に注目されている、というのもあったが別に理由もある。

既に競技を終えた一年トリプルス部門の出場生徒やその会場の観客がこちらに流れてきたのだ。多くは来年IS学園を受験しようと考えてる学生であったり、その保護者であったり。また、外国からIS学園を志望する生徒やその保護者も一年生はどれだけのものなのか、という興味本位で流れてきているのだ。

そんな満員の会場。学園関係者席には数人の影がある。鈴とセシリア、そして彼女達とトリプルスに出場した簪だ。

「うひゃー……すっごい人、癒子達に席譲ってもらえてラッキーだわこれ」

「入り口にも人が溢れかえっていましたから……反対側の一般席を見るととんでもない人ですものね」

「あたし、学園生徒でよかったと今思った。——ああ簪、これお茶。あたしの秘蔵品だからありがたく飲みなさい！」

手持ちのスーパリーの袋から取り出した一本300円もするお茶。『厳選茶葉100%ま口茶』のペットボトルを取り出すとそれを簪に渡す鈴。セシリアは受け取っていない。本人曰く、どうしても緑茶の苦味にまだ慣れないのだとか。だから会場に来る前に学園内にあるカフェでアイスマルクティーを購入してきている。

「あ、ありがとう鈴……」

「いいのよ。しかし簪、あんた本当に勿体無いわ。——倉持は何してんのよ本当」

「鈴、そのことはもういいよ。……私は、自分でISを組み上げるって決めたから」
鈴達のチームは一夏達と同じ時刻から開催されていた一学年個別トーナメントトリプルス部門にて優勝を既に収めている。決勝のチーム、一組の鷹月 静寐、四十院 神楽、夜竹 さゆかのチームには独特の作戦を取られてかなりの苦戦を強いられてしまつたが最終的には勝利。そのトリプルス部門において、本来専用機保有者である簪は諸事情から射撃型の打鉄で出場している。

これには複雑な事情がある。彼女の専用機は元々日本のIS開発研究機関『倉持技研』が行うはずだった。が、その開発は無期延期となつてしまふ。日本政府が男性操縦者である一夏を発見した当時、専用機を作らせるために無理矢理倉持に依頼をしたのだ。倉持も予算は日本政府から出ているということもありそれを断れず了承。また、開発中の第三世代よりも男性操縦者のデータと、その専用機を天秤にかけた場合後者のほうがメリツトが大きいと判断したのだ。

これについて倉持技研の第一研究所所長に若くしてなつた『倉持 玲奈』は簪の専用機を担当していた第二研究所の『篝火 ヒカルノ』に対して尋常ではない怒りを露わにした。”人の期待を背負っておきながら金とデータに欲が眩んでましてや開発延期とはどういうことか”と。最初は簪の専用機開発を玲奈が引き継ぐという話も出たが、それも結局揉めているうちにやらせてもらえないこととなつた。

「それに、玲奈さん。倉持の第一研究所所長の人にはすごくよくしてもらってるから。私の専用機についてもすごく謝られて、個人的に開発支援してくれるって言ってくれて。むしろ私は倉持、というよりは玲奈さんには感謝してるよ」

「でも、あんたは自分で組み上げたいんでしょ？ ……あんまり理由、聞かないほうがいいわよね」

「ごめん。強いて言うなら、私の意地なのかな——コンプレックス、というか」

どこか寂しそうに言う簪を見て鈴はそれ以上聞かなかつた。ただ一言『がんばりなさいよ』とだけ言葉を返すとアリーナの大型モニターに表示されているトーナメント表に目を向ける。

「一夏とリース、か。本当どっちも不器用よね」

「……私、四組だからよく知らないんだけど織斑君とエーヴェルリツヒさんって、なんか似てるなって思う」

「簪、それはきつと一組の殆どが思ってることよ。あたしも二組だけど一組にかなり毒されてるし、あんたもこっち方面の人間だったのかもね」

「凄い不名誉なことを言われた気がするんだけど、気のせいだよ」

「気のせいよ。まあ——似てるわね、あの二人は。ねえセシリア？」

不意に話題を振られ、アイスミルクティーを飲んでいたセシリアは少し呆けた後に慌

ててその容器を置く

「そうですね、似ています。ですけど……その根本が全く異なるようは私は思いません」
「根本？ えっと、それは何？ セシリア」

「私、これでも人はよく見てますのよ？ 一夏さんは、周囲に対してよく頼んだり、助けたりしています。努力にしても勉強にしても、些細な事にしてもそれが必要なら誰かに対して”協力してくれ”とか言いますわ」

「それって、普通のことじゃないのかな」

「ええ、そうですねよ簪さん。ですが——リースさんは、ほぼそういうことを言わないんです。弱音を吐かず、他人に対して頼ろうとしない。全部自分でやろうとして、迷惑かけないようにしている。……バレバレですわよ、本当。私達ってそんなに信用ないんじゃないか」

リースのその根本。誰かに頼らず、全部一人でやろうとするというのは本人は気が付かれていないと思っているが、周囲の。特に親しい人間にはバレバレだった。他人に対して弱みを見せない、頼らない、相談しないというのは完璧主義者の特徴だ。そしてそういう人間のは多くは、無理をする。

リースはその典型だった。3年間、誰にも頼らず生きてきた。両親を亡くし、復讐のためだけに生きて、生きるために何度も手を汚した。その結果として彼女は慣れた。そ

の完璧主義に、自分を殺すことに。そんな生き方が変化したのはIS学園に来てからだった。学園に来て、友人が出来た。仲間ができた。幸せというものを噛みしめることが出来た。それは、幸福なことなのだろう。しかし、同時にそれは彼女のその根本を変化させた。

『迷惑がかかるから絶対に頼つてはいけない。必要以上に自分に関わらせてはいけない』そんな考え方が生まれてしまった。そんな姿を他人が見ればどう思うのか、きつと信用されていない、と思うだろう。

だからこそ、セシリアも鈴も腹がたつていた。特に鈴としては、あれだけ言つてもまだ無理をしようとしているその姿を見て、本当なら叫びたい気持ちだった。そんな中で、一夏が行動した。告白という行動を。結果としてリースの心はそれで動いたのだ。だから——期待していた、誰もが織斑一夏という人間を。

「だから、あたしは一夏とリースはさつきとくつつけばいいと思ってる。一夏が勝つてリースが負ける。そしてリースが一夏の言葉にもう一度耳を傾けてくれたら、それでいいと思ってるわ」

「でも、エーヴェルリツヒさんって相当強いんだよね？ ……それに、東雲さんも」「ぶっちゃけ一年生最強の二人よ？ 対単体ならマドカ最強、対集団ならリースが最強。その二人が組んだんだから相当に凶悪よ」

「その、勝てるのかな？ 織斑君達は」

二人を知る生徒からすれば、この二人に勝つなんてことは普通に考えれば一夏達には不可能だ。技量だけなら既に千冬に及ぶとまで言われているマドカに、対単体・対集団共に高水準の才能を持つリース。二人が組んだ時は実際に『ムリゲー』などと抗議が出たほどで、その実力は学園内部でも最上位とまで言われた。曰く、この二人を倒そうと思つたら楯無とサラ・ウエルキンのペアを連れてこいと言われるほどだ。

楯無とサラ・ウエルキン、サラは二年生においてチームを組んでいる。そして名実ともに言われているのが『学園最強タッグ』というものである。楯無の実力は周知の事実であるとおりに、学園最強の実力者であり生徒会長。同時にロシアの代表操縦者でもある。しかし、二年生のサラについてはあまり知られていなかった。

サラ・ウエルキン。IS学園二年生であり、イギリスの代表候補生。専用機は保有しているが、諸事情で使用していないため影も薄い。彼女が知られることになったのは楯無が一年生の時。サラにタッグを申込んだことから始まる。昨年時の秋に行われる学年後期タッグトーナメント。それにおいて二人は上級生をもとせず見事優勝、そこでサラの才能が露見した。

率直に言うサラ・ウエルキンという人物はバケモノであり天才なのだ。射撃戦においては無類の強さを誇り、相手を感じただけで補足して相手を見ずに狙撃が出来る程の異

常であり天才。セシリアに対して戦術指南や射撃と狙撃について教えた人物でもあり、セシリアからしても彼女の才能は恐ろしいの一言。

もし、マドカとリースの二人を倒すならこの二人だと言われていた。そして、楯無とサラを知る人間からすれば流石のマドカとリースもこの二人には勝てない、という評価だった。

そんな一年生最強と称される二人に挑むのは、一夏とシャルロット。二人の相性は悪くない、機体のバランスも取れている。しかし、多くの観客は勝つことは難しいだろうという結論になっている。そんな中、この四人を知る人間達はといえば——”どうなるのかわからない”という評価を下していた。

一夏には一発逆転の切り札がある。零落白夜だ。それを当てればどんな相手だろうと一撃でシールドをゼロにされるといいうのもあるが、彼の努力と異常なほどの知識吸収速度。何より——その”抗い続ける想い”が、彼を知る人間達に期待をさせた。

”一夏ならきつとやれるかもしれない”、と。

「かなり厳しいわね。だってリースとマドカ、一年最強だし」

「それじゃあ、」

「でもそうじゃない。そうじゃないのよ簪」

「え？」

鈴が不敵に笑った。それはまるで、きつと一夏達が勝つだろうと。そう思っているよ
うな笑みだった。

「一夏の言葉を借りるならね、やれるやれないじゃないのよ。やるのよ、あいつは。
まあ——よく見ておきなさい簪、一夏の戦いぶりを。惚れちや駄目よ？もうあいつに

は、相手がいるんだから」

時刻は夕刻。晴れた空は夕日によって朱の色に染まっている。その景色に対するよ
うに、会場。第三アリーナの熱気は更に加速している。夕日に照らされるアリーナの
空、その待機位置には四人の姿がある。一夏とシャルロット、そしてリースにマドカ
だ。

対峙する各々表情は違う。シャルロットは緊張したような面持ち、マドカはかなりリ
ラックスしているようにも見える。そして、一夏はリースに対して不敵にも笑っており
——リースは浮かない表情をしていた。

「よう、来たぜ」

「……やあ。本当に君が来るとは思わなかった」

いつか交わした言葉と同じ言葉。かつて相対した時は一対一で、一夏は為す術なく

リースに敗退した。あの時から暫くの時間が経過した今。一夏は再び、リースの相対者として前に立った。相対する者として、そして想いを持つ者としても。

「——試合前に、一夏に言っておきたいことがあるんだ」

「俺に？ 何だよ？ちゃんと俺はこうして勝ち上がって、勝負のためにここまで来て——」

「違うんだ。……ちよつと、マドカに色々言われてね。鈴に言われたことも思い出して。それで 言っておきたいことがあるんだ」

思う。言っておきたいこととは何なのかと。ふとマドカを見れば楽しそうに笑っており、その眼はまるで『頑張れよ』と一夏に対して言っているようにも思えた。

目前。一夏の前でリースが息を吸った。何かの覚悟を決めたように、決心したように。一夏はその言葉を待った。そして、それを聞いて——驚くことになる。

「私は、個人的な想いだけで言うなら……一夏が好き、なんだと思う」

「——え？」

思わず一夏が返答したのはそんな呆けた言葉だった。固まったままの一夏を意に介する事なくリースは言葉を続けていく。その姿は、その表情は相変わらず沈んでおり、

どこか辛そうでもあった。

「私も、ちよつと自分の気持ちに素直になろうと思った。君はさ、とても優しくて。努力家で、諦めなくて。……一緒に居て楽しいとも思つたよ?」

一夏が何かを言おうとした。だがリイスはそれをさせない。まだ言うことがあるというように、言葉を続ける。

「私と君は正反対だ。それは、在り方だけの問題じゃない。何もかもが、君と私では違いくすぎる。——私は、君に相応しくないよ一夏」

リイスの個人的な想いだけで言うなら、一夏に対しての感情は考えた末に『好きなのだろう』という気持ちだった。一夏と己の真逆さ。正反対については彼女自身自覚していた。本来なら反発する筈なのにそれでなお、自分を受け入れてくれる。見てくれる一夏を見て、感じたことがない感情があつた。それが『好き』という感情だった。

だが、一夏は自分の根本を。本来の自分を知らない。だからこそ、それを受け入れてはいけないと考えた。

怖かつたのだ、本当の自分を知つて一夏が自分を嫌いになるのではないのかと。

恐れていたのだ、自分や自分の目的に関わることで彼が傷つくことを。

既に関わっている人なら良くて、これから関わる人が駄目。という訳ではない。織斑一夏という人物はリイスにとって特別な存在だったのだ。だから、”関わってほしくな

い」と望んだ。だからこそ拒絶しようと思ったのだ。

大切だと思うから、好きだと思うから自分には関わってほしくない。関われば傷つくから、好きな彼が本当の自分を見てしまうから。だからこそ、リスは決めたのだ。

——好きだからこそ、拒絶しよう。好きだからこそ、自分を殺そうと。

「今まで幸せをありがとう、温かい気持ちをありがとう。でも、私は負けなよ一夏。君に勝つて全部終わりにする。——それが、君のためなんだ」

言った。己が出した、勝負の果ての答えを。拒絶の意を。

「そっか、ああ——安心したよ」

返されたのは、そんな言葉だった。俯く顔を上げリスは一夏を見れば、そこには先程よりも笑みを強くした。安心したような彼が居た。

「ずっとさ、嫌われてたかと思ってた。喧嘩したのも俺が悪いしさ、きつと嫌われたと思つたよ——けど、安心した。そうじゃなかったんだな」

彼は息を吸った。今度は、自分の番だと言うように息を吸った。

「何だよ、両想いだったのかよ。……なんていうかき、恥ずかしいな」

「そう、かもね。でも私は——君を、拒絶する」

向けられたのは敵対の意思だ。覚悟を決めた敵対の意思。そこにあるのは拒絶であり、覚悟だ。絶対に己を倒すという、そんな意思。それに対して一夏は相も変わらず

笑って返してみせる。

「言いたいことは、それだけか？」

「っ……」

「俺からも言つとくぞ。俺は……もうとつくにお前に関わる覚悟なんて出来てる。最初からお前は変なやつだったんだ、今更何を知ったとしても俺は驚かない。動じない。」

——絶対に、逃げない」

「変つて。流石にそれは、傷つくな」

「事実だろ？ 俺はお前に勝つて、そしてもう一度俺を見させてやる。俺のことを信用させてやる、頼らせてやる。言いたいことなんて山ほどあるさ、けどそれは後だ。今は……リイス、お前を倒す。約束のために」

試合開始前のカウントダウンがスタートした。カウントは120を表示しており、それを確認した一夏は雪片を構えて言葉が続ける。

「望み通り決着を付けてやる。俺は負ける気なんて無い、勝つつもりで此処に居る。」

——決着をつけようリイス。一対一だ、それで一度全てに決着をつけよう」

「……言い切るね？ 君じゃ、私には勝てない。私だつて負ける気なんてない。ここで君を拒絶する、それで全部終わりにする」

「違うな、これは始まりだよ。俺と、お前の」

「違うよ。これは終わり。私と君の、全てに對しての終わりだ」

そんな二人のやり取り。それを見たシャルロットとマドカはそれを見て呆れつつも会話を開始する。自分達は自分達で戦おう、という会話を。

「平行線だな、リイス」

「そうだね、一夏。じゃあ約束通り——決着をつけよう」

リイスが両腰のホルルドされている2本のバルムンクを引き抜いた。そしてそのうちの片方の切っ先を一夏へと向ける

「私が勝ったら、もう君は私に関わらないで。絶対に」

「俺が勝ったら、もう一度チャンスを貰うぞ。その上で、話も聞いてもらう」

カウントダウンが5秒を切った。同時に、一夏とリイスが構えた。そして、同じタイミングで言葉を互いの相対者へと放った

「勝つのは俺だ！勝ってわからせてやる、この分からず屋！」

「それはこっちの台詞だよ。勝つのは私で、私は君を拒絶する！」

銀と白。ふたつの色がが激突した。

”ありがとう”を想いながら

紅の空。その下で一学年個別トーナメント決勝戦が開始された。

開始と同時に動いたのはリースだ。最初の会話の時にあった感情はその目にはない。まるで殺したかのように無感情の、鋭い目で補足しているのは一夏だ。

加速した。彼女の専用機、ヴァイス・フリーユゲルはリミッター状態であっても三代の中では破格の機動性能を持つ。その性能を最大に活かし、己の得意とする戦い方を使い——加速し、一夏の視界の中から消えた。

それはリースの得意とする戦い方だ。ある技術をISに応用した戦い方。そして彼女に相対した相手はその種が理解できなければ何をされているのかを理解できない。相手からすればリースは”消えている”ようにしか見えない。実際、ここまで対戦してきた対戦相手はそれが何なのか理解できず一方的に蹂躪された。

彼女が極めたそれは、ある技術の極意だ。それも、それを知る人間の中でも最上級の人間でなければ会得できないほどの技術。それを得て、彼女はそれを生きる術とした。そして今も、己が好きだと感じた相手に対してそれを用了。決別するため。

消える。リースの姿が一夏の視界から消えて、僅か数秒後には距離があつた筈の距離

はなく、一夏の死角に彼女の姿は存在した。二振りのバルムンク振り上げる。そしてそれを、感情のない目のまま振り下ろした。

振り下ろす瞬間、一夏が彼女には見えない所で——笑った。

“それはもうなんとなくだけど掴んだ”

ガキイン、という音が二度木霊した。それはリースの振り下ろしたバルムンクによる2回の斬撃であり、ぶつかったのは一夏の雪片だ。バルムンクが振り下ろされる瞬間。一夏は空中で白式のブースターを加速させ、その場で左回りに反転するように動いた。同時に雪片を上段へと薙ぎ払う動作で振った。振り、それと同じタイミングでバルムンクとぶつかった。

「嘘、」

「——何だよ、防がれたのがそんなに驚きかりイス？　ちよつとは俺のこと認めてくれたか？」

「……冗談。最初から認めてるよ、君のことは」

「それは光栄だ。　つとー！」

受け止めた斬撃をそのまま力押しで振り払い雪片での一閃を返す。が、リースはすぐに距離を取る。背後に加速しながら同時に左手のバルムンクを量子収納し、即座に五五口径多様性役割大型ライフルソード『シユツルム』を展開しての射撃。

それに一夏も反応する。射撃され、追われる形になりながらもそれを回避し、その中で雪片を中段。刃を横にして構えると——お返しというように、加速した。瞬時加速。その加速と同時に正面からリイスに対して切りかかってくる。だが——その動作を全て、一夏が頭の中で判断するより遙かに速い速度でリイスは理解し、対策していた。

瞬時加速からの斬撃、それがリイスに迫る瞬間。リイスはそれを右手に残ったバルムンクで受け流しながら、空中へと宙返りするような動作でそれを回避。瞬時加速状態で動作が取れない一夏に対して、宙で逆さに見る世界の中——シユツルムの射撃をフルバーストで叩き込んだ。

「見えてるよ、一夏」

「つツ……ああ、」だと思つたよ」

今の攻撃で一夏のシールドはそれなりに減つた。にも関わらず一夏はダメージを受けつつもそんな言葉を返した。思う。今の言葉はどういう意味なのかと。リイスが疑問し、だが同時にシユツルムでの追撃をかけようとする。対して一夏もそれを回避し、また笑つたのだ。

「今ので確信した。……勝ち筋は見えた」

「訳のわかんないことを、君は——！」

再び一夏がリイスへと加速した。放たれるシユツルムの弾幕を回避しながらではあ

るが、それを避けきれずダメージが入る。が、それを一夏は気にしていない。そのまま彼はリースへと加速する。

無駄だ、とリースは思った。先程とほぼ同じ行動、そして己には彼の動きが見えてい
るのだ。異常体質。そのお陰で返す手段はいくらでもある、それを行動に移すことも出
来る。だからこそリースは行動しようとした。

そう考えた瞬間——リースは“斬られた”。

「直撃!?! 何が——」

見ればシールドが一気に減っているのが確認できた。それは、あることを証明するも
のでもあった。リースが直撃を受けた、それも競技上大打撃に繋がるような一撃を、だ。
(どういうこと? 一夏の動きはずっと見ていた。見て、”捕捉し続けていた”。なのに
——今私は、何をされた?)

理解出来たのは先程の一瞬でのダメージと衝撃。その衝撃で自分はアリーナの地面
へと叩き落される形になり、その途中でなんとか姿勢を制御した。状況を理解しようと
して、一夏をリースは見る。見て、気がつく——彼の白式には、先程までにないものが
存在していたのだ。

それは、白だ。白の、機械的ではあるがそれは日本刀の鞘にも酷似していた。そして
一夏は恐らく己を斬り、薙いだ雪片をその鞘へと戻し、姿勢を低くするように構えた。

「痛い目見てるかよ、リース」

◆ ◆ ◆
「……え？今のなんですかあれ」

第三アリーナ管制室。決勝戦の映像を記録している清香とクロエのうち、疑問の言葉を放ったのはクロエだ。そして恐らくその言葉は会場の誰もが、映像を見ている誰もが思ったことだろう。

文字通り”見えなかった”のだ。先程の一夏のリースに対する一撃は。それは直接見ているリースや会場の観客、映像としてみている観客にとつてもだ。だからこそクロエはそんな理解できない、という言葉成形にした。そしてそれに答える存在が居た、千冬だ。

「クロニクル、居合というものは知っているな？」

「は、はい。居合、抜刀術とも称されるものです。定義上は刃を鞘に収めた状態で帯刀して、鞘から抜き放つ動作で一撃を加えるか相手の攻撃を受け流し、二の太刀で相手にとどめを刺す形や技術を中心に構成された武術。ですよね？」

「そうだ。織斑のあれは、ある人が基礎を教え、そこに私が追加で教えたものだ。……かつて、私が世界最強になるために使用した技術の1つだ」

「それを、織斑さんが会得したと？」

「ああ。といつても、そのために地獄を見て見て貰ったがな？——正直な話、今の織斑ではエーヴェルリツヒには絶対勝てん。だから秘策を授けた、それが先程のあれだ」

「——神速の居合、確かに一回戦で篠ノ之さんも同じようなことをしていましたよね？」

「ISを用いての居合というのは一回戦で箒もやっていた。箒それは、かつて己の父に教わりそれをISへと自己流で流用したものだ。そして、千冬が教えたものについてもルーツは同じ。篠ノ之流という剣術の中の抜刀術だ。」

「篠ノ之流という剣術は私にとつてもルーツだ。私もかつてはそれを応用して世界最強にまで上り詰めた」

「しかし、リイスが反応できない速度の居合とは……。それに、あの白鞘は何です？確かに白式には単一仕様の関係で拡張領域が無かったと思うのですが」

「詳しくは私も知らん。なんでも、織斑が直接倉持技研の第一研究所に頼んだんだと。そしてつい先日白式の『外付装備』として送られてきたのが、あれだ」

「ああ……データありました、これですね。雪片式型専用鞘『白雪』。鞘の内部にある特殊機構で抜刀時の速度をより高速化。更に摩擦抵抗についてもかなり考えられている構造みたいですね。でも、これだけじゃリイスの反応速度は超えられない筈」

「そこはほら、もうあれだ。あいつの努力と、そして——愛だよ」

「何故そこで愛ッ!?」

しかし、そう言われて清香もクロエもなんとなく納得してしまった。織斑一夏は諦めない、そして今はリースという目的のためにただ努力し、抗い続ける。IS学園に来てから一夏はずっとそうしてきたのだ。そんな姿を見てきた人間からすれば、努力であれだけの技術を身に着け、その姿で信頼を勝ち取り倉持の協力すら取り付け、そして今——リースに勝とうとしているのも理解できてしまった。

「今の織斑のあれは、全盛期の私の技術そのものだよ。並大抵の人間には見えん。そして……あいつとて、それにはすぐに対応できないさ」

「なるほど、”未知”だからですか」

「そうだ。わからんものに対してなど、幾ら馬鹿げた反射神経を持っていても理解出来なければ対応できない。そして——更に問題はあるぞ?」

モニターを見て不敵に千冬は笑い、クロエと清香は驚いた。そのモニターの中では、居合の一撃を再び受けたリースが後ろに撤退を余儀なくされていたからだ。

『『最大の力を最高の速度かつ最善のタイミングで繰り出す』。あいつはそれも既に会得しているのだ。一回戦で見せた、重さを捨てた抜刀状態での鋭い連撃。そして納刀状態からの重く、疾く、鋭いという全てを兼ね備えた一撃。それをあいつは試合の中でより理解し、使いこなしている。エーヴェルリツヒも大概かもしれないが、相当に手強いぞ

？今の一夏は」

◆ ◆ ◆
 ”見えなかった”。真つ先にリイスが冷静になった頭で思ったのはそんなことだった。確実に一夏を眼で捕らえ、その動作ひとつひとつを頭の中で処理できていたはずだ。にも関わらず、接近された後の行動が見えなかった。

そしてそれは、今も尚続いている。とはいったものの、彼女もかなり冷静になり——その正体に気が付きつつあったが。

「がら空きだ！」

「ッ……何度も同じ手は喰わない！」

ショートレンジ。近接の間合いを先程から一夏は維持しようとしている。刀や剣というものには適正距離というものがある。そして、一夏が今使っている居合という技術においてはその適性距離というのはかなりシビアになってくる。

遅すぎれば相手に回避され大きな隙を見せることになる。だが早すぎても駄目だ。その一撃には勢いが乗っており、空振りなどすれば前者同様隙を見せることになる。だからこそ一夏は常に意識を集中させていた。集中させ、距離に応じて戦い方を変えた”。

正面、ショートレンジ。雪片専用の白鞘、『白雪』から雪片が一夏の加速とともに抜き

放たれたが、リイスはそれが見えなかった。だがリイスの判断は速い。見えなくなるまでの手の動きは見えていた。だから、その動きから次の一撃を予測して、居合が来るであろう位置をガードした。

「く、うツ……重い！」

そしてその予想は的中した。リイスがバルムンクでガードした位置には一夏の一閃が飛び、鈍く、大きな音が木霊した。防御には成功した。だが、“防御してしまった”。競技ルールにより、シールドが減衰される。それと同時に、あまりにも重い一撃で再び一夏からの後退を余儀なくされる。

白雪に納刀された雪片からの一撃はとてつもなく重い。疾く、鋭く、そして重い。防御してもそれを貫通するほどに鋭く、そして疾い。幾らリイスの技量が高く、並の剣筋や攻撃であれば受け流したりカウンターを入れられたとしても、それは“並の攻撃”で話。一夏の白雪と雪片から放たれる一撃はそんな技術や経験なんてものを全て無視するような一撃なのだ。受ければ重さに体勢を崩し、守ればそれをも貫通してくる。大振りの武器のように動作が遅いわけでもなく、疾い。

対策を練らなければならない。そう判断したリイスは一度撤退を選択した。何より、あの抜刀術の射程に留まるのは危険と判断した。しかしそれを一夏が許さない。距離を取られれば対策される、技術も経験も何もかも無視した一撃の射程から逃れられ対策

されること、それは一夏にとっては致命打になる。

白式とリミッター下でのヴァイス・フリーユゲルの機動能力に差はほぼない。だから、一夏は追いつこうと思えばすぐに追いつける。逃げようとするリイスを追い、立て直す暇を与えずに一夏は次の一閃を叩き込んだ。

「しつこいよ、一夏！」

「しつこくて結構だ！俺は一度決めたことにはしつこいんだ、絶対に諦めない！ ……
なんかストーカーみたいだな俺」

「みたいじゃなくて、実際に今そうなんだよ君はッ！」

どれだけ否定しても、どれだけ拒絶しても。本心を告げて尚彼は向かってくる。諦めようとしなない。理解出来なかった。どうして彼はそこまでするのかと。どうしてそこまでして、私の拒絶に抗おうとするのかと。

思う。もつといい人が居る筈だ、己なんかよりずっといい人が。一夏だけを見てくれる人が居るはずなのだ。

「なん、で——」

重い一閃。それを回避できないと判断してリイスは再び防御した。それにより更にシールドが減衰するが気にしない。雪片の刀身は長く、刃幅もある。だから中型剣のバラムンク一本でそれを防御するのは不可能で、二本で受け止めるような状態で鏝迫り合

いになりながらリイスが放ったのはそんな疑問の言葉だ。

そしてその疑問の言葉は、本来の彼女なら絶対に出ない言葉。自分の本心を殺した彼女なら、絶対に出ない言葉だった。

「なんで君はそこまで私に関わろうとするの！なんで、どうして——私を惑わせるのッ！」

「んなこと、決まってるだろ。お前が好きだからだよ」

「私だって、好きだよ。だけど駄目なんだよ！それを受け入れたら君を傷つける！見てほしくない私を、君に見られることになる！だから、」

「いい加減にしろよ。流石に怒るぞ」

目前。刃をこちららに対して押し返そうとする一夏のその言葉は、明らかな怒気を含んでいた。

「だからどうした？」言ったら、俺はとっくにお前に関わる覚悟なんて出来てるって。絶対に逃げないって」

「駄目なんだよ、君みたいなのが——」私なんか」にこれ以上関わっちゃいけない」

「いい加減に、しろおッ！」

先程より強い怒気を含んだ言葉とともにリイスは押し返された。押し返され、刃の一撃を入れられた。しかしそれにより距離を取ることが出来た。どうしてか一夏は追撃

をせず、体勢を立て直して見れば——彼は明らかに怒っていた。

「そうやって最初から決めつけて、見切りをつけて、その癖して誰にも頼らず無理してるのはお前だろうが！ そんなの——」最初から諦めてるだけ”じゃねえか！”

「——それは、」

「結局お前は誰も信じてなくて、頼ろうともせず。その癖してどうしようもないって諦めてるだけだろ！ 本当にお前は——それでいいのかよ」

その言葉に対してリイスは反応した。一夏が怒っているように、リイスにも思うことはあつたからだ。そして返す言葉は、きつと彼女の本心だった。

「いい訳、無いでしょ」

『限定許可』。そんな言葉をリイスは呟くような声で言った。それと同時に、一夏の視界の中で彼女の機体、ヴァイス・フリーユゲルの背中の中固定浮遊部位の翼が光り輝いた。そして——文字通り、リイスが消えた。

またあの技法だ。そう思った一夏は、見えた瞬間には対応を取ろうとした。既にリイスのそれについてはなんとなくだが種がわかりつつあつた、だから最初の時のように対応すれば——

”これなら見えないでしょ”

「な、にッ——」

声と同時に斬られた。それも、死角ではない真正面から。声が聞こえた瞬間、銀の髪と紅の瞳が見えた。それも目前に。懐に入られた瞬間、一夏は反応すら許されずただその瞬間に4回の斬撃を受け、叩き落された。

「じゃあ……私はどうすればよかったの!?!君に頼って、誰かに頼って私の都合に巻き込めって言うの!?!——私は、それが一番嫌だったんだよ!だから努力した、慣れるために!頑張ったんだよ、私は!」

一夏が聞いたのは叫びだ。そして、叫びとともにあつたのは涙だ。思う、これがリースの本心だったのではないのか、と。

誰かに頼りたかった。けど、自分の事情で誰にも頼ることが出来ず1人で何とかするために自分を殺し続けた。その殺した中の”リース”という少女の本心が、見えた気がした。

「辛かったよな」

「……辛いよ、でもそうしなきゃ駄目だった」

「そうか。だったら、これからは頼れよ。俺は少なくとも逃げない、お前の全部を受け止めてやる」

「それは、駄目だよ。……一番駄目な選択だ」

「駄目でもいいだろ。俺がいいんだから」

「——本当、強引だ」

「ああ、俺は強引だぞ。何度だって立ち向かってやる、抗ってやる。そしてお前がそんな弱音吐いたり自分殺そうとするたびに、俺が否定してやる」

真逆だからこそ、一夏にはそういうのはよく見えた。だからこそ一緒に歩みたいと、似ているけど正反対な彼女と共にありたいと望み選んだのだ。己と似ていて、自分になりものを彼女は持っている。そして彼女もまた同じであり、本質的に正反対なのだ。

「私は君ほど強くない。だから……やっぱり、ダメだ」

「それは一人だからだろ。二人でなら、誰かとならなんとかなる。少なくとも俺は、お前の隣に居たいよ」

「——ああ、本当ズルいなあ君は。ズルくて、我儘で強引だ」

「強がりです分かります屋に言われたくない」

「あはは、そうだね。じゃあ、見せてよ一夏。君の覚悟を、力を。私、自分でも自分ももうよくわかんなくなってるんだ。きつと、君のせいだよ？ だから——そうだね、上手く言えないかもしれないけど、こう言えればいいのかな」

視界の中、一夏から見るとリスはどこか消耗しているようにも見えた。”先程まではそんな素振りなかったのに”。

リスは多少辛そうにして、言葉を作る。それは……一夏に対する、不器用な中で彼

女が考えた、形にした言葉だ。

「——助けて、一夏」

それを聞いた一夏の心の中に再び強く炎が宿った。彼は手に力を込めた。白雪を持つ左手に、雪片を持つ右手に。納刀し、構え、覚悟と決意を込めて柄と鞘を握る。

ようやく、やっと聞こえたのだ。彼女の声が、誰かを頼るといふ、助けてといふ言葉が。

「ああ、任せとけ。今から俺が本当の”リース”を助けに行く。茶でも飲んで待つてろお姫様」

「面白い冗談だ。ちよつとだけ、私も本気で行くから。——だから、そんな私を倒して迎えに来てよ、王子様」

再びリースが一夏の視界から消えた。消えたと同時に、最初とは比べ物にならない速度で連撃の動作が一夏へと繰り出された。

相対の後半戦。それが開始された。



「くっ、疾すぎる——」

明らかに異常だ、そう俺は感じた。元々リースの専用機の機動力が高いことは知っていた。だが、これは幾らなんでも異常極まりない。

今のあいつは常に瞬時加速に近い速度で加速している。しかもあいつはこれで”ちよつとだけ本気”と言った。本当、あいつ人間やめてるんじゃないと思う。

機体の速度だけではない。あのバルムンクという剣を振る速度、此方のアクションに對する反応速度。何もかもが加速している。どうなっている。そう考えながら再びリースから斬撃を受け、吹き飛ばされ立て直す暇すら与えられずに射撃される。

(不味いッ！)

超高速での連撃。それを捌ききれず何度も直撃を貰い、シールドがどんどん減っていく。対策しようにもその暇すら与えてもらえない。どうする——

『聞こえるか、”一夏”』

突如として個人間秘匿通信のウィンドウが開いた。そこに映っていたのは千冬姉と、そしてクロニクルさんだ。今千冬姉は俺のことを名前で呼んだ、つまり——個人的な話だろうと考えた。

「聞こえてる、けどあんまり余裕はない！ ああもう、ダメだ見えない！」

『……今のあの馬鹿のことで話がある。今のあいつは、本来使うことを禁止している機能の一部を使用している』

「禁止されている?」

『……お前があいつに関わると決めたら話してもいいだろう。」セラフ・システム”と呼ばれる特殊機構だ。本来これは特別な権限持ちの許可があつて初めて使用可能になるものだ。お前も一度見ているだろう、対抗戦の時に——たった数秒で無人機を叩き落としたあいつを』

見ている。あの時あいつは、撃たれそうになつた筈に對してまるで瞬間移動みたいなことをして、10秒ないくらいの時間で無人機を叩き落とした。

俺からは何が起こっているのか理解できない状況だつた。あの時無人機の腕が斬り飛ばされたと思つたら背後に居て、だと思つたら叩き落されていた。その刹那の間に複数の行動をしているように見えたのだ。

でも確かあの時あいつはその直後。明らかに動きがおかしかつた。辛そうに息を切らしていたり、ふらついていたりしていた。ツ……もしかして

「まさか、」

『恐らく推測通りだ。あいつは今その力の一部を無理矢理使っている。……とはいつたものの、あの時ほどではなく最低限度の性能開放に留めているようだが』

「けど、許可が要るんだろ?誰かが許可したつてことか?」

『あいつ自身が一時的に許可したのだろう。あいつも一応は権限持ちだ。だが——その

反動は、身体に返ってくる』

「あの馬鹿ッ。そこまでして、そこまで自分を傷つけて——流石に頭にきた」

……状況はかなり不味い。だけど、俺は諦めない。あいつは俺に”助けてくれ”と言ったんだ。

だったら俺はそれに応えたい。応えるために、あいつを倒さなきゃならない。ああくそ、言いたいことが沢山あるんだ。怒りたいこともある、伝えたい事だって。

だから俺は勝つ。けど、どうする——？

このままじゃジリ貧だ。今のリースはハイパーセンサーでは追いきれず、反応・反射・対応。どの速度をとっても異常だ。

『一夏、あいつが背負っている物は相当に重いぞ？それでも尚リースに関わるのか？』
「何が言いたい、千冬姉」

『教師としてはあんまり勧められないということだ。あいつを選ぶのは。——お前に出来るのか？ たったひとりを選択することが、そいつの全てに関わることが。きつと後悔するぞ？ 苦しむぞ？ あいつは、そうさせないためにお前を拒絶しようとしている』

「——馬鹿言うなよ、千冬姉」

そんなこと、解りきっている。

誰か一人を選ぶ？ ああ、とづくに選んでいるさ。全てに関わる覚悟があるか？ それも

あるさ。俺は絶対に逃げない。

後悔する？ 苦しむ？ そうさせないために、あいつは拒絶しようとしている？

——そんなもの、俺は知らない。認めない。選んだただひとりの苦しみの果てにある幸福なんて、糞食らえだ。

「あいつを独りにさせること、それが俺の絶望だ！ 誰になんて言われようが俺は揺るがない、逃げない。俺が選んだのは”リース・エーヴェルリツヒ”なんだ」

『……言うようになつたな』

「それに、後悔する？ 苦しむ？ んなもん解かんないだろ。俺は一度だつてそう思ったことはないッ！ 大事な奴が助けってくれて言つてんだ、だったら俺はそいつの、そいつだけの力になる！」

『あいつも馬鹿なら、お前も馬鹿か。ああ、そういえばよく似ているのだったな。安心しろ一夏、教師としては勧めん。だが……姉としては、あいつを推すぞ？ あいつほど早くすい女は居ない。ただ、誰かが隣に居る必要があるが——クロニクル、送れ』

そんな言葉とともに白式にはデータが送られてきた。それは、ISスーツの首元に存在するインテリジェンスタグを通して送信されるバイタルデータだ。送られてきたのはリースのものであり、表示されるデータのコンディションは『イエロー』。つまり、競技上準危険域という表記だ。それに続いて表示されたのが、ヴァイス・フリーユゲルの

未公開スペックデータだった。

『禁止しているにも関わらずあいつはお前を拒絶するためにそれを使ってあまつさえ自分を傷つけたのだ。……これぐらいいいだろう。一夏、今のあいつは一種の極限状態だ。お前も解るように全ての反応速度が異常、だが——時間経過でそれも鈍っていく。身体に負荷をかけているからだ』

「だから早くあいつを止めないと、」

『ああ、止めなければまた医務室送りだろうな。だがあいつは自分で首を絞めた。そしてそれが、お前が勝つ唯一のチャンスになる——判断が鈍ってきている今、あいつには必ず隙が出来る。お前のシールドも残り少ない、だからチャンスは一回だと思え。あいつが自分で作った隙、そこに”零落白夜”を叩き込め』

『だが』と千冬姉は続けた

『あいつもそれは理解している筈だ。だからチャンスは一度、そしてそれは刹那的なチャンスになるだろう。そこに零落白夜を叩き込むのは至難の業だ。——やれるか？』

愚問だ。それは愚問だぞ千冬姉。

答えなんて、最初から決まってるんだ。

“やるさ”。あいつを倒して、それで此処から全部始めるんだよ」

通信ウィンドウの中で千冬姉が笑った。そして交代するようにクロニクルさんがウィンドウに出てくる。

『織斑さん、クロエです。——私がこういうのも変かもしれませんが、リースをお願いします。リースを、助けてください』

それに対して俺は笑って頷いた。通信ウィンドウが閉じられると、息を吸いリースの連撃を凌ぎながら見る。

確かに、多少ではあるが攻撃が鈍くなってきた。恐らくこれは言っていた負荷とというのが原因なのだろう。

あいつは切り札を切った。とてつもなく強力で、自分を犠牲にするような切り札を。けど、甘いぞリース。

——俺にも一か八かの最後の切り札がある。ぶつつけ本番の切り札が。

攻撃を回避し、なんとか距離を作るとすぐさま追撃が来なかった。だから俺はそれをチャンスだと判断する。雪片を白雪に納刀し、構える。視界の中にはリースを捕らえているが相変わらず出鱈目な速度でハイパーセンサーが追いきれていない。

「……ああ、全部終わりにしようリース。そして始めよう」

目を閉じる。これは、ある種の賭けだ。

大会前、特訓をしていた時にセシリアが連れてきた二年生の先輩が居た。サラ・ウエ

ルキン、という人だった。セシリアに戦術指南をしたのはその人で、俺の参考になればと思つて呼んでくれたらしい。

サラ先輩には主に遠距離戦について教えて貰ったが、その中である種。雑談のような形で先輩のある技術について話を聞いていた。感覚だけで360度、どの方向にでも存在する遠距離の相手の位置を正確に理解し狙撃するという馬鹿げたもので、先輩は冗談半分にあることを言つていた。

”自分の感覚を信じること。そうすれば、きつと出来ますよ”

今のリイスは追えない、ちゃんと見えない。だから——感覚で掴む。センサーには頼らない。視覚なんてあてにならない。だつたら今は、感覚であいつを捕まえる。

目を閉じる。閉じて、その場で位置を固定。

姿勢を低くし、左手に力を込めて白雪を握る。だが、どの方向にでも動かせるように力みすぎない。あいつがどこから来るかわからないからだ。

右手を納刀されている雪片の柄に添える。握りはしない。握つてしまえば斬撃の位置が固定され、それを読まれるからだ。

一度の刹那でいい。一瞬のチャンスでいい。それを逃せば俺はあいつに勝つ術を失う。恐らく、次の連撃でシールドはゼロになるからだ。今の俺は零落白夜を撃てるシールドがギリギリ1回分残っている程度。だから、たった一度のチャンス。

目を閉じ、既にどれだけの時間が経過したのかなんてのはわからない。一瞬なのか、数秒なのか。それとも既に分単位で時間が経過しているのか。けど、動かない。ただ待つて、その刹那を待ち続ける。

目を閉じる暗闇の中。頭の中にノイズが走ったように思えた。そして、一瞬見えたものがあつた。それは黄金。黄金で剣を持つ、それはまさに――

(ツ……) なんて今あの時のアイツが?! ダメだ、集中しろ織斑一夏!

振り払い、再び意識を集中する。何故か、先程よりも感覚は研ぎ澄まされているように感じ、心が落ち着いていた。

そして、それが来た。

敵意を感じた。それは自分の背後。死角からのものだと判断した。

それを感じた瞬間、雪片を握り単一仕様を”納刀したまま”発動させる。

この白雪という鞘は刃の加速機構や居合のためだけに存在しているわけではない。より鋭く、より一撃の重さと速度に特化した一撃。それを単一仕様にも乗せての文字通り”刹那必殺”。零落白夜発動能力の全てをただ一撃、その疾い一撃にのみ込めるという役割をも持つ。

最大出力での一閃。故に、本来なら発動してから一定時間持続する零落白夜はその一撃のみで消滅してしまう。消滅し、一気にシールドが減少する。だから俺は、抜刀状態

で零落白夜を発動せずこの刹那に全てを賭けた。感覚で把握するなんてのもやったことがなく、やるしかないという思いだった。

「――篠ノ之流抜刀術奥義『散桜』ツ！」

一撃を放った。抜刀した瞬間、雪片からは白の光が迸り、その軌跡が感覚で感じた位置を一閃した。

俺は小学生の時、一度も箒に勝てなかった。そんな自分が悔しくて、誰にも負けないくらい身につけた技術があつた。それが抜刀術、居合だ。当時柳韻さんが居合をしてるのを見て、俺は憧れた。そして教えを請うた。

最初柳韻さんは困つたような顔をして子供には難しいと言っていたが、それでも俺は食い下がった。どうしても習いたい。そして、箒には秘密で柳韻さんに篠ノ之流の抜刀術というものを教えてもらつて、それを俺は覚えた。その極地にまで至れるほどに俺は努力した。

けど、抜刀術は本来剣道では使わないものだ。だから俺はそれ以降も箒に負け続け、やっぱり悔しくて挑み続けた。そんな中で柳韻さんが『見てられん』と言つて教えて貰つたのが、その奥義。篠ノ之流抜刀術『散桜（ちりざくら）』。

曰くそれ自体はとても簡単だが、ルーツを理解していなければ難しいという。”最大の力を最高の速度かつ最善のタイミングで繰り出す”これに加えて、その中でも最も最善のタイミングで全てをその一閃に乗せる。そうして完成されるのが、この奥義だという。

一閃を放った瞬間、鈍い音がした。しかし今までのものとは違う。何か折れるような音で、それは2本のモノが折れる音だ。

俺は刀を抜く時、背後に対して右回りに身体を回転させ、そのまま切り抜けた。そして同時にしたのが鈍い音だ。

折れたのは、二本の剣だ。そして折れた刃がアリーナの地面へと落ちていき、量子化されるのを確認した。

「……信じられないな、これは。本当、夢みたい」

背後から声が聞こえた。それは聞き慣れた声で、俺にとって——大事な想い人の声だ。目を開き雪片を再び白雪に納刀する。同時に、目の前に展開されるウィンドウがあった。それは、試合に関する告知ウィンドウだ。

『織斑一夏”白式”残りシールドエネルギー『30』。リイス・エーヴェルリツヒ”ヴァイス・フリーユージェル”シールドエネルギーエンブテイ』

数秒。俺は呆けたままだったのだと思う、そしてやっと現状を理解する。俺は——勝ったのだと。一気に気が抜けた気がした。そして、安心もした。

「夢じゃないぞ、現実だ。——待たせたなお姫様。ちゃんと迎えに来たぜ？」

「……ああ、私負けたんだ。結構君を拒絶するために頑張ったんだけどな。だけど、」

振り向き、リイスを見た。見ればかなり消耗しており、息も上がっているが——その顔は何処か吹っ切れたようにも見えた。

「君の勝ちだ一夏。——君の手を、取っていいのかな？王子様」

どこかふざけたように返されたその言葉。けど、まだ少し迷っているようなその言葉に対して俺も答えを返す。

「そのために此処に居るって言ったろ。勿論だ、リイス」

「……きつと後悔するよ？私に手を伸ばしたことを」

「まだ言うか。そんなもの、俺が決める事だ。……言ったろ、俺は諦めが悪くてしつこいんだよ」

「そっか、なんだろう——凄く、色んな感情が入り混じっててなんて言ったらいいのかわかんないや、でも、”ありがとう”一夏」

返された笑顔を見て、一気に力が抜けていく。

しかしそこで『あ、でも』とリイスが言つて再び彼女を見れば、意地悪そうな。小悪魔のような笑顔を浮かべていた。

「まだ相手残つてるよ、一夏」

「——はっ。」

思い出す。最初確かに一対一だと宣言して、俺もリイスもそのつもりで戦つた。けど思い出す。これはトーナメント”タッグ部門”。もう一人居るのだ、だがそいつはシャルロットが相手をしてた筈——

『ごめん一夏……頑張ったけど駄目だった！』

見れば、友軍情報の欄には『シャルロット・デュノア”ウエンティ”シールドエネルギーエンプティ』と表示されており、その通信を受けて恐る恐るまだ反応がある所を見れば、

「はっ……はっ……。シャルロットの相手はかなりキツかったがなんとか勝つたぞ。さて織斑一夏、勝負的にはお前の勝ちだが——」

嫌な予感がした。俺の白式は残りシールド30。一撃でも貰えばエンプティは確定の状態だ。見れば、ハイパーセンサーの中で東雲が息を切らせながら長大なバスターソードを構えるのが見えた。

「試合的には私達の勝ちだ！ 諸々あるがとりあえず置いておいてフリーパスの礎にな

れえ！」

「流石に今の状況じゃ無理だろ!?!」というかお前キャラ変わってないか!?!」

理不尽な一撃が俺へと振り下ろされた。結局リスとの勝負には勝ったが、試合的には向こう側の勝ち。後で聞いた話だが、東雲は結構ガチでフリーパスが欲しかったのだとか。

そんな最終的にはなんとも言えない形で個別トーナメントは終わりを迎える形になった。

けど、これであいつと向き合える。そうなれて本当によかったと、俺は思った。

『金色』の痕跡

個別トーナメントから数日。既に7月に入り、その第一週の週末。一夏とリースの決着が付いてから色々なことがあった。

まず、箒について。トーナメント終了後、箒が直接リースに謝りに来たのだ。何故かラウラもついてきていたが。謝罪の内容は今までのことだった。対抗戦での発言のこと、行動のこと。暴言を吐いていたことも含めて謝罪をされ、リースとしてはかなり戸惑った。彼女自身、それについては気にしていなかったからだ。結局その流れで和解。最後に『一夏を頼む』とだけ言われその時は部屋を去った。

大勢が気になっている一夏とリースの関係についても、決着が付いた。一学年トーナメント終了の翌日、教室へと登校してきたリースとその後で現れた一夏に対して一組生徒含み大勢が問い詰めた。『で、結局どうなの?』と。それに対して二人が返答したやり取りが、

『いや、どうも何も。まだ俺返答聞いてないんだけど……というか、それ今する話か? ええと、リース? 何で席から立って俺の前まで来てるんだ?』

『——うん、そうだね。そういえば君はあの時大勢の前で告白したよね』

『う……そうだな。今思えば恥ずかしいな……』

『だから私もそれらしく答えを返そうかと』

『は？それ、どういう——』

一夏の言葉は最後まで続かなかった。登校した直後で立ったままの一夏の目前。そこに立っていた彼に対してリイスが差のある身長差を埋めるために少し背伸びして、一夏の唇に己のものを重ねたからだ。突然のことに一夏は何が起こったのかを理解出来ず動揺した。そして周囲でそれを見ていた一組生徒達やその他生徒はといえば『キャー！』などと騒ぐ生徒と、余りにも突然かつ大胆なその行動に言葉を失っている生徒に分かれていた。

『……えっと、まだ上手くそういうの言葉にできなくて。だから行動でっと思って。』

これが私の君への答え、じゃダメかな？』

一夏がリイスを見れば、普段の彼女からは考えられないほどにどこかぎこちなく、恥ずかしそうにしながら上目遣いで一夏を見ていた。

結局その騒動は千冬の登場で沈静化されることになる。こうして事実上、お互い公認で付き合っているということになった。

更に同日SHR。千冬から発表があった。つまるところまた部屋の移動である。専

用機持ちやその関係者だけで言うなら、元々かなり広かった鈴の部屋にセシリアと四組の簪が移動。箒の部屋に入れ替わりでラウラが移動。シャルロットの部屋には本音が移動。マド力は何故か“二人用”の部屋に個室扱いであり本人が頭を抱えていた。『本格的に嫌な予感がする』という言葉を呟きながら。そして、クロエの個室に清香が移動。これには清香もクロエも大喜びしていた。

最後に。一夏の部屋にリイスが移動である。一組生徒からすれば『あ、ですよね』くらい感覚だった但他的組からは問い合わせが出た。それに対して千冬が返答した言葉があった。要するに“お前ら元々トーナメントで優勝したら織斑と付き合えるだとかエーヴェルリツヒと同室になれるだとか騒いでたからその通りにした”というものである。

元々これは一夏とリイスが喧嘩をする前。まだ事前告知の段階で流れた噂だ。しかしその噂が流れていたのは事実であり、それを信じ込んだ生徒も居た。だから千冬は“そうしてやった”。これについては相手が千冬であり、また自分達が撒いた種というものもあつてかそれ以上文句は出なかった。

しかし、問い合わせという形で本人達からも話が出た。『いいんですかこれ?』という内容だ。元々、一夏とリイスは同室だった。色々な事情があつたとはいえ喧嘩するまでは特に問題がなく過ごしており、また“一夏を護る”という目的がリイスにもあつたか

らまだよかった。しかし、前とは状況が異なる。一夏とリイスは付き合っていて、男女だ。それが本人達としても色々不味くないのかという考えはあった。

だがそれについても千冬が返答をした。

”元々同じ部屋だっただろうが。前と変わらん。——ただ、弁えろよ?”

何をとは言わなかった。ただ有無を言わさずにそう言われた一夏とリイスは”はい、わかりました”と冷や汗をかきながら返答するしか無かった。

慌ただしく数日が過ぎ、一夏としてもリイスとしてもちやんと話をできる時間が取れず。しかしそれも少し落ち着いてきての週末。二人の姿は——IS学園の部屋にあった。

「しかし、いいのか?」

土曜日。授業は午前中で終了しての昼過ぎ。IS学園女子寮1025号室には私服姿の二人の姿がある。

夏ということもあり半袖シャツにジーパンというラフな姿の一夏と、黒の夏ワンピースに半袖のGジャン姿のリイス。尚、リイスの服装についてはシャルロットが監修し

た。今までに持っていた服装はほぼ全てが束とクロエの趣味が入ったものであり、週末に入る前に『もつと別のパターンの服買いに行こう』とシャルロットに連れられて買い物に行った。

疑問を放つたのは一夏だ。それに対してリイスは鈴から借りてまだ読み切っていない文庫本を読みながら返答する。

「何が？」

「いや、週末だろ？他の奴等と約束とかあったんじゃないのか？」

「大丈夫。というか、なんか皆もう予定あったんだとか。セシリアと鈴は簪と映画観に行ってる。シャルロットは箒とラウラの付き添い？でレゾナンス行ったみたい。多分マドカは寝てる。ここ数日フリーパスで気が狂ったように満喫してたし。……思ったらあのフリーパス、私も貰ってたんだって、どうしようこれ。クロちゃんは今頃整備室じゃないかな、なんか『いんすぴれーしょんが湧きました』とか言ってた」

「なあ最後のとてつもなく嫌な予感がするの俺だけか？」

「大丈夫、だってクロちゃんだし」

「あー……うん、クロニクルさんだもんなあ。 何があつても驚かないわ」

再び流れる沈黙。その中でリイスは相も変わらず本を読んでおり、一夏はといえば――

「なあリイス、しかしなんでこんな状況になってるんだ俺は」

「えっ、何が？」

「だからさ——なんで俺はベッドの上で膝の上にリイスを乗せて、なんでリイスはそこで文庫本を読んでいるんだ？」

正直に言うとは一夏としては気が気ではなかった。膝の上に座り、正面向きで文庫本を読んでいるリイスの銀の髪がすぐそこにあり、彼女が使用しているシャンプーなどに加えて独特の香りがしている。一夏としては、既にそういう関係になった今理性を保つので精一杯だった。

「えっとなんだったかな……私、今まで一夏みたいな相手居なかったからどう接したらいいのかって束さんに最初相談したんだけど」

尚、リイスが千冬や束の関係者であるということは既に一夏に話している。そして、束からは一夏に関するある依頼をされているということも話してある。その先についてはまだ話をしていない。数日間、忙しくて部屋に戻ってもお互いグロッキーでそれくらいしか話せなかったのだから。

「……ちよつと『見せられないよ！』みたいなこと言われて通信すぐに切ったんだけどね、」

「おい、あの人何言った!?!? すごいえば俺の所にも連絡あったような——」

ふと一夏がリイスの体を支えていた右腕を彼女の身体から離し、手首の白式の待機形態から通信記録を表示すれば——あった。履歴に篠ノ之束という文字が。

見なかったことにした。日常になっているが、嫌な予感がしたからだ。

「そ、それで？」

「逃げたね君は。まあそれで、東さんじゃ駄目だったからお義父さんに連絡したんだけど忙しくて出れなかったみたいで。最終的に知り合いのドイツ軍副官に相談したんだけど」

「お、おう」

「そしたら副官の人が部下招集していきなり緊急会議始めてね。何か緊急事態でもあったのかな？　で、暫くして折り返し連絡あったんだけどその時に今やってるようなことはそういう関係においてコミュニケーションみたいものだからって言われて」

「ドイツどうなってんだよ本当!!　本当どいつもこいつも頭のネジ飛んでるな!」

「ドイツだけに?　面白くないよ一夏」

「……すまん」

膝の上に乗ったままこちらを振り向きジト目で言われる。流石におっさん臭かったかもしれないと反省。

だが、もっとまともな相談相手が居る筈だ。なぜこうも頭のネジが飛んでいる人間に

ばかり相談するのかと一夏は頭を抱えた。

とはいったものの、その”相談する”というのは良い変化ではあったが。今までのリイスはそれすらも殆どしなかったのだ。特にプライベートなことでは全くといっていいほどに。だからきつと、相談された束や電話に出られなかったものの彼女の義父にドイツの副官というのは嬉しかったんだろうなと推測した。

「それとも、嫌だった？ ——クラリッサ、そのドイツの副官はこうすれば一夏は喜ぶつて言つてただけだ。あの人はともかくとしてその部下の人達のお墨付きらしくて」

「……嫌ではないけどさ。なんというか、その。そ、そうだリイス喉乾かないか？ ずつと本読んでるだろ。茶でも淹れるよ、緑茶でいいよな？」

「あー、うん。そうだね、貰おうかな」

「はいよ。ちよつと待つてろ」

「……あ。——うん」

一夏は『ちよつと待つてろ』と返答してそれまでの体勢を崩しベッドから立とうとする。リイスを離れた時に彼女がどこか少し名残惜しそうというか、残念そうな声をあげた気がしたが一夏はあえて気にしない。流石に理性が限界だったからだ。

備え付けのキッチンにある茶葉を取り出して手慣れた手順でお茶を淹れていく。そして、既に使うのは久しぶりにも感じる急須と湯呑みを2つ取り出してそこに緑茶を注

いでいく。既に季節は夏、なのでちゃんと冷やした後に湯呑みへと注いでいく。

緑茶を淹れ終わり、ふと見ればリースがベッドから移動しており、部屋にあるテーブルの椅子へと座っていた。流石にある意味一夏は安心した。まさか変な入れ知恵のせいであの体勢で飲む、なんてことがあるんじゃないのかと考えたからだ。

「何か失礼なこと考えなかった今」

「気のせいだ。はいお茶」

「ん。ありがと。ああ……やつぱり緑茶はいいなあ」

「満足してくれたらそれは結構」

こうして緑茶に満足そうにしている表情を見るのも喧嘩以前だなあと考えつつ一夏も緑茶を口にしていく。しかし、リース程ではないが確かにこの茶葉はいいものだと感じる。気がつけば買い置きしているし、日常的に常飲している。在庫がきれかけた日には焦りに似た何かを感じるが、何なのだろうかなどと一夏は思う。

「それで、」

「ん？」

「——聞きたいこととか、あるんじゃないのかな」

「……そうだな、あるな」

恐らくではあるが、今日自分と部屋にいたのだからって気を遣ってくれたんだろうと考え

る。ここ数日はトーナメントの事後処理にちよつとした騒動もあつたりでまともな時間が取れなかつた。一夏としては、リースの事情を知りたかつたのだがその関係である程度のことまでしか聞いていなかつた。だから、こうして余裕ができてきた今ちゃんと話を聞きたいという気持ちがあつた。

聞きたいことなんて山ほどあつた。あの無人機は何なのかとか、どうして場慣れしたようにしているのかとか。何か目的があるのかとか——あの時の、弱音のこととか。知りたいと望んだ。知つてその上で彼女の助けになりたいと。

もう二度と独りで無理なんてさせたくない。

とは、いったものの。

「けど、何から聞いていいのか。正直——まだ考えてる。余りにも多くありすぎてさ、どう切り出したらいいかつて迷つてる」

「——そつか。じゃあ、私の話をしよう。私の、過去の話」

「リースの、過去？」

「うん。何で私が千冬さんや東さんと知り合つたのかとか、本人方には許可取つてあるからそのことも含めて——そうだね、最初に言つておくけど結構重いよ？ 別れるなら今のうち。戻れなくなるから」

「絶対別れてやらない。嘗めるなよ俺を」

「……そうだね、ごめん。じゃあ、巻き込ませて貰うね一夏。私の話をしよう。私の、復讐の話」

そしてリイスは一夏に話し始めた。今から3年前に起こった出来事で両親が殺されたこと。それからずっとある理由で1人で世界を巡り捜し物をしていたこと。その過程で千冬と束に捕まり、保護され。そして今の立場にあることを。

千冬と束には既に話をしてあり、『もうここまで来ているなら話してもいい』という許可が出た。だから、今の状況についても全部話していった。どうして自分がIS学園に来たのかということ。それはある手がかりを探すためで、そして……一夏を護る、という目的のために。

亡国機業という組織があり、その組織が一夏を狙っている可能性がある事。その組織が「世織計画」と呼ばれる何らかの計画を企てており、それを自分達は阻止しようとしていること。対抗戦の時の騒動は、そいつらが関わって仕組まれたものだという事。

時間にして、かなり長い時間話していることにリイスは気がつく。その間一夏はただ真剣にその話を聞いており、彼女が話を終えたのを見て言葉を返した。

「なんというか、とんでもない話だな。でも束さんや千冬姉が絡んでるって聞くとそこまで驚かないな」

「その身内を人外みたいに言うのやめようよ一夏、確かに周囲には変人や化物が多いか

もしれないけどさ。——その、何も思わないの?」

「何を?」

「だから、私のこととか。……私も東さんのISを利用して、殺すために。復讐のために使ってる人間だよ?」

「だから何だよ? 言ったら、お前の全てを受け入れるって。あんまりネガつてると怒るぞまた」

「ごめん——」

「"ごめん"とかそうやっていつも自分が悪いみたいに言うのも気をつけろ。あんまり自分のこと貶めるな。……そういう時は"ありがとう"だ」

ふと、思い出したことがあった。似たようなことをかかって言われたのだ、鈴に。それを思い出して『駄目だな』と思い、言葉を言い直す。

「ありがとう、一夏。君を好きになってよかった」

「おう、まだ不甲斐ないかもしれないけどもつと頼れよ。——けど、気になることがあるな」

「気になること?」

一夏には気になることがあった。リスについてや彼女が何者なのかということはある程度理解出来た。けど、彼女は捜し物だとか言っていたが、それが何なのか言って

いない。

だからそれが気になった。そして一夏は、それを確かめようとして彼女に問いかける。

それが、彼女にとって思わぬ出来事になるとは知らずに。

「そのリースの言う復讐っていのうがイマイチよくわからないんだ。……その捜し物って、聞いてちゃ不味い奴か？」

「——そうだね。全部話したし、いいかな。これは会長や東さんにも前した質問なんだけど、」

リースはかつて楯無や東、千冬に対して問いかけとして放った言葉を一夏に対しても放った。東や千冬でもわからなかったのだ。だから知らないだろうと、そう思ってただけの問いかけ程度にその言葉を作る。

「『金色』のISSを、一夏は知ってるかな？ 私はそれをずっと追ってるんだ」

知るわけがないだろう。そうリースは考えていた。もし彼が知っているなら恐らく千冬も知っていると考えたからだ。

過去に千冬に問いかけをした時、千冬は知らないと言った。金のISSというキーワードを聞いて何なのかと考えるようにしていた。千冬が知らないのだ、だから彼も知るわけがない。そう考えてリースは『それはそうか』と思った

「ごめん一夏、変なこと聞いたね」

「——何で、」

「え？ 一夏……？ どうしたの？」

—— 『何でリイスがあいつを知ってるんだ……？』 ”

返されたのは、予想もしていない言葉だった。目前で目を見開き、驚きの表情で此方を見る彼に対して反応できず、頭の中が完全にフリーズした。

そんな中、彼女は完全にパニック状態になり、テーブルを立つと座っている一夏に詰め寄っていた。

「……知ってるの？ あいつを。あの、金色のISを!？」

「リ、リイス？」

「なんで知ってるの!?! いつ見たの、会ったのツ!?! 何で、どうしてツ——」

「お、落ちて着けリイス! どうしたんだよいきなり!」

一夏から見ると彼女は完全に動揺していた。それも、己が見たことにならない程に。動揺し、必死の想いが伝わってきた。声は震えており、冷静さを欠いていた。

そんな状態の彼女に対して、どうしていいのかわからなかった。だから、何とかして

落ち着かせなければならぬという思いで、一夏は椅子から立ち。

「落ち着けてリイス！ ……そうやって一人で考えてても俺にはわかんねえし、きつとそのままだぞ。落ち着け、な？」

「あ……………」

咄嗟に、動揺していた彼女を抱きしめた。抱きしめ、落ち着かせるように彼女の頭を己へと引き寄せ胸に抱くと、頭をあやすように撫でた。ビクリ、と彼女が驚いたように身体を跳ねさせたが一夏はそれを気に留めない。

昔、とても昔。まだ自分が小さかった時に”そうして貰った記憶があった”からだ。

何かの理由で泣いて、辛くて、どうしようもなくなつた時にそうして貰った覚えがあった。誰に、なんてのは思い出せない。けれど覚えているのはとても暖かかったという感覚で……………かつて己がそうして貰っていたということを思い出し、リイスに対しても一夏は同じことをした。

「……………ありがと、一夏。ちよつと取り乱した。でも、もう暫くだけこうさせて。すぐ落ち着くから」

「俺としては別にこのままでもいいんだが？」

「———ばーか」

茶化すように言つた言葉に対してリイスは同じように返し、暫くの間一夏の胸に顔を

埋めていた。それを抱きしめ、一夏が感じたのは——震えだ。彼女の身体は、震えていた。

どうしてなのか、とは気になったが今は気にせずただ彼女を落ち着かせるように黙ってそのままにしていた。

暫くして、リースが『ありがとう、落ち着いた』と言ったのを聞いて一夏は彼女を離す。リースは息を吸い、目を閉じて頭を左右に振る。セミロングの銀髪がそれにあわせて揺れ、再び開かれた紅の眼は先程よりは落ち着いているように見えたが、まだ少し動揺しているようにも思えた。

「大丈夫か？」

「ん……。大丈夫、大分落ち着いたから」

「聞いても、いいか？」

「——うん」

「その、金色のISって何なんだ？どうしてリースは、そいつを追ってる？」

その問いかけに対して返されたのは暫くの沈黙だ。リースは暫く沈黙した後、返答を返した。

「——私の、パパとママを殺して何もかも奪ったかもしれない奴なんだ。だから私は、ずっと追ってる。あの金色のISと、あの日の真実を。何で私の幸福が奪われなきやな

らなかったのか、大切な人が殺されなきゃならなかったのかって」

両親が殺されたのは聞いた。だが、それにはそんな事情があったのかと一夏は理解する。そして、考える。自分が知っているその情報と、リースの言う事について。考え、整理していると再び彼女から言葉が来た。

「……一夏、お願い教えて。あいつについて、何を知ってるの？」

「——これ、千冬姉どころか誰にも話してないことなんだが」

ある理由から自分の心の中にだけ仕舞い込んできたその記憶。

絶対に信じてもらえないとも思った記憶。

その記憶と、想い人の追う何かが重なったような気がした。

だから一夏は絶対に話すことはないだろうと思っていた、過去の記憶について彼女に話し始めた。

「俺は、金のＩＳに会ったことがある。三年前に。——信じられないかもしれないけどそいつは多分男で、俺は助けられたんだ。その金色のＩＳに」

狂犬、来る

「どういうこと、それ——」

土曜の昼下がり。寮の自室でリースが聞いたのはとんでもないことであり、それに対しての疑問を放った。

一夏は金のＩＳに助けられたと言ったのだ。そして、それは三年前だと。それは己が両親を殺された時期と一致する。つまり、一夏は同じ年に金色のＩＳに出会っていたということになる。

これは偶然なのだろうか、そうリースには思えて仕方なかった。それを確かめるために、次の一夏の言葉を待つ。

「……東さんの関係者なら、俺が第二回モンド・グロツソの時に誘拐された事も知ってるんだよな？」

「うん、話程度には聞いている。一夏が誘拐されて、それで千冬さんは決勝戦を棄権。誘拐された一夏をドイツ軍と千冬さんが救出したって聞いているけど」

「——正確には、それは誤りだ」。確かに救出に来たのは千冬姉とドイツ軍だった。けど、その前に俺は一度助けられている」

「まさか、」

「俺さ、誘拐された時に暴行を受けたんだよ。暴行されて、殺されそうになった。……最初に連れてこられた時、何か注射みたいなものを打たれて意識が朦朧とした。それで、バイザー付けたリヴアイヴに乗った誘拐犯が言ったんだよ『また失敗作か』って」

そんな話はリイスは聞いていなかった。千冬からも、東からも、ましてやドイツは自分の母国であると同時に味方だ。にも関わらず、ドイツすら知らないことだそれは。聞いているのは、誘拐された一夏を千冬とドイツ政府が救出。その後、千冬はドイツに対して恩を返すために一定期間ドイツ軍の教官を勤めたという話だけ。

怪我をしていたというのはあるのかもしれない。単純にそれだけで報告されなかったのかもしれない。だけど注射を打たれたというのは、どういうことだ。

「……それ、千冬さんとかには言ったの？」

「暴行されたのは話してる。けど——注射のことは言っていない」

「ツ、何で!?!もしかしたらとんでもないものを打たれたのかもしれないんだよ!?!」

「まだ続きがあるんだよ。……とりあえず、最後まで聞いてくれないか」

「あ——うん、ごめん」

『だから謝るな』と一夏は言って、話を続けた。

「注射を打たれた後、そんな言葉を言われてさ。俺は複数人の男と、ISを纏ったその誘

拐犯に暴行された。……普通に殴られたりするだけならまだ耐えられた。けど、加減してたんだろうけどＩＳで直接殴られたのは相当に痛かった。死ぬかと思った」

「大丈夫だったの？怪我は」

「かなりヤバかったけどなんとか。頭殴られるわ、骨折られるわ、拳銃で手足撃たれるわで本当死ぬと思った——実際殺されると思ってた、もう駄目かと思った時に現れたのが金色のＩＳだった」

その言葉を聞いて、リイスは心臓が跳ねたような思いだった。

同時に何かの皮肉かとも思う。自分の想い人は金色のＩＳに関わっていていることにとっても嫌な皮肉だ、そう考え、どうしてと疑問しながら一夏の言葉を聞く。

「突然俺が拘束されていた……多分廃工場なのかな。そこに現れてたった一撃。その一撃で誘拐犯を全員皆殺しにしたんだよ。俺の、目の前で」

「ッ……それは、」

「俺も意識が朦朧としててさ、殺されると思った。——そんな中で見たのがまるで金色の狼のような、龍のような顔をしたフルスキンのＩＳだったよ」

「——そいつ、翼があつた？漆黒の、黒い翼」

「……あつた。一瞬しか見えなかつたけど、廃工場内でその翼を広げてたのを見た。

それで俺も殺される、と思つたら——そいつ、突然動きを止めて俺を見たんだよ」

「それで、どうなったの」

「最初に言ったのは……『想定外だ』って」

リースは唯一金色のＩＳの特徴で覚えていることがある。それは、漆黒の翼だ。あの時、瓦礫の隙間から空が見えた。そこにあったのが金色。金色と、空に対して開かれた漆黒の翼。確信した、一夏が見たのは自分が追っている金色のＩＳだと。

しかし。想定外、それが何を指すのかがわからなかった。

「それでそいつ、意識が朦朧としている中で俺に何かを打った。そしたら、身体が少し軽くなって。視界も安定してきて、その時にハッキリと見えて鮮明に覚えているのが——その金色のＩＳだ。男の声、多分だけど……変声機とかは使っていないと思う。怪我が酷くて声の特徴とかはよく聞き取れなかったけど、男の声だった。それでそいつが言ったんだ」ここで見たこと、あったことは言うな。織斑千冬にもだ」って。その後俺は意識失って、目が覚めたら病室だった」

「訳がわからない、あいつが一夏を助けた？しかも何かを打ったって。それに、男——？」

世界で確認されている男性操縦者は一夏だけの筈だ。それは世界的にでもあり、束の認識の中でもだ。

彼がＩＳを動かしたというのは束にとってもイレギュラーであり、何故そうなったの

かということをや彼女自身未だに解明している状況である。にも関わらず、それよりずっと前。3年前に”男性らしき操縦者”が居た。その話にリイスは驚きを隠せないままで居た。

しかし、嘘ではないのだろうかと思った。織斑一夏という人間はこういった真面目な話でふざけた嘘は言わない。だからリイスは、それを信じた。

「でも、信じるよその話を。……なんで、誰にも言わなかったの？口約束でしょ、破ることも出来る筈」

「誰も信じないと思ったんだ。男がISに乗ってるなんて言ってもあの時は誰も信じない。今は変な話、俺っていう実例があるけどそれでも尚……心の中にしまっておこうと思った。どうあれあいつは俺にとって恩人だ。そんな相手に対して、不義理は嫌だった。だから、誰もその存在を知らないなら放っておこうと思った」

確かにそうかもしれない。3年前、それは今より酷い女尊男卑最盛期真っ只中だった。世間ではモンド・グロツソ出場選手を神聖視する人間も多く、ISを使える人間も強者という考え方も今より強かった。そんな中で男性操縦者を見た、なんて言っても誰も信じない。一夏がそれを言ったとして怪我で幻でも見ていたかどうか、そんなことを言われるのがオチだっただろう。

それに、この話もリイスや親しい人間でなければ信じない話だろう。未だにISを動

かせているのは一夏だけ、彼の場合動かしている現場を抑えられている実例があるからこそ認知されている。しかし、”見たことがある”という程度では誰も信じない。

思う。本当に皮肉すぎる偶然だ。一夏にとっては己が追う金色のISは恩人であり、逆に此方にとっては復讐すべき相手。そこでリイスはますますわからなくなつた。”本当にあの金色のISは何なんだ”と。

しかし、かなり大きな手がかりを掴んだのは事実だ。3年前、金色のISはモンド・グロツソの会場周辺に居た。そして、それは一夏曰く男だつた。リイスは前とは違う、明確な手がかりを掴んだ気がした。だが、同時に感じてしまった——とんでもない深淵を覗いてしまったのではないのかと。

それとは別に、今の彼女には心配することがあつた。それは、一夏が打たれたという何かだ。以前、対抗戦の時に何かを打たれて悲惨な死に方をした生徒が居た。その生徒は男に薬物を打たれたと言つていた。だから、一夏もしかしてと思つて不安になつたのだ。

「……一夏、それで身体に異常はなかつたの？ 多分だけど薬、”2回”打たれたんだよね」

「二応、救出された後に怪我の治療を受けてその際に一通りのチェックみたいなことはされた。けど、怪我以外は問題なしだった。むしろ酷かつたのは怪我の方で、”後遺症

が残らなかったのが奇跡”だったらしい」

「そっか、いやちよつと不安になっただけなんだ。……もしかして、一夏が打たれたのは対抗戦の時のあれと同じ何かじゃないのかって」

「おいおい脅かすなよ。俺はこうしてピンピンしてるぞ?」

「うん。そう、だよね——」

対抗戦の時のあのウイルスは発病タイミングをコントロールできると束は言っていたのを思い出す。しかし、既に3年が経過しておりその間一夏は健康だったという。つまり、一夏が打たれたのはあのウイルスではない何かということになる。では何だ?何を一夏は打たれた?もし、仮に。金色のISが一夏を助けたのだとしたら、少なくとも有害でないものの可能性だってある。しかしそれが何なのか見当がつかない。

考え、思考の沼に嵌まる。リースがその深淵をもつと覗き込もうと思考した時。

「リース」

「え? あ——えつと、何?」

「ちゃんと俺はここに居る。……どこにも行かぬえよ」

思考を中断した。考えることはある、思うこともある。けれど彼は今こうして無事なのだ。ともかくとして、今わかっている事で色々考えなければならぬと考える。

「うん、君を信じるよ一夏。——この話、束さんとかにしても大丈夫?」

「……本当は黙っていようと思ったんだが、リースの事情聞くとな。ああ、構わない。けど千冬姉に言う時はフォローしてくれると助かる」

「うっ……ちよつと、厳しいかも。多分千冬さん凄く怒るよ?」

「出来れば同伴だけでもしてくれろと俺の命が助かる可能性が上がるんだが」

「同伴はするけど命の保証はしない」

「覚悟決めるかあ。あ……俺臨海学校前に死ぬのかな」

大袈裟な。とも思うが、実際にありそうな話なのでなんとも言えなかった。しかし、そこでふと思ひ出す。今は7月。そして今一夏からはあるキーワードが出た。臨海学校だ。

「……しまった」

「どうしたんだよリース。そんな『あいえずっ!』に出てくる真顔千冬姉みたいな顔して——いてっ!」

「私はあんな真顔だけで威圧感満載な顔しないし『ヒュゴウ!』とかも言わない。本当失礼だな君は」

「悪かった、だから無言で立たせてアームロックはやめてくれ!」

「しようがないなあ」

「いつつ……それで、どうしたんだよ」

「臨海学校週明けで暫くしてすぐでしょ。……買い物とか準備してない」

「ああ、準備。準備ね…… あっ」

一夏も何かに気がついたらしい。数秒固まってすぐ、その表情には明らかな焦りが見えた。そして恐らく、一夏の状況はリースも同様だ。ここ数日間時間が取れずそれどころではなかったというのものもある。しかしよく考えてみれば、この週末身内はマドカとクロエ以外全員出かけているのだ。天下のIS学園の生徒がまさか遊びに行っただけだと考えた浅はかさに二人は焦る。

恐らくではあるが全員そのついでに臨海学校の買い物や準備にも出たのだ。とてつもなく不味い。もし、当日に準備してないなんて言ったら千冬に何を言われるのか。間違ひなく粛清コースだろう。

それを恐れての二人の行動はとても早かった。

「リース、提案が」

「奇遇だね、私も。多分同じだろうから一夏どうぞ」

「あー……こういう場合どう言ったらいいんだ？——まだ昼過ぎだし時間あるだろ？」

「うん、というか今日明日は休みだね。土日だし」

「買い物というか、デートに行こう」

そんな言葉に対して、リイスはどこか可笑しそうに。楽しそうに笑った。

「なんか凄い準備に託つけたみたいだね」

「いや、流石にまだ抵抗なく言うのは恥ずかしいというか、なんとというか」

「真つ赤な一夏つて何か新鮮だなあ。——エスコートしてくれるんだよね？後、期待していいのかな？」

「エスコートはするが、その後の期待は何かによる。もし俺が思つてることなら程々にしてくれ、財布がヤバイ」

「大丈夫、私これでもお給金は結構貰つてるから残り少なくなったら安心して。やったね一夏、ヒモだよヒモ」

「すげえ失礼というか不名誉なこと言われたよな今!？ 個人的に絶対それは嫌だから安心しろ」

「冗談だよ、冗談。ん……じゃあ——」

そこでリイスはあることを思い出す。それは、一夏と喧嘩をする前にしていた約束だ。結局喧嘩して、無かつたことになつてしまつたが……今彼とこんな関係になつている今、今度はちゃんとしようと思ひかつての約束をもう一度口にする。

「私から反故にした約束だけど、あの時の約束——もう一度、お願いしてもいいかな？」

私とデートに行こう、一夏」

「……本当、ズルいのはどっちだ。ああ、喜んで付き合うさ」

思う。リースは自分に対してズルいと言った。しかし、今の彼女を見ているとそれはそちらにも言えることだろう。一夏としてはまだ恥ずかしく、抵抗があるその言葉を彼女はかつて果たされるはずだった約束を持ってきて、少し恥ずかしそうに言ったのだから。

お互い様か。そう思い苦笑すると一夏は『んじや、行くか』と彼女に対して言つて二人で部屋を出た。

結局その日、二人で水着売り場に居る所を偶然レゾナンスに居合わせた千冬と真耶に見られ色々と弄られたのはまた別の話。

「突然で悪いが悪い話と個人的にとつともなく悪い話があるんだがどっちから聞きたい？」

週明け。臨海学校まで後数日となったある日の朝のSHR前。マドカは自身の席の周囲に居たリースとクロエ、そしてラウラに対してそんな言葉を言った。

とても深刻そうでその表情にはやや疲れが浮かんでいるように見えた。その姿は完全に社会に疲れ切った会社員のようで、心配そうにその姿を三人は見ていた。

「えーつと……マ、マドカ？大丈夫？」

「そうですねよマドカ、そんな今にも人生辞めそうなサラリーマンみたいな顔してどうしたんですか」

「安心しろマドカ、私がいい医者を紹介してやる！きつとすぐに元気になれる！」

「リース以外辛辣だなあ!?!……本当、切実に休みがほしい。フリーパスもう一週間欲しい……まだ私の期間残ってるが」

「え、えつとマドカ？私まだあれ残ってるからあげようか？」

「……くると生きると生きる気力が湧く」

「放課後にでも渡す。——で。じゃああえて聞くけど悪い話から」

リースの言葉に対してマドカは『実は、』という言葉の後沈黙を作った。相も変わらず表情は深刻そうであり、まさに今戦場にも居るのではないのかという程だ。それ程の事態なのか、と流石に若干ふざけていたクロエとラウラも息を呑み、言葉を待つ。

「……つい一昨日、急遽正式に確定した話なんだが。IS学園に新しく教師が来る」

「へー、教師ですか。教師？」

言葉を返し真つ先に顔色を変えたのはクロエだ。普段のポーカーフェイスや不敵な笑みはなく、普段閉じられたようにしているその眼は開き金色の瞳が見えている。そしてその場で立ったままガタガタと震え始めた。そんなクロエを見て『察したか』と言葉

を返し、未だに理解出来ていない二人に対して言葉が続けていく。

「その教師は私達がよく知る人物で、腕は確かだが口が悪く、そして——實力だけで言えば全盛期の織斑先生と同じかそれ以上だ」

「ま、まさか。ちよつと待つて!?!それ許可出たの!?!」

許可というのは、東やスコールの事だ。その人物はとてつもなく狂犬であると同時に忠犬でもある。そして、彼女は現在諸外国の調査や工作のために動いていたはずなのだ。何をどうしてどうやったらIS学園に来て教師をすることになったのか、リイスには理解出来なかつた。

ラウラも何のことなのかを理解したらしい。恐らくSAN値チエックに失敗したのか『クラリツサあ!クラリツサあ!』等という言葉をスマホ型端末に耳を当てながら叫んでおり、鞆の中の教科書を確認している筈の所に走っていつてしまった。

そのまま筈に泣きつく形になり、筈自身も事態が理解出来ず『なっ、何事だ!?!何があつたラウラ!』などと言いながら肩を揺さぶるが目は虚ろで反応がない。ちよつとした騒ぎになった。

「……生き残つたのは貴様だけか。フッフ、歓迎しよう。盛大にな!」

「マドカも何かおかしくなつてない!?!正気に戻つて! ほら、フリーパス貰うまで死ぬないでしょ!?!」

「はっ……私は何を。すまない、正気を失っていたようだ」

おそらく自分が考えている人物だろうと、確証があった。その人物はまさしく狂犬にして”世界最凶”。恐らく専用機持ち全員が束になっても絶対に勝てる相手ではない存在。確かに口は悪く雑な所もあるが、マドカとリイスは頭の中では理解していた。仕事は完璧であり、義理に厚い。更に言うなら実技教師という立場ならあれ程に有能な人材も居ないからだ。

そして、リイスは恐る恐るその名前を口にした。

「オータ——ま、巻紙礼子さん？」

「……大正解だ。そして恐らく、」

そこでまるで死刑宣告だというように、キンコンカンコンというチャイムが鳴り響いた。それを聞いてリイスは急いで自分の席へと戻ろうとしたが、背後から追い打ちと言わんばかりにマドカからの言葉がやってきた。

「多分、もう来てる。さつきから私の携帯端末にチャットがうるさい」

「えっ」



S H R の時間。教室正面の教壇には千冬が立っており、その表情には彼女には珍しく疲れが見えた。そして、教壇横で待機する真耶もそれを見て苦笑いしている状況。明ら

かにいつもと違う状況に対して一組生徒全員は身構える。『絶対何かが起こる』という考えが全員にあったからだ。

「……おはよう、諸君。実は個別トーナメントが終わり、臨海学校まで後数日になったが今日はお前達に連絡がある。IS学園に新しく赴任してきた先生が居る。その教員には一組の担任補佐と、実技関係の教師をして貰うことになった」

ざわめき出す教室。本来、ただの転校生だとか男装している生徒だとか、こういった新しい教師くらいでは既に一組は動じない。しかし、いつも朝は凜としてる千冬がこれほどに疲れ切っているのは見たことがなく、声にも覇気がないのだ。その教師は只者ではない、そんな予感がしたのだ。

『では、入ってきて下さい』という疲れた声の後、教室の扉が開かれる。クラス全員が息を呑み、既に誰なのかと知っているリイス達は各々異なった反応をしている。リイスは苦笑い、マド力は頭を抱え、クロエはガタガタと震えており、ラウラは『箒クラリツサ箒クラリツサ……』とうわ言のように呟いていた。

扉が開かれ、入ってきたのは女性だった。年齢は若く恐らく20代、茶色のロングヘアに千冬と似た鋭い目つき、スーツ姿。世間体で見れば間違いなく美人と称されるであろう人物が現れた。

「今日からこのクラスの担任補佐と、実技授業の担当になった”巻紙礼子”だ。学園に

来る前は国際IS委員会の実働部隊の実技教導とか、まあ色々していた。あ……教師だからとか、あんまり気い使わずに遠慮なく接してくれていい、というか接しろ。そういう堅いのは嫌いだからな。と、こんな感じでいいか織斑センセ」

現れた巻紙礼子。オータムに対して全員が言葉を失い沈黙した。美人、そこまでは良かった。だがそれに似合わず口調はまさにヤンキーといった感じで、振る舞いや態度も初対面では教師とは思えない程だ。しかし、彼女の”遠慮せずに接しろ”という言葉は生徒たちの心に響いたようだ。

「もうちよつとまともに自己紹介できないですか、巻紙先生」

「これが素だからなあ。取り繕っても着飾っても仕方ねえだろ? —— ああ、そうだろうだ。 ”リース”、お前男出来たんだったな! で、何処まで行ったよ?」

突如として礼子からそんな爆弾が投げられた。同時、クラス全員の視線がリースへと向く。そしてリースはといえば俯いたまま肩を震わせており、そのまま勢い良く立ち上がる、思わず。

「時と場所考えて下さいよ礼子さん!? ぶつ飛ばしますよ!」

「おお……言うようになって姉貴分としては嬉しいぜ! いいぜ、掛かってこい! 久しぶりに特訓してやるよ!」

スパアン! と目にも留まらぬ速さで何かが空中を奔り、軌跡を描いたかと思ったらそ

れは礼子の頭へと直撃してとてもいい音をたてた。彼女は『うごごご……』と言いながら頭を抑え、その一撃を放った千冬を睨みながら頭をさする。

「生徒の前でなんてことを言ってるんですか、巻紙先生」

「いや、だがな織斑センセ？こう、姉貴分としては気になって、」

「弁えて下さい」

「……はい」

「結構です。エーヴェルリツヒ、お前も座れ。肅清されたいか」

千冬に睨まれ、出席簿を今度は投擲の構えで向けられ慌ててリイスは席につく。恐らくあの一撃を受けてはいけない、きつと本気であれを投げられたらいくら自分の反射神経といえど目視できないと思つたからだ。故に急いで座る、少なくともここで死にたくはない。

何故礼子が学園に赴任したのか、恐らくマドカは事情を既にスクールから聞いているのだと考えるが自分は聞いていない。だが、なんとなく予想はついていた。何かしら動きがあつた、ということなのだろう。でなければ礼子を学園に投入するはずがないとリイスは考える。

それ程の何かなのか、そしてそれは——己が聞いた、一夏のあの話に関係しているのかなどと考えながら視線を教壇へと戻せば、そこでは再び千冬が話を開始していた。聞

けば、臨海学校についての日程についての話だった。

一夏の関係が落ち着いて、周囲のことも落ち着いてきた。だから一度、一夏の話に基づき……もう少し束や、協力してくれている人達を頼ってみようと考えるとともに、自分のことについてちゃんと報告しておこうかと、リースは思った。

その謎は深淵

その日の放課後。教員寮の一室には二人の姿がある。リースと、そして礼子だ。まだ学園に来たばかりというのものもあるのか、学生寮とよく似た機能的かつ高級ホテル顔負けの設備の室内にはダンボールが積まれており、二人はそれを開封しては中身を取り出し片付けていく。要するに、リースは礼子に話しついでに手伝え、という事で呼ばれたのだ。

束に保護された後。リースは一度彼女と会っている。個人的に束の所に暫く滞在した彼女と、保護されていたリースが偶然出会ったのだ。そして短期間ではあったが、彼女の師事を受けた経験もある。リースの覚えはよく、またとても礼子には気に入られた。義理に厚く、気に入った相手に対してはとことん面倒見がいい彼女はリースが学園に行つてからも何かと気には掛けていた。

「……それで、なんでオータムさんが学園で教師することになつてるんですか」

「オータムはコードネーム、今の本名は巻紙礼子だ。間違えんなよ? ——まあ、お前に話しておけばマドカに連絡もしなくていいし楽か」

「人を連絡役みたいに言うのやめてくれませんか。……まあ伝えますけど。それで

「？」

「何から話すかなあ。ああ、その接続コードは投影端末があるその机な」

「わかつてますよ。接続やつときます？」

「そこまですんな、流石に自分でやる。そうだな——」銀の福音「って知ってるか？」
銀の福音。その単語についてはリイスは知っていた。既に束や自分達の関係とは別
でドイツ本国からはそれに関しての連絡が来ており、その存在を知る国ではある種問題
になっている存在だからだ。

アメリカ・イスラエルで特殊射撃による広域殲滅を目的に共同開発された軍用 I S で
あり、「制御なし」の I S。全ての装備が競技専用のもとは異なり兵器そのものとし
て機能する状態の I S であり、また使用されているオリジナルコアに対しての出力制限
もない。制御なしの名前と軍用という名の通り、軍事目的で秘密裏に開発されている I
S がこの銀の福音である。その存在には幾つかの国が気がついており、その中でもドイ
ツ・イギリス・フランス・ロシア。そして「アメリカ」からはこの存在に対して対処す
べきという意見や問題視がされていた。

そう、開発国であるアメリカの一部からも問題視されていた。それも、アメリカとい
う国の中ではかなり力のある部類の存在から。

今のアメリカの国内事情というのはかなり複雑だった。派閥が複数に分かれており、

その原因は様々であったがそのうちの理由の1つがIS関係であった。

「アメリカ大統領、”エリック・アンダーソン”を中心とした、国際IS委員会の規定を重要視し、過剰なIS軍用利用に対して反対する穏健派。軍用転移について公には大きく言わないが、事実上それを推奨し新世代ISについても推し進める考えを持つ、IS研究者や過激な考えを持つ政治家集団。そして一部企業に女性の権利をより強く主張する団体が加わっている推進派。主に大きくわけられるのはこの2つであるが、特に後者については様々な思想や考え方を持つ人間が多く、内部の派閥が幾多にも存在する。

「話には聞いてますよ。マドカからもその話はありませんでしたから。……制御なしの完全軍用ISで、オリジナルコアの性能を制限無しで使用しているあれですよね。本国からも連絡ありましたよ、『まあもしあっちがその気ならこっちも軍事として、最悪うちの代表送るからヘーキヘーキ、兵器だけに』とか連邦大統領閣下が言っていましたけど、閣下相当に疲れてるんですかね」

「おいやめろよ、”炎帝”投入とか戦闘地域一帯を更地にする気か。あんな奴相手に戦えるの私や千冬くらいだぞ」

「元気にしてるんですかねあの人。……夏休みに里帰りする予定なんで、閣下にも顔だそうかなあ」

「私、一応スコールやマドカ共々ドイツ保護下だが本当味方で良かったと思つたわ。んで、話の続きだが——近いうちにその銀の福音の稼働テストが行われるって情報を掴んでる。その稼働テストについてだが、色々動きがあった」

「動きつて——アメリカがですか？」

「ああ。しかもかなり複雑で、この私でも追いきれないぐらいの状況みてえだ。……データ送ったほうが早いな。ほら、これだよ。後でマドカにも渡しといてくれ」

「確認させてもらいます。……ナターシャ・ファイルスにイーリス・コーリング。ナターシャ・ファイルスはISのコアに対して母親のように愛着を持っていると聞きまして、どうしてこんな事に」

礼子が手持ちの携帯端末から投影ディスプレイを個人間秘匿情報扱いで投影し、それをリースへと雑にスライドさせた。それをリースは受け取ると内容を確認。そこに書かれていたのは国家における最高機密情報であった。

ナターシャ・ファイルス。アメリカ所属のIS乗りであり、千冬とも面識がある。かつてモンド・グロツソへの出場の話も出たが本人がそれを辞退。遠距離射撃戦において世界レベルの実力を持ち、もしモンド・グロツソに出場していればブリュンヒルデ、もしくは射撃部門最強称号“ヴァルキリー”は確実だろうと言われる人物。金のロングヘアに、モデル顔負けの容姿。その人気も凄まじく、アメリカだけではなく世界的に知

名度・人気度がある。日本で発刊されているISの専用雑誌『インフィニット・ストライプス』にもよくモデルやインタビュ記事として出演しており、学生の中でも人気があった。

しかし彼女自身は、とても温厚でありISに対して母のように接し、子のように大切に扱う人物としても知られている。インタビュでは何度もその発言をしており、ISのコアとは操縦者と共に在る存在だ、とその場で言い切るほどの人間。そんな人物が完全に兵器扱いの軍用ISのテストパイロットとは信じられなかった。

「気になんदろ、何でこんな人間が軍用ISに乗ってんだよって」

「……ええ、とても」

「それな、私も気になって調べた。だが駄目だったんだよ、どう探してもなんでこいつが銀の福音っていう軍事ISに乗る理由や事情が出てこねえ。——あん時と同じだよ、

ここまで言えば解るか」

「あの時って、まさか——対抗戦、亡国機業!？」

「確証ねえけど可能性はある。ISに対して愛情を持つ奴が軍用ISのテストパイロットになってて、そしてその関係者には現アメリカ代表。関係なくても怪しすぎんだろ。

……更に言うなら、まだあるぞ。そのデータ、次のページ見てみる」

「次のページ?」

促され、そのデータを表示する。そこにあったのは一人の人間のプロフィールであり、リイスにとつては見覚えのない少女だった。薄い小麦色のロングヘア。肌は白く無表情、半眼。見たことのない少女であるが、名前を見てリイスは目を見開いた。

「……」エクスカリバー」。アメリカの切り札が、どうして」

「私らは面識あるから」エクウ」って呼んでる。IS適正は現状超希少種のSランク。適正は千冬と同程度と言われ、ぶつちやけまともに相手すると私でも手間取る。昔マドカは前の専用機でやりあったことがあんだけどよ、その時エクウは『プレジデント・オーダー』っていうホワイトハウス防衛専用の準量産型ISだったにも関わらず、マドカを退けてる」

「プレジデント・オーダー。確か現状の量産機の特徴を全て合わせて調整した数量限定機体、ですよね」

「ああ。性能的には第三世代には及ばないが、限りなく近い性能だな。エクウの主な仕事は大統領の護衛。といつても、普段はISに乗らず普通の学生として過ごしている。アメリカのIS専門ハイスクール”セントラルマイスター学園”。そこに通ってる一年生だ」

「IS学園に次ぐ超有名教育機関じゃないですか……」

「頭もいい。けどちよつとコミュニケーションというか、無口な奴でな。ああ、マドカにやたら懐い

てる。——今までアメリカに害をなそうとしたり、大統領を狙ったやつが多くはエ
クウに粛清されてる。たった1人でホワイトハウスを襲撃したテロリストを使用され
ていたISごと壊滅させたり、大統領演説の際に狙撃しようとした狙撃手の放った弾丸
をハンドガンの弾で射線逸らしたり。才能だけ見たらライス。テメエと同じ天才であ
り化物だ」

エクスカリバーという存在は知っていた。アメリカ、ホワイトハウスの切り札であり
大統領の懐刀。1人で世界を回っていた時にも武器商人であるイワンから話を聞いて
おり、ライスは『ホワイトハウスには手を出すな』と言われていたほどだ。しかし、そ
んな存在が自分達と同じような学生で、女性であるとは思いつかなかったのだ。

「そういうえば、なんかあいつ戦闘時に『OK。レッツパーリーイイイイ!!』とか
楽しそうに言うんだよな。大統領の受け売りらしいんだが」

「アメリカ自由の国過ぎないですか」

「ははは、多分手遅れだ。——んで話戻すと、そのエクウが銀の福音の稼働実験に参加
するんだわ。日時までは掴めなかったが近いうちということは確定。ここまで言えば
解るよな?」

そこまで聞いて、ライスはある程度のことを察した。銀の福音と呼ばれる軍事IS
に、世界的有名人のナターシャ・ファイルスに元アメリカ代表イーリス・コーリング。そ

して、ホワイトハウス。アメリカ大統領の懐刀のエクスカリバーと呼ばれる少女。これだけの人間が関わっていることは明らかに何かあるということだ。

アメリカ国内では派閥の対立がある。つまりこれはそれに関わることで、恐らくそこに亡国機業が関与している可能性がある。今後の事と、今回の件についての此方側のカード。そういう意味合いで礼子、もといオータムは学園へと送られたのだ。

「……なるほど。そういうことでしたか」

「流石察しのいい教え子だ。まあ後？個人的な事言うならな？　ちよつと教師つてのやってみたかったつてのもある」

「不良教師じゃないですか」

「ああ!? オープンで接しやすくだろうが!? 私は20代だが、心は女子高生のような純粹さを持つてだな——」

「あつ、もしもしスコールさんですか。礼子さんが暴れてまして、はい」

「おいテメエ!? マジでスコールに連絡してんじやないだらうな!?!」

「えつ、してますよ。——あ、はい。いま出します」

抱えていたダンボールを慌てて無造作にベッドの上に投げると礼子はリスに対して追加で言葉を投げようとした。だが、それはではなかった。リスの持つ携帯端末から通信用のウィンドウが投影され、そこには二人がよく知る人物が写っていたからだ。

『ありがとうリイスちゃん。駄目よ礼子？ 教え子に大恥かかせたそうじゃない』

「ち、違うんだスコール……こ、これは深い訳が」

『実はこつちの貴女の部屋に、不思議なノートがあるのよねえ。あれ……なんだったかしら？ 確かポエ——』

「悪かったリイス許してくれこの通りだ。この愚かな師を許してくれ頼む！」

突如として態度が一変。礼子がリイスへと詰め寄り両肩を掴みながら前後に揺らし、必死の形相でそんなことを言った。リイスとしてはわけがわからない。たかがノートでどうしてそこまで怯えるのか不明ではあったが、礼子にしては珍しく涙目だったので「も、もういいですから」と返す。それに対して彼女は『お、恩に着るぜ……貸しーつだ……』とサムズアップ。

『それでリイスちゃん。礼子を静かにさせるためだけに連絡したわけではないでしょう？ ——これ、東の秘匿回線よ？』

ウインドウの中で白衣を着たスコールがそんな言葉を言った。対してリイスは『ええ、はい』と返答し、こうしてこの場にスコールをも呼んだ理由を話し始める。話すこと、聞きたいこと。そしてそれが集約される事柄は一つ。つい先日、己が一夏から聞いた話だ。

ルームロックを確認し、クロエから貰っている周辺との遮断状態を作り出すプログラ

ムを起動させる。問題なく稼働していることを確認して、リイスは言葉を作っていく。「……ある意味、こうして礼子さんがこつちに来てくれたのは都合が良かったかもしれない。できれば直接、話したいことがありましたので」

『何か掴んだのかしら。亡国について？ それともまさか——』金色』について？』
「後者です」

その言葉を聞いたスコールと礼子の表情が真剣なものへと変わった。先程まで騒いでいた礼子もリイスを見て、何も言わず真剣な視線だけを向けていた。

「手がかりがありました。……それも、とんでもない所に。一夏が金色を見ていました、三年前。モンド・グロッソの会場付近で」

『——それは、本当の話？ 信憑性はあるの？ 黄金は恐らく世織計画にも関わっているわ、だから冗談やデマじや済まされないとわかっていと思うけど』

「本当だと思います。……一夏は、嘘をついているように見えませんでした。それに——私は、彼を信じています」

迷いなく言い切ったその言葉。それに対して礼子とスコールは多少考えるような素振りをしたものの、すぐに苦笑を作る。「変わった」と感じたからだ。以前のリイスならば誰かを信じているとか、特定の誰かに心を許しているようなことはほとんどなかったからだ。それを良い変化だと捉え、「信じている」と言い切ったのだ。だから保

護者であり、大人でもある自分達はそんなリイスを信じた。

「んだよ、惚気かりイス」

『あらあら妬けるわね。——詳しく聞かせてくれるかしら』

此方をからかうようにそんな言葉を投げられ、リイスは呆然とした。てつきりもつと明確に説明が必要だと思つていたからだ。

「信じて、くださるんですか？」

『私達は“OTONA”よ？ それに、貴女がそこまで言い切るのですもの。なら、“OTONA”が“KODOMO”を信じなくてどうするのかしら』

「え、えつとなんか一部発音おかしくないですか？——でも、ありがとうございます」

そして、リイスは一夏からも許可をもらっているということと聞いた事を全部話した。3年前のモンド・グロツソでの誘拐騒動で一夏の身に何があつたのかということ。そしてその金色は“男性”である可能性が高いということ。

『……訳がわからないわね。金色が織斑一夏君を助けた、そこまではまあいいわ。その目的は何？どうしてそこに現れたの？何より、“想定外”とはどういうことなのかしら』

「その事件の犯人な、間違いなく亡国機業なのは確かなんだよ。当時、私も探りを入れたからな。……間違いなく金色と亡国機業は何らかの関わりがあるってのは話聞いてわ

かった。それだけでも大収穫だが——確かにわかんねえな」

礼子とスコールの言葉はもつともであり、それはリースも思っていたことだ。目的が不明、理由も不明。想定外という言葉も理解が出来ない。

ハッキリしたのは、”金色と亡国機業は関わりがある”ということだけ。話だけまとめると、金色は亡国機業と敵対しているようにも思える。金色は自分にとっては仇の可能性がある存在であり、リースにとつては全てが奪われた惨劇の日の張本人でもあるのだ。だからこそ、わけがわからなくなっていた。

『それに、男？つまり男性操縦者ということになるわね。そんな存在が居たなんて信じられないわ。コア・ネットワークは東の監視下よ？もしそんな存在が織斑一夏君以前に居たとしたら、東が真っ先に気がつくはず——待って、』

「スコールさん？」

『……東が生み出したものではない存在だとしたら。もしくは制御できないものだとしたら。リースちゃん、確か貴女の専用機は、後付でコア・ネットワークに登録したわよね？』

「は、はい。私のヴァイスは、東さんが管理していない”イレギュラーナンバーコア”だったらしくて、制作も開発も私の両親が。……どうかしましたか？」

イレギュラーナンバーコアというものがある。それは、東がISというものを生み出

す際に何らかの理由で突然変異をしたコアであり、東ではコア・ネットワーク管理下に置くことが不可能だったコアだ。元々ISにはブラックボックス化している点が多く全てがわかっているわけではない。

そしてそれは「東も同じ」なのだ。一説ではオリジナルISコアは個々に意識を持ち、所有者とコアの相性や同調率によって稼働率への影響や二次移行、三次移行などの形態移行が発生すると言われ、それについては学園の授業でも一種の教義として教えられている。

リースの持つヴァイスは、そのイレギュラーナンバーコアを使用している。詳細はリースにもわかっているわけではないが東が過去に預けたコアだという。そして、それを使用して制作されていたのが世代が存在していないヴァイスという機体だった。そして、「現状確認されているイレギュラーナンバーコアは1つだけである」。

そこまで行き当たり、スコールはあることを確信した。確信し、東に確認を取る必要があると判断した。もし、スコールの記憶が確かなら——「コアの絶対数が467個。それを生み出す過程で生まれたイレギュラーナンバーコアは2個だけである」

東がISを発表したのは今から10年ほど前。白騎士事件と呼ばれる事件があったのは、それと同じ年。イレギュラーナンバーコアのうち1つはリースが保有している。"ではもう1つはどうなった?"もし、イレギュラーナンバーコアを2つともリースの両

親に預けていたとしたら？　そう、スコールは考えた。

それは全て推論だ。明確な証拠はなく確証もない。しかし、確かめなければならぬ。リスからの金色の手がかりと、自分の推測。それをもつと詰めれば何かが見える気がスコールにはしたので。

『……リスちゃん。少し、時間を頂戴。何か掴めそうなの』

「ッ!?それって、」

『でも、何かとてつもなく嫌な予感がするわ。とんでもなく深い深淵、事態は——思っていたより複雑なのかもしれないわね。 ”オータム”』

そこでスコールは名前を呼んだ。礼子、という名前ではなくオータムという名前を。その意味を理解したのか、その眼を歴戦のものへと変えると礼子は“オータム”として返答する。

「……仕事か、スコール」

『仕事、という訳ではないわ。頼みごとよ。今後最優先にリスちゃんを護りなさい。私の権限において貴女の専用機の使用も許可するわ』

「——事態は深刻か？」

通信窓の中のスコールに対して礼子——オータムは低い声で問いかける。オータムという人間は、千冬同様規格外の存在である。亡国機業に在籍していた頃は“狂犬”

や”世界最凶”と称され、IS適性もS+という数値。亡国機業という組織ですら制御しきれなかった怪物であり、天災。そんな存在がただ忠誠を誓うのは己の義理と、スコールという存在だけである。

そんな怪物に対しての専用機の使用許可に加えての最優先命令。事態はそれだけ重大である可能性があるということだった。

『私の嫌な予感があたればとても深刻ね。そうならないことを願って、ちよつと調べてみるわ——わかり次第また連絡するわ、それまでリースちゃん。動いちや駄目よ』

有無を言わさないその言葉に対してリースはただ頷くことしか出来ず、その深刻さというものも感覚ではあるが感じ取った。それを確認したスコールは『さて、』と言って。『早速調べてみるから失礼するわね。……オータム、その子を頼んだわよ。』愛してるわ』

通信が切れた。最後に見えたスコールはどこか深刻そうであり、焦っているようにも見えた。事態がそうである可能性があるというのには理解していた。しかし、何故焦っていたのかということは、リースと礼子には理解出来なかった。

「……なんだ？ どうしてそんな今生の別れみたいなこと言うんだよスコールは」

考え、結局わからず。だから礼子はとりあえず今は今のことを考えようと思い、

「まあ、進展があっただけでも大収穫だ。福音の件もある。今は……そつちに集中して、

やることやりながら考えようじゃねえか」

「——ええ、そうですね。ところで礼子さん、私今日タダ働きなんですか？　一夏との約束断つてまで来たんですけど」

「なんつーか……お前、変わったたよなあ。色んな意味で」

「はい？」

「なんでもねーよ。飯でいいだろ。それも好きな所連れてつてやる。何だったら友達呼んでもいいぜ？　私の奢りだ」

「気前いいなあ、と思いつつリリースはダンボール開封と片付けを再開し、作業をしながら知り合い全員にメールを送っていく。個人間秘匿通信サーバー”兎鯖”で連絡がつくメンバーにはそこで連絡し、即座にマドカ、クロエ、ラウラ、シャルロットからは連絡が来た。全員来るそうだ。」

「結構大勢になりそうだが大丈夫だろうか、などと考えるが礼子が奢ってくれると言ったのだ。恐らく問題ないだろう。」

「この後、何故か一組全域に拡散したその情報で参加可能だった一組生徒が”奢つてもらえる”という話に次々参加した。集まった参加者を見て礼子は最初顔を引き攣らせたが『二言はねえ！』と言い切った。人数が人数だったので、結局千冬と真耶も同伴し、車を出しての夕食というちよつとしたイベントにまでなったのだが、そこでの礼子の対

応が生徒達には『頼れる姉御』というように思われ、教師就任初日から信用を勝ち取ったのはまた別の話。

そして、遂に訪れた。臨海学校の日が。

青年と少女

「夏だー！」

「ウエミダーー！」

「戦場だー！」

臨海学校当日。宿泊先である旅館へと向かうバスの中。一組と二組生徒が乗る車内でクロエ、清香、ラウラはともテンション高めに、それもバスの中でリアクションつきで叫んだ。それと同時に。前方にある教員席から『ギューン！』という音が三度鳴り、まだ移動中にもかかわらずバスの中で立ち上がった三人の頭にゴンツ！という音とともにヒットし、座席へとダウンさせた。

とてつもない速度で投げられたのは三本の缶ジュースだ。それは緑茶であり、日本が誇る優良企業が自販機やホームセンターで格安にて販売している。葉っぱしか使っていない。お茶。投げたのは千冬であり『嫌いぞ三馬鹿！』と座りながら怒鳴る。

「だ、大丈夫かなあ……すごい音したけど」

「俺は何も見えない聞いてない」

「君もそうやって一組に順応していくのやめようよお!?! 正気保ってるツツコミがどんど

ん減っていくとかなり辛いんだよ!」

「許してくれリース、生きるためなんだ……」

自身の彼氏に対して助けを求めると、彼も現実逃避したいらしく窓の外の海を眺めながら見て見ぬふりをしている。だから今度は反対側の席に座っている鈴へと助けの視線を送ると、何やらポストンバックの中を漁っていた。不意に取り出されたのは、古い布によって刃を巻かれた包丁のようなものだ。それを見て鈴は『よし』と何やら頷いている。

「り、鈴……なにそれ？」

「ん?包丁よ? ああ、すぐ片付けるから——はい収納完了」

「無造作にポストンバックに投げ込んだよね今?! な、何に使うの?」

「現地での調理器具よ?何かさつきダウンさせられた三人、海で魚とるとか言ってる。クロエがテレビ番組「いきなり狩猟伝説!」に出てくる芸人とか、なんか島を開拓したりする男性アイドルユニットに影響受けたらしくて、そういうのやるために準備してたって聞いたんだけど」

「この前の『いんすぴれーしょんが湧きました』ってそういうことかあ……」

「それに清香とラウラが賛同。ラウラは軍でサバイバル経験あるみたいだし、清香は鋸をIS用になんかするとか言っていたりしてたわね」

「……臨海学校だよ、これから始まるの」

「諦めなさい。ここは一組よ」

「二組の生徒も居るんだけど」

「既に汚染されてるしモーマンタイ。あなたはそこにいますか的なあれで既にひとつになつてるし一組よ」

「一夏あ！鈴がおかしいよお……」

流石に必死に言われ、見てみぬ振りに良心が痛んだ一夏は現実逃避をやめて対面の席に座る鈴に言葉を投げ、話し相手になる。

それを見てリイスはまだまともな身内は居ないだろうかと周囲を見渡す。マドカは熟睡中、箒は先程ダウンしたラウラの介護、セシリアは席が離れすぎていて確認できないが後ろから本人の悲鳴が聞こえる。視線を自分達が座る対面含めて4人がけの座席を再度見て——見つけた。恐らくまだ汚染されていないであろう人物が。

「シャルロット……もう私ダメかもしれない」

「大丈夫だよリイス、僕はまだ正気だから。元氣出して？ね？ ほら、まだ本音とかもいるし大丈夫だよ」

「本音は絶対汚染されなと思うの私だけかな」

ふと、二人で車内を再度見渡せばそこには混沌とした空間が。一組生徒だけならよ

かった、しかし二組の生徒までそこに加わり不穏な『かつぷりんぐ』とやらの話や携帯端末ゲーム『あいえすっ!』を死んだ魚のような眼でやっていたり。不思議な振り付けとともに『あ ふんぐるい むぐるうなふ くとうるう——』などと儀式をしている生徒が居たり。

そんな混沌とした車内。リスとシャルロットは眼をあわせて同時に頷く。

「う、海が綺麗だねー」

「そ、そうだねシャルロットー」

駄目だった。一夏に全てを投げて、二人は現実から逃げた。数十分後、現地にバスは到着したのだが既にそこには完全に疲れ切った一夏の姿があったということを書き記述しておく。

合宿先である花月荘という旅館へと到着して、荷物を割り当てられた部屋へと運んで。初日は自由時間ということで、各々自由に過ごしているみたい。そんな中私も持つてきている私服に着替えると旅館内を散策している。

旅館の部屋はクロちゃん、マドカと同じだった。やはりというかなんというか。予想はしていたので私は驚かなかったが、他の生徒。主に一組からは別の方向で意見が出

た。要するになんで私と一夏が同じ部屋じゃないのかという話だ。……学園で同じ部屋になっていて言うのはおかしいのかもしれないけど、不味いでしょ。それに一夏だつて1人でゆつくりしたい時くらいあると思う。

残念なことに、一夏は千冬さんと同じ部屋だったけど。ごめん一夏、私には君を救えそうにない。

散策の途中、旅館の中に作られた和風庭園を見つけ、縁側に座るとその景色を眺める。本当和風つていいなあ……日本文化は所々おかしところがあるみたいだけど、こういうのは長い歴史を経て受け継がれているもので、本当にいいものだと思う。

「……どうなってるんだろ、本当」

静かな空間。多くの生徒は今海に出ており、クロちゃん達が何かやるとか騒いでたこともあって多くがそちらに流れている。千冬さんや礼子さんも反応は違っていたけどそちらを見に行っている。だから、旅館内に人は少ない。そんなせいもあってか、とてもこの庭園は静かで、鹿おどしの音色が心地良い。天気も晴れていて、夏ということもあって少し暑い。座る縁側は丁度日陰で、旅館内のエアコンの空気も流れてくるので心地が良いくらいの気温。

……そんな中で考えるのは、あの金色のことだ。

あの金色のISは一夏を助けたという。しかも、話を聞く限り、その動きは完全に亡

国機業とは敵対しているように見える。

しかし、私のパパとママが殺されたあの日——あの場に金色が居て、血塗れの剣を持つていたのも確かだ。

一夏が金色に助けられたのも、私の全てが変わったあの日も三年前。そして、丁度その年はモンド・グロツソの開催年度だった。金色はモンド・グロツソに何か目的があった？そしてあの日の惨劇も、まだ見えない何かが関係してる？

それに、どうしてパパとママは——この子を、ヴァイスを私に渡したのだろうか。結局私は、お義父さんの所に行くまでこれがISであることなんてわからなかった。

わからないことが多すぎる。だけど……金色の手がかりは確かに掴んだのだ。だから、見つけて、捕まえて。真相を知りたい。なんでパパとママは殺されなきゃならなかったのか、私の幸せが奪われなきゃならなかったのか。本当に、あいつがパパとママを殺したのか。

進展はあった。けど、そこまでだ。今はスコールさんの言う情報というのを待つしかない、か。

そこまで考えて、『いけない』と思う。どうにもネガティブな思考になりがちだ、一夏にも気をつけろって言われたのに。思えば今は自由時間で、明日からは色々忙しい。なのに私はなんでぼーっとしてるんだろう。

……でも、何をしようか。今から海の方面に行ったら間違ひなく何かしらの騒ぎの餌食だ。いつもそれを沈静化したりツツコミを入れたりする役回りになる以上、たまにはどうか休息が欲しい。マドカ程ではないけど最近は何色々大変だったんだ。

一夏は——ああ、調理担当とかでクロちゃんに連行されてたつけ。一夏は家事全般できるし、私も楽しさせてもらってるなあ。流石にクロちゃんに連行された時は災難だとは思ったけど。

「——どうしよう。あれ?」

これからどうするか、そう考えていた時。私の視界にある存在が映った。そして、その存在と目があつた。人ではないので、目が合うというのは違うのかもしれないけど。

それは、鳥だ。やや茶色がかつた鳥。しかし鳥にしてはやや大きく——その見た目から、ある種の鳥類を想像する。

鷹だ。茶色がかつた羽に、紺色の目をした鷹。鷹は中型種では50—60センチほどになると以前東さんから雑学として聞いたことがあるけど、それより小さい。多分だけど、まだ成長しきっていない子なのかな。

その鷹はじつと私を見ており、私も目があつたまま固まってしまった。な、なんで鷹がこんな所に?どこからともなくてくくと歩いてきたその鷹と目が合い固まること数秒。こつちへと歩いてきた。

歩いてきて、縁側に座る私の目の前で止まった。相変わずその紺色の目は私をじつと見ている。

「え、えつと……」

どうしよう。というか、なんで鷹がこんな所に。この子の足をふと見れば、タグ？のようなものが付けられている。誰かのペットだろうか、それともただの野生？

鷹というのは猛禽類であり、種類によつては凶暴だったはず。今は私も固まったままでこの子も何もしてこないが、動けば何をしてくるのかはわからない。

IS展開して逃げる……なんていうのは論外。なんで鳥相手にIS持ち出してまで逃げる必要があるのか。というか、そんな発想を一瞬でもした自分を殴りたい。しかし、困った。恐らくこの状態で数分が経過してるように思えるけど、ずっとこの子は私を見ているままだ。

でも、猛禽類って言うけどこうして近くで見るとかわいいかもしれない。丸い目にもふもふしてそうな羽やその身体。時折目をやれば首を傾げるような素振りをしており、やっぱりかわいい。う……ちよつと、触つてみたい。

いや、何考えてるんだ私。猛禽類だよ？鷹だよ？かわいいけどその凶暴な嘴で突かれた日には大怪我だろう。

……だめだ、かわいい。

誘惑に負けて恐る恐る右手をその子に伸ばす、つつかれないか心配だったけど——特にこの子は抵抗することなく、首下あたりを撫でさせてくれている。人に慣れているのだろうか。先程までとは違い、どこか楽しそうに羽を広げたりしてこちらを見ている。

「わ、かわいい。なんで君はここに居るの？飼い主さんとかいるのかな？」

などと言っても言葉が返ってくるわけもなく。その子は『ピーピー』となんとなくだけ機嫌良さそうな鳴き声を返すだけ。うん……かわいいなあ。猛禽類って凶暴なイメージあったけど、イメージだけで物事決めちゃいけないって再認識。

暫くさわっていたという気持ちもあるけど、流石にこの子を放置するわけにはいかないだろう。タイムリングを見計らって旅館の人に報告すべきかな。こんな時、身内の誰かがいると助かるんだけど今は全員出払ってる様子。”兎鱈”にはクロちゃんやラウラから『とつたどー！』などというコメント付きで魚を獲っている画像が貼り付けられたりしている。うん、忙しそうだ。マドカの反応は一切なく、恐らく旅館の部屋で寝てるかなあ……最近お疲れだったし。

今の状態だと、スマホとか取り出すとこの子変に警戒しそうだし、どこかに行つてからっていうのがいいか。と、そんなことを考えながらもこの子を撫で続ける。いいなあ、かわいいなあ、学園……ペット禁止なんだよね。

「おーい、”コン”。どこいったー？ 後探してないのってここの庭くらいか。タグの反応は旅館内だから居るはずなんだが……」

不意に。男性の声が聞こえた。私は鷹——この子を見ていたから背後からの声だけが聞こえた。一夏の声？でも、一夏はクロちゃんに連行されたはずじゃ？

戻ってきたのかな。つまりこの子は、一夏のペットか何か？でも学園ではペット禁止だしそんな話一度も聞いたことないし——

だから私は、事情を聞こうとして『ごめんね』と一言言つてその子を撫でるのをやめると振り向きながら言葉を投げる。全く、どういふことなのかな一夏。君が鳥を飼つてゐるなんて初耳——

「ああ、一夏？この子君の知り合いだったんだ。詳しいこと教えてくれると——」

「——え？」

「……え？」

振り向いて、”その人”と声がシンクロした。

そこに居たのは男性だ。年齢は多分二十歳くらいで、大学生にも見える。何より驚いたのが、一夏とよく似ていたということ。だから最初は一夏かと思つた。けど違う、見た目が大人びており背も一夏より高く見える。つまり私は、勘違いをしてみましたとい

うことになる。

……ただ、その声はとても一夏と似ていて、声だけ聞いたならそのものといつてもよかつた。

「あー……ええと？今名前を呼んだか？だとしたら、人違いじゃないかな」

「え、ええとごめんなさい！声が知人によく似てたものでつい……」

「ああ、なるほど。こつちも驚いたただけだから気にしないで。つと……」
「コン」、此処に居たのか。探したぞ」

”コン”。それがこの鷹の名前なのだろうか。その人は此方に歩みを進めると、その名前を呼ぶ。すると、その子はより一層大きな鳴き声で『ピーー！』と鳴くと突然飛び、綺麗に爪を立てないようにその人の肩に止まつた。

「その子の飼い主さん、ですか？」

「ん？ああ、飼い主だ。悪いな、コンが何かしなかつたか？」

「いえ、最初は驚きましたけどとてもおとなしくていい子でしたよ。人に慣れてるんですね、その子」

「……もしかして、コンに触れた？」

そんなことを聞かれて、私は頭の上に疑問符を浮かべながらも肯定の返答として頭を縦に振つた。するとその人は驚いたようにした後には笑つて

「こいつ、凄いい気性が荒いんだよ。だから手を出してたら暴れられたりしたとでも思ったんだが……驚いたな」

「や、やっぱり猛禽類だから凶暴なんですか」

「ああ、すごく。一応しつければしてるんだが、変に機嫌損ねたりすると多分暴れる」

内心で冷や汗をかいた。しかし、この子は終始大人しかったし——運が良かっただけなんだろうか。縁側から立つと、ちゃんと振り返りその人に向かい合う。

改めて見ると、やっぱり一夏にそっくりだ。髪型といい、見た目といい。身長はやはり一夏より高く、雰囲気は落ち着きと大人びた感覚を覚える。もう一度人違いをしたことを謝るべきだろうか。そう考えていると、

「もしかしてIS学園の生徒さんか？」

「はい、IS学園の生徒ですけど……」

「ああ、やっぱりか。今ここに泊まっているのってIS学園の生徒さんと、一部の宿泊客だけだからもしかしてと思つてさ。——いきなり失礼だったな、俺は怪しい者じゃない。はいこれ、身分証だ」

ポケットから取り出された、ケースに入った身分証を見せられて私は驚いた。それは学生証だ。それも「IS学園と関係のある」。

「IUI……だ、大学の方でしたか！ 本当にごめんなさい。私、大先輩に大変失礼なこ

とを——」

IUI。正式名称は International University of IS。名前が長いため、IUIやIS大学とよく省略される。IS学園は基本的な高等科からのISに関わる教育機関であるのに対して、その上位機関。つまりは大学にあたるのがこのIUI。千冬さんや山田先生もここを出ており、IS学園卒業者といえど合格率は非常に低く、また世界中から志望者が集まるため、まさにISの技術研究兼教育機関と呼べる場所である。

IS学園と違って、様々な学科やカリキュラムに研究の関係上IS大は男性も在籍している。施設自体は人工島であるIS学園から直通のモノレールに乗り、下りた先の別の人工島にあるのだけどIS学園生徒の殆どはIS大の人とは面識がない。曰く、施設内部だけで生活がほぼ完結するのだとか。

「お、おいおい頭上げてくれよ。むしろ俺は礼を言いたいくらいなんだ、丁度こいつ……コンを探してて、もし気まぐれで何処かに飛んでいかれたら旅館の外まで探さなきゃならなかった。ありがとう、お陰でそんなことにはならなかった」

「そうなんですか——駄目だよ君、あんまり飼い主さんに迷惑掛けちゃ」

肩に止まるこの子、コンに対してそう言うとか方の言葉を理解しているのか『ピー……』と若干沈んだように鳴き声をあげる。それに対して『反省してるみたいだ』とそ

の人は苦笑しながら言う。

「学生証にも書いてあるが、IS大の織原 ハルト（おりはら はると）だ。此処にはちよつとした旅行できてる」

「ご旅行、ですか？ 大学の夏休みつて早いですね」

「あー……いや、その。なんというか、」

「え？」

「ぶつちやけサボリだな、うん。……いや、単位とか足りてるからいいかなつてことで、今年には研究室とか以外授業入れてないんだ」

「つまり暇人、という奴ですか」

「中々決る後輩だなあ……」

「あ——ご、ごめんなさいつい知人に対してのノリで…… えと、私はリイス・エーヴェルリツヒといいます。IS学園の一年生です」

私の名前を聞いた瞬間。この人——織原さんはほんの一瞬だが固まったように見えた。再度見れば変わらさず落ち着いたような好青年といった表情を浮かべている。気の所為だったかな。

「エーヴェルリツヒさんね。この時期に学園の団体さんつてことは、臨海学校か。そういえば、大学の方にも学園の予定表みたいの出されてたな——しかし、間違えるほど

似てたのか？その知人さんと、俺」

「大変言いにくいんですが、とても。最初声だけでその知人かと思っちゃいました……」
「あー……もしかして、”一夏”って織斑一夏君か？ I S 学園に居るっていう。よくそのネタでからかわれるよ、うちの研究室のやつにも。 I S 動かせるか試すから人体実験させるとか、遺伝子おいてけとか冗談半分によく言われる」

「既にネタにされてたんですか。なんていうか、 I S 大つて魔境なんですけどね……」

「いいところだぞ？生活には不便しないし施設も文句の付け所がない。——魔境なのは否定しない。是非大学への進学をお考え下さい命の保証はしない」

真面目に I S 大には進学を考えていたけど、そんなにとつてもない所なんだろうか。それとも、一部がそんな感じなだけなんだろうか。……なんにせよ、一応覚えておこう。「さて、コンも見つけたし。ちよつと用事があるんでこれで失礼する。再度になるけどありがたい、助かった」

「いえ、私も貴重な体験もできましたし、大学の方とお話できて光栄でした」
「挟るけど礼儀正しくていい後輩だなあ……！うちの奴等にも見習わせたい。それじゃ、大学に来る用事があつたら是非声かけてくれ。多分名前ですぐ見つかると思うから」

そう言って、肩に大人しくしているコンを乗せ来た道を戻りながら、背後であるこち

らに対して手を振る織原さん。しかし、大学の人って珍しいし一夏に似てるし、不思議な人だったなあ。

そして改めてやることがないと考える。

……仕方がないから、海の方にも今から行こうかな。

スマホ型の携帯端末を取り出して通知を見てみれば、一夏やシャルロットからのＳＯＳチャットが。どうやら、何を血迷ったのかセシリアに釣った魚を料理させたらしい。それが発端になって大惨事になってるんだとか。

ため息をつくとき、私は海へと向かうために旅館の出口へと向かった。

静かな夜がある。空には月が輝き、夏の星座が夜空を彩る。

月の光に照らされ、水面が光を反射する。幻想的、とも呼べる光景。その光景が見える浜辺に一人の人間が存在した。

それは、男だ。背はやや高く、年の程は見た目から二十歳程。

彼が歩く浜辺からは、遠くにリース達が宿泊している旅館が見える。昼間であればこの浜辺も人で賑わうのだが、今はその姿も一切ない。

そんな中、彼は浜辺を一人で歩く。

「皮肉なもんだ」

眩いたのはそんな言葉だ。

何に對して、というのはわからない。

だが、その表情は嫌なものではなかった。

「けど、生きていてくれて良かった」

笑う。青年は笑い、星空を見上げる。

見上げ、ポケットに突っ込んでいた右手を星空に對して——掲げた。

チャリ、という鉄同士が触れ合うような音が聞こえた。

それは青年の掲げた右腕からだ。

そこにあるのは黒に黄色のラインが入った紐のようなものであり、

その音は剣と翼を象つたような、その紐に付けられている装飾物の音だった。

「……大丈夫さ、全部俺がなんとかする。それが約束、それが誓い。それが、俺の願いだ。その為に俺は生きている」

青年の表情から笑顔が消えた。

彼の視線は夜空の星ではなく「夜」に對して向けられており、眩くように。覚悟の

籠った言葉を言った。

「君は俺が護る。

——その為に、何度だって滅ぼしてやる」

その姿、大和撫子で在れ

合宿二日目。リースや一夏をはじめとした専用機持ちと専任整備者である清香、そしてデータ担当でこき使われているクロエの姿は一般生徒の装備実践会場とは離れた浜辺にある。教員の姿は千冬と礼子のみであり、真耶は他組の教員とともに一般生徒達の指導に行っている。

一部の生徒からは『千冬様に躰けられたい！罵りながら教えてもらいたい！』だとか『礼子お姉さまに蔑んだような目をしながら口悪く暴言吐いて貰ってその後』、『仕方ねえな……』って感じで教えてもらいたい！』などと叫ぶ一組と二組の生徒が多発した。既に慣れきった千冬はともかく流石に礼子もこれにはドン引き、思わず全力ダツシユで専用機持ちの試験場所まで走っていった。なお、この時の走る姿は生徒に目視できず、『巻紙先生はN I N J Aなのでは？』という噂がことしなやかに囁かれた。

そしてこの場には、箒も呼ばれている。『やだああああ！』などと駄々をこねるラウラをなんとか引き剥がしながら一般生徒の訓練会場へと行こうとした際、千冬に止められたのだ。お前も来い、と。箒は自分は専用機持ちではないと言ったが、どうやら特別に用があるらしいとのこと、納得行かないままついてきた。

「さて、本日より機体や武装の稼働テストが開始される。貴様等が入学して数ヶ月、専用機との同調率やバイタルの変化というものがあつただろう。それを計測するという意味合いで専用機持ちには集まってもらつた訳だが、実は——」

その時、地響きが響いた。同時に音も。何かかと思ひ専用機持ちには音源を見れば、そこには崖を走りながら土煙をたててつもない速度でこちらに向けて走る人影が。

そこで千冬が一度言葉を切る。そして、何故か専用機や打鉄の装備とともに持つてこられていた——初日にスイカ割りに使用したという、形の良い棍棒を突然拾い上げるとそのままそれを礼子へとパス。同時にサムズアップして『やれ』という言葉。対して礼子は満面の笑みでサムズアップを返す。

棍棒を受け取つた礼子が、慣れた手つきで。一切の躊躇いもなくスイングの構えを取ると——

「ぶつ飛ベクソ兎イ！」

「ちよつと旅行いつてくるねー！すぐ戻るよー！」

その走つてきた何かが晴れた青空へとぶつ飛ばされた。そのままその何かは空に飛ばされ、セルフで『キラーン！』という声を出しながら見えなくなつたあたりで発光。なんとも演出に凝つている。

何事もなかつたように礼子は持つていた棍棒を元あつた場所に戻すと満足げに頷く。

一連の流れを見ていた全員は数分間固まることしか出来ず、丁度「げんじつとうひ」という形で理解しはじめた数分後。

「たっだいまああああ!!!」

「おうクソ兔。土産は？」

「誰がクソ兔だよ誰が！言葉遣いに気をつける狂犬！——はいこれ御土産、ちーちゃんと適当にわけて！」

再びセルフで『キラン！』という音とともに光ると、そのまま全員が居る浜辺の岩場に爆音を立てて着地。その存在、もとい束は礼子に対して文句を言いながら空間に手を突っ込み、そこから何やら色々に入った袋を取り出して手渡す。

なお、現在この近辺は立入禁止扱いである。なので束と面識がない専用機持ちは完全に対応しており、身内の人間達は『ああ、いつものことか』くらいの感覚で慣れたように対応し、束から御土産を受け取っていく。

流石に見かねたのか、その御土産の一部を受け取りながら、千冬が生徒達に対して助け舟を出す。

「……束、うちの生徒が困惑してるから自己紹介くらいしてくれ。後どこまで飛ばされてきた？何故私の土産袋にたこ焼きセット。それもたこ焼き器込で入ってる」

「ちよつと関西方面まで飛んだかなあ。海だしちーちゃんならタコくらい穫れるでしょ

？」

「お前をたこ焼きにしてやろうか」

「多分それタコじゃなくて兎だね！——ああ、その有象無象の諸君。私は篠ノ之東、覚えても覚えなくてもどっちでもいいよ」

投げやりな自己紹介。しかし、「東」という名前には当然ながら全員認知しており、彼女と直接的な面識がない鈴、セシリア、シャルロット、清香は困惑した。そして面識のあるリース達も驚いてはいた。臨海学校に来るといふ話は聞いていなかったからだ。しかし、今の状況でどういふことなのか聞こうにも、場が混沌としすぎていて聞けない。どうしたものかとリース、マドカ、ラウラは顔を見合わせていると——

「東様、お元氣そうで何よりです」

「おお、くーちゃん！くーちゃんも元氣そうだね！リーちゃんの盗撮写真とか色々送ってくれてるアレ、東さんの生命源になってるよ！」

何か今、とてつもなく嫌なキーワードが聞こえた気がする。そして恐らく、それはクロエも共犯だったのだろう。後で締め上げる、そう思いつつリースは自分を自制し、今にも暴れそうになっている所を『落ち着け、頼むから落ち着け』とマドカに宥められる。「それはなによりです。このクロエ、東様のお役に立てたのならば恐悦至極です」

「やっだなーくーちゃん！いつものようにもうちよつと砕けたよう、に……く、くー

「ちゃん?」

「どうなさいましたか東様?」

「な、なんか怒ってる?」

「いえ? 全くそんなことありませんよ? 東様よく見たら顔に疲れが出てるとか、常飲

されている『24時間耐久ドリנק』勤務打破』の匂いがあるだとか、そのせいで若

干このクロエ。不機嫌だとかそんなことありませんよ?」

「怒ってるよね?! ねえそれ怒ってるよね!」

完全にそっぽを向いてしまっているクロエに対して、涙目になりながら謝り倒す東。

何はともあれ、クロエがキツカケを作ってくれたことには変わりないと思い、リイスが

言葉を作る。

「クロちゃん、東さん泣きそうだからそれくらいで……」

「リーちゃん! リーちゃんは本当優しいなあ……!」

「——後ほど盗撮の件でお伺いしたいことがあるので覚悟して下さい」

それがとどめになったのか、東は完全に沈黙した。

「それで、どうして東さんがここに?」

「えぐつ……えぐつ…… あ、うん。実は連絡とかお話とか色々あつて来たんだけど、と

りあえず——空見てくれるかな?」

泣き真似を止めて何やら人參の形をしたボタンを取り出し、そのスイッチを入れる束。どうということなのか、そう思い全員が空に目をやると——ズドン！という音がすると同時に何かが浜辺に降ってきた。

それは、銀色の塊だった。展開状態のISを梱包して保管するための、特殊な金属で作られたISケース。専用機持ちならば必ずといっていいほど目にしたことがあるもので、学校の授業でも教えられる。だからこの場の全員が、何かしらのISが降ってきたということは理解出来た。

「じゃじゃーん……これぞ、白式と黒式に並び立つ最後の系譜！その名も『紅椿』！」

現れたのは『紅』だ。梱包している金属が四方に割れるようにし、地面に倒れるとそこには固定アームに設置された展開状態の紅のISが存在した。その全身を朱漆の色に包み、関節部は金色に塗装されている。背部には非固定浮遊部位として一對の大型ウイングバインダーが存在しており、両腰には長刀とも言える長さの日本刀のようなブレードが存在している。

話には聞いていたリス、マドカ、クロエはそれを見て遂に来たのか、というくらい考えたのだが……何故東がこの場にこの機体を持ってきたのか、というのはわからなかった。そもそも話、東が来ることも話として聞いていないからだ。

白式と黒式は特殊な機体である。公式上では兄弟機とされ、一撃必殺の性能と出力を

持った白式。継続的な近接大火力を主眼に置かれた黒式という認識である。黒式に限っては、単一仕様が公表できるものではなく、あくまでスペック上の話のみにはなっているが。

東はこの二機とそれに続く最後の機体のテーマを錬金術だとかつて言っていた。黒化（ニグレド）、白化（アルベド）、赤化（ルベド）。その三機を以って今後の事態への対抗策。つまり、亡国機業と金色に対する対抗手段とするというものだった。しかし、問題がある。白式には一夏が、黒式にはマドカが搭乗している。では最後のこの機体、紅椿には誰が乗るのか。

適正値の話をすれば一夏と箒が暫定B、リイスとマドカにセシリアがA＋、シャルロットとラウラに鈴がAとなる。この場にいるクロエについても適正はA＋であるが専用機保有者ではなくオペレーターであり、清香については整備士であり適正値が極めて低いD。そこから専用機保有者を除外して、更に東の関係者のみに絞ればある程度答えは出て来る、のだが……

「——ヤッ、」

それまで楽しそうに紅椿の紹介をしていた東がいきなり真面目な顔になった。顔には貼り付けられた笑顔があるものの、雰囲気は全く違う。そのまま彼女は箒の所まで歩いていくと、厳しい顔をした箒に面と向かって言葉を作っていく。

「やあやあ、箒ちゃん。久しぶりだねー元気にしてたかなー？——こうして会うのは何年ぶりかな？ 学園に行つて色々あつたつて聞いたからね、東さん心配しちゃったよ」

「……ええ、お久しぶりです姉さん」

全員の中に予感はある。恐らく、紅椿に乗るのは箒だろうと。

箒は本来専用機を持っていない、だから彼女も最初一般生徒と同じ場所に行こうとしたのだ。にも関わらず、特別な理由があるということでの場に呼ばれている。そして彼女は篠ノ之束の妹でもある。だからこそ、消去法でも行き当たり、そのような立場であるということも考えてそうなのではという予想はあつた。

「今まで大変だつたよね箒ちゃん。きつと他者に私と比較され、特別扱いされ、きつと嫌なこともあつたよね？ ……無力さを恨んだこともあつたよね？」

「——何が言いたいんですか」

「そんな怒つたようにしないでよ箒ちゃん！ ……東さんはね、箒ちゃんに贈り物を持ってきたんだから」

そして束はその場で楽しそうにくるくると回ると、佇む紅椿を指差した。

「——絶対的な力、欲しくない？」

それはまるで、悪魔の囁きだつた。

とても甘美で、手を伸ばしそうになる。そんな誘い。

人である以上、そんな誘惑には簡単には逆らえない。ましてや、篠ノ之箒という人間はある種、誰よりも力を欲していた。

箒は今この場にいる、周囲の全員に対してコンプレックスを抱いていた。劣等感、それが心を苛み蝕んでいた。『自分に力があればどれだけいいか』そんな事を彼女はもう数えるのも嫌になる位に考えた。

だからこそ、今束がしている話というのは最大のチャンスだ。絶対的な力というだけで見れば、最新鋭の専用機を手に入れるチャンス。自分は頷いて、手を取るだけでいい。それだけで最高の力が手に入る。そんな話を前にしての箒の答えは、決まっていた。

「馬鹿にしてるんですか姉さん？そんなもの、私は欲しいとは思いません。……むしろ、今の私にはその力は不釣り合いです」

”まったくもってくだらない”。そんな風に箒は自身を嘲笑するように笑い、言い切った。



きつと、少し前の私なら……手を伸ばしていただろう。

姉さんに対して、力が欲しいといっただろう。それこそ、何の考えも無しにだ。けど、今の私は違う。違うからこそ——私は返答を返した。”そんな他者を見下すような力はもういらぬ”と。

「……どうしてかな？この紅椿は”第四世代”。現行最高位の性能を持つ、まさに絶対的な力だよ？」

「簡単な話です。『他人から貰った力は自分の力ではない』、などとはいけません。ですが……私には、そんな大きな力を持つ覚悟も資格もまだありません。もし、何の覚悟も、意思も無しにそんな絶大な力を手に入れればそれはただの暴力の塊です。信念、意思、覚悟、それが無い力などただの暴力でしかなくて、それこそISはただの『暴力』になります。姉さん、私を試しているんですか？それとも、本当にそう言ってるんですか？」

「……言ってる意味がわからないな、箒ちゃん」

力がほしいかと聞かれれば、欲しい。私は他人に対して誇れることなんて剣道くらいで、ISの適正は並かそれ以下。常に姉さんと比較され、優劣をつけられ、対人関係においてもそれはあった。いつからだだったのだろうか、他人に対して常に疑心の目で見るといったのは。 ”また姉か” というような目で見るようになったのは。

私は、人付き合いが昔から上手くない。小学生の時なんて、無愛想だとか色々文句をつけられてそれで虐められたりもした。転校を重ねた中学時代、投げかけられる言葉や態度というのは大抵が媚び諂ったようなものばかりだった。明確だったのだ、姉さんのとの何かを求めて私に対して関わりとうとしていることが。生徒からはそんな態度と、どこか避けられるように接しられ教師との会話にも常に姉の存在が垣間見えていた。……元々、友達と呼べるような相手なんて一夏以外では学園に来てからできたようなもので、つまるところ私はそれまでぼっちだったのだ。

小学生と中学時代そんな学生時代を送り、IS学園に来てからは最初“一夏の為に”という理由で力を欲した。元々他の友人なんて居なかったのだ。だからそのためなら、他人なんてどうでもいいと思っていた。今の社会は女尊男卑だから男である一夏は私を見るだろうという勝手な思考、そして一夏さえ私を見てくれれば、“私だけのものになつてくれればいい”と考えていた。

……けど、今はそう思わない。私は、一夏への想いに決着を付けたからだ。そして、恐らく生まれて初めてできた一夏以外の友に教えられた。他人に頼ることを、友として誰かを見るときを。それを私に教えてくれたのはラウラだ。その友は、私の話を真剣に聞いて、考え、動じずに意見をくれた。そこには姉の影なんてなくて、ただ一人の『篠ノ之箒』として見てくれる相手が居た。

私の世界は変わった。教えられ、助けられたからだ。だから私もそれに報うことができるような、一人の友として、姉の影響を受けた誰かではなく『篠ノ之箒』として在ろうと決めた。

故に。私にはそんな他者を圧制するような力は不要だ。

見下し、否定し、拒絶し、妬み。そんな自分はもう必要ない。

そんな力は、『篠ノ之箒』は欲しくないッ！

「この際ですからハッキリ言います。私は、姉さんがあまり好きではありません。ですが——嫌っているわけでもありません。姉さん、姉さんがISを作った当初の目的は何ですか？ 私は覚えていません。姉さんが『宇宙を屈指したい』と言っていたのを。あの時に姉さんが言っていたことが本心なら、姉さんは……『ISを兵器としてなんて作りませんよね？』そう考えたら、その問いかけは、私の推測でしかありませんが姉さん自身のそんな意思を否定している。だからこそ、私は思ったんです——姉さんは私を試しているか、それか心変わりして完全にISを兵器として見るようになったのか」と

”もし後者なら”と私は言った後……言ってやった。

「私が敬愛した姉さんはもういないのだと、そう判断して絶縁です」

目前で姉さんが目を見開いた。てつきり、泣き真似だとか何かふざけた返答でもする

のかと思つたのだが——そんな素振りは一切ない。

目を見開き、笑つたのだ。どこか満足そうに。

それは、貼り付けられたような笑顔ではない。私の知る、幼き日に見た……私が敬愛していた姉さんの笑顔だ。

「……意地が悪かつたかな、ごめんね箒ちゃん」

「本当に悪趣味です。今後やめてください。——紅椿、と言いましたか。その機体を渡すなら、もつと適任が居るでしょう。少なくとも、他の専用機持ちは私などより遙かに才に優れています」

私には一夏程の知識吸収速度や操縦センスはない。篠ノ之流という剣術にしても、皆伝している私より一部の技術については一夏のほうが上だ。リースのように異常な反射神経に……恐らくではあるが、場馴れしたような経験もない。彼女のように周囲をまとめる力もない。

セシリアのように上手く他人に対して気を遣つたり、鈴のような他人の背中を押すようなことができるわけでもない。シャルロットのような優ししさや、ラウラのような無垢さがあるわけでもない。マドカのように……なんというか、手際よく仕事ができるわけでもない。

他の周囲を見てもそうだ。清香のようなISに関わる国家資格を持つわけでもなけ

れば、クロエのような順応性を持つわけでもない。他人と自分を比較した時、自分にとってこのI・S学園という環境下で誇れるものがないのだ。だから、ケジメをつけてお私は悔しかった。代表候補生や特別な存在ではなく、一般的な生徒として自身を受け入れる。それもいいだろう。しかし私は——見つけたかった、何かを。

でも、それがなんだろうかと今でも考え続けていて、見つからない。自分らしさとか個性なんてものを、今まで考えたことがなかったから。だから、今は何も無い私にそんな紅椿という力を持つ資格もなく、己に覚悟もない。受け取るわけには、いかなかったのだ。

「……きーめたっ！」

突然、姉さんが頭の上の兔耳を動かしながら笑い、その場で跳ねた。同時にそんなことを言ったのだ。

「やっぱり紅椿は箒ちゃんに」託す！決めた！決定事項！拒否権あるけどなーし！」

「は……？いえ、ですから——」

「うんうん、お姉ちゃん嬉しいよ。暫く見ないうちに立派になつて。やっぱり箒ちゃんには大和撫子って言葉が似合うね！あつ、私がふしぎの国のアリスで箒ちゃんが大和撫子。丁度いい感じじゃない？」

「ですから姉さん、私はそんな力など欲しくなんて、」

「託す」って言ったんだよ、箒ちゃん」

楽しそうに笑い、その場で回っている姉さんが動きを止めた。

向けられたのは、笑顔がない真面目な顔。だが、その目は……昔見た、優しいものだった。

「いらぬなら託させてよ。箒ちゃんの意味じゃなくて私の意思。本当はさー、束さんの採点でもし箒ちゃんが駄目だったらリーちゃんとかくーちゃんにでも、って思ってたんだけどその必要なんてまったくなかった。だから託させてよ、今後のためにも、束さんの個人的な我儘のためにも」

「今後？それに、我儘とは——」

「我儘については教えてあげない！……でも、今後についてはちゃんと話してあげる。今じゃないけど、後で必ず。で、どうかな箒ちゃん？受け取るかどうかは、箒ちゃん次第。束さんの”願い”と我儘、聞いてくれる？」

勝手だ。いつもこの人は勝手だ。

いつも自分の好きなように動いて、周囲をかき回して。その結果としてISが生まれ、今の社会が完成した。女尊男卑。その引き金を作ったのは姉さんだ。私の人生を曲

げて、家族全員を引き裂いたのもこの人のせいだ。

……けど、私には憎みきれなかった。あの日見た姉さんの笑顔と、言葉を鮮明に覚えていたから。宇宙を目指したい。自由に空を飛んでみたい。幼き日に言われた言葉は、きつと——この人の切実な願いであり夢だったと想うから。

そんな勝手な姉さんが、私に対して託すと言った。それは、普通なら絶対に姉さんからは出ない言葉だ。何かしら事情がある。というのも気にはなる。もしかしてそれは……これまで学園で起こった事件に関係しているのか。

私は、姉さんがあまり好きではない。でも、憎んでもいなければ恨んでもいけない。姉さんには夢があつた。その夢に向つて純粹だった。そう思うから。

「諸々面倒がないように束さんが手配するよ？どうしても駄目だつていうなら、仕方ないけど——」……わかりました「あら？」

息を吸う。私は力はいらない。今の自分で自ら力を求めれば、きつとそれを制御できないと感じたからだ。

けれど、託されたものなら。何よりも姉さんは私に託すと言つた。そこにはきつと、姉さんの願いがあると。あの日の想いがあると、私は信じたから。

「——託されましょう。今一度だけ、姉さんを信じます」

姉さんとの関係なんて、ずっと複雑のままだった。直接会うのだから数年ぶりにな

る。複雑で、きつとまだうまくやれなくて。私は人付き合いが下手だから、時間は掛かるかもしれないけど。

姉さんを、信じてみようと思った。託されたものはきつと重いものだろう。だけど私は……その信じるという心で、それに応えてみようと思った。

形成す歯車

「……何考えてるんだろう、東さんは」

専用機持ちと、一部の人間だけが居る浜辺。そこに突如現れ、『紅椿』を箒に渡すと言った束に対して思うのはそんな言葉だった。

紅椿。知る限りでは白式と黒式に並ぶ最後の機体であり、束の手製なのだ。だから、破格の性能だろうというのは感じ取れた。しかし、彼女はとんでもないことを言ったのだ。『第四世代』と。

現在、各国のISは第2世代機が現役であり各国代表や候補生の専用機が第3世代機のデータ収集を行っている段階である。最近になって、公式上第3世代の量産化に着手したデユノア社でもシャルロットの専用機「ウエンテイ」でデータの収集を行っている段階であり、今の世界では『進化しても第3世代』という認識であった。

第2世代は『外部要素による機能の多様化』。つまり、後付で機能を多機能化させるというのがコンセプトである。ラファール・リヴァイヴなどはその代表的な例であり、現在量産化されている主流機体の殆どはこの第2世代である。

第3世代は『イメージ・インターフェースを用いた特殊機体』。未だ量産化には至って

おらず、最近になってデユノア社がこの世代の量産機開発に乗り出した。それに合わせるように世界的 I S シェア 一位の『ネクスト・インダストリアル社』がデユノア社との協力を申請。が、まだ問題点も多く特に燃費の問題などが大きいことから、機体数はそこまで多くはない。

そして先程東が言ったのは『第四世代』という単語である。四世代型の I S、つまりこれは…現段階では存在していない I S なのである。

「気になりますか、リース」

「クロちゃん……。気になるよ、だってあれは——今後の対策のための、世織計画や金色に対するためのの機体だよ？ どうして、箒を巻き込むようなことを」

「リース、織斑さんと付き合うようになって治ったと思いましたが……まだ治ってなかったんですか」

「……え？」

「巻き込む、巻き込まないの問題ではないのだと思いますよ。きつと東様には何かお考えになることがあるんでしょう。だから——託すと言ったのでしよう」

「あ——ごめん、クロちゃん。またやっちゃったね……信じようって、頼ろうって決めたのよ」

「織斑さん聞いてたら怒ってましたよ？ 駅前の@クルーズのクレープで手を打ちましょ

う」

現金だな、と思いつつリイスはクロエに感謝した。きつと、その茶化するような言葉も含めて自分を思ってくれてのことだと思つたから。

しかし、これで三機が揃つたことになる。スペック上だけで見れば白式と黒式は三世代の中でも最高峰の性能。そして紅椿は四世代というのだから、それを凌駕する性能なのだろう。礼子も学園に来て、此方の戦力は万全と言つていいとリイスは思つていた。万全の態勢、だが……気になることがあつた。

あの対抗戦での一件以降、亡国機業は自分たちの前に姿を表していないのだ。そして束やスコール、礼子の搜索にも引つかかつていない。何もなければそれでいい、だが——それが逆に、不穏にも感じた。

何かがあるとするれば、この臨海学校。もしくは近く行なわれるという、銀の福音の稼働実験だろう。無論そのための対策はある、が……何をしてくるのかが予想できない。警戒しすぎだろうか。そう考えて、溜息をつくとクロエへと言葉を作つていく。

「……一夏に怒られるのは、やだな。心配もするし。高いのは駄目だよ。」

「流石ですリイス、そんなリイスが大好きです。ところで、昨日どうしてたんですか？海に来るの遅かつたですし結局泳がなかつたじゃないですか——織斑さんに選んでもらつた水着、着ないんですか？」

「う……いや、その。見られるの恥ずかしいってどうか。えっと、ちよつと旅館のほうで変わったことがあって」

「かーっ！ 惚気、惚気ですよ！ 海水が甘くなります！ それで、変わったこととというのは？」

思い出すのは、昨日のあのコンという鷹の子と、織原ハルトという人のことだ。思えば、鷹に触るなんて経験初めてだったし大学の人と話すのも初めてだった。大人びた、落ち着いた人だったなあと思いつく。一夏に似ていた、ということもあつてもし一夏が彼くらい年齢になつたらあんな感じなのかと考える。

「鷹と遊んでたり、その飼主さんとお話したり。IS大の人らしくてね、ちよつとびっくりした。織原ハルトさん、つていう男の人で。どことなく一夏と似てたかな」

「鷹つて猛禽類ですよ、大丈夫だったんですか。なるほど……ナンパされていたと。リス、かわいいですもんね」

「そんなんじゃないよ、鷹の子が迷子？ でさがしてたらしくて、それで偶然私はその子の相手してるところに鉢合わせただけ。学園の子かつて聞かれて、それでそうですって返してそこから雑談してただけ。でも、学園の日程つて大学の方にも張り出されるんだね、私知らなかったよ」

「……………え？」

突然、雑談程度の話をしていたクロエが固まった。不思議に思いリイスはクロエへと顔を向ければ、そこではクロエが固まっていた。

「どうしたの、クロちゃん。鷹の子は大人しかったよ？大丈夫——」

「違います、リイス。——学園の日程は大学には掲示されません」

「……え？」

「IUI……I S大には男性も在籍しています。そして、I S学園以上に多くの方が通われています。ですから機密保安の關係上、I S——特に専用機などが関わるような訓練が行なわれるものについての情報規制という意味合いで、”学園外部”には公開していません」

リイスの心臓が跳ねた。公開されない？そんな馬鹿な。昨日会ったあの男性は間違いなくI S大の生徒だと名乗り、そして顔写真までついた真正正銘本物の学生証を提示してきた。I S学園やI S大の学生証の表面には特殊な電子コードが印字されており、その複製は不可能だ。そしてそれは、彼の学生証にもあった。つまり、学生であることとは間違いないのだ。

「……嘘。でも、間違いなくあの人の学生証は本物だったよ？」

「何故I S学園、それも一年生の臨海学校の日程を知っていたんでしょか——ちよつと、怪しいですね」

「あの人、旅行で花月荘に泊まってるって言ってた。……戻ったら、あの人探してみる」「二応、先生達にも話しておきましょう。亡国機業なんてことはないと思いますが、学園の日程を知っていたのはちよつと気になります」

そんな疑念を抱いているうちに、どうやら箒と紅椿のフツティングとパーソナライズが終了。武装テストも終わったようで、地上に降りてきた箒が展開状態を解除。機体のことについて何か疑問でもあったのか、千冬と会話を始めた。

束の手が空いたため、リイスは話を聞こうと思った。金色についてと、その——織原ハルトという人についてを。ニコニコしながら頷く束に歩み寄ると『束さん、ちよつと』と小声で言う。それに気がついたのか、束はリイスと共に他の人間と少し離れた場所まで歩いて行く。

「そうだ、リーちゃんにも渡すものがあつたんだ！ヴァイスの追加武装なんだけど——」
「ヴァイスの新武装、ですか？」

「うんうん。その機体について色々わかってきたから、開放できる範囲で武装や性能を強化しようと思つてね……まあちよつと、話もあるんだけど」

「……私も、伺いたいことが幾つか」

「んじゃ丁度いいね。ヴァイスを展開してくれる？」

言われ、首のネットワークスに一瞬意識を集中してヴァイス・フリーユージェルを展開する

リス。それを確認した束は、移動型ラボ『吾輩は猫である（名前はまだ無い）』を展開すると、IS専用の接続コードを機体へと繋ぐ。それが終わると投影キーボードを8面展開して、目にも留まらぬ速さで作業を開始した。

「……えつと束さん、いいですか」

「ん？ いーよいーよ、作業しながらでも会話できるし。むしろリーちゃんとの会話ならウエルカム！」

「は、はあ……。ちよつと変なこと聞いてもいいですか？」

「んー？ 何かな何かなー？」

「IS学園とかIUII……IS大の学生証に刻まれてるあの識別コード。コピーとか偽造ってできます？」

まず最初に聞いたのは、先程のクロエとの会話についてだった。自分が見たものは恐らく本物だろう。しかし、リスは念のために確認をしたかった。

「んー……無理じゃないかな。束さんならできるけど、有象無象じゃ無理だと思うよ？ リーちゃんとかが持つてる学生証のそのコードね、ちよつと特殊なインクと金属を使ってるんだ。そして、その中にナノチップを混ぜてるんだけどその金属っていうのが複製不可能なんだ。その印字する際に使うコードっていうのも、特殊な貼り付け方するから普通の所じゃ絶対作れない。だから、正規に発行されたもの以外は即バレするよ。認識

できないからさ」

「——そう、ですか。実は昨日、IUIの男性の方にあつたんです。……その人が学生証を見せてくれて、それが本物だとは思うんですけど、」

「は？何？うちのリーちゃんに手を出そうとしたナンパ野郎がいるの？リーちゃんはいつくんのでしょ？誰だよそいつ、東さんが消してやる」

「本気でやりかねないのでやめてください！……その人、IS学園の日程を知ってたんです。クロちゃんに聞いたら、学園の日程は外部に対して直接的な公開はされないって。でもその人、大学の掲示で見たって言ってたんです」

「……そいつ、名前は？覚えてる？」

「織原ハルト」という人だったと思います」

東の表情が更に険しくなった。数秒間東は投影キーボードを叩くのをやめると、先程までとは違う叩き方でキーボードを叩き始めた。東の前に投影ウィンドウが展開される。それは、3つのウィンドウだ。1つはヴァイスとの接続データと、アップデートに關わるもの。もうひとつは、何かの報告書だ。そして3つ目は——IUI、IS大のシステムにハッキングを行っているウィンドウだった。

突然無言になった東に対して言葉を投げられず、返答を待つこと数十秒。ハッキングをかけていたウィンドウに『complete』と表示され、データベースが展開され

る。そこに束はすかさず“織原ハルト”と打ち込み、検索をかけた。

「——あった。こいつで間違いない?」

束がリースの前までウィンドウを移動させ、確認するように促した。そこには、間違いなく己が昨日会った男性の写真が写っており、その下には経歴をはじめとした個人データが記載されている。

織原ハルト、20歳。IUI宇宙工学研究科とIS技術応用研究科の2つの学科に所属する2年生。IUIに来る前は地元の総合高等学校『藍越学園』の理工科を卒業。他の経歴を見ても疑わしいものはなく、普通の学生のようにリースには見えた。

「間違いないです。昨日会ったのはこの人です」

「……ただの有象無象っぽいけどなあ。確かにいつくんに似てるけどさ。これ追加の経歴表かな?どれ、覗いてみよう」

「束さん!流石にそれは失礼というかなんというか……」

「私は篠ノ之束だよ?これくらいへーきへーき、どうせ足なんてつかないし——おんやあ?」

そこで束は手を止めた。ある疑問を抱いたからだ。流石に人のプライベートな情報をこれ以上覗くのは失礼だと思いつめようとしていたリースだが、突如動きを止めた束に対して疑問する。

「……10年前に両親が他界。その後UIIの理事長が籍をおく『倉橋家』に引き取られる。3年前にはドイツに一度留学、そこで天体工学について学ぶ。んん？」

「どうしましたか束さん」

「——いや、どうでもいいか。なーんでもないよ！ごめんねリーちゃん、ちよつとくつだらないことで考え事しちゃってさー！」

所詮は有象無象だ。特に目を留める必要もないだろう。それに、こいつについてはリースが言ったから調べた訳であって個人的にはどうでもいい。そう考えて束は「くだらないこと」と判断してウインドウを閉じると『さて、』と続けてリースを見る。

「ヴァイスのアップデータおーわり！機体データ見てみてよ！」

「……機体スペックが跳ね上がってる？それに、多機能自動反応兵装（マルチロール・アクティブウエポン）」

「ふっふっふ……それはね、”進化した”ヴァイスが自分から作り出して、それを束さんが形にしたものなんだよ。ヴァイスには背面浮遊固定部位として、3対6翼のエネルギーウィングがあるでしょ？これはスラスタの機能と自動防御機能を兼ねてたんだけど、それに攻撃性能が追加されたんだ。具体的には、拡張領域に新しく搭載されているエナジーエネレーターから生成されたエネルギーを翼から弾丸として打ち出せるって感じかな？ただ、限りがあるのと限界超えるとシールドを消費し始めるから注意

ね。弾速が早いマニュアルモードと、弾速そこまで早くないけど高出力レーザー弾が相手を追尾するオートモードがあるから使い分けて」

「なんか私のヴァイスがとんでもなくゲテモノになった気がするんですけど、東さんドイツにいる間何かありました？」

「えっ何もないよ？ 凄いなドイツ！ 東さんが夢中になるくらいのエナジードリンク作ったり、日常的に東さんに”挑戦”って形でラボにハッキングしかけてきたり。いやあ、向こうのラボの所在がドイツにバレちゃってヤバイと思っただけど、なんか定期的の子猫が送られてきたり『先日は挑戦を受けて頂きありがとうございました』ってコメント付きで詰め合わせが送られてきたり。毎日退屈してないよ！ あっ、後東さん猫飼いは始めたから！」

どこから突っ込もうか。そう考えながらリイスはスペックデータに目を通していく。IS学園はペット禁止、なのでかわいいものが好きなリイスとしては少し束を羨ましく思った。自分も猫飼いたい。

そんなことを考え、ペット飼いたいという欲を抑えつつデータを見ていたリイスであつたが先程の束の言葉で気になることがあつた。

「束さん、そのリンドブルムっていうのは束さんが作つたんですよね？ 紅椿といい、これといい無理してたんじゃないですか？」

「ん？違うよ、」 リンドブルムを作ったのは東さんじゃないよ」

スペックデータを見る手が止まった。

作ったのは東ではない？では、誰が？

そういえば先程東は——自ら作り出した、とか言っていたような気もしたが。

「形にしたのは東さん。だけど、」 その兵装はヴァイスが作ったもの”だよ”

「——え？　ち、ちよつと待つて下さい。それどういう、」

「んー……コア・ネットワークに登録したでしょ？ある日東さんのところに、ヴァイスから同調率のデータと、リンドブルムの開発状況のデータが送られてきてね。私も訳わからんちんだったんだけど、どうやらその兵装を安定させるためのものが欲しかったらしくて。だから、エナジージェネレーターと機体との調整は私がやった」

「ヴァイスが自分で開発した？確かに、オリジナルコアには個々に意識があるとか言われてますけど、実例なんて——」

「……ないことも、ないかな？　暮桜とか」

東はその言葉を呟くように言った。驚きのあまりその言葉をリイスは聞き取れておらず、誤魔化すように東は言葉を続けた。

「それからもうひとつ。ある意味……これが一番大きいかもしれないね。——」セラフ・システム”、リーちゃんこないだ無断で使ったでしょ」

「それは、その。——使いました、ごめんなさい」

「あれがどれだけヤバイ物かってわかってるよね？ どれだけ心配したと。前もかなり怒ったからもうこれ以上言わないけど……その話っていうのが、セラフについてなんだ」

東は周囲を確認した。千冬達からは自分たちが距離のある状態で、他の人間の視線が箒と千冬に向いていることを確認しこちらに対して誰も意識が向いていないのを見る。そして、あるウインドウを自分とリースにしか見えない”秘匿状態”で展開するとそれをリースに見せた。

そこにあつたのは、ヴァイスの稼働データと機体の変化についてのデータだ。そこに書かれていたのは——

「開放状態……？ これって、」

「その機体が進化した。簡単に言えばそういう事かな。……リンドブルムの開発によって機体への負荷とか諸々変化があつてね、どうやらヴァイスはリンドブルムを応用してセラフの負荷をある程度まで完全に消したみたいだ。——」セラフ・システム”の第一段階。全三段階あるうちの第一段階までであれば、リーちゃんへの身体への負荷なく、

問題なく使えるようになってる」

「あ、あれの負荷を消す!? それに機体が進化した? さつきもリンドブルムについての説明で同じこと言ってますけど、ISが自己進化するなんてこと……実際にありえるんですか?」

「——言い切るよ、”それは有り得る話”なんだ」

束のその言葉に対してリイスは目を見開いた。信じられない、と思った。自己進化するISなど聞いたことが無い。確かにラウラの持つレギオンに搭載されている搭乗者補助ロボット”黒兎”と”灰兎”という例はあるがあれはロボットだ。形態移行とはまた違う、自ら何かしらの変化を生むISなど……教義の中で存在しても、実際には”存在していない”という認識だったのだ。

「話がある、って言ったでしょ。そのうちの話のうちの1つを話すね。——ヴァイス・フリーユゲルに世代がない、っていう話は前したよね」

「はい、データ上の分類がされておらず、識別不可能だったから。でしたっけ」

「……それ、誤りなんだ。正確には”世代が存在していない”んじゃない”分類できない”んだ」

「分類ができない? えっと、仰る意味が」

「落ち着いて聞いて、リーちゃん。……その機体のフレーム全てには、展開装甲ついてい

う束さんが最近開発したものと似た何かが使われてる」
目前。束の顔にはふざけた笑みはなく。真剣な表情で、そんな言葉をリイスに言った。

円卓を続ける少女

耳を疑った。今、東さんはなんと言ったのか。

”その機体のフレーム全てには、展開装甲つていう東さんが最近開発したものと似た何かが使われてる”？つまりはそれは――

「それつて。つまり何年も前から、東さんが最近開発した技術が存在していた、つてことですか？」

「……それもあるね。順を追って今のうちに話すね。このヴァイスに使われているフレームは東さんが第四代専用開発した”展開装甲”つていうパッケージや、装備を換装することなく、状況や用途に応じて即時切替可能な装備・アーマーが使われている。これは、最近になって東さんがやつと形にしたものなんだ。実用段階にして搭載したのも、箒ちゃんに渡した紅椿と、試験的に武装に利用した白式と黒式だけ」

「でも、それなら東さんがあの時――私を保護して下さったときに機体を調べて、それでわかるんじゃないですか？」

私はあの時。千冬さんに負けて東さんに保護された後ヴァイスを一度フルメンテナンスという形で東さんに預けている。それから暫くの間調整やリミッター設置の関係で東

さんの管理下にあった。だから、もしそんなものが使われているのならその段階で気がつくものだった。

東さんはISの生みの親であり天才だ。そんなこと、保護されて結構な期間一緒に暮らしていた私はよくわかる。そんな人が気が付かないわけがないのだ。

「——怪しい、って感覚はあったんだ。ヴァイスを預かった時、装甲が普通ではない反応数値を見せていたから疑問には思った。けど、どれだけ調べても別段変わったことがない普通の装甲で、私もその時は「まさか、ありえない」って思ってた。最近になってそれが大きな間違いだったと思いき知らされたんだ。間違いなくこれは、展開装甲。それに似た何かだよ」

「……なんで、その展開装甲だっていうものだと発覚したんですか？」

「それは次の話になるね。展開装甲は第四世代専用の装備、私もそれを想定して開発をした。今までヴァイスは世代上の分類がなかったものの第三世代相当の性能だった。それが——これ、見てよ」

東さんは新しくウィンドウを展開する。そこには私が保護されてからの同調率のデータと、コア・ネットワーク監視上でのデータが表示されており、そのデータはある時期を境に急激なフラグメントマップの変化を見せている。

フラグメントマップとは、オリジナルISコアが自身を独自に開発していく道筋のこ

とで、人と言う遺伝子だとかつて教わった。しかし、このような自己進化を明確に行うISというのは今まで存在がほぼ確認されていない。

通常ならば、このフラグメントマップが急激な変化を生むことは無いのだという。それが今、私が見るウィンドウの中では——急激に変化をしている。これはどうということだと思う。これじゃまるで、”本当にISが意識を持っているみたいで、生きてみたい”じゃないか。

「フラグメントマップが急激に変化している。……普通なら、有り得ないことなんだよねこれ。幾ら同調率やシンクロ率が高くても、フラグメントマップは穏やかに変化していく。だから急激に変化することなんてのはないんだけど、ヴァイスはそれを急激に行っている。その理由が、これから話す『無段階移行（シームレス・シフト）』ってシステムが原因だと思う」

「無段階移行、ですか？ ……聞いたことない言葉ですね」

「そりやそうだよ。だって——」東さんが最近開発したはずのもの”なんだから”
つまり、最近開発したシステムに、最近開発した四世代用の装備をヴァイスが生み出した？

「無段階移行。搭乗者の蓄積経験値により性能強化やパーツ単位での自己開発が随時行われて、高度な操縦支援システムを備えることで操縦者に依存しない機動性能を実現す

るもの。ややこしく言うとおれだから、簡潔に言うかね——ヴァイスが自分で装甲を展開装甲のような何かへと変化させ、装備も生み出した。そして自己開発じゃ足りない部分があったから束さんに”作れ”って催促してきたんだよ。もう、わかるでしょ”

「ツ!? ”最初から”無段階移行が搭載されていた?」

第四世代の装備というのは束さんでなければ制作できないのだろう。にも関わらず、ヴァイスはそれを自分で開発した。そして足りない部分を”コア・ネットワークを通して開発するように催促した”。

——明確に意識を持っている。そう思えてならなかった。

「その通り。といつても……ヴァイスは無段階移行ってシステムは存在していない。けど、自分で自己開発と進化を行っている。つまり、無段階移行に近い何かを持っているということになる。それについては束さんもわかんない。展開装甲についても、なんでコア・ネットワークを自ら使って束さんに催促してきたのかも。……こんなコア見たことなくてね、だから束さんはヴァイスのこのコアを改めて呼称することにした。”インテリジェンス・コア”ってね」

インテリジェンス・コア。つまり、知能を持つコアということなんだろう。けど……それではまるで、本当に。コアが生きているみたいだ。

「……それから、スコールから連絡があったよ。リーちゃんが言っていたつくんが見

たつていう金色のことについて」

「本当、ですか」

私の言葉に対して東さんは頷いた。つまり、何かがわかったということだろう。しかし東さんの表情は浮かないようであり、何か——深刻そうでもあった。

「——正直ね、東さんは久しぶりにこんな感覚を持ったよ。久しくて、忘れていた感覚。

”怖い” っと思つた」

「怖いって、何がですか？」

「……私もちよつとわけわからなくて、まだ整理してる段階だからこれってことは言えない。けど掴んだよ、金色の正体を」

金色の正体を、掴んだ？ 私はその言葉を聞いて目を見開いた。けど、東さんが怖がる？ それ程に金色とは、そうさせる何かを持っているのだろうか。

「言えるキーワードは、”イレギュラーナンバーコア” 扱いのロストナンバー01。そのコアを使っているI Sであるということ。……再度になるけど、リーちゃん。落ち着いて聞いてね」

東さんの声は、僅かに震えていた。信じられなかった、あの東さんが震えていることに。東さんやスコールさんが見つけた真実というのは、それ程に恐ろしいものなのか。それ程に、深淵へと繋がるものなのだろうか。

息を呑み、私は言葉を待った。

「私が制御できなかったイレギュラーナンバーコア。それを、私はある人物に託した。きつと」その人達、なら私が制御できなかったそれを、扱えると思ったから」

「……それは、誰です？」

「——君のご両親だよ、リーちゃん」

その言葉の意味が理解出来なくて、私はその場で固まった。

◆ ◆ ◆
「箒のやつ、こたわるなあ……」

紅椿の装備や機動能力について先程から何度も千冬姉と討論を繰り返しては、調整のために空へと飛びテストを繰り返す箒。箒は、頑固というかなんとというか。昔から納得行くまでちゃんとやらないと気がすまない奴だった。きつとあの束さんが託すと言った紅椿についても思うことがあって、それで納得行くまで調整をしたいのだろう。

束さんはリースと取り込み中？みたいで、データ関係の調整とかは巻紙先生がやってくれているみたいだ。あの人……すごい雑な人に見えたけど、あのタイプ速度とか手際の良さ見るとそうじゃないんだな。遠目でその操作に相川さんが感心してるし。

箒は千冬姉と巻紙先生と紅椿のことで熱くなってる討論中。他の皆もそつちに興味

があるようで、意識がそっちに向いているようだ。

「そういうば……結局リイス、昨日は泳がなかったな。やや遅めに海に来て、クロニクルさんとかが獲ってきた魚とかいつのまにか巻紙先生が用意してきた肉やら野菜でバーベキューすることになって、そこに参加してたくらいか。」

「……なんていうか。あいつの水着姿を見たかった、というのはある。いや、やましい理由があるわけじゃなくて。けど、付き合うようになってからあいつが恥ずかしがったり照れたりしてるのをよく見るようになって。それ見るとすげえドキドキする。」

「いや、臨海学校だから何か期待したとかそんなやましいことはない。大体、今まで同じ部屋でそんなこと一度も無かったじゃないか。」

「もしかして、気を遣ってくれたんだろうか。1人の時間も必要だろうとか、そんな感じに。だとしたらそんな気にしなくていいのになとも思う。昨日の夕食時に聞いたけど、ちよつとしたトラブルがあったんだとか言ってたな。大丈夫だったんだろうか。」

「……一夏」

「リイス？ 東さんとの話、終わったのか？」

「見れば、話が終わったのかISの展開状態も解除して、ISスーツ姿で俺の所まで歩いてくるリイスが。しかし、どうかしたのか。元気が無いような、深刻そうな——また、1人で抱え込んでるんじゃないかと心配になる。」

「うん、一応終わったかな。——箒、まだやってたんだ。こだわるね」

「本当にな。さつきから何度も何度も武装の調整に納得行かないらしくてな、いつのまにか千冬ね、おっと。織斑先生も熱が入ってるみたいだ」

「うわあ……織斑先生だけじゃなくて礼子さんも、あれ完全に真面目モード入ってる。暫くかかりそうだね、あれ。——えっと、昨日はごめんね一夏。ちよつと、トラブルがあつて」

「旅館で何かあつたのか？結局泳がなかつたみたいだしさ」

「……水着、見たかつた？」

多分意図してやってるんだろう。隣に立つとリイスにしては珍しく、小悪魔的な笑みを浮かべて視線を向けてくる。いや、ズルいぞそういうの。

「本音を言えば、まあ……うん」

「言ってくれなきゃわかんないよ？」

「見たかつた、すごく」

「一夏かわいいなあ。明日、また自由時間でしょ？その時にね」

「期待してる」

「……いや、そこまでストレートに言われると私も恥ずかしいんだけど」

お返しだよ。顔真っ赤にして目を逸らすリイスはとてもかわいい。しかし、様子が何

かおかしいな。どこか取り繕っているというか、なんというか。

……この前言ってたリースの事情は、俺が想定していかないくらいに重いものだった。こいつが背負ってるものを知って、それで初めてちゃんと理解した。とてつもなく重いものをリースは今までたつた一人で背負ってきたんだなって。

重いとは思った。けど、逃げ出そうとは思わなかった。逃げないと決めたから、受け入れると決めたから。ずっとリースの隣に立つ、そう決めたから。

「一夏、あのね」

「ん？ どうしたんだよ」

「……今日、ね。一夏の部屋に行ってもいいかなって」

ああ、部屋か。夜は夕食食べたら自由時間だし、問題なんて、

……待った。ストップ。Wait。今リースはなんて言った。

確かに日常的に同じ部屋で、それが普通みたいな感じで過ごしてたし付き合ってからそんな感じだけど、今は臨海学校中。そして部屋は別々だ。それが何を意味するのかわからない俺じゃない。

いや、確かに経験はあるぞ？ 中学時代なんて、修学旅行の時に女子の部屋に遊びに行こうとしたり夜中に行こうとして大目玉なんていうのは実際に見てきたから知っている。俺はやってないけど。

つまりいつもと違う特殊な環境下なので、そんな状況でそんなことを言われたら動揺する。学園でなら同室なんて気にしない。だが今は別だ！

れっ、冷静になれ織斑一夏。素数を数えろ。……素数数えるあれって確か、意味ないんだよなあ。

「待て、待ってくれリイス。状況が飲み込めない、どういふことなんだ」

「織斑先生は夜から教師陣で飲みに行くらしくて。そのまま泊まりらしいよ？ ……許可は貰ってる、から」

「いやいや待て。そのだな、俺にも色々心の準備と言うか——」

「そっか……嫌か、じゃあ仕方ないね」

「いや、違う。その嫌じゃなくてだな、だが俺としては何の心構えもなしには駄目というか、だから駄目だっていうか、」

「……ぷっ」

リイスが笑った。あれ、もしかして俺……からかわれた？

だとしたらなんてことをしてくれるんですかねリイスさん。貴女のその小悪魔的ノリで完全に赤面状態かつ心がズタボロなんですが。

「ごめん、まさか君がそこまで動揺するなんて思わなくて」

「この行き場のない羞恥心どうしたらいいんだ。俺も男だつての……」

「君にそんな度胸がないことを私は知っている」

「反論できねえのが辛い。それで、どこまで本当なんだ」

「先生達いないっていうのと部屋に行きたいっていうのは本当。……ちよつと、話があるっていうか」

話ってというのは、この前のあれについてだろうか。

リースが追ってるっていう金色の I.S。その件については千冬姉からはそれは死んだほうがマシだと思ってくらいの雷を落とされた。どうして言わなかったんだとか、そんなに私が信用ないだとか、まあ色々言われて最後はなんとかリースに宥めて貰って渋々落ち着いてくれた。千冬姉が心配してくれているのはわかる。言わなかった俺にも落ち度は、あると思う。……けど、リースのことがなかったらきつとこれは一生胸の奥にしまっておこうと思ったことだったのだ。

「——わかった。けど俺も男だぞ、本当何するかわかんないかもな？」

「君にそんな度胸があるならどうぞ。多分夏休みのこととかの話もすると思うよ。そうなるってならなくても一緒にドイツ来てね？」

「えっ俺あのアッパーな修羅の国に連れて行かれるの」

「どっちにしてもお義父さんには紹介したいから来てね？　大丈夫、お義父さんは普通の人だから」

本当だろうか。確かリースのお義父さんって空軍大將じゃなかったか。

そういえばクロニクルさんから前にリースのお義父さんは過保護だとかとかって聞いたことあるような覚えが。……俺、生き残れるのかなあ。

「なんか無理してるか？」

「……うん。してるかな、結構考え込んでね」

疑問を呈し、やっぱりかと思う。リースが普段ならやらない仕草をしていたからだ。付き合いはじめて歩いたりする時とかに距離が近いってことはよくある。けど、彼女が何かしら不安だったたり無理してたり。そんな状況の時にはあるサインをする。それに気がついたのだ。

「頼れよ？」

「うん、わかってる。——頼らせて。ちよつとというか、かなり堪えてるから」

その言葉を聞いて、黙ってリースの頭の上に手を乗せる。彼女はこの動作が好きなのか、こうすると安心したようにしてくれる。

気がつけば束さんが紅椿の調整に加わっており、何やら巻紙先生とあーだこーだ言っている。犬猿の仲という言葉があるが、巻紙先生のイメージ的に犬と兎というのは仲が悪いのだろうか？

「たっ、大変です！」

リースの頭に手を乗せて、彼女を撫でる。それに目を細めて満足そうにしているのを見ながら安堵していると、突然山田先生が大声をあげて走ってきた。何やらただごとではないらしく、急いで山田先生がタブレット端末を織斑先生へと渡す。

「……馬鹿な！」

突然、怒鳴り声が聞こえた。それは驚きが混じったものであり、見れば千冬姉は“信じられない”といった表情でタブレットを見ていた。

おかしいと思ったのか、巻紙先生も千冬姉と山田先生へと近づいてタブレットを確認して、動きが固まった。

「ありえねえ。嘘だろ——」あいつが墜とされた“?”

「……それに、“複数箇所同時”だと？軍は何をしていた！」

「あの馬鹿何してんだ——！ええい、私が出る！ガキ共は下गरらせて、……何だ？通信？」

会話が少しだけ聞こえた。巻紙先生は携帯端末を耳に、そのまま何処かにいつてしまう。何か小声で千冬姉と山田先生は会話をした後。山田先生が『わかりました』と言って、相川さんだけ連れて来た道を戻っていった。

「全員聞け。たった今、委員会から連絡があつた。詳しいことは移動してから説明するが、特務レベルAの事態が発生し、専用機持ちは全員その対応にあたってもらうことと

なった。クロニクル、専用機持ちのオペレーターはお前に一任する」

専用機持ちの中で明らかに苦い顔をした人間が居たのを見た。東雲とラウラ、そして——リイスだ。何か、とてつもないことが起こったのだと理解する。そして……俺には、同時にとても嫌な予感がした。

銃声が響いた。それは連続的なものであり、複数の弾丸を連続して撃ち出すような音。

そんな音が何度も何度も木霊するこの場所は、地獄と行ってよかった。

「フアック！何なんだあれは！」

それは、この場に生きている兵士の言葉だ。米国人特有の肌に身体的特徴。そして、彼が着ている軍服にはアメリカ軍であることを示すものが存在した。

既に建物としての機能を果たせなくなった瓦礫に身を隠し、弾幕を凌いでは銃を連射し、危なくなったら逃げるといふ動作を既に幾度も繰り返し返している。

その地獄で、生きる人間は追われていた。異形とも呼べる、ISのような何かに。

グレネードのピンを引き抜き、その異形へと投げた。効果がないことはわかってい

る、狙いはダメージではない。

瞬間。異形の近くにあったIS用の燃料タンクが爆発した。

「へっ！ぎまあみる！人間ナメンなよ！」

しかし、彼も米国兵士である。しかも、大統領直属のある部隊の兵士。

故に油断しない。素早くリロードを行い、持っていたM4を構える。これで終わって
くれていればいい。そう思ったが

「うおっ！そりゃああれくらいじゃISなんて傷一つつかないよな！」

毒づきながら再び放たれたレーザー弾の雨から逃げる。動きは止められた。だがそれは一瞬だ。こちらを追うあのISのような何かは健在であり、再びこちらを視認すると攻撃を放ってくる。

走る。しかし、それは逃げるためではない。あのISのような何かを何とかするためだ。”自分は兵士である”という誇りが彼にはあった。逃げることも必要だとかつての上官には教えられた。

しかし、今は逃げる訳にはいかない。”ここを捨てる訳にはいかない”。帰る場所を、彼女達が帰る場所を護らねばならないと思つたからだ。

だから走つた。既にこの場所。IS用の基地はどこもかしこも瓦礫だらけであり、目を凝らせば既に息のない”モノ”も存在している。信じられないことばかりだった。

このI Sのような何かの襲撃、実験予定だった銀の福音の暴走、そして。なによりも――

自分達の姫であり騎士。自分達が支えたいと望んだ少女が撃墜されたこと。

「ああ、くっそ！死にたくねえけど逃げたくもない。だが、生身であんなバケモノとどうやって戦う」

幸いといつていいのか、あのバケモノはそこまで頭が良くないらしい。代わりに、火力は異常だが。

走り、思考する。その時だ、

「おいッ！そのアメリカ兵、こっちだ！」

声が聞こえた。それは、走る先にあるまだかろうじて無事であるタワークレーンから響く声だ。見れば、そこには生きた人間が存在した。それは、軍服姿であり、腕にはイストラエル軍を示すマーク。

「そのままクレーンの下を全力で突っ走れ！早くしろ！」

「よくわかんねえがわかった！」

走る。小細工を考えずに全力で前に走るように逃げる。

背後からはバケモノが追ってきており、レーザー弾を連射してくる。だが走った。走り、運良くその弾に当たらず、言われた通りクレーンの下を通過した。

「くらえバケモノ！」

ヒュオンツという大きな風斬りの音が鳴った。同時に、何か空から落ちてきた。それはI Sの“実弾”装備が詰め込まれた鉄製の箱だ。空中から勢いをつけて落とされ、たはそれは、耳に響くほど大きな音をたてて、そのバケモノを押しつぶした。

見れば、身体を押し潰される形になったそのバケモノは身動きをとれなくなっており、無理矢理箱の下から這い出ようとしている。

それを見ての、二人の行動は早かった。

米軍の男は自分が持っていた残り全てのグレネードを同時に投げた。そして、イスラエル軍の男は急いで地面に置かれていたロケットランチャーを構えると、動けないバケモノへと放った。

手榴弾とロケットランチャー、その爆発音と同時。押しつぶしていたその箱も連鎖して爆発した。

爆破地点は燃え上がっており、炎の中は煙でどうなっているのかが判別できない。しかし、バケモノはすぐに追ってくるような気配はない。

「……やった、のか？」

「おいおい米国兵。そういうの、ジャパニーズのアニメではフラグという奴らしいぜ？」
タワークレーンからワイヤーロープを使って器用に降りてきたその男は言う。米国

兵はフラグとは何だ?と思いつつも言葉を返していく。

「だがあの爆発だ。……幾らISとて、絶対防御とやらを貫通してしまえば殺せるはずだ」

「ああ。流石のISも無傷ではないと思うが——あんた、生き残りか?」

米国兵の男はイスラエル軍の男に問いかけた。その返事として『そうだ』と返される。「通信が死んでて状況がわからん。イスラエル本国や軍部にも連絡がつかない、そつちはどうだ米兵」

「残念ながらこつちもだ。……しかし、これじゃまるで地獄だ。こんな酷い戦場も久しぶりに見た」

「ISが普及してから、俺達男……いや、男の兵士のような奴らが見てきた生身の戦場つてのは少なくなつたからな。本当に、酷い有様だ」

周囲を見れば、そこにあるのは男性だけの遺体ではない。女性と思わしきものも混ざっており、事態の深刻さが見えた。

「まだ生きてるやつがいるかもしれない。悪いが協力してくれるか、米国兵」

「俺はあんたに助けられた。……ああ、喜んで手伝うさ。そうだな。まずは、」

男の言葉は最後まででは続かなかつた。突然響いた轟音でかき消されたからだ。その音に驚き、炎が燃え盛るその地点を二人は見れば——その空に、先程の化物が存在した。

「おいおい」

「ジョークにしてもこれはブラックすぎるぜ」

その化物は、ダメージを負っていた。しかし、それはフレームが歪んだ程度のものであり、不気味な5つ眼は二人の兵士を捉えていた。不味いと判断して二人は逃げようとした。が、すぐに全身の血の気が引くことになる。

ここは基地。そして、その港に位置する場所だ。背後は海であり、周囲は開けている。壁になりそうな障害物もない。

絶体絶命だった。手持ちの武器もIS相手では無力とわかっていい。悔しいがここまで、そう諦めかけた瞬間。

「——撃ち抜いて、トリスタン！」

声が聞こえた。それは、背後である海の上空からのものだ。

同時に。全部で13発の光の矢が、バケモノを襲った。

矢は全て手、足、胴、頭に突き刺さり、横転したそのバケモノを地面に縫い付けるように固定した。

そこに存在したのは、騎士のようなISを纏った少女。騎士鎧とコートを合わせたよ

うな機械的な騎士装束。それを纏うのは、薄い小麦色の髪に半眼の眼を睨むように相手に向けている少女だ。

その声の主を見上げて、兵士二人は違った反応を返した。イスラエル兵の男は『なんだ、あの少女は！』と驚愕したが……米国兵の男は、安堵したように笑っていた。

「やっぱりな。絶対に有り得ないと思ったんだよ」

「何……？米国兵、お前はあの少女を知っているのか？」

それに対して返すのは肯定の言葉と、笑みだ。

「ああ、よく知ってる。——俺達の、最強にして最愛のお姫様だよ。そして、”あの機体”を持ち出したってことは、もう心配する必要もねえ」

「何だ……？何者なんだ、あの少女は」

イスラエル兵が疑問符を浮かべる中。上空から再び声がした。

「……遅くなって、ごめんなさい。後、ちよつと危ないのもうちよつとこつちに離れてくれると……助かります」

ぎこちないような、人に慣れていないような言葉遣い。あまりにもそれはこの場に不釣合いではあったが、その少女が構えるそれを見て、二人はその場を離れた。

それは、弓だ。機械的な竖琴も似た弓。それを構え、狙いをバケモノへと固定していた。

「……許さない。私の大事な人達、たくさん殺した。だから、”貴女”は許さない。ナルルがおかしくなったのも、イーリスが大怪我したのも、全部……貴方達のせい」

光が収束した。まるで、少女の感情に同調するように。

敵意と殺意。それが込められた視線をバケモノへと向けて、少女は一撃を放った。

「薙ぎ払って。フェイルノート」

閃光が走った。それは、極太といつてもいい光の奔流だ。矢のように疾く放たれた照射砲撃。その一撃はバケモノごとその周囲を飲み込んで、薙ぎ払った。

光が収まる。そこには一切何も残っておらず。この場に生きているのは少女と、男二人だけだった。

自分達を襲ったバケモノも大概だった。しかし——それ以上に、この少女は何者なのかと。そうイスラエル兵は思った。

「……あの、」

「お、おう!? 何だ、お嬢ちゃん」

突然。ISを展開状態で港へと降下し、その後解除したその少女に声をかけられる。ISスーツ姿。背はアメリカ人にしては低く、だが容姿は子供らしさと大人らしさを兼ね備えたような、どこか儂げな少女。そんな見た目をした、この場にはあまりにもあっていない少女に男は驚いたが、声をかけられたと理解し対応する。

しかし、声をかけてきた少女はじつと自分を見ている。時折困ったようにし言葉を作ろうとするが止める、という動作を繰り返す。思わずイスラエル兵の男は思ってしまった。”あれ、俺なんか怖がらせるようなことした?”と。

「——こういう時って、問題、ないのかな？」

「あー……姫さん、多分問題なしだ。何かあれば、後で大統領から連絡があるかと」

「ん……ありがとう。……マイク、さん？」

「うわあ姫さんに名前覚えられて俺超光栄。生き抜いて良かった……！」

「部隊の人の名前。全部覚えてる、よ？」

更にイスラエル兵は困惑した。姫？大統領？つまりこの少女はアメリカ、それもホワイトハウスに関わる誰かということになるのかと。

だとすれば超大物だ。そして、先程のあのISを保有するだけの実力者……何者だ、そう思考を巡らせていると

「えつと……初めまして。私は“エクスカリバー”、です。それとこの子は私の友達、”ナイツ・オブ・ラウンド”」

その少女、エクスカリバーはやはり人に慣れてないような言葉遣いでそういった後、ペコリと一礼し、その後自分の左手薬指に存在する装飾の入った指輪を男の目の前へと差し出すように見せた。

「なっ……エ、エクスカリバーって、あの!」

「……ひう……その、ごめんなさい?」

「いや謝らなくていい。こつちが勝手に驚いただけだ。しかし君が、君のような子が——アメリカ最強とは」

驚いた。驚きつつも、びっくりしたように謝ってきた少女に言葉を返す。驚きたいのはこちらだった。まさか、噂に聞いていたアメリカ最強の存在が女の子で、子供だとは。「だが姫さん、確か福音の起動実験開始時に一緒に飛んでたんじゃなかったか?念のため持って持ってきたプレジデント・オーダーで」

「……うん。福音が暴走して、ナタルがおかしくなって、止めようとしたら……見えない何かが海から出てきて、海に叩き落された」

「見えない、何かだつて? だが何故福音を追わなかった、大統領からは——」

「……迷った、けど。IS学園が福音の対応にあたるって、連絡あった。基地が無人機に襲われてるって報告も一緒に。——えっと、ナタルは心配。でも、福音はまだ誰も殺してない。けど無人機は、皆を襲ってる。だから、一回戻ってきた。……ごめんなさい」

しゅん、と落ち込んだようにして俯く少女に対して米国兵は慌てた。慌てて、『ああ、違うんだよ』とか『いや、助けられたのは俺達であつて』などと暫くの間慌てる。

「……連絡、あったの。だからすぐに、ナタルと福音を止めに行く。あの見えないやつも、私が殺す」

「——うし、わかったぜ姫さん。こっちは生き残り探して、なんとか立て直す。助けてくれてありがとうな、姫さん」

「えへへ……褒めて貰えて嬉しい、な。えっと、でも出る前にやらなきゃいけないこと、あるの」

「ん、何だ姫さん」

「——I S学園に、連絡しなきゃ。機密事項の連絡と……何か、すごく嫌な感じの奴が居るって」

絶望開演

「銀の福音の対応に行くのだと？ おいおい、流石に冗談にしては笑えねえぞババア」

誰もいない浜辺の崖の影。礼子は明らかな怒気を含ませて、通信相手へと返答した。

「そっちだってわかってんだろうが。銀の福音の暴走、エクウの撃墜、更に言うなら実験が行われた基地への無人機の襲撃。そして——監視衛星に映っていた正体不明の何か。どれも下手すりや命にかかわるレベルだぞ!？」

『承知しています。ですが、貴女には別件で頼みたいことがあるのです。巻紙礼子、いいえ——元亡国機業構成員、”狂犬”オータム』

「テメエがその名で私を呼ぶな……！ 私が出れば少なくとも福音はなんとか出来る、その正体不明の奴だつてなんとかしてやるさ。なのに何故、そこにガキ共を放り込む！ あいつらの命は、どうだつていいってのか!」

『……そのような訳ではありません。ただ、無視できない脅迫があつたのですよ』

「脅迫だと？ おいおい、この非常時に”国際IS委員会最高議長様”が脅し程度でビビってんじゃねえだろうな?」

『見て貰ったほうが早いかもしれませぬ。データを送りました、確認して下さい』

「たかが脅迫程度——……何？」

たかが脅迫程度、今の事態に比べればどうでもいいことだ。そう礼子は考えた。だが……送られてきた脅迫状のデータを見せられて、言葉を失う。

そこに書いてあったのはとんでもないことだ。要約すれば、礼子の出撃を禁止。及び、銀の福音とその一連についての干渉禁止。更に、この脅迫文について対象である礼子以外、例えば千冬や生徒に対して公開したり、この警告を無視したら“旅館の人間を皆殺しにする”というものだ。

「……ふざけんな！ 要するに、私が出れば旅館を襲撃して、あのウィルスをバラ撒くだど!? ……ご丁寧に差出人と、亡国機業のマークまでつけやがって……！」

『ただの脅しなら、我々としても無視しそれ対応の対応をします。ですが……これは恐らく、亡国機業のものともみて間違いありません。送付された写真から考えても、本気と見ていいでしょう』

「私には出撃停止、なのに”生徒には出撃させろ”だど？——ゲームでもしているつもりかよ、クソがッ！」

やり場のない怒りを礼子は、近くの岩場を殴ることで抑えた。殴られたその岩は、大きな音をたてて割れる。その音を聞いたのか、電話先の老婆は暫くの間言葉を止めた。

『——ですが、我々としてもただ脅迫に屈するつもりはありません。だからこそ貴女に

この脅迫状を見せた上で仕事を依頼します』

馬鹿げた脅迫文。しかし、恐らく本気であろうというそれを前にしてその老婆は屈していなかった。

老婆は不敵に笑うと、礼子に対してある依頼をする。

『きつと貴女も気に入ってくれる仕事です。どうです？聞いただけ聞いてみませんか？』

「……私に、どうしろってんだ」

『貴女向けの仕事ですよ。この脅迫状は実に腹立たしい。ですから——恐らく旅館を見ているであろう襲撃者、ちよつとその存在を黙らせてもらえませんか？』

「……はっ、なるほどな。だがそれは恐らく奴等も読んでるぜ？」

『ええ、ですからあえて誘いに乗ります。貴女は、その襲撃者を見つけて迎撃次第旅館の安全を確認、確保。それが終わり次第——生徒の救援へ向かって下さい』

つまり、脅迫には従う。だが、ただでは従わないし襲撃者が居るだろうからいつをゴコつて生徒を助けに行く。老婆が提案したのは、そんな滅茶苦茶な作戦依頼だ。亡国機業は正体がうまくつかめない。故に、どの程度の戦力かも把握できないため普通ならこんな作戦は提案できない。

だが、この巻紙礼子という人間は普通ではないのだ。だからこそその提案、だからこそその作戦。そんな話を持ちかけられた礼子は——ギリ、と歯を噛み締めた後に笑った。

「私向き最高の作戦じゃねえかよ。上等だ亡国機業……この私の逆鱗に触れたこと、後悔させてやる……!」

「状況を説明する。現在、頭の痛い問題ではあるが……非常に不味い状況になっている」

専用機持ちと教師陣、そして束の姿は旅館の一番奥、大座敷・風花の間にあった。照明を落とした薄暗い部屋の中、千冬はそんな言葉の後に空中投影ディスプレイを展開すると、説明を開始する。

「今から二時間前、ハワイ沖で試験稼働のテスト中であつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS：『銀の福音』が制御不能の状態となり暴走。止めに入ったアメリカ軍のISパイロットを二名撃墜した後に監視空域より離脱したと報告があつた」
最悪だ。そうリス達関係者は内心で思った。

軍用ISの存在は専用機持ちならば噂程度には聞いていた。そして、既に存在について明確に存知している国の候補生やリス達はその存在について知っていた。各国の軍部が開発を進め、文字通り『軍用』として開発されたIS：当然、委員会や諸々の機関からの反発は大きく、問題にもなっている。

しかし実際に存在するという話は今までに聞かなかつた。つまり今回のこの騒動で

公になった、ということになる。

「衛星による追跡の結果、対象はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして約一時間後。学園上層部と委員会の決定により、今回の事態においても迅速に対応できるのは我々のみであるという判断が下された」

この言葉に対して怪訝な顔をしたのはセシリア、鈴、シャルロットだ。彼女達はリイス達と違い事情を知らない。よって、幾ら委員会と上層部の決定でも「軍用IS」の相手を生徒である自分達が行うというのには疑念を持った。

そんな彼女達を気がついてか、千冬は『……が、しかし』と続ける。

「お前達も知つての通り相手は軍用ISだ。当然ながら、作戦参加専用機は”そのような仕様に調整する”。そしてその状態は相手も同じだ。ISも無敵ではない、絶対防衛を貫通されれば死につながる。……参加の強要はしない。また、参加しなかった場合についても誰も責めないことをここに誓おう。もし参加に疑問がある者は今すぐ部屋を出て他の生徒達の所へ行け。勿論、今聞いた話は最高機密、他言無用となるがな」

しかし、誰も部屋を出ようとしなかった。リイス達には目的が元々あった。他の三人はといえば各々に専用機持ちちとしての、力を持つものとしてプライドや覚悟があった。そして今まで有事の際の訓練も受けてきたのだ。

仮にここで逃げれば、最悪の場合自分や他の生徒に対して待っているのは死だ。故

に、セシリアも鈴も、シャルロットもなんとかしなければならぬという決意はあった。「……まったく、責めんといったらう。私としてはむしろ出てくれたほうが嬉しいよ。生徒を死地へと行かせねばならぬのだから。——本当にすまない。我々の目的はこの銀の福音を停止させることである。では、特に退出者がいなければ作戦会議を開始する。意見があるものは挙手をするように」

「……織斑先生、よろしいでしょうか」

真つ先に手を上げたのはセシリアだ。彼女は真剣そのものといつていい目で千冬を見ると、質問を投げた。

「二点ほど、お聞きしたいことがあります」

「言ってみろ、オルコット」

「まず、目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「いいだろう、ただしこれは二カ国の最重要機密だ。わかっているとは思いますが、決して口外などはないようにしろ」

「了解しました」

千冬が端末を操作すると、投影されているディスプレイに対象であるＩＳ、銀の福音のスペックデータが表示される。

「広域殲滅型かつ、特殊兵装搭載型。オールレンジ兵装もあり、と……。ありがとうござ

います、もうひとつよろしいでしょうか」
「許可する」

「——対象の停止ではなく、鎮圧となった場合。パイロットの生死は、どうすればよいでしょうか？」

部屋の中に緊張が走った。それは恐らく、候補生全員が思っていたことだ。軍用ISの暴走、それが何を意味するのか。もし停止が不可能となった場合、これを放置するわけにはいかなくなる。現在銀の福音は海上を移動しているが、もしこれが地上。つまり市街地や民間区域に現れ暴れればどうなるのか。

間違いなく死傷者が出るだろう。そして、大混乱は間違いない。それを未然に防ぐためどうするのか。最悪の場合の決断は、全員の中にはあった。しかしそれを明確にしておく必要があったのだ。最悪の事態を想定する、そうしなければいざという時惨事になるからだ。

「ま、待ってくれ！セシリア、それはどういう意味だよ！まさかパイロットを殺すとか、そんな事じゃ——」「一夏さん。少し黙っていてください」……ッ！」

パイロットの撃墜。それが何を意味するのか理解した一夏は慌てたようにしてセシリアに問いかける。が、セシリアも有無を言わせない態度でそれを一瞥すると、一夏を

黙らせる。

「もし、今回の作戦が失敗した場合。一般地域への損害も考えられ、そうなった場合が最悪の事態になる。最悪の場合、最重要視されるのは『機体の鎮圧』と指示が出ている。この意味はオルコット、そして他の専用機持ちも……分かるな？」

「……了解しました。そのように対応します」

一夏が反論を続けようとしたが、それを無言でリイスが制止した。彼は彼女を見て納得がいかなないようにしながら引き下がる。

「更に悪い知らせだが……現在この機体は超音速で飛行している。恐らく、アプローチは一回が限界。オルコット、超音速の相手に対しての狙撃。かつ一撃で落とすことは可能か？」

「……不可能です。一撃当てる、というお話であれば衛星の補助があればなんとか、といったところですが成功確率は低いです。ましてやこのスペックの機体を一撃で落とすのは並大抵の武装ではできません」

相手は軍用I.S。仮にセリシアの超遠距離狙撃が成功したとしても一撃で福音を沈黙させることは不可能だ。そして彼女の言うように銀の福音のスペック上、一撃で落とせるとすれば戦術兵器か、もしくは特殊な能力を持つ武装のみになる。

そして恐らく、この場にいる人間の中には後者を持つ人間が居る。しかし、千冬は個

人的な感情ではその選択をできるだけ回避したかった。

どうするか、そう思っている時だ。

「お、織斑先生！」

「どうした、山田先生」

「学園の通信回線を使用しての連絡です。これは……アメリカ軍基地？　ふ、福音の実験が行われていた基地からです！」

「……生存者が居たのか？　いや、しかしそんな連絡は」

「先生？」

「——なんでもない、繋いでくれ山田先生」

千冬の指示により、真耶は慌てて回線を接続し投影モニターを室内に投影した。投影されたそれに映っていたのは——少女だった。

「えと、聞こえますか？」

「女の子？　貴女は一体——」

「緊急事態。織斑千冬を、出して」

呼ばれ、モニターの前に立つと千冬は疑問を投げた。

「……まさか、お前がエクスカリバーか？」

「ん、そう。……本当は色々話したい人がそっちにいるけど、我慢する。こっちの状況

と、福音について話がある。いい？」

彼女について知らない人間はやはりというのか、かなり驚いていた。エクスカリバー。その名前はIS関係者、特に軍部や代表候補生であれば必ず耳にする、ある存在を指す単語だ。曰く、アメリカのホワイトハウスには手を出していけない。曰く、大統領を狙えばその存在に殺される。曰く、アメリカにおいて最強の力を持つ存在。

しかし、それは存在を知らない者にとつては都市伝説程度の認識だった。実際にその正体をちゃんと見て報告したものはおらず、ただその存在だけが伝説になった。そんな伝説がここに居る。しかも、生徒からすれば自分達と変わらないほどの少女なのだ。驚きもした。

「——緊急事態、と言ったな。どういうことだ？」

「……まずこっちの状況。基地はほぼ壊滅、生存者は探してるけど、多分少ない。福音の稼働実験の際に一緒に居たイーリスが福音を止めようとして大怪我、現在基地の仮設テントで治療中」

「イーリス・コーリングが大怪我だと？ ……馬鹿な、奴はアメリカの国家代表だぞ」

「イーリスに怪我をさせたのは、福音。福音に乗ってたナタルも突然暴れだして……苦しそうだった。『私とこの子の中に入ってくるな』とか言ってた。詳しいことは送った簡易報告書に書いてる。それから、」

「…………どうした?」

エクスカリバーがそこで言葉を止めた。彼女について存在を知る千冬も、彼女の人間知りや人に慣れていないというのは知っていた。しかし、今の彼女の表情はそう言った類のものではない。

どこか深刻そうな、そんな眼をしているのだから。

「——不覚を取った。私が撃墜されたせいで、福音を止められなかった。……いるよ、福音以外に何かいるの」

千冬がモニターの前で息を呑んだ。そして、その言葉に対して他の全員も同じ反応を返した。その真意について知るために、千冬は言葉を続けていく。

「どういうことだ? いる、とは一体何がだ」

「…………わからない。けど、プレジデント・オーダーに乗った私は見えない何か…………ううん、殺意は感じたのに見えないそいつに海に引き摺りこまれた。すごく嫌な感じがしたから、イーリスを助けて一度下がった」

「ツ…………やはり今回の騒動はそういうことか!」

「多分、想像通り。こっちの基地は壊滅、イーリスが意識不明で指示系統が崩壊してどうにもならない。…………大統領指示で以降はIS学園の指令に従う。機体データも送った、機密情報だから扱いには気をつけて」

「——了解した、此方で対策を練る。実行時間に私から連絡して同時に出撃してもらおう。それでいいか」

「了解。それまで基地で待機する。……気をつけて、本当に嫌な感じがする」

通信が切れた。そして一同に向き直った千冬の顔は明らかに苦いものだった。

「聞いている通りだ。作戦対象周辺には正体不明の何かが存在する。米国のエクスカリバーが共同作戦として参加するが……」

そこで千冬は迷った。福音だけでも深刻な事態であり危険を伴う。そこに加えて正体不明な何かが存在するのだ。

福音を停止させ、更にその何者かにも対応する。ましてや、恐らくその正体は亡国機業だろうという確信があった。故に、どうするのかと考えた。

「……ちーちゃん、東さんから提案がある」

そんな中で言葉を作ったのは東だ。千冬が迷い、生徒達もどうするのか考える中、東はその顔にいつもの笑顔を浮かべることなく、真剣に言い放った。

「ふざけた提案ではないだろうな、東」

「やだなあ、暫く会ってなかったからつてらぶりの東さんへの信用まで消えちゃったかな？ それで、話していいのかな」

「——構わん」

コホン、と束は咳払いをして

「極めて真面目な話をしようか。対象は超音速で飛行、アプローチは一回が限界。そのキミ、オルコットとか言ったっけ。君は狙撃が可能。けれど現状で銀の福音の装甲を貫いて沈黙させることは難しいのが現状、ここまではいいね？」

「何が言いたい、束」

「簡単だよーちゃん。対象を一撃で落とせばいい。ワンショットワンキル。オーケー？」

「搭乗者を殺す前提か、話にならない——」

「まあ待ちなよ。上手く行ければパイロットも殺さない、一撃で終わる方法があるんだよ」

「何？」

「白式の零落白夜による一撃離脱。これなら機体を破壊することもない」

そうして束は一夏を見て言葉を続ける。

「いっくん。これは訓練じゃない、実戦だ。だから降りたければ降りればいいし、そうになったら別のプランを提案するよ。…どうかな」

「——俺が成功すれば、パイロットの人は助かるんですか？束さん」

「うん、確実に助かるよ。けれどこの作戦は……いっくんにとってはリスクが高すぎる

からね」

一夏は一度を目を閉じて、すうっと息を吸った後に

「……やります。それで最善の結末を得られるなら、俺はやります」

「わかったよ。こつちも全力でサポートする。話を続けようか」

投影されるディスプレイに新しいデータが投影される。それは、紅椿と白式、黒式のデータだ。

「紅椿型、つまり白式・黒式・紅椿には展開装甲っていう装甲が採用されているんだ。この天才東さんを崇めてくれてもいいけどそれはまた今度ね。お披露目した時に少しだけ話をしたけど、第四世代のコンセプトは『換装を必要としない、かつ全局面下での運用』。それを実現させたのがこの展開装甲な訳さ。この装甲は用途——攻撃・防御・機動を状況に応じて任意で切り替えが可能なんだよね。つまり、即時万能対応機を実現したという訳さ。ちなみに補足すると、白式と黒式も雪片にも展開装甲が使われてる。分類上では白式と黒式も四世代だね」

最後にとんでもないことを言った。全員なにか言いたげにしているのを束はそのまま制止して言葉を続ける。

「ま、この天才東さんを崇めるのは今度にしてよ。今は大真面目だからさ。で…今回の作戦、いつくんをいかにして銀の福音まで送り届けるのかという問題だけど、今言った

展開装甲で解決ができる。そして現状、それを可能とした上で作戦遂行可能なのは黒式・白式・紅椿、そして……ヴァイス・フリーユゲルのみ」

リースの専用機も含めて、というその言葉に対して一部は疑問符を浮かべた。しかし、既に彼女の専用機も四世代相当の状態となつていることを知っている束は、そんなことは気にもしていない。

「展開装甲の調整はすぐに出来る。5分もあればいいかな。だからこそ、四世代機による一撃離脱の作戦を提案したい。けどそれだけじゃ足りない。さっき通信にあつた正体不明の何か。……正直、こいつが何なのかはわからないけど嫌な予感がする。だから作戦遂行部隊を2つに分ける」

「2つ、だと？それはつまりお前の言う福音を停止させるための部隊と、別の部隊ということか？」

「流石ちーちゃん物分りがいいね。具体的には白式・黒式・紅椿この三機で福音の停止作戦を行う。紅椿の機動力で白式を運び黒式がそれに随伴。黒式が運搬でエネルギーが減つた紅椿のサポートと、一撃必殺を叩き込む白式の援護を行う。そして第二部隊、こつちには残つた専用機とヴァイスを配置する。そのオルコットとかいうの、専用機と通信衛星の接続経路は」

「ひ、ひゃい！実際に観測接続した経路はありますが……」

突然東に名前を呼ばれ、あまりのことに驚いてしまうセシリアだが、緊張と突然のことで慌てながらもなんとか言葉を作る。

「ならいいよ。残った専用機とヴァイスは所定の空域で待機。ブルー・ティアーズで衛星接続による観測を行いながら周囲を警戒、もし不審な反応があったり作戦地域内に福音以外の反応があれば万全の状態に対応に行く。ヴァイスを残すのは四世代レベルの機体を全て集中させて戦力低下をさせないため。ラウラ、レギオンによる広域探知はできてるね？」

「はい、可能です博士」

「黒兎と灰兎の補助もフル稼働で探知に回して。衛星警戒してジャマー張ってる可能性もあるからね。さて……この福音に直接アプローチをかける部隊と、後衛で周囲に対する警戒と何かあった場合すぐに動ける部隊の二部隊編成による作戦遂行。どうかな？ちーちゃん」

千冬は多少考えるようにしたが、東の言う作戦はある種理想的と言ってよかった。仮に全機を福音に対して投入すればベースである旅館の護りが手薄になる。といっても、守りに徹するわけにも行かない。だからこそ前衛部隊は福音に対して専念し、衛星接続を可能とするセシリア、広域探査能力を持つラウラ、そして防衛戦力としてのリース。そこに補助能力を持つシャルロットに前衛担当が可能である鈴を残すことで防衛・攻

撃・探査、全てを後方でも可能とする。

「……わかった、その作戦で行こう。ただし福音停止にあたる織斑、東雲、篠ノ之。もし作戦遂行中にイレギュラーが発生した場合、すぐに退却しろ」

千冬にはある予感があつた。それはとても嫌なもので、恐らくあたっているもの。

先程から礼子の姿が見えない。彼女が生徒を見捨てて逃げる、なんてことは考えにくく、むしろ彼女は自ら率先して前線に出るような人間だ。実際、連絡があつた時にも自分が出ると言っていたほどだ。だが、その彼女の姿が何処にもない。つまり……別の何かをしているということだろう。

そして彼女が直接手を下す必要がある事態ということは、亡国機業が関わる出来事という可能性が高い。つまり正体不明のその存在もおそらくは、と考えたのだ。

「すぐに準備に入る。福音停止部隊は展開装甲を作戦遂行用に調整。他の専用機も最悪の事態に備えての調整を行う。以上、解散！」

時刻は十一時半。天候に問題はなく、作戦時間内で天候が変化することもないことも確認済み。

砂浜では調整を終えた各機が展開され、最終準備に入っている。亡国機業の介入。事

情を知る人間達の表情は特に険しいものだったが……そんな中、不安そうに一夏へと歩みを進める人物が居た。リースだ。

「一夏」

「リース？なんだよ、そんな泣きそうにして」

「……その、ごめん」

リースとしては、やはり気が進まなかったのだ。一夏を最前線に出すことに。亡国機業の介入は必ずあるだろう。そして福音は制御なしのIS。下手をすれば命にも関わする。しかし、束の言うとおりの一撃で福音を沈黙させられるのは一夏と白式だけであり、もし福音を放置した場合の被害は最悪なことになるだろう。

割り切つてはいたはずだった。一夏に対して事情を話し、自分の意思で彼を巻き込んでからは覚悟はしていたつもりだった。だが、それでも尚リースとしては一夏の命が危険に晒される場所に何も出来ないまま送り出すのは辛かった。

そんなリースを見てか、一夏は苦笑して彼女の頭に手を乗せる。

「これは俺の意思だ。作戦に参加したのだから、福音を止めたいって気持ちだって俺の意思。リースが自分を責めることなんてなにもないぞ」

「でも、今回の作戦には——」

「……亡国機業、だろ？ 千冬姉の言う正体不明の何かつてのは多分そうだろうって予

感はある。あのエクスカリバーって子、相当強いんだろ？」

「彼女は米国最強だけど……どうして？」

「通信越し。左手の指先を気にするように左肩が動いてたんだよ。あれって、いつでも動けるようにしてることだと思おう。それに米国基地は壊滅って千冬姉は言ってた。にも関わらず……まだ無事。つまり、彼女が1人でなんとかしたってことになる。そう考えれば、なんとなくだけでわかるさ」

「ふーん……他の子のこと、随分としつかり観察してるんだ」

「何拗ねてるんだよ。一番見てるのはリースだつての」

「君はこの場でこういう状況でそういうこと言うの恥ずかしくないの」

「本心だからまったたくそう思わない」

近くでは作業をしつつもセシリアや鈴達がニヤニヤしながら二人を見ている。それに気がついていても、全く気にしていないというように一夏は言葉を続けていく。

「慢心するわけじゃないけどさ、東雲にあれだけ念入りに調整をした紅椿を使う筈もいるんだ。確かに俺は実戦なんてのは殆ど経験ないけどさ……でも、やんなきゃもつと酷いことになる。それに大丈夫、千冬姉も言ってたけどヤバくなったら逃げるさ」

一夏のことを疑うわけではない。彼の實力は間違いない。今では候補生と戦えるほどになっており、状況判断能力だつてある。作戦には場慣れしているマドカに、あれだけ

真剣に紅椿と向き合う覚悟を持った筈も居るのだ。機体としても4世代クラスが三機、バックアップにも自分達が配置につく。問題なんてないはずだ。

しかし、リースにはなにかとてつもなく嫌な予感がしていた。確認なんてない。だが……あのエクスカリバーという少女が言っていたように、何かとても不味い予感がする。今回の作戦に、亡国介入に、正体が見えない敵に。

だからこそリースはこの時、反発できなかった。一夏を信じていたから。皆を信じていたから。自分のその予感なんてのはただの予感で、確認のないものだったから。

だからこそ彼女は、渋々納得したようにして。

「——わかった。気をつけて、一夏。絶対三人で戻ってきて」

そう、返答してしまった。

暫くして作戦が開始された。各機が配置につき、リース自身も後衛部隊の主力火力担当としての配置でヴァイスを展開した。ラウラは高精度レーダーと、黒兎と灰兎をフル稼働させての探知。セシリアは衛星との接続を行っての広域探知を開始。

一夏達が福音と接触し、作戦が開始されるまでは何の問題もなかった。海域封鎖も行き、イレギュラーの事態も何もなかった。このまま福音を停止させ、全てうまく行けばいいと誰もが思っていた時だ。

——ピリリツ、ピリリツ

通信音が、鳴り響いた。

千冬は何事かと思ひ真耶に確認を促すと、その発信元は真耶にとつては見覚えがないものだった。

が、しかし。千冬にとつては知るものであった。発信元は不明、しかしこちらに對して提示するように送信されていた通信通知番号は——スコールからのものだった。

本来スコールからこうした直接的な回線での連絡はない。束が作った個人回線でのやり取りが普通なのだが、現に今は学園の回線に無理やり割り込むような形で連絡してきている。ただ事ではない。そう思った千冬は真耶に受信を促すと自らが通信に出た。

「スコールか？これは学園の回線だぞ、連絡ならいつもの——」

『千冬ツ！今すぐに生徒達に作戦を中止させなさいッ！』

驚いた。音声のみでの通信ではあるが、通信先の彼女の声はかつてないほどに慌てており、声を荒げていた。

「……どういうことだ？作戦は既に開始されている。イレギュラーは今のところ何も、」
『時間がない』から結論から言うわ——亡国機業は、最悪の兵器を投入してきているわ』

最悪の兵器。その言葉で千冬は思い当たることがあった。対抗戦の時にも投入された、ドールと呼ばれる無人機だ。

しかし、前線に投入されているのは四世代が三機。調整も実戦用に調整されている。仮に複数機投入されたとしても、一夏達が負けるとは思えなかった。

だがそれは投入されたのがドールであれば、の話だ。

『——海・空・陸、その3つの場所のうち海を支配するために作られた”変性接続人形 I S (ディネイチャーコネクトドール)”、機体名『リヴァイアサン』。それが、今福音と一緒に居るわ』

「……なんだ、それは？」

脳変性接続については千冬も知っていた。かつて行き過ぎたデユノア者の研究者の一部が手を出した禁忌。人の脳を意図的に書き換えて、意識や思想、存在すら書き換える最悪の研究。そしてそれに亡国機業も関わっていたことは報告として聞いていた。

しかし、今スコールが言ったのは変性接続人形 I S というものだ。つまり、あの最悪の無人機に禁忌と呼ばれる研究を合わせたものであることは想像できた。

『時間がないわ。千冬、今から送るデータをなんとかしても受信しなさい。金色についてと、亡国の奴等の目的が少しわかったわ。そして……これから絶対にこつちに音声を送っては駄目』

「どうい——」

疑問の声をあげようとした。だが、千冬のそれは叶わない。通話先で銃声がしたからだ。思わず声をあげようとしたが、今言われたことを思い出し留まる。

苦悶の声が聞こえた。それは、スコールのものだ。同時に、足音と……声がした。

『困りますねえ、元幹部様。お戻りになられるならせめて連絡くらい頂かないと』

それは、男の声だ。相手を見下すような、嘲笑するような男の声。

『……あら、此処は元々私の研究室よ？自分の部屋に戻るのに、連絡が必要なのかしら』

『ふむ、ごもつともですね。ですが……その資料をこれ以上外に流されると、困るんです』

『よ』

『私の研究成果をまさかこんな風に使っていたとは驚きだわ。……貴方達は狂っているわ。』こんなもの、世界を滅ぼす手段にしかない”。それを、あの方が許したのか

しら……』

『勿論、お許しになりましたとも。この世界を、いいえ——ISを最も憎んでいるのはあのお方なのですから。こんな世界は一度滅ぼされなければならない。絶望しなければならぬ。だから一度全て零に戻すのです』

『その為の世織計画かしら？』 そのために織斑一夏に”アレ”を投与したと？ よう

やくわかったわ、貴方達が今まで動かなかった理由は——』

再び銃声がした。同時に、苦悶の声も。その後、今まで話していたスコールの声は苦悶の声と、苦痛によって荒げた息のみとなり、言葉は続かない。

『そこまでです。……スコール・ミューゼル、貴女は知り過ぎた。直感だけでここまで掴み、知り得たことは評価しましょうか。命を張って、外に情報を漏らしたこともね。まあ、これぐらいの情報なら別に構いませんよ。ですが……今口にしようとしたそれだけは、言わせるわけにいきません』

『あ……………』

『さようなら、元幹部様。貴女の研究成果は有意義に使わせてもらいますよ？　そして、貴女の命もね』

通信が切れた。送信されたデータは問題なく受信されていたが……今のやり取りで千冬は理解してしまった。自分達は、とんでもない深淵に踏み込みパンドラの箱を開けてしまった。

それが原因で——スコールが殺されたと。

黒銀の翼

感じたのは、風だった。今までに体験したことがない速度。少ししでも気を抜かない、そんな速度の世界。

銀の福音の停止作戦開始から数分一夏・箒・マドカの姿は海上にある

上空五百メートル。既に瞬時加速の速度すらも超えているのではないかと思える速度の中。三人は一瞬たりとも気を抜くことはない、この作戦が失敗すれば最悪の事態になる可能性もあるからだ。それに、もし失敗すれば福音のパイロットの命の保証もない。

だからこそ慢心はない。確実に作戦を遂行しなければならぬという覚悟があった。

福音停止部隊の作戦はこうだ。まず、紅椿の最大加速によつて白式を現地まで運ぶ。特殊条件下で半永久的にエネルギーを回復できる黒式はその特性を活かして随伴。福音と接敵したら、一夏が雪片と白雪で繰り出される抜刀術。それにリースとの戦いで見せた神速の一撃に零落白夜を乗せる技をぶつけて、停止させる。紅椿と黒式はそのフオーに当たるといふものだ。

「接敵まで後1分。一夏、東雲。私はエネルギー残量が少ない。フオローに入っても援護はあまりできないと思う。……準備はいいか」

「俺は問題ない。いつでも零落白夜の発動はできる。接敵したら悪いが箒、そして東雲も援護頼む」

「此方も準備はできている。福音の搭載武装はビーム兵器が大半だ、私で無力化できる。

——確実に仕留めろ、失敗は許されない」

各自に油断はない。恐らく出来る万全の体制であり、本来なら戦力としては過剰だろう。

「見えたぞ！一夏！東雲！」

箒がそう言つて、各自前方を確認する。ハイパーセンサー越しに銀の福音の名に相應しいほどの『銀』が、そこには存在した。接敵した、そう判断した瞬間の行動はそれぞれ早かった。

「#?&■▲アアア——ツ！」

「足を止めて、貫うぞツ！」

一夏へと合図を送り、福音に向かうように促すと同時。箒は両腰に存在する2本の日本刀、『空裂』と『雨月』を引き抜くとそれを振るい、ビームの斬撃を福音へと飛ばした。

紅椿のエネルギーは白式の運搬によってなり減っている。それにより出力を抑えた攻撃となってしまうが、箒の目的は福音に対してダメージを負わせることではない。事前に公開されたデータによれば、銀の福音はこの程度の攻撃ではダメージにすらならない。だが、防御行動は余儀なくされる。防御をすれば足は止まる、箒の狙いはそれだった。

斬撃は加速する一夏の背後から通り過ぎ、福音へと迫る。

「アアアアツ——！」

そして足を止めた銀の福音が防御行動を取り、停止した。

同時、福音が三人を敵対対象と認識したのかその場で光の翼を展開。翼から大量の光の雨を放出し、一夏へと放った。

「想定通りだ」

一夏を援護するために加速していたマドカが前へと出た。同時に身の丈ほどもあるバスターソード、雪片式型・天を盾にするように構えた。

直撃。しかし、マドカにはも関わらず無傷である。それどころか、彼女の持つバスターソードの刃からはエネルギーの残滓と思われる光が迸っている。

マドカに対して並のビーム兵器は無駄であり、回復行為にしかないのだ。福音の

武装は事前情報で大半がビーム兵器であると判明しており、この展開も彼女は予測していた。

だからこそ前へと出て、一夏へと言う。

「隙が出来た。——行け、織斑一夏」

「わかってるッ！」

大量のビーム属性の弾丸を吐き出し、その動作として光の翼を福音は展開した。今の福音は完全にその位置で停止しており、光の翼を広げ弾丸を放った硬直で動けずに居た。故に、これは大きなチャンスである。それを一夏は見逃さない。

瞬時加速。そこに更に独自の方法で連続した加速を加えた加速法で加速し、その速度の中で一夏は雪片が納刀されている白雪を構え、雪片の柄へと手を伸ばす。

福音の加速は常軌を逸している。今回は紅椿の性能と箒の無茶のお陰でなんとか追いつけたが、もし今度加速されればすぐに追いつくことは不可能だ。だからこそ、一撃かつ一瞬で決める必要があった。

それを可能なのは白式と、一夏の持つ技術のみ。神速の抜刀術に零落白夜を乗せた刹那必殺の一撃。リイスを一度倒した技しか無かった。

「これで……堕ちろおッ！」

最大の加速の中、最善のタイミングで最大の力を込めて一撃が放たれた。篠ノ之流抜

刀術奥義『散桜』、一夏の極めた極意にして唯一の技。速さ、威力、鋭さ。すべてを兼ね備えた刹那の一撃。

雪片が白雪から抜き放たれて、神速の速さで白の光が軌跡を描いた。その軌跡は動きを止めた福音へと向かい、一撃必殺が決まろうとした。

しかし、そんなことを許さない存在が居たのだ。

『！』

声とも叫び声ともとれない何かが聞こえた。

それは海からのものであり、その場に居た三人全員がそれに対して気がついた。しかし、一夏は既に攻撃の動作に入っており、彼自信もそれで攻撃を止めるわけにはいかなと判断。そのまいま一撃を福音へと叩き込もとした。

が、

「がっ……い！」

一夏が突然空へと弾き飛ばされた。

それは本人も衝撃とともに自覚したことであり、見ていた二人も確認したことだ。し

かし、どうしてそうなったのかがその瞬間では理解出来なかった。見ている二人からすれば、居合を放とうとした一夏がその瞬間に突然空中へと弾かれたようにしかみえなかったのだから。

そこで全員が思う。福音以外にも何か居ると言っていた、つまり——そいつが一夏を妨害したのではないのか、と。

そう考えてからの行動は早かった。一夏はすぐに体制を立て直し、箒とマドカの所まで下がった。このまま再度仕掛けるのは悪手であり、姿の見えない相手に対してそれは無謀だと判断したからだ。

そして警戒しているのは箒とマドカも同じだった。見れば、福音は停止しており、

『——！』

先程と似たような声。それを福音もが発した。

ざばん、ざばん、と。海から水が何かと接するような音が何度も響いた。その音を警戒して、三人は海を見た。そこには、海流が渦巻いていた。海が荒れ、暴れる。そして——その存在が現れた。

「なんだ、あれは——」

「竜、だど？」

「……こいつが、エクウの言っていた奴か」

海より現れ、福音の真下の海面に現れたのは竜だ。機械的な、青と黒の竜。その身をすべて見ることは出来ない、恐らく超大であるということは推測できるだけで、身体の殆どはまだ海の中だろうと考えられる。そして何よりも、その竜のある部分に存在していたソレで、三人は息を呑んだ。

「……うっ、」

思わず気分を悪くして口元を抑えたのは箒だ。マドカが心配そうに『辛いなら見るな』と言葉をかけるが、『……大丈夫だ』と言葉を返す。

その超大な竜の頭はその名の通り竜の頭だ。しかし、口はおぞましいの一言であり、ヤツメウナギの口内を連想させる。そして、機械的な存在にもかかわらずその口内は、人のそれと同じように脈動していた。

箒の気分を悪くさせた原因は別にある。その竜の頭、人で言う脳の部分にはまるで見せつけるかのように透明なガラスのような何かで中身が見えるようになっており——そこから見えたのは、幾つもの連結された、まだ動いている人の脳だった。

脈打つその竜のような何かの体の中、そこに動く脳が幾つもあるのだ。普通の人間が見れば、気分を悪くしかねない。

福音への一撃必殺が失敗に終わった以上、作戦は失敗になる。故に、一夏の判断は早

い。

「……撤退か、何かしらの対策を講じよう。箒、まだ加速できるか？」

「帰りの分はギリギリ、というところだろう」

「了解。悪いけど、無理させる。東雲、そっちは？」

「問題ない。……どうする？私が抑えて一気に下がるか？」

「福音はビームだがもう一体はわからない。ともかく、ここに留まるのは愚策だ」

もし、リースと出会っていない一夏ならばここで留まることを選択しただろう。『みんなを護る』や『俺が護る』なんて考えを持って。

それは愚かであり現実的ではないことを一夏は知っている。箒のエネルギー残量、自分のシールド量、アシストに入るマドカと相手の相性。相手の情報。それらを総合して考えれば、不確定要素が多い今の状況で戦うのは不味い。

それにこうなった場合の手段も用意しているのだ。だからこそ一夏は、作戦は失敗したと、後方に待機するリース達に連絡しようとした。

だが、一夏が考えるそんなことは相手も考えていたのだ。

『……ちら、後方部隊。——正体、の機体……交戦！ お——い、一夏！返事—— きゃあッ！』

「ッ……!!? リース、おいリース！そっちで何があつたんだよ！後方部隊がどうしたん

だ、よく聞こえない！」

通信が切れた。だが、わかったことはある。

状況は最悪、そして後方部隊で何かがあり……自分達で福音とこの竜をなんとかしなければならなくなった、ということだ。

空がある。その空を加速し、刃を振るう。

振るわれた刃が己に対して殺意ある攻撃を放っていた既に人ではないそれを両断した。

しかし、彼女。巻紙礼子は気を抜けない。

「……ちっ」

ドールと呼称される無人機が12機。今まで同時にこれだけの量を投入してくるなど無かった。しかし、現に今自分一人に対してそれだけの戦力を投入してきている。

その理由は1つだろうと推測した。足止めだ。礼子には自信があった、己が福音や不明機の所に行けば少なくとも対応はできると。故に、生徒を無理に前線に出す必要はな

くなると踏んでいた。

だが現状は違う。人命を盾に脅され、その襲撃者を見つけて戦っている。無人機程度では礼子は止められない。が……問題は別にあった。

「……何者だ、テメエ」

「――」

旅館から距離のある山岳地帯の上空。今福音や一緒に居る何かと生徒が戦っている位置とは真逆。その空で礼子が対峙するのは、“一人の少女”だった。

顔の上半分には龍の仮面のような何かをつけており、素顔を判別することはできない。見た目からわかる身体的特徴は、年齢はまだ若いであろうということ、銀色のロングヘアであるということ。そして、間違いなく亡国機業の関係者であるということ。

声はマシンボイスに変換されており聞き取れない。だが、見た目から女性であることは明らかだ。しかし、礼子はその少女について知らない。

礼子がかつて亡国機業でも制御できなかった怪物であり最凶の存在である。戦闘・工作・諜報。あらゆる分野において恐ろしいほどの技量を持ち、ISに乗らせれば“相手を殺す”ということにおいては千冬すらも上回る。そんな彼女にとって、無人機などただ人が乗っていないだけの有象無象。という認識でしか無かった。

疑問を投げげると同時、礼子は動いていた。たったの数秒。それだけの時間で数いた

無人機は全て撃墜され、空に残ったのは打鉄のカスタム機を纏い、仮面を付けた少女だけになった。

わからなかった。自分がまだ亡国機業に居た頃には、こんな人間の情報はなかったのだ。少なくとも己は亡国について多くの情報を知っていた。ある程度までの構成員、行動情報、物資や実験材料の出入り。諸々。数多くの情報を知っていた。が、こんな少女の情報は無い。

少女に対して礼子は自分の専用機の装備であるロングブレードの切っ先を最大限の殺意とともに向けた。だが、少女は動じない。

疑問した。本当に何者なのだと。

少なくとも、礼子くらいの化物になれば殺気だけで格下の相手を怯ませたり戦意を失わせたり、恐怖させたりすることは出来る。だがこの少女は一切動じない。ただその場で佇むだけであり、動かない。

不気味だ。そう礼子は思った。

「もう一度聞くぞ、ガキ。——テメエは何者だ」

「——流石、”狂犬”といったところでしょうか。それとも”世界最凶”とお呼びしたほうが？ この程度では、貴女の足止めにもならない。困りました、これではウィルスを撒くことも出来ません」

「……テメエ、” 最初からそんな気無かったな?”」

おかしいと思っただのは、接敵した直後だった。あれだけの数がいる無人機だ、もしウィルスを持ってきているなら無人機に各機持たせて分散させて逃げればいい。そして、到達した無人機がそれを撒く。そうすれば効率的であり、いかに礼子といえど多方面の相手を同時にすることは不可能だからだ。

にも関わらず、無人機は全機少女の周りに佇んでいて己に襲いかかった。もしウィルスを散布する気ならこれはあまりにもおかしいのだ。

「さて、どうでしょうか」

「探り合いはもういい。目的は何だ、吐いても吐かなくてもテメエはぶった切るがよ」

「……怖いですね。目的は単純ですよ？ 貴女の足止めですよ」

「はっ、この程度で足止めできると？」

「ええ、思ってません。ウィルス散布に動いたとしても貴女は対応するでしょう、貴女は” 世界最強” なんですから —— だから、もっと効果的な足止めを用意しました」

「……何？」

瞬間。少女が打鉄を解除して空中から落下を始めた。突然のその行動に礼子は驚くが、その後の行動で更に驚くことになる。

少女は落下する。落下する中、ISスーツと顔を隠す仮面だけとなった状態で、首に

ある別の存在へと触れた。

それは、ネックレスだ。剣と翼が模された”黒の”ネックレス。

ISが展開された。少女が光に包まれ、ISが展開されると礼子は認識した。嫌な予感がした。礼子はその見えたネックレスに覚えがあつたからだ。それも、とても覚えがあつた。

「な、に——」

その嫌な予感的中した。少女が展開したIS、それは……自身にとつてはとも見覚えがある機体と酷似していたからだ。黒のフレーム。両腰にホールドされた銃剣。背部の非固定浮遊部位として存在する、三対六枚翼の赤いエネルギーウイング。

多少装備は異なるが、間違いなく——リースのヴァイス・フリーユージェルとほぼ同じだった。

「私が直接足止めをする。それが、一番効果的だと判断しましたので——相手になつて貰いますよ？」 巻紙礼子さん？」

流石の礼子もこれには驚いた。だが、対峙するこの少女はリースではない。

リース本人は他の生徒と既に海上に出ていることを確認済みであり、別人なのは明らか

かだ。だがあまりにも機体が似すぎている。リースの事情については礼子も知っていた。彼女の機体が一体何なのか、についても。

イレギュラーナンバーコアと称されるコアは2つしか存在していない。うち1つはリースが、もうひとつは——恐らくあの金色のISに使用されている。

では、この機体は何なのか。理解できない、そう感じたからこそ礼子はブレードを構え疑問する。

「……なんでテメエが、その機体に乗ってる。答えろ。」お前は誰だ」

「——それは完全にはお答えできません。ですが、回答として一部を返しましょう」

瞬間。その少女が消えた。並の人間なら認識できないであろうその速度からの攻撃を礼子は見えており、それをブレードで受け流し切りかかってきた少女を弾き飛ばした。

同じだ、そう感じた。今のはリースが使うあの技術と同じ。そしてあの加速は、恐らく——

「最強の貴女は、最強でなければ止められません。名乗らせて貰いましょうか。現亡国機業最強、ウインター」、そして私の専用機——「シュヴァルツ・フリーユゲル」。貴女を海に行かせると面倒なんです、ですからここで私と遊んでください」

そんな言葉と同時。また少女が礼子の視界から消えた。

黄金の騎士

状況は最悪といってよかった。

今私は、飛行する正体不明の敵と戦っている。周囲には他の皆はおらず、私だけだ。開幕5分。その時間が、私以外の全員が撃墜されるまでの時間だった。

最初に異変に気がついたのはセシリアだった。衛星での監視で、作戦空域に正体不明の機影を感知。……おかしな点を挙げるとすれば、速度が異常だったこと。レーダーに探知されて1分もしないうちに接敵。レーダーでは追えない速度で襲いかかって来た鳥のようなそいつは、前衛に入った鈴とシャルロットをすぐに撃墜した。

私達が反応した時にはもう全てが遅かった。驚いて生じた一瞬の隙。その僅かな時間でセシリア、ラウラが撃墜された。そして、残ったのは私だけ。

ラウラのAICが通じなかった。シャルロットの弾幕攻撃も、鈴の近接戦闘技術も。本部、織斑先生への連絡も通じない状態であり、オペレーターのクロちゃんともつながらない。独立回線である”兎鱈”も通信が確定できない。余程に強力な妨害をされているのだろう。

レーダーで状況を確認する。鈴が頭部負傷、息はあるが昏倒状態。セシリアは利き腕

を負傷。エネルギーエンブレティ状態で戦闘継続不可能、現在は撃墜されたメンバーの救援に向かっている。シャルロットは左脇腹に切断傷。傷はやや深く意識がない。ISの搭乗者保護機能が働いており恐らく一番重症。ラウラは機体の重装甲のお陰か、傷は浅いものの頭部と脚を斬られており、海に叩き落された拍子に意識を失っている。

「つ……っ」のツッ」

鳥のような何か。ISだとは思うけど、例えるなら鳥人間のようなそいつに對して私はシユツルムを連射。しかし、その弾は当たることはなく全て回避される。

最初に接敵した時にも感じたが、早すぎるんだ。レーダーで常に追いきれず銃弾やレーザー兵器は撃つてもその全てが回避される。

對峙する鳥の化物は巨大とあってよかった。全長は恐らく十数メートル、顔は機械そのもので、鳥によく似ている。頭にはガラス越しに脈動する生き物の脳。5つ目。確認できる武装は巨大な腕から展開してきた爪のような3本の刃に、シャルロットの腹部を絶対防御を無視して切り裂いた脚部の隠し刃。遠距離武装は今のところ確認できない。

そう、大問題があるのだ。”こいつの刃は絶対防御を無視する”。

一夏の零落白夜やマドカの無縫影月とはまた違った何か。こいつの刃はバリアーを

無効化しているわけでもなければ、破壊しているわけでもない。まるで、透過して見たいにシールドを無視してくる。

原理はわからないが、ただあの刃だけは直接受けてはならない。だからこそ、私はその刃を警戒して近づけずに居た。

恐らく、こいつがエクスカリバーの言っていた正体不明の何か、なんだと思う。この見た目だ、無人機なのは明白。こいつがここに現れた目的、それは恐らく……足止めだろう。私達を一夏達の所に行かせないための。

「こちら後方部隊！正体不明の機体と交戦中！ お願い一夏！返事をして！そっちはどうなつて—— きゃあッ！」

ダメ元での通信。その途中で私は大きな衝撃を受けた。

自分の反射神経には自信があつた。他人から見れば明らかに異常ともいえる自分のそれで、動作や攻撃など大抵のことは認識することが出来た。しかし今は違う。認識もできる、動きもなんとか追える。だが、反応が追いつかない。

咄嗟のバルムンクでのガード。もしあと少し遅れていたら私は真つ二つだったかもしれないその攻撃をガードし、衝撃で後退を余儀なくされる。不味い、そう思つて私はヴァイスのセラフ・システムの第一段階での限界速度で加速した。

……今のでわかつたことはある。あの化物の攻撃はシールドは無視しても、防衛兵器

や行動は貫通できない。一夏の神速の一撃のように相手の武器を破壊するほどの威力もなければ、マドカの単一仕様の特種効果のようにありとあらゆる防御機構を破壊するという能力もない。つまり、ガードは有効なのだ。

速度にして二重瞬時加速程度の加速。束さんの言っていた通り、身体への違和感はまったくくない。その加速状態で私は撤退戦を余儀なくされ、加速の中で化物の攻撃を捌く。しかし防戦一方であり、相手はほぼ無傷だ。

最悪の状況。鈴とシャルロット、ラウラは負傷しており意識がない。セシリアはまだなんとか闘える可能性はあるけど利き腕を潰されている。狙撃手にとってこれは致命的だろう。かといって、こいつを放置するわけにも行かない。……最悪の選択かもしれないけど、今までもに戦えるのは私だけ。

だから私は、ある決断を下すことにした。

「セシリア、皆の容態は」

『あまりよくは……ありませんわね。特にシャルロットさんの怪我は至急治療しないと不味いです』

「……わかった。セシリア、三人をなんとかして連れて撤退して」

『ッ!?!し、正気ですの!?!あんな化物、リスさん一人では——』

「けど、このままじゃジリ貧だよ。今までもに戦えるのは私だけ……私がなんとか時

間を稼ぐ、だから撤退して。シャルロットの怪我は重症、他の二人の怪我也も放置しておけば悪化する。このままここで継戦するのが一番まずい。お願い、セシリア」

『——わかり、ましたわ。撤退し終えたら連絡します、ですからリスさんも連絡後撤退してください』

「わかつてる、私もまだ死にたくないから。戻ったら、なんとかして礼子さんに連絡をつけて……皆をお願い」

『巻紙先生に……？ わかりましたわ、ご武運を』

セシリアが三人をつれて撤退したのを確認すると、私は考える。どう戦うか、と。

援軍は礼子さんに連絡が行くまで期待できない。一夏達もおそらくは、こいつと似た何かに襲われている可能性がある。

どうする、そう考えているうちに再び化物の刃が振るわれた。

「く、うッ……」

重い。人の図体を遙かに上回る巨軀、そして巨大な爪のような刃から繰り出されるその一撃はとてつもなく重い。

ガードしても後退を余儀なくされ、もし不意を突かれて直撃なんてしたらあれはシールドを無視して、私を切り裂く。

シユツルムの射撃は駄目だった。ならば、と思い距離を取って背中の中三対六翼を展開

して、レーダーで相手をマルチロック。

「なら、これで！」

広げられた翼から数十発にも及ぶ帯状の細長いレーザー弾を放つ。多機能自動反応兵装（マルチロール・アクティブウエポン）“リンドブルム”、その兵装の一つあるこれは本来一対多数において使用する制圧武器。多数の敵をマルチロックし、殲滅射撃を行うそれは相手一人だと単体に全てのロックオンが向けられる。私が放ったレーザーは全てが追尾性能を持つ。相手が早すぎて通常弾では無理というならば、追尾式の攻撃ならと考えた。

高速で動くその化物はそれを一度は回避するが、レーザーが自動追尾。追尾式だということを理解したのか、直接私へと突撃をせずにレーザーを回避しつつ私への接近を化物は試みている。

この追尾弾はBT偏光制御射撃（フレキシブル）と呼ばれるほどの技術性能はない。単調な動きのみで、ロックオンした相手にしか追尾は働かない。しかし面制圧という意味では十二分に高性能だ。私はレーザーを回避することに専念している化物の移動先を予測して再びシュツルムを偏差射撃で連射――

直撃した。シュツルムの連射の直撃で足を止めたそいつはそれと同時に残った追尾弾の直撃を受けたのを確認した。

なんとかやれる、そう思った。

けど、それはまったくの見当違いで。そう思った瞬間、私は嫌な感じがした。だから咄嗟にバルムンクで背後をガードしたが……それと同時に、背後から腹部に痛みと熱い何かを感じた。

「なん、で……」

ありえない。そう思う。

咄嗟にガードした先、そこに存在したのは先程直撃が入ったはずの化物だ。何故、どうして？ 確かに直撃が入ったはず——

激痛、腹部にやや深く突き刺された三本のうちの一本の刃。それを痛みを無視して引き抜くと同時、相手もそれに反応した。逃がさない、そういうように海面へと私を叩き落としたのだ。

叩き落される。なんとか姿勢を制御しなければ、そう思ったが……痛みと、意識の混濁で身体が言うことを聞かない。

おかしい。痛みはまだ理解できるが、意識がどうして混濁しているのか。まさか——ふと思いつ出したのは、直撃を受けた鈴、ラウラ、シャルロットの状態だ。シャルロットは重症だったが、他の二人は彼女に比べて傷が浅い。にも関わらず、意識を失っていた。つまり……何かの理由があるはず。そして、可能性としては——毒だ。あの刃に

は毒が塗られている。

だとすれば、不味い。落下する中、明確な意識の混濁を理解する。力が入らず、姿勢を制御できない。このままでは海に叩き落され、恐らく追撃される。

しかし対抗手段が何もない。どうする、と思考しても打つ手がない以上対抗はできないだろう。

やられる、と。そう思った時だ。

『!?!』

何かに支えられる感覚と同時に私の落下が止まった。空を向いていた視界が水平に戻され、機体が自動で態勢を維持する。そして私は、何かを打たれた。一瞬の鈍い痛み。まるで、注射器か何かで刺したような痛みだ。

次の瞬間、”一瞬見えた二機”の化物のうち一体が、真つ二つにされた。

化物は何が起こったのか理解できない、という感じだった。機械的な動作からか、無人機だからなのか、すぐに次のアクションを取れずに居た。

ある意味ではそれは私も同じだった。打つ手がない、そう思っていた時に突然何かが起こったからだ。

まるで、デウス・エクス・マキナ（ご都合主義の神様）みたいに。

「……うそ、」

そんなことを思った途端だった。真つ二つにされた化物が、まるで幻だったかのように消えた。それを見て私は理解する、二機いるのではなく本体が分身のような何かを生み出していたのだと。そして、どんな理屈かはわからないがその分身も質量を持つていたということ。

しかし私が信じられないという声を上げたのには別に理由があった。

そんな馬鹿な、と思う。どうしてお前が此処に、とも。多くの感情が私の心を駆け巡った。憎しみ、疑念、驚愕。形にできないそれを心に、動けないまま私は——そいつを見た。

「——金色の、ISS?」

そこに存在したのは、金色。ずっと私が探していた存在であり、紛れもなくあの日に見た——金色のISS。

騎士甲冑のような金色と黒の全身装甲、背中にはマントにも見える黒い翼をはためか

せ。狼とも、龍とも取れるようなフルフェイスの頭部装甲に、金色と黒の鞆。そして……右手に持つ、ロングソード。

「1つだけ明らかな事がある。私は今、ずっと追っていたこいつに……助けられたという事だ。」

場所は変わり、福音と海から現れた別の化物が存在する場所。そこでも激戦が繰り広げられていた。

「……………そっ！近づけねえ！」

毒づいたのは一夏だ。現在この空間には全部で5つの存在がある。一夏と箒、マドカ。そして福音と、突如として現れたバケモノだ。

当初の予定の一撃必殺でのワンアプローチャダウンの作戦は失敗、後方部隊も何かしらの襲撃を受けたらしく、本部とも連絡がつかない。つまり、今の彼らには撤退という選択肢は選べず、戦うしかなくなってしまうていた。

状況としては此方も最悪だろう。白式のエネルギーはまだある。しかし、箒の紅椿が運搬でエネルギーを多く消費してしまい、長時間の継戦は不可能。マドカもレーザー攻

撃を吸収することでエネルギーを回復することが可能でも、一人では福音と化物を捌くことは出来ない。

今の状況で一番まずいのは箒だ。エネルギー残量は少なく、継戦もギリギリの状態。

「箒！左から福音！」

「ツ……………！紅椿！」

機体だけではなく、自身の息切れも激しい箒は一夏の言葉に反応して無理矢理福音からの雨のような弾丸をガードした。それを見て、それまで海の化物の相手をしていたマドカが箒への射線上へと加速し、レーザーの雨を吸収する。

「かなりきついかな？箒」

「……………大丈夫、だ」

案じるマドカに対して箒は息を切らせながら返す。マドカは思う、このままでは不味いかもしれないと。恐らくその考えは一夏も同じだ。箒は確かに事前に念に念を重ねた機体調整に、作戦の確認。そして油断のない覚悟で今回の作戦に挑んだ。

何の問題もない。だが、それはあくまで机上の話。理論での話だ。実戦とそれとはまた違ってくる。箒は数回実戦を経験している一夏と違い、このような戦闘は初めてののだ。

よって無意識に極度の緊張状態に陥っており、それが原因で通常より遥かに重い負荷

や疲れが身体へとのしかかる。

今の筈はなんとか自分の意志で継戦をしている状態である。そして、紅椿もエネルギーがかなり不安なラインに入ろうとしている。

理想は撤退という選択だろう。しかし、それは今はできない。後方部隊との連絡が絶たれ、恐らく援護も期待できない。本部との通信は妨害されている。更に言うなら、今から逃げようものなら福音とこの化物は絶対に逃さないだろう。

福音の飛行速度は白式や紅椿、黒式と並ぶかそれ以上だ。消耗状態の三機に追いつくのは容易であり、搭載されている兵装でマドカ以外を撃墜することも出来る。化物についても、その巨体からは考えられないような速度で海の中を移動している。移動し、海から身体を表した際には多彩な武器で攻撃してくる。

ホーミングミサイル、照射型レーザー、触手のようなものの先端に取り付けられたブレードでの斬撃、巨体を使つての体当たりや薙ぎ払い。更に言うなら、こちらを捕食するかのよう口を開けて隙さえあれば捕食行動を起こそうとすらする。

その機械的な見た目からは考えられないような、まるで化物の頭部で脈動する脳のよう——生きている、かのようにも思えた。

状況は良くない。特に筈のコンデイションが最悪と言つていい。特に、その状態に化物の脳部は更に彼女を追い詰めた。撤退は出来ない、継戦も絶望的。どうする、と一夏

は考えた時——

ドゴオツ！

極太の2本の白の閃光。それが、福音と化物に対して同時に放たれた。

「遅いぞ、規格外」

「……遅れてごめんなさい。でも貴女にそれを言われたくない、マドカ」

その存在を認識した時、空気が、その場の世界が変わった。

一夏と箒だけではない、暴走状態の福音と海の化物も——まるで怯えたかのように、動きを止めた。

そこに存在したのは、少女だ。薄い小麦色のロングヘア、肌は白く無表情、半眼に開かれた目は敵対する二体に睨むように向けられている。

纏うのは、白い、騎士のような甲冑を思わせるIS。それを纏った少女は敵を睨んだまま、マドカへと軽口を返した。

一夏と箒が感じたのは、恐れだ。理解できない、絶対的な力に対しての恐怖。仮にそれが、味方だったとしてもだ。

『！』
恐れからか、真つ先に動いたのは福音だった。光の翼を広げ、幾つものレーザー弾を少女へと放った。

「ランスロット」

轟！という、風を斬るのではなく薙ぎ払うような音が轟いた。黒い刃。巨大な黒い光の刃が、空を薙いだ。

「さつきは遅れを取った。……でも、もう負けない。返せ、ナタルを」

極大の一撃。その場を薙ぎ払うかのように振り払われたそれは、回避する間さえ与えず、福音を薙ぎ払った。

「……あの一撃を耐えるんだ。やっぱり、普通の状態じゃない」

少女がつぶやいた直後。今度は化物が動いた。並の攻撃では傷すらつかない、強靱なその巨体の尻尾。それを薙ぐように少女へと叩きつけたのだ。しかし、少女はただ意識を向けて視線をそこに向けるだけで、動かない。

「そう、お前が……」

少女が目を伏せた。伏せ、息を吸う。

「——お前がナタルをおかしくした。そしてお前、”その身体の中に何人居る?”」

巨躯の一撃が少女へと迫った。慌てて一夏と箒が援護に入ろうとするが、それをマドカが止めた。『問題ない』と言って。

パスン、と何かが切れる音がした。それは化物からで発せられたもので、切断されたのは、”巨大な尻尾”だった。

「輝け、アロンダイト」

一撃。たった一撃だ。ただその一撃で、自分達が苦戦していた化物の巨躯を切断し、福音に有効打を叩き込んだ。少女は漆黒の大剣を片手で振るい、それを苦しむ化物へと向けた。

「……私はエクスカリバー、この名が意味するのはただひとつ。米国最強。亡国機業、誰に喧嘩売ったか教えてあげる」

化物が少女、エクスカリバーへと吠えた。聞くだけで不快感を覚えるような声、だがそれをただの雑音だというように彼女は聞き流す。そして、剣を向けたままマドカへと言葉を作る。

「話したいこと、沢山ある」

「……なんだ、私にか?」

「うん。それに、決着もついてない」

「私としては万全のお前と戦って勝てる気がしないんだが」

「謙虚すぎるのは良くない。」マドカは一度全力の私に勝った”。……けど、今はこつちが優先」

「そうだな。それで？私に何をさせたい、エクウ」

「——手伝って、マドカ。あの化物を叩き潰す」

その言葉に対してマドカはやれやれといったように笑った。そして、雪片を構えた。

「織斑一夏、篠ノ之箒」

突然呼ばれたことにより驚くが、すぐに少女を見て続きを待つ。

「福音を任せる。今の福音の状態についてデータを送る。……ナタルを、お願い」

「……確認したい、勝てるのか？俺達は、こいつらに」

状況は絶望的だった。だからそんな弱音が出たのかもしれない。

暴走状態の常軌を逸した福音、規格外の化物。劣勢状況が、一夏を焦らせていた。

そんな弱音とも取れる言葉に対して、エクスカリバーは『そんなことか』というように返答する。

「……あなたは諦めない人だって聞いている。今、この状況であなたは諦めたい？諦めたくない？」

「諦めたくないに決まってるんだろ！ ナターシャって人も助けたい、後方で何かあった
リス達も助けに行きたい！ ああそうさ、諦めたくないさ！」

「だったら大丈夫。——あなたが諦めないなら、負けはないから」

意味がわからない、一夏はそう思った。だがエクスカリバーは納得したように頷いて、言った。

「……化物は叩き潰す、福音をやれる？」

「——お前を信じる。化物は頼む。東雲、エクスカリバー」

「任された。——私が来たからには、勝ち確定」

彼女が一夏へとサムズアップして、エクスカリバーとマドカが化物へと加速した。それを見て一夏は箒へと目をやり、言葉を投げる。

「やれるか、箒」

「……やってみせるさ。だが一夏、福音に勝つ手段はあるのか？ 勝って、かつ搭乗者を救う方法が」

福音の攻撃。雨のようなレーザーの弾幕を回避しながら一夏は、考える。あるにはあるのだ、福音を撃墜ではなく無効化させる方法が。

しかし、それはある種の賭けだ。もし失敗すれば、福音は停止ではなく撃墜の結果と

なる。そうなれば搭乗者にあるのは死だ。更に言うなら、初手での一撃必殺が失敗した今、成功率はかなり低い。低く、己も箒も消耗している。

だか、しかし。今の自分の中で考えられる最善が——これしかなかった。

「ある。けどこれは賭けだ、もし失敗したら……いや、違うな」

一夏はふつと笑った。そうだ、”失敗したら”ではない。”失敗などありえない”のだ。絶対に成功させる。絶対に救ってみせる。そのために、弱気ではいけない。最初から”したら”という考えでは駄目なのだ。

だからこそ一夏は息を吸い、箒へと返答する。

「——必ず助ける方法はある。だから箒、力を貸して欲しい。戦えるか?」

箒は思う。その言葉を言った一夏は、笑っていた。福音を見据え、諦めてなどおらず。ただ抗っていた。ああ、と思う。『自分が好きだったのは、こんな一夏だ』と。

少しだけ、今一夏の隣りにいる少女を思い、羨ましく思う。それと同時に、箒も釣られてか苦笑した。彼が諦めていないのだ、ならば己も。託された力にかけて弱音などはいてられないと思った。

「無論だ。私だって……まだやれる! それで、私はどうしたら良い」

「遠距離戦闘での火力は紅椿のほうが上だ。だから……福音のエネルギーを削って欲しい」

「ほう、随分と単純な作戦ではないか一夏」

「シンプルが一番いい、とも言うだろう？——今の福音はとにかく疾い。だから、体力を削って動きが鈍った所に、もう一度零落白夜を叩き込む。あの化物はエクスカリバーつて子と東雲が抑えてくれている、だから俺達は全力でこいつを黙らせる」

戦況は、不利から五分へと傾きつつあった。エクスカリバーの参戦、そのあまりにも強すぎる力が戦況を変えた。そして、どこかで諦めかけていた一夏達の心の中にもう一度戦う闘志を燃やさせた。

反撃が、開始された。

幸福／邯鄲の夢

海上の空で逃げる存在があった。そして、それを追う存在も。

追われる側は十数メートルの巨躯の、鳥のような何かだった。認知されているという前提で現存するISでは常時その加速を出すことは不可能な速度で加速し、逃げる。

それを追う存在は、金色だ。金色と黒の全身装甲に、狼にも龍にも見えるようなフルフェイス。マントのような黒い翼を広げ、その鳥のような何か以上の速度で追いかけている。

『……どけ』

金色が発したしたのは、そんな言葉だった。機械音声に変換された性別が判別できないマシンボイス。しかし、リイスは知っていた。一夏の話から、金色の正体が男であるということを。

変換されたマシンボイスは、どこか苛立っているようにも感じられる。鳥の化物に対して敵意と殺意を向け。振るわれた一撃は神速。その速度は、異常な反射神経を持つリイスでさえ殆ど見えなかった。

『ツ——!?!』

鈍い音同時、空中に刃が舞った。それは折られた刃であり、ガキインという鈍い音は鳥の化物からだった。金色の一閃。直撃すれば間違はなく即死コースのそれを鳥はその異常な加速で無理矢理かわした。しかし、躲しきれなかった。結果として金色の一撃で”左腕と爪”を持っていかれたのだ。

無人機である鳥は即座に判断をする。搭載された人の脳と直接リンクしたA・で思考する。状況的に言えば、鳥の状況は最悪とっていい。リスやセシリア達であればたとえ全員同時でも、鳥の優位は揺るがない。

何故なら、彼女達はこの鳥の手に気がついていないからだ。そして、性能差もある。絶対防御を無視する武器に、通常のISからは考えられない性能。例えばリスが専用機の制限解除をし、リンドブルムと呼ばれる武装をフルバーストしたとしても恐らく鳥の絶対的優位は変わらない。

しかし、その状況を一瞬で覆す存在が居た。そしてそいつは、鳥にとってもイレギュラーだったのだ。

金色のIS。

その力は絶対的だった。専用機持ちに、四世代相当の性能を持った専用機を保有する

リース。全員であたつても恐らく勝てないだろう相手をいとも容易く押ししており、追い詰めている。装備は金色の剣のみであり、遠距離兵器のたぐいは見受けられない。剣一本、たったそれだけで化物と称される無人機は押されていたのだ。

鳥は思考する。己が与えられた特殊なA・と、接続されている他人から奪い取った脳によつて。

状況を分析する、最悪だろう。

あの金色は何者なのか。不明、同時に戦闘力も未知数。

此方は金色に対して勝てるのか。現段階では対抗すらできないだろう。

ならばどうするか、最大加速で金色の追撃を回避しながら鳥は思考した。そして、人の脳で思考し……ある方法を思いついた。

現在リースは金色と鳥の戦闘空域の空で滞空している。ISの操縦者保護が作動し、残ったエネルギーを全て彼女の治療にあてている。そして金色は、動けない彼女よりも前で彼女を護るように、近づかせないように鳥と戦っている。

その状況を見て鳥はあることを思いつく。恐らくA・ならば思いつかず、人の脳だからこそそんな考えができたのだろうということ。



『なにを——』

鳥はその巨大なクチバシを思わせるそれを開いて、鳴き声にも思える音を大音量で流した。金色が警戒するが、すぐにそれは己への攻撃ではないことを理解する。なぜなら、金色にとってはまだの不快な音だったからだ。

だからこそ、足を止めてまでのその行動の意味が理解出来なかった。この行動は金色に対しては意味がない。実際鳥が発したのはただの特殊な音であり、攻撃ではないからだ。

そう、”金色には”意味がない。しかし——

「あ……これ、」

金色は後ろを振り返り、見た。後方、そこに居たりイスがISを展開状態のまま海へと落ちたのだ。それを見た瞬間、金色の動きが変化した。

『彼女に、何をしたッ！』

マシンボイス越しにでも感じられる怒気。それだけではない、機械である鳥ですらその思考回路と脳で恐怖という感情を感じるほどの威圧感。それを纏った金色は鞘へとロングソードを戻すと、そのまま”居合”のような構えで鳥に対して一閃した。

その一撃。それで残っていた片方の腕と、そして左足が消し飛んだ。しかし背部の翼は健在である。だから鳥は、行動を取った。加速。残っているエネルギーをすべて使っ

での加速。つまり撤退だ。

鳥の下した判断はこうだ。金色の介入は完全にイレギュラーであり、戦闘する限りでは己では金色には勝てない。鳥にとつての与えられた目的を果たした今、IS学園の専用機持ちやリイスを始末できればいいと考えていたがそれはあくまで第二目的だった。

だから鳥は撤退を選んだ。目的を果たした今、己は創造主の元に戻る義務があつたからだ。しかし、恐らく金色はそれを許さないだろう。思考した、金色を振り切つて撤退する方法を。

直接戦闘での撤退は不可能だろう。だから、金色の動きを見て思考した。そしてそこからあることを見つけたのだ。”金色はリイスを護りながら戦っている”。ならばチャンスを作るしかない。そう判断した鳥は、創造主から”まだ早い”と使用を禁じられてある兵装を使用した。

結果としてリイスは意識を失い海に落ちた。金色の最後の覇気には鳥は搭載されている脳で恐怖という感情を覚えたが、それよりも優先すべきタスクがあると判断して撤退。そして予測したとおりとも言うのか、金色は追つてこなかった。

対して、金色はそのままリイスが堕ちた場所へと加速しすぐに海へと飛び込み彼女を抱きかかえる形で引き上げる。

意識は、ない。しかしバイタルチェックを走らせる限り死んでは居ない。怪我をして

いるようだが、そちらについては専用機の保護のお陰で治療が進んでいる。

鳥に何かをされたのは明白だろう。だが、何をされたのかがわからなかった。

『……』

迷う。彼女の意識を確かめるためと言え、ましてやマシンボイス越しとはいえ自分が彼女に対して言葉を投げていいのかと。

しかしそんな思考も一瞬、今は個人的なそれを考えている場合ではないと判断する。

『——しつかりしろ、"リイス・エーヴェルリツヒ"！』

が、反応がない。ただの昏睡状態というわけではないようだ。そこで金色は、彼女を助けるために止む得ないと——ある手段を取った。

「……………」

頭がぼーつとする。まるで寝起きみみたいな感覚で、徹夜した後のような疲労感も身体にある。

私は、どうしたんだっけ。ツ……そうだ、福音は、あの化物は、それにあいつは、金色のISは!!

はつきりしていない頭を無理矢理回転させて横になっている身を起こす。起こして……私は、硬直してしまった。

「あれ、」

どうして私は、横になっていんだろうか。周囲を確認すれば……自分はベッドの上で寝ていたことを理解する。自分が寝ていたのは少し大きめのセミダブルのベッド。部屋を見渡せば、机やパソコン、本棚。そして——写真立てなどが目に入る。

「えっ……あ、あれ？」

ここは、何処だろうか。見る限り誰かの部屋のようにだけど——それにしても随分と馴染みがあるような、日常的というか。

私は寝ていた……と思う。着ているのは寝間着であり、時間を見れば朝の7時を指している。

7月7日。ベッドに備え付けてあるデジタル時計を確認すればそんな日付であり、同時に天気や交通情報なども告知してくる。

……あれ、私は。

理解が追いつかず、ただぼーっとしていると

コンッ、コンッ。

部屋の扉がノックされた、そしてその後——声が、聞こえた。

「リースちゃん？もう朝よ？ 今日とは珍しく随分と寝坊助さんなのね」

「え——」

ガチャリ、と扉が開かれた。そこに居たのは、絶対に忘れることのないであろう人で。金色のロングヘアを後ろでまとめており、瞳の色は紅。私よりも背が高いその人を私は、一度だつて忘れたことがない。

「……ママ？」

「何死人が生き返つたみたいなの顔をしているの？ 起きてたのね、ご飯できてるから早めに着替えて——リースちゃん？」

理解が追いつかない頭が完全にフリーズした。嘘、どうして？ だつてママは、あの時——あの日に、殺されて。

では今目前にいるこの人は、誰？ 声も、姿も、そしてその仕草も。全てが私の記憶の中のママと同じだ。

ベッドの中に潜つたままの手を動かしてみる。感覚は、ある。つまりこれは夢ではない？ ああ、そうか。夢なら感情を感じることもなんてない。感覚も感じない。それに——

「どうしたの？……何か、変な夢でも見たの？」

涙だつて、出るわけがないんだから。

これは夢ではないのだとしたら。現実だとしたら。ママは、生きている。……じゃあ、あれは何？福音や、鳥の化物。金色のISや、私の学園での日々は。あれが、夢だつた？それにしても、あまりにも鮮明すぎるような——

「——あ、ごめんママ。ちよつと、嫌な夢見ちゃつて」

「大丈夫なの？」

「うん、大丈夫。……すぐ着替えて降りるから」

「なら、いいのだけど。パパも驚いてたわよ？『いつも一番早起きのリスが今日は寝坊助だ、何かあつたに違いない』つて」

パパも、生きてる？パパもママも生きていて、一緒に暮らしている？

私の中で何かが蠢いた。これが、現実だったら——ううん、これが現実なのかな。



とても、幸せだと感じた。

あれから着替えて下に降りて、それでパパを見た時はちよつと驚いて顔に出ちやつたんだけど……それをパパが見て『娘にすごい目で見られた、これが反抗期か。年頃だもんなあ……』などと言つて落ち込んだのを慰めたり、その途中でママがパパに追い打ちをかけて更に面倒なことになったり。朝からとても慌ただしく、賑やかで。でもとても幸せで。

朝、ご飯を食べている時にニュースを見て気がついたことがある。

この世界にはＩＳは存在していないのだ。

とはいっても、ＩＳに似たようなものは存在していた。”量子展開装甲衣（クアインタムジャケツト）”、簡単に言うると個々にデザインされた装甲能力を持つ衣類であり軍や警察関係では犯罪者などの制圧を目的として使用される。対して、スポーツや医療分野などあらゆる分野においてこれは利用されておりその分野ごとに特化したものがデザインされているらしい。

ＩＳと違うのは、明確な線引がされていることだ。軍事目的なら軍事目的と明確にして制作され、医療なら医療、スポーツならスポーツといったように明確にされている。アラスカ条約のように曖昧な条約などはないということ。男女に関係なく使用できるということ。そして私は、量子展開装甲衣について学ぶ専用学校に通っているというこ

と。

更に言うなら、この世界にはみんな存在していた。クロちゃんも科学、清香は技術、セシリアは経営方面、鈴は教師、シャルロットは技術と開発、箒とラウラは軍の教導部指導員。みんな存在していて、それぞれの夢に向って量子展開装甲衣について学んでいる。

今の社会のそれと、夢？だったあの世界のそれを比べると驚くことばかりだった。そしてそんな社会の中で、私は研究者を目指して”いたという”。パパとママが研究者で、量子展開装甲衣の基礎理論を作ったのが二人。そしてそれを形にして普及させたのが、束さんとスコールさん。私は、そんな身近な研究者の人達に憧れた。だから、自分も何時かそうなりたいと望んで、その道を選んだ。

日曜日、ということもあつてか。私は私服である人物と歩いている。それは……一夏だ。この世界？では私と一夏は付き合っているらしくて、実際に話してみても——私が好きになった、あの世界の一夏と同じだった。

つまるところ、デートで。私と一夏は他愛のない話をしながら、喫茶店とか映画館とか。買い物とかで歩いてた。

……あれ、おかしいな。

あの世界って、何？どうして私は今のこの現実のことを「この世界」って思ったの？この世界は、ううんこの現実は——とても暖かくて、幸せで。”そうであつてくれればいい”と思うこと、ばかりじゃないか。

なのに、どうして。どうして、私は——

ピキリ、と何かにヒビが入ったような気がした。それに気がついた私は、それを否定しようとした。違う、あの世界は現実だけどこの世界も現実なんだ。わけがわからなくなっている所に、

「リース、大丈夫か？ ……なんか顔色悪いぞ」

「え、あ——大丈夫だよ一夏、ごめん。折角の休みなのに」

「なんか今日は変だぞ。 ……なんかあつたら相談する、一人で抱え込まないって約束だろ」

「あはは、そんなんじゃないから安心してよ。心配症だなあ君は。——ちよつと、嫌な

夢？見ちゃつて」

「リースがここまでする夢って気になるが怖い気もするな。でも、なんで疑問形なんだ」

「なんていうか、すごく現実味があつたというか。夢だと思えない、というか。 ……ご

めん、何言ってるんだろう」

そうだ、何を言ってるんだ私は。あれはきつと夢で、質の悪いってだけだったんだ。現にいま私はこうして一夏と一緒に居て、それに——パパやママだって存在したんだ。

だとするなら、”きつとこれが今の現実なんだ”。

私の言葉を聞いてか、一夏が『あんまり気にするなよ、夢だろ』と言って私の頭に手を載せてくる。ああ、やっぱり一夏だ。こうされると、私は——とても安心する。福音の騒動の前にも、こうして貰って。夜にまた話そうって約束して、凄く安心して。

あ……れ？福音？福音って、一体何——

福音を、止めなきや。みんなが、一夏が——あれ？なんで、

一夏に対する笑顔の下、私はそんなことを考える。けどそのことを考えようとしただけで、ノイズが走る。そして、走ったと思ったら……また、忘れている。

本当どうしたんだろう、今日の私は。こんな姿もし皆に見られたら心配されるだろうし、笑われもするだろう。駄目だな、と考えていた時——

「……え、」

道路を挟んだ反対側の歩道。その人混みの中に、知る人物が居た。それも、最近知り

合った人物、ハルトさんだ。派手すぎず、黒と灰色を基調とした夏服でハルトさんは、誰かと歩いていた。

それは——とても、綺麗な人だった。銀のロングヘア、優しそうな^紅の瞳。背は多分私より高く、スタイルもかなりいい綺麗な人。

その人と親しげに話していると思われるハルトさんは、そのまま私に気がつくことなく私達とは進行方向が反対の方向に歩いていく。

綺麗な人、だったな。ハルトさんの彼女さんかな。

「リース? どうかしたのか?」

「えっ? あつごめん。ちよつと、知り合いが向こうの歩道に居て、それで」

「知り合い? 箒とかクロニクルさんとかか?」

「ううん、ハルトさん——IUIの学生さんで、」

……待った。

なんで私は、ハルトさんのことを知っている? この世界にあの夢のISという存在はない。にも関わらず今、私の口からは自然にIUI、あの世界で言うIS大という言葉が出てきた。では、この^{現実}でのハルトさんはどんな人だったのだろうか。思い、出せない。

「IUIって、どこかの学校とか企業とか何かか? あんまり聞かない名前だけだよ」

「えっと、そんなところ。あんまり知名度がない大学の人で、私も顔見知り程度なんだ」

「そうなのか。……名前からして男の人っぽいけど、どんな関係なんだ？」

「一夏？ハルトさんは普通の人だよ？ うーん……私が後輩、あの人が先輩。それだけの関係だよ？」

「……悪い、変なこと聞いた」

「むくれてる一夏がとてもかわいかったので満足です」

その言葉に対して一夏が顔を真っ赤にしたりして、それをまた私がかかって。その後も色んな所に行つて、時間も遅いということ——私は、一夏の家に泊まっていくことになった。

勿論。パパやママには連絡済み。電話先でパパが暴れていた気がしたけど、ゴンツという音の後聞こえなくなった。大丈夫かな。

一夏の家は結構大きな一軒家。千冬さんと一夏、そしてマドカの三人暮らしなんだけど、千冬さんは海外に行つておりマドカは知人の所でホームステイしているのだから、家には一夏だけということになる。……まあ、必然的に二人きりで今の関係を考えるとドキドキするものは、ある。

家で私が御飯作つて、一夏とそれを食べて。話をして。とても、幸せだった。

ふと、冷蔵庫の中にも飲み物がないことに気がつく。

「ちよつと行つてくる、すぐ戻るから」

「俺が行くぞ？ 時間ももう遅いし」

「私、一応ドイツの国家代表なんですけど？ 大丈夫だよ、代わりに一夏。片付けお願いできるかな？」

「……まさか片付けを押し付けるための口実、」

「いつてきまーす」

「はあ……了解。気をつけろよ」

ちよつとした冗談のつもりで、片付けも私が戻つてからやろうと思つてただけどおふざけが過ぎただろうか。そんなことを考えながら、一夏に申し訳ないと内心で思いながら夜道を歩く。

一夏の家からスーパーまではそんなに遠くない。少し暗い道、といつても車通りがそこそこある所の歩道を歩いて5分くらい。夏ということもあつてかやはり暑さは感じる。けど、少し妙だ。

いつもなら、夜でも蟬の声とか虫の声が聴こえるはずだ。なのに、聞こえない。珍しくこの道も車通りが皆無で、街灯や建物の光だけが道を照らしている。

いつもは、こんな感じだっただろうか。何度も一夏の家にはお邪魔している、いつも

はこんな感じでは——

いつも？

いつもって、いつのこと？

「……ぐうっ」

思わず頭を抑えた。ふらついて、近くの街灯に手をつけて倒れないようにした。頭が痛い。割れるように痛くて、何かを考えるのを否定しようとしている。

けど、何を？何を否定しようとしているんだらう私は？

ダメだ、早く買い物だけ済ませて戻らう。なんだかとても、気分が悪い。

思わず私は、首元に手を伸ばした。

そう、いつもここに私の大切なあれが——

「——あれ、」

無いのだ。何がないのかというのさえもわからない。だけど、無いという事実を知った瞬間私は動揺した。無いのだ。私の、大切なものが——けど、大切なものとは何だったらうか。

また同じように、”はやく済ませて戻らう”という気持ちが湧いてくる。しかし、先

程よりも弱い。何か大切なもの。誰かに託されたとか、そんなくらいに大切な何かがあったような気が。

「痛いッ……いたい、痛い——ッ」

頭痛が更にひどくなつた。そして私は立っていられず、その場に座り込んだ。まずい、頭がぼーつとして……あれ、なんで私ここにいるんだっけ。

どうでも、いいか。早く用事を済ませて一夏の所に——

「大事な物、落としたぞエーヴェルリッヒさん」

声が、聞こえた。それは聞いたことがある声で、最近知り合った人の声。なのに、私がこの現実で聞いてきたどの声よりも力強く、一番大切な人や家族の声よりもその声は——私の心に、染み込んだ。

頭痛が、引いていく。顔をあげるとそこには一人の男性が居た。そしてその人は——私に向かつて、右手で何かを投げた。チャリン、という音がその人の腕から聞こえた。見れば、右手には腕輪のようなアクセサリーがあつて、その装飾物同士が触れた音だと理解する。

「ハルト、さん？」

「こんばんは、エーヴェルリツヒさん。……それ、大事なものだろう？落としたぞ」

投げられたものをキャッチした右手の手のひらを開くと、そこにはネックレスが存在した。剣と、翼。それを象つたような銀色のネックレス。

「それを見れば、思ひ出さないか？」

「……えと、仰る意味が」

「——やっぱり、不安定といえど相当に強力なものか」

不安定？強力？ハルトさんは、何を言つて、

「あんまり、こういうやり方はしたくなかつたしできれば君には、知られなくなかつたが——」

ハルトさんが私を見た。それは、とても優しい目で。だけど……とても申し訳無さそうなの、泣きそうにも見える目だった。

少し歩けばすぐ傍まで行ける距離。そこまでハルトさんは歩いてくる。街灯に照らされて、姿がよく見えた。

そのままハルトさんは、右手を前に突き出した。同時にまた音がした。チャリ、という音が。そして、私は見た。ハルトさんの右手のアクセサリ、その装飾は——私のこのネックレスと、同じだった。

「荒治療になる。それに……できればこのまま黙っておきたかったが、仕方ない。――君の、命には代えられない」

「ハルトさん、さつきから仰る意味が――私、一夏を待たせてるので行かなきゃならないんですが」

「――これを見ても、そう言えるか？」

瞬間、ハルトさんが光に包まれた。

光が収まり、彼を見れば――そこには、ある姿が存在した。

金色の鎧にも似た、全身装甲に狼にも龍にも見えるフルフェイス。黒いマントを背中に、左手には納刀されたロングソード。

それを見た瞬間、思い出した。あの日のこと、パパとママが殺されたあの日のことを。あの世界での、私の根源だった出来事を。

全部、思い出した。不思議にも頭痛はなかった。でも私は……ただ目前のことが信じられなくて、立ち尽くすことしかできなかった。

金色のＩＳの正体は、ハルトさんだった。それを知らされたと同時に、頭の中にはいろんな感情が交差した。

疑問。敵意。殺意。

そして、信じたくないという想いが――私には、あった。

I Sをハルトさんが解除した。その場に立つ彼は息を吸い、言ったのだ。

「……言いたいこととか、思うことはたくさんあると思う」

「——私は、でもどうして。なんで、ハルトさんがッ」

ハルトさんが、私の前まで歩いてきた。そして……少しためらった後、私の頭の上に優しく手をのせた。

「……あ」

「悪い、嫌だったか？ 昔、こうしたら安心する子がいてさ」

……なんか、私の一夏に頭を撫でられたら落ち着くそれと、同じなのかな。でも、決して嫌ではなかった。

「……少し、歩かないかエーヴェルリツヒさん。もし、俺の話聞いてくれるならその上で考えて欲しい」

何を？と思う。私は、聞きたいことに言いたいことは山ほどあるのだ。

「“この現実に残るか”、それとも——”元の現実に戻るか”」

真実への選択

「元の、現実？」

何を言っているのか私はよくわからなかった。しかし、目前のハルトさんは冗談を言っているそぶりは一切なくて。ただ、真剣な目で私を見ていた。

「そうだ、元の現実だ。君が復讐鬼になり、金色のＩＳ……俺を探して、その過程で篠ノ之東に保護され、ＩＳ学園に通っていた現実。銀の福音と亡国機業の差し金の化け物と戦っていた、現実」

……そうだ。私は、福音の停止作戦のためにみんなと二部隊編成で出撃して、それであの鳥の化け物に落とされそうになった。

何もかも駄目だと思つた瞬間、金色のＩＳが現れて、化け物と戦闘を開始して。それで……ただわけがわからなくなつて私は立ち尽くしていたら、

変な音が聞こえて、意識が遠のいたのだ。

つまり、これは現実ではない？で、でもそれはおかしい。この世界ではパパもママも生きていて、一夏もいる。みんないて、平和で。”そうあつてくれればよかった”と思うことばかりなのだ。

ならば向こうの現実こそが夢ではないだろうか。向こうでは、パパとママは殺されていて、理不尽な現実や辛いことだつてある。

心を殺して他人を殺した。生きるために。

生きるために、誰かを犠牲にした。自分の目的のために。

ISという存在を、自分の都合で人殺しの道具として利用した。

向こうの世界では何度も辛いと感じた。泣きたいのを我慢した。一夏に負けてからは、付き合つてからは滅つたけど自分に嘘をついて無理をした。

辛いことばかりのあの世界が、本当に現実なのだろうか？

「はは……。ハルトさん、冗談が過ぎませんか？あの夢が、現実？そんなこと、あるわけ

——

「……これは、君の脳の記憶を基に作り出された夢なんだ」

信じたくない言葉をハルトさんは言った。思わず嫌になつて、耳をふさごうとしたが……ハルトさんに強引に手をつかまれて、できなかつた。

「聞くんた。これは、君がそうであればよかつたとおもう夢であり……そして、現実でもある」

「現実であり、夢である？」

「君があの世界、鳥の化け物から受けたのは……『偽楽園』と呼ばれる、脳に作用する神

経毒だ。オカルトなことを言うが、体の自由を奪い精神と脳を毒で侵略する。そして……人の精神、魂と呼ばれるものに対して”夢”を見せる」

「それが、私が今いるこの現実、ですか？」

「ああ、そうだ。奴等もとんでもないものを作ったとは思うがな。……だが、これはまだ未完成で不安定なものだ。だから、俺がこうして介入できた。この君が見ている今のこの現実、夢であり現実。それは……君の魂が見ている夢だから、ということなんだ」

意味がわからない。魂が、夢を見ている？

確かにSFドラマではよくある話だ。肉体を捨てて精神が別の世界に転生する。けどそれはあくまで物語だ。現実そんなことがあるなんて、聞いたことがない。

「魂がある場所が、その存在にとっての現実であるとしてもいいいいのか。亡国機業が作り出した偽楽園と呼ばれる毒は、感染者記憶や存在に干渉して夢を見させる。そして……その感染者に、理想の世界を見せるんだ」

理想の世界。確かに、その通りだろう。

この世界は私にとっての理想だ。幸せで、満たされていて、辛くもない。

「それでもし、感染者が作り出された理想の世界を選べば……もとの世界、つまりこの場合元の世界の君は、死ぬ」

「え——」

「死に対して抵抗をさせない、抵抗を選択させない。そうやって邪魔な感染者を殺して、排除していく。それがこの偽楽園さ」

私の死。その言葉を聴いて私は、固まってしまった。つまり、もしハルトさんの話が本当ならば元の世界の私、向こうの私は死ぬということだ。

「で、でもそうなたら今の私も……ハルトさんの言う楽園の私も死ぬんじや」

「……この毒のえげつない点は、そこにある。結論から言うと君は死なない。もし、向こうの世界を選択した場合この世界の君が死に、この世界はなかつたことにされる。そして、その逆もまた然り。『死なない』という結果を選択肢の中に与えておいて、感染者に選ばせる」

「それって、」

「君が選んだほうが現実になる。そういうことさ」

その言葉を聴いて、私は迷った。

この世界は理想であり、楽園だ。パパもママもいて、みんなもいる。一夏と私は付き合い合っていて、関係も良好。元の世界のように殺し合いとか、そういうことなんてなくて。きつと私は、ここにいれば幸せになれるのだろう。

きつとこの世界にいれば、毎日パパとママにあえて、他愛ない家族の幸せを享受でき

る。私が、一番ほしくて奪われたそれを。

もしかしたら、この幸せな世界で。その……一夏と結ばれることも、あるかもしれない。そうしたらきつとこの世界の根本に基づいて、幸せな未来があるのだろう。

夢を追うことだってできる。宇宙を目指したいだとか、研究者になりたいだとか。そんな夢を追える。もう二度と自分の手を血で汚すこともなくて、自分に嘘をつかなくてもいい。

”この世界は、まさに楽園だ。”

けど、どうして。どうして幸せなことばかりなのに……私の心はどこかで、それを否定しようとしているんだろう。信じたくない、受け入れられないと言っているんだろう。

どうして一番好きな一夏や、大切なパパやママの言葉より。ここにいるハルトさんの言葉が私の心に響くのだろう。

「……個人的なことを言うなら。俺は君に戻ってきてほしい」

「え——」

「もう二度と、いや——すまない」

「ハルト、さん？」

今、ハルトさんは何を言おうとしたのだろうか。途中で止めたその言葉。その時ハルトさんはとても辛そうで、懇願するようで。なんでハルトさんがそんな顔をするのかって、気になった。

「……金色のISは、俺だ」

「ッ……」

言い直して返した言葉は、それだった。

そうだ、私のずっと探してきた存在。金色の、IS。

あの日のすべての元凶であり、すべてを知る存在。私から、すべてを奪ったかもしれない存在。

「汚いかもされないが、これは俺からの提示案だ」

「提示案って、」

「……もし元の世界に戻ることを選んでくれるなら、俺は甘んじて君の糾弾を受けよう。話せることは、話そう」

衝撃が走った。つまり、ここでハルトさんと元の世界に戻れば全てがわかる？ そう思っただけは思わず、叫びそうになったが……ハルトさんは、それを制止した。

「けど、もし全てを知ったら君は……いや、君達は巻き込まれる。本当の絶望に行き当た

り、知らなければよかったと後悔するかもしれない。君は、知ることになる。君が見ようとしているものが何か、過去の中にある真実が何なのか」

だから、とハルトさんは続けた。

「選んでほしいんだ。か——すまない、エーヴェルリツヒさん。この世界で幸福を選ぶのか、それとも元の世界で真実と絶望を選ぶのか」

……え？

今、ハルトさんは私のことをなんて呼ぼうとしたのだろうか。

しまった、というようにハルトさんが少しあわてて『エーヴェルリツヒさん』と言いだした。そのときの姿は……見た目や声もあつてか、どことなく一夏と重なった。

なんで、どうして？ハルトさんは一夏じゃないのに、どうして。どうしてこんなにも……同じに見えるの？

確か、ハルトさんは二十歳だった筈。パパとママが殺されたのは三年前。つまり、ハルトさんが十七歳の頃から、少なくとも何かがあったということだ。間違いなく私の過去に関係しているのは明白、そして……過去に一夏を救ったのもハルトさんだとしてら。

「一つだけ、教えてください」

私は、選択の前に聞こうと思った。

パパとママのことでもない。一夏のことでもない。

先程から気になっていること。それが、何かとても大きなことに思えて仕方なかったから。だから私は、意を決して聞いた。

息を吸う。そして、ハルトさんの目を見た。きっと手は震えているかもしれない。でも、気になったのだ。

「ハルトさん、あなたは……一体、何者なんですか」

目前。ハルトさんが困ったようにした。

「俺は、織原ハルト。……ただ一人を選んで、その一人すら守れなかった人間の残滓だよ」

その時のハルトさんは、とても辛そう。後悔しているようだ。

守れなかった？それは、一体何を……

「その一人も、大切な人たちも。誰一人として守れなかった。失って、奪って。全部終わった先にあつたのは、何も無い虚無感だけだった。」

『だから』と続けた

「……少なくとも俺は、君の敵じゃない。仇、ではあるかもしれないが」

「パパとママを殺したのは、ハルトさんですか」

「……ああ、そうだ。結果的に殺したのは、俺だ」

その言葉を聴いた瞬間、私は頭が熱くなった。けれどハルトさんは、そんな私を意に介さずに言葉を続けた

「だから君は、俺に復讐する権利がある。……俺を殺したいなら、そうすればいい。俺は、”君には剣を向けられない”。そして、選ぶこともできるんだ」

「……それは、」

「俺を殺して、この幸福の世界に留まるのか。それとも——絶望の眞実が待つ現実に戻るのか」

そんな選択を迫られて。私は——迷うしかなかった。

仮に、ハルトさんが言うことが全て眞実だとして。今私が居るこの世界は全て幻だったとしても……私は、それでもいいと思えていた。

ハルトさんは言った、”選んだほうが現実になる”と。この世界には何もかもがある。パパにママ、皆が居て、一夏も居て。もう誰かを殺さなくてもいい。自分を殺さなくていい。理想の現実がここにはあるのだ。

……私は、この現実に居たい。だって、ここには全てがあるから。

この世界に居たいとは思う。でも、それを即断できない自分も居た。幸福で暖かくて、幸せで。でも……この世界では感じないのだ。言葉や、存在の重さを。

例えば、一夏だ。この世界の一夏に優しい言葉や態度をされたでしょう。それで私は

嬉しいとは思う。

けれど、何かが足りないんだ。決定的な……私が一夏を好きになった、選んだその何かがこの世界にはない。

それは。パパやママ、みんなにも言えることだ。私が他人に対して感じていたり、思っていたりするその重さがない。その重さがない現実が、私に対して違和感を感じさせていた。

……でも、この現実が幸福であるのは事実で。だからこそ私は、迷っているのだ。
真実を聞かされて、その中で私が出した決断は――

「――選べ、ません」

そんな。そんな逃げの答えだった。

「どうした、威勢のよさがなくなってるぞガキ」

「……くっ」

海とは別の場所。人気のない山岳地帯の上空では、既に一方的に近い戦いが繰り広げられていた。空に舞うのは2つの影。片方は黒であり、もう片方は紅と黒の機体だ。

優勢なのは、巻紙礼子。オータムだった。といっても、決め手に欠ける状況であり黒の少女は致命打を的確に回避してくる。しかし、状況は時間の経過につれて礼子の優位に傾いていた。礼子はそれほど息を切らしていないのに対して、少女の息は上がっている。

「テメエ、その機体はなんだ？ それに、わざとこの私と一騎打ちなんて何考えてやがる？」

「……さて、どうしてでしょうね」

礼子は疑問を持っていた。それは、対峙する少女の行動についてだ。

亡国機業に属する彼女はドールと呼ばれる無人機を従えていた。それも複数だ。もし自分を誘き寄せたり、旅館の襲撃が目的だとすればもっと効率のいいやり方があったはずだ。

例えば、分散させて旅館を襲わせる。

例えば、己に対してウィルスを持たせて特攻させる。

例えば、同時に己を攻撃する。

なのに少女は、とても効率の悪いどころか亡国機業にとって利のない行動をするにとまらず、自分に対して一騎打ちを仕掛けてきた。理解できない。何か狙いがあるのかと思考する。

「何考えてるか知らねえが……だったたら、その仮面を剥ぎ取って、撃墜して話を聞かせてもらおうか」

轟。と、大気が割れた。それは礼子の加速が原因であり、彼女の持つ紅のバスターソードが神速で振るわれる。

それは、恐らく織斑千冬クラスでなければ目視できない速度。その加速も、その太刀筋も。二重、三重瞬時加速の速度を超えた規格外の一撃。更に言うなら、彼女の機体の武器もまた”絶対防御を破壊する”。故に、もしこの一撃を直撃すれば少女は間違いなく死ぬだろう。

しかし礼子は迷わない。迷わず、その神速の一撃を叩き込んだ。”違和感を確かめるために”。結果としてそれは、成功した。ガキーン、という鈍い音と同時に、刃が止められた。

少女の両手には、銃剣が握られていた。礼子は理解する、今の一撃を少女は見切り、銃剣で受けきったのだと。

「ツ……同じだ。テメエ、本当に何者だ」

「受け止めたのが、そんなに意外ですか？ 礼子さん」

「な、に——がつ！」

油断した。鏢迫り合いの状況から、腹部に強烈な蹴りが入った。

彼女に名前を呼ばれた瞬間、よく知る少女と重なった。機体といい、さっきの言葉といい。どうして彼女は、こんなにも似ているのか。

「……………ここまでにしませう」

突然。黒の少女はそんな言葉を放ち、後ろへと下がった。

「どういうつもりだ」

「目的はどうやら達したみたいですので。それに、今の私ではまともに貴女と戦って勝てない」

「はっ、逃げるつもりかよ？ この私が逃がすとも？」

「どう捉えていただいても結構です。お詫び、ではないですが——貴女にヒントと、忠告を」

「何？」

少女は武装を解くと、そのままクスリと口元が笑い——そして、

「私を追っている余裕があるのでしょうか？ さて、今頃海はどうなっているでしょうね」

「どういう意味だ——『緊急事態です、巻髪先生！』この声……オルコットか？」

突然礼子の回線に飛び込んできたのは、セシリアの声だった。その声は完全に動揺しており、いつもの冷静さも欠いていた。

『後方部隊は壊滅、私は利き腕をやられました。そして、私以外の全員が現在意識不明……！正体不明の化物と、リースさんが戦闘中です！』

「なっ……意識不明だど!?それに、化物に襲撃された?」

『……見たこともない、巨大な身体におぞましい見た目でした。撤退の際にリースさんが、真っ先に巻髪先生に連絡しろと』

「ッ……オルコット、交戦地域の座標を今すぐ送れ!それから、お前は待機。他の奴等を見てやれ」

『わ、私も戦えます!ですから——』

「利き腕が使えない狙撃手なんぞ案山子にしかならねえよ!いいから黙って下がってろ——」

『……わかり、ました』

「私に任せとけ。なんとかしてやる」

無理に通信を切る。そして、対峙する少女を睨みつけた。

「……どうやら、私はテメエを追えないみたいだな」

「ご理解頂けたようで。さて——忠告します、このまま行けば貴方達は、絶望に行き当たります」

「絶望、だど?」

「はい。私は、それをさせたくない。それは私達にとつても本意では無いのです。そして私の目的は——」

空で大きく紅の翼を少女は広げた。そして、空へと飛びながらその言葉を言った。とても、とても冷たい。けれどどこか寂しげな眼で。

「来るべき時にリイス・エーヴエルリツヒを殺すこと、それが私の目的」

そんな言葉を言われて、礼子はただ信じられなかった。

それだけではない、別の理由が彼女を困惑させていた。

最後の言葉、それを言う時の少女は——電子的な機械音声ではなかったのだ。口調も、声のトーンも、雰囲気も違いすぎるが……決定的なところが己のよく知る少女の声と同じだった。

リイスの声と、少女の声。それが、同じに聞こえたのだ。

海上での戦い、福音と海の中に存在する巨体。神話に出てくるリヴァイアサンを思わ

せる化物との戦いも大詰めに入っていた。

巨体、魚竜の化物は切断されていないまだ無事な箇所にある武装からひたすらに攻撃を継続する。ミサイル、レーザー、ワイヤーブレード。戦争を思わせるその弾幕が襲うのは二人の少女。マドカと、エクスカリバーという少女だ。

「……ふっ！」

マドカはビット兵器による射撃と雪片・天を振るうことによりミサイルだけを的確に迎撃する。そして、レーザー兵器だけをわざと受けた。

彼女に対してレーザー兵器は意味をなさない。大出力の法撃でもなければ機体の特性によってそれを吸収する。

「奴をぶった切れ！エクウ！」

「……ん、行く！」

弾幕の中。その一部に穴が空いた。魚竜はすぐにその開けられた弾幕の穴を埋めようとするが、既に遅い。

銀の騎士。その騎士が持つのは少女の身体より遥かに大きい漆黒の大剣。それをエクスカリバーは最大の加速を以て接近。振りかぶり、振り下ろした。

魚竜の頭部。二人はそこが弱点だと推測した。一度エクスカリバーは漆黒の大剣、アロンダイトを以って胴体の一部を両断した。にも関わらず、相手はまだ平然と動いてい

る。

ダメージを一切感じさせない動き。それを見て思ったのだ、この魚竜は弱点以外がトカゲの尻尾のようなのではないのかと。

いくら弱点以外を破壊しても動きは鈍らない。むしろ、胴体を切断された相手は身体が軽くなったというように動きを早くしている。弱点が何処かにある。そう考え、恐らくそれであろう部位はすぐに見つかった——頭部だ。

魚竜の頭部には生物、恐らく人だと思われる脳が蠢いている。もし、それが稼働して魚竜の身体を制御しているのなら。恐らく、それを潰せば止まると考えた。人も同じだ。頭を潰されれば死ぬ。文字通り即死だ。故に、二人はそこに攻撃を集中した。

最大の加速、相手は巨体で俊敏な動きはできない上に手負いである。恐らく決まったと二人は確信した。

しかし、

『グオオオオオ！』

「な、にッ——」

振り下ろされた漆黒の剣。それは確実に魚竜の頭に対して直撃した。そしてその一

撃は”頭を叩き斬るはずだった”。しかし、現実は違う。超大なその刃が——すり抜けただのだ。

同時、マドカとエクスカリバーの周囲に濃霧が発生し……全てのレーダー探知を止めた。エクカリバーは即座に攻撃が失敗したことを悟ると撤退、すぐに距離を置いて構え直したが、追撃がこない。

時間にして10数秒。二人を覆うようにしていた霧は晴れ、先程まで戦っていた化物の姿は……消えていた。そして、同じ頃。福音と一夏、箒の戦いも終盤戦へと入ろうとしていた。

世の中には天才という人種が居る。そして、織斑一夏という人間は自身の周囲にそういった人間が多いと感じていた。

代表候補生、国家資格持ちといった人間が周囲には多く存在していて、そんな中で彼は彼なりにやれることをやろうとしていた。

強くなろうと決めた。守りたい相手ができた。たった一人、隣に立ちたいと望む存在が出来た。

努力はしているつもりだった。そして芯の強さだけなら誰にも負けない気持ちもあつた。

しかし今、改めて近くで天才という人種を見ると……やはり凄いものだと感じた。

「紅椿ッ！」

迷いのない目で箒は敵対者、福音を補足し放たれる雨のようなレーザーに対して二振りの日本刀を斬り払うようにする。一振りですレーザーの雨に対抗するようにレーザーブレードが福音に対して飛んでいった。それを何度も、何度も箒は続け、時には直接レーザーの雨を切り払う。

福音との空中戦は高速戦闘といつてよかつた。常に加速状態にある福音、そしてそれに追従するように追う一夏と箒。

前衛を勤めているのは箒だ。現在、福音からの攻撃の殆どを箒一人で捌き切っている。

一夏は思う、箒もまた天才という人種なのだ。

元々箒には剣の道の才能があつた。しかし、ISという分野についてはお世辞にもいい才能は持っていないかつた。入学段階での判定は適正C。低い分類であり、量産機とのシンクロ率も伸び悩んでいたくらいだ。

恐らく、一年生の中ではその適正值は低い部類に入るだろう。更に言うなら適性だけ

ではなく機体に対する伝達速度、シンクロ率の方もあまりよくはなかった。

が、事實は少し異なる。箒の適性はたしかに低い。そしてシンクロ率も大抵の機体では適合しない。しかし彼女にあわせて制作、調整された機体ならどうだろうか。

逆なのだ。世間一般においては適正が低く、シンクロ率も悪いという評価だが、実際のところは機体が彼女についていけない。量産機では篠ノ之箒という人間と同期することはできず、適正值についてもそれを誤魔化すために束が箒のバイタルに細工をしていた。

つまるところ、箒もまた天才という部類の人間であるのだ。

そんな箒が今、紅椿という力を迷いなく、躊躇いなく振るう。その太刀筋には迷いがなく、意思が存在している。紅椿の制御にも箒が徐々に慣れていき、状況は優勢に傾きつつあった。

一夏と箒の暴走状態の福音に対する勝利条件。それはあまりにも厳しいものだ。福音の暴走を止めて、かつ機体の損傷を少なくし、操縦者の人命を確保すること。最初、魚の化物の介入により不可能に近かったその条件もエクスカリバーという米国最強の参戦により、可能性が見えてきた。

魚の化物が抑えられれば、一夏には勝機があったのだ。

通常、暴走状態のISを停止させるには機体の破壊か機体のオーバーヒート、つまり強制停止しかない。基本的に操縦者がいる場合、どちらでも人命はほぼないといつていい。

しかし、それは一般的な話だ。要するに、一般的な方法でなければいい。この場合、東によるコアに対する強制介入という手段もあるが、これが不可能。福音のコアに対して東はアクセスできなかった。結果として戦闘における停止方法しか残されていない。そこで立案されたのが、ワンアプルーチワンダウン。最初の接触による停止作戦だった。

が、これは失敗。福音には感づかれ化物に介入される。一度悟られてしまえば一撃必殺など決まる可能性は極めて低くなる。

その発想を逆転させた。つまり、通常戦闘において一撃必殺を叩き込む。それによって福音を停止させることを一夏は考えた。

だがこれは1人では不可能な作戦だ。故に、箒の力とその才能が必要だった。”今の箒”の力が。

「……はあッ！」

高速での加速。そして、至近距離で箒の刀が振るわれた。その刃の狙いは胴体ではない、”翼”だった。

福音の加速源は光の翼と、それを発生させているジェネレーターである。福音の停止について最も邪魔だったのが福音の加速性能だった。

いくらチャンスを作れても、恐らく福音はその無理矢理な加速で対応してくる可能性が高い。故に、箒はその可能性を予測して一夏から『福音を消耗させてくれ』という言葉だけからそれを推測、翼を切り裂いた。

予想通り、大きくのけぞった福音の加速度は低下した。そしてそれは、二人のハイパーセンサーでも余裕を持って追えるほどにまで低下したのだ。

更に言うなら、福音は手負いである。先程の一撃で箒は第二の太刀を福音が逃げる間に叩き込んだ。それにより、のこった光の翼の半分も消し飛ばした。かつての箒ならば、ここで追撃をかけただろう。しかし、今の箒はそれをしない。それは己の役割を理解しているからだ。故に、

「チャンスは作った、行け！一夏ッ！」

「応！」

悪あがき、というように福音が残った半分の翼と残存火器から弾幕を展開してくる。が、それは最初ほどのものではなく、一歩下がっていた箒がその弾幕を赤椿の火力をもって押し返した。

最大の加速、それと同時。箒によって打ち消された弾幕の穴をくぐり最大の加速で一

夏は雪片を白雪に納刀したまま加速した。

篠ノ之流劍術奥義『散桜』。もはや人外といつていい反射神経を持つリースですら対応できなかつた神速の一撃。その一撃は単純明快であり鋭く、疾い。零落白夜発動のエネルギー全てをその一撃だけに込めた刹那必殺。

これならば期待を破壊することもなく、機能停止に追い込める。そう判断して一夏は迷わず一撃を叩き込んだ。

が、しかし

「な——」

鏑迫り合い、それが結果だった。

一夏の一撃は確かに福音に命中した。しかし、その一撃は残った半分の翼を前面に展開した福音に防がれており、僅かに届いていない。血の気が引いた。今の自分は無防備である、そして零落白夜の発動も後数秒で切れるだろう。

どうする。そう考えた一夏は、

「——撃てッ！ 箒！」

ただ、そう叫んだ。その声を聞いた箒は一瞬戸惑ったようにしたが、すぐに2本の刀を構えると、レーザー刀を一夏へと飛ばした。それを一夏は一度無理矢理福音を弾き飛ばし、回転の動作で箒の放ったそれを雪片で切りつけた。

そして、もう一撃。第二の斬撃を回転の加速をも乗せて再度福音へと叩き込んだ。

「これで、終わりだあああああ!!」

再度輝きを取り戻した雪片の第二撃。それが福音へと振るわれた。

零落白夜という単一仕様は相手のシールドを無力化する。しかし、雪片にはある特性がある。それはエネルギー兵装の吸収という特性である。しかし、マドカのようにこの特性をいつでも使えるわけではない。"単一仕様発動時のみ"この特性が発動する。

本来なら通常展開で10数秒、白雪からの一撃なら5秒もないそれは欠陥特性といってもいいだろう。しかし、今の状況ではそれが生きる。放たれた第二撃は福音へと再び叩き込まれて——福音の動きが停止した。

そしてすぐ。福音の機体から溢れていた光は輝きを消し、ISの展開が解除される。展開が解除され、空から落ちそうになった気を失っている女性。ナターシャ・ファイルス箒が受け止めた。

作戦は成功した。見ればエクスカリバーとマドカもこちらに向かってきており、魚の

化物も撃墜、もしくは撤退したものだと伺える。

なんとかなった、が……今回はかなり危うかったと一夏は冷や汗と同時にホッと胸をなでおろした。

そういうえば、リース達は無事なのだろうか。救出したパイロットの安否を確認して、コアも待機形態で緊急停止していることを確認した一夏は作戦の結果を本部、千冬に連絡しようとした。

『きつ、緊急事態なんです！お願いします、応答してください皆さん！』

不意に。山田先生の慌てた声が通信に木霊した。

ただごとではない、そう思った一夏達は通信に出て、無事であることを報告する。

『よかった、無事なんです……通信が今までずっとジャミングされて、繋がらなくて。——それより緊急事態です！』

「落ち着いてください、山田先生。ナターシャさんは救出、機体も無事です。あの化物も、東雲とエクスカリバーって子のお陰で撃退できたみたいです。一体何が、」

『——正体不明の金色のISが現れました、そして……エーヴェルリツヒさんが意識不

明の状態で不明機に捕まっています。現在、巻紙先生が状況に対して対応中です！」

目の前が真っ白になって、理解できないという感情が押し寄せてくるのを一夏は確かに感じ取った。

導 『せんたく』

巻紙礼子。オータムという人間は規格外の存在である。

枷を外せば織斑千冬を上回るとまで称されるあまりにも強力な力。仮令相手が篠ノ之束や巨大国家であろうと対等以上に渡り合えるだけの技能と工作技術。そして、彼女だけが持つある特性が唯一無二の“最強”という存在に彼女を君臨させていた。

恐らく、1年の専用機持ち全員が束になっても勝てないだろう。国家代表クラスを複数用意しても、足止めが精一杯だろう。間違はなく世界最凶。そんな彼女は砂浜、旅館の近くの砂浜で、ある存在と対峙していた。

「……テメエが、金色か」

『——貴様らが探している、という意味合いではそうだな』

男性なのか女性なのか、区別がつかないマシンボイス。それで返されたのはそんな言葉だった。互いにIS展開状態。しかし構えてはいない。が……礼子は相手のその存在感到、気圧されていた。

直感とでもいうのか。礼子にはそれがあった。もし、何も考えずに金色に攻撃を仕掛

けていたら……恐らく最悪の結末を迎え、自身の命も危うい可能性があるのではないかと感じたのだ。

そんな直感もあつた。だが、他にも対峙するだけの理由があつた。それは金色に抱きかかえられている一人の少女だ。銀色のセミロングに、見慣れたISスーツ。スーツの一部は赤黒くなっているが、治癒が終わっているのか見た限り怪我の悪化は見られない。ただ、礼子にはその抱きかかえられているリースの姿が——とても不安に思えて仕方なかつた。

安らかに、まるでただ安心しているかのように眠っているのだ。そしてリースを抱きかかえている金色は、自分が少しでも下手な行動を見せようとすれば、とてつもない威圧感でこちらを睨んでくる。

膠着状態。暫くの沈黙が続いた中でそれを破つたのは……金色だつた。

『巻紙礼子』。篠ノ之束や貴様等が私を探していたのは知っている。が……今のところ私はそちらと敵対するつもりはない』

「ハッ、何もかもお見通しつてことかよ？ ……こつちはテメエに聞きたいことがあるだよ。こつちを呼び出して、このまま帰れると思うなよ」

『——彼女のことについて。そして“世織計画”について、といったところだろうか？』

思わず礼子は纏う機体の腰に存在するブレードに添えている手に力を入れた。世織

計画、未だ謎に包まれている亡国機業の計画している何か。そして……かつて自分やマドカが亡国を脱退する理由となった存在。

礼子は思い出す、かつてスコールはまるで自分達や部下を逃がすようにして亡国を離れた。それ以降はスコールのツテで各国を転々とした。

スコールは言った。多くは語らなかつたが、『あれだけは阻止しなければならぬ』と真剣に。だからこそ、巻紙礼子としても、オータムという最強の名を冠する人間としても。金色の発言は見過ごせなかつた。

それだけではない、今金色は“彼女について”とも言った。

(……どういふことだ？ リイスについて？ まさかあの馬鹿が計画に関わっている？)

金色に抱きかかれられているリイスを見る。安らかに、まるで安心したかのように眠っているようにも見えた。

が、同時に。どうしようもない不安感と経験から、このまま目覚めないのではないのかという不安にも駆られた。

考える、思考する。既に学園や関係者には連絡がいつており、恐らく自分の教え子たち——一夏達にも現在の状況は伝わっているだろう。そして、今の状況を旅館の管制室で見ているはずだ。ならば……自分がすべきことは。

ギリ、と。思わず奥歯を噛み締めた。現在の自分は動揺や焦りを殺しきれていないと

いうのはある。当然だ、つい今しがた……出撃する前にスコールの死亡の報告を受けたばかりなのだ。

思うことも、感じることもある。しかし……今の自分は教師として、巻紙礼子として。最強の存在として、成さなければならぬことがある。

「ちっ……わかった。そっちの話に乗ってやる。だがその前に聞かせる——そいつは、リースはどういった状況だ」

『単刀直入に言おう。今の彼女は……生死の境目に居る』

「……んだと?」

『そちらも確認していると思うが、亡国機業の兵器。仮に”鳥”と呼称しよう。その鳥を彼女は一人で食い止めて、その中である攻撃に侵された』

「確認している。だが、ある攻撃だと?」

『”偽楽園”。篠ノ之束がかつて作り出したIS。”黒鍵”の原理とシステムを利用して作り出した神経毒。今の彼女は……夢の中に居る状態であり、生きていても、死んでいるとも取れる状況にある』

「ツ……クソがツ! 助ける方法は、」

『こちらとしてもこの神経毒に対しての確実な対策は持っていない。……その特性上、存在しないといったほうが正しいのかもしれない』

「存在しない、だと」

『この毒は諭えるなら、身体に抗体があろうと無意味なものだ。が、それがなければ一瞬で身体を蝕む猛毒となる』

そのまま金色は砂浜を歩き、礼子へと近づくと抱き抱えていたリイスを礼子へと渡した。

『私には彼女を助けることしかできなかつた。結果として、救えなかつた。……すまない』

金色はそれだけ言うと、結晶化された何かを展開して礼子に渡した。それは、幾重にも嚴重にロックがかけられた結晶データ体だった。

『私について全てを明かすことは出来ない。が……今話せるだけのことは話しておく。今回のこの騒動、恐らくは私も、そしてそちらも奴等の思い通りに動かされた可能性が高い』

「……ああ、だろうとは思ってたよ、福音の暴走と米国基地襲撃は全部フェイク。目的は別にある。奴等の動きは”こちらを本気で殺そうとしてなかつた”からな」

福音の暴走と米国基地の無人機襲撃から始まった今回の騒動。その全てが仕組まれていたのではないのかという考えは礼子にもあった。

少し考えてみれば”都合が良すぎる”のだ。IS学園臨海学校当日、そして丁度紅椿

がお披露目されたタイミングに、リースの専用機の一部制限解除。更に言うなら、臨海学校には篠ノ之東まできている。米国側では、ナターシャ・ファイルスという重要人物を巻き込み、そして、エクスカリバーの介入。

この全てがもし何かの目的のためのファクターでしかないとすれば。亡国の目的は別にある。

そして礼子には、その目的に大凡の見当がついていた。

「目的の1つは、恐らくテストだろうよ。あの化け物どもの実戦テスト。そして私は……そのテストを邪魔されないうために足止めされた。福音を暴走させたのは、恐らくあの魚の化物の何らかの特性だろうよ。あわよくば福音を捕縛できればいい、くらいの考えだったんだろ」

『それについては同意見だ。鳥の化物についてもそちらの専用機持ちを相手に”遊んでいた”節がある。だが……奴等の目的はそれだけではない』

「目的がまだある、そういいたいのかテメエは」

『ある、と断言していいだろう。が——それについて、私からは答えられない』

「そうか。じゃあ今度はこっちの番だ。私を足止めたのは、赤い翼を持つ黒いISだ。今眠っている……こいつのISに酷似したな」

『ッ……。それで?』

金色が僅かに動揺した。それを礼子は見逃さない。

礼子にはある勘があつた。あの黒いIS、そしてその操縦者が言つたリースを殺すという言葉。今対峙しているこの金色のIS。もし、それが全て繋がつていたら？

亡国の目的が、リースと金色だとしたら？

「これについては化かし合いはなしだ。例外コア搭載機はリースのヴァイスと、そして——テメエのその金色の機体のみ。そうだろ？」

『……その通りだ』

「が、私を足止めしたやつはリースの機体に酷似した機体を使つていた。機体だけならまだよかつた。技術、動き、そしてなにより……」あの反射神経。あまりにもコイツに似すぎていた」

金色とリース、そして亡国の目的。その一部について礼子は気が付きつつあつた。リースと酷似した少女の存在、その少女のリースを殺すという言葉に、最後のあの言葉。それは即ち、リースが二人いるように思えて仕方なかつたのだ。

「冗談でもなんでもねえ。テメエ、何者だ？ いや、”お前は誰だ”」

『質問の意味が理解できない』

「まるでテメエは、最初から今回の騒動が起きるのを理解していた”かのようにリイスを助けに現れた。もし、亡国の狙いがテメエとリイスだったとして——それを理解した上で出てきているようにしか思えねえ。だからこそ、理解出来ないんだよ。……テメエは、何だ？」

その言葉に対して金色はすぐに回答しなかった。

暫くの沈黙の後、金色は観念したかのようにして、

『……もし彼女が目覚めるなら、目覚めた上で彼女とそちらがこの先に進む覚悟があるのなら。その時は私は全て答えよう』

「この先だと？——おい、待てッ！」

瞬間、金色が背中のマントを翼のように翻して”消えた”。

「ッ……管制室！」

『こ、こちら管制室です！金色のISの反応ロスト、追えません……』

『はいはい東さんだよ。残念だけどこっちも同じ、完全に逃げられた——でもあれは、いやまさかね』

東が独り言のように何かを言ったが礼子はスルーした。『クソが』と悪態をついた後、腕の中のリイスを見る。

傷は塞がっており、腹部にはISスーツの赤黒い血痕しか見られない。一見ただ眠っているだけに見える。が、

「クソ兔、すぐに戻る。……諸々あるが最優先はコイツだ」

『準備できてる。クソ犬、君が受け取ったそのデータの解析準備もね』

福音の暴走事件、そして亡国機業の不明機体の出現による学園生徒襲撃はこれで幕を閉じた。

米国基地の被害は甚大で、イーリス・コーリングが重症という結果ではあったが、福音のコアは無事であり、ナターシャ・ファイルスも無事保護され、IS学園で身柄を預かった。

結果だけ見ればある意味いい方の結果なのだろう。本来の目的である福音とナターシャは無事なのだから。しかし……今回の一件、IS学園側は大敗と言ってよかった。事実上亡国機業の手の上で踊らされ、生徒一名が意識不明の重体。金色のISを捕捉するも逃亡される、という結果に終わったのだから。

この事件がリスや学園側にとって、大きな分岐点となる。

すべてを知る覚悟で絶望に抗うのか、それとも……何もかも諦めるのか。その真実と選択は身近にまで迫っていた。

「いつくん、まだ居たんだ」

どこか沈んだように面持ち。そして声にはいつもの無邪気で身勝手な感じがない、そんな状態で東はＩＳ学園の医療棟の一室に入り、そう呟いた。

「……東さん、おはようございます」

福音の事件から２週間ほど。事件の慌ただしさは終息を見せており、色々なことがあった。

まず、鳥の攻撃を受けて意識を失った鈴、シャルロット、ラウラは無事に目を覚ました。事件当日、金色が去った後、旅館の治療室で全員が目を覚ました。気を失っていたことについて不思議と三人は覚えていなかった。共通しているのは、『何かとても心地の良い夢を見ていたような』という言葉だけ。

鳥の攻撃を受けたが意識を失わなかったセシリアについてはより精密な検査が行われた。鳥と交戦した中で唯一意思を刈り取られず、戦闘を続行できた人間なのだ。更に旅館まで撤退した後にも後遺症らしいものはなにひとつとして見られなかった。よつてなにかあるかもしれないと判断されて精密検査を行ったが異常なし。

セシリア本人もどうして自分だけが意識を失わなかったのか不明だと供述しており、

これについては不明のままだった。

続いて福音と魚の化物と交戦していた一夏、箒、マドカ、エクスカリバーについて。事件が収まった当日、エクスカリバーは大統領からの連絡の後、ナターシャと福音のコアを学園に預けるとそのまま米軍基地へと帰還した。『すぐに会いに戻ってくる』とマドカに言葉を残して。これについてマドカはなんともいえない表情をしていた。

マドカについては、表情にこそあまり出さないうちはしているが、かなりの動揺とシヨックがあつたようだ。スコールの死亡、それは彼女に大きな衝撃を与えた。スコールが最後に送信してきたデータと、金色から手渡されたデータについての解析は進んでおり……スコールの部屋からは遺書のような映像データが見つかった。自分の死について予測していたかのように用意されていたそれを見たマドカは、『……ひとりにしてくれ』とだけ震えた声で言つて、数日の間姿を見せなかった。

スコールの居なくなった穴を埋めるべく、マドカや他の亡国機業構成員をまとめ上げる立場に立ったのはオータムだった。彼女には指揮官としての才能もある。故に、態勢の立て直しは順調ではあつたが……やはり、彼女自身にも陰はあつた。

事件が終わり、今まで通り。とはいかなかつた。

リースは目覚めず、学園の一般生徒に対しては病欠とだけ説明された。当然、変な噂も生まれ、心配する声もあがつた。クロエについては特に重症で、目覚めないリースの

前で『ごめんなさい、ごめんなさいリース……もう、傷つけないって約束したのに』と泣きながら震え、叫んでいた。

リースは学園に帰還後、学園の医療棟の奥にある緊急治療棟と呼ばれる場所で治療が開始された。しかし、彼女の状態はよくはならず。日に日に機械が示す彼女のバイタルは弱まっていくばかりで、束や医療班を焦らせた。

金色の言うとおりに、打つ手がなかったのだ。束の知識、最新鋭の医療技術、それをもつてしてもリースは目覚めなかった。

「毎日学校に行つて、それが終わつたらずつとリーちゃんにつきつきり……殆ど寝てないんでしょ、駄目だよ」

「……ごめんなさい。でも、今は別のこととか考える余裕がなくて」
そんな中で、最も重症なのは一夏だった。

大切な相手が生死を彷徨い、自分は何も出来ない。日々彼女のバイタルは弱まるばかりで、それがまるで自分を煽っているかのようにはすら思えた。

学園に戻つてからは心配をかけないように、いつも通り振る舞った。朝登校して、クラスメイトや友人たちにあいさつをして、いつもどおり振る舞おうとして。

朝、目が覚めるといつも聞こえる声がない。隣りにいる存在の声がない。いつも聞いていたはずの他愛のない話や、言葉がない。彼女の笑顔がない、声がない。

それは織斑一夏という人間の日常という時間の中に、大きな穴を空けたような感覚だった。

最愛の彼女は眠り続け、自分に彼女を救う手立てはない。幾ら諦めたくないと願っても、抗いたいと望んでも一夏にはどうすればいいのかわからなかった。

「……」

「……」

東と一夏、二人の間に沈黙が流れた。

東としてはどう言葉をかけていいのかわからず、大天才と自負しておきながらリイスを救えない自分の力に無力感を感じていた。

一夏としても、似たようなものだ。自分にはリイスを救うだけの力はない、どうした方がいいのかも考えてもわからない。こうして、学校が終わって。そしてずっと見守って、いるのかすらもわからない神様に神頼みするくらいしかできなかった。

「……デウス・エクス・マキナ、か」

「え？」

一夏が呟いた言葉に東は疑問の声を上げた。

「いや、ごめんなさい。昔、リイスが考え事してた時に言ってたんですよ。デウス・エクス・マキナって。よく知らなかったんでその時、後で調べてみて。ご都合主義の神様っ

てのが出てきたんですよ」

「あー……そうだね、デウス・エクス・マキナ。機械仕掛けの神なんて言われ方もするね」
「昔の演劇で、悲劇にしぼしぼ登場するなんて解説があつたもので。つい……もし、今の状況が神様にとって悲劇なら、解決して欲しいなんて思つちやつて。ははっ……バカですよね」

「……ごめん、いっくん」

「なんで東さんが謝るんですか。東さんは最善を尽くしてくれました。きつと、きつと一番謝らなきゃいけないのは——俺です」

守れなかった。守りたいと望んだ最愛の相手を。

違う場所に居たとか、そんなのは言い訳でしかなくて。結果としてリイスは目を覚まさない。最悪の結果と、無力な自分。そんな状況にギリ、と歯を噛み締めて——ふと、思つてしまった。『力がほしい』と。

東と一夏の間にも再びの沈黙が流れた時。東は気まぎれなくなつて何かアクションを起こそうとした——その時だ。

——ピー、ピー

「呼び出し音? ——ああ、俺が出ます束さん」

音が鳴った。それは、この病室に繋がる学園の病棟入り口受付からのものだ。今までに一度たりともこの部屋にこの呼出が鳴ったことなんてことはない。驚きつつも一夏は部屋の壁に存在する液晶画面に表示されるボタンを押して連絡に応じる。

「はい、もしもし」

『ああ、繋がりました。織斑君……ですよね?』

通信モニターに表示されたのは山田先生だった。通信するやいなや、よくわからない質問を投げられた一夏は頭の上に疑問符を浮かべた。

「えっと……はい、織斑一夏ですけど」

『で、ですよ。 ——じゃあさっきのあの人は一体、』

「山田先生?」

『あつ、ごめんなさい。実は先程受付にIUIの学生さんがいらっしやいまして……ちよつとした騒動になったんですが』

「大学の……それで、どうかしたんですか」

『その、えっと——篠ノ之博士、そちらにいらっしやいます?』

「……? 居ますよ、束さん」

一夏は束をモニター前に呼ぶと、それを確認した山田先生は言葉を続けていく

『実は預かりものがありました……その、IUIの生徒さんが上層部経由で織斑君とエーヴェルリツヒさんがここに居ることを聞いたとかで、認証式のデータファイルが預かってます。今、織斑君の白式に転送しました』

「俺に、ですか？でも大学の知り合いなんて居ないし——リイスの知り合いかな、ともかくありがとうございます」

通信が切れ、白式のデータサーバーを確認すれば……あつた。認証ロック形式のデータファイルが。

「……ちよつといっくん、それ見せてもらつていい？」

「え？あ、はい——」

束は真面目な表情になると、ISとの接続用コネクタを展開して白式の待機状態へと接続。展開した投影型キーボードを叩き始めた。

「は……？なにこれ、”白式じゃないと認証を通さない？”そんな馬鹿なことが、」

そこで束の動きが止まった。画面を見て、目を見開いた状態で動きを止めていた。

「束さん？」

「……いっくん、今から認証用の質問言うから、このまま認証を解除していい？」

「構いませんが——それで、質問っていうのは？」

”君と彼女にとつての、最初の運命の分岐点はいつ?”

その質問を聞いて、一夏は考えた。運命の分岐点? 思い当たるフシなんていくつもあ
る。けれど……もし、今までの中で最も大きなものをあげるとすれば。今の自分が選択
するとすれば。

「2月20日。夜、海沿いの公園」

それは、己がリイスと初めて出会った日。織斑一夏という人間の心に、諦めかけてい
た心に不屈の炎が生まれた日。

束がそれを打ち込んだ。普通なら、そんな曖昧なキーワードは絶対に通るわけがな
い。しかし——通った。認証を示す緑色のエフェクトの後、”認証者にしか見えない”
文章が表示された。

束にはそれは見えず、そのままデータを転送された一夏がそれを読む。

そして、思わず言葉を失った。

「え——」

そこには、こう書かれていた。

”

彼女を助けたいか？　もし、君が真実と絶望に抗ってでもたつた一人を選ぶ覚悟があるのなら。

何かを護るために何かを犠牲にする覚悟があるのなら。選択の道を示そう。

——君にその気があるなら、7月30日。”彼女との最初の場所”で君を待つ。

”

ドクン、と心臓が跳ねた。リスわ助ける方法がある？しかし、どうやって？

そもそもこれを自分に送ったのは誰だ？そう考えていたが、不意にその思考を中断することとなる。

「東、さん？」

東の様子がおかしかった。というより、異常なほどに動揺していたからだ。どうかしたのか、そう一夏は聞こうとした。

「——ありえない、」

「東さん？」

「この認証式ファイル、白式の”オリジナルデータ”を使ってる。白式でしか認証を通さないのは、そういうこと——けど、なんで？」

白式というのは世界に一機しか存在しない。特に、白式はその特殊さからどう足掻いても再現が不可能の機体なのだ。もしこれがラフアール・リヴァイヴなどの量産機であれば話は違う。しかしそうではない。

この圧縮データに使用されていたのは、白式そのもののオリジナルデータだったのだから。

そんなことができるとすれば、束以外には居ない。しかし彼女は、当然そんなことはしておらず、訳がわからなくなったのだ。

「……束さん。このデータには、リイスを助けられるかもしれないって書かれています。選択の道を示すから、覚悟があるなら7月30日に来いって」

「私でもわからなかった事だよ!?それに、選択の道って——どうするつもり、いっくん」
「……行きます。もしこれが本当なら、俺はリイスを助きたい。仮令どんな方法だったとしても、それに——闘ってことは、無い気がします」

「わかった。じゃあ当日は私やオータムも護衛で、」

「いえ。俺一人でいきます。……この送信主は、きつと俺だけを待ってる。そんな、気がして」

それ以上は束も何も言えなかった。その時の一夏はどこか真剣で、彼にしかわからない何かを感じているように見えたからだ。だから束は『そこまで言うなら、わかった』と

だけ言って、納得するしか無かった。

「最初の場所。つて……思い当たるの、ここしかないよな」

7月30日。一夏の姿はある場所にあった。

IS学園に入学する前、初めてリイスと出会って話をした場所。学園が見える、沿岸公園。

既に夏ということで深夜帯でも蒸し暑く、熱帯夜を思わせる。公園には数々の電灯が灯っており、虫がそこに集まっているのがよく分かる。

しかし、時間が時間ということもあるのか。人の気配はない。今、この場所にいるのは己だけだというように。

「これで違つてたら、最悪だよな。ははっ」

自嘲気味に言つた。送り主のメッセージには場所が指定されておらず、一番下の欄に時間だけが書かれていた。その時間の10分前。自分にとつての最初の場所であるここで、まだ明かりの見えるIS学園を眺めながら呟く。

「思えば、まだ数ヶ月なのいろいろなことがあつたんだな」

遠くに見えるＩＳ学園を見て思うのは、４月からの出来事。リースと出会い、対抗戦で襲撃があつて、その後喧嘩して。タッグトーナメントでリースに勝つて、付き合うようになった。

自分が特定の誰かと付き合うなんていうのは、正直予想していなかった。まだ友人である弾には報告していないが、きつと報告すれば驚かれるんじゃないかなとも一夏は考えた。

誰かを自分から好きになるなんて思わなかった。

その誰かを守りたいとか、理解したいとか。そう思うとは思わなかった。

織斑一夏にとってリース・エーヴェルリツヒとは、最愛の相手にして己と酷似した存在。同時に、どうしようもなく正反対な相手である。故に、一夏はリースを愛おしく想い、守りたいと望む。

そんな相手を今、助けたいのに助けられない。無力感で一夏はただ打ちひしがれている。助けない、そのためならどんなことでもする。悪魔にだって魂を売つてもいい。そう、考えていた。

(……けど、あの時リースに一体何があつたんだ。巻紙先生は何も教えてくれないし、)

「——み」

(あの金色のＩＳだって、何者なんだ。映像越しで見ていたけど——やっぱり、敵には見

えなかった。けど、リースの両親は奴に殺されたって言うし)

「おい、聞いてるか？」

(…俺には、リースを助けるだけの力がない。もしも助ける方法があつて、それが俺に出ることならなんだって——)

「聞いているのか？少年」

突然、声が聞こえた。

落ち着きのある、好青年のような声。しかしその声にはどこか呆れのようなものが混じっており、一夏はその声で我に返る。

はつとして振り返れば、そこには一人の青年が呆れ顔で立っていた。身長は180センチくらい、スラツとした体型であるが、半袖から覗く身体は、よく鍛えられていることが窺えた。

思えば現在は夜の11時。深夜帯である。そんな時間に己のような子供が1人でただ公園で突つ立っていれば不審にも思われる。そう思つて一夏は慌てて弁明しようとしてみると、

「ツ……ええ？」

思わず声が出た。何故なら、自分で言うのも変な話であるがその相手は、とても自分と似ていたのだから。

といつても相手の体格は自分より大きい。そしてその振る舞い方も大人びており、自分とは比べ物にならないと感じる。

「夜遊びか少年。というより、黄昏れてみたいだな？こんな時間に、一人で」

「あ、ええ…少し、嫌なことがあります」

「———そうか。ああ、いきなり声かけてごめん？俺は織原。織原ハルト、IUIの学生で宇宙工学研究科とIS技術応用研究科に所属してる学生だ」

「大学の方でしたか、お会いするのは俺も初めてです。大学は大変と聞きますけど、どうですか？」

「んー…確かに大変だが、やり甲斐はあるぞ？俺はなんだかんだ、楽しく研究やつてるさ。変わり者とかよく言われるけどな、ははっ」

彼が笑い、釣られて一夏も笑ってしまう。初対面なのに自分がここにいることについての返答ではなく、日常的な雑談が言葉として出てしまう。

何故か、この人は信用できる———そう思ってしまったから。

初対面、それもこんな時間に声をかけてくるような相手だ。普通なら警戒して当たり

前だし、心を許すなんてことありえないだろう。だが、こうして彼と少し会話するだけでどうしてか、信用に値すると、そう思ってしまう。

それがどうしてなのか、根拠に基づいて信用できると思うのかはわからない。ただ、言えるとするれば、自分の本心が、こいつは「敵」ではないといっていることだけだった。「ちよつとコンビニの帰りでな、良かったら飲め」

「え？ わ、悪いですよ」

「後輩が先輩に遠慮するな ——」織斑一夏君」

差し出されたアイスコーヒーの缶、それを受け取りながらそんな言葉を言われて一夏は思わず顔が強張らせ身構えた。おかしい、と感じたからだ。

「…なんで、俺の名前を？それに、何で」IS学園の生徒だってわかったんですか？」

「世界的な有名人だからな。ウーパールーパーもパンダもびつくりするくらいのこと」

「ツ!?何者だ、あんた」

返された言葉。その言葉に一夏は聞き覚えがあった。

あの冬の日、初めてリイスに会った日。己が彼女から言われた言葉だ。言葉だけならまだいい、しかし自分は呼び出されて、恐らく当たりだろうと思われるはじまりの場所にきており、周囲に人気はない。そんな所に突然人が現れたのだ、よくよく考えればおかしい話である。

一夏は学園に入学して以降鍛錬を続けている。当然、護身という意味合いでリイスから気配の察知の類の訓練も受けていた。にも関わらず、一夏は察知できなかつたのだ、この青年の気配を。

「…君を呼び出した張本人、って言えばいいか？ まったく、山田先生は山田先生で尋常じゃない驚き方するし。昔からなのか？ あの人は」

「まさか、あんたがリイスの治療法を知ってるっていう…？ 後半の質問の意味はわからないが、呼び出したのはあんたで間違いないのか？」

「そうだ。ああ、そんなに身構えるなって。俺は君や君達と敵対する気は今のところないし——何より、あの人に死んで欲しくないんだ」

何を言っているのか理解できない、それが一夏の気持ちだった。

彼は己を呼び出したと言っている。そこまでは理解できるのだが…：…所々に理解できないワードがある。”昔からああなのか”とか”あの人に”とか。引つかかる部分はあるが、一夏は最優先事項は別にあると判断して言葉を続けていく。

「…あんだ、一体何者なんだ？」

「最近はよくその質問をされるな。俺は織原ハルト——リイス・エーヴェルリツヒを助けたいと願う、金色のISの装者だよ」

ドクン、と心臓が跳ねた。

（こいつが、金色のISの装者……？つまり、あの時俺を助けてくれたのもこいつってことか？）

動揺と戸惑いが隠せない。そんな一夏を見てハルトは再度『敵対する気はないよ』と言つて、息を吸い。笑顔を消した。

「——さて、じゃあ選択して貰おうかな織斑一夏君」

「選択つて、メッセージにもあつたけど……どういう意味なんですか」

「それは、すぐにわかるよ。これから俺が話すことを信じるのも、信じないのも君次第。そのうえで君が彼女を選ぶなら——俺が、”君が彼女を助けるための”手段を教えよう」

亡国機業、世織計画、そして——金色のIS。

全ての謎と真相に迫るための真実と過去を、一夏は知りに行ってしまった。

少年の決意

夢を見ていた。

それはきつと夢で、私が生きていた現実じゃないんだろうなって確信は最初からあったんだろう。

目が覚めて、目の前には死んだ筈のパパやママが居て。そこにあったのは優しくてもう生きるためにあんなことをしなくてもいい世界。

家族が居て、友達が居て、恩師が居て——そして、一夏が居た。

幸せな世界。ただの平和で、優しい日常がそこにあった。

けれど、本当は最初からわかっていたんだ。これが夢であるということ。

ハルトさんに言われなくても、本当はわかっていた。この夢がまやかしであることなんて。だから、だからこそ——私の心は揺らぐんだ。これは『偽樂園』という毒が見せる夢なのだという。なら、私はこの毒に屈してしまえば幸福な世界が約束されるのではないのか。

元の世界に戻って何になるの？またI Sに乗って、戦って、きつと誰かの命を奪う。

本当はもうそんなの嫌だった。目的があるから、理由があるからこそ私は戦えた。IS という力を制御できた。幸福があるなら、もう戦わなくていいなら……私は、この世界に居ても、いいよね？

——”この世界には自分の欲していたものが全てある”

けれど、この感情はなんだろう。

心の奥底の何かが私の意思を否定しているように感じる。一夏を見るたびにこれは私の知る一夏じゃないと、心が否定している気がする。私の心は、今どこにあるんだろうか。

受け入れられないというその心を残したまま、私のこの夢での一日がまたはじまる。

「リース？どうしたんだよ、ぼーっとしてさ」

「え？——あ、ごめん一夏」

朝の朝食時。考え事をしていたせい、か、目前の彼から呼ばれていたことをリイスは気が付かなかつた。慌ててもうそ訊なさそうな笑顔を作ると言葉を返す。が、目前の彼。織斑一夏は心配そうなままだつた。

「なんか最近のリイス、変だぞ? ——ずっと、何か深刻そうに考えてるみたいで」

「……正直に言う、ちよつと考え事はしてるかな」

「それ、俺でも力になれないことか? 心配なんだよリイスが。その——何処かに行くんじゃないかって、そんな気がして」

それはある種のを居ていた。

リイス・エーヴェルリツヒが今いる世界は現実であり、そうではない。

今の自分の状態は己が二人存在している状況であり、どちらか一人を選ばなくてはいけない状態だつた。

世界は全く同じ存在を二人は許容しない。リイスが受けた『偽樂園』という毒は、擬似的に夢の中にもう一人のリイス・エーヴェルリツヒという存在を作り出し、選択を迫る。同じ世界、夢の世界の一夏ではない一夏が居る世界を基準として考えるなら、”その世界に複数人の同一人物は許容されない”。

その真実を織原ハルトから知らされたリイスは、彼と会つた時に選べなかつた。正確には”迷つてしまった”。今居る世界は、自分がいる世界ではない。だが、その世界が

自分を許容してくれるなら。例え夢で、幻だったとしても幸福な世界がそこにあるのなら。それらを選ぶのもひとつだと、思ってしまった。

(……向こうの私は、どうなったのかな。どれくらいの時間が経過したのかな)

此方側の世界。つまり、夢の世界では日数上、ベッドで目覚めてから1ヶ月が経過しようとしている。リイスは思う、もしそれと同じ時間が経過しているなら恐らく本来の自分も1ヶ月眠つたままということになる。

死んだ、ということはないと考える。確実にこれだとは言えなかったが、自分の中にあるこの世界に対する“違和感”が未だに消えないからだ。

「まったく、君は心配性すぎるよ一夏。私はちゃんとここにいるし、何処にも行かない。流石に何処かに行きそうだから監禁するとか、変なドラマとかゲームのあれみたいなことは簡便だよ?」

「リイスは、お前俺のことなんだと思ってたんだよ……」

「うーん……元唐変木でヘタレ、優柔不断な私の彼氏さん?」

「お願いします昔のことを決めるのはやめてください」

若干棒読みになって返してくる一夏に対してリイスは苦笑した。

「ねえ、一夏」

「……?どうしたんだよ」

「もし。もしもだよ？ 私が居なくなったら——どうする？」

動揺する一夏に対してリイスは『別にそうなるわけじゃないから』と言葉を返して、それがただの質問であることを説明する。

「うーん……そのさ、例えば話だし事情があるのかもしれない。けど、俺はどうあれリイスを探すよ。」俺は諦めないし、諦めたくない」から」

「——うん、そうだったね」

「急に笑ってどうかしたのか？ えっと、変なこと言ったか？」

そうではない、とリイスは返答する。すぐにこの話しはなんでもないと話題を変えて、表情には笑顔を作る。だが心の中では別のことを考えていた。それは、本来の世界に残してきた最愛の、絶対に諦めない少年のこと。

（そうだね。そうだったよね。私は君の、そういう所に負けたんだ——だから、これは甘えかもしれないけど）

恐らく自分ではこの世界から抜け出すということを選べないだろう。そんな確信がリイスにはあった。家族も、友人も、最愛の少年と全く同じ相手も。何もかもがここにある。だが、何かはわからないが決定的な所で違和感がある。

その違和感がかもしかしたら、選択のキツカケになるのではないのか。リイスはそう思いつつ、目前に居る彼と同じ元の世界の少年のことを思い出す。

(助けて、一夏)

かつて少年に敗北した時と同じ言葉。
それが、思わず心の何か生まれた。

「ふざけないでいっくんツ！ そんな、そんなこと許可できる訳無いでしょー！」

バシン！ という机を強打する音。それと同時に、束の怒鳴り声がIS学園にある一室に響いた。その表情にはいつもの余裕や笑顔がない。ましてや、貼り付けられた笑顔のそれも存在していない。

束はリースが意識不明になって昏睡状態で眠り続けることになった日からずっと、休まず。ほぼ眠らずにリースの救出手段を探し続けていた。彼女にとってリースは、クロエ同様に娘のような存在だったからだ。

他人やどうでもいいという相手に対してはここまでしない。しかし、リースは自分の

恩師の娘であり、今では自分の娘のような存在なのだ。そんな少女が生命の危機で、生死を彷徨っている状況を放置できるほど篠ノ之東は無慈悲ではない。

しかし、いくら彼女が探してもリースの感染した神経毒。『偽楽園』と呼ばれるそれに対しての有効的な対策は見つからない。幾ら天才といえど万能ではない、彼女は既に数週間が経過した今焦っているのだ。リースをこのまま助けられないのではないのか、ということに。

そんな中に、一夏が突然連絡してきた。現在は亡国機業からの追撃を回避するために、IS学園内部の地下施設にもラボを作成してそこで作業を行っていたわけだが、突如スマホ型のプライベート端末に連絡があった。一夏からだ。

——『東さん、リースを助けられるかもしれない方法が見つかりました』

連絡時の声。一夏の声は、やや震えていた。

しかしそれも一瞬だった。すぐに彼は何かを決意したように息を吸い、翌日にラボに行くと話をした。

そうして今。その約束通りラボにきて、リースを助けられるかもしれない方法を提示した一夏に対して東は、怒鳴った。

「ツ……確かにこれならできなくもない。けど、不確定だもし失敗したらいつくん、君まで戻ってこれなくなるんだよ!？」

「わかってます。でも、もうこれしか方法がない気もするんです。」

一夏が提示した方法。それは、ある種賭けであると同時に下手をすれば”一夏まで戻れなくなる方法”だった。

「それでも、俺はリイスを助きたい。可能性があるのなら、俺に出来ることがあるのなら、諦めたくないんです。……諦めないこと、抗い続けること。それが今の俺に出来るただひとつのことだと思いますから」

一夏は、ある情報と手がかりを持つて帰ってきた。それは束も一度は考えたことではあったが、流石に束でも非人道的すぎるといふ理由で避けたものだ。

『偽楽園』。この神経毒は束がかつて開発していた『黒鍵』と呼ばれる特殊なISの機能を流用して作られた毒である。ワールド・ページ、かつてそう命名されたその能力は相手に対して幻覚を見せる能力。

亡国機業はこの技術を盗み出し、応用した。『偽楽園』とは、対象に対して限りなく現実に近い別の世界。理想や”たられば”を見せる。毒というものに対して人は耐性を持つている。言い方を変えれば免疫とも呼べる。

それが強ければ強いほど毒は作用しにくい。では、どうすればいいのか。簡単だ、”抵抗させなければいい”。身体が、心がそれを『毒』だと判断するからこそ抵抗されるのだ。ならば、そう思わせなければいい。

そんな考えから生まれたのが、偽楽園だった。

毒であるが、毒ではないと判断されるそれに対して効果的な対応策はない。何故なら、受けている本人は捉え方によつてはそれは快樂であり楽園であるのだから。そんな幸せと幸福、快樂を味わつてしまえばもう戻れない。ある種、最悪のモノ。

しかし、それに干渉することは出来た。

「お願いします束さん、リースのヴァイス・フリーユージェルと俺の白式。それをリンクさせて……俺に、『偽楽園』を擬似的に感染させて下さい」

「……それは、」

「できない、とは言わないで下さい。——ある人から言質は取ってます、束さんが管理している黒鍵のシステム、それを利用すればワールド・ページの応用である偽楽園に逆アクセス出来るって」

「ツ……確かに、できなくはない。けど、それはいつくんもあの毒に感染するってことだよ!？」

感染者が最も望む、そうであつてくれればよかつたと望む世界。何もかもが優しく、何もかもがある世界。それを見せられて、抵抗できる人間がどれだけ居るか。

束は自分をケースとして考えてみた。妹との関係、自分の夢、世界はこうあつてくれればよかつたと望む全て。ああ、とても甘美だ。抗うことなんて、考えられなかつた。

だからこそ束は一夏が自らそこに飛び込むことを止めた。きつと、戻ってこないと考えて。

「大丈夫です、束さん」

「いっくん……？」

「——俺、負けませんから。どんな幸福があっても、どんな理想があっても。それは“現実”じゃない。俺が好きになった、守りたいって思ったリスが居て、みんなが居る“現実”じゃありません」

一夏の言っていることは、客観的に見て束から聞けばただの強がりにはしか思えなかった。どれだけ強い覚悟があってもいざそれを目にすると、人は簡単に折れる。変わる。自分がそうだったから。

でも、だけど。

「どうしても、その方法を取るの……？」

強がりにも思えた、口だけになると思っていた。

でも、それでも——今目前にいる織斑一夏という人間からは、そんなものを覆すだけのものがあつた。

それは、馬鹿みたいにまっすぐな闘志。

それは、信じたものをそうであると信じ続ける信念。

それは、どんな逆境にも不屈の心で立ち向かう、炎の如き意思。

理論的ではない。I Sの生みの親として、科学者としてナンセンスな判断だと束は思った。けれど、織斑一夏という人間が持つ理論を覆すそれを前にして、束は『もしかしたら』と考えてしまった。

「お願いします、束さん、俺にリイスを助けさせて下さいッ！」

思いつきり一夏が頭を下げた。

けれど、束はまだ渋る。何故なら、もし失敗した場合——一夏も戻らない可能性が高いからだ。

「それでも、」

駄目だ、そう言いかけた時。

「——私からもお願いします、姉さん」

声が、聞こえた。

それはラボの入り口からのものであり、そこには——束にとつての最愛の妹、箒の姿があったのだから。

「一夏を信じてやって下さい、お願いします」

◆ ◆ ◆
突然の来訪者。東はその人物に対して驚いた。

どうして妹である箒がここに、それに今の言葉はどういう意味なのかと、疑問している中。対して箒はIS学園の制服姿のまま、迷いのない足取りでラボへと入ってきた。箒の瞳にあつたのは覚悟と信念だ。そして、そこには決意という炎も存在していた。

「箒ちゃん、どうしてここに——」

「私だけではありません」

そう言って、箒は再び入り口を振り向くとそこを指差す。そうすると扉が再び開かれて複数の人間が入ってくる。

「博士、貴女が他人を信じないのは知っています。でもどうか今だけは、どうか」私達と一夏〃の話聞いて下さい」

「キミは……中国の候補生、」

最初に入ってきたのは鈴だ。そして鈴はその言葉の後、『お願いしますッ!』と大きな声で言つて頭を下げた。

幾ら一夏の提案と箒の登場によって困惑していると言つても、東の他人嫌いは消えない。しかし、それはいつもとは違う。いつならばただ一瞥するだけだが、今東にあつた

のは不信と疑いだ。

ただ、すぐさま拒否するという態度はなかった。それはなぜか。篠ノ之束という人間は今、揺れているからだ。

「私からも、どうかお願い致しますわ篠ノ之博士。一夏さんを、私達の話聞いて頂けませんか」

「イギリスの特異体質の——セシリア・オルコット、」

入室してきた複数人。鈴に続いて言葉を作り『どうか、お願いしますわ』と頭を下げたのはセシリアだ。束はセシリアに対して興味があつた。亡国機業の鳥の化物、その攻撃を受けて尚身体に異常が出なかつた。

その理由は調査中だが、束から見ても「偽楽園は何も無しで無効化出来るものではない」。

にも関わらずセシリアはそれを無効化していた。だからこそ、彼女のことを『特異体質存在』として関心を持つていた。

「リイスは僕の恩人で、大事な友人なんです。私からもお願いします、博士」

「織斑一夏には確かに思うことはあります。ですが……私も、姉様を助けたい。お願いします、篠ノ之博士」

「シ、シャルるんまで!?それにラウラ、君まで——現実的な判断をする君なら、反対の答

だよ」

彼女らしくもなく。まるでた助けを求めるといふように見たのはラウラだった。ラウラ・ボーデヴィツヒという人間はドイツ軍人であり、常に理論的に状況を判断する。それに基づけば今一夏がやろうとしていることは理論的ではなく、博打だ。

だから、ラウラなら反対すると考えたが、

「軍人としての私なら、こんな方法反対です。現実的ではない」

「そうでしょ、だからいつくんと、ここにいる全員を説得して——」

「ですが私は今ここに軍人として居るつもりはありません。姉様を助けたいと願う一人の人間として、かつて姉様に助けられて、ラウラという名前と存在を与えてもらった”

月の落とし子” というモノだった存在として。人形としてではなく、人間として私は今ここにいます」

そして、シャルロットとラウラも他の3人同様頭を下げた。

「束様」

「くーちゃん……くーちゃんならわかるでしょ、いつくんがやろうとしていることがどれだけ危険なのか」

「ええ、わかります。博打も博打、大博打です。まず大前提として、ワールド・ページを応用してリースの専用機に繋ごうとしたとして、擬似的に偽楽園を感染、そしてそこから干渉しようとした場合失敗する可能性もあります」

「そうなったら、干渉以前にいくくんは戻れなくなる、わかってるよね？」

「はい。そして干渉できたとして、織斑さんが偽楽園という世界からリースを救える保証もありません」

干渉に失敗した段階で一夏は偽楽園に閉じ込められる。本人の意志に関係なく、だ。束がこの方法を取りたくない理由の1つとして”幾つも博打を乗り越え無くてはならない”ということがあった。

まず、黒鍵のシステムを亡国機業が利用したように此方もそれを応用して偽楽園へとアクセスを試みる。その為の手段は、”一夏がある人物から受け取ってきたもの”を使えばアクセス自体は道を作れる。

問題はここからだ。ここで当然、外部からの存在を感知した偽楽園は感染者に気が付かないように外的に対して遮断行為を行う。そして、ここでもし侵入が失敗すればアクセスは失敗、偽楽園によって現実との接続ラインを絶たれた一夏はリース同様、強制的に囚われることになる。

「それでも、私は織斑さんならきつとやってくれと信じています。私は、ずっと自分が

リースを支え続けるんだと思ってきました。……でも、リースに依存している私でも、リースをきつと幸せにしてくれると思える人が現れました。それが、織斑さんです」
クロエ・クロニクルという人間は他の誰よりも、何者よりもリースを大切に想っている。友達として、親友として、家族として。その感情は最早「愛」という領域まで至っていた。家族愛、親愛、友愛、どんな形であり、どんな種類の愛であれクロエはリースを想い愛していた。

自分が一番リースを理解してあげられる。信用してあげられる。どんな時でも、どんな状況でも自分はリースの味方であると、そう自負できるだけの“こころ”を持っているた。

だが、クロエは自分の想いより遥かに上の何かを持つ相手がいることを理解した。その相手が、一夏だった。

リースに依存してきたクロエにはよくわかった。一夏とリースがよく似ていて、ある部分において正反対だということを。それを理解しつつも二人のことを見守って。リースが心を開いたあの決勝戦でわかったのだ。

”リースを一番理解して、愛すことが出来るのは一夏であると”。

タツグトーナメント決勝戦当日だけではない、一夏がリースに宣戦布告した時から心

の何処かでクロエは一夏ではリイスには勝てないと想っていた。だが、一夏は勝った。決して諦めず、屈せず。抗い続けてリイスに勝った。

その時に想ったのだ。決して諦めない、抗い続けるという不屈の炎を持つ一夏なら、リイスを離開してあげられる。

幸せにできる、と。

織斑一夏という人間が持つ、かつてリイス・エーヴエルリツヒによって灯された不屈の炎。それには多くの人間が魅せられた。

自分の想いに対して決断できなかった事に対して、鈴は一夏の姿を見て答えを出せた。自らが未熟であること。それを一夏を見て理解して、まだ遥かな高みを目指したいという想いがセシリアの中に生まれた。

リイスの隣に立つ。その姿に、在り方にラウラは魅せられた。個人的な感情を納得させられるほどに、ラウラは一夏をリイスの相手として認めていた。かつて自分は一夏を陥れようとした。それでも尚、一夏は自分に手を伸ばしてくれた。”諦めるな”友達だろ”と背中をその一夏の声と炎にシャルロットは背中を押された。

歪んでいた自分の一夏に対する愛。それと正面から向き合って、臆さずに答えを出してくれた。覚悟と、決意と。そして”一夏が選ぶのは自分ではない”という言葉を真剣

な想いと共にぶつけ、向きあってくれた一夏に筈は救われた。

彼女達だけではない、今この場に居ない他の人間も、織斑一夏という人間の周囲に居る人間の多くが彼の不屈の炎にも思えるそれに影響されている。だから、きつと彼を知る人間であり影響されたのならこう答えるだろう——『織斑一夏ならきつとやってくれる』と。

「——すまない、遅くなった」

そして、最後にラボに現れる存在が居た。

肩ほどまでの黒髪、千冬そっくりの目つき。マドカだ。

彼女もまた束の近くまで歩いていくと息を吸い、

「マドっち、その——」

スコールのことは、と続けそうになった束をマドカは静止した。

「……割り切った、とはいかない。だが、私が沈んでウジウジしているときつとあいつは私の事を怒るだろう。だから、私も覚悟を決めてきた」

一度束から視線を外したマドカは、視線を一夏へと向けた。

真剣な眼。その視線を一夏は正面から受け止め、臆すことなく言葉を待った。

「……メール、読んだよ」一夏」

マドカの言葉。それに対してその場に居る全員が驚きという感情を見せた。今までマドカは一夏のことをフルネームで呼んでいた。そして、彼女が一夏を避けているようにしていることも。

「誰から聞いたか、なんてのはそのうちわかるんだろう。——お前は知っている、そう解釈していいんだな？」

「——ああ、そうだな。　　こういう言い方はちよつとこそばゆいけど、全部知ったよ。」
” 円姉 ”

東雲マドカが何者であるのか。それを知らない人間は理解が追いつかなかつた。しかしマドカはそれを意に介さずただ吹っ切れたように笑い、一夏へと言葉を続けていく

「やめろ気持ち悪い。私はもうお前の姉の織斑円ではない。私は、東雲マドカだ」

「……ああ、俺も自分で言つて凄く恥ずかしくなつた。なら、今まで通りつてことでいいのか？マドカ」

「構わんさ、今更姉面するつもりもなければ、私は織斑の姓を捨てている以上姉ではないからな。　　今まで通り、変わらないさ一夏」

既に織斑の姓、そして千冬と決別したマドカ。だが今こうしてかつての”弟”とその話をして、明確に今まで通りでいいという話をできた。だからなのか、彼女の表情には

満足げに笑みがあつた。

「篠ノ之博士、私もどうやらこの学園に、ここのバカどもに。そして……一夏に影響されて馬鹿になつたらしい。どうにもこいつならリスを助けてくれるんじゃないかと想つてしまう。……私は、前に進もうと思う。スコールはもういない、それを少しづつ受け入れてでも前に進もうと思う。だからまずは、今までの私にはないこと、それをしてみるのもいいと思つた。どうか、この大馬鹿を信じてやってくれないだろうか、この通りだ」

マドカも束へと頭を下げた。ここまで言われ、”織斑一夏を信じている”と言われたら——束は観念するしかなかつた。

「ああもう、わかつた。わかつたよ！ ただしッ！ いっくん……リーちゃんがちゃんと戻つてきたら全部説明してもらうからね、何もかもだよ！」

束は知り合いだからという鼻眞目で見なかつたとしても、一夏のこととは信頼している。学園に来てからの一夏の成長がとてつもなくかつたことも、IS学園という環境でもその不屈の炎は消えなかつたことも。

だが、己の人間不信と科学者としての考えがそれを完全に肯定できなかつたのだ。そ

の束の心が、動いた。

「それから！さつきから扉の外で聞き耳立ててるちーちゃんとかソ犬！居るのわかってるからさつきと入ってきてっ！——リーちゃんを助けるための、そのための作戦。博打も博打、非現実的でとんでもない手段の説明をするから」

リイス救出戦

自分が自分ではなくなっていく。それを自覚したのはいつからだっただか。私には既にこの世界に来てからわどれくらいに時間が経過したのかさえ判別がつかなくなっていた。

ただ、幸せに溢れた時間が過ぎていく。

満ち足りた幸福だけがここにある。

”この世界は幸福で満たされている”

春、高校二年生になった私はクロちゃんやんと皆と新入生について話をしていった。新入生の中には弾さんの妹、蘭さんの姿もあつて驚いていた。

夏、みんなで海に行ったりした。最初、海か山で礼子さんと東さんが喧嘩していたけど結局両方行くことになった。

秋、文化祭で劇をすることになった。とてつもなく嫌な予感がして私は一夏と逃げようとしたけど時既に遅し。みんなに包囲されて何故か私が男役、一夏が女装してヒロイン役という奇妙な劇をする羽目になった。とても好評だったけど暫くそのネタで弄られた。

冬、この地方では珍しく雪がかなり降った。ニュースでは特に今年の冬は冷え込むと伝えていた。ある日の朝、通学路を一夏と歩いていると無言で手を繋いでくれた。とても、その手は暖かくて。無言で目を逸らして自分のやったことを恥ずかしそうにして一夏はとてかわいくて、幸せだった。

自分が消えていく。パパとママが死んで、ただの復讐鬼に、殺人者になった私の存在が消えていく。新しい自分、幸福な自分によつてそれが塗り替えられていく。

けれど、まだ完全には消えていない。何がそうしているのか、というのはわからない。でもあの世界の私はまだ、ここに居る。どうしてなのか、抗っている。私は、そんなことしなくていいって思ってるのに。

どうしてこの幸せを受け入れないの？と、私は自分に聞きたい。ここにはすべてがあるのに。そう思つて、ずっと想い続けて。その度にもう一人の自分から問われているような気がした。

——本当に幸せなの？その織斑一夏は、本当にリイス・エーヴエルリツヒが好きになつた人なの？

——幸福しかない世界、それが本当に幸福と言えるの？

”わたし”はその間に即答することができなかつた。

「全員ＩＳスーツに着替えてきたね？じゃあ、作戦を説明するよ」

東が観念してラボへと千冬と礼子が入ってきてすぐ、東は一夏立ち全員にＩＳスーツへと着替えてくるように命じた。そして千冬と礼子には病室で眠っているリイスを連れてきて、ラボの奥にある電脳ダイブ装置を改造した接続ユニットに寝かせるように指示をした。

指示から１時間。一夏達の準備が終わり、運ばれてきた医療着姿のリイスもラボの接続ユニットへと寝かされた。未だに目覚めないリイスを見て一夏は一瞬だけ辛そうな顔をしたがすぐに『すぐに行くからな』と小さな声で、しかし決意が籠った声で呟いた。

「全員座ったね。じゃあ説明するよ——現在、リーちゃんは『偽楽園』と呼ばれる神経毒に囚われた状態にある。これを毒とっていいのか判断には困るけど、これについてはかなり厄介で事によつては人を簡単に殺せる毒」と思ってくれればいい。……先に言っておくけど、これは本来公開されない情報。いっくんは全部知ってるのかもし

れないけど、他の子達は多分知らないこともある。だから当然黙っていてもらう。いいね？」

東の言葉に対して座る全員が頷いた。ここに居る全員の目的は1つ。”リイスを救い出すこと”だからだ。

各々、どんな形であれ一夏とリイスに縁があり、見守ってきて、影響を受けた。だから今ここに国がどうのということや、各国が考えているようなことの類は存在していなかった。

それを確認して東は『ほんと、全員バカもバカ。大馬鹿で呆れるよ』と呆れたように、だがどこか嬉しそうに言った後空中にデータを投影していく。

「かつて東さんは『黒鍵』と呼ばれるISを生み出した。これはちよつと特殊なISでね、生体同一型のISだった。黒鍵の戦闘能力は皆無で、武装のたぐいは存在しない。かわりに、ある能力を搭載していた。それが——『ワールド・ページ』っていう機能。簡単に言うと、これは対象に対して幻覚を見せる能力なんだ。……元々黒鍵はその特性上、クーちゃんのテストを元に改良を重ねてクーちゃんの専用機になる予定だったんだ。後衛特殊支援型、指揮系列型としての機体になる予定だった。けど、」

そこで表情を曇らせたのは、一夏達同様座るクロエだった。俯き、両手の拳は震えるほどに強く握りこぶしを作っており『……申し訳ありません、東様』と言った。

「くーちゃん、あれは対処できなかった束さんも悪い。くーちゃんに落ち度なんて無かった。だって——完璧無敵な束さんの防衛ラインを超えて、テスト中のくーちゃんを襲うなんて思ってたんだから」

黒鍵のテスト中の襲撃。クロエが襲撃され、ある方法で黒鍵のシステムを奪われるという事件がかつてあった。

当時のクロエは、今と違い慢心することがあった。束のセキュリティ下ということもあつて安心していたのが運の尽き、それを突破した亡国機業のある人物に剥離剤と呼ばれるものを使用された。

束の咄嗟の行動によってクロエの命と機体本体は無事。しかし、システム中枢は引き抜かれるという結果になってしまいクロエはそのことをずっと後悔し、悔やんでいた。

「オルコットとかいったね、特異存在の君を除いてあの鳥の化物と戦闘をした全員からは、黒鍵とほぼ同種の幻覚毒」が検知された。それを解析した結果、黒鍵のシステムを応用したものとわかった訳さ。……ここからが本題。心して聞いてね」

全員が姿勢を正して束を見た。それを確認した彼女はまた別のデータを投影する。

「リーちゃんを助ける方法。それを考えなかったわけじゃない。そして……なくはなかった。けど、”この方法は余りにも博打すぎるし危険なんだ”」

束が提案する方法。それは、『偽楽園』に対するある種のブルートフォースアタック

だった。

リースを蝕む毒はリースの身体のどこにも存在していない。偽楽園の正体、それは黒鍵の見せる夢だからだ。毒が生み出した夢。本来どうしようもないのだが、東には一夏からもたらされた滋養方によってある方法を思いついていた。

それは、リースの専用機。ヴァイス・フリーユゲルを仲介してリースの精神世界、つまり仮想世界にアクセスして救出に向かう方法だった。しかし当然ながら、夢を見せている偽楽園も抵抗してくるだろう。そして隙あらば、侵入者も蝕み取り込もうとする。そのリスクはあるが、限りなく低い確率をあげるための作戦が総当たり攻撃。

一夏以外の専用機持ちで、リースの精神世界に入り込むメンバーで外部から偽楽園に対して攻撃を仕掛けて負荷をかける。そうすることで入り込める穴、バックドアが生成されてそこから侵入できる。そして、侵入した一夏がリースを助けに行くという作戦だ。

この作戦にあたり、担当は以下になった。

”
リース救出：織斑一夏

外部攻撃班：篠ノ之箒、シャルロット・デュノア、凰 鈴音、ラウラ・ボーデヴィツヒ、東雲マドカ

外部攻撃サポーター：セシリア・オルコット

メインオペレーター：クロエ・クロニクル

”

「この作戦要になるのは、まあぶつちやけ誰がミスつても詰むんだけど強いて言うなら
いっくんとくーちゃん、そして……オルコット、君だよ」

「わ、私ですか？」

「うん、君だよ。君はね、唯一人あの毒を受けて何もなかった人間なんだ。後遺症も何
もなし、検査でも何もなし。そしてその理由も不明。でも確実に言えるのは、”君は偽楽
園に対して絶対的な耐性を持っている”」

福音の騒動、結果的にIS学園側の敗北と見ていい結果になったが収穫もあった。そ
の1つが、セシリアの特異体質だった。

偽楽園とは極めて強力なものであり、束曰く毒として見ればこれ程に恐ろしいもの
はないというほどだった。しかし、セシリアは他の全員がその影響を受けて意識を失っ
たにも関わらず一切影響が出なかった。

彼女がどうして影響を受けなかったのかはまだ不明だが、何度か束はセシリアに対
して許可を得て実験を行っていた。催眠術、誘導尋問、マインドコントロールなどを行っ
てみたが”セシリアには一切効果が見られなかった”。

そこで東はある仮説を立ててこう結論づけた。セシリア・オルコットは精神干渉の類や毒などに対して絶対的な耐性を持つていると。収穫はそれだけではなかった。東が見つけたその体質と力、それは——イギリスがセシリアにとつての新たな力を作り出すキツカケになった。

「本当なら、今急ピッチで開発が進められている”イギリスの完成形第三世代”が欲しかったけど欲張りは言えない。けど、セシリア・オルコット、君のその絶対耐性は偽楽園に対して極めて効果的だ」

「あの、篠ノ之博士。仰る意味が……」

「その理由について説明するよ。偽楽園への攻撃、それに際して相手も防衛をしようとして抗ってくる。そうすると必ずセシリア・オルコット、もう面倒だからせつしーを除いて全員が仮想世界の中で擬似的に偽楽園に感染する。いい？今のうちに言っておくけど”ダイブした先で何があってもそれは幻だから信じちゃいけない”。信じたら最後、戻れなくなると思つて」

その言葉に対して全員が息を呑んだ。

リースが感染した偽楽園の恐ろしさは説明されている。そして、鳥と戦闘して意識を失つた鈴、ラウラ、シャルロットは意識がない間覚えていないが心地のいい夢を見ていた自覚があった。今度は明確にその楽園を眼にして抗わなければいけないのだから。

「せっしーをバックサポーターに選んだのは戦闘センスの問題だけじゃない。偽楽園の影響を受けないセツシーには最悪の場合やいざって時、感染しそうになった子をサルベージして貰うことになるから」

「サルベージ、ですか？ですが私、どうすればいいのかなんて——」

「簡単だよ。多分君はダイブ世界の中で自由に動ける。だから常に他の子のことをイメージして、何か違和感があったらその子を殴りに行きたいと思えばいい。要するに叩き起こしてやればいいって訳さ。夢なんだから何でもあり、ブルー・ティアーズで危なくなつた子の夢ごと狙撃していいし、怒鳴り散らしてやつてもいい。大事なのは、”全員が夢に屈しないこと”だからね」

そして、と束は続けて一夏とクロエを見た。

「作戦成功率と安全性をあげることに、全員が問題なく作戦を進めるための要がセツシー。そして、クーちゃんにはダイブせず、ラボの端末からダイブしている全員に対して指示を出してもらおう。そして、攻撃によつてできた偽楽園の穴を見つけてそこにいつく人を誘導すること」

「……束様。私は、」

クロエには思うことがあつた。けれど、それはきつと許されないし”何度もミスをしている自分にそんな資格はない”。

できるなら、自分もリイスを助けに行きたい。かつて黒鍵は自分の専用機で、慢心によつてそれを強奪された。

そしてその結果がリイスの意識不明状態を引き起こし、今回のような状況になってしまった。だから、自分もリイスを助けに行きたい。償いでも自己満足でもなんでもいい。ただ、リイスを助けたかった。

「くーちゃんの気持ちはわかるよ、自分も助けに行きたい。でしょ?」

「ツ……はい」

「うん。でもね——今回のくーちゃんの役割はすごく重要なものなんだ。黒鍵の適性があつて、過去に専用機として持つていて黒鍵をよく知っているくーちゃんだからこそそのね」

「それは、どういう——」

「くーちゃんには、みんなの帰る場所になつてもらいたいんだ。ダイブした中で戦い、抗つて、その先でリーちゃんを連れて全員で戻つてくるための帰る場所。みんなの命と、魂を繋ぎ止める立場が今回のくーちゃんと役目だ」

「そ、そんな重大な——私は、一度ではなく二度、そして今回で三度リイスの命を危険に晒しました!そんな私に、全員の命と魂を預けるなど……」

「俺は信じるぞ、クロニクルさんを」

迷い、そんな重大な立場自分には無理だと言いたげにしているクロエに対して言葉を作ったのは一夏だった。

「クロニクルさんの過去とか、何をしたのかなんてのは知らない。でも俺の知ってるクロエ・クロニクルって奴は技術があつて、ふざけてるように見えて大真面目な奴で——リイスのことをすごく大事に思つてるってことを知ってる。だから、信じさせてくれよクロニクルさん」

「織斑さん……」

「きつと、ここに居る誰もがクロニクルさんを信用してると思う。ずっとリイスの近くで、リイスを支えてきたのは間違いなくお前なんだから」

その言葉に対して全員が肯定という意味合いで苦笑いや照れ隠しなど各々反応を返した。管制塔という意味合いでも、サポーターという立場においてもクロエ以上の存在は居ない。それが全員が総意だった。

「……わかりました。このクロエ、必ず皆さんをサポートしてリイスへの道を作ります。ですから織斑さん、リイスをお願いします」

恐らくまだ迷いはあるだろう。そんなクロエに対して、束は『この件についてはないんだけど、』と言つて続けた

「くーちゃん。くーちゃんが力を欲しがってたのは知ってるよ。リーちゃんを守るため

の、もう二度と失わない為の力が欲しいと思っていたことを。その覚悟も、決意もあるのは知ってる。……だから、少し時間をくれないかな」

「束様、それは——」

「ワールド・ページを失った黒鍵、そのコアを使ったくーちゃんの第四世代専用機。束さん今、頑張ってるから」

思わずクロエは言葉を失った。僅かな同様の後にどうということだ、と思考する。第四世代 I S。それは現状、例外を除いて束が手を加えた I S にしか存在していない。

それも白式と紅椿、そしてオータムが保有している完全制御解除状態の I S の三機のみ。桁外れた第四世代や第四世代相当の I S とは機体性能は言わずもがな、どれもがとんでもない能力を持っている。

バリアー無効化攻撃の白式。

燃費は最悪だが高火力、エネルギー増幅の力を持つ赤椿。

そして、相手の防御能力自体を破壊するマドカの黒式と、オータムの専用機。

完成形の第四世代や第四世代相当の I S とは、束が亡国機業と金色の I S に対抗するために制作したものである。それも紅椿で最後だとクロエは思っていた。

「くーちゃんはさ、すっごく真面目。真面目で不器用で、一度これって決めたらそれ以外が見えなくなることもよくある。本当、そういうところ束さんとよく似てると思うよ。」

流石東さんの娘」

「東様、第四世代は——赤椿が最後なのは、」

「その予定だった」。でも……ちよつと、この前のスコールから送られてきた最後のデータや、金色が手渡してきたデータ結晶。それで事情が変わつてね。……大丈夫、リーちゃんに戻つたら全部説明するから。といつても、多分いつくんは全部知つてるのかな」

その言葉に対して無言だった一夏は全員の見視の中で、厳しい目をして……肯定という意味合いで頷いた。それに対して東は深く言及せず、『さて』と続ける。

「ともかくとして、目的は一つ。眠り姫を王子様が起こす、そのためには誰がミスをしてはいけない。……もし、覚悟がない。できないって思うなら今のうちにやめていい。咎めないし、それは仕方ないことだと思ふから」

もし失敗すれば、リイスは死ぬ。それだけではない、その場合ダイブした人間が偽楽園にとらわれて死ぬ。成功率もあまりよくはないと東は言う。しかし誰も引かなかつた。それは各々に目的があるからだ。

暫くの沈黙の後、東は『別に、引いてもいいんだよ』と最終確認というように念を押して、

「——わかった。君達はどうにも本場の馬鹿らしい。現実的ではなく、確率も低い。不確定要素も多ければ命をかけなくてはならない。にも関わらずやると言うんだから大馬鹿だ。そういう馬鹿は、私は嫌いじゃない。開始は1時間後、各自それまで心の準備と覚悟だけ済ませるように」

リースを助けるための作戦、それが開始される。

リースを救出するための作戦。一夏、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、マドカ、クロエの専用機持ちレベル8人での精神ダイブは作戦名『Alice Re:capture』と名付けられた。束曰くこれには意味があるそうだが、『この意味はもし悪夢に囚われそうになった時、この名前を思い出してみて。そして考えてみて』とだけ言っていた。

作戦開始まで30分。一夏の姿は学園のラボにはない。ISスーツの上に制服を着ると、一度寮の部屋に戻っていたのだ、一夏は。

二人用の寮の部屋。リースの私物周りやベッドなどは綺麗に整理整頓されているが、所有者を失ったそれらは僅かに埃を被っている。いつも一人ではない部屋。最愛の少

女の声があり、付き合う前からずっとあった存在と声は今はない。

一人、たったひとりの部屋の中で一夏はある作業をしていた。それが終わると『…よし』とだけ呟いて、寮室の椅子へと腰掛ける。

「……」絶望に抗う勇気と強さを持って”、か」

ふと、呟いたのはそんな言葉。その言葉の後一夏はまるで自身を嘲笑するように苦笑する。

リイスを助ける方法。それを知る代償として一夏が払ったものは大きすぎた。語られたのは、リイスの過去。金色のISの正体。そして……リイス達が追っている、世織計画の正体。

それを語られた時、一夏は絶望に突き落とされた。それは、ある真実を知ってしまったからだ。だから一夏はある覚悟をした。ある決断をした。

きつとそれは、周囲の誰もが許さないことだろう。

そして、最愛の少女もそれは望まないことだろうと考えた。

それでも、”そうしなくては掴めない”と思ったから。

織原ハルト。一夏は、その正体を知ってしまった。

誰よりも早く、誰よりも最初にたどり着いてしまった。

ある種の、確定されたに等しい未来を。

けれど織斑一夏は諦めなかった。

抗おうと思った。そんなもの認めてなるものかと、そう思った。

「俺は認めない、俺は諦めない。やつと俺もリースもここまできて、これからなんだ——」

一夏にはまだ束以外に話していないことがある。それは、一夏の力についてだ。リースの救出手段、それと同時に手渡された絶望と共にあった、最後の希望とも呼べるモノ。「これから沢山笑ったり、喧嘩したり、泣いたりしてさ。そうやって一緒に歩きたいって思ってたんだからな。絶対、絶対に助けるからなリース」

チャリ、と音がした。

それは一夏の右腕手首からの音であり、先程まで居たラボでは手首に存在していなかったものだ。

そこにあるのは、白紐のブレスレット。そして——その音は、剣と翼を象ったような、その紐に付けられている”白銀”の装飾物の音だった。

「そのためなら、俺は修羅にも羅刹にでもなつてやる」

覚悟と決意、それが籠つた言葉を一夏は呟いた。

「作戦は全部頭に叩き込んだね？今回、リーちゃんの精神世界へのダイブにあたりダイブを行う全員には擬似的に偽樂園に感染してもらおう。そして感染状態と誤認したリーちゃんの中の本物が君達を襲うだろう。その時、向こう側へのチャンスが出来る。

……こつちで現世との繋がりは繋いでおく。けど、最悪の場合強制切断して帰ってきて貰う場合もあるから。”向こうにあるのは全て現実に近い幻”。よく、覚えておいてね」

ダイブ装置に横たわり接続準備が完了した全員に対して東は強い口調でそう言った。全員に対して『最後の確認だよ、やめたいなら今のうちだから』と確認。しかし、誰も降りないのを見て溜息。

「恐らく、セッシーだけは感染しない可能性が高い。けど、その場合向こうの何かしらの

対応をしてくるはず。セツシーには全員のダイブ状況をモニタリングできるようにしてある、何かおかしいと思つたら何をしてでもいい、叩き起こしてあげて。……そしていつくん、偽楽園の一番奥でリーちゃんはきつと待つてる。そう束さんは信じたいと思うから」

思わず横たわる頭を起こしそうになり驚きを表したのは箒だ。姉妹だからこそわかる、篠ノ之束が”そう思いたい”や”そう信じたい”というような曖昧の言葉はほぼ使わない。にも関わらず、今迷いなく姉はそれを言ったのだから。

——少しは、信じてくれるのだろうか。

そう、箒は思った。

「……悪いけど、最悪の場合の手段も用意してある。リーちゃん一人と、君達全員の命。天秤にかけた場合どちらが優先されるか、わからない訳じゃないよね」

一人の人間としての判断と、篠ノ之束という研究者であり大人でもある人間の判断は違う。一人の人間としては何が何でもリイスを助けたいと思うし、そのために手を尽くすつもりもある。しかし、研究者。そして大人としての判断は別だ。時に冷酷な判断すら下さなければならぬ。それが、どれだけ辛かろうと。

リイスの救出に失敗した場合の最悪の事態、それはダイブした全員の帰還不可能という結末だ。『偽楽園』はただの毒ではない。かつて例がないほどに最悪の、最凶と言って

も過言ではない毒だ。

確実に相手からの抵抗はある。そして、同時にダイブした全員を蝕もうとするだろう。抗えなければ最後。蝕まれ、偽りの世界という毒に飲まれる。

今回の作戦においての絶対条件は、全員の生存である。今後の局面、亡国機業やこの先の困難に立ち向かうには今リイスを助けようとしている人間の力は必要不可欠になる。だからこそその判断だった。

「けど、東さんは信じたいと思う。みんながリーちゃんを連れて戻ってくるって」

本来の篠ノ之束からは絶対に出ない言葉。他人を信じる言葉。誰かに期待する言葉。それが形となった。

それは期待であり懇願。その変化は、篠ノ之束という人間にとっちはいい変化だったのだろう。

「それじゃあ、眠り姫を起こしに行こうか」

束のそんな言葉と同時。作戦が開始され、一夏達の意識は仮想世界へと飲み込まれていった。

受け継がれし白

理想という言葉を考えてみよう。

一般的にこの言葉を調べると” 人が心に描き求め続ける、それ以上望むところのない完全なもの。そうあってほしいと思う最高の状態。” などという意味合いが出てくる。

では、この『理想』という言葉を世界に、時間という中に当てはめて考えてみる。

そして、彼女と彼にとつての『理想』という意味合いでも考えてみる。

さて。

理想の彼とは一体、”いつ、どのタイミングの彼”であり。

理想の彼女とは、同様に”いつ、どのタイミングで、どうあった彼女”なのだろうか。

「ッ……あれ？」

意識が覚醒する。己の視界が世界を認識した瞬間、身体を思いっきり起こしたことにより一夏の意識は覚醒した。

「……………こつて、部屋、か？」

身体を起こし周囲を見渡す。ふと気がつくと、自分が今寝ているのは二人用の大きめのダブルベッドであることに気がついた。

（そうか、これ——夢なのか）

思えばおかしな話だと考える。自分はリイスを助けるために、目覚めさせるために他のメンバーと賭けに近い救出作戦を決行した筈だ。なのに自分はあまり見覚えのない部屋で眠っていた。

（俺がこうして夢の中で目覚て、記憶もはつきりしてることとは……とりあえず第一段階は成功した、のか？）

自分の記憶ははつきりしている。そして、これが偽楽園の見せている夢だという自覚もある。だとすれば、自分は他の全員が道を作り、そこを通ることには成功しているということになる。

問題はここからだ。まず、リイスを見つけ出さなければならぬ。

しかしどうやって本物の彼女を見つけ出すか。それについて悩んでいたところに、

「一夏ー? 起きたの?」

ガチャリ、と。部屋の扉が開かれた。

そこに現れたのは、銀のロングヘア、大人びた雰囲気、ジーンズとデニムシャツという私服姿。

「ツ……!? あ、え——」

混乱し、目を見開き驚く一夏を他所に。その現れた『女性』はキョトンとしたように、頭の上に疑問符を浮かべたようにして部屋の入口で立ち止まった。

「どうしたの一夏。そんな啞然として。もしかして、昨日のお酒まだ抜けてないの? だから私は束さんに言ったんだよ……一夏はお酒弱いからあんまり飲ませすぎちゃダメって—— 一夏? えっと、どうしたの本当に」

……これは夢だ、それは理解している。

これは現実ではない。——ああ、そんなことも理解している。

織斑一夏という人間はここで認識を改めた。何故なら、今一瞬飲まれかけたからだ。

偽楽園というものが本気で自分を殺しに、取り込みに来ていると感じ、”現実の自分としての意識”を保った。

でも、それでも。

(ああ、くそ——ここまでリアルで、しかも気持ちや心まで、現実と同じなのかよ)

自分の意思を保つていても、感情までは騙せないのだから。

「リイ、ス——」

「うん、そうだよ？ 本当どうしたの君は……昨日酔いつぶれて倒れたと思ったら、今度は目覚めていきなり泣いてて」

「……ああ、悪い。ちよつと、変な夢見ちゃつてさ」

彼女の声で。彼女の言葉で。 ”君” と言われたのは、いつぶりだっただろうか。声を聞いたのは、その仕草を見たのは、いつぶりだっただろうか。

だが、これは夢だ。夢、なんだ。

そう言い聞かせるとともかく目の前にいる彼女に対してできるだけ普通にしようと言葉を作っていく。

「変な夢？ 一夏が夢で泣くってどんな夢なの……逆に気になるよ、それ」

「悪い、本当なんでもないんだ。……ッ、あれ」

苦笑いを作り、この世界のリイを誤魔化すと一夏はあることに気がつく。右腕。手首に存在しているはずのもの、白式の待機形態であるリストバンドが存在していないの

だ。

（白式が、無い？ でも——もうひとつ）のほうはちゃんとある。どういうことだ？）
どうして白式が存在していないのか。そう思考しようとした瞬間、ノイズのような何かによって突然思考を遮られた。

「……疲れてるのかな、俺」

「これは重症かな……？えっと、今日の予定どうする？大学の研究室行くとか話してたけど、断っておく？」

「あー……大学？研究室？ ええと、なんのこと—— とうか本当にリス、だよな？」

「うん、今日は休もう一夏。本当ちよつとおかしいよ……私は私だよ？」

我ながらどうかしている和一夏は思う。これは現実ではないと理解しているのに、心が。想いがこの世界に魅了されていく。

だが、織斑一夏は吞まれない。ただひとつ、絶対に不変であるものがあるからだ。

「——悪い、変なこと言った。そうだな、リスはリスだ。なあ、リス」

「うん？どうしたの一夏」

「……ありがとう。おかげで目が覚めた」

リスは『よくわからないけどどういたしまして？』と返し、きつと寝起きのことだ

ろうと解釈した。

対して一夏は違った。今のやり取りで、あることを確信したからだ。

(ああ、確かに理想なんだろう。幸福なんだろう。 だからこそ、俺の知っている現実ではまだありえない幸福だ)

偽楽園の甘美な毒。大抵の人間ならば屈するであろうその中で一夏は変わらないものがあつた。それは、不屈の意思。そしてある事実を知っているが故の覚悟。

だからこそこれはありえないと断言した。

その後、着替えた一夏は自分とリイスが住む部屋、そうなってくればいいと想っているその部屋の玄関へと向かう。

「リイス」

リビングでテレビを見ていたリイスは一夏へと振り返ると、ただ一夏へと笑いかけた。そんな彼女に対して一夏もまた、笑った。

「ちよつと出てくるよ、すぐ戻るから」

「……うん、気をつけてね。一夏」

これは夢であると理解している。

自分は何れだけこの世界が理想で幸福でも屈しないと言い切れる。

けど、だけど。

「ありがとう、リイス。行ってくる」

ただ一人、守ると決めた彼女の声と理想の姿で。その笑顔と言葉を振り切るのだけは、偽物だと理解していても辛かった。

部屋の扉を出る時。一度振り返った時に見えた彼女は、どこか切なそうにしているように見えた。

歩く。部屋を出てただ歩く。

この世界について歩きながらわかったことがあった。この世界にはISが存在していないのだ。

道行く人は全てが幸福そうに見えた。街角で報じられるニュースは明るいものばかりで、平和な世界であると理解出来た。

まさに理想。夢物語を現実にしたのがこの世界なんだろう。

そんな中、俺はある場所を目指して歩いてきた。見慣れた木々と石の階段。それを超えた先にあるのは、篠ノ之神社。

「見つけたぞ、まったく……手間を掛けさせないでくれよな」

神社の境内。社の縁側に腰掛けていた少女へと俺は、言葉を作った。

白の髪に、白のワンピース。そして、紅の瞳。

「勝手に居なくなつて心配したぞ、——白式」

名を呼ぶ。縁側に座っていたその少女は驚いたようにした。

「……なんで、わかつたの?」

「まあ、既にあの人から色々聞いてるからな。それに……なんとなく感じとか雰囲気で

「ここになつて感じはしたからさ」

「……そう、あのひとが。色々あると思う。けどこれだけは先に答えて。いいの?」

何に対して、というのは予想がついていた。

白式。この少女が言いたいのは「本当にこの世界を打ち破つていいのか」ということだ。

「ここは、俺の望む現実じゃない。もしこれを受け入れれば、今までの俺を全部否定することになると思う。リスと出会つた俺も、たつた一人を選んだ俺も否定することになる。それつてさ、俺が俺を否定するだけじゃなくて、俺がリスを否定するとも取れるだろ? そんなの、一番嫌だしさ」

幸福しかない世界。確かに、とても素晴らしい世界だと思ふ。誰もが焦がれ、望み、渴

望する世界だと思う。けれど、逆に言えば『幸福しか無い』んだ。

俺は悩んで、葛藤して、辛い思いをして至った”現実”を否定したくない。そんな過程があつて、出会いがあつて、戦いがあつて俺という人間は今ここにいる。

幸福しか感じない世界と、いろんなことがある世界。俺は、後者の世界を否定したくなかつた。

「自分で考えた答えを、自分で選ぼうとした未来を、手を取りたいから足掻いて。藻掻いている自分を否定したくない。自分勝手な話だけだ。俺、リイスが居ないときつとダメなんだよ。だから我儘で傲慢かもしれないけど——俺は自分と、リイスを否定したくないからあいつを連れ戻しに行く」

息を吸う。そして、これが俺の本気の言葉だ。

「こんな理想の世界の”理想”で止まる俺や世界なんかより——”現実”の俺のほうがいいって思い知らせてやるんだ。俺の偽物なんかには、絶対リイスは渡さない」

「……ぶつ、まさか貴方からそんな熱い言葉が出るなんて私も思わなかつた」

神社の縁側。そこに座る白のワンピースに白髪少女。 ”白式というコア” が笑いながらそう返してきた。

「それで、貴方は私に何を望むの？ ——私は白式。ううん、今の貴方には白騎士のコアアツて言ったほうがいいのかな？ 篠ノ之束が生み出した、”形にした” 原初の I S C

アの1つである私に、何を望む？」

小学生にも見える小柄な見た目。そんな見た目に相反するように、雰囲気と言葉の重みが存在していた。リイスを助けるため。未来を求めるために俺が望むのは、

「これが、お前なら何なのかわかるよな？」

チャリ、という音とともに右手を前に突き出して手首の存在を見せるようにした。

「——うん、わかるよ。それは、金色と対の力。あの人と同じ力。もう一度聞く。いいの？」

「……ああ、いい。もう決めたことだ。俺は、俺の未来を。大切な人の未来を諦めない。全てじゃない、俺が守りたいと望んだ。せめて手が届くだけの大切な人と、最愛の相手を守りたい。そのためなら俺は——鬼にでも、修羅にでもなるさ」

「……そう。本当。」私が知る別の貴方」とは違うんだね、貴方は。私が知ってる織斑一夏はもつとヘタレで、優柔不断で鈍感で。何もかも、誰をも守りたいと言っていた曖昧な人だったから」

「まあ実際さ、俺の本心は全部その通りだよ。誰をも守りたいし、ここぞつて時に決められない。でもさ……覚悟も力もなく、決意をしないそれってただの口だけだろ。俺は、大切な誰かを選んで覚悟を決める。白式の言う俺もきつと俺自身で、今の俺も俺だと思

うから」

「……もし私が入らたら、きつと貴方はとてもまぶしく見えるんだろうな。――

じゃあ、改めて聞く。力を欲しますか？」

決まっている。そんなもの。

「欲する。じゃあ逆に聞くぞ。お前は何を求める？白式」

目前。白い少女、白式が『そうきましたか』と僅かに笑いながら呟いたのが聞こえた。俺は力を求める。それがタダで手に入るとは想っていない。ギブアンドテイク、力を求める対象が白式ならば白式にも俺に対して求めるものがあるはずだ。……ISは人の道具ではない。そう、今の俺は思えるから。

「我儘を言っていていいですか」

「おう、いいぞ」

「私の望みは2つあります。もし、貴方がそれを飲んでくれるなら――私は、貴方に絶対の力を与えます」

「贅沢なやつだなあ……誰に似たんだ？言うだけ言ってみろよ」

「持ち主に似たんでしょかね？――私の望み、まずは貴方と目的一致です。彼女を、リース・エーヴェルリツヒを助けてください」

「――それは、織原ハルトの真相があるからか？」

コクリ、と。少女が頷いた。

「すべてののはじまりは、彼女だった。今ここで彼女を失えば——それは私達にとっても、そしてある意味向こう側にとっても都合がわるいのです」

「俺はあいつを連れ戻す為にここにきた。言われなくとも、あいつは助ける。絶対にな」
「では、2つ目です」

少女は一度目を閉じた後息を吸う。まるで、覚悟を決めたみたいだ。

対して俺は言葉を待ちながら覚悟を決める。

今の自分には力が必要だ。リイスを助けるための力が、未来を選択するための力が。そして、変わるための。変えていくための覚悟も必要なのだ。

それら全てを叶えなければ”未来はない”。だからこそ、白式。いや——彼女の本来の力は絶対に必要だった。

「——」。消え入りそうなくらいの声。しかし、俺には聞こえた。

目を見開いて、驚きもした。けど、

「——わかった。その時が来たら必ずその約束は果たす、安心してくれ」

覚悟と決意。それを込めて返した俺の言葉に対して、少女は安堵したように微笑んだ。

一夏達の救出作戦が行われていた頃。微睡む夢の中、仮初の幸福の中に居たリイスは限界だった。

「……私は、」

夜道の道。公園に面した道を歩く。そんな中で考えるのは、自分のこと。

人には誰でも負の感情というものがある。今、彼女の心はその負によって傾きつつあった。

復讐のために人殺しをしてきた罪悪感。それはリイス・エーヴェルリツヒという人間の中で自分を苦しめていた罪の意識の1つだった。

殺して、奪って。そんな事を続けてきた自分に幸せになる資格なんてあるのか。そんな想いは、織斑一夏という相手と付き合ってからもずっとあった。

だからこそ、今この幻想の中でそれはループし彼女を苦しめると同時に、その幻想に呑まれないためのストッパーでもあった。

『幸せを手に入れてもいいのか』という考えによって仮初の夢に呑まれることは止

まっていた。しかし、同時に現実と幻想の間で『自分がどうすべきなのか』と悩み、苦しむループへと陥った。

結果として、彼女の心はすり減る。

人間という生き物はどうしようもなく絶望した時や追い込まれた時など、投げやりになることがある。『どうにでもなれ』や『考えたくない』というのがその例だろう。

リースは、その状態の一手前だった。考え続けて、抗いたのか受け入れたいのかを決められず、足掻き続けた結果は心がズタボロになるというものだった。

「——もう、いいよね。わかんないよ、私は」

仮に。もしこれが夢であると理解していなければどれだけ幸福だったか。あの時に織原ハルトがこの世界に介入しなければどれだけよかったか、そう考えそうになったリースは“それは考えてはいけない結末だ”となんとか自分に言い聞かせて振り払うように頭を振る。

「こんなにも諦めたくて、受け入れたいって願ってるのに……何かが違う。絶対的に何かが違う。幸せのはずなのに、幸福のはずなのに。私の望んだ全てがここにあるのに、なのに——私の心の何処かとはとても空虚で、虚しくて」

何かが引つかかかっている。何かが自分を引き止めている。

その何かをかつて自分は知っていた気がする。なのに今は、思い出せない。わからない。

こうやって抗おうとした時、迷った時に必ず今のリイスを襲うものがある。ノイズだ。

そのノイズは声はなくとも彼女の思考を、意識をその抗いの意思から引き剥がそうとする。諭すように、甘美な言葉のように。

「——会いたいよ、一夏」

そんな遮断されていく意識と思考の中。ふと自分から出た言葉にリイスは驚いた。自分の言葉に、である。

「なん、で? どうして? 一夏はいつも居る。ずっと一緒に居る、なのに——どうして」
どうしてそんな言葉が出たのか。彼女にはわからなかった。きっとそれは無意識の言葉、今の状況に追い詰められた自分だからこそ出た言葉だ。

「——すけ、て」

幸福のはずなのにどうしてその言葉が出たのかはわからなかった。”織斑一夏”という人間はちゃんと近くにいるのだ、理想も世界も。相手も。何もかもがここにある。

なのに、どうして。

「たすけて、一夏——」

無意識に、そんな言葉が漏れた。

「ああ。助けに来たぞ、お姫様」

声が出た。立ち止まり、誰もいない歩道で蹲り苦しむリースに、答えを返す人間が居た。その言葉は彼女にとって一度聞いた救いの言葉であり、「この世界にはなかった筈のもの」である。

「そんな言葉を聞いてふと、顔を上げる。そこに居たのは——よく見知った人物であり。だが、”この世界とは決定的に違う人物”だった。

「いち、か？」

「ああ。俺だよ、リース」

そのまま彼は歩き、リースの前まで来ると手を差し出す。

「帰るの遅いから迎えに来た。まったく、あんまり心配させるなよ……。帰ろうぜ、

リース」

「ツ……ごめん、一夏」

差し出された手をリイスは取れなかった。

彼女は現実と夢の狭間に居た。だからこそ抗えた。だがそれは同時に、既に半分飲まれていたとも言える。

会いたいと望んだ、助けてほしいと望んだ相手が現れて尚リイスの心は揺らいでいた。選ばなければならぬのだ。この世界の理想と呼べる全てを殺すか、現実の自分を殺すか。

「俺さ、答えを出したよ」

「——答え？」

「リイスと初めて会った時。言つたら？『カラスと書き物机が似ているのはなぜか』つて。あの時明確に返さなかった答えを俺は出したよ」

すうつ、と一夏は息を吸った。息を吸い、目前で地面に蹲るリイスへと手を伸ばしたまま言葉を続ける。答えを。織斑一夏という人間が出した、選択の答えを。

「理想しか無いなんていうのは、きつと退屈だ。この世界は完璧で、理想的で。俺も自分が夢見た理想。未来を見せられた。受け入れてもいいかな、とも思った。……でも、もし受け入れたら今までの俺はなんだったのかなって思つてさ。今までの俺を、俺に關わつてきた全てを否定したくない。それを否定してまで、なんの重みもない幸福なんて

ほしくないと思った」

織斑一夏という人間は、この偽りに対してこう答えを出したのだ。『どれだけ幸せでも、そこには重みがない。意思がない。織斑一夏という人間が選んで、掴み取った未来ではない』と。例えばそれだけ辛くとも、絶望的でも、一夏は今の現実を否定したくなかった。否定したくなくて、同時に思うのだ。リースを、そんな偽物に奪われたくないと。

だからこそ一夏は、自分の意志で選んだ。理想の夢を否定し、彼女を取り戻すと。心の中で自分勝手だと理解しつつも思っていたのだ。"そんな夢より自分のほうがいいって思わせてやる"と。

「俺は、今までを否定しない。否定したくないからどれだけ辛くとも現実に抗い続ける。いつかは、この夢の世界よりもっといい未来を掴めると信じて。……それにさ、俺。自分勝手だけど、嫌なんだよ」

「嫌って、何が？」

僅かに顔を上げ、己を見ているリースに対して一夏は恥ずかしそうに頬をかいて答える。

「——その。こんなただの幻に、夢にさ。リースを取られたくないって」

「……ぷっ」

「わ、笑うなよ。結構真剣なんだぞ俺は」

「ははっ……いや、ごめん。君からそんな情熱的っていうか、恥ずかしい言葉が出るなんて思わなくて。うん、でも……わかった気がする。こうして君を目の前にして、理想の一夏と、本来の一夏。絶対的に違っていたのが何かって」

理想の織斑一夏と、現実の織斑一夏。前者にはなく、後者にはある不動の何か。ずっとリースという存在を繋ぎ止めていた何か。

それをリースはなんとなくだが理解した。きつとそれは——今の現実があつて、そこに存在する彼だからこそ持つものなのだ。

「——でもごめん、一夏。私、ちよつと手遅れかも。心の何処かで”もうここでもいい”って思つちやつたから。だからさつき、君の手を取れなかつた」

「だつたらさ。俺がリースの居場所になる。こんなただの夢なんかよりも、ずっと幸福だと思えるような居場所に。俺は自分も、リースも。そして自分に関わつてきたことも否定したくない、逃げたくない。抗い続けた先にきつと、答えはあるって信じてるから」

『だから』と、一夏は言つて。

「もう一度、俺を信じてくれないかリース。もう二度と手を離さない、共に歩いていきたい。……勝手だけど、俺自身が望むから」

(……ああ、そうか)

伸ばされた手。それを見て、投げられた言葉を聞いてリイスは思う。織斑一夏とは、どうしようもなく我儘で、諦めが悪くて、どれだけ突き放しても追いかけてくる人であつたと。

(あの時も、そうだった。そんな君と、君の言葉に私は惹かれたんだ——なんで、どうして忘れてたのかな)

織斑一夏は諦めない。理不尽な現実には、今までの過去に。そして、これからの未来に對して目を背けず、逃げず、正面から向き合つていくような人間だ。何かが抜け落ちていた心。欠けていた何かが埋まったような、そんな気がした。

「俺だけじゃない。みんな、待つてるんだ。みんな、お前を助けるために、失いくないって思いで俺をここまで送り続けてくれた。みんな待つてるんだ、お前が戻ってきてくれるのを」

「——いい夢、だったと思う」

ふと。リイスの口からそんな言葉が漏れた。蹲っていた彼女は——その言葉の後、一夏の手を取った。

「みんなが居て、パパやママが居て、何もかもがある。でも……何か欠けていて、その欠けていた何かを”思い出せなかった”。大切な何かを忘れてる気がして、なくした気がして。でも、幸福の中でそれがそのうち気にならなくなった。きつと、自分が忘れ

ているそれは些細なものだと思つていたから」

手を取り、立った。見上げる形で見た最愛の相手の表情は、最後に見た時より——
ずっと、強く見えた。

「でも、違つた。そうじゃなかつた。その忘れかけていたものは一番無くしちやダメのものだつた。それを忘れてしまえば、なくしてしまえば私の存在を、今までの全てを否定することになるものだつたから」

思う。己は幸福を受け入れて全てを否定しようとしていたのだと。

都合のいい夢を受け入れて、幸福に身を委ねること。きつとそれは悪ではない。だが、それは今までのリイス・エーヴェルリツヒという人間を構成してきた全てがなければという前提があればだ。

幸福を奪われ、真実を置いて続け。悩んで、苦しんで。沢山の人に出会つて、その中で幸せを見つけて。自分が辿つてきた道筋。その中で見つけた大切な相手。自分は、その全てを否定しようとしたのだ。

理想的な夢と、不完全な現実。

前者には完璧しか存在せず、幸福しか無い。後者には何もかもがあり、辛いことも悲しいことだつてある。

もし、現実を否定すればそれは、”今までの自分の想いをも否定する”ということになるのだ。それは、自分の想い。一夏に対する想いへの否定になる。自分の力で築き上げ、掴み取ったそれに対しての否定になる。

それを否定してまで、リイスは理想的な幸福をほしいとは思わなかった。前提がなければ、自分の一夏への想いがなければ何もかもが成立しないからだ。

「ありがとう、一夏。……目が覚めたよ」

「寝すぎだ馬鹿。——いい夢、だったか？」

「……うん。とても幸せで幸福で、とても残酷な夢だった。ねえ、一夏」
「おう、なんだよ」

幸福で残酷な夢。仮初の夢を振り切る決意をしてリイスは

「ずっと、私と一緒に歩いてくれますか」

それは、現実の自分にある想いの全て。

共に歩みたい、そう望んだ相手に対しての全てだった。

「……言葉にしなきゃダメか？」

そのまま一夏は恥ずかしそうにしながらも、手を取ったリイスを抱き寄せた。それでは十分だった。抱き寄せられた彼の胸の中、やや早めの鼓動と暖かさを感じながらリイスはその安心感に対して身を委ねた。

瞬間。世界が砕けた。まるでガラスが割れるように周囲の景色が消えていき、真っ白な世界が残されていく。

それは夢の崩壊だ。リイスが夢と現実、どちらかを選択したことにより発生した崩壊。彼女は現実を選んだ。つまり、夢は崩壊し、何もかもがあったその世界は消えていく。

たられぼの世界、パラレルワールド。その世界になくて、現実にはあるもの。それが彼女の選択を左右した。

だが、これで終わりではなかった。

真っ白な世界、その空中に存在するものがあつた。それは白だ。白の、恐らく一夏とリイスにとつては見慣れた存在。

「あれって、」

「——ああ、どうやらリイスをただでここから返す気はないらしい。それに、」

抱きしめていたリイスを守るようにして前に出ると、その上空の存在を一夏は睨みつける。

「あれはきつと、理想の俺自身だ。」織斑一夏という人間の完成されたそのの、可能性の姿」

空に浮かぶ存在。それは、白式だった。

それも部分的に装備が違い、巨大な白のエネルギーウィングを広げ、フルフェイスの仮面を装着しており二次、下手をすれば三次移行移行でもしているのではないのかという姿。

「俺は、あれを乗り越えなきゃならない。理想の俺自身を超えなければ、リイスの居場所になることも、未来を掴むことも出来ない。だから——ちよつとだけ待っててくれ、リイス」

「……うん、信じるよ。私が信じたいと思った、共に在りたいと思った一夏を」
一夏は笑顔を返すと一歩前へと出る。

そして、待機状態のI.S.が存在する腕を前へとつき出すと

「俺は、絶望にも未来にも負けない、抗い続ける！そのために力を貸せ——白騎士ッ
！」

理想の姿の織斑一夏に抗うために。
白き騎士が顕現した。

選ぶ者、告げる者。

そこに存在したのは、白だった。

かつて世界にISの存在を知らしめるキツカケとなった存在。最初に確認されたとも言われるIS、白騎士。白い騎士鎧にも似た全身装甲に腰に存在する鞘と剣。背部にはマルチウイングスラストターが4機存在し、それを纏う一夏の顔を隠すように白いフルフェイスが存在している。

真つ先に動いたのは理想の織斑一夏。白式だった。左腕部に存在する機工腕。それを一夏——白騎士へと向けると大出力の荷電粒子砲を放った。

光の奔流。それが一夏へと迫るが彼は動じない。その場でその光を見据えて、ただ腰に固定され存在する白鞘に左手を添え、右手で収められた大振りの刀剣に手をかけた。

「やれるな、白騎士」

一閃。

そんな言葉の後一夏は光の本流に対してその剣。雪片式型を大型化したようなその刀を居合のように抜刀し、放たれた荷電粒子砲を“喰らい尽くした”。

白騎士となり、その武装が一夏専用書き換えられた際に生まれ変わった力。雪片が進化したその刃の名は“雪桜”。抜き放たれたその刃はまるで雪の如く白く、しかしその刃に形成されるビームの刃は淡い桜色をしていた。

一夏が望んだ力。そして白騎士のコアである少女が一夏に与えた絶対の力の一つがこの雪桜だった。その能力は“エネルギー兵器の完全吸収と無条件での絶対防御無効化”。

放たれた光の奔流がまるで何もなかったかのように消し飛ばされる。同時、此方の番だと言わんばかりに一夏が動いた。

「——ふっ！」

それを見ていたリスや、敵対する白式が視認できたのは白騎士が再び剣、雪桜を知ら白から継承された鞘。白雪へと納刀し、構えを取ったところまでだ。

文字通り一夏は。白騎士は消えたのだ。

消えたと感じたその瞬間、一瞬という刹那の時間。その後一夏の姿は白式の真正面に

あった。刹那の動きの連続、そして放たれるは神速の一閃。絶対防御すら喰らい尽くすという能力が付与された神速の一撃必殺。それが白式へと放たれた。

しかし、

「ああ、防ぐよな。だってお前は俺だ。……理想の俺だって言うなら、防げて当然だ」

ガキイン、という音が木霊した。それは白騎士と白式からだった。リースが見れば白式は白騎士の一撃を、全く同じ居合で受け止めていた。

瞬間的に、予備動作すらなくゼロから最大の加速を行ったそれにはリースは覚えがあった。何故なら、それと似たものを。もしくは同じものを自分も使用していたことがあるからだ。

しかし、それと比べて白騎士の速度は早すぎる。化物レベルと称されるリースの反射神経を持つてしても見ることにさえ出来ず、気がついたら既に行動がひとつ終わっているのだから。

「……限界突破瞬時加速」

リースの呟いたそれは当たっていた。白騎士の使用したその常軌を逸している加速は、東が限界突破瞬時加速と称するものの到達点。

限界を超え、無限の加速すら可能にするものだったのだから。

「そんなにリイスを取られてお怒りかよ。——先に奪つたのはそつちなのにな」

鏑迫り合い。その状況で一夏が行つたその言葉はどこか苛々しているようで、まるで自分に対しての怒りにもリイスには見えた。その言葉に反応したかのように白式が動く。鏑迫り合いでの状況での左腕部の多機能腕からのゼロ距離砲撃。同時に白式は荷電粒子砲の照射を白騎士へと継続しながらバックブースターで距離を取る。

「一夏ー」

光の奔流に白騎士が飲まれる。思わずリイスからは焦りの声が出たが、

「大丈夫だ」

その言葉の後、光の奔流が再び霧散した。

その空間の空に霧散し、粒子となった光の粒。それが舞う中に存在したのは無傷の白騎士。

圧倒的だった。

白式を操るのはこの夢の世界の織斑一夏である。それは全て理想的と言うほどにまで昇華されていた。

しかし、その理想とはどの段階での織斑一夏なのか。

”どの織斑一夏”の理想の形なのだろうか。

「俺さ、恥ずかしい話リスと出会って。好きになつてすげえわがままになつてさ」

限界突破瞬時加速の連続。そして同時に振るうは神速の一撃。そのどれもが直撃すればそれで相手を終わらせることが可能な一撃必殺。

それを振るわれる白式も負けてはいない。何度も。何度も何度もそれを捌き、回避し。弾いてみせる。

どちらも既に次元の違いすぎる戦い。しかし、優位なのは——白騎士だった。

「今までは何もかもを守りたいと思っていた。正義の味方みたいに、何もかもを守れるようになりたいと望んでいた。けど、そんなのは不可能だ。何もかもを救うことなんて出来ない、それができるとしたら神様だけだ。だから俺は——そんなあやふやな想いは捨てて選んだ。自分の守れる範囲での大切な人と、いちばん大事な奴を守るって」

一夏はあるものを捨てた。

それは、織斑一夏という人間を構成していた根本。在り方であり、決意であり、個人というものを構成する根本。大切なものは何もかも守りたい、みんなは自分が絶対守

る。そんな形の定まらない思い。

それを一夏は捨てた。ただ一人を守るために。共に歩むために。

「独占欲、つて言うのかな。あいつを誰にも渡したくないとか、そんなこと思うようになってさ」

だから、と続けた後。白騎士が消える。

次の瞬間——白式の左腕が絶対防御を無視して切り飛ばされた。

「リースはお前何かに渡さない。」何もかもを守ろうとする理想の俺自身”なんか絶
対渡さない」

空中で再び雪桜を白雪へと納刀し、また白騎士が消える。すると今度は白式の真正面へと現れ——居合を放った。白式はそれに対応。残された右腕だけで雪片を振るい、鏢
迫り合いへとなんとか持ち込んだ。

「教えてやる。理想じゃ今の俺には勝てない。その何もかもを守るといふ理想には覚悟
がない。想いもない。選ぶという選択もないんだ。重さがないそれでは、たったひとり
すら守れない」

ピシッ、という音が空間に響く。何かかひび割れるような音だ。

それは白式からであり、見れば白式の雪片にはひびが入っていた。

「——なあ、大事な一人すら守れないのに全てを守るわけ無いだろ？」

パキンと音がした。それは碎けるような音であり、折れる音だ。

折れたのは雪片だった。真つ二つになった雪片の半身は宙を舞い、降下し暫くして量子化された。

雪片と左腕の武装を失った白式には武装は皆無である。そして、押し切られ無防備を晒した白式には為す術はもう無い。

「……じゃあな、理想の俺。その理想に夢見させられたけど、”それは持つちやいけな
い。本気になつちやいけな理想だったんだよ」

再び納刀。そこから放たれるのは、左斜め下から右斜上への一閃と、そこから追撃の如く放たれる左斜め上から右斜下への一閃。刹那の時間に放たれた二度の斬撃が白式の胴体を切り裂いた。

切り裂かれ、真つ二つになった白式が空から落ちる。それと同時に、世界が崩れ落ちる。白騎士を纏う一夏から視えていた街並も、それまで白騎士と白騎士が戦っていた夜の星空も。

何もかもがガラスが砕けるように崩れ落ちていき世界が光りに包まれていく。

それは、世界の終わりだ。

理想という世界が終わる瞬間。その世界で最後にリースの認めに写っていたのは、空中に佇む白い騎士だった。

「……………」

目が覚める。まだ覚醒しきっていないばかりとする頭を徐々に覚醒させながら身体を起こせば、そこは覚えのある場所だった。医療着姿でベッドで眠っていた場所、そこはI S学園にある医務室。

私は……そうか、銀の福音を停止させる作戦中に鳥の化物と戦闘になって、それ。「夢の世界でハルトさんに会って、金色のI Sの正体はハルトさんで……夢に負けそうになった時、一夏が助けに来てくれて、それで」

一夏が白騎士を纏って、あの世界の織斑一夏を倒した。

つまり今のここは、元の世界ということになるのかな。

窓を見れば夕方で、見慣れたIS学園の景色を夕日が照らしている。いつもならこの時間、窓から見える学園内の庭園や寮に向かう道には生徒が多く存在するのに今はそれも無い。

ふと思うのは、私がどれだけ寝ていたのかということだ。向こうの世界、理想の世界では数ヶ月単位での時間が経過していたと思うけどもしかするとこつちでの私もそれだけの時間寝たきりだったんだろうか。

そうすると今は8月か9月。夏休み中という可能性もあるけど……ダメだ、寝起きで頭が回っていないのもあるけど情報が足りない。それに、

「心の整理だって、まだついてない」

ハルトさんは金色だった。つまり、あの日パパとママを殺したのはハルトさんだった可能性が高いということだ。

憎い、という感情は当然ある。しかしそれとは別に……今では疑問のほうが多い。何故、どうして、と。

あの人とはそこまで付き合いがあるわけではない。多少話した程度の相手。それでも、あの人が無作為に人を殺すような大量殺人者とかには視えなくて。もしかして、自分が知らない何かがあるんじゃないかって思ってしまった。

とにかく情報が足りないし現状が不明過ぎる。とはいうものの、医務室は無人で私の

私物のスマホや待機形態のＩＳも今はないみたいでどうしようもない。どうしたものか。とりあえず、医務室から出てみようか。しかし医療技着で出歩くというのはなんと
いうか……ううん……

考えていると、医務室の自動ドアが開く音がした。反射的にそこを見て私は——思わず固まってしまった。

「おはよう、目が覚めたみたいだね。エーヴェルリッヒさん」

「——ハルト、さん」

何度見ても一夏に似ている。そう感じざる得ない、聞きたいことが山ほどある相手が。色んな感情が入り混じってどうしたらいいのかわからない相手がそこには居た。

どうしてパパやママを殺したのか。殺したくせになんで必死になって私を助けてくれて、あの世界にまで現れて助けようとしてくれたのか。

自分が金色であること。それを明かすメリットがあったのか。なかったとしたら、どうしてそんなリスクを犯してまで私を助けに来てくれたのか。

あの日のことについて、全部知っているではないのか。

それ以外にも聞きたいことはたくさんある。でも、どう切り出したらいいいのかわからなくて。ただベッドの上で上半身を起こしたまま慌てたようになってしまった。

「とりあえず落ち着いてくれると嬉しいかな……。そんな慌てられると俺としても話しづらくて」

「あ、ええと。ご、ごめんなさい」

「なんで謝るんだ。さて、」

そのままハルトさんはベッドの近くの椅子まで歩いてくると『これ、お見舞い。うちの研究室の同期が持つて行けつてうるさくてさ』と苦笑いしながら言った後、お菓子やら果物やらの詰め合わせをベッドの近くの机の上に置いた。

ハルトさんは一言『ごこ、いいかな』とベッド横の椅子を指して言う。それを私は了承して、そこに彼が座った。

「何から話したらいいかな。彼、一夏君との約束もあるからそれも果たさなきゃいけないんだけど……。本当に話すことが多すぎるな。だから、きつと君が一番気になっている話からしていこうと思う」

——私が一番聞きたいこと。それは、決まっている。

「……私のパパとママを殺したのは、貴方ですか。ハルトさん」

そう聞くと、彼の表情が曇った。そのまま迷ったように、覚悟を決めたように息を吸

目を閉じると、

「——言い訳はしないよ。3年前、君のご両親を殺したのは俺だ」

思わず身体が動いた。どす黒い感情に身を任せてそのまま椅子に座るハルトさんの首を絞めようとした。けど、できなかつた。思えばかなり長い間寝ていた可能性があるのだ。身体がすぐに万全の状態で動くわけはなく、掴みかかろうとした瞬間、力が入らずベッドから落ちそうになつた。

地面に身体が叩きつけられることはなかつた。何故なら、倒れかけた身体をハルトさんが慌てて支えてくれていたからだ。

「長い間寝ていたんだ、無理に身体を動かしちゃいけない。……気持ちはわかるし、もしそれを望むなら俺はそれを甘んじて受け入れるけどね」

「なん、で」

「……？」

「どうして、パパやママを殺したのにツ……優しくするんですか、助けようとするんですかッ！あなたは、一体何なんですか！」

支えられ、抱きとめられた彼の胸の中。どうしてかとても安心するような感じがして。……まるで、それを知っているような気がして。

ただ彼の胸に顔を埋めて、何度も。何度も、何度も腕を無理矢理動かして、弱い力で

彼の胸板を叩くことしか出来なかった。

「俺には、責任があるから。君の両親を殺した責任と、ご両親との約束が」

約束……？

「約束って……なんですか？あの日、一体何があつたんですか？あなたは全部知ってるんですか!？」

「全部知っているのか、と言われればイエスになる。俺はある事情から君のご両親とは知り合いで、あの日……二人を殺す前に頼まれたんだ。」その時が来たら娘を頼めな
いか”って」

その言葉で確信した。やはり、あの日にはまだ知らない何かがある。

暫く彼の胸を借りるという状況になり、少し落ち着いて。そのまま再度ベッドの上へ
と戻ると、私は意を決して聞くことにした

「あの日、何があつたんですか」

「……知つたら、戻れなくなるよ。君達は世織計画や亡国機業を追っている。けど、真実
にまでは至っていない。まだ日常には引き返せるんだ。俺としては、君や一夏君には
戻って欲しいと思ってる」

「戻れないのなんて今更です。私は、沢山殺しました。仲間も何度も失いました。……

ずっとあの日の真実を追い求めるためだけに、生きてきました」

「でも君は陽だまりを手に入れた。幸福を手に入れられる。最愛の相手とそれを歩む選択肢はあるんだよ」

「……そうしたらきつと、私はあの日の真実から逃げたことになると思うんです。それだけは、絶対に嫌です」

「——いいんだね？」

「はい」

「全く。君達2人は正反対なところもあるのに、どこかよく似ている。本当、色々納得させられるよ」

納得させられる？何をだろうか。

意味がわからないかと思っていると、ハルトさんは『ごめん、なんでもない。話には関係のないことだから』と断って

「じゃあ、君の知りたい真実の前に行くつか話をしよう。世織計画が何なのか。今世界で何が起きているのか。……そして、君のご両親が何をしていたのかをね」

知りに行こう。そう望み、想い。言葉の続きを待った。

「最初に言う。俺はこの世界の人間じゃないんだ」

突然言われたのは、理解と何を言われたのか把握するために時間を要することになるものだった。



「……あの、ハルトさん。真面目な話をしていたと思うんですが。えつと、病院行きますか？というかここも医療施設でしたね。私のことはいいんでとりあえずお医者さんに、」

「その『うわ何言つてんだこいつ』みたいな哀れみの眼をやめてくれないか。色々辛辣で辛くなる。……冗談でも何でもなし。本当の話だよ」

「つまりハルトさんは未来人とかそういうの、ということですか」

「少し違うかな。正確には異世界人、かな。——”この世界とよく似た世界で、既に滅びた世界の”、ね」

滅びた世界。そう話すハルトは真剣であり、冗談か何かと思っていたリスとしてはそれを見て動揺するしか無かった。

「さて、俺の身のなりについて話す前に。エーヴェルリツヒさんはパラレルワールドつ

て言葉を知ってるかな」

リースのその間についての回答はイエスだった。パラレルワールド、異世界。よく漫画や小説で題材などにされるものであり、簡単に言ってしまうえば言葉のまま、異世界だ。しかし、それは当然フィクションというものであり現実にそんなものはありえないという認識だった。

「異世界とか、未来の世界とか……よく漫画とかであるあれですよね」

「うん、そうだよ。俺はパラレルワールド、正確には”この世界の未来の別世界”の人間だった」

「だった、というのは……」

「俺の居た世界はね、滅びたんだ。人と、人の欲が呼び寄せてしまったバケモノによつてね」

そして青年。織原ハルトは話していく。自分たちの世界で何が起こったのか。

この世界と同じようにISが存在した。篠ノ之束の意図とは異なり、時が経つにつれて”兵器”として認識されなくなったISはただの人殺しの道具と、政治家の国の取り合いという戦争の道具となり下がった。結果として、女尊男卑は加速。だが、戦争に送り出されるのはISに乗れる女性だけとなった。

ISとISによる、国家同士の戦争は拡大し世界規模のものとなった。そうやってし

まい止められるものは誰も居らず。ISの生みの親である篠ノ之束もある時を境に消息が不明になったという。

彼は言う。その世界は最悪だったと。

人類には絶対数がある。そしてそのうち女性の数は限定され、更にISを動かせる人間はその中でも一定数しか居ない。

女性を、ISを戦争の駒としか見なくなった国家はそうするとある問題に行き当たる。兵士不足という問題だ。

人はそんな世界で、最悪の手段を正当なものと”勝手に定義して”行使した。それが、クローンや人工兵士という存在。莫大な国家予算を投入し、優れた男性と女性の遺伝子を人工的に培養し。コピーし。人が人を作り出すようになった。

そして、その作られた”駒”と、”専用機”という限られた人間だけが行使できる力を持った存在で戦争というゲームを行っていた。

だが、ISを兵器としか見なくなった人類のその意識は世界を、星を滅ぼす厄災を呼んだ。

機械でできた虫のような存在、機械で出来たゴリラ、機械で出来たドラゴン。しかし意志があるかの如く人とISを襲い、喰らい、殺す存在。

その存在の名は“絶対天敵”と言った。

その存在に対して通常兵器はまったくもって役に立たなかった。ただ唯一通用したのは、ISによる攻撃のみ。しかし、量産機では攻撃が通りにくかった。当初、ISの攻撃が有効であるとわかった人類は各国で大量の量産機とその操縦者を投入、世界各所に現れた絶対天敵に対して飽和攻撃を行った。誰もが勝てると思つた戦い。核や生物兵器なんてものが遠慮なしに使用された掃討戦は人類の勝利に思われた。

絶望はここから始まった。

まったくもって。これっぽちも。その絶対天敵に効いてなかったのだ。

通っていたのは専用機持ちと呼ばれる存在のISによる攻撃のみ、他の攻撃は一切通っていないかった。

各地で行われた掃討戦。その結果を当時見ていた兵士たちは困惑した。どうして効かないのか、あの化物は何なんだと、混乱に陥つたがそれを敵は待つ訳がない。

敵は、絶対天敵は動揺し、混乱した人類を。投入された生物兵器を。あまつさえ、”核によって汚染された大気と大地を”。取り込んだのである。

文字通り食われ、機械と同化したようにされた人間はまだ食われていない人類を攻撃

した。ある国が投入した生物兵器は機械の虫にどうかされ乗っ取られた。

汚染地域には機械の大樹が育ち、その大樹は世界を、大地を、残された人間達を蝕んで行つた。

専用機があれば対抗できる、そうわかつた人間達は篠ノ之束に助けを求めた。だが、人間が縋る神。篠ノ之束は助けてはくれなかつた。現れることはなかつたのだ、彼女は。

絶対天敵との戦争。人と人の戦争から人と絶対天敵との生存戦争の中である学者が真実を見つけた。絶対天敵が現れた理由、絶対天敵の目的。

それは、

”人とI Sを完全に滅ぼすことであり、絶対天敵を引き寄せたのはI Sであるということだつた。”

都合のいい話で誰もがこう思った。”それも全て篠ノ之束のせいだ”と。最初はI Sを否定し、白騎士が現れては利用しようと思つた。絶対天敵が現れては生き残るために縋り、そして最後には自分達がこうなつたのは篠ノ之束のせいだと迫害した。

そして、人は滅びた。世界は、星は滅びた。

それが自分の世界の終わりだと、ハルトはリースへと告げた。

「ち、ちよつと待って下さい。その話だと、ハルトさんの世界にも東さんや他のみんなが居たつてことですか？それに、世界は滅んだんですよね。じゃあ、なんでハルトさんは生きてこの世界に……」

「そこは複雑な事情になるかな。俺達の世界、時代ではその絶対天敵に対抗するためにある組織が存在した。それが、ユニオンと呼ばれる組織。ユニオンは絶対天敵との対立が続くにも関わらず国同士の戦争を続ける各国の中で、”絶対天敵を撃退する”という純粋な思いを持った人間で構成されていた。俺はそのユニオンの人間だった。結局、人類は負け、世界は滅亡したけど、滅亡間際にある人物によって生かされたんだ」

「生かされた？でも、どうやって……？」

「異世界への強制転移。正確には、条件付きでかつ限定条件の異世界に対して対象を送るという装置があった。勿論極秘で未完成、使えたとして使い切りの代物だった。けど、最後の賭けだったんだと思う。あの人は……俺と、もう一人。俺の妹をその装置に乗せて強制的に逃した。その結果、俺と妹はこの世界。エーヴェルリツヒさんの世界に流れ着いたというわけだ」

信じがたい話だった。話のスケールが大きすぎて、何より頭がパンクしそうになるほどの情報量でリースの病み上がり頭は混乱しそうになっていた。そんな彼女を見てか、

『ごめん、一気に話し過ぎたな』と謝罪した。

「……仮に、その話が本当だったとして。パパとママとはどうやって知り合ったんですか？」

「——突然だけど、エーヴェルリッヒさん、俺が今何歳か知ってる？」

「えつと……20代前半、ですか？」

「二応ジャスト20だよ。またややこしい話で申し訳ないけど、俺が親御さんと出会ったのは4年前。そしてこの世界に辿り着いたのが5年前。異世界転送は運よく成功。だけど、俺と妹には先立つものがなかった。転送時に持っていたのは、軽い私物と”I Sの待機形態”だけ。そんな状態でドイツの山奥に放り出されてね。……エーヴェルリッヒさんなら知ってると思うけど、違法研究施設の敷地内で捕まりかけてそのまま戦闘に。正直、ボロボロになってね。怪我もしてて妹を背負って逃げるので精一杯だった。その時、偶然車道を通りかかったのがご両親だった。そこからの経緯は少し省かせてもらうけど……君のご両親に”俺達”は保護された、ということになる」

「——じゃあ、なんでパパとママを殺したんですか？その理由は、」

「わかっている。ちゃんと話すよ。——エーヴェルリッヒさん、ご両親が研究者だったのは知ってるよね」

勿論知っていた。仕事が忙しく、度々ふたりとも家を留守にしていたことも。それで

も、ちゃんと家には帰ってきていてくれたし記念日や休みの日はずっと自分といてくれたことも。

「…はい、知ってます」

「——じゃあ、何の研究をしていたかは？」

「そこまでは……ただ、束さんからは、ISとその宇宙進出に関わることについてと”限界突破瞬間加速”についてとだけは」

そこで青年。ハルトはやや気が重そうに『……そうか』とだけ言うのと暫くの沈黙を作る。そして、リースがどういふことなのか、と続けようとした時

「さっき、俺の世界の話をしたよね。絶対天敵っていう化け物が現れて、世界は滅びた」と

「はい、そしてその引き金を引いたのは、厄災を呼び寄せたのは人……でしたよね」

落ち着いて聞いてね、と彼は念を押しした後

「絶対天敵はこの世界にも存在している。正確には、存在していたというべきか。君のご両親はそれに感づいていて、それをなんとかしようとしていた」

リースは頭の中が真っ白になった。

そこから語られたのは、両親の真実。何を研究していて、何に抗おうとしていたのか。

青年は語り、真実に迫る第一歩の真実を話した。

「世織計画。その目的は簡単に言ってしまうえば、世界をやり直すことだ。——多くの人類、生命を滅ぼして、ISのオリジナルコアと選ばれた人間のみの世界を作り出す。それが、亡国機業の目的だよ」

世界の真実

世織計画。それは私が、私達が追っていたものだ。スコールさんはその計画を『絶対に阻止しなければならぬもの』と言っていた。

その全貌は知らなかった。しかし、今彼が話したことが頭ではどうということなのか理解ができなかった。

「それって、世界を作り変える……そういうことですか？」

「簡単に言えばそうだね。けどこの計画の本質はもつと邪悪で、吐き気を催すほどに醜悪なものだ。——先に君の最大の疑問について答えよう。どうして俺が、君のご両親を殺したのかだ」

「そうだ。私がかく知りたいたいののはそれだ。何故両親が死ななければならなかったのかだ。」

「教えてください、真実を」

「……かなり辛いぞ。それでもいいのか？」

「はい、覚悟はしているつもりです」

わかった。そう彼は心苦しそうに言つて暫くの沈黙が流れた。

「結論から言おう。……君のご両親は、俺が到着する前にある薬物を投与された。それは、かつて織斑一夏くんに投与されたものと同じものだ」

ドクン、と。心臓が跳ねる。

一夏が過去に金色。つまりハルトさんに助けられているのは知っていた。そして、その時何があつたのかも聞いた。

その時一夏は何かを打たれたと言つていた。薬物のようなかを。

「ご両親の研究については殆ど知らなかつたんだよね」

「……はい」

「研究していたのはISの宇宙進出についてと、限界突破瞬時加速と呼ばれるものについてだった。……そして、俺は元々の世界で限界突破瞬時加速というものを知っていた。同じものが存在していたからだ。俺と妹は本当、奇縁だったのかな。ご両親に拾われてね。色々助けてもらつていた。——俺たちが異なる世界の未来から来た、なんていうことを信じてくれてね」

まるで懐かしむように。どこか辛そうに。ただ両親のことを語る彼は、どこか見ていて辛そうだった。

「俺の I S には限界突破瞬時加速を応用したものが搭載されている。当時の俺は、ご両親と出会ったことを奇跡だと思った。……だから、未来の技術。限界突破瞬時加速の技術の理論をご両親に教えた。この世界の技術力でその時はできるかわからなかったけど、きつとこの人達ならと思つて教えた。それが、二人を殺すとは知らずにね」

「まさか、パパとママが殺されたのつて」

「……亡国企業に限界突破瞬時加速の研究と、それが実現に近づいたことがバレた。それに加えて、ご両親が絶対天敵の存在に感じていることも。……前者については試作機として完成していた機体が篠ノ之束でも制御できなかったコアを使用しているとね。それらについて二人は知つていた。知つて尚研究を続けた。……二人が殺される原因。それを作つたのは俺だ。俺が奇縁や奇跡なんてものを信じたから。いつときの感情や感動に心を動かされたから。そうして教えてしまったこの世界では存在していなかつた技術。それが原因で君達家族は狙われて、ご両親は殺された。——そして、最後の瞬間手を下したのも俺だった」

ふと、気になることがあつた。

彼は先程から奇縁だとか、奇跡だとか言つてゐる。つまり彼はパパやママと面識があつた？でも、元々は別の世界の人だと言つてゐるし——

「……あの、奇縁とか奇跡つてどういうことですか？ハルトさんがパパとママに出会つ

たのは4年前、ですよね」

「なあエーヴェルリツヒさん。俺は、一体何者だと思おう?」

「ええと。私の仇かもしれない人で、大学の先輩で、金色の正体……ですか?」

「質問を変えよう。」俺が織斑一夏くんに似ていると思ったことはあるか?」

ある。最初見た時は声も、見た目もそっくりで一夏かとおもったくらいだから。

けど、雰囲気とか大人びた態度とか。そういうのからどこか違うなって思った。

「あります。最初はその……本当に一夏かと思つて。正直あの時は驚いてました」

「俺も正直、あの時は驚いてたんだ。」こんなに奇跡は起こるものなのか?」ってね」

「……どういう意味ですか」

「俺の見た目、声、それらが似ているのは本当にただの空似だと思ふかな。俺がどうして偽楽園に単独で介入できたと思う?」

彼が。困つたように笑つた時の一夏と同じ顔で、笑つた。

「俺の本当の名前は、織斑 春人。——未来の別世界における、リス・エーヴェルリツヒと織斑一夏の中に生まれた、双子の一人だよ」

言葉を、失つた。

確かに一夏に似ているとは思つた。けど、年齢は確実に彼のほうが上で、仕草や態度

も何もかもが大人びていて。だからきつと似ているだけだと思っていた。

自分と一夏の子供である。そう言われ、ただ混乱して。だけど、どこか納得が行く気がした。

それが真実ならすべての辻褄が通る。似ていることも、あの安心感や懐古感も。

パパとママ。二人と関わりがあつたというのにも、何もかも。

「……は？え？ 私と、一夏の子供？」

「正確には、別世界のね。そして、君のご両親はこのことを知っていた。……だから、それを知った上で俺は託されたんだ。君の未来と、最悪の結末になることだけを回避することを。織斑一夏君が拉致された時に亡国機業が彼に打つたのはエヴォルヴと呼ばれる、絶対天敵の因子を組み込んだ薬だ。……なんでそんなものを彼に使ったかというのは、かなり複雑になるが幾つかの理由がある」

「……それは、」

「世界を作り直すための世織計画。そこに大きく関わるのが、かつて行われた最高の人類、超越者を生み出すための計画。”織斑計画”。織斑一夏という人間と、織斑千冬、織斑円の出生に関わる真実。そして、世界をリセットするために最も重要なのが篠ノ之束の生み出した、形にしたＩＳと、君の両親が研究していた限界突破瞬時加速。奴等の狙いは、織斑の姓を持つ人間とＩＳのコア、それから君なんだよ」

さて、と彼は疲れたように息を吸うと続けた

「……君のご両親と一夏君に投与されたエヴォルヴは、簡単に言つてしまえば誰でもI Sを使用可能にする薬だ。」人であることを捨てさせて”ね。一夏君の場合、これは後々彼からさっきの織斑計画のことと一緒に話があると思うが、ある体質のお蔭で進行が遅く体の中で投与されたものを拒絶できていた。結果、俺が投与したワクチンで完全に治癒。けど、ご両親はそうはいかなかった。俺が見た時は、ギリギリ理性が残っているくらいで手遅れだった。……言われたんだよ、”殺してくれ”って。エヴォルヴは人を化物に変える。もし放っておけば恐らく化物になったご両親が君を手にかける。きつと、それを理解して言つたんだと思う。だから、俺が殺した。”もしもの時は君を頼む”と、そう言われていたから」

「それが、あの日の真実なんですか。つまり二人は、亡国機業によつて人じゃない存在に変えられて、……えと、春人さんはそれを止めるために殺したと」

「……そんな事態になつた原因を作り出したのは、俺だ。俺が技術提供をしなければそんなことにはならなかつたかもしれない。だから、二人を殺したのは俺でもあり、君には俺を裁く権利がある。許してほしい、とは思わないさ。取り返しの付かないことをしたと、今でも思つてるから」

「正直、わかりのせん。春人さんを憎めばいいのか、どうしたらいいのか。……私には少

なくとも、貴方は悪意で二人を殺すようには見えなかった。それに、結果論かもしれないけど何度も私を助けてくれて、守ってくれて。一夏も、助けてくれた」

納得なんてできない。はいそうですかと割り切れるわけがない。すぐに、どうしたらいいのかなんて決められるわけがない。

でも。私にどうしても彼が悪意のある人には見えなかった。

あの日の真実だけはわかった。二人が何をしていたのかも、今までわからなかった真実についても。

世界のリセットに人類の滅亡、絶対敵性という敵に、本当にここまで聞いてしまえば後戻りなんてできなかつた。

「……きつと私は、貴方を許すことは出来ません」

「だろうね。俺は、君に殺されても文句は言えないと思ってるよ。例え、異なる世界においての自分の母親の過去だとしてもね」

彼は年上で、異世界の自分の子供だと言われてもいまいち理解が出来ない。そう、思うことも出来ない。

納得だつて出来ない。けれど、

「でも、私は貴方に復讐したいとは思いません」

「……………えっ？」

目前の彼が驚いていた。てつきり、私が彼を殺すだとか、復讐するだとかそう考えていたのだろうか。

「貴方を殺しても、なんの解決にもならない。むしろ、今の状況でより多くの情報を持ち戦力でもあるあなたを殺したとして、それは間違いなく間違つた選択です。……事情は理解できました。どうして貴方がパパとママを殺したのかも。その理由も。そしてきつとまだ沢山あるんでしょうけど、今の世界についても少しだけ」

あの夢の世界から、間違いなく彼は私を助け出そうとしてくれた。

一夏を私のところに導いたのも、彼だった。

そして、あの海での戦闘で助けてくれたのも彼だった。

許すことなんて、できない。納得なんて、できるわけがない。

でも、それで尚私は彼を恨もうとは思わない。復讐しようとは考えない。

だって、彼は——あり得た最悪の結末からは、私を守ってくれたのだから。

両親に殺される。愛していた二人に殺される、その結末から助けてくれたのだから。

「私は、貴方を許しません。納得なんて、できません。——でも、真実を教えてください。最悪の結末だけは回避させてくれたことには感謝しています。だから、これからは力を貸してください。本当の敵を知りに行くために、何もかもに対して精算をするために」

恐らく一夏と出会う前の私なら。千冬さん達に保護される前の私なら復讐を選んでいただろう。

けれど今は違う。今、最も重要なのは……真実を知った上でどうするかだ。

納得はできない、けれど復讐すべき相手は彼ではない。

それに、あの日の真実と世織計画の正体がわかった今成すべきことは、

「——もし、亡国機業の計画が成功したらどうなりますか」

「……人は大半が滅びる。残った人間も、人である保証はない。確実に言えることは、違う形であれど俺の居た世界と同じ末路をたどることになる」

先にあるのは、滅亡。滅亡しなかったとしても、人が生きる世界とはいいい難い結末。

私は正義の味方でもなければ、英雄でもない。そんなものになりたくもない。

けれど、もしそうなってしまったら私屋、一夏の未来は。みんなの未来は間違いなくないのだろう。

そんなのは嫌だ。私は生きたい。彼と、一夏と生きていたい。これからの未来を一夏やみんなど過ごしていきたい。

だから、もう一度私は決めた。

「そんな結末は、絶対に嫌です。ですからさつきも言いましたが、これからは私達に力を貸してください。勝手な言い方ですけど、私と一夏、それにみんなが未来を掴むために」
一夏がきつと、何かを選んだように。

私ももう一度、未来を選ぶために戦おうと決めた。

時期は8月。IS学園はまだ夏休み中ということもあり、学園敷地内に人影は多くない。

といっても、教員である千冬や麻耶。臨海学校での一件での当事者の一夏達は学園に残っている。

リースの退院は目が覚めてからそこまで時間を要しなかった。というのも、長期間に渡る昏睡状態の間、身体のコンディション管理は束がほぼ完璧と行っていいほどに行っており、リハビリにおいても春人の知り合いだというところある大学研究員の女性のお蔭で、目が覚めて数日で身体は問題なく動く状態まで回復していた。

退院までの間に幾つかの出来事もあった。織斑春人の語ろうとする真実、それを語る

にはまず前提が必要だった。

まず、千冬に円、そして一夏の出生について。かつて織斑計画と呼ばれ、”東と千冬が忌避した”最悪の計画について。その知る限りの全貌を千冬と東、そして円は一夏へと伝えた。

次に、3年前の真実。何故リイスの両親が殺される事態になったのか、そしてその裏では何があったのか。それについても春人から全員へと伝えられた。最後に。恐らくこの世界に実在すれば、最悪の敵となる存在。絶対天敵についても。

前提となる真相と情報。それを伝えられて、本題を話す日。関係者の姿は、IS学園のち家施設。完璧に情報が隠蔽されたミーティングルームにあった。

「……さて、やっと本題に移れるね。早速だけど話してもらおうか、織斑春人」

急かすように言ったのは東だ。対して、部屋の前方。投影スクリーンの前に立つ春人は、今の私は織原です。わかってますよ」と言葉を返した。

「まず、既にご存知の方も多いと思いますが、俺は織原春人。IUIの学生で、加えて言うならこの世界の人間じゃない」

その事実について知らされていなかったリイスと一夏、関係者であるマドカ以外の専用機持ちに動揺が走るが、今は気にしていられないと言うに彼は続ける。

「既にエーヴェルリツヒさんの過去について、3年前の事件と、織斑計画と呼ばれる計画についての話は関係者終わっているの、ここからは順次話をしていきたいと思う。

——その前に、一夏君は何か聞きたそうだね」

そう言葉を投げられた一夏は少し迷うにして、

「……もうひとつだけ、教えてもらっていいですか。ええと、春人さん？」

「そんな緊張しなくても。ここでは、俺は君とエーヴェルリツヒさんの子供じゃなかったの大学生なんだから。——それで、何かな」

「第二回モンド・グロツソ。誘拐された俺を助けてくれたのは春人さん、ですよ。あの時、俺は彼奴等……亡国機業の奴等に何をされたんですか？ 貴方は俺に、何を打ったんですか？」

一夏としてはまだ謎があつた。誘拐されたあの日、暴行を受け、その中でなにか薬物を打たれた。診断上でも特に問題ないと出てはいるが、一夏としてはそれが何なのか知りたかつた。

「それも今から話す内容に含まれることだから、どちらにしても話そうとは思っていた。結論から言おう、君が投与されたのはエーヴェルリツヒさんのご両親に投与されたものと同じものだ」

「なッ……でも俺は今もこうして、」

「落ちていて。……エーヴェルリツヒさんのご両親は間に合わなかったが、君については間に合った。というより、これについては俺も謎が多くてね」

「謎……？」

「言うならば、一夏君。君の場合、ウイルスの進行が異常に遅かった。思い出すのは辛いかもしれないが、あの時君は暴行を受け、身体的に弱った状態にあった。なら逆に、弱った体に対してウイルスは早く進行するはず。なのに、君への進行は極端に遅かった。俺が到着して状況を確認した時点で、恐らくそれなりの時間が経過していた筈だがにも関わらず、君の進行度は初期の初期だった。だから、対応が間に合った。俺があの時君に打ったのは、投与されたウイルスに対する除去ワクチンだ。安心していい、恐らく君に再発はない。更に言うなら……君に対してもうあのウイルスは意味がないだろう」

「……意味がない、というのは」

「織斑計画については君は聞いているね。最高の人類を人の手によって作り出すための計画。そして、その成功例第一号が織斑千冬先生。次いで成功例が織斑……失礼、東雲マドカさん。彼女と同時期に生み出されたのが一夏君、君だ。計画自体は既に破綻している。関係者も既にこの世にはおらず、真相を知るのは篠ノ之束博士と、先日知らされた関係者だけ。……の筈だったんだが」

春人はそこで言葉を切った。そして暫くの沈黙の後、『すまない』と言って、

「未来に置いて俺が知り得たのは、この研究は破綻して、そして研究員は全員どんな事情があれど既にこの世からは居なくなっていた。他で知り得ていたのは、言ったように篠ノ之東博士と君達だけ。……その筈だった。この世界で亡国機業について調べているうちに、最悪なことが判明した。この研究は、亡国機業でも行われている」

全員が息を呑んだ。それもそうだ。もし、織斑計画と呼ばれていたものと同じものが亡国機業で行われていたとしたら、最悪だからだ。

「ち、ちよつと待て！亡国機業でも行われている？んな話、元構成員の私らでも知らねえぞ!？」

「……オータムさん。とても言いにくいことですが、彼女——あえてこう呼びましょう。織斑 円さんについての出自についてはご存知ですか」

「ある程度は、だがな……マドカもその織斑計画によって生み出された一人で、つてのは本人から聞いているが——ちよつと待て」

そこでオータムは黙った。それと同時に顔が真っ青にもなった。

マドカはオータムに対して、織斑計画の概要しか伝えていない。自分が何者であるのか、どうして生まれてきたのかということしか。

そして、事情を理解した上でオータムもまた深く踏み入らなかった。マドカはどうあ

れ、自分たちの家族であると思っていたから。

そして今、春人から告げられ。あることに気がつく。

「まさか、マドカが生まれたのは。——最初に出会った時、あんな状態だったのは。スコールが頑なになって、守ろうとしていたのは」

「……恐らく想像通りです。そして、スコールさんが亡国機業によつて消された理由もお察しの通りです」

周囲が訳がわからないという表情をする中、オータムは顔を真っ青にして壁によりかかり、『悪い冗談と思いたい』と呟き、マドカもまた目を伏せた。

「織斑計画については、申し訳ないけど俺から話せらることはこれ以上はない。……後は、当事者の問題であると思うので。ただ、今の現状から話すなら一夏君、それにエーヴェルリツヒさんが昏睡状態となる原因になったあの無人機はその副産物と言つていい」

「……それ、どういうことですか」

言葉を発したのはレイスだ。自分の昏睡状態になった原因の、あの化物。それと織斑計画、つまり自分の恋人の出自に関わるそれが関わっていると聞いてつい声が出た。

「さっきも言ったけど、織斑計画という研究は破綻している。そしてそのデータを基にして亡国機業は織斑計画を再現しようとした。が、結果は不可能だった。千冬さんや一夏君、マドカさんのような失礼な言い方になるけど、”成功例”を作り出すことは出来なかった。……結果から言えば、再現不可能だった。けど、そのデータを基に亡国機業は新しい試みを思いついた。成功例を仮に作り出せても、制御できる保証がない。ならその劣化のものでも複製して、運用すればいいと。そう、例えば人工兵士。例えば、洗脳。織斑計画の成功例ではなくとも、優秀な素体をベースにして別のものを作ればいいという悪魔の発想をしたんだよ、奴等は」

「……人工兵士に、洗脳ってまさか。デユノア社の一部が行っていた脳変性接続に、ドイツの人工兵士計画」

「基礎データは織斑計画の残滓を、素体はドイツで非合法に行われていた人工兵士計画の素体を、そして自分達の都合のいい兵士にするために、フランスのデユノア社。その一部がやっていた脳変性接続を利用した。その結果として生み出されたのが、あの時に交戦したあの化物だよ」

亡国機業が考えたことはこうだ。織斑千冬や一夏、円のような成功例を作り出せたとしてそれを制御できるかわからない。ましてや、個人というものが存在しては”兵器”として運用するには不安要素が残る。

だから、そんなものを持たない存在をれようすればいいとかがえた。ドイツで生み出されたアドバンスド、その失敗作と呼ばれた人間を素体として、フランスで非合法に行われていた個人という存在を捻じ曲げる悪魔の研究。それを使用することで意のままに操れる完璧な素体を作り出した。

「……じゃあそろそろ、核心について教えてくれないかな。世織計画って、なんなのさ。この東さんでもそれについては一切情報がつかめなかった。でも……スコールが最後に残したデータが解析されて、少しだけ判明したことはある」

「ある程度は予想がついているのではないですか？ 篠ノ之東博士」

「でも、これが真実だとは限らない。いや、真実だとは信じたくないと云ったほうがいいのかもしいね。だから、答え合わせと行こうか。織斑春人」

リース達が遭遇した化物についてはわかった。そして、織斑計画についても、リースの過去についても。

だが、それが全てつながる先。亡国機業の目的である世織計画についてはまださっぱりだった。

「……先に、確認しておきます篠ノ之東博士。これは、ISという存在の根本にも関わる問題です、即ちこれから先に関わる人々には、それについて話して置かなければならな

い。それでも、構いませんか？」

ISという存在の核心。それは恐らく、今の世界で多くの人間が知りたいものだろう。

そもそも、ISには謎が多い。どうして女性しか動かせないのか、どうして織斑一夏という特異存在が現れたのか。その謎について恐らく知るのは、篠ノ之東だけであろうと言われているくらいには、ISについて多くをする存在は居なかった。

春人のその言葉によつて、その場の全員が困惑してざわめいた。だが、春人はまっすぐ東へと視線を向けており、対する東は暫く瞳を閉じ、すう、と息を吸つて。

「——いや、そもそもISとは何なのかというのは私から話すよ。これは、私の責任でもあるから」

多くの人間の視線が東へと向けられた。だが、冷静なものもある。それは、一夏と春人、そしてマドカのものだ。

「そもそも、ISはね。東さんがゼロから作ったものじゃないんだよ。イチから作ったものなんだ」

その言葉に対して疑問符を頭の上に浮かべたのは、各国の候補生達だ。だが、その言葉聞いた千冬とオータムはそれぞれ、『やはりか』と呟いた。

「東さん。……いや、私が作ったのは基本構造だけ。ISという全てをゼロから考え

て、作ったわけじゃないんだ。既にあつたものをISとして形にし
たんだ」

とんでもないことを言われ、誰もが言葉を失った。

そして、そこから東によつて語られていくのは——今の世界の真実だった。